THE CENTRAL REVIEW

中央公論

大正七年一月一日發行（每月一回一日發行）

新年號

第三十三年 第一號　第三百五十六號

島村博士證明
腦病良藥
健腦丸
KENNOGWAN

歐洲大戰は腦力の戰爭

協商軍と同盟軍の智惠競べ

◇五年に渉る大戰亂は何時迄續くであらうか、頭到米國も聯合軍に參加した。幾百億の軍費、幾萬臺の飛行機。怖ろしい大仕掛の援兵に對抗して同盟軍は如何なる策略を繞らすであらう。

◇要するに今回の大戰は敵と味方、智慧競である、頭と頭の戰である。敵が毒瓦斯を發明すれば味方は巨大な裝甲自動車を創造する。敵が隼の如な飛行機を製作すれば、味方は大鷲の樣な戰鬪飛行機で驅逐する。敵が潛航艇で暴れ廻れば味方は海峽一面の捕獲網を張る。科學と科學の術競べ腦力と腦力の大戰爭である。

◇國と國との戰ひも頭腦の戰であれば人と人、社會の生存競爭も矢張頭腦の戰である。頭の善いものが立身し、頭の惡い者が失敗する。

◇今度の戰爭で我邦は幾多の成金が出來たのも要するに先見の明があつたからで、頭腦がよいから先見の明が得られるのである。

◇平素から腦の健な人は判斷力も記憶力も持久力も優れてゐるが、腦の惡い人、腦神經病に苦む人は不幸なる哉社會の落伍者である。

◇絶えず頭病がする。夜眠られぬ。便秘逆上に惱ませられる。眩暈耳鳴がする。記憶力が減退する。精力が衰へる。食慾不振、悲觀憂鬱に陷り遂には自暴自棄劣敗者の群に墮る。

◇之を救ふの捷徑は『島村博士有效證明の腦病特効藥』健腦丸の服用である。健腦丸の偉大なる効果は如上の徵候を快治し、怖る可き腦充血を醫し、中風卒中を未發に防ぎ、頭腦を明快にする作用がある。乞ふ世上腦神經病に苦む人、先づ一週分を試みよ。必ず効驗著るべし。



健腦丸十效 特長

■腦充血 ■頭痛
■腦膜炎 ■耳鳴
■逆上症 ■中風
■神經痛 ■眩暈
■腦貧血 ■健忘
■鬱憂 ■便秘
■卒中 ■癲癇

健腦丸を常に少量宛持藥とせば逆上を引下け便通を快し恐ろ可き腦充血を快治し中風卒中を未發に防ぎ記憶力を増進する特効ありまづ一週分を試みよ!!

◀價▶ 半週分四十錢、一週分七十錢
二週分一圓參拾錢、三週分一圓八十錢、五週分二圓八十錢
十週分五圓

全國海外の各藥店に販賣す

本舖 大阪 東京 丹平商會藥房

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

幸福の源泉！知識の大海洋

無聲博識の良友を全國家庭に薦む!!

東京帝國大學文科大學教授 文學博士 芳賀矢一
東京女子高等師範學校教授 文學士 下田次郎 兩先生 編纂

改訂増補 日本家庭百科事彙 附索引百廿餘頁



□大本全二册□

□挿圖 精巧木版千三百極彩色石版三色版圖版十七面地圖十五面寫眞版五面

項目三萬 四六倍判背革角革極美本千七百六十頁

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

五千部限特價新提供　特價金拾圓

定價金拾五圓

◎月賦拂特價金拾貳圓——申込と同時に金壹圓拂込、爾後毎月金貳圓宛五回、第六回目に金一圓拂込の事

送本——第二回拂込(通計五圓)と同時に第一冊送本、第六回拂込と同時に第二冊送本

送料内地不要　臺樺半減金卅錢　鮮支半減卅五錢

忠實な賢明な良友として、本書ほど博識で、一年三百六十五日、主人から主婦、令息、令嬢、御隱居を始め、義務教育を終へた程の者ならば誰にでも、時に應じ事にふれて利用し得られるものはない。二六時中活動する家庭教師であり、社交顧問であり、業務秘書である。慰安と教訓と娛樂とを兼有して我が國家庭の品位をして一段高きに上まらしめるものは本書である。

本書が我國に於ける模範的百科辭典として、全國十七万の家庭に愛用され、日夕無限の便益を供して居るのは天下周知の事實で、改訂增補大正版(二冊)に至つては最新事項の網羅と新索引の增補とによつて、愈完全の域に達し、好評益喧傳し、需要旺盛を極めて、一時品切の止むなきに至つた。仍て今回新刷五千部の特價を提供し、熱烈なる江湖の渴望に應じようとする。各階級を通じて、教養ある家庭に於て、何物を節しても第一に購入せらるべきは本書日本家庭百科事彙である。

本書の信用

現代第一流の博士專門法大家の執筆

全國十七萬の家庭に愛用せられつゝある本書の信用は絕對的に確立せり

内容見本進呈　往復葉書申込次第

東京神田　**冨山房**　振替東京五〇一番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御明記を乞ふ

大正七年 新年號 一月一日

太靈道

天門聲なく開く……

肇道第九年の新春を迎ふ…………太靈道主元 田中守平

太靈的自覺…………主元 田中守平

理論よりも實驗…………海軍少將 石田一郎

現代の缺陷を濟ふは太靈道に在り…………陸軍主計總監 井出治

太靈道及靈子の哲學的觀察…………米國哲學博士 中根環堂

靈子の發現と實證…………醫師 牧虎文

醫術と靈子療法…………陸軍一等軍醫 衣斐賢治

靈子作用に依る疾患の辨色的透視…………醫師 望月大祐

太靈道の科學的批判…………靈學士 中谷竹藏

第貳卷第壹號 菊版 壹百頁 內容充實 體裁神麗

（宣傳の爲め本誌愛讀者に限り特に）無代贈呈

思想の中心を得んと欲する人心身の健康を望む人々靈的研究に志す人々は至急一枚の葉書を投ぜらるべし、然らば靈界の新權威たる「太靈道」は卿等の机上に到らん

精力を增進する法…………

新健康長壽法…………

太靈道深呼吸法…………

指一本を動かして數十人を一時に自由自在に靈動飛躍せしむ…………

新家庭の研究…………

靜座で身體が動き出す原理說明…………

プラパトスキー女史の接神學…………

其他數十項滿紙靈氣溢る！

●太靈道講話會

一月二十日午後一時本院に於て開催＝來聽無料＝名刺持參＝洋服又は袴着用の事

●太靈道特別講授會開催

第十七期 自一月廿一日至一月卅日 十日間

第十八期 自二月十五日至二月廿四日 十日間

●太靈道及靈子術講授錄（全十八卷）

通信に依り太靈道の思想・靈理學の學理・靈子術の作用の全部に亘り懇篤に講授す

「太靈道」新年號無代頒布申込所

東京市麴町區一番町四十二番地

太靈道本院

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

肇道第九年の新春を迎ふ

太靈道主元　田中守平

旭日曈々として新山川を照らし、瑞雲靄々として新乾坤を被ひ、王化蕩々、人心熈々、萬象總て是れ青陽の光に滿ち、茲に肇道第九年の春を迎ふ、顧みれば明治三十六年我れ十九歳の晩秋偶々國事を以て郷閭に幽閉せられ、森林に草庵を結びて朝に東天に出づる日の光を浴び、夕に西方に現はるゝ月の影を眺めて、靜寂幽邃、人の來り問ふものなく、自ら訪ぬる家もあらず、唯だ友とすべきは涓々たる澤の流れと、空を掠むる飛禽の姿のみ、人々よりは狂と呼ばれ痴と罵られ、濫褸さへ身に纒ひ難く食とすべき麥粟もなく、唯だ端然として方六尺に過ぎざる草の庵に正座して只管宇宙の眞相人生の意義に就き瞑想を重ぬるを事とせしより既に早や十有六年を經過しぬ。

十有六轉回の歳時必ずしも長しと云ふべからざるも、而も此間に於ける當路の强壓と社會の酷遇とは具さに艱險辛苦を嘗むるに於て遺憾あらしめず、洵に成道好個の試練なりき、此試練の刺戟は靈に渇せる我をして斷腸碎身の徑路を經つゝ靈的大自覺を喚起せしめ、明治四十三年秋九月を以て茲に太靈道を完成肇開せしめたり、則ち肇道の始年より數へて當さに第九年に際す、而して今や門に太靈道の籍に入りて靈化に浴せるの人士全東亞に普く、更らに歐米に迨ばんとするの狀勢に在り、是れ偏に過去の試練其成果を生じて爰に臻れるを思ふの時、轉た無量の感慨に禁ゆべからず。

我は天命を奉じて現世に生れ、今當さに世界に向つて其重大なる天務を遂行すべき發途に立てり、而して此天務遂行の道程に於て、過去に在りたる試練は現世に聯り未來に繋る、實に我は試練と終始せざるべからざるを自覺す、寧ろ我は世界の總てを敵として自ら靈の試練をして的確ならしめんことを庶幾す、太靈道教憲に曰く、一旦事に臨みては毀譽をも顧みず、身命を惜まず、邁進以て至眞を樹て至全を成ずるを念とすべし、と我今確然たる信思に依り牢固たる決心と不拔の勇氣とを以て現代に臨む、固より豈敢て毀譽を顧み身命を惜まんや、宗教者も、科學者も、將た哲學者も、道德者も奮ひ起ちて以ちて我と戰ひ斯の道と鬪へ！

文學士沼波瓊音君新著

最新刊　やなぎ樽評釋

▲▲▲始めて現はれたる柳樽の詳釋書▲▲▲

中版三百九十頁　木版刷箱入　更紗表紙頗美本

定價金九十五錢　送料八錢

世界を演劇に譬ふれば、川柳作者は平土間棧敷に感化して見物してるに甘んぜず、舞臺に飛上り、樂屋に飛込み、日覆に駈登り、奈落に這込んで、其見聞を大聲に叫び、俳優をして流汗淋漓たらしむ。試みに柳樽を讀んで而して後に街頭に立て。行人走馬鷄犬鳥雀一として呵々大笑の料たらざるは無し。瓊音先生書を著さざる事こゝに數年、突如としてこの意外の方面に筆を驅る。難解の句甚多き柳樽を片ッ端より明快詳密に釋し去りし本書は世の求めむと欲する久しくして未だ求め得ざりし所のものなり

第六版

讀賣新聞漫畫記者　近藤浩一路君著並ニ挿繪裝幀

漫畫道中記

內容

東海五十三次
夏の木曾路
四國腕白旅行
信州横斷記
富士川難船記
馬上富士登山記

著者は現代漫畫界に於ける第一流の名人なり、其の描く所の漫畫は飄逸にして殊に景色を寫すに巧なり本書に收むる漫畫百二十個は個々別々に古來の名所を寫し來り之に添ふるに著者獨得なる旅行記を以てす好評既に第六版を重ねたり

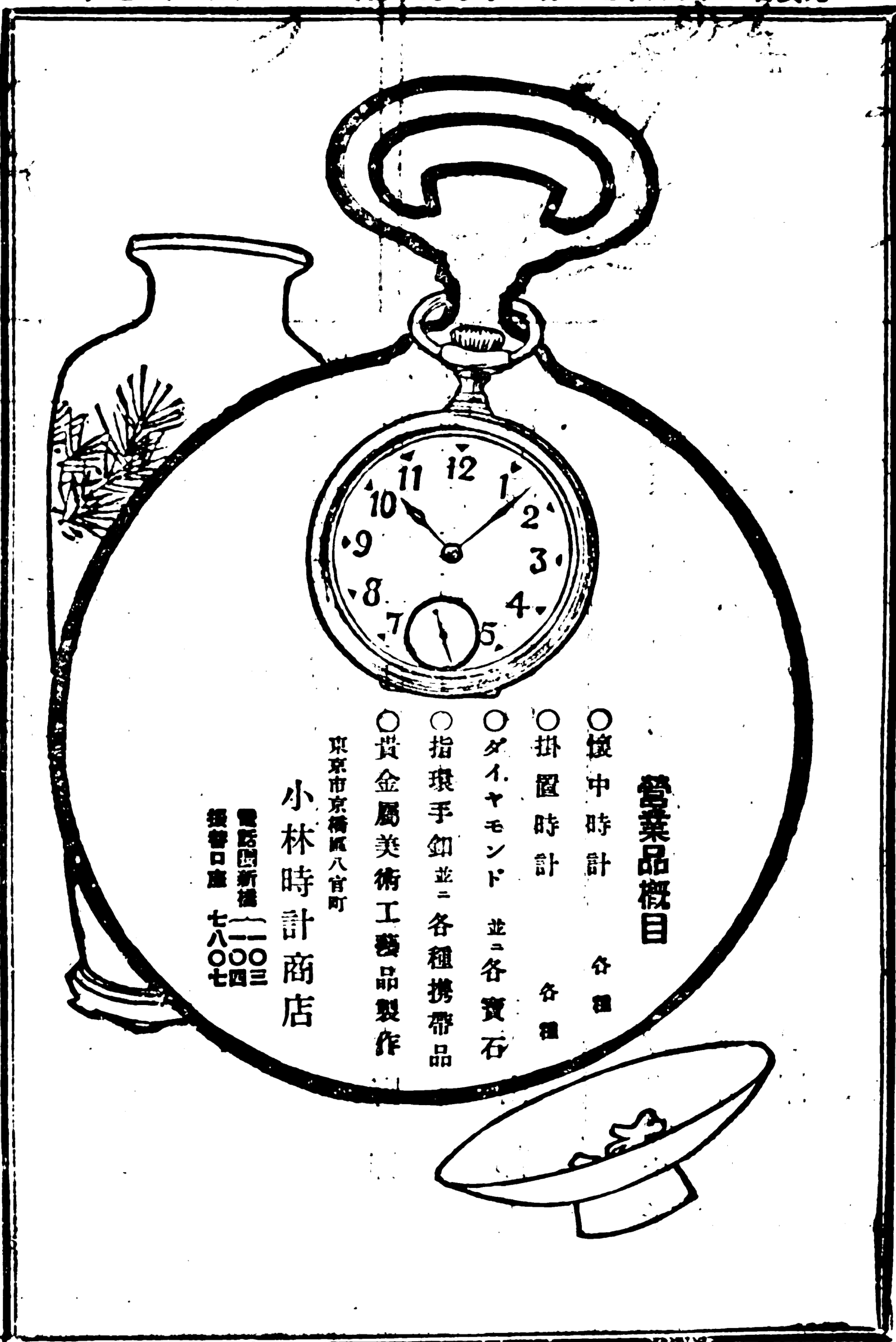
中版二百五十頁
體裁頗る瀟洒
表紙木版手摺十度刷
凸版挿繪百二十頁
無類の安價
定價金七十錢
郵税金六錢

發行所　東京市下谷區池の端茅町二丁目　南人社　振替東京參四貳壹番


專賣特許
ピースダービー
鷹印
決心！
吾人は
品位を重じ
經濟を慮る
純品質主義の
鷹印帽子を
常用品と定める

中折帖

▼時論



營業品概目
○懷中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド 並ニ各寶石
○指環手釦 並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話新橋 一一〇三
一一〇四
振替口座 七八〇七



"LA PLACE DE LA CONCORDE, PARIS"
FERNAND MAILLAND

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御明記を乞ふ

大正七年 新年號 一月一日

太靈道

天門聲なく開く……………………………新春を迎ふ
肇道第九年の新春を迎ふ……………太靈道主元 田中守平
太靈的自覺……………………………主元 田中守平
理論よりも實驗……………………海軍少將 石田一郎
現代の缺陷を濟ふは太靈道に在り……………陸軍主計總監 井出治
太靈道及靈子の哲學的觀察……………米國哲學博士 中根環堂
靈子の發現と實證……………醫師 牧野虎文
醫術と靈子療法……………陸軍一等軍醫 衣斐賢治
靈子作用に依る疾患の辨色的透視……………醫師 望月大祐
太靈道の科學的批判……………靈學士 中谷竹藏

第第
貳壹
卷號
菊版 壹百頁
內容充實 體裁神麗

（宣傳の爲め本誌愛讀者に限り特に）

無代贈呈

思想の中心を得んと欲する人心身の健康を望む人々靈的研究に志す人々は至急一枚の葉書を投ぜらるべし、然らば靈界の新權威たる「太靈道」は卿等の机上に到らん

精力を増進する法……………
新健康長壽法……………
太靈道深呼吸法……………
指一本を動かして數十人を一時に自由自在に靈動飛躍せしむ……………
新家庭の研究……………
靜座で身體が動き出す原理説明……………
プラバトスキー女史の接神學……………
其他數十項滿紙靈氣溢る！

● 太靈道講話會
一月二十日午後一時本院に於て開催＝來聽無料＝名刺持參＝洋服又は袴着用の事

● 太靈道特別講授會開催
第十七期 自一月廿一日至一月卅日 十日間
第十八期 自二月十五日至二月廿四日 十日間

● 太靈道及靈子術講授錄（全十八卷）
通信に依り太靈道の思想・靈理學の學理・靈子術の作用の全部に亘り懇篤に講授す

「太靈道」新年號無代頒布申込所
東京市麹町區一番町四十二番地
太靈道本院

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

肇道第九年の新春を迎ふ

太靈道主元　田中守平

旭日瞳々として新山川を照らし、瑞雲靄々として新乾坤を被ひ、王化蕩々、人心熙々、萬象總て是れ青陽の光に滿ち、玆に肇道第九年の春を迎ふ、顧みれば明治三十六年我れ十九歳の晩秋偶々國事を以て郷閭に幽閉せられ、森林に草庵を結びて朝に東天に出づる日の光を浴び、夕に西方に現はるゝ月の影を眺めて、靜寂幽邃、人の來り問ふものなく、自ら訪ぬる家もあらず、唯だ友とすべきは涓々たる澤の流れと、空を掠むる飛禽の姿のみ、人々よりは狂と呼ばれ痴と罵られ、襤褸さへ身に纏ひ難く食とすべき麥粟もなく、唯だ端然として方六尺に過ぎざる草の庵に正座して只管宇宙の眞相人生の意義に就き瞑想を重ぬるを事とせしより既に早や十有六年を經過しぬ。

十有六轉回の歳時必ずしも長しと云ふべからざるも、而も此間に於ける當路の強壓と社會の酷遇とは具さに艱酸辛苦を嘗むるに於て遺憾あらしめず、洵に成道好個の試錬なりき、此試錬の刺戟は靈に渇せる我をして斷腸碎身の徑路を經つゝ靈的大自覺を喚起せしめ、明治四十三年秋九月を以て玆に太靈道を完成肇開せしめたり、則ち肇道の始年より數へて當さに第九年に際す、而して今や門に太靈道の籍に入りて靈化に浴せるの人十全東亞に普く、更らに歐米に迨ばんとするの狀勢に在り、是れ偏に過去の試錬其成果を生じて爰に臻れるを思ふの時、轉た無量の感慨に禁ゆべからず。

我は靈命を奉じて現世に生れ、今當さに世界に向つて其重大なる天務を遂行すべき發途に立てり、而して此天務遂行の道程に於て、過去に在りたる試錬は現世に聯り未來に繋る、實に我は試錬と終始せざるべからざるを自覺す、寧ろ我は世界の總てを敵として自ら靈の試錬をして的確ならしめんことを庶幾す、太靈道教憲に曰く、一旦事に臨みては毀譽をも顧みず、身命を惜まず、邁進以て至眞を樹て至全を成ずるを念とすべし、と我今確然たる信念に依り牢固たる決心と不拔の勇氣とを以て現代に臨む、固より豈敢て毀譽を顧み身命を惜まんや、宗教者も、科學者も、將た哲學者も、道德者も奮ひ起ちて以ちて我と戰ひ斯の道と鬪へ！

此廣告によりお申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

専賣特許
ピースダービー



決心！
吾人は
品位を重じ
經濟を慮る

純品質主義の
鷹印帽子を
常用品と定める

戰勝青

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告品掲載は謝絶す

[illegible]

中版三百九十頁　定價九十五錢

中澤臨川

講話　大晦日氣分と元日氣分……生方敏郎 君

日出觀……遲塚麗水 君

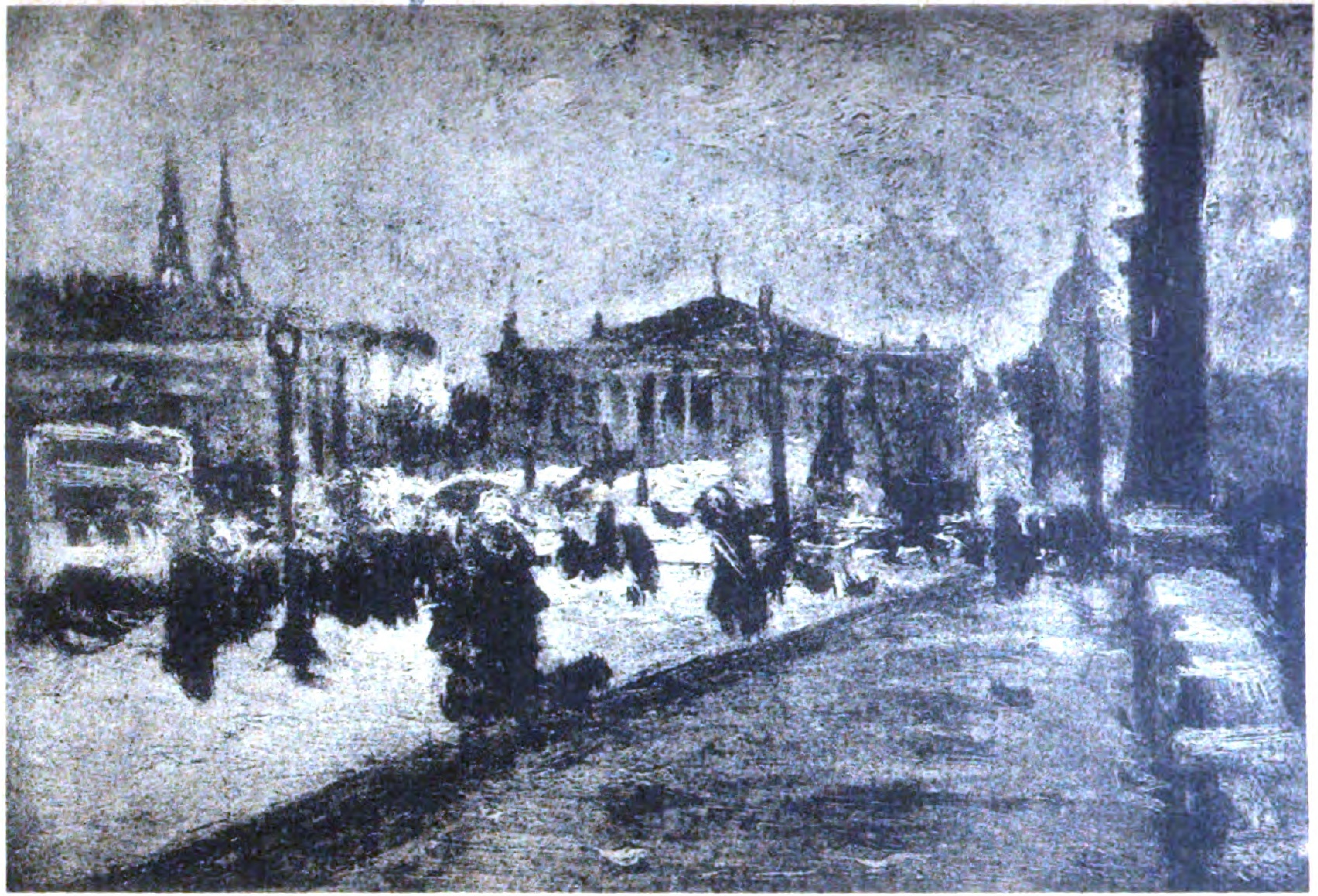
東都劇壇立役の四花形

（羽左衛門・菊五郎・左團次・吉右衛門）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



"LA PLACE DE LA CONCORDE, PARIS"

FERNAND MAILLAND

中央公論



第卅三年第一號
新年號
第三百五十二號

現代日本に於ける政治的進化と其社會的背景

大山郁夫

□現狀に對する不滿

古今東西の政治的若しくは社會的評論と見做すべき種類の書冊文章を讀めば、誰しも現在に對する滿足の聲明が、過去に對する憧憬と、將來に對する希望との表白に比較して、著しく僅少なることに氣が附くであらう。無論孰れの處・孰れの時に於ても、當路者の誇耀と、その追從者流の時代謳歌とは、常に

必ず形影相倚つて存在するものであつて、而かも此事は專制の世・暴君の下に在つて、その最も甚しきを見るのである。夫の宮廷の史官が、少なくとも平凡なる歴代の支配者に對して超人化的頌德の辭を捧ぐるが如きことは、世界の文獻の上に頻繁に反復せらるゝ所のものであつて、殊にそれが專制政治を以て終始し來つた東洋諸國家に於て最も盛に行はれたことも亦、多く辯證を要しないのである。それにも拘らず、所謂燕趙悲歌の士は何處に於ても跡を絶つことなく、慨世憂國の聲は何時までも鳴りを鎭むる期なく、明君賢相の治下に於ても不平は常に愬へられ、立憲政治の時代に於ても咒詛の叫びは絶えず聞かれるのである。

斯の如き情態は、概括的に之を說明すれば、人間心理の機微より生ずるものである。更に之を細說すれば、或は人心面の如く異り、從つて價値批判の標準が人に依つて其程度種類の差を呈して居ることも、慥に其一原因に相違ない。さればあるが儘の姿の問題よりも、寧ろあらねばならぬ姿の問題に一層多く接觸交渉することを以て常態とする一般の政論や社會評論に於て、此事が殊に著しく目に立つのは、素より偶然ではないのである。けれどもそれにしても、古來多くの眞面目なる政論家若しくは社會觀察者が、動もすれば現世を穢土と觀じ、當代を澆季と貶して、偏へに黃金時代を或は渺渺たる過去に求むるか、若しくは久遠の將來に期するかの强き衝動を感ずる傾向を示し來つたのは、抑も何に基因するのであらうか。蓋しそれは一は人事の不如意・人生の不完全のためであり、一は隴を得て蜀を望む底の人間の欲望の無限の增進性より來る間斷なき目的轉換のためである。而かも此兩者は共に是れ、人間の社會生活の進步の梃子となるものであることも亦忘れてはならぬ。完全の存する所、そこに改良の施すべき餘

地なく、目的轉換のなき所、そこに進歩の動機がない筈である。されば流轉變化を一概に果敢なきものと思ひ定め、固定停滯をあらゆる場合に讃美するが如きは、進歩的個人•國民の斷じて取らざる所のものであつて、現狀に對する不滿は、總て是れ新局面展開の第一歩である。

現代日本の政局に對して盛に擧げらるゝ智識階級間の不滿の聲も亦、右の概括的原理より見て、是認すべきもの多いことは事實である。併し乍ら玆に我等の一考を要すべきことは、此不滿の聲は、單に右に述べた樣な一般的世相に對する人心の主觀的作用に基けるのみのものであつて、毫も個々の客觀的事象に對して交渉を有する所のないものであらうか。我等は爾か信ずること能はざるものである。今その理由を一々率直に披瀝し、且つ併せてその對應策を講じやうとするのが本篇の主眼である。而して此目的のために、我等は先づ概論より歩を着けて、漸次細論に立ち入らねばならぬ。

□不徹底なる政治思想

假に我等自身を第三者の地位に置き、立憲國民としての日本人を觀察し、而してその政治的能力の有無を糺さば、或は之を肯定する者もあれば、或は之を否定する者もあらう。而して這般の肯定論にも否定論にも、各々それ相當の理由があることも亦、容易に看取することが出來る。若し夫れ之を肯定すべきか否定すべきかは、立憲的政治生活の經驗の淺い此國民に就いては、尙ほ未知數たるを免れないと言はゞ、それは不得要領なる解答だけに、一層安全無難な論結であらねばならぬ。

けれども新日本開國以來世上に行はれ來り、尙ほ現に行はれつゝある政治思想の諸々の主流が、何れ

も不徹底極まるものであると謂ふ此一斷案に對しては、異論を立て得る者は蓋し餘り多くはあるまいと思ふ。

日本の政治思想の主流は何であるかと言はば、無論官權思想と民權思想との二大綱である。けれども我國の官權思想には、遠くはスチユアード王家の辯護者たるホツブスや、ルイ十四世の駙馬たるボスエーや、近くは露國官僚政治の謳歌者たるポビエドノスチエフのそれの如く極端まで突き詰めたものはなく、又その反面に於て、我國の民權思想は、ミルトンや、ロツクや、ルソーの如き白熱的熾烈の絶叫者を發見しなかつたのである。素より是等の論者の口眞似は、國會開設に關する論爭以來、喧々囂々として反復せられ、今に尚ほ其餘響を絕たないけれども、そは全く政權爭奪場裏の手段方便として用ひられ來たつたのみで、毫も民族性の奥底より迸り出でた信念の表白ではなかつた。されば孰れの側の論調も、戛然として金石の響を發するものなく、常に日向水の如き微溫的の如きものであつたのは、亦決して偶然ではないのである。

由來我國には本來固有の哲學がない。あるだけのものは、他國よりの借物である。それは印度や、支那や、西洋より傳來したものである。されば我國民が所有して居るだけの哲學は、到底附燒刄の觀あるを免れない。從つてそれは如何なる種類のものにせよ、甚だ剝落し易いものである。又その一部分が剝落して、殘留した一部分が、他の種類の哲學の全部若しくは幾部分と不體裁なる混和結合をなして存續することも、極めて尋常平凡の事である。採長補短と言ふ重寶なる一句は、此方面に於ける萬事を解決する。時としては到底調和すべくもない二種若しくは數種の哲學的思想が同一人の頭腦を同時に、若し

くは順次に支配するが如きことも亦、我國民間に於ては、決して珍とするに足らざる現象である。今は昔海外留學中に於て基督教に改宗したる日本の學生が、一たび歸朝して官途にでも就くと、毫も在外中に得たる信仰を棄つる聲明をなすことなくして、直に祖先崇拜の儀式に參列して拍手を打ち玉串を捧ぐるが如きことを見て、歐米人が驚異の眼を見張つたのは、畢竟己れを以て他を律する淺慮より生じたる錯誤である。朝に理想主義を憧憬し、夕に唯物主義に沒頭するが如き、將又、昨はニイチエに聽き、今はベルグソンに趨り、再轉してタゴールを趁ふが如きことは、一たび憲政擁護を絕叫し、その舌根未だ乾かざるに、早くも官僚支持を聲言するが如きことゝ同じく、多數の日本人に取つては、さして良心の苛責を感ずることなしに實演し得られる藝當である。實際彼等の恐るゝものは、內的なる良心の苛責に非ずして、外的なる世評の毀譽褒貶及び之に伴ふ物質的利害である。

斯の如き日本人の無哲學――從つて無內省の境地が、現代日本の政治思想の不徹底の主要原因であることは言ふまでもない。畢竟するに、それは孰れの主流に屬するものにせよ、皆民族性より來れる金剛不壞の信念の結晶ではなく、權勢維持、若しくは權勢獲得上の便宜より出でたる輕浮なる口實であるからである。されば我國の政治家の大多數の行動を見れば、主義主張に對する忠實など言ふことは微塵程もなく、臨機應變主義、御都合主義がその基調をなして居る。變節改論とか、妥協苟合とか、情意投合とか言ふ如き餘り目出度からぬ熟語が、短き我國の憲政史を縱橫に縫うて走つて居るのは、蓋し偶然ではない。此點より見れば、我國民は惡い意味に於ける實際的國民であつて、夫の「思索家の――及び恐らくは夢想家の國民」を以て自ら任じ他も許して居る獨逸人とは、好個の對照を示して居る。少くとも甘

つて憲政の神様と謳はれし政治家の一人が、議員買收で一世の指彈を受けた失脚内相を辯護したり、又他の一人が「十年の苦節」を賭して攻撃した官僚閥族に一朝疾風の如く迎合したりする如き、若しくは政黨内閣を主張する名黨首が、是々非々の看板に隱れて、サーベル宰相の大權干犯論に共鳴――若しくはそれを看過したり、擧國一致内閣を標榜する政府者が、極端なる差別的待遇に依つて、その與黨と反對黨との溝壑を一層深くしたりするが如きことは、縱しそれが如何に尤もらしい口實の下に於てなされたにせよ、主義、主張、信念など言ふものを離れて、一切便宜主義、臨機主義に依つて導かれたものでないとは謂へないのである。而かも幸福なる百五十萬人の選擧有權者の大多數は、斯の如き形勢には一向無頓着に、去る四月の總選擧に臨んで、各自その「貴重」なる一票を投じて作り出したものが、現下の混沌曖昧なる政局である。

□道德的根柢なき社會政策

我が同胞國民の政治生活上に於ける無哲學の便宜主義は、西南戰役後の流行語となつた「勝てば官軍、負くれば賊よ」の一句に於て、最も明瞭に現はれて居る。正邪曲直の分岐點をして、一に懸つて成敗利鈍の數に在らしむるは、哲學的若しくは道德的標準の絶無を表示するものであつて、其結果は物質上の強者――兵權及び金權把握者――の政治的優越權を是認することになる。されば我國民間に於て斯の如き便宜主義が、更に深き國家哲學の基礎の上に立てる政治思想を壓服して行はれて居る間は、我國民は軍閥及び財閥の現勢に向つて、何等の抗議を提出する根據も權利もない譯である。

唯物的意義に於ける優勝劣敗の原理は、過去及び現在を説明するには、極めて有力なる照尺となるも

のであるが、將來に對する指導的綱要となすべからざるものである。將來の國家政治の方針は、社會上の優者及び劣者を相互的反撥爭鬪の地位より拯ひ出だして、而して此兩者を融和雍穆の親善關係に導き、之をして相和衷協同して國家の力を充實し文化を向上するの大事業に參加せしめ、以て眞個の國家的統一を實現せしむることに在らねばならぬ。統一は全體の力の强大を意味し、分裂はその力の劣弱を暗示するものであることは、極めて睹易き事理である。此意味に於て、社會政策が近年漸次歐米に於ける各國家の立法事業の基調となりつゝあつたことは、直接には國際的生存競爭圈內の適者として存續する自然的必要より來つたものであるが、併し乍ら又他の一面より之を見れば、そは政治の道德化的傾向を暗示するものたるを失はないのである。

現內閣がその成立の當初より、或は地方官會議に際し、或は議會に於ける首相の施政方針の演說を通じて、社會政策的施設の必要を高調し、且つ最近に於ては事實上頻りに之に關聯せるらしき方策を講じ、若しくは講ぜんとしつゝあるは、此新傾向に投合せんとするもの丶如き外觀を示して居る。けれども是は單に外部の體裁を繕はんとするの虛榮心より出でたものであるか、將又、確乎たる信念に依つて誠實にその實行を期するものなるか、且つ又それが何等かの効果を生むべき可能性を有するものなるかの諸點に至つては、輙く論定するを容るさゞるものがある。

曩に現內閣に於て發せられた物價調節令の如きは、消費者の負擔を輕減して國民の最大多數者の生活を安易にせんとするには、餘りに杜撰を極め、餘りに見當を誤り、且つ餘りに官僚臭に充ちたものであつた。今日に於て政府事業としての物價調節策の非を鳴らす者は、資本家・商工業者の利益のみを以て

國民共同の利益と混同視するマンチスター派の經濟觀の流れを汲めるインダストリアリズムの本尊若しくはその歸依者に止まるに過ぎざるは事實である。而かも日本に於ては、マンチユスター派より來れる徹底せる個人主義の哲學の心からの確信者もないのに、その經濟的理論のみが、折に觸れて發生する時事問題に關聯して主張せらるゝは、不思議と言へば不思議である。是れは恐らく、一はアダム・スミスやミルや、リカードや、及び彼等の亞流の經濟學が、久しきに渉つて我國の經濟思想の根本となつたことに基因するものであらうけれども、同時に我國の商工業者及び其利益の擁護者の眼界が狹少の範圍に局限せられ、階級的、地方的、職業的特殊利益に接觸しつゝ、更にそれ以上に超出する國家生活上の秩序と力と文化とに關する無形の共同利益に着眼することが全然ないか、若しくはそれが極めて稀薄なるかのためである。物價調節令に關しても亦、商工業者本位の需要供給上の自然的放任論に卽する月並の反對說を見たのである。――けれども、日淸、日露の兩大戰を經過し、次いで今次の世界的大動亂の渦中に投げ込まれた結果として、多少の程度に於て國民的自覺を得たる日本の政治思想は、流石にマンチエスター派の功利的個人主義に執着するものゝみではなかつた。されば可なり多數の論者は、更に廣き國民生活上の立場より此問題に對した。是等の論者は、物價調節令は其目的に於ては無論賛成すべきものであるが、その手段に於て反對すべきものであることを指摘した。

物價調節令を手段に於て反對すべきものであるとする議論の中にも、二三の種類別があつた。その第一は、該令が調節すべきものとして擇んだ種目が單に米穀、鐵、石炭、綿絲、綿布、紙類、藥品、及び染料の數品に限られ、其れ以外のものに及ばないのは不徹底であると言ふに在つた。その第二は、該令に現はれ

たる物價調節の方策は見當違ひのものであるといふのであつた。即ち現今の物價の騰貴の眞因は、偏へに通貨の膨脹であるに拘らず、單に或る物品の買占め及び賣惜みのみを取締ることのみに依つて之を調節せんとするは、決して當を得たものであると云ふことが出來ないといふのであつた。又その第三は、所謂「急激なる市價の變動を誘起し、因つて暴利を得るの手段として」の買占め賣惜みの標準を明確に表示することなくして、その認定を一に行政官吏の判斷に懸らしめたのは、徒らに當該物品の取扱者の不安を增さしむるに過ぎざるものであるといふのであつた。

右の論難は孰れも皆相當の根據を有して居るものであることは、その說者の誰れであるかを離れて考へても、容易に首肯し得られるのである。現內閣が折角社會政策的施設に着眼し乍ら、その踏み出しの第一步に於て既に、斯の如き不徹底なる方策に出づる外に途がなかつたのは、抑も何のためであらう。之に關聯して先づ第一に考へられることは、現內閣が、既に國民中の智識階級間に不評判となれる官僚內閣主義の、それにも拘らず尙ほ儼然として存立の根據を有するものであることを示さんがために、其施政の上に一味の異彩を附與せんとして此界に出でたものであらう、といふことである。併し乍ら此企圖は、劈頭第一に於て既に其失敗の跡を見せた。蓋し現內閣は、國民的政治の看板を掲げて階級的政治を行つたものである。現內閣の閣僚にしても、既に政治家を標榜して居る以上は、孰れも皆國民全般の福祉に思ひを及ぼさぬものはあるまい。併し乍ら問題は彼等が國民的利害を先にして居るか、彼等自身の階級的利害を先にして居るかの一點である。所が彼等自らが意識して居るか否かの問題を離れて、單に彼等の施設の跡のみより之を見れば、彼等の最も重んじて居るものは、彼等の階級的利害——就中彼

等の權勢維持慾である。此事は彼等の明治維新以來の政爭場裏に於て贏ち得たる政治的優越地位に據つて作り上げた我國の軍隊制度や國民敎育の方針が、徹頭徹尾彼等の權勢維持のために都合よく出來て居る事實に徵しても、直に之を看取することが出來るのである。斯の如き階級的傳統を固守する彼等が、一時の方便として勝手に國民の利害休戚を忖度して無雜作に拈出した社會政策が、當初より大なる破綻を曝露して居るのは、素より當然の仕誼と謂はねばならぬ。

□「勝てば官軍」主義の代價

蓋し「勝てば官軍」の諺通り、藩閥官僚の傳統的地位が、「立憲政治の時代」を以て指稱せらるゝ現代の社會に於ても尙ほその儘承認せられて居る所以のものは、一にその物的實力の優越に依るのである。從つて彼等が何時までもその地位を維持せんと欲せば、矢張り力の行使に依つて之をなさねばならぬ。古哲人は「劍を以て興る者は劍を以て亡ぶ」と敎へたが、單に現前の事象を說明するものとしては、「劍を以て興りたる權勢は、また劍を以て維持せらる」といふ方が更に適切なのである。

素より一概に藩閥官僚と呼んでも、その中に自ら歷史的系統を曳ける若干の分派があつて、薩閥とか長閥とかいふものは、殊にその尤なるものであることは、今更改めて言ふまでもないことである。而して是等閥族の諸分派は、外部の壓力が弛緩して居る時には、常に其間に相爭鬩して互に優越を競つて居るが、一旦共同の敵に際會する時には、直に相互提携して之に向ふことは、明治十四年に於ける大隈排斥の時より、近年の内閣製造に關する元老會議に至るまで終始渝はらぬ慣習であつて、明治・大正の政治史の浮沈起伏の間に一條の脈を曳いて居るのである。

而かも「勝てば官軍」主義の產物たる閥族官僚がその權勢維持のために用ゐる力の行使は、時代に依つてその形式を異にせざるを得なかつた。政權爭奪のための武器として干戈劍戟が用ひられたのは、西南戰役を以て終結を告げたるものと見るべく、それより以來言論が之に取つて代はるに至つた。卽ち國會開設に關する論爭の時代が到來したのである。此時に當つて閥族官僚が盛に用ひた權勢維持のための武器は、言論集會の抑壓であつた。此武器は現今に至るまで尙ほ續用せられ、同じ目的のために猛烈に揮り廻はされて居る。試みに思へ、眞の立憲政治が確實に樹立せられて居るものならば、或ひは過度の反動的思想を皷吹し、或ひは官權思想を高調する言論こそ、政治社會の秩序を紊亂するものとして罪に問はるべき筈なるに、我國に於て抑壓の制裁を蒙り來り、尙ほ現今に於てそれを蒙りつゝあるものは、實に國民の權利を主張する言論の側に在つて、非立憲的・反動的思想を皷吹する言論は、常に單に安全であるのみならず、寧ろ盛に官憲に依つて庇護せられ、推奬せられて居るのである。言論の自由が文化生活向上の前提であるとすれば、閥族官僚の「勝てば官軍」主義のために我國民の上に課せられたる精神的負擔は、極めて重大なるものであると謂はねばならぬ。

明治十四年十月に於ける國會開設の詔勅煥發前後より崛起し始めたる諸政黨は、官僚政府の皮肉なる壓迫の下に、數奇なる運命の幾變轉に遭遇したが、愈よ明治二十三年の國會開設と共に、藩閥の一大敵國として、天下の議政壇上に於て旗皷堂々相見ゆるの段取となつた。是に於て乎、「勝てば官軍」主義の寵兒は、プロイセン憲法を主たる模範として作られたる新憲法の形式的解釋に依つて、超然內閣主義の武器を眞向に振り翳して之に當つた。而かも是は大手よりの攻め道具であつて、更に搦手よりは、議員

買收といふ黄金政策の武器を以て襲撃した。國民の風教といふ商品を一手販賣にして居る閥族官僚が、立憲政治開始の刹那より、早くも政界の空氣を斯の如く溷濁したことは、矛盾の樣であるが、劍を以て興りたる權勢は、矢張り劍を以て維持せられ、力を以て完成せられたる征服は、矢張り力を以て擁護せられねばならなかつた。勿體振つて國民の風教を說くのも、畢竟自家の階級的利益擁護のためであれば、陽に儼然として超然主義の大薙刀を揮り翳し、陰に何喰はぬ顔にて黄金を散ずるのも亦、端的に自家の階級的特權維持のためであつた。斯くて志士の多年の憧憬の標的たりし憲法發布の盛儀は、曾て豫期せられし眞正の黄金時代を招徠する機會とはならずして、却て全く豫期せられざりし反語的意味に於ける黄金時代を導き入るゝ發端となつた。凡そ政治に對する輕侮の念ほど、國民の政治思想の上に懷疑の暗雲を齎らし來るものはない。此點に於ても亦、「勝てば官軍」主義は、國民生活の上に容易ならざる精神的負擔を投げ掛けたのであつた。

次いで政黨が漸次國民の支持に依つて偉大なる實勢力を得來り、官僚の勢力を脅かすに足る強大なる政治的要素となるに至つてからは、閥族官僚も亦之に對應するために、その陣容を更改せざるべからざるに至つた。極端なる選擧干渉の如きも亦屢ば利用せられたけれども、是れ未だ以て彼等の權勢を安全にするに足らなかつた。是に於て彼等は柔克く剛を制する兵法を用ひて、提携妥協政策に出づるに至つた。是より肝膽相照とか、情意投合とかの甘い合い言葉が流行する樣になり、政治が次第に遊戯三昧の猥調を帶び來り、眞劍なるものは、只其背後の勢力たる「勝てば官軍」主義のみとなつた。妥協政策の害毒は、單に我國の政治を低調に導いたのみに止まらなかつた。從來藩閥に對して一敵國

をなして居つた政黨間の相互的嫉視は之がために激成せられ、官僚政府は其間を巧に游泳して獨り漁夫の利を占めて、益すその地位を安泰にすることを得たのみであつた。抑も國會開設以來、有力なる政黨は孰れも皆藩閥打破、政黨內閣建設を以てその主要なる黨是となし來つたに拘らず、明治三十一年に於て憲政黨內閣が漸くのことで槿花一朝の榮を樂んだことを外にしては、何時まで經つても此企畫を實現することを得ずして、依然として「勝てば官軍」主義の寵兒たる一小特殊階級をしてその權勢を恣まにせしむるに過ぎなかつたのは、其由官僚と政黨との上に五分々々に宿つて居たのである。之を國民の側より見れば、久しく翹望せる政局の展開が意に來る期なくして、民權の絶叫者として頼みにして居た政黨が、何時しか官僚政府と妥協苟合して其走狗となり、此好餌を取損つた政黨のみが徒らに遠吠して虛勢を張りはしても、それが何等の具體的効果を奏することなく、時には鳴物入りの憲政擁護が突發することがあつても、一二の憲政の神樣を製造する外には何の効果を擧げず、狂風一過の跡には、依然として安泰なる閥族官僚の外には一塵を止めぬ有樣なるを見ては、一種の絶望感が其間に湧き來るより外に仕方がなかつた。凡そ頽廢は絶望より來るものとすれば、現今の政治思想の異常の頽廢は、その由來する所遠く且つ久しいものがあるのである。

口を開けば民權の擁護を叫ぶ政黨が、都合の好い時には國民を踏臺にしながら、他の都合の好い時には官僚政府に迎合したり、各政黨を離間して無用の軋轢爭鬪を釀成して只管自家の權勢維持を謀る閥族官僚が、風向きに任かせて、或は擧國一致を唱へ、或は國論統一を强制したりするが如きは、我國に於ける政治が如何に便宜主義を樞軸として廻轉して居るかを語るものである。近年に於ける政黨の官僚化

及び官僚の政黨化は、共に是れ同じ便宜主義が兩側に於て別々に發揮せられつゝあるものに外ならぬのである。而して斯の如き現象は、「勝てば官軍」主義以外の政治哲學なき國民の、當然負擔すべく運命づけられたる所のものであらねばならぬ。

□國民的共同意識の覺醒

併し乍ら滿目荒凉たる冬枯れの山野に於ても、その基底には既に一陽來復の春の準備が着々行はるゝものであると同じく、混沌たる我國現下の政局及び政治思想の上にも、眸を凝らして仔細に注視すれば、將來に對する一條の活路の開通を暗示する或る物が蠢動しつゝあるのが、隱約の間に認知し得らるゝやうに感ぜられぬでもない。

先づ、第一に近代世界を通じて一般に行はるゝ民族的自覺の波は、我國民生活の上にも甚深なる影響を及ぼした。是は我國が鎖國の障壁を撤して、諸國家の交際場裡にその地位を占むるに至つたことの必然の歸結である。言ふまでもなく古來我國の歷史の上に、日本意識の發現を常に見來つたことは事實である。殊にそれは外冦の來侵若しくは外征の出動の場合に於て、一層著しく現はれた。德川幕府の鎖國政策とても、我國の外國に對する人的、地的、及び文化的差別の意識が、その根抵を成して居たものであることは、復言ふまでもない。浦賀に於ける米艦來航後、德川幕府が外敵の優勢に壓倒せられて開國政策を採るに至つてより、物情轉た恟々、鎖國攘夷の叫びの高まつた事實の背後には、縱し如何に倒幕の策略が潜伏して居たにせよ、日本意識は此時に於て最も猛烈に活躍したことだけは疑ふべくもない。けれども門戸閉鎖時代の日本と、開國進取時代の日本との間に於ける民族意識には、多大の逕庭があ

ることも亦、忘れてはならぬ。素より個々の例外があつたにせよ、大勢の上より之を言へば、一は西洋文化の全景を知らざりし自瞞尊大の民族意識であつて、一は西洋文化の優秀を知つての上の自奮敢爲の民族意識であつた。從つて一は消極的であり、一は積極的であつた。開國進取といふ一語は、この新興の民族意識の屬性を最も明瞭に指示せる壯快なる一表現様式である。三百餘年の鎖國の夢より目醒めて、一朝西洋の制度文物の光彩に打たれた時、直にそれがために眩暈惑亂して自卑自屈に陥ることなく、極力之を自家藥籠中に攝取して新日本文化建設の資料とせんとしたのは、流石に歴史を有する民族である。當時の五個條の御誓文は、若返りたる日本が示した冲天の意氣――建設的覺悟の一大結晶體ではなかつたか。

續いて來りし歐化主義の流行は、この若やぎたる日本が、その鬱勃たる客氣に任せて幾千年の蓄積の餘に成りし祖先の遺産を湯水の如く浪費したる青春の罪惡の様に見えるけれども、實は新日本文化建設のために必要なる過程であつたのである。當時の狂態に近き破壊と建設との努力がなかつたならば、如何に不完全のものなりとは言へ、現代日本の文物制度は到底實現を見なかつたであらうし、從つて我國民は少くとも爾餘の東洋諸國民と同等の悲境に沈淪したであらう。されば我等にして苟くも現代日本の辿れる方向を、大體に於てなりとも是認する限りは、當時の淺薄なる歐化政策をも全然非難する譯には行かぬのである。

而かも此極端なる歐米模倣時代に於てすら、民族的獨立意識が徹頭徹尾消耗せらるゝことなく、時に應じ機に臨んでその全幅の發露を示したのは、是れ亦二千有餘年の立國の歴史に感謝すべきものたるに

相違ない。夫の征韓論の沸騰の如き、臺灣征伐の敢行の如き、條約改正に關する論爭の如きは、孰れも一樣に光榮ある結果を齎らさなかつたにせよ、皆均しく我國民生活の歷史の上に於ける或る精神作用を標識したる指針と見るべきものである。

併し乍ら新時代の經營のために思ふ存分の破壞を爲し盡くした日本は、不圖自分の行ひ來つた事を顧みて、自らその暴狀に驚いた。反動的傾向は此罅隙を附け込んで現はれたのである。而してそれは社會一般の文化生活に於ては國粹保存主義となり、政治生活に於ては閥族官僚の維新以來扶植したる權勢確立の認容となつた。此事が如何に明治初年の大誓の精神に背反したものであり、封建時代の統治樣式の一面の復興であり、且つ又、それがために一部の民論及び政黨の激怒痛罵の標的となつたにせよ、閥族官僚の權勢の因つて以て立つ所以たる社會的基礎が認容せらたる限りは、それが毫末も顚覆の運命を見る虞れなく、狂瀾に打たるゝ大磐石の安泰さを示したのは、是亦當然の成行と謂はねばならぬ。

日清日露の兩役は、再度の國民的自覺を促す誘因となつたけれども、その赫々の成績は國民の性情を少からず浮華に導いた。而して當時十二分に發揮せられたる軍隊の偉功は、政權と共に兵權を把握せる閥族官僚の面目を高むるとも傷くることはなかつた。その結果として戰後經營を中心とせる閥族官僚對國民の政爭に於て、前者は依然としてその傳統的權勢を維持して、以て今日に及んだのである。

けれども時代は終に廻轉した。來るべきものは終に來つた。殊に我國が今次の世界戰爭の渦中に投ぜられてより以來、國民の自覺は、大に緊張の度を加へ來つた。聯合軍に加擔したる我國の國際的地位が一層明確になつたと共に、我國の實力の强弱は一切を擧げて遺憾なく曝露せられた。從來物質力に負けて精

神力に勝てるものと思惟せられた我國民の愛國心も、歐洲の野に於て示さるゝ多くの交戰國民の愛國心に於て、其品位匹儔を發見した。是に於て我國の唯一の强味と賴んで居たものが、俄に幻滅の悲哀を經驗した。

交戰國として青島攻擊を行ひ、太平洋の警備に當り、更に地中海に艦隊を出動せしめて、ありたけの力を聯合軍に提供して居る我國は、もうこれ以上目立つた助力をすることが出來さうでなくなつた。宣戰の詔勅に、東洋の平和を維持するためとの旨が述べてあつたこそ、勿怪の仕合せである。米國が如何に我國の貢獻の過少を云爲しても、クレマンソーが如何に我國の犧牲の不足を訴へても、不可能の事は不可能の事である。歐洲出兵の件は當分の所到底相談に乘れさうにもない。

斯の如きことを書き續くれば際限がないが、要するに我國民の自覺は、最近に至つて非常に緊切となつた。日清日露の兩役は、その戰勝の餘榮に依つて我國民の氣分を浮華にしたが、現戰役は我國民の氣分を嚴肅にした。我國民は最早現狀には安んずることが出來なくなつた。而かも斯の如き現狀を齎らし來つたことについては、國民全體の上にも責任があるが、併し乍ら從來樞要の地位に立つて政柄を執り來つた閥族官僚及び之と反復離合して國政を玩弄して居つた政黨が、直接の當路者として批難の衝に立つは、是れ亦己むを得ざる勢である。

外國人は日本の維新以來の進歩を以て奇蹟的であると賞讃する。これは標準を彼等の所謂異教國に置いての上の話である。我國民は日本の進歩の遲緩且つ跛行的を幽痒く思ふ。是れは第一等國に列した自覺より生ずる感情である。日露戰役後に於ては、國民の自國の實力に對する滿足は急速に增進し、亞細

亞の盟主氣取りの空想的議論も可なり聽かるゝ樣になつた。然るに現戰役開始後歐洲所在の戰線及び北海に於ける各交戰國の角逐接戰、及び後方に於ける戰備充實の狀況は、戰はざる交戰國たる我國の實力を測る尺度を提供した。國民は愕然として驚いた。我國の安全は、偏へに戰場よりの隔離といふ地理的條件より來れる安全であつた。こんな筈ではなかつた。と思つても嚴肅なる事實を如何ともすることが出來ぬ。而かも斯の如き事は總べて皆、國民が政治の實際より隔離せられて居た間に起つたのである。最近に於て國民一般、就中その知識階級が局面展開を無意識の間に要求し、同時に閥族官僚と共に政黨に對しても不滿の聲を放つ樣になつたのは、蓋しその遠因を箇中の消息に求むべきものである。

國民は閥族官僚及び之と反復離合して、國民の視聽の外に國政を玩弄して居た一部の政治家の手より政權を奪還し、階級政治を轉じて國民政治となさねばならぬ。—斯の如き感情は近年に及んで、最初には先づ隱げに——次には稍々明瞭に、斯くて次第々々に國民の意識中に開展するに至つた。而かしてそれは、新政論の勃興と共に、今後益す増進發達するに違いない。加ふるに歐羅巴に於ける產業革命時代より無前の記錄を示したる交通業の發達は、世界の各地方間の距離を非常に短縮した結果として、今日に於ては、歐洲諸國に於ける國家政治の——而して同時に或る程度に於て國際政治の民衆化的傾向は、此東海の島帝國よりも手に取る樣に見えるのである。これが我國民の政治思想及び政治生活の上に何等の影響を及ぼさないで已むであらうと思ふのは、それは餘りに少くとも明治維新以來の我國民の思想及び生活の歷史の與ふる教訓を無視した考へ方である、と謂はねばならぬ。

□新政論の勃興及び其使命

此國民的自覺は、直ちに政治と國民との距離を短縮し、戰時及び戰後の國家經營維持を國民の協同責任の事業となさんとするの要求となつて現はれた。此要求を具體化して興りたる在朝在野の專門的政治家以外の識者の新政論が、閥族官僚の傳統的特權に對して反抗の聲を擧ぐると同時に、政黨の不眞面目なる遊戲氣分をも攻擊し、進んで普通選擧を最終の目標とする選擧權擴張の必要を高調したのは、素より當然の理路であつた。官僚系統の論者が我等の衷心を吐露した政論を讀んで、或は飜譯思想と罵り、或は英國流の自由思想の燒直しと怒號したのは、一面に於ては、如何に彼等の政治思想の歷史的系統に暗きものであるからを語れると共に、他の一面に於ては、如何に彼等の階級的僻見が、國民の本然的必要に對する彼等の洞察を妨げたかを示せるものである。併し乍ら適者は竟に生の自然的衝動に依つて存續せざるを得ないのである。されば一方に於ては官僚政府が實際行使したる——若しくは行使せんと脅かしたる言論の抑壓や、所謂國論統一(!)の强制のために、將又、他の一方に於ては、一時の變調として發生したる成金羨望熱の流行のために、政治思想の混沌期、若しくはその冷淡期が、反動思想全盛の形式を借つて、去る四月の總選擧期の前後より出現したけれども、それにも拘らず、新政治思想は其瞬時の沈靜期に於て蓄積したる精力を提げて、更らに時機を見て捲土重來せんとする徵候を示して居る。

　此新政治思想が階級政治及び職業的政治家の政治に反抗して政治の國民化の必要を絕叫するのは、善政主義とか、擧國一致內閣とか、國論統一とかの標語の蔭に隱れ、既に全然時代錯誤となれる統治思想を前提としての憲法の論理的解釋に依つて封建的・專制的・功利政治を行ひ、因つて以て國民の政治思想

及び政治生活を形式化し、骨化し、石化せんとする官僚的國家觀を排斥し、國民の本然的必要より迸り出で、國民の奥底の情操より湧き出づる政治を打ち建てんが爲めである。評言すれば、此新政治思想の期する所は、各日本人が國民として抱懐せる衷心の希望、思想、感情、民族的國家建設の慾望、國民的文化創造の衝動――換言すれば、歴史を有する民族たるに相應はしき國家生活の主體として、世界に於ける第一流の文化國家群の列中に於て、その本然の價値より生ずる確實なる地位を贏ち得んとする願望――それは國民の各員が明確に意識せると否とを問はず、隨時に擡頭する各自の個人的、階級的、地方的特殊利益の外殻を擺脱してその奥底を探ぐれば、そこに久遠の靈光を放つて潜在する國民的願望を基礎とする生命の躍動せる政治を實現せんとするのである。それは一面より見れば理想主義の政治觀であるが、他の一面より見れば、新日本の魂を宣明したる五個條の大誓への復歸である。即ち此曠古の大誓を其點として出發し乍ら、封建制度の舊土に對する追憶のために、あらぬ方へ踏み迷ひたる稚き立憲政治の手を取つて、その本源の正路に引き戻さんとするのが、此新政治思想の宣傳者の使命である。

新政治思想は最早征韓論以後の日本の民權論の基調であつた通義權理とか、天賦人權とか、自由平等の如き空疎なる標語を玩弄するものでなく、直ちに國民生活の歴史的進化と世界の現勢との交錯折衝より産まれたる刻下の國民的必要に觸れたる生命の躍動せる政治を要求するものである。若し新政治思想が言論の自由を主張するならば、それは架空の自然狀態（Status naturalis）に對する憧憬より來るのではなくして、國民の本然的必要より迸り出づる思想の表現の自由が、國民文化の前提的條件であることを知れるがためである。又若し新政治思想が社會的機會均等主義を持するならば、それは荒唐無稽の

天賦平等說に共鳴するがために非ずして、「勝てば官軍」主義の識見たる階級政治の結果として生じたる人爲的不平等の撤廢を要求するがためである。殊に階級的特殊利益の立場を離れて、眞個の國民的立場より一切の社會問題に對し、公正なる批判に依つて國民生活を抑壓關係より拯ひ出だして之を倫理關係に導き、そこに社會的鞏固性を造り出ださんとするは、新政治思想が自らその肩上に課したる最大の任務である。是れも新政治思想の發生の動機より來たれる當然の歸結であるが、同時にその唱道者の多くが職業的政治家の群れの外に在るのみならず、孰れの階級若しくは政黨の特殊的利益の勢力範圍よりも獨立したる地歩を占めて、直接に國民に訴ふることを得る便宜を有する事實にも基因するのである。

新政治思想は國民の所有する精神的財産たる意義ある傳統を尊重するも、之を將來の發展の基礎として、且つその可能性の尺度として重要視するに止まるのであつて、徒らに之に囚はれて國民の抑ふべからざる生の衝動より來る向上的流轉變化を阻止せんとするものでない。殊に國民の意思に頓着なく國民の上にそれ自身を押し被ぶせた少數特權階級の支配の如きは、其慣行が如何に久しきにせよ、之を國民共同の傳統としてさへも見ることなくして、寧ろ之を國民共同の傳統の破壞者として見るのである。又新政治思想が國民の前途の發展の可能性の尺度として最も熱烈なる愛着心を以て振返つて眺むるものは、若やぎたる日本が遂行したる明治維新の大業である。當時の日本は鬱勃たる英氣に任せて、咄嗟の間に復古的維新を斷行し、破壞的建設を完成し、內外多難の間に對外的獨立の基礎を築き上げた。併し乍ら此大計畫を實現したる日本は、緊張せる努力の後に來れる疲勞を覺えて、そのまゝ保守的に傾き始めた。是に於てか開國進取の精神を裏切りたる變則的立憲政治が、諸勢力の角逐交錯の間に打ち建られ

たまゝ看過せられた。其間に外部の世界は、日本が進歩した以上に進歩した。一たび惰眠を貪りたる國民が、世界戰亂の警鐘に驚かされてふと目醒めて見れば、日本の地位や實力は、その甘睡の夢に通うたものとは非常なる懸隔があつた。國民の惰眠も惡るかつたが、その間に勝手に内治外交を國民の視聽の外に行つて、國民の可能性をして自由に開展せしめなかつた爲政者は、最早信頼するに足らぬことが明瞭となつた。殊に國民の活力の根源と最も密接の關係ある財力の分配と負擔の公平との問題の解決は、之を階級的特殊利益偏重の痼疾を得たる傳統的權勢把握者と、便宜主義の傀儡たる職業的政治家とに放任することの最も危險なることが、極めて明瞭に看取せらる樣になつた。國民は否やでも應でも、共同責任に依つて國運を擔當せねばならぬ破目に立ち至つた。參政權擴張と責任政治の實現とに關する要求は、その事自身が目的であるのではなくて、國内政治の整理のために必要なる手段の要求である。明治維新が對外的獨立を完成したものとすれば、大正維新は國内的公正を實現することに依つて之を補足せねばならぬ。兎に角日本は再び若返らねばならぬ。此氣運の中を立ち割つて生れたのが、我等の新政治思想である。

　此新政治思想は、日本に發育の素地がないと言ふ者がある。然り、若し之をして天賦人權説の如き前提より來れる論理の遊戯ならしむれば、斯の如き方面の思想上の素養なき日本人の受け容れ難い所であらう。併し乍らそれは、鎖國的舊狀態を脱出して世界の文化國家群の中に割込みたる日本の當面の必然より出でたものなるに於ては、警察力に依る國論統一の强制などの難に會つて、直ちに一敗地に塗みる樣な生命力の稀薄なものではない筈である。少くとも我等は此新政治思想が、精神的に若き人々の共鳴

と支持とを贏ち得て、敢て永久にとは謂はないが、今後相當の期間に渉つて、最後の適者として存続し繁榮するものであることを確信するのである。

善政主義の裏面

公平なる見地より批判すれば、現内閣が幾分なりとも社會政策的施設に着手し始めたるは、時勢の必要に迫まられたるものとは言へ、亦一進歩たるを失はないのである。此事は官僚政府とは根本的反對の世界觀に卽する我等と雖も、之を認容せざるを得ないのである。けれども既に物價調節令に於て之を見たるが如く、その跡から出て來る諸般の施設も亦、孰れも々々不徹底若しくは矛盾を極むるもの許りであるは、態々標榜したる善政主義の手前、甚だ見苦しいことではないか。由來國民の中より湧き出でたのではなくて、國民の上に無理遣りに自己を押し被ぶせた官僚政府者が――而かも富貴の地位に在つて權勢の空氣を吸ひ馴れた彼等が、さま／＼の官廳や官吏のお役目柄程々に作製した杜撰な統計や報告を基礎として、彼等とは別の世界に住んで居る多數の下層國民の實生活に觸れねばならぬ社會政策に指を染めることであるから、折角の妙案が破綻百出に終るのは、何の不思議もない譯である。

殊に苟くも社會政策と銘を打つたからには、財產上の所有の觀念に多大の制限を施さなければ、到底際立つた効果を擧ぐることが覺束ない筈であるのに、金權者流と纏綿せる情實に絡まるゝのみならず、彼等自身も或る程度に於て金權者流の一部分を構成し、加ふるに財產所有階級と切つても切れぬ關係を有する諸政黨の意向を一般國民の意向以上に重要視する官僚政府者が、社會政策の名に値するだけの革命的財政案を作ることが出來ないのは、不思議でも何でもない。

外交調査會や臨時教育會議の設置に依つて國民の上に自己を標置する官僚風を遺憾なく發揮し、地方官會議や警察官會議に向つて、固陋なる風教維持の必要や國論統一の强制を訓示する隔離的政府より、幾分でも透徹せる社會政策を望むは、望む方が間違つて居る。

昨年の豫算案は、時機切迫のために餘儀なく前内閣のそれを踏襲したといふ口實があつたから、善政主義の責任をそれで問ふことが出來なかつたとするも、本年の豫算案には何等かの特徴を示さなければ、善政主義の看板の捨て場がなからうではないか。

戰時利得税の項目だけは宜しいが、その課税の方法及び税率、幷びにそれに計上せられたる金額より生ずる幾多の疑問は、今後精細なる研究に依つて解決することを必要とする。通行税の廢止は當然のことゝして承認すべきものであるが、煙草專賣上の値揚げや、郵便電信料金の增率は、之に對して大なる矛盾を呈して居る。その他の國民消費品に對し、將又、勞働者貧民の保護に關する各種の施設に關しては苟くも社會政策の名に副ふことの出來るだけの何物もが試みられて居ないのである。

善政主義の誇大なる聲言より湧き出でたる結果は、正に右の如きものであつた。而かも豫算案の編成と共に第一に相談を受けたものは、政友會、國民黨、及び新政會の如き政府の與黨であつて、一般國民ではなかつた。蓋し政府者が其平素好んで口にする社會政策を眞摯に具體化したる革命的財政案を提げて議會に臨み、金權者流及びその擁護者たる諸政黨を敵として戰ふ決心をした時に於てこそ、始めて政府は諸政黨の反抗に對照するために一般國民の支持擁護を求むる必要に際會しやうが、今回編成せられたる平々凡々たる財政案に關してならば、斯の如きことをなす必要もなく、又斯の如きことをなして

も一般國民の方で相手にしないであらう。けれども假りに官僚政府が、眞に大決心をなして其日頃の聲言通りの社會政策を實行する誠意を以て一般國民と提携したならば、彼等と國民とを隔つる障壁は、是に於て始めて撤去せらるゝであらう。斯くなれば、彼等は閥族官僚と稱する特殊部落としては死するであらうが、其代り彼等は一般國民の間に先覺者として活くることを得るであらう。斯の如く活くることこそ、彼等が永遠の生命を得る所以であるが、階級的權勢に馴れたる彼等に取つては、無論國民の先覺者として活くるよりも、特殊階級として死せざる工夫をすることが急務である。是れ彼等の善政主義が鵺的社會政策と同意語を成す所以の最大原因である。

それにしても官僚政府がその權勢維持の武器として用ひたるものが、暴力より黄金政策となり、更に轉じて妥協政策となり、終に不徹底ながらも社會政策らしきものとなつたのは、一面に於ては時勢の進轉を反映するものであるが、他の一面に於ては國民的自覺の增進の程度を指示するものである。政治の國民化の前提が、飽くまで國民的自覺の徹底及び普及であることは、どこまでも平凡なる眞理である。而してあらゆる政治問題及び社會問題に關して專門的研究及び思索に依る解決を求め、之に伴ふ熱烈なる傳道的事業に依つて此國民的自覺を淨め深め、廣むることが、我等の新政論の最大使命であらねばならぬ。

世界の煩悶

若宮卯之助

一

雛の孵化した家鴨に類するが如きものは、今尚ほ生命あるが如く無きが如き、彼の五ヶ條御誓文の一として歴史的光輝の燦爛たる「萬機公論に決すべし」の條項である。今日の意味の教育機關、輿論機關、及び交通機關、是等を全く缺いて居た維新草創の當時に在りて、今日の所謂公論は、恐くは思想上の不可解であつたであらう。當時の人口三千萬、其の大部分は、目に一丁字無き、淳樸愛すべき服從一途の人民であつた。一個の抽象名詞たる公論の意義は、固より萬古不易である。而も其の内容には刻々變化がある。若し伊藤公の憲法義解に依つて、帝國憲法の精神を彷彿すると云ふが如き意味を以て、此の御誓文の事實上の作者たる福岡孝悌子爵の懷舊談を據ろとすれば、此の御誓文は、諸國諸大名を當面の對象に置いたものである。從つて其の公論の意味を露骨に言へば、國家の萬機は、當時の常祿階級たる多數士族の意見に依つて決定すべしと云ふのであつた。然しながら、一個の抽象名詞としての公論の範圍は、殆ど無限に擴大される。政權爭奪の中心を遠かつて居た諸階級の人民は、其の公論の意義を、直に其の作者の意外に展開して、而して其の御誓文を、政務は總て、人民多數の意見に決定すべし云ふの意味に解釋した。これ即ち雛の孵化した家鴨の卵では無い乎。而も其の解釋如何は、我等が直接の問題では無い。我等は單に、如何なる時代に於ても、其の所謂公論の要素に自ら一定の制限あるを豫想せんとするだけである。

二

公議と云ひ、輿論と云ひ、國論と云ふものの構成分

子、確定性を缺くこと此の如きもの、恐くは容易に他に其の類例を見ないであらう。天下の公論を必要とする殆ど一切の人は、各々己れの意見の優越性を證せんが爲に、これ即ち神の聲の民の聲であると謂はんとすれば、或は此の如く言ひ紛らすに足るだけの材料の蒐集に滿足せんとするの傾もあれば、或は度を超へて所謂輿論の捏造に焦らんとするの放埒さへもある。決定的に輿論を捉へんとすれば、輿論を捉ふるは猶ほ雲を摑むが如きものである。而も雲の正體は適度の距離を隔てゝ明に之を認むるが如く、公議輿論の構成分子も亦必ずしも其の概算を不可解とするもので無い。

日本の國務を適當に理會するの能力ある日本人の數幾何ぞと問ふ者あらば、余は即座に概算一百萬と答へんとする。官公私立の大學、直轄學校、各種の專門學校等の卒業生中學卒業後の自修生、講義錄の卒業生、女學校の卒業後に伸びたる女性、其の他陸、海軍、農、工、商の實務の經驗に依りて一定の度に能力の發達を實現したる者、是等を一括して高等教育を得るものと假定すれば、其の總人員の年額恐くは五萬を下らぬであらう。而して此の如き狀態は既に十年の歷史を重ねて居るであらう。然らば其の概算は正に五十萬に上る。而して此の如き意味の所謂高等教育ある者を、更に其の十年前の全部を通じて計算すれば、其の總數容易に五十萬に達するであらう。即ち最近十年と其の十年前の全部とを合計した一百萬は、日本の標準的知識階級の殆ど全部と看做して、中らずと雖も遠からざるの數量であると思ふ。此の一百萬は、之を全國新聞紙の發行部數、銀行會社要錄、及び各種の職員錄、紳士錄等より推測しても、少くとも最低限度の數量として承認されるであらう。余は此の一百萬を假定する。然らば日本の所謂輿論は、差し當り此の一百萬の輿論である。國民多數と云ひ、民意の所在と云ひ、人氣の嚮背と云ふも歸する所は此の一百萬の多數であり、所在であり、嚮背である。而も此の一百萬は、各々現實に輿論の構成に與つて居る乎。曰く、否。

此の一百萬は、要するに一種の社會的潜在意識であ

る。輿論の構成に與つて竟に意識的に作用するの資格を有するも、其の大部分は實際上の無勢力である。是等の一百萬の各分子は、法律命令の爲に、社會的慣習の爲に、適當の機關を有せざるが爲に、意見の發表に慣れざるが爲に、信頼すべき代辯者を有せざるが爲に、全く輿論の構成に與つて居ない。造語は聊か大膽であるも、其の眞の意味より言へば、日本には所謂輿論なるものが無い。輿論の可能はあるも、其の一百萬の分子を略ぼ綜合したと看做さるべき、實力ある輿論なるものが無い。之を現實に言へば、日本の所謂輿論は、輿論を必要とする少數者が其の少數者に便利なる意見の我儘性を蔽はんが爲に、擅に借稱した奇怪なる稱呼である。

三

今や日本には一種の奇怪なる輿論、國民多數の意見と云ふよりも、寧ろ世間知らずの學者の輿論と稱するに適するが如き一種の主張の流行がある。日本の學者は此の歐洲文明の悲むべき弱點を暴露した我等が現前の世界亂の最中に於て、即ち世界の列强と比較的交渉薄き米國が、頻りに戰後に於ける國際共通心の發達を氣樂に語ると共に、文字其儘の乾坤一擲の大賭博を爭うて居る獨逸人が、所謂三十年戰爭の二の舞の決心の臍を固めて居る最中に於て、日本の政治哲學者は、頻に戰後に於ける民主的思想の勃興を豫想して、殆ど之を不可抗の勢力の如く睨むで居る。一種の意味の民主的精神の進歩は、固より社會進歩の必然的結果の一ではあるが、其の進歩は、果して、其の進歩と同等の障礙物を隨伴せざる單獨の進歩であらう乎。此の論點は、日本の淺薄なる所謂政治哲學者等の、全く不問に付して居る、一個の緊要なる主題である。

中華民國、露西亞未定國、墨耳古共和國、中南米の共和諸國、佛蘭西共和國、及び北米合衆共和國。世界の總共和國を通じて、世界第一流の國家を見ざる事は、これ果して歴史の偶然の進行であらう乎。若くは人間性質の自然の發露の結果であらう乎。世界の爭は現に英獨二國の戰であり、英獨二國の勝敗は、世界歴

史の誤り無き轉機である。而して其の轉機の如何に關係なく、其の爭衡者たる英獨二國が、孰れも共和國の形式を脫して居るは、全く之を無意味に解するを得るであらう乎。若し絕對的民主制が、政治的進化の最高階程であるものならば、共和國の基礎は、國家の基礎として、最も堅牢性を示して居るべき道理では無い乎。共和國の弱點は、外交關係の弱點である。外交關係に於て、極めて外國の勢力に乘ぜられ易きものは、共和國の特徵である。此の產業主義の時代に於て、資本の勢力が、其の政體の如何を問はず、其の資本を必要とする社會に、絕大の權威を有するは無論であるが、此の强大の權威は、共和國に對して、特に二重的に作用するの傾向がある。共和國は外交的に、外國資本的に、常に二分されんとするの危險がある。其の政權爭奪は少くとも根本的二大分派の形式を具ふるが爲に、外國の勢力は、少くとも資本的に、其の二大分派の孰れの通路よりも入り込むが爲に、國家の活力は、次第に其の麻痺を餘儀無くされる。現在支那と現在露國との情狀を酷評するは、今日に於ては或は一種の暴惡であらう。而も共和國の弱點の性質は、是等の國の情狀に於て、最も分明に看取される。ケレンスキーか、レーニンか、英國的か、獨逸的か、北方的乎、南方的乎、日本的乎、英國的乎。糾へる繩の如き勢力消長の刻々の問題は、姑く之を無視するも、其の消長の如何に拘らず、一たび侵入した外國の勢力は、何程かの代價を受取らずして無事に退却するの氣支は無い。若し假定の上の推論が許されるならば、而して露國に於ける過激派の決定的勝利が假定されるならば、其の直接の效果は、恐くは露國外政の誤り無き退步である。其の外政を擧げて、之を他國に一任するが如き形式を採用するで無かつたならば、其の過激派の主張の貫徹は、必ず不可能であらうと思ふ。外國勢力を國內に誘導するは、殆ど恢復の機會無き國家の損失である。南宋の志士陳龍川は、此の點に於ける支那歷史の敎訓を簡約して左の如く語つて居る。「以中國定中國、以夷狄攻夷狄、古之道也。借夷狄以平中國。此天下之末策、生民之大

患。而究其本原、乃出於明君賢臣者、蓋其事變迫於前、不得已而爲之、姑以權一時之宜、未暇爲天下後世慮也。然其積也既課、其來也既遠、膠於見聞、而爲之益勵。一旦潰亂四出、雖出於百營、而莫之能救、是非可嘆也歟。故吾嘗推原其事、蓋肇唐高祖、成於郭子儀。而極於桑維翰。成難於叛業、而資爲聲援。或急於中興。而用爲輔翼。或迫於拒命、而倚爲先驅」。支那が四隣を輝した其の國威の頂上を唐朝の初期に留めて、爾來遂に振はずして今日に迨んで居るが、其の原因の複雜は、之を承認するも、一たび根を下した外國的勢力の如何に拔き難きかは、容易に之を窺知するを得る。然しながら古代支那の外國勢力は、其の夷狄視した、單純なる無資力の武力であつた。而して今日の支那は命令統一の不容易なる共和國であると共に、其の外國的勢力は、文化の優越なる、資本の複雜なる、武力の雄大なるを其の特徴と爲すのである。而して其の外國的勢力は單數で無くて複數である。其の複數的外國力が同じく複數的支那政治に交涉せざるを得ずとすれば、而して其の交涉が共和國の形式に於て、特に複雜を極めんとするを觀れば、國家組織の體制にして、共和國は果して、其の最高階級であるや否やは、自然に一種の疑問と爲さざるを得ない。

四

世界多數の共和國の間に在りて、嶄然として群を拔くものは唯だ一の米國であるが、其の米國も國際關係の簡易なる、交通機關の發達せざる時代に於て、其の建國特殊の歷史的關係を辛うじて延長し得た偶發的成立の國家である。米國の憲法を模倣して成功した社會はあるも、其の共和制を採用して、大いに發展するを得た國家は何處にも無い。米國人は自供自足を以て生活した。米國人は自ら尊しとする一種の慢心がある。彼等は米國を以て、世界最大、最富、最强、最善、最美の國と心得て居る。他國に對する嚴密なる比較研究を待たずして、先天的に斯く認定すると、宛も米國人としての義務の如く、或は權利の如く心得て居る。而して此の世界知らずの米國人の自尊心は、先づ何物より

も獨逸人の侮りを買ひ、其の卑みを招いて居る。米國人は好むで其の民政を誇る。而も其の所謂民政は『猶太人が金權を握る、愛蘭人が政權を握る、亞米利加人が國旗を握る』ことであると語つた塞比亞一記者の冷語を距ること、如何に遠しとするも、斷えず米國を狙つて居る獨逸人が、米國民政に對して尊敬の念を有せざるは事實である。米國人は其の浮誇なる自尊心を滿すが爲に、獨逸人も遠らず米國民政の追隨者として、其の普魯西的軍制の羈絆を脱するものと心得て居る。米國自尊心の自然の成行としては、尤も至極の結論であるが、米國人は此の點に於て、全く其の自尊心に囚はれて居る。獨逸人は訓練を重んずる。獨逸人の目的は發展である。而して其の發展に必要なる獨逸訓練の有効は、既に獨逸人多數の自覺に上つて居る。然り獨逸の内政は、其の訓練の一點に於て世界の模範と稱せらる。而して此の獨逸の訓練と對照して、最も缺陷多きものは、實に米國民政の訓練である。所謂外國貿易の世界的獨占を夢想して、獨探化の米國を描き出ださんとする獨逸の野心は、最も巧みに此の米國民政の訓練の不足に付け込むだものと謂はざるを得ない。我等は米國を信用する。別して其の潜勢力を信用する。我等は特に此の世界亂の終局に於て、獨逸の完全なる勝利を期待するが如き不祥なる豫言者では無い。然しなが此の列ら國對峙の世界に於て、共和國の體制が、必ずしも其の最善のものにあらざるの實例として、最大共和國の米國を數ふることは、決して脱線的では無からうと思ふ。

五

若し世界の所謂民主的傾向が、社會進化の必至の順序にして絶對的に成立するものであらば、共和的民國主義は、軍國主義に對して、絶對優越の地歩を漸次に占めんとするの兆候を、必ず露呈すべき筈では無い乎。而して現實上、共和的民國主義の組織にして、偶發的成立の米國の外、一として世界に雄視するもの丶存せざるは、それ果して民國主義の本質を其の側面より語るものと謂へぬであらう乎。我等は固より民國主義の

理想の進歩を認めざらんとするでは無い。我等は單に其の絶對的進歩を否定せんとするだけである。社會の進歩は、人民要求の進歩である。否、其の要求の滿足の進歩である。粗より細に進み、俗より雅に進み、簡より繁に進むものは、人間一切の要求であると共に、其の要求の滿足の進歩も亦自ら此の順序を追ふものである。此の人民要求の一方便に過ぎざる各種の交通機關だけを考へて見ても、如何に其の人民要求の複雜であるかは、容易に想像される。而して其の人民の要求が、必ず悉く政府の權力と交渉するの理由も亦交通機關の實例だけを參照して直に承認される。昔の駕籠舁きに相當するものが、今の鐵道官吏であると謂つたならば、其の外形の相違は、或は雲助と雲上人との差別を生ずるが、人民要求の進歩の實質より觀れば、此の二つに何等の異りが無い。今や人民の要求は、床の下の掃除にまで一種の官權を要するが如く、政府の事務は、時勢の進行と共に、益々其の複雜を加へんとする。而して其の益々複雜を加へんとする政府の事務は、政府當局の專擅を以て、一々宜しきを制するの不可能なるは言ふまでも無い。政府の事務の複雜性は、自由放任を以て、久しく其の國是と爲されて居た米國政府の例に於て、最も分明と認取される。其の草創の當時に在りて、外務、大藏、陸軍、司法の四省より成立して居た米國政府の中央機關は、漸次に其の數を增して今日に於ては總計八省となつて居る。而して其の官吏の增加に至りては、人口の非常なる增加を考量するも、其の絶對數の證明に議論は無い。如何なる政務と雖も、大體上、民意を參照せずして實効を奏するの機會無きは、特に政治的進歩の傾向である。我等は固より彼の如何はしき民本主義の政治哲學者と共に、此の傾向の免れ難き事實であることを、正面より承認する。我等は此の點だけに於て、固より毛頭の異存が無い。然しながら、これと共に所謂民國主義の進行を以て絶對性の進行と爲し、其の意義の不定なる、曖昧なる、責任の歸着を認めざるが如き所謂『世界の大勢』の語を以て、之を道破せんとするを見ては、我等は心理

的及び歴史的に、聊か其の妄を辯ぜざるを得ない。

六

少しく注意深き人は、此の頃流行する各種の會議に列る毎に、恐くは一種の類似の印象を絶へず受くることに氣が付くであらう。今や各種の會合は殆ど例外無く、所謂座長指名を其の役員選定の手段となさんとするが、諸君は此の事實を如何なる意味に解釋せらるゝ乎。堂々たる帝國議會の作動、卽ち民意を代表すべき最高機關の運用に於てさへ、漸次に勢力を加ふるものが、其の議長の指名權であるの事實を諸君は如何なる意味に受取らるゝ乎。且つ其の指名權の流行が、何等の法文に基かざる、純然たる一個の慣例として成立するの事實を觀て、諸君は特別の興味を感ぜざる乎。世の所謂絶對性の民本主義の進歩を認めんとする先生方は、此の目前の事實を觀て、果して其の信仰の動搖を感ぜずに居られるであらう乎。神經系統の分化的發達が、其の中樞機關の統化的發達を伴はずして平衡を保つの不可なる事は、生理的、心理的には、何人も之を認めて居る。唯だ其の人間の心理的交互の作用だけが、單に分化的にのみ發達して、而して其の統化的發達を全く缺如するは果して有り得るの事實であらう乎。知識の進歩は、他の一切の進歩と合奏して、人間の個性的音韻を益々高むるが、其の個性の特徴を單に個性的にのみ認めて、社會的効果の圓滿を期するの方法が無い。個性の利害と公衆の利害とを嚴正に一致するものであらば、所謂民本主義の絶對的優越は、或は事實となる。然るに部分と全體とに、各々特別の問題を認むると爲すときは、社會の進歩が民本主義の發達と共に、其の民本主義を制裁すべき他の全く異れる主義を要求するに至るは必然の勢である。

人民の要求は槪して部分的である。而して其の從屬する一社會の全問題は、槪ね人民の眼界を逸して居る。商人、農家、工業家、其の提出するものは、槪ね其の直接の事件である。少くとも是等の人は、各其の本業に對すると同一の熱心と、見識と、必要とを、必ずしも公共の問題に對して有するもので無い。今日の社會

は、競爭的進歩の時代に置かれて居るが爲に、其の人々個々は、其の時間の大部分と其の精神の最も活潑なる作用とを、各々其の本業の競爭に費さゞるを得ない。所謂民本主義の絶對的優越は、姑く之を假定するも、社會各員が、一國公共の問題に對して費す所は各々其の本業に費した殘りの時間と精神力とに外なら無い。而して社會の進歩は益々其の一切の部面に複雜を加へんとするが故に、其の問題は愈々解釋の困難を增さんとする。自由競爭に疲勞したる精神が、零碎なる時間を以て無造作に解決するを得るが如きものは、今日及び今日以後の公共の問題では無い。社會は益々分化する。社會の構成分子の要求は益々增加する。而して其の構成分子の訓練と統制とは益々其の意義を緊張する。斯くても猶ほ民本主義の絶對的優越性を證するに足ると謂ふを得る乎

七

之を歷史的に考察すれば、所謂民本主義の絶對的優越の傾向を以て發達した國家の實例は今日まで一つも無い。西洋人は或は希臘を以て、此の如き國家の例に數へんとするが、所謂民政の全盛を謳はれて居た當年の希臘は實際に於て、奴隷制度の上に築かれた、分明なる貴族の王國であつた。即ち代議政治が實質上、一個の貴族政治であると云ふよりも、遙に確かなる意味の王國であつた。貴族と平民と、富豪と貧窮との爭鬪軋轢を特色とする羅馬の歷史に於て民本主義の絶對權を看出さんとするの不法は之を避ける。代議政治の本國として、民本主義の模範として、通例、引合に出されるのは英國である。然るに英國は、決して人の想像するが如き民本主義の國では無い。若し英國が民本主義の本家にして併せて軍國主義の本元であると云ふの意味ならばイザ知らず、英國の歷史と制度とを研究して、所謂民本主義の絶對優越性を認めんとする者あらば、其の人の徒勞は、豫め之を戒むるの必要がある。大英國民の歷史は、兩頭の蛇の歷史である。內に於ける自由主義と、外に對する侵略主義との並行線の延長は、大英國民の歷史である。一六〇〇年より維那會議

に至る約二百年は、英國人が內に於ては政治上及び宗教上の自由の爲に、其の傳統的帝王神權に對して熾に戰うて居た期間であると共に、外に對しては、一步一步着々として、其の海賊的帝國の建立の爲に、巧妙なる英人の壓制を傳播するに努めて居た時代である。所謂英國の紳士、英國の文學、英國の自由、是等英人の誇りが悉く其の海賊的帝國主義と終始し表裏して成長したものであるを認むるときに、所謂民本主義の絕對的優越の謳謌者は、如何なる感慨を催すであらう。英國を以て自由主義の國土と爲すは、制限した意味に於て固より確かである。而も之を以て軍國主義の社會と爲すは、更に一層の確かである。英國の憲法主義と其の海軍的帝國主義との並行を認めざる者は、他の如何なる物知りであるにせよ、決して歷史の隱れたる意味を識る者でない。

英國の自由が對外壓制の進步に比例して居るが如く、其の外觀甚だ民政の民政なるが如くして、而も內實一種の帝國主義を藏するものは、米國の所謂民政である。米國の歷史は、一面より觀れば、征服の歷史、膨脹の歷史である。而して其の征服と膨脹とに比例して其の民政の意義を緊張した歷史である。此の意味に於て米國の歷史は帝國主義の記錄である。其の植民地時代に於て、既に屢次歐洲政治の帝國的波瀾に翻弄されたる事實は、固より措いて問はざるも、其の建國偉業の成就と共に米國に成立した運動は、其の西部に向つて猛進する征服の運動であつた。北米に於ける西班牙征服の米國の歷史を知らざる人も、其の布哇の征服と比律賓の征服とは、日本に交涉ある一種の物語として、今尙ほ之を記するであらう。若し米國にして建國當時の十三洲の外に、發展の機會が無かつたならば、所謂米國民政は、今日よりも大いに不自由なる、一種の貴族的色彩を帶びたであらう。言ひ換へれば、米國民政の大半は、全く其の征服主義の結果である。

八

我等は既に現代の國家が、內に於ける自由主義の展開と、外に對する壓制主義の延長との一種の並行を許

容する事實の概略を一言した。若し事實にして無制限に進行するを得るものならば、世界に問題は無く。人間に煩悶は無い。而して社會は其の本質は於て不可分の一體である。其の組織の全體は有機的關係に於てのみ保たれて居る。部分と全體との平衡は之を必要とすべく、末梢と中樞との統一は絶對に不可避である。內國的自由主義は、對外的壓制主義に影響を生ずるが如く、對外的壓制主義は必ず內國的自由主義に波動を與へざるを得ない。大英國民が世界に率先して、其の海賊的帝國を建立した時代に在りては、其の壓制主義の代價は意外の廉價であつた。今や一切の國家は、悉く大英帝國と同樣の兩頭の蛇の存在である。蛇の邪念は、今や總ての文明國を貫通する、活潑なる精神である。物あらば掠めんとする、隙あらば乘ぜんとする橫着なる精神は、平和と人道と親善とを斷へず紙上的口頭的に大呼する所謂文明人の敗德的倫理である。世界は既に荒らされて居る。遺利は既に拾はれて居る。今や大いに掠めんとする者は、既に大いに掠めた者を脅かして

其の上は前を刎ねるの外に方法か無い。外面如菩薩內心如夜叉は古の怪物であつた。自由と壓制との兩頭の蛇は、最高文明の今の表象である。自由は益々要求される。自由の遠心的效果だけか、猶ほ進步の階程であるが如く要求される。而して之と共に壓制の威力は益々其の代價を高めんとする。而して其の壓制の代價は、彼の一知半解の政治的哲學者等の高く崇めて其の前に跪かんとする所謂民政の自由の束縛である。

所謂文明の發達は溫帶に於てのみ可能であるが、其の文明の生活に缺くべからざる原料は、熱帶の產物である。玆に熱帶と溫帶との衝突があり、若くは文明と文明の原料との撞着がある。不幸にして現代文明の理想は、寂滅爲樂の涅槃で無くて、多々益々辨ぜんとする物質的欲望の滿足である。而して其の物質に制限はあるも、其の欲望は無限である。斯くして文明の競爭は、自然に其の物質を得んとする手段の競爭と爲らざるを得ない。手段の競爭は益々其猛烈の度を加へて、血を見されば、骨を見されば、骨を碎いて髓を見されば已

まざらんとする。人間欲望の増加は文明の結果であるも、其の物質を得んとするの手段は、或は野蠻の極致を求んとする。少くとも歐洲文明の一面の弱點は、全のく此野蠻の極致の傾向である。

九

横文字の一部を見て全體の世界を見ざる、年弱き先生方が横文字流の傳統主義及び人道主義を其儘に呼號して、人間進歩の眞相に觸着したと考へて居るは、其の心理の單純性の暴露に成功した證據である。西洋人の自由は壓制に養はれた自由であり、白人の人道は獸道に支へられた人道である。而して其の壓制と獸道とは所謂不言實行、冥々の裡に大路歩を實現するに拘らず、其の自由と人道とは紙上的、口頭的、多辯的、饒舌的に、世界に傳播される。世界の眞相が文字に表はれて居るが如く、間違つて敎へられた人間が、其の饒舌多辯の白人の自由、人道、平和、親善を眞受けにして、甘んじて其の隨從者たらんとするに不思議は無い。內國的自由主義の進歩が、進歩の唯一の方向であるが如く多辯される間に於て、對外的壓制主義は、沈默無言、一種の忍術に依つて、其の飽く無きの慾に飽きつゝあるが、無言は横文字に表はれず、沈默は沈默として葬られる。事物の眞相を看取するの眼識無き、淺薄なる論客が、僞りを以て書かれた世界歴史の文字の表面に囚はれて、所謂民本主義の絕對的優越性を認めんとするは、極めて陷り易き謬見である。

日本は聯合國の一員として、獨逸征討軍の輜重の一部を命令されて居る。我等は支那に對する義務の一切を完全に了ぜんとする。其の義務の完了を以て我等の誇りと爲さんとする。然も其の對外的壓制主義の强行の事實に於て、其の支那と敵邦との全く無差別なる、彰著なる歴史的事實に對して盲目であるを得ない。我等は一個のサムプルとして、埃及占領の事實を擧げる。埃及占領は、高利貸の成功である。埃及王か英佛高利貸の術策に乘ぜられて、遂に外國干涉の端を啓ける事は、歐洲外交の近代的秘策の戰慄すべき實話である。一八七〇年より同八五年までに、英佛の資本は殆

續と埃及に流入した。其の一結果として一八七五年に、デスレイリは蘇西運河の支配權を英國に收むるに成功した。爾來十五年にして、埃及王の浪費的內帑の爲に、及び國內土木の經費の爲に、埃及に注がれた外債は九億圓の巨額を計上した。而して其の埃及土木の請負人たる歐洲企業家は、埃及王に對して八割乃至四割の暴益を貪つて居たが、其の對資本の利子は二割五分の高步であつた。埃及國の外債は其の外債の爲に益々增加せざるを得ない。而して其の外債に於て埃及王の手取りは益々減少せざるを得ない。一八七三年に借入れの外債三億二千萬、其の國庫に到達した現實は僅に二億圓に過ぎ無かつた。英佛資本の總額九億圓は、數年を出ですして、埃及に注入した。其の利息は高步である。其の高步の利息の支拂の爲に、課稅は益々苛酷とならざるを得ない。苛歛と誅求とは國內の不平を醞釀する。基督教徒に對する回々教徒の傳統的の憎惡心は再燃する。斯くして外債利子の支拂は自然に其の困難に逢着した。延いては外債其物の不安を誘導した。既にして英佛官憲は埃及國の內政に干涉した。而して遂に其の取つて置きの奧の手が遠慮無く伸ばさるべき機會が到來した。『あの手でお釋迦の團子揑ねた！。』今や眞赤になつて獨逸的軍國主義の征服の爲に、平和、人道、正義、博愛の大旆を空ら高々に翻へして居る英國は、一八八二年の埃及內亂に乘じて、其の事實上の英國占領に成功した。而して歐洲一流の金貨外交、投資的帝國主義の奇怪なる元祖としての榮譽を酬いられた。埃及の實例はモロコの實例である。埃及モロコの經驗は彼斯、土耳古、南阿、中米、墨耳古及び支那の經驗である。過去四十年の短き期間に於て、約一億の人民は、歐洲列强の臣從たるを强制された。而して約一千萬方哩の廣大なる地域は、英佛獨三大强の版圖に編入された。之を對外的に觀察すれば、歐洲列强は悉く、壓制主義の權化である。

十

今日の國際關係は、一面に於て惡魔の關係である。少くとも僞善の關係である。最も少くとも壓力の關係

である。爭闘不滅の事情にして成立する以上は、壓力保存は、國家存立の根本原理とならざるを得ない。爭闘不滅の壓力保存、對外關係にして此の原理と絶縁するを得ずとすれば、此の原理を無視した國家の運命は知れ切つて居る。現前露國の過激派政府が如何なる精成的政策を藏して居るかは、我等の深く知らざる主題であるが、若し一切の對外壓力の關係を謝絶して、世界の片隅たる境界未定の露國だけを一個の天地として、獨り太平の春に醉はんとするものならば、其の空想は終に不愉快なる一場の夢に破れざるを得ない。他の事情が同一であらば、對外關係は、純然たる軍國の關係である。軍國的實力を有せずして、平和を說き人道を語る者は、兩頭の蛇の一頭を失うたものに相當する。其の致命傷の遠からざるは問はずして明かである。若し露國の過激派政府にして、其の發表した主張を飽くまで實現せんと欲するならば、畢竟、其の對外關係を擧げて、之を他の請負者に一任するの外は無からうと思ふ。若し獨逸が其の請負者の任に膺るとするか。獨逸は其の請負に對して如何なる代價を求むるであらう乎。露國はロマノフ王朝に拂うたよりも、遙に大いなる代價を拂はずして、其の請負者の獨逸の滿足を期するを得るであらう乎。若し迷へる露國の過激派が、其の夢想の政治的組織より、壓力的關係を全く排除するに、一先づ成效するとせよ。其の成效の曉に於て、必ず仰がざるを得ざるものは、獨逸の軍國的壓力では無い乎。自國の壓力を否定して、而して他國の壓力を肯定する。これ卽ち露國過激派の論理では無い乎。レーニンは南宋の秦檜である。秦檜の和議は卽ちレーニンの和議である。秦檜、レーニン、此の二人は個人的經歴までが、其の賣國的色彩を一にするは、眞に歴史ので皮肉ある。平和は强者の權利である。自ら强者の地位を占めずして、輕々しく平和を言ふ者は、畢竟、其のを滅亡急ぐだけである。

十一

當然來るべき問題は、戰爭其物と云ふよりも、寧ろ戰爭準備の問題である。戰爭準備は、果して之を制限

するを得るであらう乎。其の形式上の制限は、或は之を假定するも、戰爭準備の精神に動かされる、新なる武器の發明は、之を制限するを得るであらう乎。而てになつて當てにならず、賴むべく賴むべからざる微弱なる國際正義の一念に寄り縋つて、戰爭準備の義務の肩を緩くするを得るであらう乎。所謂『諸國民同盟』、所謂『强制平和同盟』は、戰後の準備として最も嚴肅なる主題である。我等は此等の强制平和的主張に依つて、利する所最も多かるべき英米佛の國民が、此等の主張に熱中するの謂を以て、其の嚴肅の意味の一微分子をも減ぜんとするのでは無い。然も一轉して考察すれば、此の主張も亦終に一種の强者の權利の發動に歸する。國際正義の觀念は、觀念としては、如何にも美麗である。其の抽象的名義は國際の正義であるも、其の正義の實質は、反獨逸の歐洲諸國に北米合衆國を加へただけの所謂文明國の利害を離れざる、一種の世俗的主張に外ならない。我等は、一二年の亞米利加寄留の爲にすつかり亞米利加人に魂を拔かれて來たらしき姉崎博士を、特に此の問題に引合はして御迷惑を忍ばんとするのでは無い。我等は其の假定と空想とを原料に捏ね上げた、論據の貧弱なる『戰後の世界』論に對して、加ふるの値なく、無用の一擊を敢て報ひんとするの物好を避ける。我等は單に亞米利加平和運動の非公式の一代辯人として姉崎博士を紹介するを、寧ろ博士に對する敬意の發表と心得るだけである。博士は頻りに大統領ウィルソンの對獨宣戰の布告を稱贊する。博士が亞米利加横文字に讀まれた准亞米利加公民の一員として、其の稱贊に愛國の誇りを感ずるならば、固より知らず。若し日本人の人種的排斥を國策の一に定めて居る米國大統領の布告を、純日本人として讀むだ上の稱贊であらば、博士の評語は明に焦點を逸して居る。ウィルソン曰く『平和に對する鞏固なる一致は、自由の民より成れる國民が、聯合して之を確立するの外に方法が無い』と。これ明に强者の權利の露骨なる主張では無いか。之を具體的に翻譯すれば、英米佛自由國の聯合を中堅として其の他の國民を其の安價なる

お伴に牽きつれて、獨逸の野心を挫かんと云ふだけの主張である。英國は其の海賊的に成立して發達した所謂大英帝國を固めて居れば、而して其の傳統的大海軍を擁して睨むで居れば、天下は極めて太平である。亞米利加も亦其通り、南北中米に、モンロー主義の繩張りを嚴重にして、旁ら日本を虐げつゝ支那大陸に活躍してさへ居れば、これ亦天下は太平である。佛蘭西共和國も、英米二國と同巧異曲、其の地中海對岸の阿弗利加と其の傳統的避姙法とだにあれば、これ亦其の太平春の支度は十分である。「眞に自由にして自治の實ある人民」たる、彼等諸國民は、此の如く其の滿足に値するだけの現狀に置かれて居る。彼等の要求は、自然に世界の現狀維持とならざるを得ない。世界の現狀は保障される自國の現狀維持とならざるを得ない。彼等は既に自由に他國に放下すべき巨大なる資本を擁して居る。世界の現狀維持は、自然に彼等をして資本的に發展させる。今や「國族は投資に伴ふ」。資本の往く處は、國族の隨ふ處である。强制平和の同盟は成立しても、國際的高利貸の乘ずべき絕好の機會には決して消滅の心配が無い。弱肉强食、貧富懸隔は、人生の二大原理として、其の假定の平和同盟の爲に、何等の影響をも變動をも蒙むるべき筋合が無い。否、貧弱なる國家は、富强なる國民の資本の惡魔に襲はるべき機會は、或は强制平和の爲に却つて增加の機會を增すかも知れぬ。

天若し我輩をして生を英米佛に享けしめたならば、强者の權利の平穩無事の主張として、所謂强制平和の第一唱和者たるを光榮と爲したであらう。不幸にして現實の我輩は、亞細亞人である。亞細亞人として、非亞細亞人より、特殊部落の待遇を受けて居る人間である。波斯土耳古が其の改革の偉業に失敗して、而して權威を世界に示すを得ざるは、何が爲めである乎。波斯の立憲運動が何が故に其の出發の出鼻を挫かれたる乎。不言實行の對外的壓力を擁して居る、例の正義、人道、平和、博愛、親善の、紙上的、口頭的專賣者の、惡辣なる、醜穢なる、秘密なる運動の結果では無かつた乎。今や亞細亞には、亞細亞に特有なる亞細亞共通の問題

がある。亞細亞は決して亞細亞の現狀維持に滿足すべき平穩無事の時代では無い。亞細亞は少くとも亞細亞の掠奪者を斥攘し了るまでは、强制平和は亞細亞に無用の文字である。亞細亞人にして英米佛中心の平和强制の尻馬に乘る者あらば、其人は何は兎もあれ、一先づ亞細亞の大賊である。戰後の强制平和を夢想せんとする者は、獨逸を盟主とする所謂中歐同盟が、果しておめくと其平和同盟に參加するに至ると看做すのであらう乎。未來の問題は、悉く假定である。若し此場合假定の必要あらば、其安全なる假定は、其の寧ろ參加せざるの假定であらうと思ふ。然らば所謂平和同盟の有効なる手段は、竟に戰鬪手段の準備と爲らざるを得ない。

二

國際問題に關する亞米利加人の主張に對して、割引の方法を知らざる者は、眞に亞米利加を識るもので無い。太西洋を隔てゝ白耳義の獨立を說き、希臘、塞比亞の保障を論ずるは、猶ほ太平洋を中間として朝鮮の獨立を言ふが如く、亞米利加人としては、甚だ容易である。然しながら亞米利加人は其の勢力範圍の屬領保護國に對して、果して其の所謂國際正義の片鱗をだに現實に示して居る乎。比律賓を視よ。ポートリコを視よ、ハイチを視よ、サン・ドミンゴ、巴那馬、及び古倫比亞を視よ。其の米國の態度は、宛然たる獨逸の態度では無い乎。此等の諸國に對する亞米利加文化の優越の主張は、其の儘に Amerika über Alles の主張では無い乎。空想は如何に多く之を重ぬるも、其の結果は遂に唯だ一の空想である。現實を視よ、現實を視よ、此の露國のドサクサ紛れに乘じて巧みに西比利亞鐵道を掠め去らんとする者は、一面に於て、今や正に國際正義の權化としての假化粧に多忙なる現實の米國では無い乎。亞米利加の坊主、學究、古手の政治家諸君の主張を以て無遠慮なるヤンキ精神の發露に對するときは、我等は不幸にも其の間に存する非常の懸隔を認めざるを得ない。米國に於て最も人氣ある週刊雜誌は、數ヶ月前に、亞米利加的特徵の最も鮮かなる、長文の支那米化論を發表した。其の意見は米國的露骨である。「我等は

支那を米化する必要がある、我等は米國的利益を本位として支那の富源を開發する必要がある。我等は掠奪者を支那に送る必要がある。」其の筆者は其の長文の何れにも、支那は必ず支那人の支那であるべきの道理を認めて居ない。海を隔て他國の爲に正義を説くは自由であるが、同じく海を超へて、他國を無責任に劫掠するも、力だにあらば自在である。我等は固より此の如き露骨なる主張を以て、聰明なる米國の輿論の代表と謂ふのでは無い。然も、所謂國際正義が、他の如何なる正義よりも、其の成立の機會の、如何に前途の遼遠なるかは、我等に於て容易に想像される。

一三

我等は既に二個の異れる主張と實行とが、互に雁行して若くは背反して今日まで發達した事實を一言した。現代の國家は悉く兩頭の蛇である。國民的思想の發達が一方に在れば、軍國的壓力の進歩は他の方に在る。國民的思想は、饒舌なる辯を以て進むが故に、其進歩は、殆ど絶對性の如く誤認される虞があるも、軍國的壓力の展開は、大體に於て、不立文字であり、不言實行である。其の實行上の眞の記錄は、多くは罪惡の記錄として愛國的歴史家の爲に誤まれて居る。此の理由に於て、此の兩頭の蛇の近代國家の本性は、自然に淺薄なる學説の分析に上らずに居る。私等は今此の怪物の本性に關して特に微細の論究を進めんとするのでは無い。此の怪物は、此の勝敗未定の世界亂の終局と共に、遂に其の性質を變ずるであらう乎。若くは其の怪物の姿を益々醜惡にして惰性の支配に任ずるであらう乎。問題の性質は固より假定である。然も我等は努めて假定の答案を避けんとする。戰爭の勝敗は、歐洲均勢の如何なる方程式を描出するも、媾和の基本と爲すべきものは、恐くは無併合無賠償の原則であらう。若くは此の原則に類似した他の原則であらう。若し此の原則を認むるとせよ、而して其の原則の上の推論を許すとせよ、此の勝敗未定の後に於て、最も其の戰爭の實際的無意義を感ずる者は、恐くは其の交戰國の人民であらうと思ふ。所謂國民的思想は、勃然として其の勢

力を加へざるを得ない。思想上に於ける國民的思想の勢力は之を承認するも、其の思想は果して、實現の機會を得ないであらう乎。此の世界をして世界的に擴大せしめたものは、主として新なる武器の勢力である。若しも英國の制海權にして、獨逸の潜水艇戰の爲に痲痺的症狀に陷ることが無かつたならば、而して其の西部戰線が飛行機の爲に決勝的大戰の機會を減少することが無かつたならば、此の戰爭は他の多くの歷史的戰爭と、大體に於て、其の効果を同一にする道理である。然しながら、新なる武器の爲に新なる威力を感じた社會は、決して其の新なる武器の威力を無視するを得ない。武器の變化と社會組織の變化との關係を考量する者に取りて最も興味あるものは、此の新なる武器の問題である。世界の國際關係は、此の如く不完全である。國際不和の原因は隨處に存して居る。世界の現狀維持に利益を感ずる國家もあれば、損失を蒙むるの社會もある。國際法の擁護同盟も、國際的紛議の裁判的解決も、國際的議會の組織も、所謂諸國民同盟も、所謂强制平和同盟も世界の現狀維持を必要とする歐米列强の爲には、一々至極の妙案である。然も全世界をして、是等の同盟を承認せしむるは、果して其の能くする所である乎。既に歐米列强に虐げられて居る多くの民族は、其の列强の平和同盟の犧牲として、所謂大の蟲の餌としての小の蟲と看做さるべきであらう乎。人種の偏見を鼻にかけて天下を横行する白人が、世界の諸民族に對して、公平無私の裁決を與へんとするは、其の事既に一種の滑稽である。平和同盟の成立と否とに拘らず、國際不和の原因は、依然として存續する。然らば其の所謂平和同盟は、其の同盟の權力維持の爲に軍備の充實を期せざるを得ない。既に軍備の充實を必要と爲せば、新なる武器の充實も亦其の缺くべからざるの義務とならざるを得ない。若し歐米人にして眞に永久平和を欲するならば、其の理論上の根據は容易に證明される。世界平和の大敵は、歐米人の慾心其物である。若し歐米人にして其の慾心を征服して寂滅爲樂の涅槃敎を奉じたならば、世界は立ろに永久平和の

赫灼たる後光を仰ぐであらう。然しながら此の理論上の容易は實際上の至難である。近代歐洲文明の理想は、意志の征服で無くて慾望の滿足である。其の文明の進歩は、其の慾望の滿足の進歩である。而して其の慾望は、益々遠心的に進行して、個人の自由と民意の參照とを益々要求する。戰爭の無意義は、無併合無賠償の成立の爲に、若くは其の併合賠償を以て相殺するを得ざるが如き巨大なる損害の爲に、最も鮮明に立證される。而して新なる武器は、新なる威力を以て、其の充實の必要を逼まらんとする。世界は半ば有用にして半ば無用なる新なる武器の充實の爲に新なる負擔を忍ばざるを得ない。これ即ち歐洲文明の破綻では無い乎。世界の依然たる煩悶では無い乎。世界が其の世界亂の苦き經驗より學ばんとする教訓は、依然たる煩悶の加重である。

人本主義の實行

文學博士　姉崎正治

我れは新しき天と新しき地とを見たり。蓋し舊の天と舊の地とは過ぎ去りて、元の海も既に在らず。
玉座に坐するもの、曰ひけるは、看よ、我れ萬事を新にす。……
事既に成れり、我は始なり終なり、我れ渇する人をして生命の水の源より、價なく飲む事を得しめん。

使徒ヨハネが見た此の夢想の示現が、いつ事實に現はれるかと疑ふ者は、近く汝の周圍を見よ。修羅鬪爭の大戰が世界を振盪しつゝある間に、人間社會が混沌顚覆の大地震を經つゝある今日、新天地の新なる泉は既に人の心に湧き出しつゝある。その泉が迸る新鮮の水音が耳に達しないのは、舊天地の糟粕に頭を蔽ひ耳

を塞いで居る爲に外ならぬ。貪慾競爭の舊世界は、大戰亂の爆發に粉碎せられ、人間本性の自由に發展すべき新天地が、今や開けつゝある。塹壕にあつて敵軍と對峙する兵士、國力を提げて軍國の政を司る政治家、學園に人生の意義を尋ぬる學徒、苟も大戰亂から脫け出た後の世界に對して、眞面目に人間らしい考慮を費す者は、皆何れも此の新天地を望みつゝある。之を望み得ない者は、鐵と金と棉とゴムとを外にして人生の價値を計り得ない者、領土と兵備との外には、國家の運命を託すべき本據を見得ない者のみ。

十九世紀の人類は、『生存競爭』といふ惡夢を繰返して、其の生活を總て此の惡夢から割り出し、共同の行はれる事にも衝突を見、調和のある處にも競爭をした。其の結果、人間の本能で物を獲やうと云ふ方面のみを發達して、他方人性の本能を醇化し、人間の本性を圓滿に發揮する事に依つて人生を充實する事を忘れ去つた。今や、大戰は人類に對して覺醒を促し、人類が其の本然の性に還らん事を要求しつゝある。大戰の發端はバルカン問題に爆發し、ベルジク中立問題で火の手を擴げ、其の背景には經濟的帝國主義の競爭もある。然るに、三年の經過は、種々に新方面を開展し、新爭點を生じ、結着は、威壓主義と自由主義との爭として、人生の最も奧深い問題に逢着するに至つた。其の最後の解釋が、政治や經濟上の問題だけに止まらず、人間の生活其物に關する根本解決を要求するのは必然の勢である。而して、其の根本解決は、人本主義の實行、卽ち人間が自らの本性を自覺し、本能の醇化を以て個人と家族と國家と人道とを一貫するにある。是れ我輩が、これから說明せんとする要點である。

* * * * *

昨年、ストライキが諸方に續出した頃、勞働問題に關する談話を交換した事があつた。其の時、某大工場主は、自分の工場では、職工を悉く家の子として愛撫して居るから、勞働問題などは問題にならぬと大きな口をきいた。然るに其後二ヶ月を經ない中に、利益金分配の問題から其の工場に大騷動が持ち上り、一家の

子」たる數千の職工が、重役をぶち殺せと騷ぎ、警官が拔劍するといふ騷ぎを演じた。此の深刻な皮肉は、正しく現在の經濟組織に於ける根本の病を曝露したといふべきである。

凡そ勞働者を愛撫保護するにしても、其を家の子だなどいふ觀念で扱ふのが、人間の人格を無視したもの、我輩の所謂る人本主義と根底から衝突した考へである。勞働者を單に器械手足と見做し、其の血を絞り得る限りは絞つて、後は捨てゝ顧みないといふやり方よりも、家の子として愛育するといふ考だけでもある方が勝るは勿論の次第である。然しながら、勞働者も、資本主と共に經濟組織の要素である。其間に主從輕重の觀念を挿むのが既に誤であり、經濟上分配の不當が生じ、資本主が自らに厚く、勞働者に薄くするといふ不正は、此の如き主從觀念と資本主の私利心と結びついた現象である。但し二者の關係を單に經濟的分配の問題とし、又法律上の權利問題として扱ふのは、社會的正義の上からは至當又必要の事であつても、其のみでは人生の事實としての資本勞働關係を盡したものでない。例へば、單に經濟的見地から見て、分配を勞働者に十分豐にし、其で勞働の能率を增す如きは、功利的には有効の事であつても、其では勞働者を單に生產の器具とする見地を脫せず、勞働者を方便としてのみ見る事になる。我々の人本主義が要求する所は、一步を進めて、勞働者の人格を認め、人間として、我々と共に社會を組織する一人格者として之を尊重するにある。人間を人間として扱へ、此が人本主義の第一主張である。然るに此のわかりきつた自明の理を考へない者が多いのが、今日の通弊である。

勞働者をも資本主と同樣、人間として之を認めよ。此の見地が一度確立して實行に就けば、分配問題や能率問題は、其結果として直に正當且つ充實した解釋を得る。『初雪や、あれも人の子、樽ひろひ』。而して人の子として人情の關係、愛情のゆかしさを十分に認めると共に、又人間として精神を有し、心靈生活に進み得る者、卽ち未發不測の源泉を抱く心靈的生存の

being として其の人格を尊重する。此に於て、勞働の價値に相當する報酬を與へるのみならず、資本主と共に社會結合の要素を成す者として、之が社會的地歩を確ならしめ、其の上にあらゆる方面に於て精神的價値を發揮し得る樣に、娯樂、教育、信仰等の生活に對して十分の自由と餘裕あらしめ、此に依て自己の才能を發揮し、人格を鍛錬する機會を與へ、設備を整へる。此が卽ち勞働者の人格を認める所であつて、資本主から云はゞ、經濟的分配の正義を果すのみならず、共に社會生活を營む與樂に對する人情と義理とを盡す事になる。此の如きは、卽ち個人として資本家が勞働者に對する人格の尊重であると共に、社會的結合を、圓滿に鞏固に充實し發達する所以の道である。此の意味に於て、人本主義は、個人の人格を尊重すると共に社會結合 Solidarity の意義を發揚する要求であり、人性の本然に潛在する力量を發揮し、人格の力と社會結合とに依つて本能を醇化する所以の主義である。

一、經濟組織は、人間生活の有形的資料を養ふ爲の社會的活動であり、個人の人格と社會的結合との基に立つ組織である。然るに、所謂る『生存競爭』の惡夢に捕はれた今までの經營見解は、物を得やうといふ慾望の一面のみで人生を解釋した結果、其組織は一方に物資の生產を豐富にしながら、却て人生の內容を貧弱にする結果を呈した。卽ち財の分配に於て人間共存の本義に背き、勞働者に對する態度に於て社會結合の眞意を逸し、人間は經濟組織の爲に却て苦められるに至つた。現に、多くの商業の敎科書には、商業は、財の交換で利益を得る方法だと定義し、人間の生活と社會的結合とに對する商業の使命を無視して居る。此の如くにして物資の豐富は、獲得慾を刺戟し、利得の爲に利得を漁する人生を現出し、飽く事を知らない生活を生じ、此の如き貪慾は分配の不平均を生み、富の力で人間の間に階級の別を峻にし、終に人と人と、階級と階級と、相爭ひ、貪慾と不滿と、良心の麻痺と反抗と相激發する社會を生じた。此の如くにして人生の爲に存する經濟組織は、却て社會の暴君として人生を毀害

するに至つた。是れ畢竟人生の本然を無視した必然の結果である。

此に對する人本主義の要求する所、經濟病に對する治療は、管明至極である。卽ち物資の獲得は、人間生存の本能から出るが、此の本能を醇化するには、此の如くにして生存の資料を得る人間が皆各々人格者たる事を明にし、而して人格の生活を充實して、社會的結合の中に之を醇化するにある。生存本能、獲得慾も、畢竟は精神ある人間生活の理想を實にする階段たる一事さへ、衆に徹透し、其の結果、經濟組織に對する人間の態度を一新すれば、此に生活の充實、卽ち人本主義に基く改革が行はれる。此の改革には、資本と勞働との關係は勿論、資本所有の觀念についても、在來の態度を一新すべく、根本要義は、人間の心靈生活が人生の中心であり、歸趣であつて、經濟組織は其の手段たるに過ぎないといふ根本見解を基礎にし、此の主義で經濟活動を支配し、其組織を案配するにある。此を人道主義と稱してもよろしいが、此の名稱には從來種種の聯想が附け纏ふから之を避ける。人間生活の本能を個人人格と社會結合の二面に於て完成するといふ義から、之を人本主義と稱するのは敢て不當でなからう。

* * * * *

家族についても同樣の見地からして根本態度の革新を要する。卽ち人間の種族保存本能に基き、之を醇化し、衷心の愛情で結合し、資產と傳承との鞏固な環境を基礎として、個人人格の美を發揮する。此が人本主義の家族觀である。此の如き家族には、個人人格の充實した生活と共に、社會の基礎たる實が具はり、又其中に直に博い人道の仁が行はれる。

家族の事は詳論を略して、直に國家に移つて見やう。此が本論文の主要目的であるから。

* * * * *

國家主義者なる者は、國家が人生團結の最高形式だといふ事を爭ふべからざる眞理だとして、總ての立論を此の一前提から牽き出して來る。此の前提から出る決論は、人生のあらゆる方面に及ぶが、國家を目的と

し個人を手段としては、個人の人格を認めない。家族を國家團結の基礎とするはよいが、此も一手段とするから、其極は愛情の結合を輕視する。人道などいふ事は、一の抽象に過ぎないとし、國家は人道に對して何等の責任をも負擔をも有しないと云ふ。其の餘波の及ぶ所、國家の自衛と膨脹とを富國强兵のみに對し、戰爭には何等人道的公義の束縛を受けないとし、其の他内治外交の事、一に所謂る國家至上主義から割り出して、人生畢竟國家の爲の經營に外ならずと斷ずる。從つて帝國主義乃至軍國主義は、國家必然の政策となる。

此の如き國家主義の最も露骨且つ殘忍な一例を擧げやう。戰爭に於けるドイツの威嚇政策 terrorizing policy は、實に組織的に敵國民を强迫し殘害する事を戰鬪員に敎へる。「異敎徒支那人をして、千年の間、ドイツ人の面を仰ぎ見る能はざらしめよ」と敎唆したカイゼルの言は、ドイツ兵をして支那で文明破壞の暴を敢てせしめた。「短兵急に敵を屈せしめ、敵國民に反抗の勇を失はしめる爲に、思ひ切り威嚇せよ」との訓令は、ベルジクの掠奪破壞となつた。而して此の如き殘忍蠻行が人道に背くと非難すれば、『戰爭の前には法律なく、國家に對抗する人道はない』と傲語する。

此の如き國家政策が、一時は戰爭に利あつても、永久に世界の批判の前に破門の宣告を受けるといふ事は、暫く問はずとしても、人本主義の立場から見て、此の如き非道の奬勵煽動が、自國民の品性に及ぼす響影は、見逃すべからざる恐ろしい事實である。ドイツ人といへども、個人としては人情もある、惻隱の心も動くに違ひない。彼等がデナンで行つた如き虐殺、ルヴン市を破壞した如き暴擧を、個人として行へといつても、恐らく容易には行はないであらう。然るに、國家の名に於ては、此の如き事を奬勵する以上、彼等の精神が自然に殘忍性を帶びるのは、人性の自然として避け得べき事でない。現に平生から、此の如き煽動的訓練を國民と軍隊とに施した結果、五月一日の社會黨戮殺や、サーベルン事件の如き殘酷を生じたではないか。近くは、日本でも此の如き戰時訓練からして小學

校生徒の双傷事件を、一昨年には續出し、豚のためし切を奬勵する學校で下級生徒の凌辱が頻出して居る)。職業とはいへ屠殺者には殘忍の風があり、殺人犯者の幼時を調べると、蟬取りから初まる動物虐待者が多い。人間の天性として、一方に殘忍なれば、其の習ひは他方面にも及ぶが常である以上、假令ひ國家の名でしても、敵に對する殘忍を奬勵すれば、其の性が國內でも又平時にも現はれるのは必然の結果。然らば、今度の戰爭が濟むだ後、三四年間威嚇政策の訓練を實行して、放火、戮殺等をして來た數百萬が平時生活に復する場合、ドイツの社會的氣風が如何なる方面に走るか、豫測するに難くはない。戰國時代、文祿遠征の後を受けた德川初朝の殺伐な氣風にも增したものが、ドイツ國內の難問を生ずるは、鏡に懸けて睹る如くである。

此と同樣に、外交に陰謀詭策を弄する國は、同樣の非道を國內にも行ふ國である。マキヤヴェリの陰謀主義は、獨り外交に留まらず、內治の上にも同樣の策を敎へ、而して當時のイタリア諸侯國は、實に內外共に陰謀政策を縱橫に振つて居たのである。十八世紀から十九世紀にかけての外交陰謀も同樣、メッテルニヒにしてもタレーランにしても、外交だけでなく、國內にも同じ詭策を弄した貴族閥族政治の代表でなかつたか。即ち外交上の陰謀政策は、半は國內に於ける同黨異伐や下民虐待の反映であり、內治上の威壓政策は、又外交上の詐術に依つて一層を加へる事は、東西の歷史が十分に之を物語つて居る。

現にドイツの現狀に見ても、外交に關する陰謀組織や密偵政策は、實はドイツ人の心理に具はつた惡徒の發表であつて、軍閥が皇太子を擁し、宰相を出しぬいて戰端を開き、ファルケンハインが放蕩士官のなれの果から俄に立身してモルトケに取つて代はり、中央黨が外は法王廷に結び、內は自利を擴張するなど、內外の政策互に相反映して居る面白い標本である。（日本の政黨や、其他の國にも同樣の實例は澤山あらう）。此處にも人心の消息は十分に現はれ、人本主義が人性を基

本とする主張は、反面からの舉證を得て居る譯である。人間の心は、内と外とに分割して使ひ別けをし得るものでない以上、一方の陰謀好みが、直に他の方にも應用されるは必然である。

經濟的帝國主義の發現にも、同樣の消息は明に見える。羅馬帝國の外國征服は富の集中を來し、外に向つての膨脹は、内にあつての貴族の暴富となり、分配の不平均となつて、獨り經濟上の弱點を生じたのみでなく、道德の廢頽を來して、帝國滅亡の一因になつたといふでないか。現在日本でも、不當利得も、外國から絞り取る場合には、國家の名で之を是認し獎勵するといふ風が行はれ、滿洲の如きは此の如き漁利者の横行が甚しいではないか。彼地に於ける靑錢集め、モルヒネ販賣、南洋に於ける娼婦政策、或は又偏に暴利の爲にする中立國（其れを通して敵國へも）への船舶賣渡し、此等一時の暴利は、國の富を增す所以だから、認容すべしといふ如き考は、可なり弘く行はれて居る。外國人が此等の不當商賣を非難すれば、彼等の嫉妬だとして、自ら反省し、自ら耻づる事を知らないなど、何となさけない根性の表白でないか。其は兎に角、經濟的の對外策に於て、信義を重んぜず、品格面目を無視して、偏に利益の發展を圖れば、一時外から利を得ても、必ずや其の心が内國人民の氣風に影響して、國内でも同樣の商策が行はれるは避くべからざる勢である。其の結果、國内で富の分配に益す不義の不平均を來して、社會瓦解の因をなし、且つ氣風の廢頽を來す事は、現前我々の目睹しつゝある所。此も要するに、國家の利益といふ名目の下に、人間の本性を蹂躪する爲であり、人間本能の獲得慾を組織的に濫用する結果である。

* * * * *

人類歷史あつて以來、人間の罪惡は數多いが、國家の名に於て行はれた罪惡は、其の害惡の及ぶ所弘く且つ深い。個人の罪惡は、其の人の人格が爲に墮落するに止まるが、國としての罪惡は、國民一般の人格德性を腐敗せしめ、國内の社會的不義を增進し、終には内

部からの瓦解を惹き起す。而して此等の害惡は、國家が國としての富や力を失ふ爲に起るよりは、却て富强で外面は隆盛に見える場合に生ずる現象であるから、其に對する警戒と治療は一層困難である。富强亡國とは此の事であつて、國民が富强に氣傲り意昂る間に、人の品性が段々に墮落し、階級の爭ひ、閥族の専横、曲學の謳歌等が相率ゐて廢頽氣風を養ふ。

世に人本主義の眞理が國家の運命に對して與へる警告があり、國家の政策が内外共に、人情に基き、人性の醇化、人間心靈の理想的向上を目的とすべき所以がある。之を反面から云はゞ、國家至上主義が一面個人を蔑視し、一面人道を無視するから生ずる危險は、即ち人本主義の行はれざる爲である。國家は、個人の性情を社會的結合の力で陶冶する爲めの團結であり、而して、此の如き人性の醇化人生の充實を以て人道の進歩に貢献するを天職とすべきである。國家は人生最上の形式だといふ前提が虚僞であるのは、人生其ものの内容を尋ねて見れば、分明になる事である。

一體、偏見の國家主義者は、人道といへば空漠な世界主義に外ならぬとし、人道主義が行はれば國家は亡びると考へる。此は、人間の弱點として、極めて手近にある者を却て見逃す弊の一現象であつて、人道は、家や國を離れて遠く世界に求めずとも、直に家の中にも、國の内にも行はれる。孔子が、仁遠からんやといひ、キリストが天國近く汝等の間にありと云つたと同じく、人道は、直ぐ脚下に、即ち人々自らの人格と、日々の社會生活の中に行はれて居るのである。一工場の中で、資本主と勞働者とが、互に人格を尊重して、事業を進める間にも人道は行はれ、家にあつて夫婦相和する間にも、學校にあつて教師が生徒の人物を育て上げる間にも、又國の内で、人情に基いた政治を行ふ間にも、皆人道は行はれて居るのである。何となれば、人道とは、畢竟人本主義の實行であり、人間の本能生活の中から人間結合の力を發揮し、人間の性情に順應して理想向上の生活を遂げるにある。

此の如き人道は日々の生活に行はれて居、又一層充

實して行はるべきを思はないで、直に飛んで世界人類全體に結びつく生活を主張するのが、所謂る世界主義の誤であり、又國家の名に於て人性の本然を無視する爲に、國家主義者は、國家と人道と衝突するといふ誤認に陷る。人本主義は、人生の最小單位なる個人の人格に基き、其の最大擴充たる人道（獨り現在の人類のみならず、歴史に溯り、將來の爲に圖る意味での人類結合の實）を歸趨とし、其の中間にある家族、國家其他の結合にも、各々、人性陶冶の道たる實あるを明にし、此の如くにして人生の内容を自然に且つ圓滿に充實するにある。

* * * * *

此に於て少しく本能の醇化といふ事を說明して、人本主義が見る人生の意義を明にする要がある。

人間は何よりも先に生存を維持せうとし、生存維持の本能、即ち食慾と色慾とに動き、其の爲には進擊もすれば防禦に勇氣を示す。此等の本能活動は生存の根底であるが然し又單に生存するだけの爲め初等（必しも劣等と云はず）從つて根本的の作用に外ならぬ。今の『生存競爭』論者でも、まさか人間の生存を食色二慾の滿足のみに限らうとはしまいが、國家に關しては往往此種の自衞論が行はれる。物資を得る（個人での食慾）、人口を增す（個人での色慾）、而して進擊及防禦の武備を具へる、此等が根本で elemental であるといふ事には、何人も異議はない。然るに根本的といふ事を、其れのみで足りる、其が終局目的だと誤る處からして種々の危險な國家的施設をも生ずる。人間の生活は、生存する以上、生存を擴張し充實すべしといふ事に對しては何人も異議はなからう。但し、此の擴張充實の實質如何となると、外延的に膨脹すると、內容的に鍛錬すると、二つに大きな距離を生ずる場合が多い。一一の說明を避けて、我輩の人本主義の主張を述べやう。

個人でも國家でも、生存の外延的擴張、即ち富なり領土なりを得る事は、生存の活氣を維持するに缺くべからざる事で、此點に於ては『生存競爭』の膨脹論に反對はしないが、第一は外延擴張の程度と、第二は其を手

段と見るや目的とするやに至つては、斷然膨脹論者に反對する。第一の程度問題から云はゞ、外延擴張を過重し、得ても飽く事を知らない場合には、人間が初等の本能の爲に制せられ、生存の爲の本能が却て生存に對する暴君となり、人間は本能の奴隷となる。個人では守錢奴、國家では侵略主義の國、此が本能の奴隷となつたしるしである。此に於て第二の問題も自ら明白で、本能は目的でなく手段に外ならぬ。守錢奴が金の爲に心盲し、生を痛めるのも、侵略主義の國が其の富國強兵の爲に却て內部の腐敗不調を來すのも、皆手段を目的と誤まつた覿面の應報に外ならぬ。而かも、手段を目的と誤る事は、人間の弱點であり、本能の爲に却て生命を害する例は、世の中に充滿して居る。

此に於てか本能を手段とし、生存の意義を充實する爲に本能を醇化し、本能を鍛錬する要を見る。例へば色慾は夫婦關係の基本であるが、夫婦は此の慾の爲のみで生活するものでなく、共に家庭を作り、又子を愛育するといふ愛情の結合に及び、此から推し擴げて、種族團結、人類の同情など、人情的結合を發達する。此の如き愛情の發達、人情の結合が卽ち色慾を醇化し、生殖本能の意義を充實する所以である。其他、生存維持の用に使はれる好奇心は、發達すれば純粹の知識慾として、眞理を探求する哲學科學となり、享樂の心は美術にもなり、人情の結合は、社會團結に發達しては、秩序綱紀の觀念を伴つて、義理結合の團體を生み、國家又は國際聯合にも及ぶ。此等は皆本能の醇化であつて、生存の維持保存から進んで、生存の意義を發揮し、價値を充實し、理想を實現するの道が此にある。本能は基本である、然し其れ自身で終局でなく、生存の意義を充實するのが目的である。

本能の醇化が人生の意義を充實する所以の道だとすれば、其の第一要件として必要なのは、本能の無礙自由なる發展である。但し自由の發展は圓滿發展の豫備條件であつて、圓滿な醇化の爲には、個人の自由、人格の尊重が人生の根本要件となる。人生は、今までにも、本能の醇化に依つて、個人の生活を社會的に結

する上に、種々の團體や道德政治等の綱紀を生じて來たが、人間の精神は無盡藏であり、此から以後、如何なる方面に如何なる種類の本能醇化が起り、如何なる團結を生じ、又如何なる内容の文明を發達するや、前以て豫測し限定すべからざる者がある。特に、道德、政治、文學、宗教、科學等在來人間生活の規矩を與へ、又文明の花實となつて來たものも、出來上つた型のままに之を保存すれば、生氣を消耗し、發展の力を失ふ。此に於てか、人間の文明を時々は本能に還元する必要が生ずる。「天然に還れ」といふ叫びは、卽ち本能への還元を要求する聲であり、本能の新鮮な活躍には、どうしても個人の創造的自由 initiative を必要とする。本能は醇化を要する、然し其の根底には日々に新な活氣を要し、此の活氣は個人の自由を尊重しなければ湧いて來ない。社會生活の形式固成を打破し、文明の爛熟に對して新活力を注入するには、個人の自由活動を待たなければならぬ。天才の新開拓、豫言者の夢想 vision は勿論、一般に個人の活動が自由に自發的に發動するのは、人間進歩の根本要件である。

* * * *

個人の無盡藏、人格の尊嚴は、他の機會に一層詳說せうが、本能の醇化によつて、人生の意義を擴張し充實する爲に、一方は個人の活動を無礙に發達せしめる要があると共に、又本能の天性に備はつて居る社會的結合性 solidarity を擴充するを要する。人間の本能は、個人の心を主人として發動するが、其は孤立的に動かず、人と人との交涉聯絡から發し、社會的結合を舞臺として鍛錬を受ける。個人は發動者 initiator であるが、之を鍛錬し refine するのは結合にある。但し個人が單に社會結合の器具手足だといふのでなく、結合性も亦本能本來の要求であつて、個人人格の發達は、何物か結合の中に鍛ひ上げるべしといふにある。先に述べた如く、生存維持の物資を獲得する本能からは經濟組織が生じ、其の組織の中で獲得慾は内容の充實と鍛錬とを受ける。生殖慾は、夫婦を作り、夫婦親子の家族的結合の中に、人情の美は養はれ磨き上げられる。其他、

國家の團結、學術文藝等の團體、主義理想信仰の聯合團結、皆本能醇化の產物として、個人から發して團結の中に個人を鍛錬し敎化する。此に於て、人生の鍛錬、即ち云はゞ敎育的意義から見て、人本主義の第二の根本主義は、社會的結合といふ事になる。

人生の鍛錬が家庭、國家、其他社會團結の意義だと容すからは、此等團結の統制作用には、常に敎育敎化の意義を有すべきである。此の意味から見れば、國家も亦人道の一表現であつて、政治は人本主義の實行たるべきである。民本主義といふのも亦人本主義の一面ではあるが、全體ではない。何となれば、民本又は民主主義は、人民の主張要求に基く政治といふ意味であるから、人民の主張要求のみを標準にして、結局は多數政治といふ機械的觀念に終らざるを得ない。人本主義は、個人の人格を尊重するから、人民の要求を無視するには勿論反對するが、又一方に社會的結合の敎化的作用を重んずる。即ち此に依て人間の本能を醇化する爲には、國家其他團體(特に敎會並に國際聯合)の敎導作用を高調する。其の敎導作用には、時々に現はれる個人的指導者を要するは勿論の次第であるが、國家等諸の團結が體現する綱紀秩序、乃至主義理想が、人間本能を醇化する力であり、人間本能の社會的に發表したものと見る。即ち團結其れ自らに、人生を鍛錬し、人心を敎導する力を具へるべき事を主張し、此の意義を個人の意識に喚起し、明確に之を印象する要を認める。

一例で云はゞ、選擧權の如き、一面には人民の主張要求を發表せしめる方法であると共に、又人民をして國事に關する思慮を發し、討議研究に進ましめる所以の刺激誘導、即ち國家の敎化作用である。此の見地からして、又人間人格の尊重を國政の上にも實行する爲に、人本主義は、人間全體の選擧權 human suffrage を要求し、(勿論敎育の普及を條件として)、階級的差別選擧權を非とする。何となれば、差別的選擧權は、何かの資格を人工的に定め、其の資格に於て出來上つた人間にのみ國政參與の權を與へるのであるから、選擧

權を以て要求主張の方法とする偏面的國家觀から出發して居る。之に反して、所謂る資格に於て完成しない者でも、既に一人格として社會に立つ者は、之を教導する目的を以て國政に對する考慮を促進し、國民としての資格を鍛錬する目的、即ち教育的意義を以て選擧權を與へる。實行はいつでも思想の鍛錬であり、實驗は教育の要機である。此が人本主義の見地である。人民の人格を尊重する、此が法律の本義であり國家の本務である以上、其の人格者に對して人工的の差別待遇を與へるのは、國政の人本的本義に背く事になる。個人全體の協同といふ人道は、國家を超えないで、國政の上に直に之を實行し得る。

又例へば、國民の義務教育といふ事は、其の反面に國家が教育の機會を平等に與へるといふ事を含む。此に於て教育の設備は主義として自由(即ち無料)、たるべく、且つ又個人の自發を誘致する爲に、一定の型のみに限らないで、諸般の方法や設備を整へるべきである。其の根本に於ては、生徒の人格を尊重し、其の能を發揮せしめるのが、教育の本義である以上、教員に對しても同様に自由自發の餘裕を與へるべきである。日本の教育の如きは、教員を以て訓令を傳達し知識技能を傳授する器械と心得る弊が最も多く、人本主義は此の如き教育に反對する。大學教育が專門技術の傳授に止まり、其他の學校も『有用の材』を作るのみになり、其の結果、其等の教育を受けた者の組織する社會活動が、組織は具つても、活力を缺き、萬事が形式的になるのも、人本主義の眞理に背く應報に外ならぬ。(所謂る法科萬能主義の如きも其の一である)。此の如くにして獨創の研究を奬勵せうと云ふのは、木に攀ぢて魚を求めるに異ならぬ。根本に據て人格の自由を輕んじ、制度規則の爲に人間を犧牲にし、其で人物を養成するなど唱へるのは、矛盾の甚しいものである。

先に述べた如く、人道の實行は、直に國內の政治、其他萬般の施設でなし得る事で、其の根本は、人本主義の實行にある。此の實行は、一方人格の尊重と共に、社會結合性の能力を發揮するにあり、衞生、稅制、刑

事政策、經濟組織、靑年團など、あらゆる方面に應用すべき事であるが、其等は之を略して、國家の世界に處する道に關して、人本主義の主張を明にして、此一文の結論とせう。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

現在の大戰は、國家を本位にして獲得本能を極端におしつめた結果破裂した。國家が其の組織と力量とを擧げて、野獸的本能を發揮するのが戰爭であり、戰爭に從事する人民は、從つて又獸性本能に還る。但し其の間に、義勇身を祖國に捧げるといふ美德も勿論現はれ、戰場に生死を共にするに從つて人情の結合も、其の間に鞏固になる。此の文で先に述べ、又本誌十一月號で論述した通り、戰爭の進行と共に、爭點は、ドイツの威壓政策に對する聯合國の自由主張と發展し、從つて此の爭點が戰後の世界に大問題となるのは、最も重要の點であるが、其と共に見逃すべからざる一事は、本能還元の戰爭生活から轉じて、平和の建設に入る場合の人心にある。人心の此の變は將來の世界を支配すべき根本勢力である。

戰爭は、其の目的の如何に關せず、其の設備組織の如何を問はず、現前直接には破壞の競爭、人間本能の野獸的還元である。然るに人間は、今までに蓄へて來た鍛錬修養に加へて、又自由創造の要求に活き、此の二者は合して人生の建設的活動を生まなければ已まない。一方には野獸的破壞、他方には創造的建設、此の二面は互に反撥し、破壞作用を思ひきり發揮する間にも、必ずや他方建設の要求が強く動く。此二面の反撥又相互影響は、小供がおもちやを壞はしては又新に之を組み立てようとする事にも現はれ、人類の歷史では、戰亂の後には一層强い建設の時代が來る事實となつて居る。此が出來なければ、其の國民は滅亡してしまふ。

今度の戰爭は、舞臺はヨーロッパであつても、其の延長も內容も世界的であるから、此の戰後の世界に、人間本能の鍛錬、人生の充實たる建設が出來ずは、人類文明の滅亡である。然し、人類の生命はまだ衰亡しないしるしには、戰爭中にも各國共建設的事業を計畫

し、社會指導者の意氣は、社會的再建 social reconstruction に其礎を据ゑつゝある。

「社會的再建」是れ今後世界各國の重要事業である。然るに比較的安全の位置に居るを幸にして、一時の繁榮に眼眩して、人生社會の再建に奮勵しない國民があらば、其國民は世界の落伍者となる外ない。(先に公にした我輩の論文で、日本が世界の落伍者とならない樣にと警告したが、其の論旨を以て單に外交政策の事と見た批評家は、我輩が論旨の人本的根據を見ない人である。)何となれば、一生懸命の破壞事業の後に、一度本能の還元で新生氣を捕へ、生死の間に人生の天眞に觸れ得た諸國民が、社會的再建に進むのであるから、潑溂たる新意氣を以て、本能の醇化に依る人生の充實を圖るに違ひない。言を換へて云はゞ、人生に對する徹透した觀念を嚮導とし、根本的に社會萬般の革新を行ふに違ひない。其の徴候は、特にイギリスに見えて、教育の根本的改革の如きは、既に其の緒に就いて居る。

此の革新に當つて最も有力に現はれるのは、各國共、國內にあつては一般人民の自覺と、外に對しては人類的結合 human solidarity の實行とにあり、此二面は決して相離れない。人本主義が世界の新局面に對して與へる光明は、此二方面の新勢力を解釋するにある。

戰爭の爲に、交戰國民が心を一にし力を協はせ、階級や職業の別を打破した力は、宏大なものである。其の上、大難に際して、人々が當面の困難苦惱から得た精神的覺醒も、亦同じく弘く且つ深いものである。(此は「人文」十二月號に少し說いておいた)。此の如き人心の覺醒は、卽ち人民一般に亘る自覺の喚起として、社會的再建に對する根本勢力であり、其の發表は、從來の如くに單に勞働者の賃銀要求とか、婦人の選擧權要求とかいふ形で現はれる以上に、更に人間として社會全體に對する要求且つ熱情、卽ち社會生活に對する宗敎的信仰として現れやう。(此點別に說かう)。新局面の新建設は、人間精神の奧から湧き出る自然の要求を自由に圓滿に發揮せしめるものたるを要する。卽ち人

生の本然に基いた本能の醇化を完成する爲に、人民は自由を要求し、人格の尊嚴を主張し、個人の無盡藏を發展すべき機會を普く與へる社會組織を案出するに違ひない。此の如き要求に基いて、社會的再建を遂げ得る國民は、命、維、新なる民として、新興國となる。

度々述べた如く、聯合國は三年の間に其の聯合を固くし、其の主動者の間には、各國民の自由と人類の正義とを旗幟とするに至つた。此を單に口實だ空論だと冷笑する者は、此の意氣理想の力を知らない愚蒙に外ならぬ。今までゝも、國際競爭の激甚な間にあつてすら、人類の世界的結合は段々に現はれつゝあつた。當面の問題ですら、一國民だけでは解決し得ず、世界的協同を要する事、結核撲滅、花柳病撲滅、支那の阿片問題、郵便聯合、無線電信等有形の事柄から、科學研究の聯合、人物學者の交換交通、宗教傳道の結合、宗教問題の共同働作等に進みつゝあつた。ヘーグ會議の繼續、平和強制團の事業、國際調和 International Conciliatiou の運動等も、今までに增して勢力を得やう。然し此等よりも一層根本的に深重の意義を呈し且つ實力を具へて來たのは、自由と正義といふ人道的旗じるしを樹てた聯合國の結合である。Humau solidarity は、此に主義理想の内容と共に、具體的の聯合となつて來た。此が戰後に如何の變化を經るにしても、此の意氣と思想との力は、必や大勢力として何等かの形で發展せずには濟まない。人本主義の主張は、必ず世界の大勢力として、人間本能の醇化、人生内容の充實たる社會的結合を、人類全體の事實とせずば已まない。是れ人性本然の要求、人類生活必然の發展であるもの、區々たる偏見や小利害で之を破壞する事は出來ない。

各國民が、弘く世界的眼光を開いて此の如き人類的結合に進むのは、單に外交と稱すべきものではない。此の如き人性本然の要求を發展して、之を世界的に實行するのは、即ち內に迫りつゝある社會的再建の根本と離るべからざる聯絡があるからである。國際に處する國家の態度政策が、國內の政治、社會政策と影響共鳴の聯絡のある事を說いたのは、此處の要契を握つ

の事である。外交だから陰謀は容す、内治には之を容さずといふ様な舊式政治は、到底人心を率ゐるに足りない。國際には道德なく、力のみで、國内にあつては互に道德を守れといふ如き、人情の使ひ分けを强ゆる命令や教訓に從ふ様な人間は段々に亡びつゝある。國家が世界に處する道と、國内の進歩刷新を遂げる道と、此の二つは、個人の私德公德と同じく、表裏相離れない。是れ人性必然の要求、國家といふ團結の使命である。一度、人本主義の眞理を認めたならば、此の二者の一致は、卽ち人生の意義を充實する所以たる事は明かである。

政治は、内治外交共に、人心の統率であり、從つて人生の本能を發揚するを要する。内治に關して、人心の趨向を無視して、閥族專制の舊夢に固着する者は、外交についても亦人類的結合の勢力に順應する道を知らないで、マキアヱリズの舊套を守らう。斯くする間に、世界はどしどし進む、人生は其の理想に向つて堂堂と建設を遂げる。舊夢舊套を繰返す國民は落伍者となる。

* * * * *

人本主義の理想は明確である。人間の本能を醇化して、人類的結合の生活に進めよと教へる。人本主義の主張は簡單である。政治も教育も、内治も外交も、經濟も軍備も、皆人生の爲の事業たるを悟つて、眞面目に人道を行へ。其の内容は卽ち人格の尊嚴を基本とし、人性發揮の道として家族、國家、人類の結合を圓滿に鞏固にせよといふに歸する。

人本主義の實行は遠くに求めるに及ばない。直に我々日常の生活にも實行し得る。電車の中で人々相讓るも、人々が會合して盞を交すのも、夫婦が相親むのも、皆其の實行である。但し其の應用は博く遠く、政治にも經濟にも、國家にも世界にも及ぶ。人本主義は、敢て新主義でなく、日本にあつて、聖德太子の政治も此にあつた。其の憲法に、國政の大本を說いて、其の理想を四生の終歸(卽ち本能の醇化)又萬國の極宗(卽ち人類の精神的結合)たる三寶に置かれたのは(三寶の

事例に解説する)、佛教の理想から來た人本主義であつた。又近くは、徳川三百年の鎖國、固定形式、封建割據の社會を打破して、開國進取の新天地を開いた明治維新も、人本主義の實行であつた。『庶民に至るまで各其志を遂げしめ』るといふ主義は、即ち人格の尊重、本能の醇化でないか。『天地の公道に基き、大に皇基を振起す』る政策は、即ち人類の結合に對する國の位置、世界の公義から來る國家の天職を宣言したものでないか。

然るに何事ぞ、大正の日本人には、維新の五箇條御誓文は、事既に濟んだ、過去の遺物であると斷じて、偏にドイツ風の侵略主義を宣傳する軍人がある。獨り軍人のみならず、政治家輩も、此の宏大な宣言を忘れ去り、國家の自衛を鐵と金とのみに託するではないか。維新の大宣言に基いて、明治の日本は、開國進取、對等條約、立憲政治の三大政策を樹立し、其の實行は端緒に就き、形體は具へ得た。然し其の魂が活躍生動しない、其の實質が具備しない。(此點、他日の詳説に讓る)。大正の日本人は、此の魂を得、此の生氣を活かすを使命とすべきである。而して世界の大戰亂は世界の新局面を齎らし、人類の生活に新生氣を吹き込み、我等に此の使命を果せと迫りつゝある。人本主義の實行は、此の世界的潮流に乘じて、明治以來の國是を實質的に完成する所以の道、國家道にして人道、即ち日本國が體現すべき人生の充實である。

世界に處する日本として、日本が世界の新局面に處するの道は、即ち又直に内にあつて、社會を刷新し、民心を振起し、人性を醇化する所以の道である。内治外交共に人本主義の理想を以て一貫せよ。是れ新たる世界に處する日本の道である。世界人類は、戰亂の大破壞を經て、新生命に復活せんとしつゝある。大正の日本人が此の曙光を見る能はずして、世界の新生面に後れをとるなら、汝等は國の生命と共に同胞の生命を殺す事になるぞ。

同胞よ、新しき民起り、新しき深みの下に新しき泉の迸り出でんけ遠きにあらじ。地震ひて、新しき泉現はれん。古の民の地震ひなば、新しき民湧き出でん。

學問の獨立の意義と範圍と順序とを論ず

田中王堂

一　現時に於ける生活と學問との間の矛盾の由來

わたくしは、嘗て一人の若き工學士と話したことがある。彼れは建築學を專攻したものであつたから、話題は自づから建築に關したもの、而かも、わが國の建築の將來に關したものであつた。彼れはわが國の將來に於ては、大體、西洋建築が最後の捷利を制するであらうと云ふことを假定して、（實は、是れも、さう無雜作に定めて了はれぬ問題である。わが國に於て、將來に起る西洋建築なるものは、必然に、既に、是れまで西洋に於て發達して來たものとは、其れの樣式の點に於ても、また、其れの實用の點に於ても、非常に違はなければならぬ。されば、先づ、西洋建築の範疇から定めてかゝらねばならぬ。が、是れは、わたくしがこゝにこの對話を引用する主なる興味ではないから姑らく不問に附することとして、）彼れの意見に從ふと、如何なる樣式のものがわたくし共に取つて、優秀なものであるかは、西洋に於て、從來、試みられたあらゆる建築の樣式を歷史的に、汎く、遠く研究した後、始めて、發見し得られるものであると云ふのであつた。わたくしは、之れに對へて、若しさうとしたならば、西洋建築は、すでに長い、複雜した沿革を持つて居る上に、現に彼等の生活と趣味とを中心として、新らしい樣式が、時々、刻々に工夫されて行くのであるから、是等を研究し盡した後でなければ、わたくし共に取つて適當した西洋建築が擇ばれないと云ふならば、わたくし共は未來永劫西洋建築を有つ機會は來ないと云ふものである。わたくしは、わたくし共が、將來、わた

くし共の生活に取つて適當した西洋建築を擇ぶと云ふことは、西洋建築の意義を理會した上に、其れをわたくし共の要求で醇化することで十分である。否、獨り、さうすることに限られて居ると語つたことがある。

わたくしが、こゝにこのわたくし共の對話を引用するのは、其れが、大した意味を有つと思ふからではない。又そこに交換されたわたくし共の討議の結果に大した價値があると思ふからでもない。たゞ、この工學士の意見は、不幸にして、たま〳〵、わが國の謂ふところの識者の其れを代表して居ると思ふからである。

今より數年前、可なり大膽に、然し、極めて親切な心意氣を以て、わが帝國大學に學ぶ經濟學の學生等の欠陷を指摘し、說明した或る外國教師があつた。其れは一つの長論文であつたが、その眼目とするところは、經濟學に對する是等、學生の理會の、情操の餘まりに形式的であり、器械的であることであつた。彼れは謂つた。彼等は經濟學の手段や機構に眩惑されて了つて、其れの志向とするところ、原理とするところのものを洞察することが出來ない。この自然の結果として、若し彼等にしてその細目に沒頭すれば、するほど、その精神を閑却することになる。是れが、實に、この一事が、わが國に於て、經濟學を學ぶ者、自づから經濟學を學んで居ると想像する者の、其の數に於ては決して寡くないに拘はらず、彼等の眼前に橫はる事實や、傾向に關して、獨創の研究の起らない、大なる原因である。

わたくしは、この獨逸の經濟學者の觀察と斷定とに全然裏書きするものである。そして、この苦さ、然し、誠實なる忠言に對して、わが國の經濟學徒は衷心より感謝しなければならぬ理由が十分にある、とわたくしは思ふ。然し、わたくし共にして、一層落着いて、一層眞面目に、この尊敬すべき學界の一先達の苦言を玩味する時に、わたくし共は其れがたゞに經濟學徒の欠陷に對する批判たるに止まらずして、其れは直ちにわが國に於けるあらゆる種の學問に從事する學徒の欠陷に對する批判であり、たゞにあらゆる種の學徒の欠陷に對する批判たるに止まらずして、其れは直ちにわが

國の文明一般の欠陥に對する批判であることに氣付くのである。事實さうであるとすると、そこには、この悲むべき現象を誘起し、養生した大なる事情がなければならぬ、大なる事理がなければならぬ。そして、無論ある。其れは、一口に云つて見れば、眞の意味に於ては、まだ、生活と學問との間に、眞の有機關係が成り立つて居らぬからである。

如何なる時代に於ても、如何なる國民の中に在つても、實行は理論に先だたねばならぬ通り、生活は學問に先だたねばならぬ。實行の要求に依つて理論は生じ、生活の支持に依つて學問は存在し、發達するのである。されば、現時に於て、わたくし共の中に在つて、獨り、さうでないわけはない。四五十年の過去に方つて、わたくし共は、急に、不意に、外來の壓力からして或る種の生活を營み、或る種の實行を爲すやうに强制されたのであつた。隨つて、其の種の生活と、其の種の實行に必須なる學問を修め、理論を持つことに誘致されたのである。して見れば、わたくし共の生活と學問と、若しくは、實行と理論との間に、一切、有機關係が成り立たつて居らぬと云ふのは事實に合はぬ觀察のやうにも思はれよう。然し、斯くわたくしが斷言するには確かな根底がある。わたくしは、今、尠しく之れが說明を試みねばならぬ。

こゝに事新らしく云ふまでもなく、今日、わたくし共が、現に經營しつゝある生活の中で、其れの私的情操は兎に角、其れの公的組織に到つては、內より發展したものではなくして、外より强課されたものである。わが父老達が、一度、死活の岐頭に立つた時に、外より强課されたものである。そして、(無論、生理的の意義に於てよりも、寧ろ、精神的の意義に於てはあるが)、その時、死を避け活を求める唯一の方便として、我が父老達は忍辱と發憤とを以て、强課されたものを受け取つたのであつた。自今天下に比なき神國の子孫は、暫く、他日の雄飛を心に期して、確く、節屈をして夷狄の弟子となつたのである。

斯かる事情の下に、西洋文明は始めてわが國にまで

紹介され、わが國に依つて採用されたのであつた。然し、西洋文明もあらゆる種の文明と等しく、必然に、實行と理論との二要素より成り立つて居る。そして、是等の二要素は固より、同質のものであり同作用のものであるが、その貯蔵たる理論は精微を以て勝り、その發現たる實行は直截を以て勝つて居る。わが父老達が、彼等の存在の危機に際し、其れを逃れる方法として、彼等にまで彼等の經驗と、想像とに、新らしくあり、奇異であつた西洋文明が示された時に、彼等は本能からしても、容易に、其れの實行の價値だけは認取することは出來たが、其れの理論意義に到つては、多くの反省を費しても、十分に理會することの出來なかつたことは、自然であり、當然であつたと謂はねばならぬ。

外來の文明の刺激を借りて、固有の文明の性質を變更し、若しくは、其れの方向を轉換したことは、古來、わが國の採つた慣用手段であつた。されば、西洋文明の偸入に依つてなされたものは、已に、何回となく、三韓文明の輸入と、支那文明の輸入とに依つてなされたものである。然し、こゝに、わたくし共が、現に、其れの整頓と完成とを圖りつゝあるわたくし共の文明の特徴を理會する上に於て、決して看過してはならない一つの重大事件がある。其れは他ではない。明治維新を劃線として、其れの前に行はれたものと、其れの後に行はれたものとの間には、その動機の性質に關して、霄壤の差があると云ふことである。究竟するところ、孰づれの場合に在つても、わが同胞の欲求に依つて取り入れられたのである。が、前の場合に於ては、主として、生活の轉換のために試みられ、後の場合に於ては、純ら生存の持續のために求められた。前の場合に方つて、纔かに改造の問題に過ぎなかつたものが、後の場合に到つては、直ちに死活の問題となつて居つたのである。

慶應より明治の初年にかけて、鋭意、西洋文明の移植と適用とに努めつゝあつた諸の志士の言動に察するに、彼等がさうするには、そこには、たゞ一つの目的

しかなかつた。其れは、偏へに自國の獨立を盡し且定めることであつた。彼等はこの一つの目的の外に、上に、乃至は、先きに、一つでも他に目的のあることに氣付かなかつた、氣付かうとも欲しなかつた。尠なくとも、この一點に關してだけは、彼等の中で、多數の凡人も、極めて少數の非凡人も、渾べて其の軌を一にして居たのである。たゞ凡人は、机上の大艦、巨砲に依つてこの目的を達しようとして居たのに反し、極めて少數の非凡人は事實上の大艦、巨砲に頼らなければ、この目的は到底達せられないことを悟つて居たのであつた。机上の大艦巨砲主義者は、わたくし共が攘夷論者と呼ぶところのものであつて、事實上の大艦巨砲主義者は、わたくし共が開國論者と呼ぶところのものである。

いつの時代に於ても、少數の智者は、後人に依つて感謝される要權を有つやうに、是等少數の智者も、わたくし共に依つて感謝される要權を十分に有つて居る。何故ならば、强兵は突如として空中に出現し得るものではない。强兵は富國に依つて支持されねばならぬ。然し、富國はまた一般文明に依つて培養されねばならぬことを、實際の案件として、發見したのは是等少數の智者であつたからである。かう云ふ過程を通つて、一度、兵制に走り、產業にまで進んだ改革は、更に、政治、道德、敎育、學術にまで進んで行つたのである。かうして、わたくし共の生活全體は、或る意味に於て、西洋文明の洗禮を受け了はることになつた。

然し、西洋文明の移植と適用とが、其の初め、內生活の改造を目的としてではなくして、全く、對外策の確立を目的としてであつたことは、其れの理會と運用との上に、長く、一つの好ましからぬ痕跡を遺すこととになつた。其れは、(最廣義に於ける)產業と(最廣義に於ける)道德とを分割することに依つて、近世文明を、其れの精神と發現との二つに離別し、獨り、其れの發現たる產業だけを採用して、其れの精神たる道德に到つては、其れを排斥しようとし、若しくは其れを輕視しようとしたことである。當時、叡智一世を壓し

た概ある横井小楠にさへも「明堯舜孔子之道、盡西洋器械之術」の句があるではないか。是れは、確かに當時の最も聰明な人士の意見を代言したものであつて、決して一片の修辭ではなかつたのである。斯く、生活の根柢に於て、理論（道徳の形をとつてはたらく）と、實行（産業の形をとつてはたらく）とを離別する以上、是等、二つの對立的性質は、電氣の二極のやうに、人間の生活のあらゆる截斷片、即ちあらゆる種の理論、あらゆる形の實行の成分として、其等を構成して居るのであるから、今日に於て、わが同胞の大多數者が實行に從事する時は、其れの理論を藐視し、理論を研究する時は、其れの應用を閑却して、終には、學問と生活との間に無數の溝渠を劃して居るに何んの不思議もない。端的に事實を語れば、生存の持續の必要に迫られて、わが同胞に依つて採用された西洋文明も、其れの實行の方面だけは既に功利の證據の上に鑑賞されて居るが、其れの理論の方面は、猶、單なる信仰の事柄として信奉されて居るに過ぎないのである。一國にして、こんな狀態に在る間は、其れの體系たる生活が貧弱であると同時に、其れの機關たる學問が空疎であることは、自然の勢であると云はねばならぬ。こゝに、學問の獨立の聲が發せられ、そして、其れには、多大の意義と權威とが含まれることになるのである。

二　二つの文明の融合か、一つの文明の創造か

いかなる場合に於ても、人間に依つて經營される生活は單一であるやうに、單一であらねばならぬやうに、わたくし共の經營しつゝある生活も單一である。わたくし共が生活して行く上には、現にいろいろの考慮と行動とが必要とされて居る。が、畢竟するに、出來るだけ多くの幸福を獲得するために、わたしどもが有つて居る品性に依つて、わたくし共に與へられた境遇を整齊して居るだけである。この外に、わたくし共の考へべきことと、爲すべきことは一つでもあり得るとは想はれない。材料は時として、其れを整齊して行く品性を離れて抽象的に觀れば、異種のものとであることもあ

る。然し、品性のはたらきを通して、具體的に觀れば、常に同種のものであるに定まつて居る。

生活の必要から、わが同胞の或る者は和服と洋服とを併用して居る。又、日本式居間と洋式客間とを併有して居る。斯かる服裝の極めて不廉であり、斯かる建築が極めて醜惡であることの事實は別として、若しわたくし共の生活がさうすることを必要の設備として居る以上は、彼等は是等の重複した方便に依つて彼等の單一なる目的を達して居るのであるから、彼等は決して異種の材料を使つて、二重の生活を經營して居るのではない。同種の材料を使つて、單一な否純一な生活を經營して居るのである。

わたくし共は、東西の兩文明の融合を圖かつて居るとか、圖からなければならぬとか云ふことは、よく思慮に乏しい、或る人達に依つて無理合に唱道され、更に、一段思慮に乏しい他の或る人達に依つて、沒批判に雷同されて居ることである。然し、そんな事の出來るものではない。そんな事の試みられたことは嘗て一度もない。實際に、わたくし共がして來たこと、して居ること、はた、して行かねばならぬことは、たゞ、わたくし共の品性と材料とを出來るだけ完全に緊張し、總合するがために、謂ふところの東洋文明の所産の或るものと、謂ふところの西洋文明の所産の或るものとを、わたくし共の實用的判斷と審美的情操との標示に從つて、隨時、隨處に、採擇し、齊整することだけである。そして、大なる失敗と共に、小なる成功を以て、こゝ四五十年來、わたくし共、日本人の從事して居たのは是れであつたのである。わたくし共が一想每に、一言每に、一行每に、試驗し、開拓して居るのが、わたくし共に取つて、唯一の文明である。其れは獨自であるのみならず、又、わたくし共を離れては如何なる形式に於ても、如何なる意味に於ても存在し得ぬ底の文明である。其れは東洋の文明でもない、西洋の文明でもない。端的に、わたくし共の文明である。

一度、かゝる見地が取られて來ると、東洋文明も、西洋文明も、固定の價値と云ふものを持たないことに

なる。東洋文明、西洋文明と云ふやうな差別さへも失つて了ふ。わたくし共の爲すべきことは、出來るだけ、よく生活を維持し、發展するために、其等の中より、正しきものを、正しき程度に採擇し、正しき風に適用するだけのことである。然し、こゝに問題は生じて來る。若しわたくし共の仕事にして、單に器械的に全體のまゝ東西の兩文明を攪合するだけで宜いのならば、其れには大した苦心の必要はない。たゞ、批判的に東洋文明の所產のあるものと西洋文明の所產の或る物とを採擇し、作用的に其等を適用するところにわたくし共の仕事はあるのであるとすると、こゝに、始めて少なからぬ知識と透識とが必要とされて來る。わたくし共の生活の要求を唯一の標準として、斯く東西兩文明の所產の或るものを、自由に、大膽に、採擇し、適用することを心掛けることになると、たとひわたくし共が其れの結果を兩者の融合と呼ぶにしても、其れは、どこ迄も、代償的の意味に於ての融合であらねばならぬ。が、この代償的融合を實現するためには、人間の性情と、世界の大勢とに關する知識と、おのれの置かれた境遇と、おのれの有てる品性に關する透識とが、尠なからず必要とされるのである。

　それでは代償的融合とは如何なることを意味するか。二つ、若しくは、二つの以上の興味の併立し、或は衝突するに方つて、其等の外形を無視しても、寧ろ其等の精神を得留しようとすることを云ふのである。例へば、欲しいほど、米と薪とを買ふだけの金錢を持たぬ場合に、何んの深い考慮をも用ゐないで、たゞ、初め欲した量に比して、米と薪とを等分に減ずるのは、數量的に兩方に對する欲望を滿たさうとする仕方である。然し、その時の生活の要求を標準として、米よりも薪の方を幾倍とも無く減じたり、或は、薪は全然買はないで、米ばかり買つたりするのは、作用的に兩方に對する欲望を滿たさうとする仕方である。是等、二つの場合に於て、孰づれが全體として多くの滿足を與へるかと云へば、其れは前者ではなくして、後者であることは明らかである。そして、前者は物質的融合であ

るが、後者は代償的融合である。有限の樣式に依つて無限の欲望を統一することより成り立つて居る人間の行爲は、別けても、一つとして代償的の性質を帶びないものは無いが、東西兩文明の融合と云ふやうな行爲に在つて、其れの性質の中で、代償的たることが特に顯著になるのである。日本の社會生活が、和服と洋服とを併用することを求めず、又、容れなくなつた曉に、其れが、十分に、生活の中心要求を基礎として決せられたのならば、全然、和服のみとなるも、或は、全然、洋服のみとなるも、代償的には是等兩方のものが程よく折衷されたと同樣に、完全に融合されたのである。是のわたくしの觀察は、政治や、道德や、藝術に關して來るに及んで、一層、眞實のものとなるのである。

然し、わたくし共の生活の要求する東西兩文明の融合が物質的のものでなくして、作用的のものであるとすると、是等、兩文明の結晶であつて、同時に、其等の把柄たる理論、卽ち、學問を會得し、體認することが極めて大切となつて來るのである。かゝる理論、或は學問あつて、始めて、わたくし共は、すでに實際生活に依つて無意識に始められた融合を整齊し、更に、自覺を以て一つの理想として一層完全な融合を提示し得るのである。然しわたくし共は不幸にしてまだそんな理論も學問も有たぬのである、如何にしたならば有ち得るかを知らぬのである。其れは、主として、わたくし共の生活を人間の性情と世界の大勢との輪廓の内に据ゑる知識と、現にわたくし共の置かれた境遇と、わたくし共の有つて居る品性とに照らす透識とを兩つながら缺いて居るからである。

わたくしは、上に於て、東洋文明と西洋文明とを無雜作に對立させて來た。この表現よりして、惡くすると、わたくしは是等二つの文明の上に同一の價値を置いて居るものゝやうに誤解されないとは限らぬ。然し、わたくしは是等二つの文明の上に同樣の注意は拂つて居るが、決して同一の價値は與へて居らぬ。わたくしは東洋文明の上によりも、西洋文明の上の方に遙かに大なる重要さを認めて居るのである。そして、わた

くしは、何人にしても、相應の經驗と聰明とを所持して居る者であり、又、評價の標準を現在のわたくし共の生活の要求に置く者であつたならば、これ以外に評價のしようはないと信ずるのである。何故ならば、わたくし共の遺傳とか歴史とか云ふ間接の假定から離れてわたくし共の生活を直接に支配して居る意識と意志との直接の事實に卽して考へ、且つ語るならば、一層大なる價値を東洋文明によりも、西洋文明に與へることに依つて、わたくし共の品性と境遇とは遙によく統一され總合されることが、時々刻々に證據立てられて居るからである。この事實よりして、今日、わたくし共は、過去に於て、東洋文明の産出した理論や學問によりも、過去に於て、現在に於て、西洋文明の産出した、そして、現に産出して居る理論と學問との方に一層も、二層も、多くの考慮と尊重とを捧げねばならぬ。わたくしは、眞實にさう信じて居る。そして、このわたくしの信仰は、堅固な事實と眞實との上に立てられて居るのである。

然し、こゝに、わたくしは、是のわたくしの主張の誤解されないように、一應、其れの意義を說明して置かねばならぬ。

わたくしは、現に、わたくし共の生活を構成する要素の顯著な特徴から、其れを正確に統一し、有効に分化して行けるものは、東洋文明が産出した理論や學問ではなくして、西洋文明の産出した其等であると主張するのである。然し、西洋人に依つて創造されたまゝの其等を云ふのではなくして、わたくし共の現在の生活を中心として、其れ等の原理の上に、必要なだけの改釋と改造とを施したものを云ふのである。かゝる工夫を施して、始めて、彼等の創造が彼等にまで眞理であるだけわたくし共の改釋と改造とがわたくし共にまで眞理となると云ふものである。然し、わが國に、さうして居る學者、さうすることの出來る學者が、果して幾人あるであらうか。彼等の大數は、悉とく、樣に依て胡蘆を畫いて居るの徒である。わたくし共の文明の最大疾患は、こゝに、潜在するのである。

三　わが國の學者の缺陷の性質を究明す

トオマス・ハックスレエは、或る一の論文に於て、科學は、必然、宗教に反對しなければならぬと主張し、其れの理由として、宗教は敎權の上に立つが、科學は經驗と實驗との上に築かれねばならぬからと說明して居る。今、こゝに、わたくしにはハックスレエの議論の價値を吟味しようとする暇ともないし、興味もない。然し、科學が經驗と實驗とを尊重しなくなつても、其れは、猶、何ものかであり得よう。然し、兎に角、其れが科學でなくなつたことだけは明らかである。さうであるのに、わが國の學者、しかも、科學の研究者の大數は、經驗と實驗とを輕視し、反つて、西洋人に依つて彼等の經驗と實驗とを標準として組織された理論や學說を絕大の敎權として崇敬し、畏怖して居るのである。この爲證より視ると、彼等は、職業に於ては、學徒たることを名のつて居るが、その精神狀態に於ては、僧侶である。彼等は、たゞ、學書を經卷に、方式を咒文に代へた僧侶たるに過ぎないのである。

然し、わが學者の大數が、この憫むべき、慨すべき狀態に居るのには、相應の理由がなければならぬ。之れには相應の原因がなければならぬ。この問に對して、常に、最も手早く與へられる月並の答がある。其れはかうである。既に過去の全歷史を通じて、歷代の學者が外來の學問に對して、彼等の取つた態度、彼等の示した精神に依つて十分に證明されて居る。一口に云つて見れば、其れは、わが種族の特徵の一つとして、わが國の學者が獨創の天賚に乏しいのに由ると云ふのである。わたくしとても、この觀察の眞實性を全然否定しようとは思はない。が、其れをして意義あらしめ、妥當ならしめるには可なりに精密な議論が必要となると思ふ。然し、今、わたくしはそんなことを試みて居るわけにゆかぬ。されば、この觀察にも多少の眞理は含まれて居ると云ふ假定を保留しながら、わたくしは、其れよりも現代の學者に取つて、一層直接な、隨つて一層決定的の力を有つて居る事實を指摘したのである。

大觀すれば、總べての時代に於て、總べての國土

の中に出現した總べての種の學問は、其れのどれ一つでも、其の社會生活を中心として、其れの要求に依つて出現しなかつたものはない。然し、文藝復興を限界として、其の後に起つた、學問、卽ち、嚴密な意義に於ける科學に關して特にさうである。世人の周ねく知る如く、謂ふところの『復活』は、其の實、眞のそして、多くの意味にて『新生』であつた。文藝の復活は、畢竟するに、自覺の新生を促す機會に過ぎなかつた。こゝでは、詳述出來ないいろいろの刺激と事情とに依つて、あの期に方つて、人間は新たに彼れの欲望の尊貴と、彼れの力量の權威とに目醒めた。彼れは、從來、一度も經驗したことのない程度に、風に、社會に動搖を起し、同時に、其れを整齊することに多大の興味を有ち始めた。この結果として、大體に於て、現に、わたくし共の觀るやうな近世生活が沈澱されたのであつた。そして、之れが精神となり、把柄となつたものは、近世科學であつた。その一半は動亂を捲起する機關として工夫され、他の一半は、さうして捲起された動亂を整齊する機關として工夫されたのである。されば、當時、是等の科學が『新學』("New Learning")と呼ばれたのは、極めて有意義のことであつたのである。是等の暗示者、創始者、乃至、宣傳者の如何に輝く希望をこの『新學』の上に寄せて居たかを觀るが宜い。若し新たに想像された、或は、創始された是等の科學にして、一度、人類一般に依つて信奉され、實踐される曉には、社會に見出だされる、あらゆる蒙昧と、貧困と嫉妬と、罪惡と慘劇とは、一時に斷滅し、霧散するものと速了したのである。是等の科學の功德に對して彼等の抱いて居た信仰がこのやうに素朴で、又、法外のものであつたことは、其等の科學の首唱者等が、てんでに、聲明して居るところでも解かることである。

如何に、當時の行きつまつた(事實に於てもさうであつたが、彼等の想像に於て一段さう現はれた如く、)社會生活が、新科學の創始を熱望し、欣求して居つたかは、わたくし共が物理學の開祖であつた(尠なくも其れを提示したことに於て、)ベエコン、近世法理學、

若しくは、近世政治學の開祖であつたホッブスとグロチユス、哲學の開祖であつたデカルト、下つて、それ、ぞれ、心理學の、經濟學の、道德學の、社會學の開祖となつたロック、アダム・スミス、カント、コムト等の述懷と希望とに憑つて見ても知れるのである。是等の科學は、當時の社會の生活の艱難の提供と解決とを兼ねたものとして、始めて世の中に出現したのであつた。其の後、是等の科學の中で、其れの長きは四百年、短きも百年は經過じて來て居る。其の間、多大の變遷と進歩とを閲みして居るが、いづれも、當初の志に忠にして、嘗て淋漓たりし、祖師の煩悶と氣魄とは、その各に於て今、猶、十分に窺ふことが出來るのである。

是等の科學が、いつでも正しく問題を提供し、いつでも正しく其れを解決して來たかどうかと云ふことは別として、兎に角、實際生活の分身とし、權化として出現したのである。されば、其れの組織と精神とは、實際生活の苦悶を代償的に表現したものであつた。是等の科學が、生活に對して現に有つて居る親みと、溫みとは、わたくし共に對つて、具さに其れの尊き起源と、役目とを語つて居るものである。されば、西洋に於ては、社會生活の中に起つた事實の變遷は、科學の志向に反映し、科學の中に起つた概念の變化は、社會生活の傾向を感化して來たのは、極めて、自然であると謂はねばならぬ。

西洋に於て、こゝ、三四百年に亘りて、創始され、養成され、完成されて居るあらゆる科學は、殆ど其のまゝ、悉とく、わが國に移植された。近世文明が、俄かに、そして、無慈悲に、わたくし共に投け掛けられた。そして、其れを運用するには、其れと併せて、その機關たる、諸の科學を受け取り、理會することが必要であると半ば教へられ、半ば、おのれの經驗からしても、朧げながら納得出來たからのことである。然し、わが國をして世界列强の仲間入りせしめるのに、わたくし共が、近世生活を取り上げることの必要なことは、一度、わたくし共が生死の巖頭に立つた時に、しみじみ、體驗したことであるが、近世生活を取り上げる

には、同じ意味で、同じ程度で、近世科學を取り入れることが必要であると云ふことは、わたくし共として、また、體驗するに至つて居らぬ、たゞ、信仰して居るだけのことである。實行は直接である。理論は間接である。生活は直截である。學問は複雑と、迂回を極めて居る。理論、若しくは、學問を實行、若しくは、生活に比較する時に、わたくし共は、前者に、多くの過剩と、贅澤とが含まれて居るやうに想はれる。然し、事實は決してさうではない。意義あり、充實した生活を營むと云ふ目的からすれば、前者は、後者よりも、一層、實利と節約との考慮の上に工夫されて居るものであるの眞相は、强く、深く、そして、眞實に生活したものならば、何人でも、容易に會得することの出來ることとである。

わたくし共は、單に、信仰に依つて、信仰として、近世科學を修めて居る、修めて居ると信じて居る。然し、不幸にして、歴史の上に、其れを沈澱さした苦悶を閲したことがない。隨つて、其れの解決を試みるの必要に迫られたこともない。安閑と、太古このかた、農、耕、漁、獵の業を承け繼ぎ、單純な徳目と、僅少な法文とに依つて治められて居た國民である。さうであるのに、急に、内生活の改善からではなく、對外策の主張より、近世文明を取り上げるに伴れて、其れの支持であり、精神であると(彼等の敎へられた)近世科學を取り入れることになつた。其れが、彼等に取つて、奇蹟であつた。そして、奇蹟を受け入れるのは信仰を以てするより外に途のなかつたのは、極めて自然である。

然し、奇蹟にしても、何んにしても、苟も其れが、近世生活の運用に發展に必須のものとして一旦取り入れられ、又、事實に於て、さうであることが、或る程度にまで證明された以上、わたくし共は、どうしても、其れに對して、社會生活より生じた苦悶を解決する唯一の方法として久しい間、手探りしつゝ、躓きつゝ、幾度か、失敗と、成功と、落膽と、歡喜とを重ねて來て、遂に、其れをして今日あらしめた西洋人と等しき、否、(わたくし共は、嘗てそのやうな苦しさ、

しかし、尊い經驗を有ち得なかつた理由からして)、彼等よりも、一層、充實した、徹底した理會を造らねばならぬ破目に在るのである。然し、如何にしたならば、斯かる理會を造ることが出來ようか。わたくし共に、そんなものが、果して造れようか、將た造れまいか。是れが問題である。

わたくしは、やりやうに依つては確かに造れることと信ずる。しかも、比較的に容易に。

すでに、過去に於て、相應な經驗が蓄積され、相應な判斷力と想像力とが養成されて居ると云ふことが假定されるならば、わたくし共は、無論、實行の上で實質的に、或る事件を經驗することに依つて、其れの知識と情操とを得ることが出來るが、又、觀念の上でも、(おのれの已に得て居る知識と、情操とを基本とし、其れより、正當に、適宜に類推し、想像することに依つて)代償的に其の事件を經驗することに依つて、前に劣らない、若しくは、其れに勝つた知識と情操とを得ることが出來るのである。今、わたくし共が、近世科學に關して得ようとして居る、そして、得ることとの望あるのは、前の方法ではなくして、後の方法であることは明らかである。後の方法に賴ることに依つて、わたくし共は、さきに失つた總べての經驗を別途に回復して、尙ほ餘まりあることと思ふ。

其れならば、さうすることに必要なるべき、その態度は如何にその手順は如何に。

其れは、文明史的に、其れの動機を捕捉し、心理的に、其れの志向を考察し、論理的に、其れの經濟を究明することである。さうすることに依つて、科學を自由化し、科學をその統一機關とする生活を自由化することである。こゝにわたくしは、人間生活の研究の是等、三大部門に關して詳說して居るわけにはゆかぬ。その一つ、一つが、極めて興味ある、そして、重要なる獨立した研究である。然し、簡單に其れの本質とするところを述べて見れば、文明史的に科學の動機を捕捉することに依つて、わたくし共は、其れがヒユマニズムの發現たることを理解して、生活の他の機關との

連絡を見出だし、心理的に其れの志向を考察することに依つて、其れが實行の一準備として、其れに輪廓を劃するものなることを理會し、論理的に其れの經濟を究明することに依つて、如何にして、現に持つやうな樣式を其れが持つに到つたかを理會し得るのである。斯くして、科學は、さきに、宗教を工夫し、藝術を工夫し、道德を工夫したのと、全然、同一の工夫に依つて、工夫されたものであることを明確に體認して來れば、最早、科學を一つの神祕とし、天啓として、其の前に畏怖し、慴伏するの愚を爲す必要はないことになるのである。わたくし共にして、一度、この自由な、ロオマンチックな境地に到着した上は、科學も、大正六年の、日本に於て、今、こゝに、わたくし共の生活に最も親しみあり、溫みあるものとならねばならぬ。否一日もなくてはならぬわたくし共の生活の一部、しかも、最も內的の一部として、一瞬間もわたくし共より離すことの出來ぬものとならねばならぬ。

　さきに、一通り述べた、理由からして、西洋に於ける科學の研究者には、この豫備知識がさ程、必要でないにしても、(無論、彼等としてもあつた方がよいし、優賞な者に到つては當然、相應に持つては居るが)、わが國に於ける科學者たらんものには、誰れ、彼れの別なく、この豫備知識は必須のものである。然し、彼等は一向に其れを有つて居らぬ、有つことの大切なことさへも覺つて居らぬ。わが國の學問の、わが國の學者の最大缺陷、あらゆる缺陷の病根は、こゝにある。

　いつの世の中でも、賢者は寡なく、愚者は饒い。今日世の中には、わが國の學問のまだ獨立を成し遂げずして、其れの多くが、西洋の其れの、摸寫と、移植とに過ぎないことを呼號する人士がある。然し、彼等はたゞ、現在の病弊を指摘するだけで、其れの由來を究めるに、極めて迂、其れの救治の法を講ずるに、極めて無能のやうにわたくしには思はれる。わたくしは、彼等の呼號することが事實であるとする。然し、其れならば、其れは如何にして生じたか、如何にしたば改善さるべきか。彼等には、之れに對して、

定見も成案もないやうである。若し一つでもあるならば、何故に彼等は其れを世人に提示しないか。

若しこの缺陥が、不幸にして、大和民族(この自負心と、この自尊心とに滿ちた大和民族)の中に、遺傳となつた創造力、發明力の缺乏より來て居るとするならば今、幸にしてこれ等の力を發育しなければ十分な意味に於て生存を持續することの覺束ない境遇にわたくし共は置かれて居る。わたくし共は是れをよい機會として、徐々に、其等の缺陷を充たして行くべきである。そして、この事は十分に可能である。何故ならば、國民性と云つても、たゞ、長い過去に於て、そこに、わたくし共の祖先が置かれた境遇より生ずる刺激に應酬して來た、聯續行爲の痕跡を云ふに過ぎない。其れはどこまでも、プラスチックのものである、決して、そして、固定したものではない。されば、現に、わたくし共が置かれた境遇より生ずる刺激の性質と、其れに酬酢する意志の性質とに依つては、百年を期せずして相應な程度と、風とにまで、變更の出來るものであるからである。

然し、今日、わが國に獨立した學問の存在しない大なる原因は、わが國民性より來たるよりも、更に多く、わたくし共の現に要求し、使用して居る科學の意義を、作用を、理會するところの闕如するより來たつて居るのであるとわたくしは考へざるを得ない、隨つて、さう斷言せざるを得ない。今日、わが國の學風と學者とに對する非難者は云ふのである、『今日わが國の學者の所說の大數は悉とく、西洋人の學說の飜譯でなければ、飜案に過ぎない。多少自分の意見で立案したものでも、其れに引かれる史實や、統計は全く西洋よりの借り物である、』と。如何にも、この非難者の云ふのは事實である。然し、この事實あるがために、わが國の學者が、彼等の素養を西洋の學問に求め過ぎた結果であると診察するのは、間違つて居る。わたくしに云はせれば、(俗人の耳には、一つのパラドックスと聽けようが)、彼等がさうあるのは、さうあらざるを得ぬのは、西洋の學問に食傷したからではなくして、其

より來たる營養が不足であるからである。つまり、(例へて云へば)、是れまで、菜食のみに馴れた胃腑の所有者が、急に、彼れの生活狀態と、身體組織との變化から、肉食を必要とするやうになつた。が、彼れは彼れの胃腑の特徴に應ずるやうに、肉を調理することをすることを知らぬために肉を取ることに依つて、反つて、營養の不足を引き起して居るやうなものである。どうしても、彼れにして肉食を必要とすることになつたならば、彼れの爲さねばならぬことは、たゞ、肉より滋養を攝取することの出來るやうに、肉を調理すると同時に、徐々に、彼れの胃腑の組織を變更して行くだけのことであるとわたくしには思はれる。

生硬より來たる疾患に對する療法は唯一つである。そして、其れは徹底である。今日、わたくし共が西洋の學問より來たる疾患も、事實、其れが生硬より發して居るものとすれば、その療法としては、其れをしてどこまでも徹底させる外に一つもないに定まつて居る。

四　反動の意義を正解せよ

日本の學者として、日本の生活を支配することを目的として學問して居りながら、たま／＼その學問が、外國の生活を支配するがために、外國人の創造し、完成したものであるから、わが國の事情に合はず、其れの要求を滿たすことが出來ない。こんな馬鹿氣たことが、どこにあらうか。「古の哲學者とは、自分、獨りで考へる人々のことであつたが、今の哲學者とは、自分では少しも考へないで、たゞ、他人の書いた澤山の書物を讀む人々のことである。」とは、學界の麒麟兒、クリッフォドが世間俗學の徒を罵倒した一句である。特に、その澤山の書物と云ふのが、悉とく外國の生活を支配するために、外國人の書いた書物であつた場合には、實にやりきれぬではないか。そして、是れが、わが國に於ける學者(!)の實情である。このだらしのない有樣を觀て、彼等に對して、憤慨の氣を洩らすものの、わが同胞の中にあるのは、尤も千萬の事である。

今日、わが國の學問が、わたくし共國民の要求を遺憾なく滿たすことの出來るやうに獨立したもの、獨自のものとなつて居らぬことは事實である。然し、わたくし共にして、仔細に點檢する時には、そこに二つの流派の存在するのを見出だすのである。そして、是れは明治の初年より大正の今日に到るまでに、わが政府が取つた國策の沿革に依つて、產出されたものであつた。

嘗て新派俳優の一人は故伊藤公に對つて、公は西洋文明の採取者の半可通なるものであると云つたさうである。伊藤公のみならず、誰れにしても、明治の初年に方つて、頻りに西洋文明の移植に努めて居た政治家は、一人として半可通でなかつたものはない。啻に明治の初年の政治家のみならず、大正六年の今日に於ても、この一點に於て半可通でなかつた、或は、其れより劣らなかつた政治家が一人でもあるか。若しさうでないとしたならば、わたくし共が現に觀るやうな政治の狀態と傾向とが耖しても馴致される筈はないではないか。然し、等しく半可通の事業であつたにしても、明治十四五年より前と、其れより後とを劃して、其れの外形に於ては非常な相違を呈して居るのを觀るのである。いづれの場合に於ても、本能が理性に先きだつてはたらいた結果であつて、彼等の觀察と、思慮と、反省との乏しいことを物語つて居るが、明治十四五年より前は、沒反省的に西洋文明を輸入した時代である。其れより後今日に到るまでは、沒批判的に國體觀念を以て、西洋文明を阻止しようとして來た時代である。今日、その成績に就いて、是等兩つの國策の價値を評定すれば、前者が後者に勝つて居ることは多言を要しない。何故ならば、前者は淺薄ながら改造の要求を參照してなされたのに、後者はたゞ固陋に開放の氣運を氣遣つてなされたからである。然し、西洋文明とわたくし共の生活との關係を理會することの尠なかつたため、わたくし共の現に置かれた境遇と、わたくし共の現に有つて居る品性との間の交涉を出來るだけ緊張し整齊することを等閑に附して居たことは、兩者ともに全然

同一である。つまり、前の國策は後のの先驅であり、後の國策は前のの自然の圓熟に過ぎなかつたのである。若し前の國策にして、初めから、わたくし共の生活の要求と能力とを中心として、妥當に西洋文明を採擇し、醇化したならば、後の國策は、たゞ、共れを繼承し、展開して行つただけに止まつたであらう。そして、別に共れに反動するの態度に出でる情勢は化醸されなかつたであらう。

現にわたくし共の見出だす西洋の學問に對する二つの學風は、各々是等二つの國策の一方づゝを代表して居るのである。

どちらも、等しく西洋の學問の嚥下者である。共れの咀嚼者ではない、わたくし共の生活よりの要求を標準としての咀嚼者ではない。たゞ、一方は、一向に西洋の學問を祖述さへすれば、共れで事は十分であるとして居るに反し、他の一方は、共れでは物足らずとして之れに對立させるに、わが國に固有する國體、修養、道德乃至、學問を以てしようとするのである。前者は皮相な一元主義で行かうとし、後者は不徹底な二元主義で行かうとして居る。然し、是れも、兩方が敗けず劣らず、西洋の文明と學問との無理會なる習得者であることから來たつて居るのである。

無論、是等の兩方ともに、同樣に、同一程度に、間違つて居る。然し、どちらが一層容易にその蒙を啓かれ得るやうになつて居るかと云へは、共れは後者でなくして、前者である。兩者の關係は、基督教の中の新教々理と舊教々理との關係に酷似して居るのである。新教々理は到底、相容れないに極まつて居る實際經驗と信仰とを同時に承認して居るから、何時か、是等の間の爭鬪よりして、信仰を棄てゝ實際經驗に目覺める機會は必然に來る。之に反して、舊教々理は實際經驗と信仰とを全然別種の世界に置いて、是等の間の交渉を遮つて居るから、實際經驗よりして、信仰の動搖し始める機會は決して來ない。今、西洋の學問を共のまゝにして、共れを以てわたくし共の生活を統一しようとして居る人々は、プロテスタントである。實

生活から、彼等の學問の改造される機會はたちまちにして來る。西洋の學問と固有の修養とを分離して居る人々は、カソリックである。彼等は其等を二元と認めて居るのであるから、實際の生活から、西洋の學問と固有の修養とに對する彼等の思慮の啓蒙される機會は容易に來ない。この理由で、わたくしは、西洋の學問に對する是等兩種の俗學の徒を非難する。然し、前の種のものよりも後の種のものを一層深酷に非難する。眞に、明確な目的を以て、わが國に於ける學問の獨立を主張する者は、わたくしがこゝでなして居る如く、是等二種の人々を一樣に非難しなければならぬと思ふ。そして、若し是等兩種の人々を非難するの程度に差等を設くる必要があるならば、又、わたくしがこゝでなして居る如く、前種の人々よりも、後者の人々を一層多く非難しなければならぬと思ふ。

こゝまで論じて來ると、わたくしは、わたくしの注意を、尠なくも、わたくしの管見を、日本主義者、傳統主義者と稱する一派、若しくは、二派(わたくしがこゝで取り扱ふ志向と、範圍とに於ては、彼等は一派と觀るも、二派と觀るも、大した相違はなさないから)に與へることを自分の義務であるやうに感ずるのである。外來の文明と學問とを取つて、直ちに、其等をわたくし共、日本人の生活の方針とすることに反對すると云ふ意見の輪廓だけでは、彼等とわたくしとの間に或る一致のあることが了解されるが、一度、さうする志向を討尋して來ると、彼等とわたくしとの間には、さきの一致に勝る相違が明白に浮出だして來る。

傳統主義と日本主義との主張とするところのものをして單に抽象的にして一般的なる論議たるに止ましめれば、其れはあたりまいのこと(a truism)に過ぎない大した有益のものでないまでも、極めて無害のものである。わたくしは、其れに對して別に抗議を試みるの必要を認めないのみならず、わたくしは、更に進んで、淸淨な良心を以て、彼等の主張(こんなあたりまへのことを云ふのが主張と云へるならば)、に裏書きすることさへ辭さぬ。傳統主義がその原理として居るもの、

日本主義がその論據として居るもの、いづれも尤もの理屈ばかりである。こんな眞理は理性が立證するに先きだち、夙に本能の執著して居るところのものである。このやうな主張の根底に對して、疑惑を挾まうとする沒分曉漢は世間に多くないであらう。

然し、是等の主張者が、この一般的原理、この普遍的論據を取つて、其れを演繹するに、彼等のたま〳〵持てる特殊の經驗と、特殊の教養と、特殊の情操と（もう一つ附け加へる必要があるなら）特殊の氣まぐれとを以てし、さうして得た結果に憑りて、わたくし共に對つて、如何にわたくし共の生活の成り立ちと、はたらき振りとを觀察すべきか、理會すべきか、評價すべきかを指示しようとすることになると、そこに、大分の異議を挾む餘地は生じて來る。そして、わたくしが異議を挾むのも、全然、この點から先きの事に關してである。

わたくしが、彼等の云爲に反對する理由の一切は、彼等が歷史上の事實の說明と、處世上の政策の工夫とを混同して居ると云ふ一點に集中されて居るのである。（正面より、適確に、精細に、彼等の主張を批判することは、他の機會を待つことゝして）こゝでは、極めて端的に、極めて簡單に、彼等の思想の弱點に言及して見よう。

わたくし共が、如何に遠く、史後の時代は無論のこと、史前の時代に遡つても、或る民族又は、國民の性格は、絶えず、創造と、改更との經過の中にあつたことを見出だすのである。其れは彼等が、その生活を持續し行くために、當時、彼等の有つて居た品性を以て、當時、彼等の置かれた境遇より來たる刺激を半ば、支配しようとし、半ば、其れに順應しようとしたことより生じて居たのである。されば、一つの民族、又は、國民の性格の原質は、全然、白紙のやうなものではない、すでに、おのれに生活の保存に必要なだけには、おのれに固有の反應性と、醇化力とを具へて居つたとしても或る時代に方つて、現に、彼等の所持し、そして、所持することを示して居た彼等の性格は、其れに先き

つて、彼れ、及び、彼等の祖先が、彼等の置かれた境遇より引續いて襲來したいろ〳〵の刺激に對し、引續いて、いろ〳〵に應酬した結果であることは明らかである。して、或る品性は、新たに一つの刺激を受ける毎に、新たに一つの變更を經て行くのであるから、或る民族、又は、國民の性格、即ち、彼等の國民性の恒久性は、獨り其れの受ける刺激の恒久性に依つてのみ保證されるものであることも明らかである。刺激の變化の大さ次第、度數次第で、或る民族、又は、國民の性格の上に生ずる變化も殆ど無制限であり得る。これだけのことは、單に、議論ではなくして、歷史に依り現在の生活に依つて、優に幾度も證明された事實である。この觀察よりして、如何なる民族、又は、國民に就いて云つても、其の國民性は、極めてプラスチックであり、極めて柔軟であると云ふことが云へる。

いつの時代に於ても、人間は、唯一つの目的しか持たなかつた。其れは彼れの生活の上に出來るだけの幸福を實現したいと云ふことであつた。そして、この目的を實現するに、彼れには、たゞ一つの方便しか與へられなかつた。其れは、彼れの境遇に依つて、彼れの資力を齊頓し、彼れの資力に依つて、彼れの境遇を統一すること（是れは、單一な事件であるか）、であつた。無論、民族にしても、國民にしても、過去に、彼等の生活の痕跡と記錄とを有つやうになつて以後は、さうする必要があれば、其れから警告を取ることもある、參考を取ることもある。然し、彼等の當面の仕事は、現在に生きることである、出來るだけ彼等の現在の資力と彼等の現在の境遇とを確執させ、協同させて、出來るだけ善く現在に生きることである。現在の中に、彼等の生活に取つて材料となり、標準となるものは、一切與へられて居る。現在を組織する一つの要素として、過去が入り込んで居ることは事實である。然し、其れは、現在を支配するためでなくして、現在に利用されるためである。未來に偉大の約束されて居る、生氣ある民族、又は、國民は、絕えず、過去を超越し、改造して行つて居る。過去を回顧し、過去に拘束され

て居るのは、墮落に瀕した老朽の民族、又は、國民だけである。

わたくし共、日本人は、過去より繼承した性格を基本として生活を始めた。是れは、歷史上の事實に關する説明である。然し、わたくし共が現に置かれた境遇より生ずる刺激を支配するために、出來るだけ妥當に其れを變更し、改造して行かねばならぬ。是れは、處世上の政策に關する工夫である。是等二つの方式は、わたくし共が、實際に生活に從事する時に、決して其れの價値に於て、同格のものではない。前のものは、事實の叙述である。後のものは、行爲の公準である。

わたくし共が、外國の生活の爲めに外國人に依つて工夫された外國の學問に反抗するのには、たしかに、重大な意義がある、役目が含まれて居る。然しこの反抗の目的とするところは、生活の要求を標準として、わたくし共の現に置かれた境遇と、わたくし共が現に有つて居る品性とをして、出來るだけ、完全な交渉を成り立たしめることとの一事に限られねばならぬ。されば、傳統主義者、日本主義者の主張を竢つまでもなく、わたくし共が、過去に蓄積し、涵養したものの中で、この目的を遂するに都合のよいものがあるならば、わたくし共は、其れを十分に尊重し、利用しなければならぬ。然し、さうするには、其れをして一つの様式として、物質的に、現在の生活の要求に對立させることではなくして、一つの活力として、作用的に、其れに臣事せしめることでなければならぬ。

五　學問に於ける國民主義

わが國の特性は、傳統主義者や、日本主義者が心配するほど、さう容易に失はれるものではない。わたくし共が、世界の列强の中に、押しも、押されもせぬ一强國として生て行く限り、わが國の特性は發達することこそあれ、決して、減退することなどのあらう筈はない。其れは、生活の狀態と、要求とが推移するに隨つて、舊いものは死し、新らしいものは生じて、この特性の變遷することはある。

然し是れは、特性其のものの無くなることを意味

はしない。こゝに、わたくしは、特性あるわが國が、將來に於て有たなければならぬ獨立した學問が如何なる性質のものであるべきかを暗示するために、先づ、この特性を如何に觀、如何に理會すべきかを述べければならぬ。

個人の性格が他人との交涉と協同とに依つて一般的抽象より普遍的具體に進み行くやうに、一同の性格も他國との交涉と協同とに依つて、一般的抽象より普通的具體に進み行くのである。隨つてかゝる特性を有つ一國の學問も、また一般的抽象より普通的具體に進み行くことは容易に推測出來ることと思ふ。然し、わたくしは、如何なる事實を指して、さう云ふのであるか。こゝに、わたくしは、二つの國に生じた神話と科學との進行の相違を對照することに依つて、之れが意味を說明するであらう。

神話は原始人の生活の中にはたらく彼等の混沌たる感情の體現である。然るに、或る二つの國に棲息する原始人の有する感情は、別々にはたらくにしても、其れが等しく原始人の感情であると云ふ單純な事實よりして偶然にも、其等は多くの類似點を含んで居る。隨つて、其等の體現たる神話が、各獨立の起原を有しながら、又、偶然にも類似點を含むと云ふことは極めて自然である。然し、さうであるのは、たゞ、其等の初期に於てだけである。其等の神話は、もと／＼、尠しも客觀の事實や、實利から制裁を受けて居るのではないのであるから、其等は、彼等其等二つの團體に依つて、てんでに空想に依つて勝手に潤色されて來る。然し、さうされればされる程、類似點は、兩方からだん／＼に減退して行つて了ふ。

科學の場合に於ては、大分、神話の場合に於けるとは、大分その趣きを共にする。科學は始めから、それで生活を支配しようとする分明な目的を以て、理性に依つて構造されたものである。されば、或る二つの國に於て、個々に出現した二つの系統の中にも、偶然の類似點でなくして必然の一致性が見出だされる。この特徵からして、是等二つの國民は彼等の科學を持ち寄り、

自他のものを、互に比較し、批判し合ふことが出來る。彼等は、さうすることに依つて、ます〳〵、兩方の一致性を正確にし、富瞻にすることが出來る。そして、是等が、彼等の團體の各に取つて眞の科學である限り、その各の眞理は其れの屬する團體の生活を中心としての眞理であらねばならぬ。然し、是等の團體の各の生活は、すでに他の團體の生活を取り入れての生活であるから、其等の團體各に取つての眞理は、他の團體に取つての眞理生活をも含んだ上の眞理であらねばならぬ。たゞ各はその力說の中心を異にして居ることは云ふまでもない。神話の場合に於ては、一般的ではあつたが抽象的であつた。科學の場合に於ては、具體的でありながら普遍的である。そして、それが、具體的になれば、なる程、ます〳〵、普遍的になるのである。

將來に於て、各文明國の間の交易と交際とが、ます〳〵、親密となり、頻繁となるに隨つて、どの一國もその孤獨性を失ひ、そして、其れと同時にその獨自性を增すであらう。他へ向つての交涉に於てはます〳〵、普遍的となり、內に在つてのはたらきに於ては、ます〳〵、具體的となるであらう。

すでに、各文明國に於ける生活の傾向が、さうであるとすると、其れの機關たる學問も、また、同一の傾向を追ふて行くと云ふことは極めて自然のことである。然し、一口に學問と云つても、多種である。哲學もある、論理學もある、政治學もある、又、いろいろの自然科學もある。然し是等の總べてのものが、眞正のものである限りは、其等は悉とく、國民的の要求と國際的の關係との二條件から劃制されて居らねばならぬ。其れは、一面國際の關係に於ては、普遍的であつて、一面、國民の要求に對しては、具體的であらねばならぬ。然し、是等の二條件は、總べての種の學問を同じ程度に、同じ風に、劃制するのではない。學問の性質に從つて、比較上、國民的の色彩の勝つたのと、比較上、國際的の色彩の勝つたのがあらねばならぬ。例へば倫理學のやうなもの、政治學のやうなものは國民的の色彩の勝つたものである。萬有科學のやうなものは他

て國際的の色彩の勝つたものである。斯くして學問の系統は最も國民的のものを中心として國民的、具體的より、國際的普遍的への一つの螺線狀を形造つて居るのである。一國づゝに依つて形造られた是等の螺線狀は各、異なる中心を以て、可なりの程度にまで、重なり合つて居るのである。

　上のものは、わたくしが想像を以て描いた一つの學問の理想郷に過ぎない。今日、世界のあらゆる文明國を取つて觀ても、其れの學問の狀態は、なか〱、こんな風に安排されて居らぬ。又、わたくしは學問が、こんな風に、何時、如何なる國に於て安排されるに到るかをも知らぬものである。之れが實現の障害たるものに、侵略主義ある、保護貿易が行はれて居る。然し、國際間にしては、戰爭があり、一國內にしては個人と個人の間に嫉妬があり、階級と階級との間に、憎惡、反目があるに拘はらず、こゝ、二百年來、文明諸國の大勢は、徐々と、しかし、確りと、尠なくも是れに似た狀態に近よつて來て居ることをわたくしは信ずるものである。固より、實際は自づから、もつとづつと、複雜で、且つ不規律になつて居るが。

　わたくしは、こゝに告白する。畢竟するに、學問上に於ける國民主義は、一つの理想である。然し其れはあらゆる他の眞正の理想と等しく、純ら、今日、世界に於ける實際の事實と、傾向とを醇化して作られた理想である。隨つて、急には其れの目的とするやうな狀態は一般に實現されることはむづかしいが、むづかしいに極まつて居るが、其れは、個々に、そして、協同に各文明國をして、一層善き狀態を運出し、體出せしめるに與つて一つの大なる勢力となつて行くものである。其れは、各文明國をして、其れの內生活に於では、効果を滋さしめ、其れの國際關係に於ては、協同を長ぜしめるところのものである。

　フリイドリツヒ・リストは、一國の經濟に因んで、始めて、わたくし共のために、眞の理想主義の意義を明らかにしてくれた人物である。一國に取つて、眞の富は靜的ではなくして、動的でなければならぬ。一時貨

物に於ては、損失を冒しても永久に、富を産出する能力の増加を獲得するのが、眞の富であると彼れは、考へたのであつた。そして、この精神に遵つて、彼れは自國の經濟の獨立を鼓吹したのであつた。されば、彼れが從來の一般經濟學(Political Economy)に對する反襯として、おのれの主張して居た學説を、國民經濟學(National Economy)と命名したのには、十分の意味があつたのである。

學問上に於ける國民主義の目的とするところも、總べての文明國をして、各、自國の生活を中心として、獨立の學問を有つことに依つて、出來るだけ强烈に、出來るだけ、有效に、其れの境遇と資力とをはたらかしめることに在るのであるが、學問其のものの性質よりして、(こゝに詳述することの困難ないろいろの事情から)他國との交渉は、リストが經濟に就いて考へたものより、一層自由であり、一層寛紘であらねばならぬ。つまり、其れは、一面に於て、國民的であると同時に、他の一面に於ては國際的であらねばならぬ。さうでなければ、(わたくしの主張する意義と理由とに於て)反つて自國に取つての學問の獨立の害される場合が尠なくない。

以上は、學問上に於ける國民主義に關するわたくしの主張である。そして、わたくしはこの主張を取つて之れをわが祖國と、同胞とに對つて鼓吹する者である。

民本主義の意義を說いて再び憲政有終の美を濟すの途を論ず

法學博士 吉野作造

はしがき

大正五年一月、予は本誌に於て「憲政の意義を說いて其有終の美を濟すの途を論ず」の一文を揭げ、同九月「國家中心主義と個人主義の對立・衝突。調和」を論じた。兩者共に其の當時の論壇の問題に上つたのは、予の甚だ光榮とせるところであつたが、然し當時は思想も熟せず、且つ匆卒の間に稿を起したので、今日より見れば固より慊らぬ節甚だ多い。從つて一部の批評家からはいろいろの批難を受けた。其中には當らぬもあるが、又大に啓發されたものもある。而して其中の一部分の批評に對しては、當時同じく本誌上に於て辯明を敢てした事も亦讀者の知るところであらう。其後予は此等の批評論難に刺戟されて、更に精思攻究をつゞけた。中にも思想の熟せざると、思想表示の方法其宜しきを得ざりしとから招いた二三の批難については、自ら退いて最も細密の工夫を遂げた。斯くて今日憲政の本義に關する予の思想は、自ら前に比して幾分整つて來たかの感がしないではない。たゞ今日に至つても仍ほ變らざるは、當初予の言はんと欲した所のあるものに對する確信である。言葉を換へて云へば、予の民本主義に關する思想は今日幾分か醇正になり、且つ之に對する確信は今日益々深くなりまさりつゝあるを覺え

主權の所在
主權運用の方法

る。而して爰には思想に幾分の混亂あり、發表の方法亦其宜しきを得なかつたとすれば、玆に改めて別の形式により、再び憲政の本義を說いて識者の教を乞ふのは、强ち無用の業ではないと思ふ。

(上) 民本主義なる文字の政治上の二用例

(一)

民本主義とは洋語デモクラシーの譯である事、西洋で此語はいろ〳〵の意味に用ひられて居るが、其最も普通の用例としては、一つは主權の所在に關する說明として、又一つは主權運用の方法に關する說明としてである事、此二つのものは、もと全く別の觀念に屬するが故に、之を同一の言葉であらはして其間觀念の混同を誘致するのは學問上不便である事、從つて邦語に之を譯する時には、其あらはす所の觀念の差によりて別の言葉を用ふるを便とし、かくて一を民主々義と呼び、他を民本主義と名づけし事等は、先きの論文に於て詳しく之を說いた。此用ひ方は、予が之に倣ふ前より既に殆ど世間普通の用例となつて居つたやうであるが、其後も此例に倣ふもの、學者操觚者の間に甚だ多い。

然るに、當時予の斯く使ひ分けしに對して、世上之を批難する者があつた。第一の批難は、西洋では斯く使ひ分けた例がないといふのであつた。成る程、西洋では一概に皆デモクラシーと云つて、其間に言葉の上で何の區別を立てない。デモクラシーの定義としてよく引かるゝリンコルンの言葉、即ち「人民の、人民によつて、人民の爲めの政治」は、明に民主民本の兩觀念を包含して居る。併しながら、之は亞米利加のやうな民主國の人なるが故に、斯く兩者を區別せずに用ゐたので、之が轉じて獨逸邊に於て使はるゝ事になると、我々は明白に觀念上此兩者の區別の明に存在して居るを認むるのである。此事も予輩は先に多少詳細に說いたのであつた。尤も西洋に使ひ分けた例がないから、日本でも使ひ分けるのがわるいといふ說明は、學問上

の議論としては固より一顧に値しない。

第二の批難は、予の所謂民本主義は、結局押し詰めると矢張り民主々義になる、民本主義など、云ふのは、畢竟装を變じて人を欺くの類で、寧ろ初めから民主々義と云ふの直截簡明なるに若くはないといふ説であつた。之はお前の説は結局民主々義になるといつて、批難する意味で説いた人もあるが、又結局民主々義の方がよい、何を苦んで民本主義など、保守思想に阿ねる態度を取るのかと云つて批難した人もある。孰れにしても、此説は民本主義といふ文字に更に二つの異つた使ひ方のある事を明かにせざるの論である。此點を實は予輩の先きの論文でも餘り明確に説明して居なかつた。先きの論文で予は、政治上で云ふ民本主義には二つの内容があるとして説いたのであつたが、併し、此は正確な説明ではなかつた。實は民本主義と云ふ文字に更に二樣の異つた意味があると説くべきであつた。此事は尚次に更に詳しく説く積りであるが、今簡單に玆に之を述ぶるならば、民本主義は、時としては人民の自由を主張する主義として用ひられ、又時としては人民の參政權を主張する意味に用ひられるのである。而して人民の自由を主張する意味の民本主義は、政治上の原則として決して絶對的の價値を有するものではない。他の之と相對照する主義、例へば「國家の名に於て人民の自由を拘束するの主義」と相並んで、初めて其値打を認めらるべき相對的の原則に過ぎない。此等の點も皆後に詳細に説く積りであるが、要するに自由の主張といふ意味に於ける民本主義は絶對的の原則でないといふ事は、豫め之を記憶するを要する。然るに今若し人あり、十九世紀初頭に於ける憲政論の主張したるが如く、之を絶對的の原則なりと考ふるならば、こゝに始めて所謂民本主義は結局に於て遂に民主々義に落ち行かざるを得ないことになる。此種初期の未だ十分に發達せざる憲政思想に囚へられ、所謂個人自由の尊重に附するに絶對的の價値を以てせざる限り、民本主義と民主々義と結局に於て歸一すると考ふる筈はない。茅原華山君が「洪水以後」に於て、予のデモクラ

シーの使ひ分けを難んぜられたのも、畢竟此點の誤解から來て居るものと思はれる。

予の尊敬する福田博士も、或雜誌で、小野塚教授の著書の批評をなされた中に、「近頃民本主義民主々義の區別を立つるものがあるが、これは所謂福面人をなつかしむるものであつて、畢竟無意義の區別である」といふやうな事を說かれたと記憶する。この片言隻句によつて、博士が何の根據によつて斯く斷ぜられたかと推測するは、聊早計に失するも、若し兩者共に其本質を同じうするものなりといふ見地に立たるゝものならば、前記第二の批難に對する予輩の答辯は、又移して以て博士の說に對する答辯とする事が出來る。若し又兩者双方共人文史上に於ける發生並びに發達の根據を一にするといふ見地から說かるゝならば、予輩は之に向つて何等の異議を表しない。何となれば、兩者共に個人の自覺といふ近世に於ける最重大の出來事に根據して居るからである。併し乍ら、同を採りて之を一つの埒內に彙類するの不可なきと同樣に、異によつて之を分類するは亦固より何の妨げもないではないか。況んや、民主々義、民本主義の觀念は、學問上寧ろ之を明確に分つを必要とし、殊に日本に於ては無用の誤解を避くる爲めに之を別つを特に便利なりとするの理由あるに於ておや。且つ二つを故らに分けて、俗說に阿ねるやうな態度を取るのが學問上面白くないとしても、民本といふて然るべき所を、わざ／＼民主といふにも當るまい。單に理論を爭ふなら、國體論として如何なる國をも一種の共和國なりと說明することが出來ないとも限らぬ。なぜなれば總ての國家は、其本質に於て、之を構成する各分子の各々其直接の責任として經營する所に係るものであるからである。今や天下は一人の天下にあらず。この意義は何處の國でも今日は明白になつて居る。此意義に於ては、所謂民主國體も所謂君主國體も皆其本質を同うするといふならば、之も亦一說たるを失はない。國家の本質に關する社會學的說明は、正に此見地に立つものである。併しながら、法律政治の研究に於ては、國家に關する、

會學上の統一的說明を承認すると同時に、又其學特有の標準により其間に色々の區別をなすを必要とし又便宜とする理由もある。之と同じく民本民主兩主義の區別の如きも、徒らに學者が俗耳に入り易きを思うて爲すところの無駄な分類ではないのである。以上二三の批難あるに拘らず、幸にして民本民主の使ひ分けは今日多くの人の承認を得つゝある。言葉の適否は別問題として、「民本主義」は今や學術上の新熟語たらんとして居る。之れ亦學界の一進歩たるを失はない。併しながら、今日の學界は民本、民主の兩主義を分つに止つて、その所謂民本主義なる言葉に更に二つの觀念上の細別ある事を顧みない。此點は吾輩も從來明晰に之を論じて居なかつた。而して此點を明かにしない事が、實に學界に於ける從來の一缺點たると同時に、又民本主義が動もすれば無用不當の誤解を受けて、識者の十分なる諒解を得なかつた所以であると思ふ。憲政の本義も亦、實に此點を明かにすることに依つて、始めて十分に其眞諦を闡明することが出來るのである。

（二）

民本主義なる言葉によつてあらはさるゝ觀念に、二つの區別ある事は、予は初め全く氣附かないではなかつた。只前論文に於ては、予は之を民本主義の二つの內容といふ風に說明を試みたのであるが、之は正しい解釋ではなかつた。一つの民本主義が其中に二つの內容を有するのではない。一つの言葉が政治上に於て二つの異つた觀念をあらはす爲めに用ひられたと觀るべきである。然らば、如何なる二つの觀念が民本主義なる言葉によつて云ひあらはされて居るのかといふに一つは政權の運用によつて達せんとする目的（卽ち政治の方針）に關する或る主義であり、他は政治の目的を最も有功に達し得べき政權運用の方法に關する或る主義である。前者は政治の實質的目的に關する主義であり、後者は政治の形式的組織に關する主義である。此二つは全く別個の範疇に屬するものであつて、兩者相伴つて一つの觀念を構成すべきものではない。此等の點は尙ほ少し詳しく說明するの必要がある。

第一の政治の實質的目的に關する主義とは、要するに何の爲めに政治をするかの問題の解釋に外ならない。近世の所謂立憲政治はもと、其起源に於て、此問題を解釋せんが爲めに現れたものである。從つて、十八世紀末から十九世紀の初めにかけては、「何の爲めに政治をするか」と極めて矢釜しい問題であつた。而して之に對する答案は當時極めて簡單明白であつた。即ち政治は人民全體の爲めに爲すべくして、君主又は少數貴族の爲めにすべきものにあらずといふにある。蓋し當時の歐洲諸國は、封建時代の餘勢として、國土人民は君主の私有物に過ぎずといふやうな觀念が行はれ、從つて君主一家の名聞利祿を計るのが、即ち政治の目的であつた。而して君主の仕事を助くる爲めの少數貴族はまた、君主の周圍を圍繞して之と利害休戚を同じうし、而して實際政治に對する君主の權はやがて君側の貴族に移るに至れるの結果、貴族階級の名譽利害は亦自ら君家のそれと同じく政治の目的とならざるを得ない。彼等の賢明なるものは、時に人民一般を慈むものなきに非りしも、斯の如きは其最も醇正なるものと雖も、畢竟目的の爲めの手段たるに過ぎない。多くの場合に於ては、寧ろ治者の利益は被治者の利益と合致せず、一般人民の利益幸福は少數者の爲めに蹂躙せらるゝを常とする有樣であつた。而して斯かる狀況は、佛國に於て最も甚だしとせられて居つた。之が個人の自覺を促すの原因となつたのか、或は個人の自覺の著しく動いた佛蘭西が丁度、斯かる狀勢にあつたから一層個人の覺醒を同國に於て助長したのか、要するに政治の目的を少數階級の名聞利祿に置く事に反對するの聲は、先づ佛蘭西に於て擧げられたのである。尤も當初佛國に於ては、政治の目的は一般人民の利福にあるべしといふ積極的方面よりも、少數者の利福を以て政治の目的となすべからずとの消極的方面が盛に主張せられ、其極少數者の地位特權は之を破壞損滅せざるべからずといふ運動にまで進んだ。斯かる極端論は暫らく別問題として、要するに十九世紀當初の政治思想は、政治の目的に關する舊來の思想に對しての疑ひから出

發し、政治は畢竟人民一般の爲めに爲さるべく、其爲めには先づ一般人民の自由をば少數者の抑壓から解放せねばならぬといふ方面に著しく發達した。之が當時の所謂憲政思想の要諦であつた。而して當時の政治思想の要求する所たる、傳統的少數階級の特權の否認とか、多數被治者の解放とか、又は國家の名によつて與へらるべき利福の普及とかいふ樣な事は、當時總じて個人自由の尊重といふ名目の下に概括せられ、自由の尊重が即ち憲政の要義であり、又民本主義の要求であると考へられた。之れ今日でも仍ほ立憲政治の根本義は個人の自由を尊重するにありと説く者尠からざる所以である。

個人的自由といふ事に餘りに執着するの結果、初期の憲政思想は、動もすれば、國民の間に階級的反感を持ち來たさんとする弊害があつた。なぜなれば、個人自由の主義を貫徹する爲めには、多年維持し來つた特權に未練を殘すところの少數階級と衝突しなければならなかつたからである。而して此種の衝突は、少數特權階級が其階勢的勢力を依然として維持し得る保守的國家に於て、一層甚だしからざるを得ない。故に全體の氣風が保守的であればある丈け、憲政思想の發達は著しく階級的反感を伴ふことになる。斯くして當時の所謂民本主義は、一面に於て階級戰爭を伴ふやうにも見えた。そが往々勞働者對資本家の階級戰爭を主張する社會主義と相提携したのもつまり之が爲めである。從つて今日に於ても、民本主義を誤解して、下層階級の勢力を結束して上流階級に反抗するものなりと批難する者が少く無い。否、民本主義者を以て自ら任ずる者の間にも、動もすれば、此種の上流階級反抗の態度を以て主義に忠實なる所以なりとする者すらもある。尤も少數階級が頑迷にして其傳統的特權に餘りに執着すれば、民本主義者は、其理想實現の前途に横はる第一の障礙を除くといふ意味に於て、已むを得ず戰を之等上流階級に挑むの必要に迫らるゝ事もあらう。併しながら、階級の爭をするのが本意ではなくして、自由の尊重が民本主義の根本義であることを看過して

はならない。此點は實に民本主義の階級戰爭其物を以て第一義とする社會主義者と異る要點である。只上流階級が頑迷なれば、民本主義の主張も遂に階級戰爭を馴致するに至るのが自然の勢である。故に國內に階級戰爭の忌むべきものなからしめんと欲せば、先づ以て上流階級の蒙を啓發する事が第一の必要である。其外、西洋の民本主義の議論の中には、社會主義の議論にかぶれて徒らに上流を呪ひ、從つて又一般に社會的權威を蔑視するの風を帶ぶる者なきに非るを以て、此等不純なる民本主義論の流行も亦、上流階級の頑迷と共に、階級的反感を持ち來たすの一責任者として其罪を糺さざるを得ない。只醇正なる形に於ての民本主義は、決して國內に於ける階級的對立反感を主張するものではないことは疑を容れない。

個人的自由の尊重といふ意味の民本主義說は、抽象的に個人の自由を尊重すべしといふ立脚地から一步を進めて、やがて最大多數の最大幸福といふ立場を取るに至つた。個人の自由といふ考を、抽象的の境界から具體的の境界に引卸せば、最大多數者の自由幸福を圖るといふ事になるのは當然である。幸福といふ文字の中には、餘程功利的の觀念が加味せられてあるけれども、最大多數に着眼する點は矢張り民本思想に淵源するものなるを失はない。最大多數と云へば、其反面に於て、最少數者の自由は之を省みざるが如きも、併し之は全く省みなくともいゝと云ふのではなくして、「出來るならば總ての人の、止むを得ずんば最大多數の自由幸福」を念とする意味のものであるから、理想は總ての人を着眼するにある事は疑ない。斯くして民本主義は、一轉して最大多數の最大幸福を主張する政治主義となるに至つた。

自由尊重の說にしても、最大多數の最大幸福說にしても、此種の政治主義が行はるゝに對して常に反對の立場に立つ者は少數階級の特權である。之は多年勢力を占め來つた惰勢の結果として、事實上に於てはなか〱有力なものであつた。けれども、理論上に於ては最早その特權を主張すべき彼等の根據が無くなつたので

結局は引き下るの外はない。故に彼等は、民本主義的政治の發展に對しては事實上相當に有力なる抵抗は試みつゝあつたが、而かも思想上に於ては、漸次政界の表面から遠のき、之に代つて民本主義乃至自由尊重論が獨り跋扈跳梁する樣になつたのであつた。然るに、十九世紀の半ば過ぎ頃から、思想上これまで全能の君主たるの觀ありし民本主義に對して、有力なる一個の勁敵があらはれた。之は卽ち云ふまでもなく國家主義の思想である。共同團體の觀念である。人類の生活が團體の形に於て爲され、又爲されねばならぬといふ考へは固より最近の發生物でないが、團體を離れて個人の自由も權利もないといふ思想は、少くとも十九世紀の初めに於ては、歐洲諸國民の一般に承認するところではなかつた。國家主義と個人主義との比較評論をするのは、玆に今予の仕事とするところではない。只十九世紀半ば過ぎから、國家主義の勃興が、從來の個人的自由の觀念に思想上の一大痛棒を加へた事を一言すれば足る。而して從來思想上屛息の姿であつて而かも事實上には仍ほ多大の勢力を擁して居つた夫の少數特權階級は、國家主義の勃興に乘じて、據つて以て自己の權勢を再び揮ふの好口實を見出した事も、また事實として之を承認せねばならない。

さて、國家乃至公共團體の觀念が明かになると、最大多數說は自然此中に捲き込まれた。團體其物を着眼する以上は、階級の爭は愚にして且つ危險であるは言を俟たない。玆に於て從來の古い形に於ける民本主義は、新しい國家思想と相容れない譯となつた。卽ち從來政治上金科玉條とせられて居つた民本主義は、國家主義の考が起るに從つて著しく其箔が剝げざるを得ない。然らば、此意味に於ける民本主義は、國家主義に蹴落されて全然廢つたか、又之を根本義とする立憲政治は爲めに全く其存在の根柢を喪つたかといふに、必ずしもさうではない。少くとも民本主義丈けについて云へば今日此主義は所謂國家主義の弊害を矯める爲めの主義として、矢張り政治上に依然其存在の理由を維持して居るのである。

何を以て斯くの如くなるを得るやと云ふに、所謂國家主義が其最も純粹なる理想的の形に於ては、必ずしも個人自由の尊重といふ事と相悖るものではないけれども、斯かる理想的の狀態は、いろ〳〵の條件を具備した上に初めて實現せらるべきものであつて、例へば本當に徹底した利己主義は利他主義と矛盾せざる筈なるも現實の世の中に於ては利己と利他とは兩極相反するの主義であるが如く、國家主義と個人主義とも亦今日の不完全な世の中に於ては明白に相對立するの主義と謂はざるを得ない。從つて、今日の時勢に於ては、專ら國家主義の根據に立つ政治方針は、利他利己相反するが如く著しからずとするも、多くの場合に於て個人自由の蹂躪となり、之が爲めに却つて國家の永遠の不利益を來さないとも限らない。現に我々は、國家當面の急に應ずるところの各種の施設が、往々にして個人の永遠の發達を阻礙する結果を伴ふあるの事實を屢屢目擊するではないか。固より予は今日政治上の原則として、國家主義を全然わるいと云ふのではない。只不幸にして所謂國家主義的施設は、其純粹にして最も徹底したる形に於て之を今日の時勢に行ふには六つかしいから、茲に他の一面に於て個人主義を加味する必要があると思ふのである。尤も無制限に個人の自由を立つるの非なるは云ふを俟たない。なぜならば、其極遂に無政府主義に陷らざるを得ないからである。けれども、今日の政治社會に於ては、もつと國家としての結束を强めたいと希望する點もあれば、又もつと個人の自由を解放してやりたいといふ點もある。中にも現今我國などに於ては、國家主義の名に隱れて少數特權階級が聊か跋扈し過ぎて居るやうにも思ふので、もう少し多數國民の利益幸福を計つてやるの必要はなからうかと考へらるゝ節もある。斯くする事を以て、政治上唯一の方針とすべしといふのではない。當節のやうな國家主義旺盛の時代には、少くとも其一面の弊害を矯むる爲めに、個人的自由とか、其利益幸福とかいふ問題に、も少し多く着眼する事が必要だらうと云ふのである。此意味に於て、所謂民本主義は、十九世

前半に於けるが如く之を絶對的の政治主義として主張するの根據はなくなつたけれども、國家主義と相並んで國家民衆の圓滿なる發達を期し得る爲めの必要なる一主義として、十分に存在の理由はあるとせらるゝのである。而して此意味の民本主義は、政治の方針に關する主義であるといふ事は始めから之を忘れてはならない。

（三）

民本主義なる文字は、政治の目的を最も有功に達し得べき政權運用の方法に關する主義としてまた用ひられて居る。前段に於て述べた意味の民本主義は、政治の方針に關する一つの主義である。元來政治の方針に關しては、其の唱へられ又實際に採用されて居るところの主義は一つではない。政治の目的に關する最高唯一の眞理が、今日まで未だ發見されて居ない結果として、止むなく第二次の眞理と認むべきいろ／＼の主義が今日現に代る／＼用ひられて居るといふ狀況である。而して其如何なる主義を實地に採用するにしても、今日の時勢に於て之を徹底的に行ふには、先づ其主義を十分に一般人民に納得せしむる事が必要である。今日は、民意の承認を基礎とせずしては何事も容易に行はれない時代である。其主義が所謂前段の意味に於ける民本主義であらうが、或は國家主義であらうが、又或は貴族主義であらうが、何れであれ、必ず民意の徹底的承認を得ざれば、結局十分に行はれ得ない。玆に於て政治の目的を十分達し得べき方法は只一つあると謂はなければならない。是れ卽ち「民意の尊重」に外ならない。玆に於て政權の運用に關しては、終局に於て民意を尊重せざるべからず、民意尊重の原則の上に政治上の制度を建てなければならないといふ主義があらはれて來る。民本主義といふ文字は又此意味に用ひられるのである。

此の第二の意味に於ける民本主義は、主權者から見れば民意の尊重である。人民から見れば、國權の運用に參與せしめられん事の要求である。又之を客觀的の制度といふ立場から見れば、參政權の賦與又は獲得に

よつて人民が結局に於て政治の方針を左右するといふ事である。今日の時勢に於て、主權者が此意味の民本主義に據らずして經綸を行ふ事能はざるは、極めて明白の事實である。如何に忠君愛國の念に富むものでも、今日の自覺したる國民は、政治上常に受働的の地位に甘んずるものではない。斯くして今や民衆は政界に於ける一個の積極的勢力である。斯う云ふ時勢に於ては、何んな立派な經綸でも、思想としては全く無力であつて、民衆の力によつて裏附けらるゝにあらずんば決して政界の實際的勢力となる事は出來ない。國家の運命を指導し左右する精神は、如何なる場合に於ても、少數賢明の人の頭腦から出て來るといふに誤りはないが、そが少數賢人の思想たるに止る間は決して國家を動かすの力とはならない。此等の思想に實際的勢力を與ふるものは、過去に於ては所謂治者の個人的勢力であつたが、今日に於ては寧ろ一般被治者の勢力と謂はなければならぬ。而して此一般民衆の力を取つて之を我が力とするは、事甚だ面倒なやうであるけれども、遣り樣によつては又案外六つかしい仕事ではない。何故なれば、凡ての人は生れながらにして英雄を崇拜するの念を承けて居るからである。初め少々遣り方を間違へば後ではどんなに努めても如何ともする事が出來ないが、初め其道宜しきを得れば、後では少し位の失敗が有つても如何樣にも始末が着くといふのは、多數者を相手にする人々の常に經驗する所である。されば主權者の立場より見て所謂民本主義は、必要でもあり、又之を採るに大した面倒も無いものと言はなければならない。併しながら從來の歷史上、主權者並に之を圍繞する所謂治者階級は、不明にして民本主義の採用に躊躇するを常とした。否、彼等は啻に政權を壟斷して民衆の參與を拒んだのみならず、同時に又民衆の利害幸福を十分保護尊重しなかつた。故に歐洲近代の個人的覺醒は、遂に自由の主張と共に政權の獲得を彼等に迫るに至つたのである。是れ所謂民本主義は人民の側よりする參政權の要求としては叫ばるゝに至つた所以である。

當初參政權要求の根據は、所謂天賦人權論に在り、もと〳〵主權者たる人民の當然の要求なりとして主張された。今日は最早天賦人權論は其理論上の根據を失つた。人民主權論も民主國以外に於ては其儘に通用しない。けれども參政權の要求は、此等の舊い根據が崩れても、今尙之を主張する別個の根據を見出して居る。そは、今日の國家思想が明かになつた時代になつても、國家は畢竟我々個人の集合體で、我々は卽ち國家を經營する上に銘々積極的の責任を有つて居るといふ觀念が明になつたから、參政權は、此等國家的責任の個人的分擔といふ事に新しい根據を見出したのである。故に理論上の根據は昔と今と變つても、參政權を要求すべき理由は依然として殘つて居る。尤も國民の中には、責任分擔の觀念を十分に有つてゐないものあることは疑ない。斯う云ふ無智なものには參政權を與へなくても可いといふ議論もあるが、然し參政權を與ふる事によつて責任の觀念を促し且つ刺戟すべしといふのが寧ろ正當の議論であらう。況んや時勢の進步は益々責任の觀念を明かにし、少くとも國民は益々國家の運命に就て無關心で居られなくなつて居るに於てをや。斯の如き今日の時勢に於て、所謂民本主義の採用に反對するのは、是れ明に時勢に逆行するものである。要するに參政權の要求は至當の要求である。此要求を容れる事が又、主權者をして其任務を最も確實有効に盡し得る所以である。之に依つて凡ての國民に國家的精神を起さしめ、凡ての分子が明瞭に目的を意識して、其上に國家が充實したる根柢のある發達を爲す事が出來る譯になるから、民本主義の大に之を採用して些かも遲疑する所なかるべきは明白の道理である。政治の目的は何にあれ、之を有効に達して國家を健全に發達せしむるには、此意味の民本主義に據らざる可らざることは、今日の定論である。而して現今憲政の本義に關聯して稱へらるゝ所謂民本主義は、專ら此意味に於て說かるゝものである。

(四)

以上述ぶるが如く、從來民本主義なる文字は、其專

ら政治的に用ひらるゝ場合に就て見るも、二つの異つた意味に用ひられたのである。唯之によつて表はさるゝ二つの觀念は、偶々同時に相混融して現はるゝを常とせしが故に、人多く其間の差別を見損ひ、漫然として等しく之を民本主義と呼び來つたけれども、少しく物事を精密に論ずる場合には、此兩者の間に重大の區別ある事を明かにすることが必要である。而して又其相混融して用ひられるに當つても、時と場合とにより、其一方が或は強く或は弱く響いて居つた事も、亦見逭してはならない。

此二つの觀念は、相混融して用ひらるゝを常とせりとは言へ、從來學者が全く其間の區別を認めなかつたのではない。我國に於て最近表はれたる政治論に就て之を見るも、例へば大山郁夫氏の去年の秋「大學評論」に發表せられたる「デモクラシーの政治哲學的意義」と題する論文の中には、予の第一の意義に於ける民本主義をば特に「シヴィル、リバーテー」を重んずるの主義といひ、第二の意義の民本主義に對しては「ポリチカル、リバーテー」を主張するの主義と名付けて居られる。浮田博士が去年の暮「歐洲戰と民主政治の新傾向」と題して「太陽」に掲げられたる論文の中には、前者を自由主義といひ、後者を民主主義と唱へて居る。美濃部教授は之も去年の暮、「法學協會雜誌」に連載せられたる「帝國政體の基礎原則」の中にて、前者に自由主義の名を與へ、後者には民政主義の名稱を付して居る。是れ皆諸氏の學術的研究の結果が、兩者の間に根本的の差別を認めざるを得ざるに至つた事を語るものである。之に如何なる名稱を與ふるやは主要の問題ではない。唯其間に實質上の差別ある事を認むるのが肝要である。

以上の如く、兩者の間に明確なる區別を附する事は必要であるが、更に之を區別した結果として殊に力說するを必要とする點は、政治上の原則として兩者は根本的に其價値を異にして居るといふ事である。卽ち前者は相對的の原則であつて、後者は絕對的の原則である。少くとも今日の政治學界の通說は斯く認めて居

ると信ずるのである。

玆に相對的といふ意味は、之のみが唯一の眞理ではない、他にも之に相對する眞理があり、此と彼と相並ぶか若くは相交代する所に最後の絶的對眞理が隱れて居るといふ意味である。抑も眞理はもと一あつて二あるべからざるの理なるも、其唯一の絶對的眞理の何たるかは、事實我々に分つてゐない場合が多い。社會的現象に關しては斯くの如きは殊に多い。併し絶對的の眞理が分らないからといふて、何等爲す事無くして居ることは少くとも政界にては許されない。我々は、白い米が何故赤い血になるかといふ理論上の説明を納得し得ずとも、兎に角飯は喰はねばならぬ。國家を指導するに就ても、其最高絶對の眞理が我々に分らないならば、第二次の眞理――多くの場合に於ては複數の相對的原則の器械的の組み合せになる――を實行する事によつて滿足しなければならない。此意味に於て予輩は、政治の目的に關しては、絶對的眞理を立する事能はずといふ。而して第一の意味に於ける民本主義は、之に對する國家主義と相並んで、政治の目的に關する相對的の原則たるものと考ふるのである。尤も或特定の人が、國家の目的に關して唯一最高の眞理を握つて居るといふ確信を有つて居るものはあらう。特定の人の主觀的思想としては固より最高絶對の眞理はあり得るならんも、今日迄未だ客觀的に承認せられたる絶對の眞理は無い。故に客觀的科學者の立場から云へば、政治の目的に關しては、今日の所、相對的原理を立するの外は無いと謂はねばならぬ。從つて民本主義のみを取つて唯一の眞理なりといふ事は出來ないのである。尤も此結論に達する迄には歴史上相當に長い時間を要した。初めは民本主義は久しく絶對的眞理なりと信ぜられて居つた。今日でも前代の舊思想を無批判に遵奉して斯く信ずるものも無いではないが、其誤りなる事は玆に之を明白に指摘して置く必要がある。何故なれば今日民本主義を此意味に解し、且つ之を絶對的眞理なりと主張するものと誤認して、見當違ひの批難を加ふるものが少く無いからである。民本主義を此の

意味に誤解して之を一種の危險思想視するは、また民本主義と民主々義とを混同するものと、其謬妄の程度を等しうするものである。

次に第二の意味に於ける民本主義を絕對的原則なりといふは、之を以て唯一絕對の眞理となし、人多く疑はざるをいふのである。此第二の意味に於ける民本主義を疑ふものも世間に全く無いではない。併し之を疑ふは、多くは重大なる誤解に由るか、若くは官僚主義の妄謬に溺れてゐるもので、冷靜なる學界の定論は今日最早一に歸して動かない。故に前に述べた如く、政治の目的に關しては絕對の眞理の客觀的に一定せざるものあるも、政權運用の方法に關しては、今日民本主義を唱道するに、何等の異論が無いと言つて可い。若し異論がありとすれば、そは民本主義による政治組織即ち今日の立憲制度其ものに對する疑ではなくして、立憲制度の運用が未だ十分に民本主義の精神を貫かないといふ事に對する不滿である。換言すれば民本主義其ものに對する疑ではなくして、民本主義を十分徹底せしめて居ない所から起る所の、「現狀に對する不滿」である。現狀に對する不滿が、一轉して失望の聲となり、從つて民本主義其ものを呪ふが如き極端に走る者もあるが、斯の如き例外の極端論は何事にも附隨ふもので、獨り民本主義に限つた事ではない。

要するに今日の政界は、假令現在の制度に十分滿足の意を表してゐないとしても、現在の制度以外に更によりよき制度あるべしと考へて居ない事は明である。民本主義の政治組織に絕望して、他に別個の良法を探さんとして居ない事は疑はない。而して今日此意味の民本主義の行はるゝ所では、自ら政治の目的に關しても所謂民本主義の主張が盛であるが、併し又兩者は必然に相伴ふものではない。又事實上第一の意味の民本主義が著るしく眼に着いたからと言つて、之に對する國家主義の政治方針も決して忽諸にされて居るのではない。而して此國家主義的政治方針と雖も、之を今日十分に貫徹せしむるには、矢張り第二の意味の民本主義に據らねばならぬ事は明である。此意味の民本主義は、

之を十分に貫かざる時に却つて種々の弊害を社會に與ふるものである。故に此意味の民本主義は、本來飽く迄之を徹底せしむる事が必要であつて、どんなに極端に之を押し擴めても、決して社會に危害を與ふるの憂はない。

(中) 憲政の發達と民本主義思想の變遷・

(一)

現代の憲政は、もと其根源を個人の自覺に發し、從つて民本主義を其根抵とすることは言ふ迄もない。或意味に於て、憲政は民本主義の要求を實現せんが爲めの形式である、民本主義は立憲の制度によつて其理想を實現せんとするものであると言つて可い。

併し民本主義と言つても、それには種々の意味がある。然らば憲政と密接の關係を有する民本主義は、其の中何れの意義のものであるか。之を明かにするには、民本主義と憲政との相互に相依つて發達して來た沿革を概觀することが必要である。民本主義其ものも種々の沿革を經て發達して來たと同じく、之に關聯して立憲政治の發達にも種々の沿革がある。

抑も今日の立憲政治は、能く人の云ふが如く、其形態を英吉利に取り、其思想を佛蘭西に取つたものである。其意味は、佛國の人民が十八世紀末に於て先づ政治的に覺醒し、君主貴族の專横なる虐政に憤慨して、一般人民の幸福を本とする新しき政治に憧憬した。此時勢の要求に對しては、いろ／＼の學者がいろ／＼の研究を以て之に答へたが、其中最も當時の人心に影響を與へたものはモンテスキューの研究である。彼の研究は、空論を避け、專ら古今東西諸國の實蹟に基いて政治の利害を比較研究し、遂に英吉利の政治が事實上一番よく人民の幸福を確保して居るといふ論結に達したのである。是に於て佛國の人は、新しい政治思想を滿足するの方式として英國の制度を眞似ることになつた。而して眞似られた英國の制度其ものは、當時佛國人の抱いて居つたやうな思想の直接の産物でないか

ら、佛蘭西に移植された後の英國式の制度は、最早英國固有の制度其儘ではない。且つ佛蘭西革命によつてまた著大な影響を受けた英國の人心は、今度は佛國を眞似て佛國流の精神で自國の制度に一大變を加ふる事になつたのであるが、之がまた更に大陸の方に影響する。斯くして漸次今日の憲政を確立するに至つたのであるが、要するに其最も舊き形に於ける憲政は、其形態を英國に借るも、之を動かす基礎的の思想としては飽く迄佛國のものを採つたのである。從つて當時の立憲政治の憑つて以つて立つ所の思想上の根柢は、之を當時の佛國の形勢に求めなければならない。

然るに前にも述べた如く、當時の佛國人の政治思想は、先づ以て少數階級の專制壓迫に對する反抗として現はれた。そが極端に走つた結果は遂に大革命となつて少數階級の撲滅を斷行するに至つたけれども、要するに、其根本は少數の虐政より多數者を解放する事に在る。多數者の自由幸福の保護尊重に存する。之が偶々當時また他の方面から盛に唱へられた天賦人權說と結んで、所謂「個人自由の保障」といふ事が政治の最高理想とせらるゝに至つた。所謂民本主義が、當初此意味に於ける「自由の保障」の謂であつた事は先にも述べたが、立憲政治とは畢竟自由を保障する爲めの政治なりといふ舊時の思想も、亦源を此沿革に發するものである。而して當時の人が如何に此點に重きを置いたかは、佛國革命後革命市民の第一に發表したるものが、バスチール牢獄の襲擊の後約一ケ月にして公にせる「人權宣言」である事によつても明である。其後今日の形に於ける憲法が造らるゝに至つても、立法者は常に個人の自由の保障條款を其缺くべからざる要素として規定する事を忘れなかつた。今日我帝國憲法が其第二章に於て「臣民の權利義務」に關し、數ケ條の細かい規定を掲げてゐる所以のものは、自ら時勢の變に促されて其中に義務の規定一二ケ條を併せ掲げてはあるけれども、畢竟は自由の保障を以て憲政の根本義とした舊時代の餘習を踏襲したものに外ならぬ。尤も此當時と雖も、自由の保障と共に人民參政の權利といふ考も

全く無いではなかつた。從つて立法議會に關する規定はまた憲法の主要なる部分を成して居つたが、併し當時の人の之に附する價値は第二段であつて、自由保障が常に第一に置かれてある。立法議會は僅に其の爲めの必要機關として重んぜられたに過ぎない。されば人民の參政權が現代の政治に於て一番重いものであるとする思想は、實は割合に新しき發達に屬するものである。

（二）

立憲政治の根本義を自由の保障に置くの説は、今日でも往々にして之を信じて居る人を見る。此主義に基いて憲政を運用せざるべからずとする者もあれば、又憲政とは斯う云ふものであるが故に宜しくないと批難する者もある。

立憲政治を右の意味に解釋する時は、一部の論者の批難するが如く、立憲政治は畢竟個人主義的政治に陷らざるを得ない。何となれば、個人の自由を尊重するに過ぐるの結果は、國家的團體を第二次に置くに傾かざるを得ないからである。而して此種の思想は、たま〳〵人格の尊貴を説く基督教思想と合致するところあるの結果として、西洋に於ては、なか〳〵其誤りが悟られないやうだ。況んや個人を尊重すべしとの議論はまた政治の方針として一面の道理あるに於てをや。何故なれば、個人をして完全に發達せしむることが又實に國家の目的の一つであるからである。併しながら、此思想が極端に走れば、前にも述べた如く、其落ち行く所は無政府主義である。政治上當然の結論として無政府主義に陷ることに感情上多大の不滿を抱く實際的の英國人は、同じく此見地に立つて、久しく國家を「必要なる禍惡」とする妥協的態度に甘んじた。國家と云ふ强大なる强制的組織の中に生活するの事實を前提として、而かも個人の自由を絶對に尊重すべしとする思想を採れば、自ら斯くの如き不徹底なる態度に出づるのは怪むに足らない。斯かる態度は單り英國ばかりでなく大陸にもあつた。十九世紀中葉に於ける歐羅巴諸國の政治學が、國家の權力の個人の自由を侵し得べ

き正當の限界如何といふやうな問題の研究に全力を注いだのは其一つの證據である。而して此種の態度は、其後個人の自由を個別的に着眼するの非を悟つて後も、精々最大多數の最大幸福と云ふ位に落ち着くの外はなかつたやうである。

此等の思想は素より最近の國家思想に合はない。國家は人民の爲めに存在する事は一面に於て疑無き所なるも、國家の中に組織せられたる人民は、個人の器械的集合ではない。組織せられたる全體を離れて又個人の生存も考へられない。故に抽象的に個人的自由の保障を憲政の唯一の目的とするのは明白に誤りである。併しながら又他の一面に於て、今日の國家は個人の堅實なる發達を基礎として夫れ自ら發展するものなるが故に、全然個人の自由を無視するものではない。故に我々の今日の團體生活の理想は、之を國家的組織と個人的自由との調和するところに求めなければならない。故に今日の國家思想は、個人の自由を絶對的に主張するものを排斥するけれども、又全然之を其中に包含せざるものと見ることは出來ない。是に於て我々の政治上の理想は、國家組織を强盛にすると同時に、又個人の健全なる發達を圖るの原則を立するに在りと謂はなければならない。

抽象的の原則としては、右の理論に何人も異議はなからう。併しながら、此れ丈けでは只一個の內容の無い抽象的原則に過ぎない。抽象的原則は如何なる場合に於ても普遍的妥當性を有ち得る。併しながら、之が現實に適用されて其目的とするところを貫くを得る爲めには、時と處との制限を受けて、夫れ相當の內容を得なければならない。斯くして具體的の立場に原則を引き下すと、こゝにいろ〳〵の問題が起る。例へば政治の理想は善政を布くに在りと言ふは可い。併しながら何うする事が善政を布く所以なりやに至つては、議論自ら別れざるを得ない。國家の爲めに一臂の力を盡すといふ考には何人も異議は無い。然れども如何にする事が國家の爲めになる事かは、人に依つて其觀るところを異にする。我々は民本主義を徹底的に行ふ事を

以て國家の爲めなりとするに反し、現内閣の諸公は官僚主義を採る事を以て國家の爲めなりとするであらう。要するに主觀的には其觀るところに各々動かざるものありとするも、客觀的にはいろ〳〵の説が有つて一定するところなしと言はなければならない。かういふやうな事は政界には頗る多いのである。而して客觀的の標準が定らずとすれば、自ら現狀に對して是非の批評をなし得ざるの道理なるも、併し事實に於て、國民多數の常識は又何となしに現狀に不滿を抱くといふ事もある。之も亦政界に於て事實我々の經驗する所である。現狀に滿足せず、而して如何に之を改革すべきかの最後の標準が明かならずとすれば、差當り我々は目前の缺陷を補正するの方法を講じて甘んずるの外に途は無い。是れ政治界に於ては、目前の利弊に對する功利的見解が常に主張せらるゝ所以である。而して功利的見地に立つ以上は、或時には甲の主義を採り、軈て其弊を見るや之を矯むる爲めに更に乙の主義に移るといふやうになるのは又當然である。無論現代の政界は、功利主義に依つてのみ動くのではない。國民多數の常識が何となく現狀に不滿を表するといふが如きは、是れ取りも直さず或一種の理想主義が國民を不知不識動かして居る一つの證據である。不徹底ではあるけれども、理想主義に動き、又功利的立場に立つて目前の利弊を調節するといふ事は、今日の政界に於ける實狀である。

之と同樣の事は外にも其種類が多い。例へば租稅に就いて之を見るに、所謂負擔の公平といふ事は財政學上の第一原則である。併しながら如何にする事が負擔の公平なりやは學説區々として一定しない。けれども國民の常識は課稅組織の現狀にそれとなく不滿である。そこで所得稅に累進率を用ひて見たり、或は相續稅に同樣の方法を用ひたり、其他いろ〳〵の方法を講じて上流階級より尚多くの租稅を課徴せんとして居る。次ぎに又勞働資本の間に於ける所得の分配、換言すれば勞働條件の決定といふ事についても、之を公平ならしめざるべからずといふ點については何人も異議

は無い。只所得の分配を何の點に定める事が公平かといふ事については更に定論が無い。けれども國民多數の常識は、資本家が不當に餘計の分配を取り過ぎて居るといふ點については一致して居るやうだ。こゝに於て勞働者は社會主義を主張するに至るが、國家の方面からも、或は最低賃銀法の制定とか、或は勞働者の各種の保護とか、いろ／＼の、謂はゞ姑息的手段を講じて勞働者の境遇の改善を計つて居る。今日の所謂各種の社會政策は、勞働條件の公平といふ事に關する最高絕對の標準が發見されない爲めに採用せらるゝ所の第二次の原則であると言はなければならない。國家全般の政治の方針についても亦同樣の事は云へる。今日國際競爭の激しき時勢に於ては、國家の强制組織を尙一層鞏固にする事は必要である。けれども國家の名に於て個人の自由の不當に蹂躪せられて居るのは又之を默過し難い。所謂國家主義と所謂個人主義とを如何に調和すべきやの絕對的原則は、極めて必要であるけれども、不幸にして今日未だ發見し得られずとせば、相對的原則として國家本位の政策と個人本位の政策とを相並んで用ひよといふのは、亦已むを得ないと言はなければならない。

（三）

斯くて予はこゝに序を以て『國家中心主義と個人中心主義の對立・衝突・調和』（大正五年九月號本誌所載の拙論に對する二三の批難に答へて置きたい。無論あの論文は思想の整つた會心の作とは思はない。けれども、所謂國家中心主義の跋扈に對して個人中心主義的經營施設の必要を高調するには、相當に努めた積りであつた。而して之に對し世上の評論家より、國家主義と個人主義との二元的對立を容認するのが誤りであるの、もつと立ち入つた最高唯一のイズムに說き至らないのが間違ひだのといふ非難を蒙つたのは、予の些か意外とするところであつた。成程日本國家を指導すべき根本原理の探究といふ見地から見れば、二元的對立の基礎に立つて議論するのは間違つて居るかも知れない。併しながら、斯は今日の科學的政治學を知らざる

人の云ふ事である。

凡そ政治の研究に於ては、一面に於て吾人の國體生活の最高の目標を論及するの必要あるは、論を俟たない。政治的活動に對し絶對最高の指針を與ふる事は確かに政治學の主要なる任務の一つである。而して斯くの如き最高指針の一あつて二あるべからざるは、亦多く云ふを俟たない。或問題については眞理は常に一つでなければならないからである。併しながら、眞理の一あつて二あるべからざるは理論上の事にして、個人個人の主觀に於ける斯かる唯一の最高眞理は、古往今來客觀的に決して一に歸した事はない。故に國家を客觀的に取扱ふ科學者の立場から云へば、或特定の人の主觀に於ける所謂唯一の眞理のみに、國家の指導を托するは危險であると云はなければならない。故に一旦或眞理に偏倚して、若し其結果に何等か不便乃至危險なるものあらん乎、我々は潔よく之を捨てゝ他に移るの必要がある。故に客觀的に政治を觀る科學者は、常に功利的の立場を離れず、利弊を按じて政策を變易するを怠る事は出來ない。而して斯かる科學的見地に立つて、政治の方針に關する眞理を見る時、何うしても、個人主義とか國家主義とか、或は保存主義とか自由主義とか云ふやうな、二元的對立の見地を取るのは、亦已むを得さる數である。政治の方針に關するイズムは一元ならざるべからずと云ふのは、主觀的に政治を觀る人の立場である。之を研究するものを或は政治哲學と云つてよからう。之に反して二元的對立の基礎の上に政治の方針を定めんとするは、客觀的に政治を取扱ふ人の立場である。之を研究するものを或は科學的政治學若くは單に政治學と云ふて差支あるまい。而して政治家は常に哲學者でなければならない。如何に國家を導くべきかの絶對的眞理を主觀的に確持する人でなければ、政治家たるの資格がない。プラトーが國運の指導を哲人の任務としたのも、蓋し此意味であらう。けれども科學的政治學の立場より云へば、斯くの如き人に何時までも政治を托する事は好ましくない。さればと云ふて、初より主觀的觀念のない所謂オッポルチ

ユニストに國政を託するは又更らに危險であるから、そこで我々は結局、思想上の二元的對立と共に、政治勢力の二元的對立を承認し、此間の諸勢力をして相交代せしむるの仕組が一番いゝといふ結論に達するのである。是れ亦二大政黨の對立を主張する理論上の根據でもある。

客觀的政治學の見地より觀て、政治の方針が二元的ならざるべからずといふについては、多少の説明を要する。元來相對的意義に於ては、眞理は必ずしも一つや二つに止まらない。併しながら、實際の政界に於ては、如何なる眞理でも、思想としては夫自身無力である。之が實際の問題となつて勢力を主張し得る爲めには、數量的の基礎と結び付かなければならない。蓋し結局に於て數が最も多く物を云ふのが現代の特徴である。さて數的基礎の上に立つて彼等が現實の勢力を得んか爲めには、必ずや小異を捨てゝ大同に合せなければならない。出來る丈け多くを包容すれば、それ丈け銘々の特色が聊か鮮明を欠くに至るの嫌はあるも、亦他の一方に於ては現實の勢力はそれ丈け加はるのである。斯くして政界に於ける各種の主義主張は、全然其根本主義を沒却せざる程度を限りとして、小異をすてて大同に合するの傾向を有するものである。而して一國の政治上の意見は、民族、宗教、其他特有の事情を外にしては、過去の歷史の成果を尊重し、出來る丈け現狀に執着せんとする者と、理想に憧れて現狀に不滿を抱き、現在を打破して新天地を將來に開んとする者との二つの傾向に分るゝものである。故に他に其國特有の事情あるに非る限り、一國の政治思想は自ら相對立する二つの傾向に彙類さるゝものと云ふことが出來る。主觀的には、過去を重んずるを以て國家の利益ありとするものあり、將來の目標に照らして國家を改造するを以て結局國家の利益ありとする者なり、各々其見るところに從つて讓らざるを當然とするも、冷靜なる科學的見地よりすれば、今日のところ、此等の對立する思想は、實際上交互に行はれしむる事が、國家の進路を誤らざらしむる所以である。船を大洋に航

行するに當り、針路を一定不動の方向に取れば、船は却つて目差す方向を外れるといふ。或は右に或は左に、宛も時計の振子の如く、梶を絶えず動かす時に、初めて船は目差す方向を誤らない。國家の政治も亦當に斯くの如くならざるべからずと云ふのが、科學的政治學の主張である。只其時〴〵に局に當るの政治家は、初めから一定不動の方針を取つて動かないものでなければならない。

之を要する、二元的對立を難ずるの説は、政治哲學の見地に於てするものである。政治の哲學的研究によつて一元的眞理の闡明をなすは、固より重要なる仕事に相違ないけれども、然し斯くの如き眞理が古來全く一致する所なかりしの客觀的事實を承認する以上、如何にして國家を指導するかと云へば、相對的眞理を代る〴〵取るの外はないではないか。之が科學的政治學の我々に敎ふる原則である。而して「自由の保障」といふ意味に於ての民本主義は、此意味に於ける相對的眞理であることは先きにも述べた通りである。

（四）

併し今日憲政の本義として立つるところの民本主義は右の意味のものではない。政權運用上民意を尊重すべしといふ方の主義である。之を人民の側より云へば、自由を保障せよと要求する方にあらずして、參政權を與へよといふ方の主張である。昔は自由の保障を以て憲政の本義と見た。今日は參政權の獲得若くは賦與、並びに參政權の意義を憲法制度の運用上に徹底せしむることを以て憲政の本義とするに至つた。之を憲政の本義とする所が昔と今と變つたと見るも、又憲政の本義たる民本主義そのものが前後に於て其意味を變へたと觀るも妨げない。要は唯、今日では、參政權の賦與によつて民意尊重の意義を徹底せしむる意味の民本主義が、憲政の本義である、といふ事を知れば足りる。

初め自由の保障を以て憲政の本義と認めて居つた時代にも、參政權と云ふ事が全く認められなかつたのではない。何故なれば、此時代でも立法議會は矢張り立

憲制度の重要なる一要素と見られて居つたからである。けれども所謂立法議會は、自由の保障を得る爲めの一つの手段に過ぎずとして、比較的重要視せられなかつたことは先にも述べた通りである。然るに此手段たる議會は、時の經驗を積むと共に、段々と重要視せらるゝ度を增して來た。其一つの原因は、元來「自由の保障」なるものは專ら議會に於てのみ達せられるといふ事實に在る。民主主權論の徹底せる新大陸諸國に於ては固より言ふを俟たない。傳統的特權階級の暗に民論に反抗する舊大陸諸國に於ても、動もすれば蹂躪せられんとする自由を辛うじて保護防衞せるものは常に議會であつた。獨り自由の保障のみならず、一旦議會といふ制度が開かれると、從來他に發表の機會を有たなかつた民論の希望要求は、議會を通じて盛に發表せられる事になる。從つて國法が議會に與ふる所の權限が如何に狹いものであつても、議會の實際に活動する範圍は非常に廣くなるのを常とする。獨り其活動範圍が廣くなるばかりではない。議會の意志表示に認めらるゝ效力も亦段々に强くなる。斯くして議會は漸く政界に重きを爲し、遂には議會制度そのものが立憲制度其ものであり、之さへ得れば立憲政治は完全に行はれ得るものと考らるゝやうになる。是に於て自由の保障を以て憲政の要義とするの考は、自ら變じて、議會制度による參政權の獲得を其根本義とするの考に進むやうになつた。

更に此考を一層强めたものに、一つは一八四八年佛蘭西二月革命の結果として現はれたる普通選擧制の採用があり、も一つは一八六〇年代よりフエルヂナンド・ラッサールの勸說の結果初めて獨逸に芽を發した勞働者の政黨組織がある。普通選擧の採用は、議會を完全に民本主義の基礎に置くの端緖を開き、從つて民衆の勢力を背景として更に一段と有力なる國家機關たらしめた。而してラッサールが一方には普通選擧を主張しつゝ、他方勞働者の結束を絕叫し、國內最大多數を占むる勞働者の結束は、普通選擧の採用と相俟つて、議會の大多數を我黨の手に占領するを得べしの提說は、

更に著しく民衆の參政權に對する慾望を刺戟したものである。尤も此等の説によつて刺戟されたる參政權の觀念の中には、依つて以て特權階級に對抗して民衆の利益を强行し得べしとするの階級戰爭的思想を含まないではない。が、要するに參政權の獲得が第一の必要だといふ思想を大に擴めた事だけは明かである。參政權さへ獲得すれば、我々の自由も遂せられる。自由の保障は理論上終局の目的であるけれども、之を得るに必要なる唯一の手段を先づ確實に摑む事が實際上大事であるといふ見地である。

尤も此當時の思想には、階級戰爭的の考を含んでゐる丈け、未だ多少不純な點があつた。而して此不純なる分子は、政黨組織後に於ける勞働者階級の經驗に依つて、段々取り去らるゝやうになつた。一體ラッサールの考に據れば、普通選擧制を實行し、勞働者が結束して政黨を組織すれば、直に天下は社會主義者の手に歸する筈であつた。併しながら實際の經驗は此豫想に裏切り、結局社會黨はなかく議會の過半數を占め得ない。其結果一部の矯激なる論者は、其罪を代表組織に歸し、國内に於ける過半數の勢力を過半數として効力あらしむる爲めには、直接行動の手段に出づるの外無しとて、議會を呪咀し、遂に夫のサンヂカリズムの流を汲むものを生じたが、然し假令國内に於ける過半數の實力が、代表組織の結果議會に於ては過半數として現はれずとするも、之によつて所謂民權の著るしく張つた事だけは事實疑を容れない。且つ又現に諸國に於ける社會黨は年と共に其勢力を增し、民衆の勢力は今やラッサールの豫想した如く、段々に議會の大勢を支配せんとするの傾向を示して居る。斯く彼等が實際的の勢力を加ふるに至ると、又漸く矯激の言論を愼んで着實な見地を取るやうにもなる。從つて階級鬪爭的の觀念も亦段々に薄らいだ。此傾向は殊に少數階級が多數の勢力に讓歩した――其動機が多數の勢力を恐れたに在るにせよ、或は眞に多數の勢力に讓るの可なるを悟つた結果に出るにせよ――國に著しい。多數を後援として立つたものが、階級的觀念を棄てゝ少數者と妥

協すれば、其落ち着く先が階級的區別を超越せる渾然たる全體を着眼の基點とするに在るは言ふを俟たない。而して此見地は亦實に少數階級の承認する所であつて、從つて初め階級的思想に立脚した參政權要求の聲は、やがて渾然たる全體の利害休戚を主とするといふ正當穩健なる根據に立つことにならざるを得ない。彼等は初め階級の利益を主張せんが爲めに參政權を求めた。今は全體の利益幸福を計らんが爲めに之を主張するのである。玆處に參政權といふ問題が現代憲政の根本義なりとするの意義が存在するのである。

今日憲政の根本義として主張せらるゝ民本主義は、專ら此意義に於てせらるゝものである。政治の目的に關する主義としての民本主義は、少くとも今日の憲政論の直接に問ふところではない。立憲政治の目的は善政を布くにありとか、或は民衆の自由を尊重するにありとかいふ說明は、今日の憲政の獨り特色とするところではない。立憲政治であらうが、專制政治であらうが、善政を布き、人民の自由を保護するを目的とするに變りはない。只此等の目的を現代に於て最も有効に達するにはどうすればいゝか、と云へば、予の所謂第二の意味に於ける民本主義を採用するの外はない。之が現代立憲政治の主として主張するところであつて、又現代の立憲制度は此趣意を貫くように組み立てられ、又運用せられなければならないのである。所謂憲政が其創設の當初から純正に此根本義に立つたとは云はない。憲政の根本義と認められた思想には、時によつて變遷のある事は先きにも述べた通りである。けれども、今日我々が謂ふ所の憲政の根本義は、卽ち上に述ぶるが如きものであつて、而して之と違つた舊いいろ〳〵の說明は、畢竟此新らしき主義に到達すべき道行であつたと認むべきものであらう。

(下)　現代憲政の根本義としての民本主義

(一)

予の所謂第二の意味に於ける民本主義は、今日如何

なる理論上の根據によつて主張さるゝや。又之を實際に行ふて何等の弊害を貽す事なきや否や。此等の點は又民本主義を主張するに方つて先づ說き明かされねばならぬ問題である。

民本主義は第一に廣く人民に參政權を賦與する事を要求する。廣く參政權を賦與すべしといふ議論は、實は憲政創設の當初から主張された。而して此時代に於ける參政權賦與の理論上の根據は、天賦人權說より發出したる主權在民論に在つた事は言ふまでもない。而して天賦人權論の廢つた今日に於ては、新たなる根據を國家的經營の積極的責任の分擔といふ事に見出した事は已に述べた通りである。各人は、其相倚り相待つて作るところの國家を經營すべき積極的の責任を負うて居る。之を公共の義務といふも、或は之を國民としての權利と觀るも、其本義に於ては異なるところはない。權利として觀ん乎、各人は其屬する國家の運命の決定に、積極的に參與するを主張するのは當然である。故に特別の理由あるにあらずんば、此權利は慢りに之を剝奪すべきではない。之を義務として見ん乎、國家經營の責任は須らく凡ての人に之を頒つべく、責任感念の有無厚薄に依つて、不公平なる取扱を爲すべきでない。責任感念の薄きものに之を與ふることは、却つて偶々責任の念を誘起する事にもなる。責任の觀念の著しく缺乏して居るものに之を與ふるは、多少の弊害なきに非るべしと雖も、其の薄さを理由として常に之を與へざるは、益々責任を忘れしむる所以である。今日の文明國に於ては、大體に於て、凡ての人は皆相當に責任の觀念を有して居り、少くとも責任の地位に置けば、之を相當に果たす者であると觀なければならぬ。故を以て彼の選擧權制限論者の主張するが如く、相當の程度に發達したもののみに此貴重なる權能を與ふべしといふ說は理論上誤りである。官吏公吏の類の如く多少の專門的智識を必要とするものは固より別問題であるけれども、今日の代議制度に於ける所謂參政權は、之を廣きに與ふるを原則とし、或特別の理由を有するもののみを除外するのが正當であらうと思ふ。

參政權は廣きに亙つて之を與ふるを原則とする。例外として如何なる種類のものを除くべきやは、自ら功利的見地によつて之を定めざるを得ない。卽ち之を與ふる事によつて實際の弊害を生ずる事を避くると云ふ趣意に基いて、初めて除外例を定むべきである。今日此見地から正當に除斥すべしとせらるゝものは、未成年者、心神耗弱者、或種の犯罪人等である。婦人は之を除斥すべきや否やに就ては、今日議論のある所である。最近の趨勢は、婦人の智識の進步並に公共事業に對する婦人の興味の增進等の結果として、參政權要求の聲が婦人自身の間に盛になり、社會の輿論としても漸次之を認めんとするに傾きつゝあるやうに思はるゝ。けれども、實際制度上の問題としては未だ之を與ふることが大勢となつてはゐない。此外に參政權を制限する標準として財產の有無乃至多寡を擧げるものがあるが、之は今日に於ては全く理論上の根據は無い。何故なれば、財產の有無と多寡とは必ずしも參政能力の有無優劣と比例するものでないからである。況んや教育の普及して國民一般の智識道德の著しく向上せる現代に於てをや。尤も財產上の制限を設けたといふ事には歷史上の沿革がある。昔の議員は法律の制定に協贊し、租稅の賦課に同意するが爲めに召集されたものである。卽ち租稅納付の承諾といふ事が主なる任務の一であつたから、多額の租稅を拂ふもののみが專ら召集せられた事は怪むに足らない。併しながら議會並びに議員の任務は、今日は全く昔と其性質を一變した。故に財產の多少を標準とするのは、今日となつては何等理論上の根據なき全然機械的の制限に外ならない。而して今日の選擧界の實驗は、斯くの如き制限を設くる事が實に弊害の源である、功利的見地からしても斯かる制限を徹廢した方がいゝといふ事になつて居る。なぜなれば、選擧權を擴張すれは、買收、請託、脅迫等の行はるゝ餘地がないといふ消極的の利益あるのみならず、此等の醜惡なる武器を封ぜられたる各候補者は、自ら人格と政見とのみを以て戰はざるべからず、從つて之によつて大に國民を啓發するといふの積極

利益もあるからである。かゝる明白なる根據あるに拘らず、今日尙ほ參政の擴張を喜ばざるの議論の盛行するは、參政權は出來る丈け之を制限するを以て功利的要求に合するとするの妄想に出づるか、又は參政權の普及によつて當然撲滅せらるべき官僚政治家の階級擁護の動機に基くものである。

（二）

憲政の根本義としての民本主義は、啻に廣く參政權を賦與するといふ許りではない。參政權によつて民意の終局的尊重の意義を徹底せしむる事も含まれて居る。一體參政權を制度の上に移す時に、遣方にはいろ〳〵ある。亞米利加等では、大統領の選擧、司法官の選擧などを認めて、所謂司法並に行政の部門にも人民の參政を認容して居るが、併し之は寧ろ特例に屬するもので、主としては議會制度によつて參政權を認むるのが通例である。而して此の議會による參政官を認め方にも、或は其議會の權限の範圍に於て、又は議會の決議の動力に於て、いろ〳〵異つた定め方がある。けれども茲に吾々の見逃してならぬ事は、此等の點が法律上如何に狹く又弱く定められてあつても、事實上議會の勢力は必ず其限界を打ち超え、極度まで廣く且つ強く發展せずんば已まざらんとするを常とすることである。議會の權限は立法の協贊並に豫算の議定に限るなどといふのは一片の法律論である。實際に於て議會は、いろ〳〵の意思表示をなして、而かも之が相當に認められ重んぜられて居るではないか。議會は君主の立法權に協贊する。立法權其物は君主にあつて、議會の決定を採納すると否とは主權者の自由なりと云ふはまた一片の法律論である。併しながら、事實上下兩院の議決を經たものは、之を握り潰して法律としないといふ事は、最近何れの國に於ても其例を聞かない所である。政府に對する議會の不信任決議は、法律上君主の信任によつて存立する内閣を動かすものに非ずといふ法理論も、事實の前には存外無勢力にして、歷代の政府は、不信任決議の結果を懼れて、常に事茲に議會を解散するの措置に出でゝ居るのではないか。故に制

度の上には如何に狹く弱く認められても、一旦認められたる參政權は、必ずや忽ちにして政治上最高の勢力地位を望んで驀らに進むものである。參政權の機關たる議會は、制度上一個の諮詢機關に過ぎざるものであつても、事實上は必ず政界の最高權威たらずんば已まざるものである。斯の如きは參政權なり又議會なりの固有の性質といふべきものであつて、事の是非善惡は別問題として、一旦之を認めた以上は、之を中途半端の微温的狀態に停滯せしむる事は極めて困難である。而して予輩の所謂民本主義は、參政權を認むる結果が遂に此極度に至る事を是認するものたるのみならず、又斯くの如くするの勢を助長促進すべきものなりと主張するものである。これ民本主義が民意の尊重を主張する當然の結論であるからである。

是に於てこの民本主義に對して世上に三つの反對論が現れた。第一は、斯くの如く所謂民意が結局の決定權を得るに至るとせば、そは君主國體の大義に背くに至らざるやといふ議論である。第二は、所謂民意が終局の勝利を占むるといふ事は、衆愚の不均的智識をして國家の運命を左右せしむる事になりはしないかといふ議論である。第三は、衆愚の低級なる議論が議會を通して政府を牽制するの結果、爲めに政務の圓滑なる進行を妨げ、今日の如き國際競爭の激烈なる時勢に於て著しく國務の進捗を阻害する事なきかといふ議論である。此等の議論を徹底せしむれば、結局參政論の絕對否定論即ち絕對的議會廢止論にならざるを得ない。併しながら、彼等は事實の前には其說を徹底的に主張するの勇氣を缺き、參政權は或程度まで之を認めざるを得ず、議會も今更ら之を廢止する譯には行かぬといふ前提の上に立つが故に、參政權乃至議會は之を認むるには認むるも、然し是が十分に活動しないやうに、好い加減の程度に停滯せしめやうといふ風に、自然と彼等の考は傾いて來る。斯ういふ不徹底の態度で憲政を運用すると、こゝに政界にいろ／＼の弊害が發生し來るのである。何故なれば、彼等の態度は恰度、時勢の要求の背くべからざるものあるに迫られて、子弟を

高等の學校に入れるには入れたが、教育を受けると兎角生意氣になつて年寄りの言ふ事を聽かないといふ懸念から、出來る丈け本當の勉强をしないようにと導くの類にして、謂はゞ物を飛瀑の上に投じて而かも其落下せざらんことを希望するに均しいからである。人力を以て强ひて事物自然の進行を妨げんとする時に、茲に多くの弊害の生ずるのは世の中の常である。

民本主義が君主國體と相容れずとするの議論は、寧ろ感情論にして、學問上から之を論爭するのは餘りに大人氣ない。最後の決定を民意に採るとか、或は人民が參政權を要求するとかいふので、時に偏狹なる忠君愛國者の感情を唆る事はあるも、之を他の一面から、國君の政治的經綸を一番有効に行はれしむるの方法は、之を十分に民意に徹底せしむるに在りと云ふたならば、わが民本主義が即ち君主國に於ても最良の政治形式でなければならぬ事が分るではないか。此等の點に關して、予は去年の秋一度『大學評論誌上』に於て論じた事があるから茲に再び繰返さない。唯民本主義を目して愚論の跋扈を誘致するものなりと罵り、又國務の進捗を阻むものなりと誣ふるの說に對しては、聊か茲に辯明するの必要を認める。

（三）

「現代憲政の政治組織を予の所謂民本主義の要求に從つて運用せしむれば、大體に於て、政治の實際の局に當る政府を議會が監督し、而して其議會を人民が監督すると云ふ事になる」。代議士が選擧によつて全く人民に左右せられることは言ふを俟たない。政府も亦議會多數の意嚮によつて進退せざる可らずとするは、所謂責任內閣主義の要求である。かゝる運用の下にあつては、最終の監督權は即ち人民にあるので、所謂民間の輿論なるものが政界に於ける最終の權威たる譯になる。而して之に對して難ずるものは曰く、憲政の運用當に斯くの如くならざるべからずとせば、之れ畢竟愚論をして天下の運命を支配せしむるものである。何となれば、一般人民の智識の平均は、今日のところ畢竟愚論の域を脫する事が出來ないからであると。

此批難には固より一面の眞理はある。何故なれば、所謂輿論は常に必ずしも國内最上の賢明なる智識たるを期し得ないからである。けれども民間の輿論は常に必ず愚論なりとする議論も亦決して正當の見解ではない。此事は今日の時勢に於て所謂輿論なるものが如何にして構成せらるゝかを考ふれば明瞭になる。

輿論といふ問題に就ての學問上の細かい説明をするのは、今予の仕事ではない。輿論なるものは果して實在するものか、或は何を以て或時代の輿論と觀るべきか等の議論も、今は姑く之を略さう。唯予輩は茲に今日の所謂輿論なるものは、特殊の問題に於て、何等專門的知識無き一般平均人が、他と何等の交渉なしに獨りでに頭の中に浮んだ考の總平均ではないといふ事を指摘したい。我々一個人の經驗に徴しても、或る特殊の問題に就て自らの頭の裡に何等かの意見が定まつたといふ場合に、其意見が如何にして構成せられたかを反省して見ると、或は一部分新聞雜誌に表はれたる專門識者の議論によつたとか、或は當該問題に對する專門家の講演に刺戟されたと云ふが如く、多少の根據ありて作られたるを悟るではないか。今日教育の普及して居る時代に於ては、極端な專門的事項に亘らざる以上は、一通り識者の説明を聽いて其意味を諒解する丈けの受働的基礎は何人にも出來て居る。而して新聞雜誌其他各種の公共的教育機關が整つて居るから、我々は常に公共の問題に就ては、日夕不知不識相當の智識を與へられつゝあるのである。して見れば我々の智識及び是等が集つて自然と出來上る所の輿論の構成には、所謂少數賢明の識者の智識が全く無干渉で居るのではない。故に今日の文明國に於ては、其程度に厚薄の差はあらうが、何れの國に於ても、少數賢明の意見は必ず輿論の構成乃至指導に必ず相當の關係を有するものである。故に輿論を以て愚論なりとするの説は、其絶對の意味に於ては斷じて今日の時勢に當らない。尤も最上の智識が輿論の構成に及ぼす影響に厚薄の別はある。けれども、之れとても世の中の進むと共に、段々密接の關係を増すべきは當然であるから、輿論

物がまた漸次其質を改善して、遂には國内最上の意見を其内容とするに至るは、亦自然の傾向であると謂はなければならない。

この自然の傾向はまた我々の努力によつて之を助長促進する事も出來る。健全なる輿論の發達する第一の基礎は、常に國民の圓滿なる教養にあるから、出來る丈け高き廣き教育を與ふる事が必須の要件である。併し大體に於て日本人今日の教養の程度は、健全なる輿論の發生の基礎として決して不足はないと思ふ。日本は古來最も教育を重んじた國であつて、今より百年二百年の前、中歐の諸國民が未だ一般に蒙昧の域にあつた時代でも、日本には文字を知らざる人間は極めて少かつた。此素養あればこそ、五十年の短日月に斯くまでの進歩を遂げて卓然東洋に傑出するの國家を造つたのではないか。固より之を以て滿足するのではない。けれども、今日實際健全なる輿論の發生せざるに就き人動もすればその責任を專ら人民に嫁せんとするが、予はそれ程人民の程度が低いものとは思はない。如何に教育の程度が高くなつても、凡そ人は從來經驗しなかつた新事物に遭遇すると、其初め動もすれば適當な措置を誤るものである。外國人との取引に商業道徳を重んじなかつたり、選擧と云ふ新しき事物に對して道徳の要求を顧みなかつたりするのは、一つには之が爲めであつて、之によつて直に日本人の道徳心を批議するのは酷である。新事物に就て新道徳の社會的に確立するまでには、何れの國に於ても、相當の年月を要する。要するに健全なる輿論の發生せざるに就ての責任は、第一に之を人民に糺すのは正當でないと信ずる。

然らば此外に何が實際に妨げとなつて居るかといへば、予の觀る所では、一つは言論自由の壓迫であり、一つは少數識者と多數民衆との精神的交渉の缺點であると思ふ。

一體輿論發生の理想的境地は少數識者の議論が自由に發表するを許され、之れが國民の良心の上に激しき生存競爭をなし、自然陶汰の理法によつて其の最も優良なるものが殘つて輿論の内容となるといふことであ

る。之には第一に言論の自由が十分に許されて居なければならない。而して先覺者を以て任ずるものは絕えず國論指導の任務を感じて民衆啓發の爲めに其意見を發表するに熱心でなければならない。之れ實に國家の渥き恩寵に浴する上流階級の社會に對する道德的任務である。彼等が此任務を盡し、而して政府並びに社會が言論の自由を十分に許すならば、健全なる輿論の發生すべきは固より疑ない。況んや今日の民衆の强き智識慾は、少數賢者の專門的說明を聽くを欲すること渴するが如きに於ておや。

然るに不幸にして今日の一部偏狹なる先輩は、如何にして健全なる輿論の構成せらるゝかを思はず、自己の主觀的意見に執着して國論統一の名の下に言論の自由を許さうとしない。言論の自由を許す事によつて生ずる目前多少の弊害を恐るゝの餘り、之を壓迫する事によつて國家の蒙る永遠の精神的損害の如何に大なるかを思はないのは、我々の平素甚だ遺憾とする所である。而かも言論の自由に乘じて生ずるの弊害は、もと決してしかく恐るべきものではない。何となれば、同じく言論の自由は、他に健全なる思想の來つて之と戰ふものを發生せしむべきを以てゞある。啻に之れのみではない。輿論を愚論なりとする彼等の態度は、自ら民衆の間に伍して彼等を啓發するの任務を怠らしめ、自ら高く標致して民衆一般と何等の精神的交渉を營まざらしむるが故に、彼等自身亦自ら固陋偏狹の見に陷ると共に、民衆をして亦穩健中正の說に接するの機會を有せしめない。是に於て常に指導者を要するところの民衆は、往々にしてデマゴークの煽動に乘ぜらるゝことになる。群衆心理の研究は多數民衆の動もすれば極めて低級の見識に墮して輕擧盲動するを我々に敎ゆるも、而かも斯くの如きは、上流階級の精神的指導を缺く國に於てのみ見るの現象である。一般民衆は本來英雄崇拜の念に富むものにして、上流階級の心懸如何によつては、之れ程率ゐ易いものはない。が、また指導者一度其道を謬れば、之れほど扱ひにくいものはない。歷代の君主皆賢明にして德化四方に洽き我國の

如きに於ては、忠君愛國の念盤石の堅きものあるも、國君が貴族と共に政權の運用を誤ること支那露西亞の如くなれば、其歸する所は我等の眼前に示さるゝ通りである。斯くの如き兩極の差別を生ずる所以は、畢竟するに國民指導の任にある少數識者の心掛の爲によるものと云はなければならない。此點になると、英米の政治家などはなかゝゝ敬服に値するものがある。國家の重大問題であれば、彼等は新聞雜誌に寄書し、或は公開の講演に進んで其意見を發表する。況して、來つて其説を聞く者に對しては、更に其煩勞を厭はないのである。然るに、我國に於ては、元老其他の先輩にして、嘗て進んで言論文章に其意見を發表した事があるか。新聞雜誌記者の訪問に對して快く之を引見したものがあるか。國家の重大問題に關して國民の最も與り聴かんとするところの元老諸公の意見は、少數の昵近者の間には分たれるかは知らないが、我々國民に向つては常に嚴しく封ぜられて居るではないか。上下の間に精神的疎通を缺くこと我國の如きは蓋し容易に其例を見ない。斯くの如くにして、健全なる輿論の發生せざるを責めるのは責める者の罪であつて、決して國民の罪ではない。識者が其當然盡くすべき義務を怠つて、而かも輿論を愚論なりとなし、以て民本主義の實行を阻まんとするは、本末を顚倒するも亦甚しい。

それでも、今日我國の輿論は多く茫漠の嫌はあれ、多少不純の分子の混在するはあれ、要するに、矢張り少數識者の賢明なる意見の影響は受けて居ることは明である。故に大體の傾向から言へば、今日の日本は世界の總ての文明國と同じく、矢張り精神的關係に於ては少數哲人の指導する所なりと云つて差支はない。國家の運命は少數哲人の指導とするところ、又少數哲人の指導に任ぜねばならぬところたるは、古往今來確定不拔の原則である。只古にあつては、少數の哲人は夫自身に於て國民を指導するの實力を有し、或は少くとも現に實力を有する少數階段の手を通うして指導の任務を盡くしたのであつた。今日の時勢に於ては、實際に國家を動かすの力は常に民衆にある。哲人の思想は

如何に卓拔なものでも、哲人の腦中に孤立しては全然無力である。之が國家指導の實際的原理となるには、民衆の力によつて裏附けられねばならない。民衆の力も亦賢明なる哲人の思想によつて内容を充たされなければならない。形より見れば、民衆の力が國家を動かすのである。民衆の力を尊重する民本主義は、決して精神的貴族主義と相容れざるものではない。否、少數哲人の卓拔なる思想を、今日の時勢に於て最も有効に行はしむるが爲めに、民本主義は存在すると云つていい。而して此理想に達せしむる爲めには、言論の自由と上下階級間の完全なる精神的疏通が必要である事は云ふを俟たない。

以上の條件を具へて輿論が最も健全に發達したときに、民本主義の政治が最もよく行はるゝことは申すまでもない。從つて輿論の構成が理想の域より遠ければ遠い丈け、民本主義の政治は完全に行はれないのである。されば一部の論者が難ずるが如く、時として所謂最も賢明卓拔なる意見が、所謂輿論なるものによつて抑壓せらるゝ事も實際にあり得る。此事は事實として民本主義者も承諾せざるを得ない。然らば此の場合に我々は如何なる態度に出づべきであるか。茲に民本主義者と、他の例へば、官僚政治家との意見が分れる。官僚政治家の方は、所謂卓拔賢明なる意見によりて政治をする事に急にして、輿論の批評に嚴酷なる壓迫を加へ、從つて輿論の發達を阻礙する。之によつて目前の奇功を奏し得べけんも彼等は見えざる損害を國民の進歩發達の上に加へつゝあるを省みない。之に反して民本主義者の方は暫く當面の欠陥によりて多少の損害を受くるを忍びつゝ、結局國民を向上發達せしめ、輿論を健全に導く事によつて最初の解決をつけようとする。政治家は兎角目前の事功を收むるに急ぐものである。然し乍ら結局國民を愚にするの手段を取る事によつてのみ成功するの途を取るか、又は國民を向上發達せしむる事によつてのみ成功するの途を取るかは、國家百年の大計を慮る者に取つては、自ら明瞭なる問題であらねばならない。

(四)

「民本主義の政治は、政府に對する議會の監督權を非常に重んずるの結果、議會が動もすれば此監督權を濫用して政府の國務進行を妨ぐるの弊に陷り易い。國際競爭の激甚にして敏快なる行動を政府に要求するの時に當り、議會が斯かる無用の拘束を加ふる事は決して國家の利益ではない。此の論據に立つて民本主義を難じ、議會を制して政府の權を重しと爲し、以て今日の代議制度を民本主義的に運用せんとする事に反對する者もある。然しながら、此の說も極端に行けば、昔の專制政治に復へるの外はない。なぜなれば、今日の立憲政治は、政府の專制を抑ふる爲めに起つたもので、從つて議會は初めから政府の自由を拘束するを任務とするものであるからである。制限拘束其物は實に憲政の特色である。之を苦にする以上は、全く憲政を廢止するの外はない。然らば憲政の下に於ては、何時でも制限に甘んじ自由の行動が不當に縛られねばならぬかといふに、必ずしもさうではない。何となれば、制限其物がわるいのではない。之を適法に用ひて不當の濫用を愼めば、國務の進行はそれ程妨げられるものではないからである。現に我國でも、或は樞密院とか、或は外交調査會とか、所謂屋上屋を架して、政府が進んで各種の制限機關を設けて居るではないか。獨り議會の制限のみを取つて之を苦慮する所以のものは、議會は動もすれば其制限を濫用するが故に外ならぬ。

議會が制限を濫用して國務の進行を阻むことあるの事實は吾人之を認めねばならぬけれども、然し議會といふ制限監督の機關ある事によつて國家の受くる利益の大なるも亦之を認めなければならない。如何に議會の權限が濫用されても、今日之れを廢するは得策でない。又事實として恐らく可能ではなからう。然らば、今日吾人の取るべき途は議會は議會として之を据え置き、而かも其制限監督の權能は之を適度に活用せしむることである。抑も制限監督の權能は、之を設けて而かも之を無用ならしむるを本來の理想とする。法を設けて法を無用ならしむるが法の理想である。全く之を

設けないではよろしくないが、之を設けて而かも之を設けざると同様の結果を來たさしむるのである。而して議會をして斯くの如き任務を盡くさしむるには、健全なる輿論を振興して、議會そのものを健全なるものたらしめ、議會が又其自然に備はる權威を以て、政府をして非違を行ふを得ざらしむるためにある。斯くの如く人民が議會を監督し、議會が政府を監督するの實を十分に擧げしむるが、立憲政治の下に在つて國務を自由ならしめる所以であつて、又實に民本主義の要求するところである。然るに此關係は動もすれば逆轉し、政府議員を操縦し、議員が人民を欺むくに至り易いのである。民本主義はかゝる憲政の逆轉的運用には絶對に反對すると共に、又動もすれば斯くの如き逆轉を可能ならしめ容易ならしむる所の選擧法上の諸制度をも否認する。是れ民本主義者が、選擧界に於ける腐敗を根據として選擧權の擴張を主張し、選擧法の取締を改革改善せん事を高調する所以である。如何に之を擴張し、如何に之を取締る事が、腐敗手段を用ふるの餘地なからしむる所以であるかは、先の論文に於て稍々詳細に之を述べたから、玆には云はぬ。只玆に一言せねばならぬ事は、現今選擧界の各種の弊害は主として立憲政治の組織並びに運用に未だ十分に民本主義の精神の徹底せざるものあるに基因することである。之等は決して民本主義其物に固有する弊習ではないのである。而かる今日之を人民の智識道德の低きに歸するものあるは、是れ政治家が己の罪を人民に嫁するの妄論と云はなければならない。蓋し、利を以て誘へば、之に陷るは人情の常で、若し彼等が之等腐敗手段を武器とせず、全然人格と政見とのみを以て逐鹿場裡に立つならば、今日の程度の日本國民は確かに其信任すべき人の選擇に於て誤るなかるべきを以てゞある。利慾の誘惑に陷るの點を擧げていふならば、今日の代議士は固より、大臣宰相と雖も、大きな顏をして人を責むるの資格はあるまい。

要するに、今日我國の憲政の組織は、まだ甚だ不完全である。運用も亦決して其宜しきを得てゐない。爲

めに人民は其鋭敏なる良心の判斷によつて自由に選擧權を行使するの習慣を缺き動もすれば利慾に迷ふて候補者の籠絡するところとなる。人民議員を監督さるの實の擧らざるも怪むに足らない。從つて、議員も亦其職責を盡くすに忠ならず、或は政府の操縱するところとなり、或は感情に走つて無用の爭を是れ事にするに到る。憲政の實の擧らざること、今日の立憲國中我國の如きはない。國政を指導する地位に在る者、願くは深く此點に猛省せられんことを。

然るに斯かる今日の形勢に對して一部先輩の政治家の取るところの態度に、我々は甚だ慊らざるものを發見する。それは何かと云へば、卽ち民本主義の徹底的遂行に反對するの考である。彼等は動もすれば日本の國際的地位の脅迫を說く。甚だしきに至つては、外勢の壓迫を擔いで來る。斯くして擧國一致國事に盡すべきの名義の下に、反對者に寛嚴兩樣の壓迫を加へ、懇切に國家の立場を國民に訴ふるの煩勞を避けんとする。其結果として彼等の執るところの手段は、或は買收であり、或は脅迫である。今日の時勢に於ては如何なる賢明卓拔の意見と雖も、國民の多數に徹底せしむることなくしては、何等實際の力となり得ないといふ事は先にも述べた。而して多數の國民に徹底せしめ、其堅實なる基礎の上に立つて政權を運用すべしといふのが卽ち民本主義の主張である。固より之には多大の努力が要る。けれども憲法政治に於て最も忌むべきは、一時の疏通を計るに急いで、不正の捷徑を辿る事である官僚政治家の民本主義者と異るところは此煩勞を厭ふと否との點にある。彼等はもと民論を愚論なりとする根本的立場を取るから、民衆に接觸して懇切に其立場を說明せんとするの氣分になれないのは又已むを得ない。けれども、實際政界に於て、國民少くとも其代表者たる議會と、或種の疏通をつけずしては、何人も政治の局に當る事は出來ないのである。而して民本主義は、廻りくどいが又一番堅實な方法を取り、卽ち精神的の疏通を作らん事を主張し且つ要求するが、官僚政治家は、此根本的手段に出づるを煩しとなして、一時

的姑息の機械的疏通を圖る。而して其爲めに執るところの手段と云へば、官權の濫用による脅迫であるか、或は利益の提供による買收若くは請托である。之によつて一時目前の功を樹つるに成功すべしと雖も、爲めに政治道德を腐敗し、國家の風敎を壞亂するの罪は頗る大なるものがある。無論官僚政治家の多くは、誠意を以て此手段を取るものには相違なからう。併し誠意惡意を問はず、官僚政治の主義を以て立つ以上は、今日の時勢に於ては、到底此等の腐敗手段を取るにあらざれば、成功する事は出來ないものである。此點が實に國家百年の大計を慮る者の大に注意せねばならぬところである。今日の不完全なる時代に於て、國家の目的を完全に達するいろ／＼の障礙ある事は爭はれないが、只其障礙を排して國政を圓滿に進行せしめんが爲めに、我々は國民の道德を蹂躪する事によつてのみ成功するの途を取るか、又國民の道德を刺戟し開發する事によつてのみ成功するの途を取るかは、少しく冷靜に反省すれば、決して判斷に誤るべき問題ではない。

予が事新らしく云ふまでもなく、今日の政界は實に腐敗に充ちて居る。此點に於ては歷代の政府といへども決して潔白ではないが、又各派の政黨も斷じて無罪ではない。併しながら、民本主義の徹底を措いて、此等の腐敗手段を改善する事は絕對に不可能なる事を知らねばならぬ。民本主義の要求が徹底するまでは、政界の行動は決して道德的に行はれ得ない。之れ從來我國に於て、政治家になると云へば如何にも道德的品性を下劣にするものと考へられた所以である。現に又高潔なる品性を有する人が、政界に身を投じた事によつて腐敗墮落した例も決して少くはない。此點は西洋に於ても同樣である。我々はよく、獨佛諸國に於て、自分の孫が政治に志したと聞いて其道德的生活の前途に多大の不安と疑惧とを抱いた篤信の老媼に接した事が屢々ある。一方に於ては、政治は國家の運命を左右する高尙な仕事だといふ。從つて政治は最も高尙なる人格が携はるべき高尙なる仕事だといふ。職業としても亦之が最も高尙なる部類に屬すべき筈のものであるに

も拘はらず、從來の經驗に於て、之に身を投ずる者が動もすれば其道徳的品性を壞るに至るのは、是れ民本主義の精神の徹底せざる以上、政界に於ける活動は畢竟腐敗手段を弄する事なくして決して成功し得るものではないからである。其證據には、品性の高潔を以て一貫した政治家は、多くの場合に於て決して政治家として成功してゐないではないか。世の中には、惡い事を爲すに善い手段の用ひらるゝものもあれば、善い事を爲すに惡い手段の用ひらるゝ事もある。從來の政治は正に後者の例であつた。而して民本主義が徹底的に行はるゝに至つて、初めて政治的活動は倫理的になり得るものである。何故なれば、民本主義の徹底的に行はるゝ場合に於ては、政治的活動の唯一の武器は、人格と政見とのみであるからである。啻に政界に活動する個人的行動が倫理的になるばかりではない。政治的活動の最大要素たる政黨の活動の如きも亦自ら倫理的にあらざるを得ない。何故なれば腐敗手段を用ゆるの餘地なきに至るの結果、政黨が政權の爭奪に勝利を占むるの唯一の途は、矢張り知識上道徳上國民多數の信任を得ると云ふ外に途は無いからである。是に至つて政黨はまた平素より國民を教育するといふ社會的任務を盡す事にもなり、人民も亦政黨によつて大に教育されつゝ、選擧に於ては全然良心の自由の判斷によつて去就を決するの習慣に從ふ事になる。意識して斯くなるにあらずとするも、勢が遂に斯くの如くならざるを得ざらしむる所に、民本主義政治の道徳的價値があるのである。

斯く論ずれば、所謂民本主義が現代憲政の自然の歸趨であり、又其根本の目標であることは明である。而して其發達が實に國民の道徳上知識上の進歩と密接に相待ち相伴ふものなることも亦明了であらう。

學生募集

專修大學

◎大學部經濟科
◎專門部經濟科
◎專門部計理科
◎大學豫科

◎大學部及專門部甲種入學志望者は授業開始後卅日以内に手續を要す
◎中學又は同程度の學校卒業者は專門部甲種及大學豫科に無試驗
◎專門部乙種は何時にても入學を許可す
◎學則申込次第送附

◎高等豫備校

◎高等學校
◎高等商業學校
◎各種專門學校

入學受驗者のため特別なる準備教育を施す
▽模擬試驗を行ひ答案は精細に批評添刪◎圖書館に受驗用書備附

◎六ヶ月卒業 專修大學附屬專科

◎中學卒業程度◎簿記、珠算、商用英語、タイプライチング、商用文習字及漢文

◎甲種程度 專修實業學校

◎本科一年、豫科一二年補缺募集

◎乙種夜學 專修商業學校

◎一期生滿十四歲以上無試驗◎二期生補缺募集

東京市神田區今川小路二ノ八 □ 電本 二四四〇 四二四二

(中付一の三)

（中付一の四）

記事精確｜報道迅速｜趣味豊富

朝刊｜夕刊

やまと新聞

●廣告料 五號活字十六字詰 一行七十錢 指定料一行十錢 雜報欄一行 金一圓五十錢

●本紙定價 一箇月金四十五錢 地方郵税共一箇月 金五十五錢

發行所 東京京橋 やまと新聞社

電話京橋（特六〇一、特六〇三 長六〇二、長六〇四 六〇九、六〇六、 六〇八、一六三〇）

大正七年

ポケット日記

舊暦對照 □□□□

最善完美の理想的日記

□□□□ 意匠新奇

號	形	寸法	記入欄	紙數	正價	郵税
A號	【厚形】	竪五寸 横三寸	記入欄一頁一日宛	紙數四四〇頁	正價六十二錢	郵税四錢
B號	【薄形】	同上	記入欄一頁二日宛	紙數二百廿頁	正價五十錢	郵税四錢
C號	【薄形】	同上（前後季二册差換添付）	記入欄一頁一日宛	紙數四四〇頁	正價七十二錢	郵税四錢
D號	【小形】	竪三寸二分 横二寸一分	記入欄二頁見通し一週間宛	鉛筆添付	正價三十二錢	郵税二錢
E號	【小形】	竪三寸七分 横二寸一分	記入欄一頁二日宛	鉛筆添付	正價三拾八錢	郵税二錢
F號	【掌中形】	竪二寸五分 横一寸八分	記入欄二頁見通し六日間宛	鉛筆添付	正價二十八錢	郵税二錢
G號	【細長形】	竪四寸二分 横二寸一分	記入欄一頁二日宛	紙數三百餘頁	正價三拾五錢	郵税二錢

■全部總革特製三方金縁優良舶來紙各吸取紙附■

□(G號細長形)の外全部紙函入體裁優麗□

「ABC」……は記載欄豐富にして携帶に便なるのみならず、亦た机上筆記用に適し、體裁の瀟洒なる内容の完美なる蓋し比類あるなく、附録―金錢收支表、郵便規則、税法、年代及年齢早見表、補遺記事欄等ありて重寶この上なし。

「DE」……は各舶來書簡紙を用ゐて記入に便し、形態小にしてポケツトに、チヨツキ、はた袂に携帶極めて便なり、而も其體裁の瀟洒なる時好に後れざらむ紳士淑女の必ず携ふべきもの、加之別冊として日常必須の諸法規及重要事項を添ふ。

「FG」……は最新に於ける凡ての特長を包容して善美を盡す、(掌中形)は舶來書簡紙を用ゐ、形態極めて小さく一は「豆形」と稱し、名刺入に挿み得べし、(細長形)はフールスト上等紙を用ゐ、形態亦た清新掬すべく内容最も進歩的なり、この兩日記は必ず流行界の新呼物たらむ。

東京 博文館 本町

(中付一〇六)



SSS

千里の駿足も尚及はざる
長足の進歩を示し
古武士の如き清廉堅實の
精神を以て發展しつゝある

サンエス萬年筆

心を新たにして一年の大計を立つ
る時平和の戰場に於ける最良の武
器として一本のサンエス萬年筆を
手にせられよ

之は東洋一の模範品たる

サンエス萬年筆

東京馬喰町

本舗細沼浅四郎

現內閣の增・減・廢稅政策を許す

▽支離滅裂を極めたる財政策

法學博士　福田德三

大藏大臣の說明に據れば、大正七年度の豫算として、一方には國防充實策を講じ、他方には社會政策的の意味で增減稅を行ふといふ。今日の所では未だ國防充實策の程度が能く判らないが、國防の對外的充實が是非必要であるとすれば、增稅は蓋し仕方が無いかも知れない。然し今日迄に發表された所では、增稅を行はなければならぬ必要があるとは、我輩には呑込めない。增稅の爲めの增稅は有り得ない。ある財源が有るから增稅して可いとはいへない。歲出の增加があるから、其處で初めて增稅も認められ得るのである。然るに今日まで發表された增稅には、それを必要とする程の歲出が認められない。況んや一方に於て增稅し、他方に於て減稅若しくは廢稅を企つるに於ておや。加之、減債基金を依然五千萬圓に維持し、而かも大正八年度に到れば三千萬圓に減ずるといふ。卽ちほんの一年間丈け五千萬圓の額を維持し、其の差の二千萬圓を增稅に求める。此れは減債基金維持の爲めに增稅するといつて可い。公平なる見地より見れば、減債基金存置の必要は毫もなき今日其の爲めに增稅すると云ふのは、社會政策の上から見ても許す可からざることである。斯くの如くであるから今度の增稅は、增稅の爲めの增稅であつて、財政の根本義に反し、少しも理路が立つてゐないで、支離滅裂であると考へる。我輩は政府の反對者でもなければ、又味方でもない。政府の爲る事と云へば何でもケチを附けたがる樣な、不公平な、窮屈な見解は有つてゐない。否、現內閣の社會的施設に就ては少くとも之れに多少の誠意あることを認め、寧ろ政府同情者に屬して居たものである。然しながら今度の財政計劃を見ては全く呆れ返つてしまつた。今日迄は隨分現內閣の施設には同情もして來た了簡(つもり)だが、恁んな事をやるなら最早や御免を蒙りたい。

勿論我輩は如何なる場合にも增稅は不可なりと言ふやうな偏つた考は有つてゐないが、今度のは全く理解が出來ない。先づ歲出の方から見ると、其の主なるものは陸海軍の軍備充實費、市町村立小學校教員俸給補助、學校創立費、製鐵擴張費、其他各種の新事業調査費等である。陸海軍の擴張の詳細に至つては我々には分らないが、是れ丈けの補充費なるもので當分我慢が出來ると云ふなら、各種の新增稅を起す程の事は斷じて無い。之れ恐らくは政府の計劃の在る所を忖度すれば、先づ小可[illegible]的

た増稅して置いて、陸海軍の擴張の内容項目は、徐ろに之を大正八年度以降に出す積りらしい。然し國家の財政は歲出に依つて歲入を定めるものである。所謂「出づるを量つて入るを制す」るのである。所が政府は先づ「入る」を量つてゐる。經常費の方は歲入と歲出とでは歲入が多く、臨時部の方では歲入よりも歲出が多くなつてゐる。此れ即ち增稅の爲めの增稅でなくつて何んであるか。先づ歲入を撮つて置いて、他日徐ろに或種の項目を出すといふ事だ、此の事實の中に明かに現はれてゐる。陸海軍の充實といふが如き緊要な事は、差支なき限りは國民にも其の計劃の全體を知らして、我慢のなる程度に增稅するのは仕方が無い。正體は匿して置いて、何んでも宜いから金を先に出せと云ふのは亂暴な話であ決して承服が出來ない。

小學校敎員俸給の國庫補助は甚だ結構で、我々年來の主張が實現せられる譯だが、其爲に今度の樣な增稅を代償として拂はねばならぬとなると、如何に熱心なる國庫補助論者若しくは支辨論者と雖も、國家今諦から考へて躊躇せざるを得まい。政府は自然增收を自分の手柄のやらに考へてゐるが、是れは學問上から云へば、一種變態の增稅に外ならぬもので、即ち政府は增稅と云はずして既に增納してゐる譯である。斯くの如きものこそ敎員の俸給などに用ゆべきではないか。次に製鐵擴張の如きも、其の企たるや甚だ宜しいが、此が爲めに增稅するのは意味を爲さぬ。其他種々な歲出の項目が有るが、內には大變結構な新しい計企もある事は否まれない。例へば國勢調査費を決めたなどは大英斷と言ふを憚らない。が、併

し國庫の負擔は小にして市町村の負擔が重く、且つ國庫支出は八ケ年に分割されて居るが、市町村の負擔は一ケ年に一度に支出するものであるから、選擧區關係から政黨者流がグズ〳〵云ふ慮がある。小學敎員俸給費中八百萬圓とかは地方の負擔を國庫へ移すのであると云ふことだが、國勢調査費は其れとは反對な行方である。此事の爲めに折角の英斷が汎まれることなきを切望せざるを得ぬ。其他孰れの項目を見ても、增稅、而かも新稅を設ける理由には斷じて成らない。左樣な性質のものでは全然無いと思ふ。即ち今度の財政計劃は、云はゞ圖に乘つた財政計劃で、職責で景氣が好いから是位は出せるだらうといつた態度である。歲出の項目には無用のものは一つもあるまい。併し有用なりとて何もかも行つて可いとは言へない。物には自ら緩急も有るし、必要の程度にも大小が有る。之れ丈けの歲入が有るから、それに應ずる丈けの歲出が是非無ければならぬと云ふので、何もかも探し出して數字丈け合せた觀があるのであるから中には隨分無意味なものも少くない。一々批評するには堪へないが、手近い例を取れば、學校國立費の內に高等學校を初め增設若しくは創立するものが澤山ある。然し高等學校の制度を現在のまゝで續けるのなら增設も宜しいが、既に學制調査を行りつゝあり、而かも大正八年にならなければ、其の結果が如何なるか判らない。增設するなら其の結果を待つて然るべきで、今遽かに着手するは辻褄が合はぬ。其位なら何の爲めに學制の根本的改革を企てたか意味を成さぬ。否、敎育調査會を全然踏つぶしたやり方と評せざるを得ぬのである。今年遽かに着手の必要が有るなら、

何故去年爲なかつたのであるか。元來高等學校の足りないのは多年の宿題である。高等學校の增設には特に「時局の爲め」と云ふ口實は立たない。之れなどは、「序でだから出せ」の悪波を最も露骨に表はしてゐるものである。更に高等貿易殖民語學校の新設費がある。是などは名稱から云つても變であるが、實質は其の名稱よりも更らに奇妙なものである。貿易・殖民・語學を一つに結び付けたものは、既に高等商業學校でやつてゐる。それなら高等商業學校を增設すれば可いのに、其方は一つ增して、別に斯う云ふ變なものを獨立して造る。而して高等商業學校を避ける爲めに、怎んな木に竹を接いだ樣な名稱を付ける。名稱は如何でも宜しいとして、其實質は高等商業學校と變りは無い。今日の高等商業學校から貿易、殖民、語學を差引いたら如何なるか、又高等貿易殖民語學校と言つたとて、其の卒業生が内地の銀行會社に入る事を禁じる事も出來ぬであらう。高等貿易殖民語學校が出來たからとて、高等商業學校から貿易、殖民の科目を省くと言ふのか。そんな可怪しな事はない。之れは畢竟外國語學校救濟の爲めの窮策である。同校からは高々通辯か語學の教師が出る位で、而かも餘り振はない。元來語學校へは高等學校や高等商業學校などの落武者が入るのであるから、其卒業生の振はないのも仕方が無い。外國語學校が斯くの如く不振であるが、之を全廢するわけにも行かぬとあつて、窮餘事實に於ては外國語學校を廢して一種畸形的なる高等商業學校を拵へるのである。何故政府は一歩進めて高等貿易殖民語學校などゝ呼はずに、之を高等商業學校としないのであるか。學制改革は凡ての學校を滿じて秩序有り系統の立つた制度にするのではないか。一方に教育調査會などを設けて系統整理を企てつゝある現政府は、他方にそれを根本的に紊亂する事を企てゝ居る。而して更に斯く高等貿易殖民語學校を創立するは、明かに外國語學校なるものゝ不成績であり、又不必要である事を自白してゐるのである。若し不必要ならば、當然全廢すべき筈である。然るに無用のものは其儘に存して、之を畸形的に改造しようとするのは、畢竟增稅した歳入が剰るけれど、それを國民に返すのが惜しいから、使へる丈け使へと云ふ所から起つたのであらう。併し何とか名を附けて其の命を取て措きたいから、高等貿易殖民語學校と云ふ、語學校でもなければ高等商業學校でもない變な學校を創立しやうとするのである。一體高等商業學校はもとは外國語學校から出て來たのである。而かも其の外國語學校から起つたと云ふ事が、高等商業學校の發達にどの位妨害を爲して居たかは、關係者の苦い經驗を嘗めて熟知して居る事である、過去の沿革が之を證明してゐる。三十年の歳月を閲して通辯學校の弊風を洗ひ去つてやつといゝものに成つたのである。然るに此の失敗の歴史を又政府は初めから蒔き直さうといふのである。外國語學校と云つたつて其礎的學問が確りしてゐなければ駄目である。片々たる才子や通辯が何百人あつたつて、國家に大なる貢獻をする事は出來ぬ。其礎則の學問が充實してゐるものでなければ、國際競爭場裡に立つて我商權を擴張するに堪へないのは言ふ迄もない。然るに外國語學校なるものは斯の如き基礎的學科を全く備へないもので、又現に一校を率ゐるに足るやうな學者は

人もゐない所である。三十年の昔の外國語學校と全く同じものである。此處で貿易殖民に關する高等教育を施さうなどゝ云ふのは、無から有を生ずる手品と言はねばならない。政府の物好きと贅澤には閉口せざるを得ない。之は最も解り易い例を擧げたのであるが、其他を通じて或は重複したり、或は金を取る爲めに企てたとしか思へぬ新事業なるものが少からず有る。即ち何々調査費と稱して各種の奪取(ぶんどり)主義を示してゐる。是等はもつと統一し整理したら、金高は或は減ぜられないかも知れないが、其の能率を遙かに高める事が出來るに相違ない。是等は經費が少額であるから、或は輕視するかも知れないが、少額でも合計すれば多額になる。況んや租税といふ負擔を國民に要求するには、念には念を入れて冗費又は重複を避くべき義務が政府に在る。此度の豫算綱要を見て我輩は新に政府の財政的良心の存在に就て、多大の疑を惹き起さざるを得ないものである。

以上は歳出に就ての批評であるが、更に歳入の部に就て言へば、第一に戰時利得税である。戰時利得税そのものは理屈から云へば極めて至當なものであるのは、我輩も認める。學問上初めて之を唱へ出したのは、恐らく京都の小川博士であらう。學問上に於ては我輩も博士と同論であるが、我國の實際問題としては大いに疑を持つ。第一に戰時利得税は平和克復の日限り廢すべきものである。政府は此の戰爭が何年續くと思つてゐるのか。我輩は平和の到來するのは餘り遠い事ではないと思ふ。假令(よし)んば長引くとも、今後若干年を經れば戰亂は終熄するに定まつてゐる。從て戰時利得税は全く一時的性質を帶びたものである。之れを新設するならばもつと以前に爲すべきで、今日では既に時機が甚だ遲れてゐる。が、「無きは有るに如かず」であるとも云へようが、凡そ税は如何に善しい性質の税でも、必要も無いのに新に起すべきではない。歳出の增加、或は減税若くは廢税の必要が有る時に、一方如何なる税を新に起すべきかと云ふ場合、戰時利得税を起すのは可い。が、然し一時的のものであるから、之を以て陸海軍の充實、小學校教員俸給の支辨などに充つべきではない。永久的の歳出に對して一時的の歳入を充てるは、最も不健全なる財政の立て方である。であるから政府は時局に關する臨時費に充てると云ふが、勿論さうでなければならない。併し國の全體の財政から云へば、引當歳入と云ふ事は今日の文明國の財政に於ては、全然否認せられて居る處である。而かも我國に於ては自然增收の多額なるものがある。若し政府にして臨時費に充つるの必要があれば、必ずしも戰時利得税を待たずとも濟む。然し我輩は此理由で戰時利得税を否認するものではない。我輩が該税を非難するは次の二つの理由に據るのである。即ち第一の理由は平和克復と同時に戰時利得税が廢された時、果して政府はそれ丈けの歳入の減失を甘受するであらうか否か。我輩は甘受しないと思ふ。戰時利得税は廢されるが、それ丈けの歳入の消失を補ふ爲めに、政府は必ず新に他の税を課し、又は他に財源を求める事になるであらう。戰時利得税を負擔するものは財產階級であるから、之れは社會政策の意に叶ふ。が、それは平和克復迄のほんの一時のもので、而して戰時に利得を博したるも

のは、平和克復と共に其の獲得した財産が減少する譯ではない。然るに戰時利得税が廢されゝば、彼等は其の負擔を免がれる事になる。之れは斷じて不公平である。左樣な一時的の負擔でなく永久的の負擔を戰時利得者に課する事を計劃すべきである。即ち我黨の意味するは所得税の根本的改正若くは整理である。それと共に永久的の財源としては、是非茲に考へなければならぬのは、識者の間に於てから宿題となつてゐる土地自然增價税である。時局の爲めに不動産階級が著しく利得を增したのは、疑もなく之れ永久的財産の膨脹である。が、それは今度の施設には洩れてゐる。而して極めて一時的なる戰時利得税しかない。であるから戰時利得税其ものは之を認めても、之と同時に自然增價税を設けるに非ずんば意味をなさない。第二の理由は、今度の增税は戰時利得税の外に所得税率の改正、酒税、ビール税の引上げ、自家用醬油の減石、織物消費税、餡税、清涼飲料税等があるが、是等は國民一般に負擔を及ぼすものである。財産階級に對しては唯一時の戰時利得税を課し、他方一般國民には永久的の增税を課してゐる。政府者は言ふであらう、政府は社會政策的の考へから成金征伐をやると。然し其の成金征伐はほんの僅かの期間で、其の口實の下に一般國民は永久に增税される。之れ蝦で鯛を釣るのである。況んや戰時利得税が廢せられる曉は、再び國民は增税を覺悟しなければならない。餌の餌は食つたかと思ふと直きに吐き出さなければならぬ。而かも却て其の後で苦いものを吞ませられるのである。之れは社會政策の意味に全く相反するものである。今一時成金税が出來たと喜ぶ國民の身には、何ぞ知らん他日更に重い負擔が背負はされるのである。否、他日と云はず現在に於ても、已に成金税が課せられた和條件に種々の增税を甘受しなければならないのである。之れ位損な取引は無い。況んや以上各種の增税の外に專賣益金の增收、通信料金の引上げが計劃されてゐる。之れは國民一般殊に中流以下の國民に重い負擔を課するものである。

而して以上の增税並に益金の增收を負擔するものは、主として都會の住民又は財産無く勤勞によつて生活するものである。名付けて都會的增税と云つても大過あるまい。米價の暴騰によつて莫大な利益を得た地主や農民には何の增税も無い。之れは地主黨たり百姓黨たる政友會の意を迎へたものかも知れないが、さりとは甚だ不公平な財政計劃である。成程地租は租税としては不完全である。然しプロイセンに於ける如く全然之を廢して地方税に讓つてしまはない以上は、之を適當に國家の負擔に當らしめるは缺くべからざる事である。然るに地租增徵と云ふが如きは政黨關係上政府の爲し得ぬ處である。我黨も理想論としては國税としての地租は、他日全廢したいとは思ふが、今日の實際問題は之とは別で、都會の住民には重き負擔を課し、地主並に農民には遠慮氣兼ねをする事は、國家の政治として甚だ當を得て居ない。若し陸海軍充實費、教育補助の支辨其他の新事業の計劃の爲めに增税を必要なりとするならば、宜しく地租も增徵すべきである。尤もそれには地價修正も伴つて容易ならぬ事かも知れぬが、然し手近い處を云へば、地租の脱税、土地種目の不當脱税

務行政上改革の餘地は綽々として存してゐる。而して此の點から云つても自然増價税は必要である。地租増徴は政黨關係上出來ず、又地價の修正も容易に行へないとしても、少くとも自然増價税を課する事に因つて、土地財產階級をして國家の負擔に貢献せしむる事は目前焦眉の急である。然るに政府は左樣な根本的考慮は之を旋らさず、唯眼前取り易きものを取ると云ふ態度を執るは、即ち我輩が増税の爲めの増税、圖に乘つた財政計劃、若くは鼻下思案と評せざるを得ない所以である。

所得税に就ては根本的の整理が必要である。戰時利得税を新に起すよりも、現行の所得税法を嚴重に勵行したならば、一千六百萬圓の戰時利得税額は之を得て來られるかも知れない。假りに然らずとするも、所得税法を十分勵行した上戰時利得税を起すなら可い。既存の税法を勵行せずして新税を好んで起すのは甚だ浮薄なる遣り口である。所得税の税率改正の明細は未だ發表されて居ないが、全體を通じて一割六分の増税と云ふ事である。政府は五百圓未滿を免税し、千圓以下の所得特別控除額を五十圓減らしたのを以て社會政策の實行であると云ふが、實に莫迦莫迦しい。今日の如き物價騰貴の世の中に五百圓未滿の免税などは、少しも社會政策的の意味を有たない。少くとも千圓未滿のものを免税すると云ふのでなければ、何等社會政策的意味が無い。又た千圓以上のものには税率の引上げを益すものの如くであるが、之れは中流階級の最下層を甚だ壓迫するものである。我輩の信ずる所では我邦今日に於ては三千圓未滿の所得に就ては現行率以上に引上ぐべきではない。其の代り大なる所得に向つては、啻に一級を増したのみならず、更に多くの階級を増して累進的に増率すべしと思ふ。然し所得税に就ては税率改正よりも、遙かに緊要なるは徴税上の公平と周到とである。現に近頃新聞紙に表はれてゐる所に據れば、大なる所得者の全然脱税してゐるものが多く、其他小なる脱税者に至つては無論、所得高の虚僞の申告の夥多なるは、衆人周知の事實である。我國も文明國の一つである以上は、所得税を最も主なる財源とするやうに進んで行かねばならぬ。然るを其邊の計劃に就ては何等聞く所が無い。又今度の増税案には表はれないが、營業税も大いに整理若くは改正の餘地が有る。而してそれと共に如何なる財政制度に於ても、資本收益を所得税丈けで十分に捉へる事は出來ないから、彼の資本收益税の如き税を起す必要は有ると思ふ。政府は果して其等の事を十分に研究してゐるか否か。

織物消費税に於ては綿織物の税を多少減じたが、之れなどは一歩進めて全廢すべきものである。メリヤスに新に課税したのは最も惡税と云はねばならぬ。而かもメリヤス課税の爲めに得る增收は誠に少額であるに於いておや。僅かな收入の爲めに煩雜なる制度を設ける事は、健全なる財政に許すべからざる事である。戰時利得税に就ても巨細の點は分らないが、實行上種々なる疑が有る。時局突發以前に既に有つたものには二割を附加してゐるが、戰局發生後新に起つた事業によつて莫大な利益を獲得したものに對しては、之を如何取扱ふべきか、今日迄の所では一向分らない。而して他方に於ては通行税、石油消費税を廢するに、單純にそ

れ丈けを考へれば甚だ可い。然し是等を悪税と云つて廢しても、夫れより更により悪い税を課して之に代へるのであるから、國民から云へば結局有耶無耶である。殊に通行料金の引上げを為す政府が、通行税、石油税を廢するのは意味をなさぬ。其中一方に増税し乍ら他方石油税を廢止すると云ふは甚だ無意味である。之れ我輩が今度の政策を以て支離滅裂の、根本的確信の無い、手當り任せの、出鱈目政策と言はざるを得ない所以である。而して此の支離滅裂は、増税の餘地があると云つて時局を利用するものなるに至つては更らに不心得と云はざるを得ない。況んや他日大々的の陸海軍擴張の準備であつて、謂はゞ増税の小手調べの如き觀を爲すに於てをや。我輩は陸海軍の擴張を否認するものではない。我輩も誠に實はしからざる事ではあるが、現今の世界の形勢から云へば、海軍の擴張は最も必要で、陸軍の軍備充實も亦一日も懈るべからざるものであると信ずる。さう信ずるが故に、尚更ら以つて國民の幸福安寧を周到に考慮して、政府は其の最善を竭くして、而る後に周到なる計劃に基いた財政案を作つて、國務上差支への無い限り誠心誠意を披瀝して、國民に負擔の増加を求めなければならぬ。國民も亦國家の必要有る所を十分に合得したならば、決して徒らに増税に反對するものではないと思ふ。政黨許りが國民ではない。議會を通過しさへすればそれで宜しいと云ふものではない。政黨は默從し議會は通過しやうが、多數國民の良心は斷じて今度の財政計劃を許さないであらう。負擔を甘受する國民は、其負擔が十分なる道理に基き、周到なる計劃の結果であると云ふ事を要求する權利がある。今度の豫算綱要は我々の奉公心を甚しく殺いだものと云はざるを得ないのは、實に遺憾千萬の極みである。

以上は十二月四日迄に發表された所に就て下した批評であつて、他日其の詳細が發表された時には、或は我輩の考を改めなければならぬ所が有るかも知れない。此點は特に明言して置く。

▽間接税よりも直接税を

早大教授　安部磯雄

租税といふものは、大體に於て國民の富の程度に應じて徴收すべきものであるが、それが善い目的の爲めになされたる時は、吾々國民は十分それに堪へられる。即ち其收入が善い目的の爲めに消費されるといふ事がはつきり分つて居る場合には、決してケチ〳〵といやがりはしない。故に政府にして玆に課税をなし、又は増税を爲さうといふ場合に於ては、第一にそれを何に消費するかといふ其目的と、第二に其税は何によつて取るかといふ其方法を、大いに考へねばならぬのである。吾々國民に於ても、第一に其税は果して國家國民の眞の利益幸福の爲めに費されるか何うか、第二に其徴税は社會の實狀に合ひ時勢に適した方法であるか何うかといふ事を、十分に研究し十分に批評せねばならぬ。

そこで、今回の寺内内閣の増税案についても、吾々は大いなる眼

かねばならぬ。其詳細の事は未だ定まらぬやうであるが、其大部分は軍備充實、特に海軍擴張にあるやうである。軍備の事については門外漢であるから、其詳細に渡つて専門的の批評をする事には躊躇するが、其財源である租税の事は大いに述べる事が出來る。今度の増税案が發表された時直ぐ感じた事は、相變らず主もに消費税（即ち間接税）を増加して居るといふ事である。所得税にも手がつけられてあるが、之は正當な事として別に反對はしない。實際日本程間接税の取られて居る國はない。國庫收入の半分以上も此間接税である。即ち間接税が六割何分で、直接税が三割何分といふ割合になつて居る。尤も亞米利加合衆國では間接税の方が直接税よりも多くなつて居るが、之は國情が異つて居るからで、即ち各ステートの方で見ると、何處も直接税が多くなつて居る。何んにしても直接税が僅か三割何分などといふ國は何處にもない。課税の原則であるところの『租税は負擔者の力に應じねばならぬ』といふ事は、直接税については云へるけれども、間接税についてはさう云ふ事は六ケしい。間接税は即ち消費税であつて、消費する場合には富者も貧者も區別なく平等に收めねばならぬ税である。例へば砂糖を消費する場合に、其税を收めるだけの能力のない者でも、又其能力の高下に拘らず、同等に收めはならぬのである。之れは醤油についても、織物についても、清涼飲料水についても、郵便についても同様である。砂糖の如きは一種の贅澤品ではあるけれども、今日の如く廣く用ひられて居る場合は、實際一種の必要品である。斯かる吾々國民の日用必要缺くべからざる物に對して、而かも貧富の差別なく課税するといふ事は、租税の原則からしても、社會政策の上から見ても、甚だよろしくない。斯かる消費税にかけるのは、直接税にかけるより甚だかけ安い。そこで、政府としては此容易な方を第一に取る譯けで、それは一面已むを得ない譯でもあらうが、然し國民の本當の利益幸福乃至國家百年の大計から見れば、甚だ下手な課税と云はねばならぬ。

消極税はかけ易い税であるといふ事について、一言申し述べたい事は、それは議會の賛成を得易いといふ事である。今日の我國の所謂衆議院議員なるものは、殆んど悉く中產階級乃至それ以上の人であつて、口でこそ多數國民の代表者であるかのやうに云ふて居るが、實際は少數富豪の代表者に過ぎない。故に、中產階級乃至資本家階級の不利益を感ずる地租とか所得税などの如き直接税を増加する場合には、極力反對する。若しこれを賛成すれば、早速有權者の御氣嫌を傷ねて、再び當選する事が困難であると同時に、命穴を失ふ事になるのである。然し今回の如き貧民の大なる不利益を被る消費税を増加する場合の如きは、彼等は全く無骨に之れに賛成するものである。超然内閣などと云ふて居る政府でも、此理由によつて已むなく増税の必要があれば、先づ第一に政黨の賛成し易い消費税といふことになる。之れは全く恥かしい事ではないか。此事は本當に政府も政黨も、自分の良心に聞いて、よく考へねばならぬ問題である。今日政府も政黨も口を開けば直ちに「社會政策」と言ふ。抑々社會政策といふものは、貧富の懸隔を調節するを以て目的とするもので

あるのに、口に此政策を唱へながら、其課税法に於て往々貧民を苦しめ、以て貧富の懸隔を甚だしくするといふ事は何うした事であるか。

然らば、増税を必要とする場合に、直接税の中で主な地租の如きから先づ第一にあげて行くがよいかといふに、必ずしもさうではない。私共は今日課税し又は増税するに最も正當なもので、忘れられ氣づかずに居る物、假令氣がついても金持の勢力に恐れてそれをなし得ないといふやうものから、どん／＼遣つて貰ひたいと思ふ。其第一は例へば、都會の繁榮の爲めに價格があがつたところの土地に對するが如き税である。東京近邊の土地の如きは、毎年毎月絶えず其地價が暴騰しつゝある。斯の如きは、全然社會のお蔭であつて、毫も所有者の努力ではないのであるから、其騰貴した割合に對して課税するといふ事は、全く正當な事である。戰爭による成金は一時的の成金であるが、斯くの如き土地の所有者は不斷の成金、何時も成金である。戰爭成金に課税する事の至當な事は云ふまでもないが、此不斷の成金に課税する事は一層必要な事である。ところが此土地に對する税は、實際滑稽な程安い。第一課税の基礎である地價が全るで嘘である。何んでも實買の價格の十分の一にも當つて居らぬさうである。これ程安い而して不公平な税はまたとあるまい。眞に國利民福を計らんとする政治家は、此理をよく／＼考へて、斯かるものに對しては毫も遠慮なくどし／＼と徵税するのが正當である。第二に増税すべきものは遺産相續税である。これも亦成金税の一時的なるに比して永久的のものである。私共は其の財産を子孫が受繼ぐ場合には、其額高の一割乃至二割位を國家に收めるのは全く當然の事であると思ふ。公平に考へて見れば、何人も不同意ではあるまい。財産を得た場合、それには社會の恩惠も勿論澤山影響して居るが、儲けた人夫自身の努力も大なるものがあつたのであるが、其之を讓り受ける子供は何等の努力をしたのではない。之を儲けた人が居ない場合には、其財産については社會の恩惠のみが存在してゐるのであるから、何等の努力を加へなかつた子供が之を受繼ぐといふ場合に、其一割乃至二割位を社會へ收めるといふのは至當な事である。日本にも勿論相續税といふものはある事はあるが、外國のそれに較べれば、餘程少ないのであるから、もつと増加するがよろしい。又財産が多くなればなるに從つて、其税率もどん／＼多くすべきである。斯かる税を正當に取るといふ事は、一面國庫の收入を増加すると共に、一面身體の他受繼ぐべき何等の財産を有しないところの貧乏人に對して好感情を與へるものである。即ちこれ一種の社會政策となる。政府乃至政黨としては、斯かる税を取つてこそ、初めて「社會政策」を口に出す事が出來るのである。實際今日の當事者等は最も小さい問題であるところの小口保險とか工場法などを設定して以て頻りに社會政策であると喜んで居るやうであるが、肝心の大問題であるところの前の地價騰貴税や此の相續税などは忘れて了つて居る。

今日の如き衆議院議員の資質が惡くて、絶えず金持の御機嫌のみ取つて居るやうでは、立憲政治でなくて實際衆愚政治の弊がある。そこで、私共は實際政治には思ひ切つてエライ人が出て來て、――哲人政治

て其理想をテキハキと遣つて貰ひたいと思ふ。

要するに、私は增稅の問題については、其目的軍備擴張不賛成であるから其必要を認めないが、假令之を行ふにしても、其財源をば可成間接稅よりも直接稅――直接稅の中にも、地價騰貴稅及び相續稅に等よるのが正當であると云ふ意味に於て反對を示して置くものである。

▼次號小說豫告▲

長篇小說……………正宗白鳥

兄弟……………谷崎潤一郎

右二篇は作者が最も自信ある傑作にして二月文壇の双璧たるべし

(中付二の一)

(中付二の二)

國家的大辭典第二卷發行

凡ての書齋は本書を備へて始めて權威あり

東京帝國大學文科大學長 文學博士 上田萬年
東京高等師範學校教授 松井簡治 兩先生共著

大日本國語辭典

第二卷 四六倍判脊革角革一千二百五十頁挿畫約四百 **正價金七圓五拾錢**

一萬部限特價提供特價金六圓 金參圓宛二回拂差支無之候

第一卷現在數五百部 第二卷同上一千部限此際特價金六圓にて高需に應ず

各卷送料
内地二十四錢
臺樺四十五錢
鮮支五十五錢

國語は祖先より傳はれる國民の血液なり。偉大なる國語辭典は偉大なる傳統を有する我が國民文化を世界に向つて記念すべき一大金字塔なり。本書の著者兩

先生は權威に頼らず庇護に恃まず、獨力二十餘年の經營苦心、以てよく世の歐米に比肩して恥づる所なき國際的大辭典を大成せり。是れ縦に三千年の國民文化の集大成にして、横に東西に通ずる學問と知識の一大王國たり。此の昭代の光輝たるべき一大事業は今や幸にして江湖の深厚なる同情と出版者の獻身的努力とに依りて、着々秩序的に其の工程を進捗し、茲に豫定の計畫たる第三卷を發行し、明年十月を以て全部の完成を告げんとす。包容の大と實質の精と共に我國唯一の標準的國語辭典としての本書の聲價は既に世界的に確立せられたり。實に本書一部を家庭に藏することは、教養ある日本國民が重要なる資格として認めらるゝのみならず、國民教育の根本たる國語教授の基礎は本書に依つて始めて定まるものと謂ふべし。記憶せよ、我等が祖先の尊き精神は、永く本書四卷に生くる事を、

内容見本進呈　往復葉書申込

權威的推讚の聲

- ■我が國寶的大辭典……時事新報
- □天下屈指の大偉觀……太陽
- ■最初の國民的大辭典……東京朝日
- □最進歩的の國語辭典……萬朝報
- ■國語界永久の權威……大坂朝日
- □國學的事業の完成……帝國教育

發行所

東京神田　**冨山房**　振替東京五〇一番

東京日本橋　**金港堂**　振替東京八八一五

恭賀新年

舊年は一方ならぬ御引立を蒙り有難く奉存候
尚本年も不相變御客願を賜はり度御願申上候

大正七年一月一日

「中央公論」
「婦人公論」
大賣捌所

東京堂　上田屋　東海堂　北隆館

良明堂　至誠堂　共盛社　盛春堂

（中付二の一）

(中付二の五)

賴山陽の遺墨

蒐集に就て同好諸君に請ふ

一、賴山陽遺墨の賣却して差支なきものは、其種類、年代、大小等の如何を問はず汎く讓受けたし。

二、諸家愛藏の山陽遺墨にして非賣品のものは其寫眞を本會に入手し得るの便を與へられたし。

三、全國各地に於ける山陽遺墨愛藏家の人名住所及び其内容如何を記載したるものゝ惠投を冀望す。

四、山陽遺墨賣却の向きにして遠隔の方は其現品或は寫眞を東京に在る知友等の許に御送托あるも妨げなし。

五、本會への御來談は急用の外は成るべく毎土曜日に相願ひたし。

賴山陽研究會

東京市赤坂區臺町拾參番地 電話芝五三三五番

恭賀新禧

賴山陽研究會主幹 三枝光太郎

（中付二の八）



芭蕉菴の春

田中貢太郎

一

春が來た。天和二年壬戌の正月元日が來た。深川六間堀の芭蕉菴では、菴主の宗房が屠蘇の瓦盃を手にしてゐた。顔に薄痘痕のある、瘦せた色の白い男で、頭を綺麗に剃り、杉風から贈つて來た新らしい紬の茶色の道服を着てゐた。

狹い八疊一間しかない菴室には、圍爐裏も切つてあつた。下男の淨求がその前につくねんと坐つて、自在鍵にかけた鍋を見てゐた。

六間堀の朝は靜かで、菴の前の堀割から小名木川の川筋にかけて櫓の音もしなかつた。當時の深川は、下總國葛飾郡西葛西領の内の深川町の分郷で、江戸の土地ではなかつた。菴は鯉屋杉風の別莊であつた。杉風の杉山市兵衛の家は、代々御納屋御用を勤めて、鯉を飼ふ爲めの籞を此所に持つてゐた。籞の傍には、二つの菴があつて、杉風の家の者が往來してゐたが、杉風は人から鯉屋鯉屋と云はるゝが厭さに、その株を他人に讓つたので、籞も不用となり、菴も鎖しがちであつた。その菴の一つを芭蕉菴と云ひ、一つを採茶菴と呼んでゐた。宗房がその一つの芭蕉菴に這入つたのは、

昨年の冬の初めであつた。

形ばかりの床には、薄墨で書いた草書の軸がかけてあつた。その下に蓬莱飾をした三方蔓が置いてあつた。宗房はそれを前にして、屠蘇を祝つてゐた。彼はその朝ほど、穏かで生々した感じのする事はなかつた。江戸の人となつてから芭蕉庵の庵主となるまでには、九年間と云ふ長い長い時間があつたが、それは何時も時雨降る空のやうな、薄黒い、陰鬱な生活であつた。もと、二十三歳の時、蟬吟公の藤堂良忠に逝かれて、その悲しみの餘りに、伊賀の上野を脱走したのが、漂泊の生涯の首途であつた。

それは寛文七年の二月であつた。前年の四月、十四歳の時から仕へてゐた主君に別れて、その六月に遺骨を高野山に納めたが、森々と骨の髓にまで喰ひ入つた悲しみに苛まれて、家に落付いて二代の主に仕ふる氣にはなれなかつた。彼は家を抜け出して行く途で、平生親しかつた同僚の城孫太夫の門口に忍んで行つた。月の光の冷たい夜であつた。彼は矢立の筆を抜いて、月の光に透かし透かして、門の柱に一つの句を書いた。

そして京都に出て、北村季吟の門にゐる内に、何處かに明るい世界があつて待つてゐるやうな氣がするので、寛文十二年に江戸に下つた。小石川關口の水道工事の日に、人夫を指揮してゐる小役人の中に、薄痘痕のある彼の顔を見出した事もあつたが、世事に迂遠な彼には、望んでゐた世界は永久にその入口を見せなかつた。彼は市内を轉々してゐる内に、何時の間にか俳諧師として門戸を張るやうになつてゐた。彼の俳諧は蟬吟公に負ふ所が大きかつた。城孫太夫の門に殘した句として、「雲とへたつ友かや雁の生別れ」と云ふの句が知られてゐた。

宗房は三十八歳になつた所であつた。所謂ゆる環堵蕭然として膝を入れるだけしかない草庵でも、自分の力によつて得た所で正月をすると云ふ事は、今までに嘗て覺えのない心の滿足があつた。彼はふと荒木田守武の「元朝や神代の事も思はるゝ」と云ふ句を思ひ出した。その場合の彼の氣分は、守武の句にぴつたり合つ

てゐた。彼は瓦盃を控へて彼に頷いた。

「旦那、お雑煮が出來ました。」と團爐裏の傍から淨求が云つた。

宗房はその方に心をやつた。「左様か、それぢやお前も此所へお出で、屠蘇を祝つてから、一所にたべやう。」

淨求は傍へ寄つて來た。文盲な乞食坊主のやうな彼は、宗房が芭蕉庵に這入ると共に、傍に小さな小屋掛けをして、炊事の手助けをしてゐる者であつた。

宗房は淨求の瓦盃に屠蘇を注いでやつた。と、頭を掠めた物の影があつた。何處かに便りなさ相な所のある尼僧の顔であつた。彼はその顔が懐かしかつた。彼はその顔を見詰めるやうにした。

——勝手の庭先の竈には、薪の火が勢好く燃えて、その上にかけた釜の湯が沸き立つてゐた。上框の所では、母親と娘とが向合つて、粽笹を拵へてゐた。二人の間に置いた鍋の中から、糯米の粉のねつた物を撮み上げて、小さな拳ほどに固め、笹に入れてある青々した笹の葉に一つ一つ包んで、それを円筒な木製の蒸籠の中に入れてゐた。蒸籠一杯になれば、竈の上の釜にかけて、湯を通すのであつた。非常に暖な顔の汗ばんで來る日であつた。娘は時々顔をあげて、額にこぼれて來るこぼれ毛を手の甲で掻き上げるやうにしながら、座敷の方に坐つてゐた若い男と眼を見合はして笑顔をした。娘の顔は薄赤く上氣してゐた。

——男は奥の緣側をそうと下りて、軒下に立つた。女は男の出た跡の雨戸の隙の薄黒い所から、白い顔をほつかり見せてゐた。戶外は朧月で、四方は紗に包まれたやうになつてゐた。と、男の頭の上で、猫の聲がした。何物にか憧憬れ求むるやうな聲であつた。三聲四聲啼いたかと思ふと、ぱつたり止んだ。男は軒下を離れやうとして振返つて見た。白い顔は、まだ雨戸の間にあつた。——

「旦那、お雑煮を此所へ取りませうか。」と淨求が云つた。

宗房の幻は、ふと消えた。彼は哀愁が萌したなと思

つた。さう思ふと、自分の身が堪らなく淋しかつた。

「暖かい所が好い。彼所へ行かう。」と云つて宗房は起ち上つた。

菴の外で下駄の音がした。宗房は何人か來たなと思つて、坐らずに立つてゐると、障子が開いた。本船町の名主小澤友次郎の卜尺と、杉風の二人であつた。二人の背後の庭には、初日がさして霜柱がキラキラ光つてゐた。庭の先には藪の跡の古池が場面を廣く取つてゐた。汀の石の間には枯れた芒があつた。いぢけた老梅も一株あつて、それには三つ四つの蕾が見えてゐた。

「ほう、お揃ひで。」と宗房は云つた。

「……明けましてお目出たうございます」と杉風は調子外れの大聲を出した。彼は聾者であつた。

二人は爐裏の傍に座つた。屠蘇の瓦盃が二人の間を廻つた。謙遜な宗房の手に銚子があつた。

丁度この時であつた。兩國橋の袂で猪牙舟から上つた若い俳諧師は、芭蕉菴を目差して歩き出した。綺麗な朝日が川風に凍つた顔に微かな熱を感じさせた。大川の水は薄藍の天鵞絨を敷いたやうに柔らかに淙々と流れてゐた。岸の其所此所に縛いである荷足船には、うすうすと煙が登つてゐた。一つの船では紺帶一つした船頭の嬶が大きな尻を見せて大川の水で米を磨いでゐた。船の胴の間の上には、山草や松の枝葉が置いてあつた。俳諧師はそれを見るともなしに歩いてゐた。裲襠(うちかけ)を着た細かい眞白い歯をした女の口元が浮んだ。俳諧師の口元に、微かな笑が浮んで消えた。俳諧師は吉原の歸りであつた。彼は昨夜遲くまで飮んだ酒が殘つて、後腦の方が重くるしかつた。……今晩は、どうして金をこしらへやう……と云ふ考が浮んだ。ぢつと考へてゐると、白い小さな髷を結うた角顔の老人の顔が浮んだ。老人の顔は、米屋の店と一所になつてゐた。……若水や……とやつてゐる老人の眼付まで浮んだ。……さうだ、甲州屋の隠居に出して貰はう……と俳諧師は思つた。

竪川の口にかゝつた一つ目橋の上まで來ると、白い

小さな髷の老人の顔は、髭を剃つた痕の青々とした茶色の眼をした男の顔に代つた。……差配め、怒つてゐるだらうな……と思つた。俳諧師は苦い笑方をした。と、再び自分の前に現はれて來やうとする憎々しい顔が、髭を剃つた痕の青々した男の顔の下から見えて來た。俳諧師はそれが煩さかつた。……薄汚い一枚の蒲團と共に、古着や書物を包んだ千種色の風呂敷包を積んだ荷車を引いた若い男が、ある家の門に立つてゐた。若い男は、「……出來損ひの南瓜野郎……」などゝ云つて家の内の人を罵り罵りして、さつさと車を引つて行つた。……それは、ある年の暮に、店だてを食つて引越して行つた時の俳諧師自からの姿であつた。俳諧師は快ささうに笑つた。擦違つた一人の折助がその顔を覗くやうにした。

やがて俳諧師は芭蕉庵の前に立つた。彼は榎本其角であつた。其角は宗房が關口水道工事の役人を辭した翌年、即ち延寶二年に年十四歳で入門した者であつた。

當時の俳壇は、松永貞徳の門に屬して居る貞門派の俳諧が衰へて、輕快洒妙な西山宗因の談林風が流行はれてゐた。江戸では田代松意の徒が談林風を唱へて、貞徳派の高島玄札、齋藤徳元、石田未得、池田正式等に當つてゐたが、寛文四年になつて宗因が東下したので、俄に勢を增して、江戸俳壇は談林風の風靡する所となつた『十百韻』『江戸八百韻』は、この派の收穫であつた。併し輕浮な談林調では、永く人心を支配する事が出來なかつた。宗房を中心とする一派の徒は、談林派を離れて、醇美な詩風を創始しようとした。

其所へ持つて來て、この年の三月、宗因が江戸に客死したので、愈々談林派凋落の兆が見えて來た。この時宗房の手に、『武藏曲』が成つた。『春二百韻』『江戸三百韻』『四吟歌仙』『桃青二十歌仙』『田舍の句合』『常盤屋之句合』『次韻』などは、既に市中放浪の間に成つてゐた。未だ江戸に下らない時、上野の釣月軒で編んだ『貝おほひ』と云ふのもあつた。併し句としては、いづれも談林調の深く浸み込んだものであつたが、さすがに

次韻あたりから新風の端緒が開けてゐた。「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」の句は、この間に出來たものであつた。

宗因の亡くなつた時分、芭蕉菴では、菴の前に一株の芭蕉を植ゑた。浄求が鍬を執つて土を掘つてゐた。芭蕉は雨を吸うて大きくなつて行つた。廣い大きな葉に絹絲のやうな五月雨の降り注ぐ頃には、その根元から二つ三つの芽生が見えて來て、それも大きくなつて行つた。

宗房はある日、門下の持つて來た短冊に、「芭蕉植ゑて先にくむ荻の二葉かな」と書いた。

軒をおほふばかりになつた芭蕉は、やがて秋風が立つと共に、色が褪せて、鳳凰の尾のやうな葉が破れるともなしに破れて來た。

暴風雨(あらし)模様の日が來た。雨が芭蕉に降り注いだ。宗房はそれを寂しさうに見てゐた。雨はよつぴて降つた。宗房は朝までそれを聞いてゐた。

朝になつて宗房は、筆を執つて、茅舍の感と題して、「芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな。芭蕉菴桃青」と書いた。

春の末頃、空が重くどんよりと曇つて、生暖かい日が幾日も續いた。毛のやうな雨も思ひ出したやうに降つた。夜も晝も蛙がないた。菴の内につくねんとして、瞑想に耽つてゐると、蛙が籔の古池の内に飛び込んで、微かな音をさした。宗房の頭に、ある夜ふと一つの句が浮んだ。「古池や蛙飛び込む水の音。」

佗しい雨が降つたり、黄ろな親しみのない陽が照つたりした。芭蕉菴の主人は、竹取の翁の工にならひ、妙觀が刀を借りて、竹をコツ〱と削つて、骨組をこしらへ、それに紙を貼り、紙の上に澁を塗り〱して、一つの笠を作つた。その形は、蓮の葉が半ば開いたやうであつた。笠は二十日あまりで出來あがつた。彼はその笠の裏に、「世にふるも更に宗祇のやどりかな」と書いて、先づ杉風に見せた。

正午過ぎから雪がちら〳〵降り出した。芭蕉庵へは、七八人の者が集るともなしに集つて來た。圍爐裏のぐるりには、その人々の凍えて赤くなつた澤山の指があつた。

雪の日は寂寞として暮れて行つた。庵主を中心にして俳談に耽つてゐた人々は、空腹を覺えて來た。併し庵の内には、庵主一人が一二度食ふ位しかの食物がなかつた。人々は貧乏徳利を持つたり、笊を持つたりして戸外に出で行つた。庵の内には、飯焚の役を云ひつかつた嵐雪が一人殘つてゐた。溫厚で和平を好愛する俳諧師は庭に下りて井戸の水を汲んだりした。雪はやんで二三寸積んでゐた。

庵主は淺黄の袋を持つてゐた。彼は米を買ふの役であつた。小半時ばかりして、皆が歸つて來た。嵐雪は米を磨ぎにかゝつた。友五は買つて來た豆腐を細かく切つた。昔翠は貧乏徳利に入れて來た酒を溫めやうとした。依水は肩に乘せて來た薪の總を解いた。

飯のあとで、皆默りこくつて句を考へはじめた。それは雪の題であつた。句の浮んだ庵主は、背後に燈つた行燈の方に半身をねぢ向けて、短冊を書いた。「米買に雪の袋やなげ頭巾」

二

天和四年正月元日の朝が來た。隣の採茶庵に來てゐる杉風が年賀の挨拶に來て歸つた後では、宗房と竹良の二人が、淋しさうに圍爐裏の火に暖まつてゐた。

この時の宗房は、天和二年の正月元日に芭蕉庵に坐つてゐた宗房と非常な相違があつた。延寶年間、愈々世に出やうとする望みを擲つて、髮を剃り、世外の人となつて、俳諧に一生を捧げやうとしてゐても、天和二年の十二月までは、世の中に愛情を持つてゐた。彼が魂に刻みつけてある尼僧の姿は、いくら妄念として拂ひ除かうとしても、生々した色があつた。それが、この時の宗房には、もう幻としか思はれなかつた。

宗房がかうした心の變化を來たしたのは、小名木川の小さな流れを一つ隔てた西大工町の臨川寺にゐた佛頂和尚に參禪した事も、その一つであつた。好ん

にした莊子の思想もその一つであつた。それには種々の理由もあつたが、天和二年十二月二十八日の芭蕉菴の燒失もその一つであつた。長い間の放浪から逃れて、漸く見付け出した安住の場所を一朝にして灰として了ふことは、人生に常住の姿を見やうとするの悲しさを思はせない譯には行かなかつた。その失意の悲痛に加へて、芭蕉菴燒失後、彷徨ひ歩いた甲州に於ける痛ましい勞苦があつた。彼は人生を無所住の旅とした。『月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口をとらへて老をむかふる物は、日々旅にして、旅を栖とす。』彼は旅を栖とするの人となつてゐた。

宗房が甲州の放浪から歸つたのは、前年の五月であつた。それは其角の招きであつた。今、住んでゐる芭蕉菴は、その年の秋になつて、門下五十四人の寄進で再建したものであつた。その年其角の選した『虛栗』に、彼は序文を書いてゐた。

天和四年は、二月に貞享と改元した。その八月、宗房は故郷伊賀をさして歸つて行つた。門人の千里が供をして行つた。千里は大和國葛下郡竹の内村の生れで、本名は油屋喜左衛門と云ふ者であつた。

宗房は紙子の上に茶の道服をつけて、檜木笠を冠り、椿の杖をつき、手に數珠をかけ、襟に頭陀袋を下げてゐた。

頭陀袋の中には、種々の物が入れてあつた。中に小さな水鷄笛もあつた。彼は思ひ出して、それを泊り泊りで吹いた。あたりの女や子供が集つて來て、庭先から水鷄笛を吹く藝人の顔を見やうとした。宗房にはその容が堪らなく嬉しかつた。

水鷄笛は一笑と云ふ門下の贈つてくれた物であつた。『然者御約束の水鷄笛贈り給はり、忝く珍重存じ候。此里の人々聞き馴れず、女子供も集り、我を藝者の樣に申しをかしく候。行脚先國處により、一向昔しらぬ人御座候間、吹いて聞かせ可申と悅び申候。鹿笛も木曾より貰ひ申候。時鳥笛も御座候はゞ欲しき物に

候。水鷄笛作る人は作るべくと存じ候。御面倒ながら是も御聞き下さるべく候。出來候はゞ御賴み下さるべく、賴入申候。何にても相應與の物、細工人へ謝禮致すべく候。殺生の道具ながら、水鷄笛鹿笛も只吹くはおかしく候。』などゝ手紙を出したりした。

富士川の土手には、二三軒の茶店があつた。一軒の茶店の前に三歳くらゐの襤褸を著た子供が泣いてゐた。月額がのびて、手足も眞黑に汚れた乞食のやうな兒であつた。

茶店に腰をかけて休んでゐた芭蕉は、『どうした子供だ。』と云つた。

背の高い年とつた亭主は、『あれは、捨兒ですさァ、』と事もなく云つた。

『さうか、それは可哀相だ。』と云つて、宗房は伴れの千里を顧みて、『あの菓子でもやりませうか。』

『左樣ですな、あれをやりませう、』と云つて、千里は振分けの荷物の風呂敷包を解いて、内から二つ三つの菓子を出した。

『私がやりませう。』と、宗房は、起たうとした。

『いや私がやります。』と、千里はその菓子を持つて出て行つて、泣いてゐる子供の手に握らした。

宗房は黙つてそれを見てゐた。秋風はソヨソヨと茶店に釣した草鞋の束に吹いた。『猿を聞く人捨子に秋の風いかに』

大井川を越した日には、朝から雨が降つてゐた。宗房と千里は合羽を著て馬の背に濡れてゐた。路ぶちには木槿の花が白く淋しさうに咲いてゐた。二人を乘せた馬は、鼻づらを木槿に擦りつけるやうにして歩いた。馬子が時々それを叱つた。

宗房は木槿の花に眼をつけてゐた。『道のべの木槿は馬に喰はれけり』

早く宿を出たので、小夜の中山にかゝつた時には、二十日あまりの蒼白い月が微に光つて、山の根際は未

だ暗かつた。宗房は馬の上から月の光を見た。杜牧の早行の句が浮んだ。……垂レ鞭信レ馬行、數里未二鷄鳴一、林下帶二殘夢一、葉飛時忽驚……と、彼はそれを自分の物にしようとした。「馬に寢て殘夢月遠し茶の烟」

伊勢の神廟を拜し、西行谷を通つてゐると、麓の小流れに、村の女が芋を洗つてゐた。宗房はそれに興味を感じて、足をとめて見てゐた。「芋洗ふ女西行ならば歌よまむ」

西行谷から二三里行つた所で、可成な茶店を見附けた。綺麗な中年増のお神さんが出て來て、宗房と千里の容子を見ると、「どうぞ」と云つて、座敷の上に導いた。

二人が上つて行くと、茶と菓子とを持つて來て、「お見受け申します所、風流の旅のやうに思はれますが、それなればお願ひが御座います。私は蝶と申しまして、もと此所の遊女で御座いましたが、今は主人の女房になつて居ります。先代の主人も鶴と申します遊女を女房にして居りましたが、その人は難波の宗因樣がお出でなされた時、句をお願ひした事が御座います。私にも一句して下さいませ。」と云つた。

宗房にはお神さんの言葉が非常に面白かつた。「おや書いてあげやうが、宗因樣のは何と云ふ句だらう、」と聞いた。

「葛の葉のお鶴の怨み夜の霜と申します。」と、お神さんが答へた。

「よし、……おや紙を、」と、宗房が云つた。

お神さんは次の室から硯箱と一二枚の短冊を持つて來た。

宗房は筆を持つて、「あんたの名は蝶さんであつたね……」と云つて、少し考へてから短冊に書いた。「蘭の香や蝶のつばさに薫物(たきもの)す」

九月になつて宗房は伊賀の生家に歸つた。兄の半左衛門が親のやうにして出迎へてくれた。

十二三年離れてゐる間に、二人の容貌は變つてゐた。

宗房は兄の頭髪が真白になつて、生気なく老衰してゐるのを見た。半左衛門は、頭を円めた弟の眉に白い毛のあるのを見て、『お前も年が寄つたなア、』と云つた。

半左衛門は、また首にかけた守袋を開けて、円めて輪にした十筋ばかりの白髪を出して、『これはお母さんの髪の毛だ。』と云つた。宗房は手に受けて押し頂いた。兄の眼にも弟の眼にも涙が湧いた。

宗房は兄の家に数日逗留した。親戚をはじめ旧知の人々が逢ひに来た。四十前後の痩せた尼僧の姿もその内にあつた。一家の人々は、尼僧を『寿貞さん、寿貞さん』と呼んだ。尼僧の父の次郎兵衛と云ふのは、朝晩に来て宗房の傍にゐた。

宗房は次郎兵衛親子の事を頭に置いて考へた。……次郎兵衛も困つてゐるだらう、……何うかしてやりたい……、彼の考へは何時もこれであつて、それ以上には及ばなかつた。苦痛と、不満足と、飢寒とに、あはたゞしく過ぎて行くのが人生の姿であつた。愛慾も貧困も……彼は俗人の次郎兵衛親子を何時も憐愍の眼で

見たが、これは唯だ見るだけの事で、それ以上には如何ともする事が出来なかつた。

吉野山に登つた時は一人であつた。谷々を染めた紅葉は冷たい霧の間から薄赤くほんのりと見えてゐた。谷陰に小さな寺を見付けて、一夜の宿を頼むと、若い女が囲爐裏の傍で、膳をこしらへてくれた。それは住持の妻であつた。妻帯の寺も趣きがあつた。他所に行つてみると、寒い月が山の端にあつた。『砧打て我に聞かせよ坊が妻』

大和から山城を経て近江路に入り、それから美濃の人となつた。秋の陽を織り込んだ黄ろな秋風が野にも山にもあつた。秋風の中に不破の関屋の跡も過ぎた。『秋風や藪も畑も不破の関』

大垣に行つて杭瀬川の谷木因の家に泊つた。木因の家は舟問屋であつた。季吟の高足で、宗房とは同門と

云ふ所から、蕉門の人となつても、彼は決して門人視しなかつた。「當地ある人附句あり、此句江戸中聞人無ニ御座ー候。予に聽評望み來り候へども、予も此附味難レ辨、依レ之御内意たのみ進じ候。貴丈御聞定之旨趣ひそかに御知らせ可レ被レ下候。東武にひろめて愚の手がらに仕度候」。彼はこんな手紙なども書いてゐた。

江戸を出る時、野ざらしになる積りで、「野ざらしを心に風のしむ身哉」と讀んで門下の人々に知らせた宗房は、ふと、それを思ひ出して、木因にその感慨を書いて見せた。「死にもせぬ旅寢のはてよ秋のくれ」

桑名の本當寺に一泊したが、早くから眼が醒めて寢てゐられないので、そのまゝ起きて海岸の方に歩いて行つた。僅に白みかけた空には、星が三つ二つ光つて、寒い風が吹いてゐた。海の上は暗かつた。何處かで二三人の聲がしてゐた。白魚をとる漁師などであらう。やがて櫓の音がギイギイと聽いた。「あけぼのや白魚白きこと一寸」

桑名から熱田に入り、それから名古屋に行つた。濃尾の行脚には、時雨と木枯がついて廻つた。笠は破れ、紙衣はよれよれになつてみるからにみすぼらしい姿であつた。宗房は自分で自分の姿が面白かつた。

京都の醫師で、晩年を狂歌三昧に送つた竹齋の晏如とした姿が浮んで來た。「木枯の身は竹齋に似たる哉」

名古屋では、荷兮、杜國、野水などが入門した。木枯の狂句を巻頭にして六吟の五歌仙が出來た。これが「冬の日」であつた。

貞享二年の正月を伊賀で迎へて、二月、奈良を經て京都に行つた。鳴瀧には「虚栗」に關係のある三井秋風がゐた。秋風は京都の富豪で、山林に隱栖してゐる者であつた。

山莊には梅が白く咲いてゐた。秋風は芭蕉の翁と聞いて、あたふたと出で迎へた。宗房は閑寂な幽居の様に眼をやつて、林和靖を思ひ出した。「梅白し昨日や鶴を盜まれし」

宗房は京都から大津に行つた。山坂をとぼとぼと登つてゐると、路のふちに菫の紫が見えた。「山路來て何やら床しすみれ草」

堅田の本福寺には、僧の千那がゐた。宗房は其所にも泊つた。

湖の上には、日々霞がかゝつた。「唐崎の松は花より朧にて」

四月の末になつて宗房は芭蕉庵の人となつた。舊友門下の人々が續々と訪問して來るので、ゆつくりと手足を延べて旅の疲れを息める事が出來なかつた。「夏衣未だ虱を取りつくさず」

其角は酒に日を暮らして、宗房が歸つて來ても、滅多に芭蕉庵に顏を出さなかつた。

當時彼が住んでゐた照降町の木屐屋の裏にある狹い借家には、嵐雪、破笠などいふ同門の友人が轉げ込んでゐた。

夏の夕暮であつた。その日も其角は、破笠を相手にして、正午過ぎから酒を飲んでゐた。肌拔になつて、白い體をあらはした豪放な俳諧師は、當時の學者文人を片ッ端から罵倒しながら、思ひ出したやうに盃を口のふちに持つて行つた。破笠は先夜行つた吉原の女の事を考へてゐた。

嵐雪が汗を拭き拭きして這入つて來た。其角は背後の柱に背を凭せるやうにして、「深川のお歸りか、」と、冷かしかけた。

「あゝ、深川さ、師匠から預つて來たものがあるよ、」と、澄して云つた。

「……預り物……」と、其角は耳を立てた。

嵐雪は横手の長火鉢の傍に坐つて、懷から一封の書狀を取出した。其角は片手を出してそれを受取つた。「其角丈、はせを」としたものであつた。

其角は封を切つてみた。中から疊んだ二つの紙片が出た。その一つを開けてみると、「飲酒一枚起請」と題

のある文章であつた。「もろこしわが朝にもろ〳〵の上戸達のさたし申さるゝ酒もりにもあらず、又かちんをくひ茶をのみて飲める酒にもあらず。只往生極樂の爲には、南無阿彌陀佛と申して疑ひなく往生すると思ひとりて、一杯のむより外別に仔細は候はず。但三所四種の肴など申事の候は、酒宴ゞ決定して珍らしき酒肴求めたると思ふうちに籠り候也。此外におく深き大盃は二尊の御あはれびにはづれ、本性をうしなひ候はんを、愛せん人はたとへ一代の法を學ばずとも、一文不知愚鈍の身になして、下戸にも常にふるまはせて、只一向に酒を飲むべし」。

其角は又一つの紙燈を開けてみた。宗房の暖かい言葉であつた。「右飲酒一枚起請は、尊朝親王御作のよし承り候。尤さる人の許には眞筆にて掛物にして床にかゝり有レ之候。あまり〳〵面白き御作故、ちよと寫し來り候。貴丈常々大酒をせられ候故、此御文句を寫して、大酒は御無用に存候。仍一句。朝顏に我はめしくふ男かな。如何。委しき事はやがて御目にかゝり、萬々可二申述一候。以上」

其角は肌を入れ、胡座の膝を直して、考へてゐた。破笠が不思議さうにして、その顏を覗き込んだ。

芭蕉菴に雨漏りがしだした。宗房は手紙を書いて、門下にその手入を頼んだ。「草菴殊の外雨もり、昨夜など臥所に迷ひ申候。今日中によろしく賴入候。」

手入にかぎらず、彼は必要があれば、何んでゝ遠慮なく頼んだ。「一、もち米一升。一、くろ豆一升。一、黴みあはせ。右今夕會の夜食に成申候間、御いらせ、傳吉に持せ御越し可レ被レ下候。茶は一森三井寺より澤山もらひ申候。貴様にも早々御出まち入候。」

「只今田舍より僧達二三人參候。飯に出し可レ申候無レ之候。さぶく候故にふめんいだし可レ申候。そうめんは澤山有レ之候。酒一升御こし賴み入り候。さかなはつぶ納豆茶碗に入れ、貴樣御出で候而世話賴入り申候こ其次手に引き合せ可レ申候。はや〳〵御出まち入候」好

「枕屏風むだ書き致し、則ち御使へ相渡申候。備祥せ

んだく、榾少々御申付可レ被レ下候」
「絡下駄御持たせ被レ下、御世話忝く存候。蚊帳鼠に喰はれ申候。おまきに御縫はせ可レ被レ下候。燒跡蚤蚊おほく、殊の外朝寢仕候。」
「草庵鼠多く候間、今夜猫御貸し可レ被レ下候。長助へ御申付なされ。」
「新春めでたく候。早々ながら米二三升頼入候。」
芭蕉庵は冬になつて大に修覆を加へた。

三

貞享四年の正月が來た。甲子の遊行より歸つてから二度目の正月であつた。前年の出來事を云へば、「初懷紙」「春の日」の二つの句集の編まれた事と、冬になつて芭蕉庵を改造した事であつた。その他に、痔病の痼疾ある宗房が、正月から四月頃にかけて病床に親しんでゐた事などであつた。常陸潮來の醫師本間道悦に就いて醫を學んで、「相傳醫術啓迪院一流秘書秘語。那豈滿レ他乎。若於ニ違背一者。大小神祇。別而生緣氏神。可レ蒙ニ御罰一者也。仍而起請文如レ件。」と云ふの誓詞を入れたも、この時であつた。

三月になつて向井去來が京都から來た。其れは肥後であつた。彼は煙管に紙撚を通しながら宗房の話を聞いてゐた。宗房は我が子に對するやうな優しい眼付をしてゐた。

その時宗房は病氣あがりで、一歩も戸外に出ないで芭蕉庵にたれこめてゐる所であつた。上野の花の噂は、日々訪問者の口から漏れた。「花ぐもり鐘は上野か淺草か」

八月十五日の夕方であつた。宗房は頰杖をして横に寢そべりながら、淋しい夕暮の空氣に浸つてゐた。

陽の落ちたばかりの空には、鼠色をした布片のやうな雲が所々にかゝつて、月の登るには間がなかつた。

天和三年芭蕉庵再興の時に植えた芭蕉は、三四本になつて、高く庭先に茂つてゐた。黄ろく色づいた大きな葉は、折々ガサガサといふ微かな音をさした。宗房はそれを耳にしてゐた。

其角と仙北の二人が這入つて來た。宗房がそゝかしい下駄の音を聞いて眼を開けた時には、二人は枕頭に來てゐた。『先生、舟を構へて參りました。大川で觀月を致しませう。』と、其角が云つた。

宗房は、その儘ぢつとして蓐にゐたかつた。『…觀月か…』と云つて、何か考へるやうにしてゐた。

『お體でもいけないですか、』と其角は聞いた。

『いや、惡くはない。』

『ぢや、是非お供致しませう。先生のお供が出來ると思つて、朝の内から舟の構へがしてありました。』と云つて、傍にゐる仙北の顔を見た。『なア仙北さん、』

さう云はれると、厭と云へないのが宗房の性質であつた。『左様か、左様か、ぢや行かう、』と云つて、宗房は起きあがつた。

芭蕉庵の門口には、其角と仙北の乘つて來た小舟がついてゐた。若い船頭が捩ぢ鉢卷して艫の方で水棹を突き立てゝゐた。胴の間には、赤い毛氈を敷いて、風呂敷に包んだ重詰やうの物が見えてゐる。舳の狹い所では、仙北の從者の一人が涼爐（こんろ）に木炭をついでゐた。すくなくなつた堀の水は、これから滿汐を入れて一杯にならうとする所であつた。

何所からともなく月の光がさした。其角と仙北の二人は、宗房を連れて出て來た。『月が出たなア、』と云つて、其角は大川の方の空を見た。黄ろな月が靄氣の空に登つてゐた。

宗房は石段を下りて舟に乘り移つた。その後から仙北が乘つた。其角は未だ岸の上に立つて、月の光を見てゐたが、仙北に注意せられて、下りて來た。同時に船頭が舟を出した。

三人は胴の間の毛氈の上に坐つてゐた。舟は小名木川の流れに曲り、それから萬年橋の下を拔けて大川に這入つた。廣い流れの上には、月の光が漂うてゐた。兩國橋から三叉にかけて、其所にも此所にも觀月の舟がゐた。屋根舟の中には、三味線が鳴つてゐた。醉どれの歌ふ聲もした。

兩岸は月の光に漂渺として見えた。宗房を乘せた舟

は、三叉の方に下つて、中洲の阿部豊後の屋敷の近くまで行つた。月は次第に登つて來た。

酒量の多い其角は、盃の手を休めなかつた。宗房は默々として、手鹽皿に入れた黒豆の煮たのをたべてゐた。「先生、何かお考へになりましたか、」と、仙北が聞いたりした。

小舟は又流れを遡りはじめた。其角は好い心地に醉つて來た。彼は『名月や……』『名月や……』と云つて、頻りに月の句を吐いた。宗房は、『ほゥ』『ほゥ』と云つて、其角の云ふ事を聞いてゐた。

小舟は兩國橋の下まで行つて、又下つて來た。觀月の舟が多くなつた。三味線の音が其所にも此所にもした。舟の傍を瓜の皮が流れたり、藁屑が流れたりした。猪牙の舟の櫓の痕からは、白い泡がチラ／＼流れた。舳で酒を温めてゐた仙北の從者が、『名月は汐を流るゝ小舟かな』と大きな聲で云つた。

『旨い、も一度云つてみろ、』と、其角が云つた。

月に對する句慾がふうわりと高まつて來てゐた宗房の耳に、從者の句が這入ると、彼の句慾は急に消えて了つて、跡に殘つたのは、『名月は汐を流るゝ小舟かな』の句であつた。『好い句だ。』と、宗房は云つた。

『一代の秀逸だ。』と云つて、其角は笑つた。

小舟は四ッ半時まで大川を上下したが、宗房は一句も出來なかつた。そしてその船で、門口まで送られて來た宗房は、一人で池の周圍を歩いた。池の石垣の間に生へた芒の穗は、月の光の下に眠つてゐた。ほの白い池の水の上には、水馬らしい物が微かな紋をかくのが見えた。

月が傾いても彼は池の邊を歩いてゐた。『名月や池をめぐりて夜もすがら』

數日の後、宗房は水郷の月を觀る積りで、鹿島に行つた。曾良と宗波の二人を供につれ、小名木川を船で行つて、行德に上り、其所から布佐まで歩き、布佐から又船を傭うて流れを下つたものであつた。

布佐からの船は、綺麗な月の下を下つたが、潮にな

つて根本寺に著いた頃から雨になつた。

根本寺には宗房が禪を學んだ佛頂和尚がゐた。宗房等は雨の音を聞きながら、夜遲くまで和尚と話した。

曉け方になつて、宗房は和尚の聲に眼を醒ました。

「晴れましたよ」と、和尚は云つた。

宗房は曾良と宗波の二人を起して、緣側に出た。水々した月の光が雨雲の切れ目から漏れてゐた。雨の名殘の雫が屋根の瓦から落ちてゐた。「寺に寢てまこと顔なる月見かな」

九月は默々として菴の内にゐた。曾良が朝晩に來て、宗房の手助けをして、茶を煮たり、火を燒いたりした。

曾良は信州下諏訪の人で、何時も手を膝にして、ぢつと物を考へてゐるやうにしてゐる人であつた。

ある年の冬、雪の降る夜、芭蕉菴を訪うと、宗房は、「君火たけ好き物見せん雪丸げ」と云ふ句を書いて見せた。

十月の末になつた。宗房は又故郷の伊賀に歸つて、かねてその近傍の諸國を遊歷する積りで、江戸を出發した。朋友門人が詩歌文章を贈り、草鞋の料を贈つて餞とした。宗房は首途の吟を芭蕉菴に書き殘した。「旅人と我名呼ばれん初しぐれ」

三河國の保美と云ふ所に、名古屋の杜國がかくれてゐた。彼は壺屋平兵衛と云ふ商人であつた。

宗房は鳴海でこの事を聞いたので、越人をつれて、二十五里の路をあともどりして尋ねて行つた。途中で吉田で一泊した。

保美から伊良古崎へ一里ばかりあつた。宗房は杜國を誘うて遊びに行つた。其所の洲崎には、いらてじろと云ふ碁石があると云ふので、三人は波打際を探して歩いた。

頭の上に骨山と云ふ山があつた。伊良古崎へ渡つて來る鷹を取る所であつた。「鷹ひとつ見つけてうれし伊良古崎」

名古屋には、暫く杖を止めて俳諧の席につらなつた。「いざゆかん雪見にころぶ處まで」といふ句が或る席上で出來た。

伊勢の桑名を過ぎて、日永の里から馬に乘つた。途に杖つき坂と云ふ坂路があつた。宗房を乘せた馬は、その坂路を登つて行つた。師走の寒い陽が笠の上にチラチラした。

坂の中ほどで、荷鞍がずり落ちて、宗房は馬から下に轉がり落ちた。痛くもあれば、をかしくもあつた。「かちならば杖つき坂を落馬かな」と云つて、靜に起き上つた。

馬子は忌々しさうに馬を叱つて、荷鞍の繩紐を締め直しにかゝつた。

年の暮におしつまつて、兄の家に歸つた。

大晦日の晩には、舊友が集つて來て、遲くまで酒を飲んだので、元日の朝は、寢忘れて雜煮を喰ひはづした。「二日にもぬかりはせじな花の春」

阿波の庄といふ所にある新大佛の跡を見に行つた。俊乘上人の舊跡で、護峰山新大佛寺の名は殘つてゐるけれども、僅に苔の生へた丈六の佛像が殘つてゐるのみで、あたりは畑になつて、曳き殘された大根が霜にいぢけて見えてゐた。「丈六に陽炎高し石の上」

三月、蟬吟公の遺子新七郎良長の別墅に招かれて、櫻を觀た。「さま〴〵の事思ひ出す櫻かな」

三月の末に、吉野の花を見に行かうとしてゐると、杜國が尋ねて來て、萬菊丸と云ふ童名をつけて隨行する事となつた。宗房は戯れて、檜木笠の裏に、「乾坤無住同行二人、よし野にて櫻見せうぞ檜木笠」と書いた。

宗房は紙衣一枚合羽、硯、筆、紙、藥、晝笥など入れた風呂敷包を背負つてゐたので、非常に道のさはりになつて苦しかつたが、杜國の萬菊丸に慰められて、

何時になく心が明るくなつてゐた。

杜國は大きな鼾をかいた。宗房はそれが耳について眠られなかつた。大和のある宿では、薄暗い行燈の火を直し、紙を出して、同で大きな鼾を立てゝゐる杜國の顏を見ながら、鼾の繪を書いたりした。

吉野山から高野山に登り、それから和歌の浦に行つた。「ゆく春に和歌の浦にて追付きたり」

再び大和に歸り、奈良で杜國に別れて、山越しに大阪に行つた。大阪から又須磨に行き、鐵枴が峰に登つた。「時鳥消えゆく方や島一つ」

淀川を船で上つて、近江に入り、それから美濃に行つた。大垣では惟然坊が訪問して來た。長良川では鵜飼を見た。「面白うてやがて悲しき鵜船かな」

八月越人を伴れ、名古屋から木曾路に入り、更科に拔けて姨捨山の月を見た。「俤や姨ひとり泣く月の友」

貞亨五年は九月に元祿と改元した。江戸に歸つた宗房は、その十三日の夜に、芭蕉菴に觀月の宴を張つて、朋友門下を集めた。「木曾の痩もまだ直らぬに後の月」

四

元祿二年の正月が來た。宗房は四十六歳になつてゐたが、皮膚がからびて、毛が眞白になつて、六十歳以上の老人のやうに見えてゐた。

昨年の秋、旅から歸つて來た當座は、俳諧の興行でさまたげられて、淋しい自分の姿をまじ／＼と見守つて樂んでゐる事が出來なかつたが、冬になつてからは、獨り草菴に坐つてゐる事が出來るやうになつた。ある夜、床の柱に凭れて、行燈の火影がつくつた自分の影法師を見てゐると、「冬籠又より添はんこの柱」と云ふの句が浮んだ。年の暮近くなつては、「盜人に逢うた夜もあり年の暮」の句が出來た。

この年の暮に於て、宗房の心をとらへた物があつ

た。それは奥羽の遊歴であつた。松島の島の姿は、伊良古崎の浪や、須磨の松林から抜け出て來た。白河の關には、黄ろな秋の風が吹いて見えた。

宗房は、曾良と屠蘇をくみながら、『雪が解けたら、直ぐ出發しよう。』と云つた。曾良は遊行の供をすると云ふの約束をしてゐた。

宗房は又、『今日は、杉風さんに話してみやう、』とも云つた。

三月になつた。宗房は芭蕉庵を人に讓つて、一先づ採茶庵に移り、その二十七日、曾良を伴れ、門下の人々に千住まで見送られて、奥羽をさして出發した。『行春や鳥啼き魚の目は泪』

日光山に詣で裏見の瀧を見てから、那須野にかゝつた。その日は雨が降つて、荒涼たる野中に日が暮れた。一軒の農家を見付けて宿を借り、翌日は又野中を行つた。

草がくれの路は縱横に別れてゐて、どの路を行つて好いか分らない。路と思つて行つてみると、いばらの藪となつてゐて、雉子がケケンと啼いて飛んだ。路の三叉になつてゐる所には、遊んでゐた野兎が人の足音に振返つて、キヨトンとした後に、何處ともなく姿をかくした。

宗房と曾良の二人は、路を案じ案じて歩いた。それでも路の分らない所があつた。馬を繫いで草を刈つてゐる農夫があつた。農夫の傍には十二三歳に見える男の子と、女の子が二人ゐた。

曾良が傍へ行つて路を聞いた。農夫は情深い男であつた。『この路は、はじめての旅人の行ける所でないから、馬を貸してあげます。馬の行く通りに行つて、馬が止まつたなら下りておくれ。』と云つた。

宗房は馬に乘つた。二人の子供が馬の前後を走つた。曾良は後から歩いた。宗房は馬の上から、女の子に向つて、『お前の名は何と云ふかね、』と聞いた。

『かさね、』と、女の子は答へた。宗房は珍らしい名

と思つた。

やがて人家が見えて來た。馬はぴつたりと止つた。宗房は馬から下りた。いくらかの錢を馬の鞍壺につけて、馬と別れて行つた。別れる時宗房は馬の額を輕く撫でた。

白河の關には、卯の花が白く咲いてゐた。卯の花に交つて茨の花もあつた「卯の花をかざしに關の晴着かな」

須賀川の驛に等躬と云ふ俳友を尋ねた。等躬は宗房をもてなしながら「白川の關を越えるに、どんな氣持ちで越えたか。」と聞いた。宗房は、「長途の苦しみがある上に、風景に魂を奪はれてゐたから、考へる暇がなかつた。」と答へて、「風流のはじめやおくの田植歌」と云ふ句を書いて見せた。

福島を過ぎ、飯塚の里に佐藤庄司の舊跡を見て、その里に一泊した。貧しい小さな家で、土座に筵を敷いてあつた。灯もないので、圍爐裡の火影で寢處を拵へて寢たが、蚊と蚤とが多いので眠られない。その内に、雷が鳴つて、雨が降り出した。雨は寢處の上に漏つた。その上、宗房の持病が起つて、もう此所で動けなくなるのではないかと思つたが、朝になると、いくらか心持ちが好いので、馬を雇うて出發した。

仙臺から松島に遊び、それより平泉に行つて、秀衡の屋敷跡を見、高館に登つて、康衡はじめ藤原氏一門の滅亡の跡に淚を落した「夏草や兵どもが夢のあと」

出羽の尾花澤より七里あともどりして、山形領の立石寺に詣でた「閑さや岩にしみ入る蟬の聲」

大石田から舟に乗つて最上川を下つた。「五月雨をあつめて疾し最上川」

六月三日羽黒山に登り、八日月山に登り、九日湯殿に登り、宿坊としてゐた南谷の別院で、別當代會覺阿闍利の需によつて、三山順禮の句を短冊に書いた。月山の句は「雲の峰幾つ崩れて月の山」

川船で酒田の湊まで下つて、淵庵不玉と云ふ醫師の許に泊つた。「暑き日を海に入りけり最上川」

象潟に舟を浮べた。「象潟や雨に西施がねぶの花」

越後路にかゝり、出雲崎に一泊した。旅宿の二階から見る夕暮の海の果に、佐渡ヶ島が横はつてゐた。やがて夜になると、銀河が空にかゝつて、それが佐渡のあたりに流れてゐた。波の音が耳について佗しかつた。「あら海や佐渡に横たふ天の川」

親知らず子知らずの難所を越えて、市振の關に至つて宿をとつた。隣室にも客があつて、夜遲くまで話をしてゐた。若い女が二人と年とつた男が一人ゐるらしい。聞くともなしに聞くと、女は伊勢參宮に行く新潟あたりの遊女らしかつた。男はその二人を此所まで送つて來た口振りであつた。女は手紙なども書く容子であつた。

朝になつて宗房と曾良が草鞋を履かうとしてゐると、隣室の客らしい艶かしい二人の女と老人とが出で來た。女の一人は宗房の前に來て、「お跡を見えがくれについて行かして下さいませ。」と云つた。

俳諧僧は立ち寄る所が多かつた。「私達は路寄りする所が多いから、どうも一所に行つてあげる事が出來ません。」と宗房が云つた。

女達は悲しさうな眼付をして、草鞋をつけはじめた。宗房と曾良は、一足先に宿を出た。「一つ家に遊女もねたり萩と月」

卯花山、栗殼谷を越へて七月十五日金澤に着いた。「あか〳〵と日はつれなくも秋の風」

金澤を立つて小松に行つた。北枝が送つて來た。彼は兄の牧馬と共に刀研を職業としてゐた。小松の太田神社には齋藤實盛の甲があつた。「むざんやな甲の下のきりぎりす」

山中溫泉にも行つた。曾良は腹の病が起つて、一所に旅行が續けられさうにもないので、伊勢の長島の知人の所に行つて養生すると云つて、別れて一人で出發した。別れる時、彼は師匠の前に一句を示した「行き行きてたふれ伏すとも萩の原」

宗房は北枝を伴れて、大聖寺に行き、それより越前へ這入つて、丸岡の天龍寺に至り、其所の松岡といふ茶店で別れた「物書きて扇引きさく名殘かな」

福井に等栽と云ふ舊友を尋ね、其所に二日ばかり逗留して、敦賀に行つたのは、八月の十四日であつた。その夜は月が冴へてゐたが、翌日は雨になつた。「名月や北國日和定めなき」

敦賀から出迎へに來た路通を隨へて、大垣に入つた。路通は乞食をしてゐて宗房に拾はれた男であつた。

九月の三日になつて如行の家に着いた。曾良も伊勢から出て來た。越人も馬を飛ばせて來た。如行の門人の竹戸と云ふ鍛冶職の男が、武骨な手で、長旅に疲れた宗房の肩や腰をさすつた。宗房は持つて居た紙衾を形見として竹戸にやつた。

九月六日、如行の家を出て、伊勢に行つて太神宮の遷宮を拜み、それから伊賀に歸り、伊賀から山越しに奈良に行つた。時雨の降りさうな空に、陽はかくれたり露はれたりした。「初時雨猿も小簑を欲しげなり」

嵯峨に行つて去來の落柿舍を訪ひ、膳所に行つて、その年を暮らした。翌年の春は伊勢に行つて園女を訪ひ、伊勢から伊賀の歸り、それから大津の濱田珍碩の

家に行き、大津から栗津の義仲寺にある無名庵に這入つた。

四月、石山の奥、國分山の麓にある八幡宮の傍の草菴を修覆して、それに移つた。門人曲翠の伯父の隠遁してゐた所で、幻住菴と云ふの名があつた。「まづたのむ椎の木もあり夏木立」

幻住菴では、大津の智月尼の子の乙州や支考などが來て、薪水の事に從つた。丈草、正秀、珍碩、曲翠、支考など云ふ人々は、この前後に門下となつた者であつた。

夏、京都に出て凡兆の家に遊び、四條河原の納涼を見た。「河風やうすがき著たる夕凉」

八月になつた。十五日の夜は、無名菴に膳所松本の人々を呼んで、觀月の宴を張り、十六日の夜は、船を堅田の浦に浮めた。「やすやすと出でていざよふ月の雲」

九月になつて、上島鬼貫が幻住菴に來た。秋氣が日増に冷たくなつた。痔病に惱まされてゐる宗房は、無名菴に移つて來た。

元祿になつた。その春、去來、史邦、凡兆の手に「猿簑」が出來た。その前年には、曲翠、正秀、珍碩の手に「ひさご」が出來、元祿二年の三月には、荷兮の手で「あら野」、その前年即ち元祿元年の十一月には、其角の手で「續虚栗」が出來てゐた。

春が來ると宗房の病氣が好くなつて來た。彼の心はのびのびとして、琵琶湖の春色が新らしく眼に映つた。そしてそれが老いて行くのが惜まれた。「行く春を近江の人と惜みけり」

四月十八日、宗房は嵯峨の落柿舍に行つて、暫くの

、間、其所に滯在した。庭に數株の柿があつた。もう建て丶久しくなるので、彫をした梁も、色紙を張つてあつた壁も、處々破れてゐた。竹椽の前に一株ある柿の木は花をつけてゐた。

宗房は障子をつくらつて、片隅に机を据ゑ、白氏文集、本朝一人一首、世繼物語、源氏物語、土佐日記、松葉集などを置き、蒔繪の五重の器に種々の菓子を盛つてあつた。名酒の壺も一つ机の下にあつた。

去來と凡兆とは、朝晩に來て宗房を慰めた。ある時は、羽紅尼などが來て、五人で一つの蚊張に寢た事があつたが、寢ぐるしいので、夜中頃から蚊張を這ひ出して、晝の菓子盆から殘りの菓子を撮んで、朝まで語り明かした事もあつた。

雨が降つて、去來も凡兆も何人もゐない日があつた。宗房は紙を出して樂書をした「喪に居るものは悲しみを主とし。酒を飮むものは樂しみを主とし。愁に住するものは愁を主とし。徒然に住するものはつれづれを主とす。」と書いて、終りに「うき我をさびしがらせよかんこ鳥」と添へた。

十一月、宗房は、支考と甥の桃隣を隨へて江戸に歸つた。芭蕉菴は既に讓つてあるので、橘町に家を借りて住んだ。舊友門人が詰めかけた。「兎も角もならでや雪の枯尾花」

宗房は元祿五年の正月を橘町で迎へた。門下の人々は老師を慰める積りで、夏の初、深川の舊菴の傍へ新らしく菴室を作つて、五株の芭蕉を植ゑた。

草菴に這入つた宗房は、暫く門を閉ぢて何人にも逢はなかつた。「朝顏や晝は鎖おろす門の垣」

八月九日には、桃隣が森川許六を伴れて來た。許六は彦根の藩士であつた。九月には濱田珍碩が江戸に來た。

惟然坊もこの前後に飄然として芭蕉菴を訪うた。この日宗房は、杉風の所から唐紙を貰つてゐた。惟然は

それを見付けて、宗房を相手にして、樂書をはじめた。惟然は腹這になつてゐた。

唐紙は何時の間にか無くなつた。「昨日は唐紙澤山御恵み忝く存候。然る處、昨夜惟然一宿、例のむだ書剰筆の先棒になし、困り入り申候。今四五枚申請度候。此人に御越し可レ被レ下候」

五

元祿六年の正月元日が來た。宗房は朝早くから芭蕉庵を出て行つた。正午頃になつて、櫻田門外にある井伊の家敷を這入つて行く彼の背後姿が見えた。彼は許六を訪うたのであつた。そして許六の許に四五日滯在してゐた。

三月上己の節句になつた。宗房は門下の其角と嵐雪の事を思うて、「兩の手に桃と櫻や草の餅」

八月二十七日に、松倉嵐蘭が亡くなつた。宗房は憮然としてこの知らせを聞いた。嵐蘭は前年、曾良、洒堂などと共に、芭蕉庵で「深川集」を撰んでゐた。宗房は嵐蘭の誄を作つた。「秋風に折れて悲しき桑の杖」

冬のある夜、芭蕉庵へは、野坡、利牛、孤屋などが集まつて來て、俳談をしてゐた。この人々は、春の頃から、「炭俵」を撰ばうとしてゐる者であつた。野坡は越前の商人であつたが、俳諧に遊んで、放浪してゐる者であつた。孤屋と利牛は呉服店の店男であつた。話に夜が更けて、火種も小さくなつた。宗房はふと句を得た。「金屏の松の古さよ冬籠」

六

歳が明けた。元祿七年の正月元日が來た。芭蕉庵では、その年五十一歳になつた宗房が甥の桃隣と話してゐた。

宗房は、本年は西國の行脚に行くと云つてゐた。彼は寛文六七年の頃、二三人の知人と一所に中國九州に行つた事もあつたが、その時は夢のやうに過つて行つたので、何も分らなかつた。

「今度は長崎にも云つて、唐人船も見て來たい。」と宗房は云つた。

「それは好い思立ちで御座います。……お身體は、もう何とも御座いませんか。」と桃隣は聞いた。

「病氣の方は好いやうだが、一體に弱つてゐるから、今度出れば、もう江戸には歸れないかも分らない。」と宗房は淋しさうに笑つた。

「まだ大丈夫ですよ、ついでに南京へもお渡りになつたら如何で御座います。」と桃隣は强いて笑顔をした。

「身體が續けば、南京でも和蘭でも何處でも行くが、もう身體が續かない。……併し天和元年はじめて伊賀へ歸つて行つた時から、何處かで野ざらしになるだらう、なるだらうと思つてゐるが、まだ野ざらしにならない所を見ると、人間の身體も强いもんだ。」

二人の話は俳諧の方へ移つて行つた。「伯父さん、何か今朝のお作が御座いますか。」と桃隣が云つた。

宗房は起つて、床の机の前に乘せてある短册を持つて來て桃隣に見せた。「蓬萊に聞かばや伊勢の初便り」

三月上野の花見に行つた。「四つ五器の揃はぬ花見心かな」

五月八日、宗房は伊賀に歸ると云つて芭蕉庵を出發した。朋友門人が品川まで送つて來た。宗房は駕籠の垂れを捲いた下から老いた顔を出して、一人一人に別れの言葉をかはした。その眼には涙があつた。

門人の内には、駕籠に隨いて川崎まで行く者もあれば、箱根まで行く者もあつた。

宗房は道々門下知友を訪うて、五月二十日頃に伊賀に歸り、それから京都に行き、京都から近江に行つた。

この時伊賀から一封の書狀が來た。宗房はこれに對して返辭を書いた。「壽貞無仕合もの、又おふう同じく不仕合、とかく難二申盡一候。好齋老へ別紙可二申上一候へ共、急使に候間、此書狀一所に御覽被レ下候樣に賴

存候。萬事御肝煎御精御出しの段々、先書にも申來、扨々辱く、誠に不思議の縁に候。此御人賴み置き候も箇樣に可ㇾ有ㇾ端と被ㇾ存候。何事も〳〵夢まぼろしの世界、一言理窟は無ㇾ之候。ともかくも能き樣に御はからひ可ㇾ被ㇾ成候。理兵衛もうろたへ可ㇾ申候間、とくと氣を沈めさせ、取亂し不ㇾ申樣に御示し可ㇾ被ㇾ成候。」

宗房は書き終つて、眼を閉ぢて考へてゐた。

七月になつて、兄の招きに逢うて伊賀に歸つた。宗房はこの時江戸で手を着けかけてゐた『續猿蓑』に眼を通してゐた。杉風、桃隣等の撰した『別座敷』は既に出來あがつて、宗房の手許まで送つて來てゐた。

大阪の連衆から頻りに招くので、宗房は、支考惟然及び次郎兵衛の三人をつれて、伊賀を發足し、途に奈良を經て、九月九日に大阪に着いた。

その二十六日、園女の許に行つて饗應を受けたが、夜になつてから腹痛が起つて、下痢があつた。

十月一日には病勢が一變して、二三十回の下痢があつた。惟然と支考とは驚いて、近國の門下同人に通知を發した。去來、正秀、乙州、木節、丈草、吞舟をはじめとして、門人知友は皆集つた來た。

三日になつた。今まで發生してゐた之道の家が狭いので、御堂前の花屋に移つた。病勢は募るばかりであつた。

九日には、宗房、丈草と去來を枕頭に呼んで「旅に病みて夢は枯野をかけ廻る」と云ふの句を聞かした。吞舟がそれを筆記してゐた。

十一日になつて、大和めぐりから大阪に來た其角があはてゝ駈けつけた。

十二日になつた。その申の刻、宗房は合掌して、微かに微かに觀音經を唱へてゐた。

私は芭蕉の研究者でない。唯、少年の時讀んだ『芭蕉翁綸嗣傳』『俳諧水滸傳』『蕉門頭陀物語』などの面白かつた事を思ひ出して、さう云ふ風の傳奇物を書きたいと思つて筆を執つたのがこれである。これを書くに當つて引用した材料は、沼波瓊音氏の『俳味』

山崎藤吉氏の「俳人芭蕉」、及び、「芭蕉全集」「芭蕉翁文集」「芭蕉翁繪詞傳」「武江年表」、その他十餘種の雜書であつた。

大正相撲術の興味

水谷竹紫

「一」近代に於ける鑑賞眼の變革

『最近の一世紀に成りし文明は、その以前の幾千年間に遂げ得たる文化の總量に匹敵する』と云つた學者がある。可成り誇張した詞には相違ないが、近代文明推移の跡を見れば、必しも甚しい失當ではない。

特にも日本近代の有様と來ては、その變遷の加速度が極めて猛烈である。十年一昔はさて置いて、五年が怪しい、三年が怪しい。極端に云へば、昨日は今日の昔と云ふ程にも及んで居る。

かゝる時代にあつては、物の見かた、解釋、鑑賞の標準なども、どしどしと變遷して來る。古い昔の眼で見たり、十年その儘の尺度を當てゝ見たところが、とてもその眞相が讀めるものでもなく、その趣が正しく味へるものでもない。相撲を見るのも亦丁度同じことで、昔の鑑賞眼をそのまゝに、今日の相撲を眺めたとて、とても解りはしないし、また感興が起る筈はない。明治の相撲には、明治相撲の發達と特色と趣がある。大正の角力は又大正式の特徴と興味があらねばならぬ。

「二」角道に關する意義の變遷

角力史を繰返すまでもなく、昔の角力は、今日で云ふ競技と云ふものよりも、むしろ單なる「力競べ」であ

つた。建御雷神と建御名方神が、出雲の小濱で力競べを行つたと云ふ傳説はさて置いて、野見宿彌と當麻蹶速の取組の如き、競技と云ふよりは寧ろ格闘に近い。鎌倉時代の若殿原が好んで試みたと云ふ角力も、云はゞ戰場組討の豫行演習で、ゲームと云ふよりは一種の武術であつた。それから後の時代に於ては、角力が宮廷の儀式としてのみ行はれた事もあるし、諸國武勇の士の選擇手段を意味した事もあつた。かう云ふ時代に於ては、角力と武術との間に横はる限界は、あるかなきかの纎細い線に過ぎない。否むしろ角力も劍道や柔道と等しく武道の一部門で、その體力養成大力養成の奬勵手段であつた趣がある。だから觀衆は同時に競技者であり、角力を見て樂む程の人は、また自ら土俵に上つた經驗のある人のみである。從つてその興味は學習興味であり、樂屋裏の興味であり當事者興味であつた。

しかし角技は、かう云ふ時代を經ながらもずんずんと變遷し成長して、寛永年間には例の勸進相撲の興隆を見るに至つた。即ち角技は茲に見せるものとしての基礎を築き、舊來の武技や式典的意義から離れて、運動競技の域に踏み込んだのである。一部の人のみに存した狹小な區域から躍り出でて、廣い民衆の興味に飛び込んだのである。劇が式典又教化の手段から離れて民衆藝術となつたように、角力も亦民衆競技となりすますに至つたのである。

既に見せる物である以上は、それを見るのみの人がある事を豫想する。見て樂む人のある事を豫想する。見て樂しむ以上は、なるべく面白く見たいとの欲望がある。從つて、實用上の角技の學習や研究の外に、鑑賞上の研究や論議が生じて、力士評判記となり、角力評論となるに至つた。

私がこれから說かんとすることも、畢竟の此の立場に基き、角技をして飽迄も純なる一種の運動競技乃至は見せるものとして取扱ふのであつて、武技と混合したり式典と紛はしたりするものではない事を豫め斷つて置く。

けだし、かゝる實用的の目的は、競技の副産物であつて決して其目的ではない。武技式典などを背景としての評論は、多くの場合に、議論を混亂せしめるのみで、何等角技發達の助とはならないからである。

寛永以來の角力は、武術より離れてゲームと云ふ域に達したが、尚その角力術は甚だ朴素的な矢張り單なる「力競べ」に過ぎなかつた。競技としての規律や、その審判法なども、決して整頓したものではなかつた。例の行司の逸話として有名な、吉田追風が寛政二年の上覽相撲に、小野川と谷風の角力を審判して、氣負け氣勝ちの判決を與へたと云ふ事實も、逸話としては面白いが、運動競技の審判原則から云へば、殆んど意味をなさない事柄に過ぎない。要するに、明治の中葉までの相撲は、規則立つた運動競技と云ふよりも、寧ろ原始時代から脈を引いた力業の競爭で、極端に云へば闘犬闘牛などに對するものと、類似した興味に過ぎなかつた。

しかし、時代の進運は髷のある社會にも影響する。回向院が國技館となり、板圍ひの青天井が、板圍の天幕張となり、それがまた鐵骨大合掌の洋式館となるに至つて、角技は著しい變革を遂げ、殆んど前代と面目を一新するに至つた。

大正角力の興味は即ちこゝに發現する。

「三」 最近角技の長足な進步

先代の横綱梅ヶ谷即ち今の隱居大雷、曾つて最近の角技を評して『近頃の相撲は全で私共には理解りません、理窟にも何にも合つて居ないやうで……』と云つた事があるさうな。これと同樣な繰言を、私もまた、この十年程本場所を欠席して、最近久方振でやつて來た老角通から聞いた事がある。それからまた、それとは反對に、地方の素人角力などで私自身が驚いた事もあつた。仕切などは可い加減にして、いきなり相四つに引組み、組んでから後に行司が團扇を引いて相撲を開始する、やがては捻ぢ合ひ押し合ひ、相當の長時間を費して、ドヾのつまり、反るか投げるかで勝負がつくのである。如何にも、のろくさい、素人くさい感を

催して來る。しかし考へて見れば、これは昔の取口なのである。素人と黑人と云ふ技倆上の差別ばかりではなく、昔の角力と今の角力と云ふ時の差を示して居るものである。

つまり、今日の角技は、以前の角技のような四ッ身を主體とする力量本位、乃至は技巧本位では解釋されなくなつた。四十八手の型通では見當がつかなくなつた。最近の角力は殆んど作戰本位である。そしてそれから出て來る實效主義、先制主義、機動主義でそしてまた超技巧的な氣合本位となり、非常に纖細な復雜な味となるに至つた。

角力取の體格がぶく〳〵と膨れて、筋肉の働が遲緩で、細かな鋭敏な仕事が出來なかつた時代は、「地力」と云ふものが、勝敗の上の唯一の權威であつた。だから大力士は小力士に、强力のものは微力のものに負ける機會が少かつた。大關が小結に破れると云ふ事は、既に大なる番狂であつたのである。今の角力は決してそれがさうではない。

昔の角力術を一言にすれば、白なら白、黑なら黑、赤青黃といつた單色からなり立つて居るやうに見える。從つてその技巧も、凡てが單純で、其の線が太く粗く、味が大まかであつた。今の角力は之れ等の單色を組み合はせ、しかも幾多の中間色をも織り込んだ趣がある。見樣によつては、赤とも青とも紫とも見當のつかない玉虫色の味がある。從つて線が細い、そして錯雜して居る。昔のまゝの鑑賞眼や十年前の眼鏡を以てしては、いやもう、奇技破天荒。突飛出鱈目の沙汰、大雷や老角通の驚き呆るゝのも、さらさら無理ではないかも知れない。

しかし、これが時代の變遷である。時の進歩である。鴨綠江の水が逆まに流るゝ時があるとしても、時の流は如何ともし難い。私等は唯、此の變遷を變遷として、その中に興味と共鳴を求めねばならない。

「四」 最近角技の特色……其一 實効主義

第一に、今日の角力は勝負本位の實効主義時代であると云へよう。勝ちの方の外觀が如何に美しからうが、

纔からうが、またその內容が充實して居ようが、貧弱であらうが、勝ちさへすれば目的を遂げる譯である。だから『勝つ』と云ふ側の研究は大に發達して來た。『打突り稽古』の基本練習よりは、勝負術を演練する『申合』が主なる練習法となつたのもその爲である。立合に手間が取れて、作戰に頭腦を絞るのもそれが爲である。別言すれば、著しく實效本位經濟主義となつて來たのである。

太刀山の角力振の如きは、即ちその具體的の好例であらう。己れの實力を實力のまゝに發揮して、最も實用的に經濟的に使用するのが彼である。即ち彼は小敵に對つては右を捲き込んで左を當てゝ押し飛ばす。大敵に對しては、例の諸手の巨炮を發射する。何が何でも敵を近けない分別、相撲を技術化しめない分別で、自己の强大な威力を生のまゝに使用する。之れと云ふのも彼が中年からの力士で四つ身の鍛練と云ふ舊來の技巧に乏しいから、此の弱點を避けた安全第一主義を取つた所以である。

云ふ迄もなく此の戰法は敵を思ふ儘に取組ましめ、その全力を盡さしめて、後に徐に勝つ』と云ふ古來の横綱の理想を破つたもので、新代横綱のレコード破である。太刀山が巨人たる所以は何よりも此の聰明な取口にある。多少の非難は招きながらも、雷電以來の聲名を馳せた所以は實に茲に存する。

之れに比ぶれば、鳳は時代錯誤の悲境に陷つた横綱と云へよう。鳳が關脇時代の前後は、英氣颯爽たる新式な取口を見せた。然るに横綱の榮冠を頂いて以來、『横綱らしい取口』と云ふ舊時代の惡夢に襲はれて、甚しい失敗を演じた。即ち進んで攻め、咄嗟に勝を制すると云ふ自己の特色を捨てゝ、舊式な保守的な戰法を學ばんとした事であつた。凡て出る力士は受ける力に乏しい。受けて立つ事に秀でた力士は、咄嗟の進攻に機智を逸し勝である。鳳はそれを知つてか知らずか、自ら自己の弱所に陷つて慘ましくも傷いた。鳳は何と云つても鳳である。決して弱い力士ではない。唯弱げに見たのは、舊式角技の亡靈に魅かれた薄倖に過ぎな

い。

かくの如く、新舊角技のディレンマにかゝつて馬鹿を見た鳳と、新式を創始し押し通した太刀山とは新舊角技を語る上に大切なる對照を示して居る。

「五」最近角技の特色……其二　先制主義

第二に、近代角技の特色とも云ふべきものは、その先制主義である。凡ての勝負事が、先手必勝先制の利を重んずべきは論のない話、昔の角力にだつて、之れに氣がついて居ない譯ではなかつた。しかし近代の角力の如く、これが著しく影響し、從つてまた鋭く力士の頭を惱した譯ではなかつたらしい。その昔の高砂一門の上突張は、つまり此の意味の表現であつたけれど、今日の出羽一門の押角力ほど、明確な目的があつた譯ではない。大錦は最もよく之れを理解した人だし。伊勢の濱、小常陸、浦の濱、土州山、紅葉川、逆鉾、眞砂石、石山の如きは、先手を取らねば勝味のぐつと減る力士である。伊勢の濱の不振も一つは受けて立つ大關角力の悲さである。

先手必勝が近代角力の主要な戦術となるに至り、自ら仕切が叮嚀になつて、立合が難しくなる、マッタが多くなつて、場面が不活潑になる。そして近代角力の興味はむしろ此の間に認めらるゝ事が多い。

「仕切」は一言に云へば、戰鬪準備の姿勢で、その形狀により、その氣合により、各局の勝敗さへ豫想さるゝもの、決して等閑に視るべきものではない。立合つてからが角力ではない。仕切の位置についてからが既に角力である。低く仕切るは直ちに敵の胴中に喰へらん爲、片足を引くのは、後方に支柱を得て、敵の突撃に備へ、且つ自己の進攻にハヅミをつける爲と、體の開きに便を得んが爲である。密着するは素早く組まん爲、離れて仕切るは體當りの衝撃力を利用せん爲である。正面に仕切るか、半身に仕切るか、何れもそれぞれの作戰に依るもので、それに對する對手の仕切が、またそれに應じて變化する。この變化は双方の注文を色讀する爲の大切な條件で、近代角力には、こゝにまた樣々な興味を認める事が出來る。

「六」最近角技の特色……其三　勝味本位

この先制主義は、また同時に攻撃精神を旺盛ならしめた。由來角力は「押すに手なし」と云ふ原則がある。押すと云ふ事は攻撃する事で、攻撃は聽て勝利の道である。角力言葉で云へば、之れを「勝味の早い」と云ふ。

近代角力は、即ちこの勝味が素破らしく早くなつた事を、また一つの特色として數へねばならぬ。

以前の角力は、強くして巧者でさへあれば、よく勝利者となる事が出來た。しかし今日では如何に力量は偉大でも、如何に紋切形の技術に熟練して居ても、勝味が早くなければ何にもならない。勝星の數は實力以下に缺乏して其の地位は實力以下に降下して了ふ。先代梅ヶ谷の華々しからざりし所以、西の海のとかくに不振なる、對馬洋や錦島や釋迦ヶ嶽の榮えないのも之れで、綾川、黑瀬川などに分の多いのも、皆勝味の遲い爲である。

反之、勝味が早ければ、自己の實力以上の大敵をも破ることが出來る。紅葉川や眞砂石の小を以てして、石山や土州山の非力を以てして、時々眼に餘る大敵を喰ふ奇功を奏するに至るは、全くこの勝味迅速の賜物に外ならぬ。

「七」最近角技の特色……其四　機動本位

此の勝味と云ふ事は、また力士の氣合と云ふ事に伴つて來る。氣合とは即ち精神力を意味する。近代の角力が、從來の生理的條件や力學的條件の外に心意の力……即ち作戰注文の纖細な知的作用と、敵の意氣を制壓し又は敵の微動にも感應する情意の力が著しく加はつて來た事は著しい。近代の角力が神經質になつたとはよく人の云ふ所だが、此の神經質と云ふ事は、決して惡い意味ではない。從來の鈍感から目覺めて著しく敏感となつた事である。從つて、鋭從つて快捷である。一擧一動電氣の感應する如く、その間に無駄な動作と時間がない。私は之れを機動主義と云ひ又機會利用主義とも云ふ。そしてその具體的實例として大錦を上げる。

大錦は、實に近代力士の絶好な典型的人物である。前々來說き來つた實効本位、先制本位、機動本位の各種近代角技の特色は、何れも彼の角力振によつて具體化されて居る。私は曾て大錦を指して『頭と腹で取る力士』と云つた事がある。その意味は彼の作戰の機宜に適した巧妙さと、腕よりも尙云ふ事を利く、太鼓腹の天惠とを談つたのであつた。彼は世間の想像する如く決して强力な力士ではない。肩から繰り出す腕の力は、太刀山や栃木山の樣に凄いものではない。私は曾て彼が無作戰の突合で綾川と單なる腕力を試みた事を記憶する、その結果はタツタ二突で大錦の敗に歸した。前場所で大鳴門に叩込まれたのも、亦この肩と腕との力による突合に突き負けたのに由來する。しかも尙彼は一般から云へば突撃力の猛烈を以て知れて居る。なぜだらうか。

考へるまでもない。之れ即ち彼が敵に對して先制の利を占め、先づ以てその體を崩す事に妙を得て居る事に由來する。小結以下の時代には殆んど敵の聲で立つた例を見なかつたし、大關となつて受けて立たねばならぬ運命となつても、巧に『後の先』を捕へて、矢張り先制の利を捨てなかつた。最近に於ては、立合の先より一歩を進めて、敵の動きに應じて、敵の行動の出鼻を折り、以て勝を制すると云ふ戰法となつた。前場所に於ける朝潮との對戰の如きは、その代表的の好例である。

この臨機な戰法は、俗に云ふリンキオウヘンとは少しく意味を異にする、俗に云ふ臨機應變は一面から見れば無計劃に植する、成行主義に類する。しかし大錦の臨機應變は決してかゝる盲目的な變化ではない。よしそれが戰前から覺悟されて居たときでも、戰鬪の作に思ひ付くに至つたときでも、必ず明確な目的と計劃を有つて居る、即ち善い意味での機會利用、即ち機動本位とでも名づくべきものである。

この機動本位の窮極は、總て得手不得手と云ふ特徴をなくす事である。機に應じて動くのだから、最初から別段何々の手が得意だと云ふ必要がない。從つてか

ゝる人を對手とする力士は作戰の目標を失つて非常に困る事となる。

今少しく詳しく云へば、向樣にかくかくの得手業があつてこそ、それを封じるとか、それに對して方法を講ずるとか云ふ見當もつくけれど、何が何だか解らない對手に向つては注文のつけ樣がない。云はゞ己のみ敵に知られて、敵の樣子は皆目不明だと云ふ事になる。敵を知り己を知つてこそ百戰百勝の道だらうが、敵情皆目不明と來ては、戰はざるに先づ數段の不利に立つ道理、機動本位の利は卽ちこれで、之れがまた現在將來の角技の一大特徴を說るものと云へよう。

かうなつて來ると、四十八手など云ふ舊來の定型は唯此機動主義の一要素となるばかり、殆んど獨立の權威を失つて了ふ事になる。攻め手、見せ手、詰め手、極り手など云ふ名稱は、唯、分類の名に止まつて、その實區別し難きもの、觀角興味の纖細複雜なるは亦當然の沙汰であらう。

「八」最近角技の特色……其五　力の運用の迅速

近代角技の特色として、更に又注意すべき事は、力の運行の迅速と云ふ事である。凡そ「體力」は思つたと同時に動くものではない。投げようと思つた刹那と、投の實行に至るまでには、多少の時間がある。下手な歌かるた競技者が、發見と同時に指先が動かないのと同樣だ。且つ又「體力」と云ふものを使用し初めてから幾許の時間を經ねば、强大な力が沸いては來ないものだ。戰前に四股を踏むのも、此の力を呼び出さんためで野球の投手が、投球に當つてボディスキングを試むるも亦此の爲である。體力と意志とはかう云ふ關係だから、練習と天惠によつて力士の運用に種々の差異が生ずる。或る力士は立上つた瞬時に意外の力が腕に集中して居るものもある。先年まで居た力士界の雄辯家綠島や、今は大阪に轉じた相生などがそれであつた。また之れに反して例の鏡た濱出山、または今の錦島（最近には餘程此の弱點を脫したが）の如きは、一揉み揉んだ後でなければ眞の力量が現はれなかつた。今こゝへこれ丈の力が必要だと云ふ場合でも、咄嗟に

それが運んで來ない。云はゞ、行進速度の遲緩な軍隊のやうなもの、折角の兵力が少しも有効に働かないで、見す見す不利に陷る運命の力士もある。

この、力の運行の遲速は、軈て新舊角技の差別を談るもので、新式力士の鍛練は、舊式力士に比して著しくその運行が早いのは爭はれぬ。そしてその代表者としては何を措いても先づ兩國を指さねばならぬ。

兩國は世に傳へらるゝ如き怪物ではない。力士仲間でもてはやさるゝ如き强力者でもない。更にまた一部の角評家の見方の如きケレン師でも作戰家でもない。彼一流の櫓投、小手投、掬投などは、場合と時とを省みぬ無策無鐵砲の仕業である。要するに彼は決して角力巧者とは云はれない。入間川の說ほどに甚下手ではないけれど、さりとて決して上手と云ふ名稱は下されない。しかも兩國はあの小軀を以てして、大の男を自由にする怪腕を藏して居る。稽古場に於ける大錦は彼の爲にぶん廻され、東軍の弩級艦として敵方の憫となつて居る源氏山は、いつでも彼の玩具である。堅牢を以て鳴る綾川の元氣時代さへ、彼に對しては毫の醍味もなかつた。

之れが、即ち兩國の怪なる所以で、その怪はまた、彼の力の運行の怪奇的な迅速に歸する。兩國の仕掛を見給へ、彼は棒立に突つ立たまゝ、何等の準備も豫備行動もなく、ヘナヘナ腰のまゝに咄嗟の投を打つ、そしてそれが他の力士の十分な準備で打つた投以上にも利目がある。不思議と云へば甚くの不思議で、私は之れを『兩國の力の神祕的集中』と云つた事がある。かゝる無準備の攻擊は、敵の身に取つては甚だ面喰はざるを得ない。攻擊方向も判らなねば、その兵力も不明である。天兵立所に迅雷の如く到ると云ふ調子だから防ぎ様がない。兩國の奇襲家たる所以は實に茲に存する、彼は慥に角界にあつて最も勝負分の天惠を受けた力士である。

しかしかゝる力の運行の迅速は獨り兩國のみではない。多くの力士は、既にその傾向を示して、近代の角技に一段の緻活と、電光石火趣味を發揮しつゝある[illegible]

ある。大正角力術の興味が、これによつて、更に更にその内容を豐かにした事は申すまでもない。

「九」最近角技の鑑賞法

甚だ雑駁な無秩序な記述で、要領を得難い點もあつたらうが、先づ以上で大體ながら近代角技の特徴を説いた積である。これから後に殘つた問題は、如上の特徴を豫備知識として、如何に今の角力を見るべきかと云ふ問題である。與へられたる紙面が少いから、以下は少々駈足で參らう。

昔の角力は、その一番の勝敗だけで、相對する兩力士の全幅が讀めた。しかし今の角力はそんな事ではとても分らない。例へば玆に鳳と大錦との對戰があるとすれば、その取組の全興味を吸ひ盡すには、どうしても兩力士對戰の歴史から繰返して見る必要がある。前年の成否は今年の成否に大なる關係をもち、前年の取口は今年の作戰を支配する、神經の鋭敏な近代力士にあつては、之れが又頗る注意すべき條件である。

次にはその鳳又は大錦の其場所に於ける成績取口を考へなければならぬ、元氣不元氣の問題は別として、勝越ならば自然大事を取り、成績不振ならば、自ら斷乎たる決戰を求むるに相違ない。最後にまた豫評家の最も不注意に棄て置いて、しかも勝敗に最も關係ある一事がある。即ち彼の取組以前の同黨力士、乃至味方力士の成績又は取口である。私は某々力士の特色から見て、やりさうにない意外の手口を土俵に見る事が屢々ある。そして一時は呆氣にとられた場合もあつた。しかし考へて見れば、その注文は彼の登場以前に土俵に上つた力士の取口からヒントを得たものと判つて、成程さうかと膝を叩く事が屢々あつた。此の關係は番數が遠くなれば左程に影響するものではない。つい一番前、乃至二三番前乃ちその力士が力士溜へ入つて後の取組の影響が夥しい。だからある取組を十分に鑑賞する爲には、少くともその二三番前からを注意する必要があらう。特に番狂のあつた日、その翌日などは大力士の心中に成心と疑惑を生ずる、そしてそれが土俵の上にちやんと姿をあらはすから面白い。角力を見る

なら、こゝまで見なけりあ嘘だ。

これは登場以前に對する觀角興味だが、愈兩力士が登場するとなれば、視神經は更に一層の緊張を要する。以前の角力にあつては、化粧立の間、マッタの頻發中などはさまでの注意も要らなかつた。戰は立上りの瞬時から初まりて最終に及ぶと云ふ始末であつた。しかし今日の角技にあつては、兩力士が相對して敬禮し、塵洗手を終つて四股を踏むまでが準備行爲で、最初の仕切に睨み合つたときは既に戰鬪開始の時期である。そして化粧立や空聲やマッタのさまざまは、云はゞ兩軍の偵察戰と云ふ趣、愈立上つた時は決勝の本戰に入つたものと解するのが至當である。昔と今との角力の見方は茲に甚しくその差異を發見さるゝ譯だ。

前にも云ふ通り、仕切の機變は、作戰上に備ふもので、この間の觀察が最近角技の最も興味ある部分である。立上つて後は長くて二分三分、短い時は一秒か二秒で事がすんで了ふ。しかし仕切は少くとも三分や五分、長ければ三十分四十分を要する。量に於ても又格段の差があるもの、此間を欠伸しながら馬鹿野郎呼はりに刧を煮やすのは觀客として頗るの不經濟、不幸なる人と云はざるを得ない。要は仕切に興味をもつて、その間の變化に双方の作戰注文を色讀して見ると云ふ事である。當るも面白い、當らぬも亦面白い、かうやつて見て居れば、マッタの五回や六回に決して倦怠するものではない。いかなマッタ嫌の馬鹿野郎怒鳴家も、いつの間にやら仕切叮嚀論のマッタ獎勵論者になつて了ふだらう。

仕切に就ては面白い話がある。昔小野川の弟子に赤田川と云ふ餘り強くない力士があつた。一期の思出に、何とかして谷風を敗りたいものと師匠の小野川に相談した。處が小野川策を授けて曰く、谷風は大兵肥滿だから、仕切に手間がかゝれば癇癪が切れるに相違ない、その時期を覗つて飛び込んで勝つがよい、と、赤田川喜んで之れを實行し、遂に谷風を敗ることが出來たと。傳說に過ぎないかも知れないが、今日でも對手を焦らす爲に種々な動作を演じるものが澤山ある。玉椿が咳拂ひやら股や褌に手を惡く働かして對手の氣合

集中を妨げる筆法を用ゐた事は人の知る通である。

之れと反對な實例は、最近の大錦對太刀山の一番であつた。天下無敵の太刀山、特にもその仕切は剛堅無比な鐵壁で、とても取りつく島がない。東方力士は何れも之れに困つて立合が長かつた。太刀山はそれに慣れてか、仕切直しの二三回目に、必ず空聲を一つかける。これはほんの空聲で、對手の立ち得ぬを嘲笑する態のもの、眞の力はこのときには入つては居ないのが常である。慧眼な大錦はこの唯一の隙を發見して之れに乘じた。即ち太刀山の備が未だ充實しない空虚へ、烈火の如き、あの全身の力を打突けたのである。這の太刀も不意を打たれて防禦に手段のなかつたのは自然の理詰で、不思議でも何でもない。しかし此の邊の理解に不注意な一部の人々は、此の勝負の餘りに呆氣なさに不審を打つて、あられもない八百長說さへ擔ぎ出された。勝負の理義に精通された生駒氏や三木氏が、本誌の紙上でその八百長說の無稽を辯ぜられたのは、もとより當然の至である。

此の二例は、また立合作戰に新舊角技の異同を說るもの、最新の立合がこゝまで發達して來た事は頗る興味ある事柄である。

それからまた、仕切と立上りを熟視すれば、大抵の八百長を看破する事が出來る。八百長の眞否は、立上り後の經過よりも、むしろ此の作戰時代に見分くる事が便宜が多いので、もう立上つての後はよくよく拙い八百長でなければ、なかなか適確に判斷がつくものではない。此の八百長鑑別に於ては、他の雜誌にやゝ詳しく說いたから、こゝでは省略しやう。唯一般的に云つて、今日は分預に八百長が少く、勝負のついた角力に妥協が多い事を知つて置けばよい。

立ち上つての後は、勝負が一瞬に決するときもあれば、可なりに紛糾する事もある。水入引分の長勝負もあれば、同體膠脉の預もある。その戰鬪經過は前に云つた「攻手」「見せ手」「詰手」「極り手」などの虚々實々で、嘘から出た誠もあれば誠から出た嘘もある。虚實の變化は角力を味ふもの丶最大興味で、之を見なくて

は角力を觀たとは云へまい。見せ手とは即ち牽制の策で、攻め手は云ふ迄もなく攻撃動作、詰め手とは決勝攻撃乃至追撃の業で、極り手は決勝瞬時の手である。但し極り手には偶然が多いので極り手だけでは角力は解らない。いやむしろ極り手なんどは、どうでもよいのである。今日の新聞記事が今尚極り手のみを書くのは、舊式角技時代の餘習で、今日ではむしろ戰局を支配した大切な攻め手を書いてくれる方が、見ない人にその眞相を傳へる親切な手段であらう。

「十」番附に就ての新解

最後に一つの番附の事を談つて置かう。相撲の番附を以て、力士の階級優劣を語るのは、人々の自由であるけれども、それが必ずしも力士の實力の順序表ではない事を承知して置いて貰いたい。古にあつては、番附即ち位付で、比較的各力士の實力評價の標準に近かつたが、今日の番附はそれとは大分意味が異つて來た。今日の番附は、要するに、前場所に於ける出來不出來の成績表に過ぎない。たとへて云へば學校の試驗後に發表さるゝ成績表のやうなものである。試驗場での出來不出來はその位置を左右される。そしてその試驗場と云ふものは、或る意味に於て機會の場所である。運不運の場所である。從つて其成績表は實力の表現と云ふよりも、寧ろ運不運の發表と云ふ方に意味がある。試驗を休めば落第する様に、力士も土俵を休めば遠慮なく番附の位置が降下する、横綱は番外だが、大關でも二場所の負越は位置に關係する。關脇以下ならば、五場所も續けて休場して見玉へ、例へ栃木九州の强を以てしても、幕下陷落は止むを得ない。之れに反して、毎日九死一生の負角力を運よく打棄つて、多くの星を殘したものがあるとすれば、それが如何な弱い力士でも忽ち三役に榮進するであらう。論より證據、番附を開いて見玉へ、三役だからと云つて却つて前頭の何枚目あたりよりも下位の力士と云ふ定評があるのも隨分ある。特に近來の如き、各力士の實力の差が極めて僅少な時代には、番附なんか、何等優劣の標準とはならない。事實多くの撲評家で、今日の番附につ撲

てその說を立てゝ居るものなんかありはしない。から云ふ場合に番附無用論を唱へる人のあるは、必ずしも偶然ではない。

しかし、私は番附無用論者ではない。番附の必要は、ジョーナリズムとして相撲の興味を助ける上に甚だ必要なものであると云ふ論者である。番附はその變遷によつて目先を變へる助になる事は大きいと思ふ。但し一も二もなく、番附によつて、力士の實價にまで輕重をつけることに首肯し難いのは無論である。

大分いろんな事を、取とめもなく饒舌つた樣である。しかし要するに本文の目的は、新舊角技の異同と共に、その興味の重點が異はらねばならぬ事を說明し、大正新時代の相撲を見るには、どうしても、これだけの豫備知識を備へ、新しい眼と新しい考で觀なければ折角の觀角が無駄になると云ふ事を述べたに過ぎない。古い眼鏡のまゝで見ようが、新しい觀察の立場に立たうが、それは人々の勝手だらうけれども、今の角力を眞に面白く見る爲には之れ丈の研究も決して無用ではあるまい。何、そんな難しい理窟を考へてまで、面白がるに及ばないと云ふ方々があれば、それは最早本文の關せざる所である。(大正六、十二、七)

議會の野次筆談錄

里見謹吾

一度衆議院の本會議を傍聽すれば、誰しも是が帝國議會か、權威ある立法府かと、驚歎せざるを得ないほど、其の議場は雜然擾然、恰も村芝居の樂屋の如き觀がある、或者は此の光景を目して、活氣に富むと云ひ、

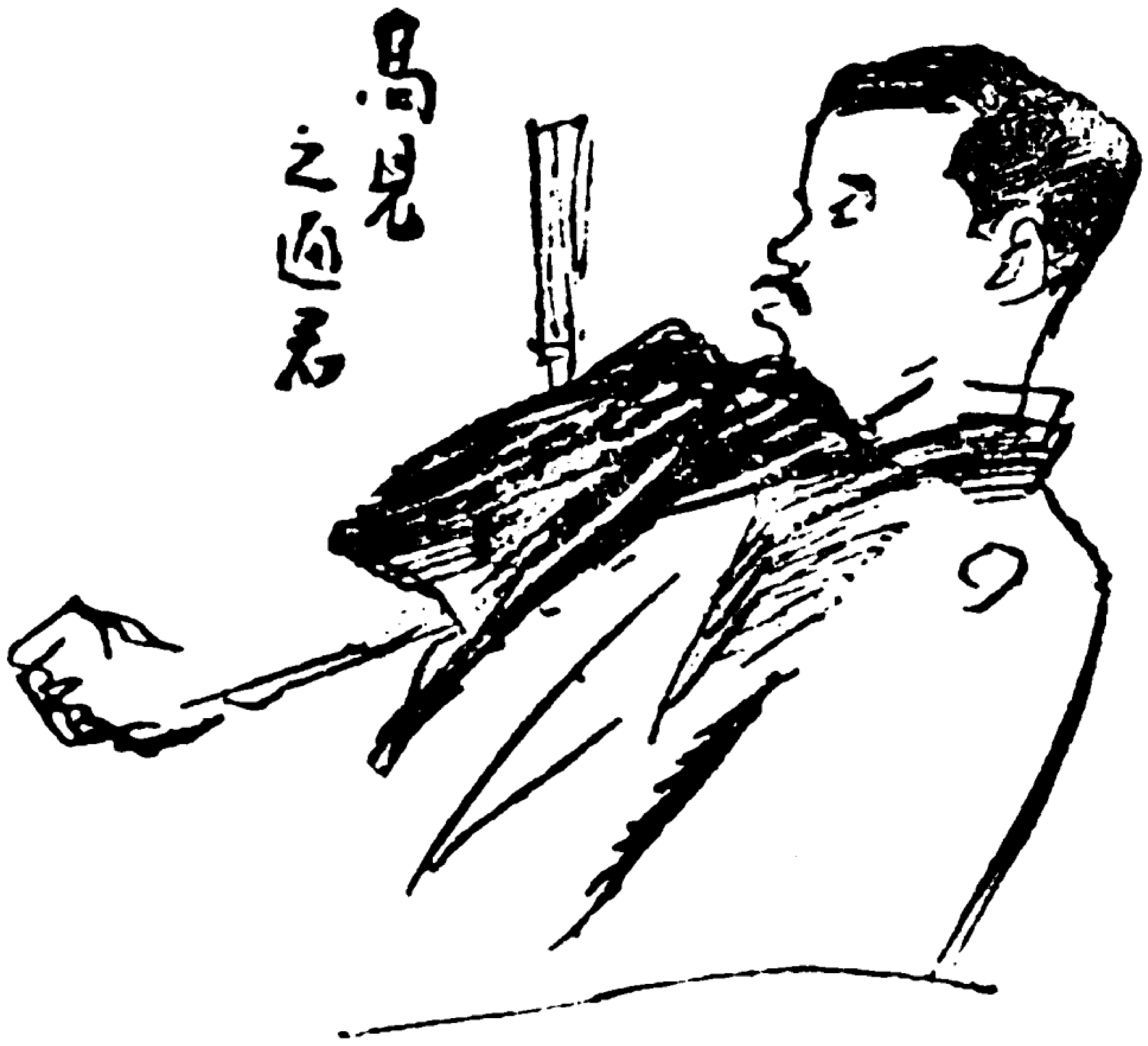
或者は議會の墮落だと云ふか、予輩は遺憾ながら後者の觀念をもつて、常に此の雜然擾然たる議會を呪つて



居る、大岡議長等の話に據ると、議場の混亂は帝國議會許りぢやない、外國の下院では同時に四方八方から議論が出て、何事を議して居るのか、議院に關係のない者には、了解し能はぬ位である、そして野次が飛ぶ、深酷な批評が交換される、それから見れば日本の衆議院は、まだ大人しい方だと云ふことだが、此の如きは彼我の國情や、議會の性質や其他議事慣例が異つて居るからで、日本の如うに一問題毎に、討論議決して行く方法では、到底も外國の例を用ひる譯にはいかぬ、靜粛の裡にも靜粛を旨として、議事の進行を圖らねばならぬ、是が眞の議會であつて、權威も保たれると云ふものだ、此頃の如うな有樣では寔に頼み少ない、心細い感じが起つてならぬ、此の感慨は予輩のみにあらず、現在擾然裡に活躍して居る、議員の心ある者は、皆左樣に思つて居るのである。

今更ら説く迄もなく、帝國議會は國家最高の議決機關で、又國民を代表する唯一の言論機關である、此の機關の要素たる議員、就中國民から選擧されたる衆議院議員は、其の責任の重大なるに省み、其の職責を果たすに努力せざるべからざるに、動もすれば黙來の

議士を眞似て、國民負託の重責を忘却し、或は感情に驅られ、或は黨派に心醉し、或は個人の利益の爲に、其の權威を笠に着て、其の職權を濫用し、遂には今日の如く神聖なる議場を迄、遊戯場娛樂場の如く化して



了つた、是は代議士全體の罪である、所謂野次なる者の跳梁を看過した結果だから、三百八十一名が一樣に其罪を負ふべきである、併しながら所謂野次の稱ある連中は大に反省すべし、彼等は何の爲に選ばれて代議士となつたのか、瘋逆犬の遠吠や、鳥の啼聲、或は又鼠泣きを眞似るが爲に、立法府に籍を置いたのではあるまいと思ふ。

野次の跳梁する議場の光景は、繪にも筆にも盡くせぬ無態なものである、先づ開會の鈴が鳴ると、各派の議員は其の控室からゾロ／＼議場に入る、フロックコート、燕尾服、紋付羽織にモーニングはよいが、夏期の議會だと白地の浴衣を着て來る無作法者もある、議案を抱えた者、無手な者、大きい手提鞄や風呂敷包を持つた者等、百鬼夜行の態、軈て議長が着席して開議を宣すると、彌次の誰かゞ必ず一度は議長を呼むで發言を請求する、是が即ち「議事進行に關する發言」と云ふので、開議劈頭勝手な熱を吹く、唯一無二の發言方法である、議事の進行と云ふからには、議長は大抵な事なら發言を許可せねばならぬが、發言を許したが最後、之が混亂の動機を産むで、野次の天地と化するのだ、近年此の發言を最も巧妙に利用して、政府や反對黨や議長を虐めたのは、大隈内閣の島田議長時代で、應用者は政友會の廣岡宇一郎君である、其の時分は議場の亂擾極點に達し、流石の島田議長も手を束ねて、傍觀するより外はなかつたもの、如何に野次が此の機

會を捉へて、騷いたかゞ想像される、近頃開議劈頭の發言要求者は、憲政會の小山松壽、戸井嘉作君等で、寺内内閣や政友會國民黨攻擊の道具に使用して居る、



最初から議事進行を目的とせず、議事延引混亂を目的とするのだから、發言は簡單に了らぬ、必ず鬱憤晴しをやるから、反對黨も默つては居らず、常任野次から「簡單々々」と云ふ半疊が入り、次で氣紛れ野次から「判つてる下れッ」「口惜しいか」と云ふ罵聲が起る、それからそれと野次がつのつて果ては「厚顏無恥」とか「妻君が傍聽してるよ」とか種々な茶々が出る、斯くて「馬鹿默れ」となり「非國民」となり「獨探となり」或は「變節漢」となつて、議長の仲裁を仰がざるべからざるに立ち至る順序である。

初期議會の頃は、目立つた野次と云ふ者なく、他人の議論を批評するに「ヒヤ〳〵、ノー〳〵」位であつた、ヒヤ〳〵、ノー〳〵位は時に取つての愛嬌である、演說者に對する聲援ともなつて、如何にも上品に見える、夫れも其筈、初期當時の代議士と云へば楠本正隆、藤田茂吉、中江篤介、杉浦重剛、河野廣中、大江卓、杉田定一、犬養毅、尾崎行雄、陸奥宗光、末廣重恭、片岡健吉、末松謙澄、松田正久、佐々友房、樺山資紀等の國士で、自ら國家を負ふて立つと云ふ、立派な人物許りである、此頃の青二才やオッチョコ連とは雲泥

違ふのだ。然るに漸次總選擧が續き、初期の一流所は皆要路に就職し、其後を襲ふ者は何れもとは云はぬが、七八分は川師連だから、遂に今日の如き事態に陥



つて了つたのである、野次も鈴木天眼や福本日南の居た頃は、品位があつて却々愉快な警句を聴いたものだ、漢文詞のキビ〳〵した一語骨を刺す底のものだつた、彼の佐々木安五郎君抔も能く簡潔な警句を吐いて、反對黨の狠藉を痛罵したが、是等は反つて議場の空氣を引締める清涼劑となり、聴者をして不快の感を懐かしめない、此頃の野次は下劣此上もなく、下町人足でも容易に使はぬ下等な言葉を連發して、惰氣を促進する、彼等の用語を摘記すれば凡そ次の如きもので、言語道斷とは此の謂であらう。

馬鹿。横暴。穢多村。獨探。厚顔無恥。ソイ〳〵連。非國民。御用黨。キサマ。ヲマヘ。不誠實。コンミツシヨン。脱線。不公平。大隈内閣。オッチョコ。默れ野郎。廢せ〳〵。太平組合。不見轉。變節。富選默れ。アーメン。ワンワン。ニャーゴ。チウ〳〵。スネ嚙り。泥棒。ハゲ。茶ビン。撲るぞ。

今の時代は到底賣名の世の中である。自ら進んで自らを推さないと、世人の認識を得ることが出來ないと見える、慈善家と云ふ連中が表面の仕事に手を出して、裏面の慈悲を顧みないのも、賣名の爲めである、隠徳は到底陽徳の如く花々しからずと同樣に、代議士も陣笠で許り居ては、賣名の目的を達する能はざるに相違ない、適當の機會を逸せず、何等かの言動を爲さないと、世間に知られる時がない、世間に知られるには新聞記者に知られることだ、記者に知られるには突

飛な眞似をせざるを得ない、乃ち野次と變じて議場を騒がすのが、最も簡便なる手段である、宜なる哉、新選議員が陣笠と稱ばれ、野次と書かれても、雜觀記事に掲載されるのを、此上なき名譽と心得、其の新聞其の記者に對して、頗る非常の敬意を拂ひ、時に食堂に



黒須龍太郎君

連れ込むで、ビールの一杯も御馳走するのがあると云ふ、洵に不心得千萬の奴輩と云はねばならぬ、而して野次をして今日の如く增長せしめ、横暴なる振舞を爲さしむるに至つたのは、慥に新聞記者も惡いのである、雜觀種のない時などは、無理にでも野次を煽て丶書きなぐるから、丁度彼等の賣名慾に投合して、次第々々に己惚れさせて了つたのだ、甚だしいのになると、臆面もなく記者を捉へて『僕は今日誰某の演說を野次るから、宜敷書いて呉れ給へ」と云ふ奴を出すに至つた、予輩も是迄は野次を煽て、野次を使つて、新聞記事を面白く書いたものだが、其弊の窮りなきを看取して、近頃は筆誅又は默殺の方法を取ることゝした、彼等野次は實際筆誅されても痛痒を感じない、筆誅は之を要するに自分が偉いからだと云ふ、調子にしか考へて居らない、又他人にも斯く吹聽するのである、況んや野次の目的が賣名にあるに於てをや、故に默殺されることは彼等に取つて多大の苦痛である、予輩同業者は何とかして一致の態度を取り、彼等の言動を公共の爲に葬り去るの方法を講じ度い、本稿は固より默殺を意味する筆誅である、彼等をして反省せしむるを第二とし、彼等が如何に議會の品位を毀け、又共通せる議員なるもの丶名譽ある職名を傷けつ丶あるかを一般人に周知せしめ兼ねて選擧民の參考に供し、近き將來の帝國議會をして、權威あらしめんことを期するを以て第一の目的としたのである、左に定評ある野次の言動を祀して、本稿の目的を達し度いと思ふ。

▲新政會所屬の松本誠之君(兵庫縣郡部)は野次中の野次である、彼は大正六年の臨時議會召集日に、午前五時半と云ふ拂曉に登院して、守衛を面喰らはせ、先登者の筆頭として新聞記者の筆にかゝり、漫畫の材料となつてマンマと賣名の目的を達し、爾來議場を騷がすことを能事と心得て居る、大岡育造君が議長選擧に當選した時「大岡君萬歲」と叫むで嗤笑を受け、尾崎行雄君の寺内内閣彈劾演說を妨害せんが爲め、議席に突立つて腕を扼し、首を振り卓を叩き、狼藉至らざるはなく、憲政會側から「五時半獸れ」と怒鳴られて縮み上り、暫らくは靜肅にして居たが、五分と經過しない間に再た始めたので、議長に敬意を表した議長から叱られると云ふ始末、之が毎日だから堪らない、議院へ屆出での職業は『新聞記者」とあるが、予輩は不幸にして彼が何れの社の記者であるかを知らない。



▲政友會所屬の高見之通君(富山市)は法學士辯護士と云ふ、立派な肩書を有する男であるが、新議員の癖に出娑婆り過ぎて野次仲間に加はつて居る、實際惜むべき好人物だけれども『劣等なる野次』として知られるだけで、他に何等の長所を認められぬ、彼は元來憲政派に屬すべきであるが、大隈内閣の總選擧に失敗してから、政友會に宗旨を變へ、寺内内閣の總選擧に都合よく當選した果報者、臨時議會に憲政會の齋藤隆夫君が後藤内相不信任演說中、御用を勤め併せて賣名の時期到來とでも思つてか、議長を連呼して速記者臺に攀登り、腕を扼し扇子で演壇を叩き大聲を擧げて演說を妨害した、政友會側からは横田幹事長、廣岡幹事等が見かねて無事引下したが、小數黨に屬して居れば必ず懲罰委員に附されて、謝罪文を朗讀せなければならなかつたのだ、實は幹部も持て剩して『厄介なお荷物だ』と

コボして居る。

▲國民黨所屬の髙松正道君(大阪府郡部)通信記者だと云ふから矢張り予輩等の同業だ、亂暴のモデルとして知られて居るのだから恐れ入る、先生熱して來ると口許りでは濟まず、議席の角に立つてる標札を拔き取りてドンドン卓を叩き、反對黨の野次に向つて排戰を試みる、之には犬養御大も閉口したと見えて『手荒らな野次をするな』と戒めたさうだ、併しソレモ二月三日の辛棒で、四日目位からは舊の通り。



▲政友會の髙岡唯一郎君(福岡縣郡部)と來ては常任野次の幹事格、如何なる場合でも如何なる時機でも、反對者の演説を妨害し又野次と喧嘩し合ふ、極く人の好い着實な小老人だが、議員としては餘り幹部調でもない所から、斯く實名的行爲を敢てするらしい、臨時議會の寺内内閣不信任案討議の際、押川方義君が政友會の態度を詰ると、直ぐ其後から『我黨は是を是とし非を非とする』と怒鳴り、憲政會側から『それだから怪しいと云ふのだ』と野次られて聊か閉口の態、餘り氣が利き過ぎての大失敗、其後院内總務から『餘計な事を云ふな』とキメつけられたさうだ。

▲政友會の赤尾彥作君(神奈川縣郡部)は藻寄鐵君を小さくしたやうな男、短爐居士と銘打たれて幹部の注意人物である、其名は臨時議會で憲政會横山金太郎君の眉間を撲つてから記憶され、赤尾と云へば壯士の親方の如く思はれるやうになつた、本人に取つては名譽至極だらうが、議院へ出るのに傷害保險を附けなければならぬやうにしたのは、僅に赤尾君の活動の結果だ、議場の野次も相當にやる、職業は辯護士。

▲同じく神奈川縣郡部から、戸井嘉作君（憲政會）と云ふ剛の者が出て居る、小背で肥つて居る可愛い男だが、一度議席に着いたが最後、徹頭徹尾ガャ／＼云ひ通し、臨時議會に赤尾君が何やら野次つたら『神奈川縣の名譽に關するぞ』と怒鳴り、滿場の洪笑に漸く自我に返つたと云ふ珍談もある、憲政會顧問の箕浦勝人君などから『野次だけ一纏めにして議席を與へたら宜からう』と皮肉られる位の猛烈さ。



▲國民黨の伊東知也君（山形縣郡部）と云へば野次仲間の隊長株、其の大聲叱呼には泣く兒も鎭まると云ふ噂、矢張り新聞記者業、併し怒鳴つても騷がす簡單にやつゝけニコリと笑つて居る。

▲黑須龍太郎君（憲政會東京市）山本内閣當時は却々の猛者で時の議長大岡育造、奥繁三郎君を神經衰弱に陷らしめたと云ふ位、之が爲め野次は黑須君の專賣の如く思はれて滿場擾然たる裡にも議長は必ず『黑須君靜肅』に警告を發したものだ、大隈内閣以來稍々自重してるが、夫れでも中隊長程度より下つては居らぬ。

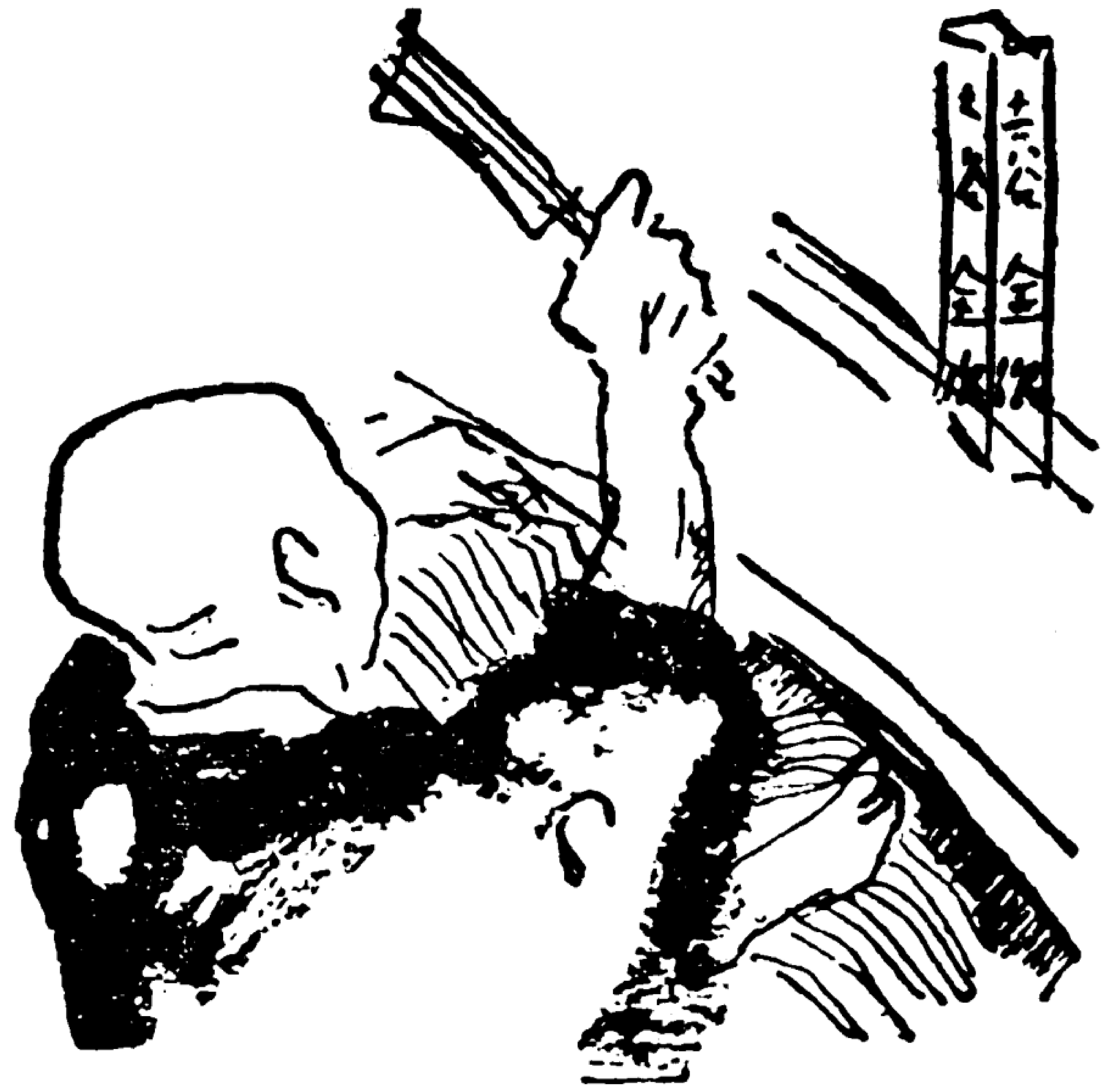
▲政友會の遠藤良吉君（宮城縣郡部）は院内唯一の酒呑老爺、仙臺訛りの口頭野次が面倒になると、時に或は自由黨以來の鐵拳を振ひ出す、但し斷つて置くが人間はよい、漢學も出來れば、眞面目で凡帳面で朋友思ひ、野次中には珍らしい人格者。

▲野村嘉六君は富山縣郡部の憲政會、辯護士の肩書を持ち幾度も當選してるのだから、最う少しは出世する筈だが、持つて生れた野次性は何處迄も拔けず、殆んど熱狂的にやり出すから危險で側へも寄れぬ、野次で幅を利かすなんか愼むだ方が宜からう。

▲國民黨の有森新吉君（岡山市）曾ては首相山本權兵衞伯に『總理大臣閣下私はオキヤーヤマの有森であります』と名乘りを揚げて、質問演說をしたことがある、夫

れ以來野次の仲間に入つて伊東知也君などゝ兄弟分。

▲山根正次君(山口縣郡部)は今では新政會の幹部側に奉られて居るが、憲政會に居た頃は野次の大將と云ふに過ぎなかつた、感情に激し易く、始終ブツ〳〵言つて議場の空氣を混濁させてる。



▲政友會の根本正君(茨城縣郡部)未成年者禁酒法案で有名な根本君が、野次だとは誰しも思つて居ないだらうが、却々の野次で而かも小さい聲で間斷ないのだから耳觸り此上もない、十年一日の如く陣笠を脱し能はぬのも、大に曰くのあることだらう。

▲國民黨の中山梅治郎(奈良縣郡部)望月長夫(滋賀縣郡部)の兩君は揃ひも揃つての下卑た野次連、伊東知也君でさへ『彼奴等些と愼むだ方がよい』と言つてるおやないか。

▲政友會の土谷全次君(高崎市)は高岡唯一君と席が並むで居る譯でもあるまいが、藥鑵頭を振り立てゝの大野次、それを息子や孫に見せて遣り度いとは一般の噂。

▲總じて野次は政友會の新米に多い、武藤金吉君や福井三郎君等が羽振りを利かせた時代は、トウの昔に過ぎ去つて、今では新進氣鋭と云ふ所、以上の外政友會では八木逸郎(奈良縣郡部)石射文五郎(福島縣郡部)奥田龜藏(鳥取縣郡部)鳩山一郎(東京市)小林源藏(山形縣郡部)東武(北海道)憲政會では森田茂(京都市)紫安新九郎(大阪市)小泉又次郎(神奈川縣郡部)川崎克(三重縣郡部)古屋慶隆(岐阜縣郡部)樋口秀雄(長野縣郡部)櫻井兵五郎(石川縣郡部)山道襄一(廣島縣郡部)小池仁郎(北海道)の諸君で何れも人格を落さぬ程度に發展する、小野次に至つては枚擧に遑がない、恐らく數へ上

げたら二百名は下るまい。

政黨政治が怎うの、議會政治が斯うのと、隨分論議されて居るが、議會が這麼な爲體では、其等の完成は覺束なく、反つて官僚から馬鹿にされるは必定の事、否や現在でも政黨者は一段下の階級の如く取扱はれて居るではないか、お互に要心々々。

對話

大晦日氣分と元日氣分

生方敏郎

序曲

サタン　唯今。

神　おゝ。もどつたか。大層手間取つたではないか。

サタン　たゞ、一瞬の間でございます。一瞬の間に、無限の闇を縫ひ、億々萬の星辰を見舞つて來たのです。

神　なに？たゞ一瞬の間といふのか。貴樣は一瞬を短い時と思ふのか——之を數へれば無限に割ることの出來る一瞬を、短い時間と思ふのか。そして、此宇宙を一瞬時に廻つたことを以て、手柄顏をするほどに、宇宙の間を廣いところと思ふのか。女子の弄ぶ針の孔からも、のぞかれ得る宇宙を？そして、貴樣は何を見て來たのだ？

サタン　何をして來たかと訊いて下さい。私はあなたの樣に、たゞ、ぢつと視てばかりは居られません。私は星座の外れたのを見れば、直に手を下して、之を整へないではゐられません。

私は月の缺けるのを見ては、之を滿たさないではゐられません。私は、夏の日が赤道を焦すのを見ては、氷海の涼風を送らずにはゐられないのです。私は、今、行巡つて、あなたの御手の業なる地球を見舞ひ、其處に開かれた戰を見ました。あゝ、あの叫喚悲嘆の聲！此所まできこえて來るではありませんか。

神　聞こえてゐる。

サタン　人の子は、人の子の作つた武器を以て、同胞を撃ち、血は野をひたし、屍は谷を埋めて居ります。そこに、平和の曙光をだに認めることが出來ないのです。愛は憎みと變り、祝福は呪ひと變りました。

神　お前は、秋の野に、あんなに鳴いてゐた蟲の聲が、全く無くなつたのを聽かないか。そして、お前はそれに一層驚かなかつたか。お前は夏の山にあれほど繁つてゐた草原が、荒涼としてゐるのを見なかつたか。そして、それに一層驚かないか。俺には、一枚の葉の散らるのをも認めてゐる。俺は水の一滴が岩に碎けて咽ぶのをも見落してはゐない。お前は今、穢いカッフェで酒を飲みながら、貧士と語りつゝある愚教師の言葉に耳を傾けたか。

サタン　彼は狂人です。愚人です。あんな者の言ふ言葉は、誰も眞面目に聞いて、對手になる人は有りません。

神　さうか（と微笑して）。俺は、あの男の愚かなる言葉をもことごとく聽いてゐる。

時　末世也。日月殆んど地に落ちかゝりつゝある頃也。窮民饑に泣き、成金肥滿せる腹鼓を打つの年也。貴夫人ボロを出せし年也。皇天怒るが如く、暴風帝都を襲ひし年也。某私立大學に黒旋風のうづまきし年也。新聞紙攻撃の流行りし年也。汽車電車自轉車荷車の夥しく衝突せし年也。物價三倍乃至二十倍に騰貴し、細

民の細君を苦しめし年也。煙草の値段までが騰貴して、更に細民を煙に卷きし年也。貴族富豪の低能兒等の書き散らす小說とかいふ反古紙に、市價の附きし年也。下女と批評家との、見識の上りし年也。其年の十二月卅一日の夜から、翌年の一月一日の黎明まで。

景　東洋一と自稱する文明國。——恰度、支那が自國を中華と呼ぶ如く、村の小學敎師先生が村一番の學者であると自認するごとく、愚國劣國弱國揃ひの東洋の中で、第一の國と自惚れる國の首都。とはいへ、流石に都は都だけあつて、街は繁華を極めてゐる。その中の銀座と呼ぶ街。兩側には今時流行の小說の如き、あやしい西洋風の技工に依つて建てられた、見かけ倒しの大廈高樓が櫛比してゐる。夜のことゝて、日本で發明されなかつた電燈が澤山耀いて、殆んど晝のやうに明るい。東洋第一の國、日本で發明されなかつた電車が道の眞中を走つてゐる。又理學博士と工學博士の澤山お揃ひの日本とかいふ國で發明されなかつた自働車とやらいふもの、及び自轉車といふものが走つてゐる。けれども、その電車や自働車を運轉しつゝある東洋第一の文明人は、日本で生れた證據として頗る貴重なる大和魂とやらいふ物を特有する日本人の車掌君運轉手君と呼ぶ智慧者である。丁度、それは、日本で發明されなかつた代議政治といふものを、獸面蟲心無學無識の代議士と呼ぶ日本產の動物が、運轉してゐるのとよく似てゐる。その危なつかしい點が、殊によく類似してゐる。兩側には智慧者揃ひの日本で發明せられずに、却つて日本の富豪の馬鹿息子に依つて悅ばれるピヤノやヴヰオリン等を並べた店がある。矢張日本で發明されなかつた時計を商ふ店がある。(以下日本で發明されなかつた事を略す) パン屋がある。洋服屋がある。卷煙草を賣る店がある。たゞ、洋服を着て卷煙草を吸ひ、金時計でもぶら下げれば、才子と思つたり、豪いと思つたりする事だけは、日本で發明された考へ方である。こゝらが、成程東洋第一なのであらう。筋向ふには支那人の發明にかゝる毛筆と香とを商ふ家がある。又二三百年前に西洋人が傳へたといふテンプラ

とか呼ぶ物を喰べさせる店がある。眼鏡を商ふ店が有る。そして

「ォイ、どうだ。君の低い鼻ぢや、これは懸つてゐまい。俺がやれば、これ此通りだ。どんなものだい」と鼻眼鏡を、纔かに引つ懸る位なケチな鼻梁に乗せたり、

「僕は昨夜、天金のかきあげを喰つて來た。あすこのカクヤ（漬物）を賞美しねえやうぢやあ、江戸ッ兒ぢやあねえ」とか

「弘法筆を選ばず」とか、總て、自慢と利いた風な顏をすることゝは、日本人の發明と知るべし。

　街の兩側の家々は、松と竹としめ繩とで、お飾りがされてゐる。之は、お正月を迎へる爲めのものだ相であるが、ずいぶん早くからこしらへてそれより先の一番煎じといふところを、年末賣出しの景氣附けに店頭装飾としてさん／＼利用する。此風習は、上方から流行つて來た利用法だ相だが、しめ飾は既に塵埃にまみれ、松も竹も、凋れてゐる。福の神にかういふ七五三飾をくゞつて來いといふのは、如何にも趣のいゝ話だが、

趣のいゝのは、萬物に靈長たる人間様の我儘であると、して、福の神は理屈を言はない。その代り、貧乏神も遠慮なく、そのしめ飾をくゞつて家へ這入る。論より證據、銀座通りに、三代と續いた家は何軒も有るまい。

　此銀座通りの角のカッフエ、その一室には、大晦日だといふのに、宵の口から、多くの客が詰めかけて、椅子は殆んど一つも明いてゐない位、たてこんでゐる。君は大晦日だといふのにと言ふか？然り、大晦日だから、こんなにウョ／＼してゐるのである。自分の家にゐては、債鬼に攻め立てられて、防ぐに由なき貨幣不足黨のやからは、今宵は劇場へ行くか、寄席へ這入るか、または、こんなところへ來て、明日に成るのを待つてゐるのだ。總て、娯樂場といふものは、都會人にとつては、時として尤も好い避難場であるのだ。ストーブが部屋の眞中にある。多くの避難者は、あまりガブ／＼やらず、チビリ／＼と、出來るだけ手間取つて飲んで、此多忙の大晦日の時間を、出來るだけ少量の酒で過さうとしてゐる。それでも、はや、大分酩酊し

てゐる人々が見える。其群の中に‥‥

人　愚教師、三十六歳。愚教師といふのは蓋し彼の本名であつて、その職業を示してゐるものではない。彼は社會を警醒すべき意氣と、國民を指導すべき腦力及び腕力を持つてゐると自信してゐるが、世間は彼を教師とは仰がない。彼の許へ束脩を齎した者は、一人の惡生徒が有るのみである。それにも係らず、彼は自ら野に呼べる聲ヨハネを以て自ら任じてゐる。彼はクリスマスを迎へる毎にキリストを待つて遠くベツレヘムの空を仰ぐ理想家である。けれども、彼はいまだキリストに會はずして、却つて安價なるサロメにばかり出合つてゐる。

——貧士、三十歳、洋服を着てゐるけれども彼の財布は空虚である。洋服を着た紳士の多くが、其頭腦を空虚にしてゐる如く常にそれを空虚にしてゐる。彼は、木綿の綿入を新調するほどの金も無いのに、此毛織物の高い時代に於いて以前通りの洋服を着てゐる。彼は、贅澤にも、ボロ家に家賃を拂つて之を借り受け一年に二度も價上げをされても他所へ越して行かずにゐる。そして、他人から家賃を取らうと計らない。彼は贅澤にも貧乏のくせに高利の付く金を借用して、他人から高利を取らうとしない。彼は贅澤にも、巨萬の富豪と同樣の通行税を拂ひ、巨萬の富豪よりも格の高い電燈料を拂ひ、巨萬の富豪とほゞ同量の米や鹽や砂糖を喰つて生きてゐる。そして教育だけは更に一層贅澤にも、巨萬の富豪以上に受けて、富豪以上の讀書をしてゐる。依是觀之、彼が貧乏するのは、素より當然である。議會は宜しく貧乏税なる法律案を通過して、之等の贅澤なる青人草を撲滅すべきである。

貧士　さあ、〳〵、先生、ぐつと乾して下さい。サツパリ、召し上りませんね。

愚教師　難有う。追々やるよ。大に酒を飲まうとする者は先づチビリ〳〵飲むことさ。智慧でも力でも、大量の者は、先づチビリ〳〵出すのだ。恰度、大に錢の有る奴がチビリ〳〵出すやうにさ。

貧士　間喝泉の吹き上げる樣に、一度にウンと出した後は、必ず、それで、へこたれるからですか。飲む場合も其れと同樣に？

愚教師　酒の時は、必ずしも酒其物の多量を望むが爲めではない。むしろ、それよりも、快樂の多量を望むからだ。そして酒から受ける我々の快樂の總量は、之に依つて我々が與へられる感味と、それに消費せられる時間とを乘け合せた、積である。

貧士　いゝえ、まだ其他にも快樂の一部分となるべきものは有りませう。美しい女の子のお酌、それから飲み仲間。

愚教師　さうだつたな。酒はかん、魚はきどり、酌はたぼ、と昔から相場がきまつてゐたつたの。だが、僕は、かんより何より、盃が善くなくつちや飲めない。そして僕はお酌の方は、二の次だね。

貧士　わずか會はない間に、先生は大變仙人に成りましたなあ。私などはまた、どうも好いお酌でなくつては、飲んでもサッパリ醉ひが發しません。美人と共に道を歩く事は、よそ目には甚だ羨ましいものですが、當人は決して難有い事ではない。旅行においては一層女は手足まといです。美人と共に居て、尤も幸福に感じるのは、總て室内に於ける時です。芝居を見る時です。寄席に行つた時です。花を引く時です。酒を飲む時です。

愚教師　僕だつて、お酌を選ばん事はない。たゞ君は、お酌を飲む時の對手として、要求し、僕は之は單に道具として、要求する相違があるのだね。僕の考へに依れば、お酌は正に德利の柄だ、外延だ、從つて、柄も亦、盞の如く左樣に美しい方がいゝ。醜惡の感を與へるお酌はご免だね。けれどもまた、お酌が餘りにピカくして、餘りに喧ましいのは閉口だ。況んや、愚にして喧ましく、徒に微醉の三昧境を破るのでは、やりきれない。そんなお酌なら、むしろ無い方がいゝ。

貧士　では、先生は女子を避けて獨酌を好みますか。女は常に愚にして喧ましいのが本性ですから。

愚教師　獨酌は好むところではないが。醉すると

ではない。君の樣に、お酌本位で飲む者に取つては、酒はお伴だ。酒無くして既に醉つてゐるのだ。若しくは、酒にお酌をさせて、女に醉ひを買はうとしてゐるのだ。君等の如きは、酒の異端だよ、バッカス神の不信の徒だよ。まあ〳〵。酒の信者となるには、眞理の信者となるのと同じく不惑の年に近づいてからの事だな。

貧士　先生は、酒を飲む事、三合にして醉ひ、五合にして身を忘れる相ぢやありませんか。それで酒の信徒を氣取るのは、滑稽ですね。

愚敎師　馬鹿なことを言つてらあ。飲むことは、長鯨の百川を吸ふが如きをのみ、酒仙と言ふのではない。張旭、三盃草聖傳ふと本文に有る通り、三盃飲んでも飲中八仙の一人たり得るではないか。苟も、酒を飲まば酒仙たれ。詩に生きては詩仙たれ。茶を喫せば茶仙たれだ。

貧士　茶仙とは、抑も、どんな者です。

愚敎師　一碗喉吻潤ひ。二碗孤悶を破り。三碗枯腸を捜り。四碗輕汗を發し、平生不平の事、盡く毛孔に向つて散ず。五碗肌骨清く、六碗仙靈に通じ、七碗喫し得ず、唯だ兩腋に習々たる清風の生ずるを覺え。蓬萊山何處にか在るといふ勢ひに成る。斯の如き人、これ茶仙だ。

貧士　私などが、そんな眞似をやつた日には、翌日は下痢を苦しまなけりやあなりません。まあ、〳〵、茶仙は願ひ下げにしませう。

愚敎師　馬鹿な奴だな。茶仙に成れんけりやあ、湯仙は何うだ。

貧士　すると、矢張、湯を七杯飲むのですか。

愚敎師　當節の落語家ぢやあ、有るまいし、湯を飲みさへすりやあ、我事成れり、で堪るものか。湯に這入るんだ。微温湯の皮膚に催す快感から、陶々然として仙境に入るのだ。

貧士　それで、湯槽の椽を叩いて、浪花節又は淸元を呻るんですか。屢ば錢湯に於いて、見受けるところですが。

愚敎師　いや〳〵。錢湯で呻るものには、聽いてくれ、

が有つていけない。あれは寄席での聽きかぢりか、でなけりやあ、半年三月も稽古しましたといふ、告白のやうなものさ。恰度小説の二つ三つ作つたところが、寄ると觸ると「藝術々々」と騷ぎ廻るのと同じ樣なものだ。凡そ鼻の先にぶら下がる物は、汗とニキビばかりではない。低級な藝術と低級な智慧とは、又常に大正青年の鼻の先に、ぶら下つてゐる。

貧士　では、湯仙酒仙茶仙とは、どんな事をするものです。

愚教師　感覺の中へ沒頭するんだ。感覺を尊重するんだ。感覺に生きるんだ。

貧士　その結果、年末へ來て、家にゐられない樣なことに、なるのでせう。そして、先生みたいに、債鬼を居酒屋に避けるより他に、方法は無くなるのですね。

愚教師　そうよな。だが君みたいに每日營々として、錢まうけに苦心してゐたところで、矢張年末へ來れば、同じところで落合つてゐるぢやないか。たが避寒や避暑が贅澤だとすれば、避債も亦これ、金持の知ら無い贅澤だらう——現代の金持たちの全く知らない。數多い贅澤の中で。

貧士　債鬼を避けてウヰスキーを嘗め、家を忘れ妻子を忘れ、大晦日を快く送るところは、實際、贅澤の一つかも知れませんね。そして、每年、先生と此避債地で御一緒になるのも、何かの緣でございませうね。

愚教師　道にしろ、何處にしろ、期せずして人が邂逅するといふことは、人が死ぬといふ事以上に驚異に價するものだ。けれど、人は墓の彼方で皆な對面すると定つてゐるんだ。不思儀といへば不思儀、何でもないといへば何でもないことだ。去年の大晦日にも、今年の大晦日にも、此所で落合つた樣に、死の大海へ流れ落ちて、我々は、いやでも對面することに成るんだ。

貧士　あゝ、淋しい。怖ろしい。先生、もう、そんな話は止して下さい。

愚教師　何が淋しいものか。死といふと、いやに、皆なあらたまるから可笑しいよ。尤も生れて來る時も、人間はかなり眞面目な顏をして、あらたまつた樣子を

して出て來るぜ、こな間、僕の家で赤ン坊が生れたのを、僕は傍で見てゐたが、まるで、おぢいさんみたいな顔付をして、そして親父に意見するやうな顔附をして、ころんと生れ落ちたよ。僕は嬉しいよりは、おかしくつて、本當に笑つちやつた。

貧士　それは、とも角も、おめで度うございました。新らしい命を一つ授かつたわけですね。

愚教師　新らしい命が授かつたところで、僕の命に繼ぎ足すわけには行かず、僕は僕、彼は彼だ。小さな蠟燭の火が二つ別々に立つてゐるといふ形だ。幸ひと風に吹き消されなかつたところで、蠟燭の流れきるまでが壽命さ。人間は、世界に幾ら殖えてみても、要するに此蠟燭の火だ。僕等が三寸の蠟燭とすれば、英雄豪傑は四寸位の蠟燭なんだ。營々として勞役に服するのも蠟燭なれば、大勳位を胸に飾つて宮殿に住む者も、蠟燭だ。蠟燭が自働車を飛ばせたり、美人を擁したり、高慢な顔をしたり、時には泣いたり喚いたり悟つたりする。成金になつてみたり、學者になつてみたり、大臣大將になつてみたりするが、結局は此蠟燭的運命の以上にも以外にも出ることは出來ない。長ければ、涙を流す事の多いばかりの蠟燭だよ。

貧士　永恒にまたたく星の光は、人間の中には無いのですね。

愚教師　無い。けれども星の光は、時として人の心の鏡にうつる。仰いで、空の星を見ろ。星はたゞ見られるといふだけで、金よりも銀よりも人の役に立つてゐる。今夜の空を仰いでみろ。大晦日の夜の空は、星を見るには尤も適はしい時だ。大晦日情調の絕頂は、闇と星とを背景にして、酒を飲むことだ。

貧士　杜子美の今夕行は、恰度そんなところですね。今夕何夕歲云徂。更長燭明不可孤。咸陽客舍一事無。相與博塞爲歡娛。馮陵大叫呼五白。相洗不肯成梟盧。除夜に賭博をやつてゐる光景は、また壯んなものですね。

愚教師　何もすることがないのなら、賭博でもやれと、孔夫子から先立で、賭博を奬勵してゐるのは支那のこ

とだ。日本ではさうは行かない。刑事の眼には、孔子も杜甫も有りやしない。たゞ彼等は賽てろだけを認めるに止まつてゐる。ともかくも刑事さんに飛び込まれたりしちやあ、切角の大晦日情調も滅茶々々になつてしまふよ。だから、君等は因循姑息に、勸業債券の顏でも眺めて、いまに千圓くじが當るだらうと思つてればいゝさ。つまり、債券で一人ばくちを打つてれば安全第一だ。角力も一人角力ならば、決して敗ける憂ひがない。色事も一人でやれば、肘鐵砲を喰ふ心配がない。

貧士　そろ〳〵。脱線して來ましたね。之は卽ち福澤翁の獨立自尊なんだと、おいで相な形勢になつて、來ましたね。だが、どうも。何をするにも、對手の有つた方がよさ相に思へますよ。たとへば、酒を飮むにしても、かう先生とご一緒の方が、一人でやるより味が有りますぜ。

愚教師　そりやあ、對手がいゝからの事さ。何事をするにも、對手の惡いのに引つ懸つちやあ、おしまひだ。だから、事を爲すには、必ず對手を必要になけりやあならん。戀をするなら、手管の有る女とやれ。將棊をさすなら、へボな奴とやれ。友達に持つなら、怜悧な男を選べ。喧嘩をやるなら善人とやれ。同盟を結ぶにしても對手がよくないと、此方は太平洋の番人ばかりさせられて、引割飯もろく〳〵さづかり相にもないからなあ。

貧士　さうしますと、益々私は對手の必要を認めずにはゐられません。家庭にとつては妻が必要であり、淨瑠璃語りに取つては三味線引が必要であり、著書にとつては讀者が必要であると、いふ様に…

愚教師　さうだ。けれども、良人を飛んだ親切者にする爲には、意地惡な姑小姑が必要だし、女藝人をゑらくする爲めには好い旦那弟子が必要であり、著者を天才にする爲めにはトモダチと號する雜評家が必要だ。昔親孝行になるには、何よりも貧乏人に生れることが必要條件であつた相だが、當今小說家の流行兒にならうといふには、何はさて置き、金持の息子に生

ればならないといふのも、仲々面白い對象ではないか。

貧士　この分ぢや、將來、親孝行の株まで金持の息子に奪はれて、しまひ相ですね。

愚教師　しみつたれた事を言ふない。親孝行なんか近頃そんなに尊重される株でもないものを！そんなものより、昔金と力の無い男の一番いゝ株になつてゐた色男といふものも、今ぢやあ、金持の息子に取られてしまつてゐるだらうぢやないか。今時の娘は、金の無い男の戀は受けないよ。

貧士　なんだか、寺か神社へ寄進をする時みたいですね。お金も一緒に奉納するのでは……

愚教師　そりやあ、女神には、娘の母親といふ、眼光犀利な宮司が附き添つてゐるからな。此カッフエの女給仕だからつて、必ず一人の宮司は持つてゐるんだよ。宮司に排斥されたら、滅多に願は屆かないものと、あきらめるがいゝ。

貧士　けれど、先生、こんな場合もありますぜ。女神に願をきいて貰ふ爲めに、先づ宮司から手に入れやうといふ注文で――換言すれば、將を射んと欲すれば、先づ馬を射よといふ寸法で――矢を放つと、馬ばかり斃れてしまつて、大將は一同知らぬ顔の半兵衛でゐるといふ喜劇が有ります。

愚教師　さうだらう。若者と娘と其親と、三つ巴になると常に到底喜劇の材料たるを免れない。否、もう、男女の一組だけでも、傍から見れば必ずいゝ喜劇だよ。雄鷄のとさかを見ると雌鷄の胸に情火が燃えるのだ。又雄鷄のときを作るのを聞いて「まあイナセだことよ」だなんて雌鷄は心恍惚とするのだよ。そこで、一緒になれんといふて彼等が悲觀して心中したと聞いたら、誰しも笑はずにはゐられまい。鷄の心中のみが笑劇で、人間の心中は常に悲劇ときめてあるのは少し道理に外れて、ゐやあしまいか。凡そ失戀くらゐの悲劇で、誰も皆な死ぬとしたら、禽獸魚貝國土草木は期年ならずして、悉皆成佛してしまう筈だ。僕の隣のチヨビ髭などは、餘り嬋娟でも窈窕でも無い美貌の持主

だが、此二三月頃、彼女を戀して雲集した青年輩犬諸君は實に少くなかつた。そして、その大多數は失戀したらしい。之を以て見ても、天下に失戀の數は實に夥しいものだ。こいつが、皆失戀自殺を試みるとしたら、華嚴の瀧壺は半日もたゝない中に、埋まつてしまはあ。

貧士　なあに、人間だつて、さう無闇に戀愛沙汰で死んだりしやあしませんよ。その手間で、日光あたりから引返して、ヘボ小說でも書く事にします。

愚教師　だが、失戀小說もずいぶん古い手ぢやあ、ないか。一時は、仲々流行つたものだつたが。

貧士　なあに、今年のは失戀小說ぢや、ありません。大抵華族か金持の坊ちやんが、お小間に手をつけたといふ筋の人道主義小說――平民の言語に飜譯すればおのろけ小說といふものです。之を蚊族の蚊文士が書く下婢小說とも申します。

愚教師　いやはや、そいつは鼻持ちがならないの。人間といふ奴は、失戀すれば小說や新體詩を作るやら華嚴瀧へ飛び込むやらして、しく[illegible]するし、[illegible]巧く行けば早速人道小說に綴つて吹聽するし、さてもさても、うるさい事だ。なるほど、孔子様が男女七才にして席を同うせずと定められたのも尤もぢや。こないだも、つい或る雜誌社から、「御令息には男女交際を寛容するや」との質問を受けたが、その時は、はてさて、此廣い世界を見渡すに、蠅でも蚤でも雀でも、何一つとして男女交際を自由にしてゐぬものはないのに、僕の令息ばかり特に之を問題にされるのかと怪しみ訝つた次第だ。そして彼の様子につくづく注意してゐると、成程、彼はまだ明けて五歲の春を迎へるのだが、もう今からお隣りの三才になる娘と毎日交際してゐるわい。

貧士　流石、先生の御令息だけに、その道は早熟と見えますね。

愚教師　いや、それよりも、彼の品行方正なところが、僕に一層よく似てゐる。男女交際はしてゐても、少しも怪しいところがない。唯、嬉々として遊んでゐる）

だ。誰も皆この樣にやつてくれるなら、男女交際大に可也。またもし、怪しかつたとしたところで、喜劇の序曲にすぎない戀愛が始まる位が落ちなのだから、之れまた可也ぢやないか。然るに、たま〳〵失戀新體詩や下婢文學を綴つて、世間を鬧がす奴等が有るから、極めて自然なる男女交際といふ現象まで問題にされるのだらう。

貧士　そりやあ、面白い。私は、男女交際がいゝか、惡いか知りません。しかし、その反對に、假りに男女が一日でも、全く交際を一切杜絶してみたら實に面白いでせうね。男に道を訊かれた場合、女は決して答へない事。女が電車へ乘せてくれと言つても、男の車掌は一切之を受付けぬ事、男が汽車の切符を買ひに行つても、女の事務員は返事もせぬ事、女が急に病氣をしても男の醫者は診察せぬ事、こんな事が世界の各所で起つたら、實に面白いぢや、ありませんか。

愚教師　何事にも、禮儀を堅く守るイギリスでは、男女にかゝはらず、紹介狀無くしては、滅多に他人と近づきにならない。それで、或る時、川へ落ちて「助けてくれえ」と叫んだ男がある。すると折ふし、そこを通りすがつたイギリス人は、「助けてやつてもいゝが、君は僕への紹介狀を持つてゐるか」と訊いたといふ話がある。世の中の事も、すべて、こう行くと面白くなるよ。

貧士　時に、先生のお宅に生れた赤さんは、紹介狀を持つていらつしやいましたか？

愚教師　紹介狀どころか、何一つ持つては來ない。裸體のまゝで生れて來て、しかも豪い權幕で衣服と食事を要求してゐる。着物を着せても食事をやつても、一文の代價をも拂はない先生だ。こんな先生が、物價騰貴の年末になつて不意に舞ひ込んで來たのに、僕の親戚朋友は、僕に對つて頻りに「お目出度う」と言つてゐる。一體、お目出度うといふ日本語は、何を意味することなんだらう。

貧士　多分、「忙しいだらうが、一盃飮まうぢやないか」といふ位の意味でせう。何となれば、お正月とか

お產とかお祝儀とか、建前とか、そんな日にばかり交換されるやうですから……

愚教師　さうすると、つまり、正月から飲みはじめて、除夜の鐘と共に飲み納めるわけか。酒に明けて、酒に暮れるんだな。こんな話を禁酒會員が、立ち聽きしたら、どんなに憤慨するだらう。

貧士　立ち聽は陰口よりも惡いことです。彼等はそんな事はしますまい。禁慾主義者は、慾望の對象物を飛び越すことに、大に快感を得やうとする曲馬師です。巧く行けば、お慰みでせうが、場合に依ると落馬します。ロマノフ王家の覆滅は、禁酒令の落馬だと云ふ人があります。

愚教師　ホイ、その曲馬で思ひ出したが、今夜が明けると午の歳だな。平和克復はおとなしい羊歳まで延びるかも知れんが、とに角、午歳で今年は大に跳ね上るかも知れない。運勢は正に上々吉だな。株式取引所でも此の間の火事で、これから燒け肥るだらうし、引いて天下全般に上景氣だらうかな。少くとも僕自身は大に運の前髮をふんづかまへるほどに、[illegible]からよ。

貧士　運々と仰言いますが、人間の運なんか、どう轉んでも大差は無いでせう。先生の先刻の蠑螈の說に從ひますればね。

愚教師　左樣〱。帝王になると乞食になるとの相違位が關の山さ。アレキサンドル歟將たヂオゲニス歟。といふところだ。

貧士　すると、要するに、何地になつてもいゝやうなものですね。

愚教師　ところが仲々さうも極められないよ。帝王にも泣いてくらす帝王も有れば、乞食にも笑つてくらす乞食も有るからな。そこで誰しも同じ短かい浮世なら、笑つて暮し度いと願ふところから、毎もニコ〱してゐる福の神なる物を考へ出して、これに自分達もあやからうとするのさ。

貧士　實際、あんな奇妙な顏をしてゐれば福運が來るものでせうか。えびす大黑のやうに耳朶が大きかつた

り、ほくろくのやうに頭が長かつたり、丸で化物みたいぢやありませんか。

愚教師　さうさ。六福神は皆な人三化七だ。片輪だ。だから辨才天のやうな美人が中に交つてゐても、妬持喧嘩が起らない。辨天さまに惚れられやうといふ野心も無ければ、己惚も無い。從つて彼等に背かれば女難は無い。そして女にかゝづらつてゐる暇潰しが無くなる。怒らず働きが實行出來る。そして毘沙門天の他は、何れも女が不具者かだから、兵隊さんにはとられない。喧嘩をしても弱さうだから、喧嘩の暇潰しは無い。大黑は米屋で、夷は魚屋だ。我々日本人は米屋と魚屋さへ神棚へ上げて崇敬すれば、まづ以て生活の不安は無い。

貧士　ですが、毘沙門さまは餘り福々しくもありませんね。

愚教師　毘沙門は鳥渡山本権兵衛伯に肖てゐる。あんな怖い顏をしてゐても、矢張溜め込むことを心得てゐると見える。昔から「武人錢を愛し文人色を好む」といふ言葉が有る。だからニコポンに劣らずビリケンなんかも案外福神の資格は有るかも知れない。文人錢を愛せざるに非ず、色を好むこと之に過ぐるが爲めにのみ、彼は福神の中へは入れられてゐない、文人は常に貧乏神の配下に屬してゐるのだ。

貧士　武人は錢を愛することが特に深いかも知れませんが、武人に限らず、私の親類の子供なんかまでが、近頃發行の小額紙幣を悦んで、預けたが最後、藏ひ込んで放しません。

愚教師　さうかい。僕等の子供の時分には、二錢銅貨と十錢銀貨と並べて、何地がいゝかと訊かれゝば、二錢の方が大くつていゝと、答へたほど慾をしらないものだつた。それを子供が今から小額紙幣を溜め込むやうぢや、頼母しいといへば頼母しいが、そんなに二宮報德主義の利目が廻つては、いさゝか恐れ入る次第だな。どんな思想でも、日本では政府事業として弘めれば、忽ち民間に流布するんだね。

貧士　先生、そんなに大袈裟にお考へなさらなくと

も、大丈夫です。子供が小額紙幣をほしがるのは、玩具のやうな色彩だからですよ。たゞ、おかげで何萬圓か發行されたでせうが、紙幣の方はサッパリ民間に流布されないと見えて、いつになつても商店は小錢にふつていしてゐるらしいですよ。だから、小賣商人の鼻息が荒くつて、始末におえません。些とや、そつとの買物をしたのでは、五圓札はお斷りだなどゝ、申して居ります。これでは、無翼而飛。無足而走。といふ魯褒の錢神論も、あんまり信用出來なくなりましたね。

愚教師　さうだらう。僕も、こないだ、烟草屋で朝日を一つ買つて釣錢を取らうとしたら、二錢の兩換賃をとられたよ。

貧士　先生、それは兩換賃ぢやあない、値上げですよ。時に先生、烟草を吸つて仙境に入ることは出來ませんか。

愚教師　出來るとも。烟草に依つて仙境に遊ぶ者は、之れ烟聖だ。その朦々として昇るものは霧の如く、その結ぼられて飛ぶもの雲の如く、そのふはふはとたく時は綿の如く、昇ること幾干もなくして天空を消す、誠に梯子に依らずして昇天するものは、之れ烟草の徳だ。人は何萬年の間、自由に天つ空を翔ける鳥を羨んだらう。まして、朦々と立ち昇る噴火山の火と烟とを見ては崇拜の念をすら起さゞるを得なかつたらう。昔からキリストでも役行者でも、豪い人は皆な最後に昇天してゐる。ヤコブは天と地とを繋ぐ高い梯子を夢に見た。ペテロは天から風呂敷包のぶら下つて來た夢を見た。之皆、人間の高遠なる理想を語る物語だ。

貧士　いや、お話が大變神聖になつて參りましたね。ですが大隈侯の高遠の理想のやうに、元老諸君がお冠りを曲げると、天から轉げ落ちるのでは、始まりませんな。

愚教師　茶々を入れなさんな。日本の飛行機ぢや有るまいし、さう矢鱈に落ちて堪まるものか。痴人夢を説く等とも言ふが、併し聖賢も屡ば夢を見たものだ。莊子は胡蝶と成ると夢み、孔子も亦「我久しく夢に周公

を見ず」と嘆じたといふ。お前なんかも、今年はちつと善い初夢でも見て、景氣よく暮すやうにしろ。昔、頼朝公の御臺所北條政子は、娘の時分、妹の夢を買つたといふ話さへある。お前も寶舟を枕の下へ入れて、良い夢を見ることにしろ。

貧士　先生。夢は迷信でせう。先生は迷信を信じますか。

愚教師　僕は何事をも信じるたちだ。事實は白晝に於いて來る。けれども、迷信は闇の中を來る。それだけ却つて我々をおびやかすのだ。

貧士　若し、世間の人が皆、いゝ夢を見て幸運を得たら、何うなりませう。

愚教師　それこそ眞にユートピアだ。だが何人も、そこまで行くにはダンテと共に「忘れ河」の水に身を滌めてからの事だ。凡人には到り難い。記憶は誰も持つ力だ。たゞく忘却は天才者にして初めて受ける天の恩寵なのだ。寶なのだ。忘年會をした者でなければ、新年宴會は出來ないわけだ。

貧士　ところで、先生、夢の中の尤もいゝ夢は何でせう。一富士、二鷹、三茄子、四葬禮に、五雪隱、六萬歲に何とやら、ずいぶんいろく有るやうですが……

愚教師　何が尤も吉夢だか？それは知らない。だが、夢の面白さは、子供の描いた繪の樣にとりとめの無いところに有る。我々の人生も此樣にあり度いな。

——此時、除夜の鐘鳴る——

愚教師　鐘が鳴る！鐘が鳴る！先づ祝盃を擧げよう。我々の墓場へ急ぐ祝ひの進行曲だ。だが、お前も俺も今夜はよく喋つたなあ。

貧士　よく喋りましたな。無口は人を賢く見せ、饒舌は好人物と思はせる。人の片寄つた性質は、多くの場合その人の保護色となります。

愚教師　本當にさうだ。だから、人民を成可く悧巧に見せかけやうといふ好意を持つ政府は、必ず言論の自由を悅ばないよ。たゞし言論の自由を以て此通りメートルを擧げる事は、我々逸民の特權だからな。

貧士　だが、言論の自由と選擧權擴張も、ずいぶん古

い問題ですが、仲々實行になりませんな。
愚教師　なあに、そんな物は、喧しく口說き立てないでも、流行になれば何でも無く實行されるよ。時に、今年――もう今年だ――今年の流行は何だらう。
貧士　左樣、近頃は火事が流行のやうですが、之から何になりませうかな。
愚教師　その次には、巡査の數を殖やすことゝ、ポンプを仕入れることが流行るだらう。流行とはすべて、さうしたものだ。一つ〳〵打揚げて來る波だ。そして常に濁つてゐる波だ。音の高い波だ。
貧士　トルストイをかつぐ事も流行ましたね。タゴールを奉（たてまつ）ることも流行ましたね。オイケンやベルグソンの名を喋々喃々する事も流行ましたね。そして我がちまんがちに聖人となることも流行ましたね。それから、擧國一致といふことも、憲政擁護とやらいつて、交番を燒打することなども流行ましたね。
愚教師　すりだの賭博の犯人だのを狩り立てることの流行つた時も有れば、馬券や勸業債券を買ふことの流行つた時も有る。遊蕩文學の流行つた時代も有れば、浪花節の武士道が流行つた時代もある。又日本は東洋一の美術國だけあつて、戰捷記念の繪葉書が、流行つてみたり、又此頃では、十錢の木戸錢を拂つて、美術家とか自稱する染物職人の、商品見本を陳列する「文展」とやらへ、熊さんや八さんが出懸けることの流行する時代が來た。
貧士　それから、山師が時々流行神を造つて一儲けするやうに、批評家と稱する人々は流行兒を製造して一儲けする。それからおみこしに載せてかつぎ廻して、終ひには擲り出して毀すのです。かうなると、流行物も恐ろしいですね。
愚教師　流行とは、前に來たものを葬むる爲めの手段として、後から來るものを迎へるやうに仕組んだ、狂言さ。流行を追ふことと、飽きることゝは、群集心理のギツコン、バツタンさ。だから、民衆ほど可怕（こわい）ものはないよ。俺は常に一人で立ち、一人で歩くんだ。たゞ、お互ひの孤獨を樂む爲めにのみ、お前のやうな、

對手を選んで話し込のだ。たゞ孤獨と閑寂とが、俺の領土だ。俺の生命だ。俺は此所に其醍醐味を捫むのだ。

貧士　なんだか、先生、話が少し理に落ちて來た樣ですね。

愚教師　さうだな。少し本音を吹いたからだらう。人は思はず興に乘つて本音を吹く。そして却つて、興を醒ます。だから、話は茶話が面白く、お世辭は輕薄なのがいゝ。凡俗はしきりに眞劍ならん事を他人に要求するけれども、一人として眞劍のきつ先に向ふ者は無く、愚蒙は常に眞理に憧憬するけれども、一人として眞理の白熱光に耐え得る者は無い。女は何よりも自分の評判を氣にするものだ。けれども、「髮が大層よく結へました」と言つて、眞向から彼女を推讃するならば、女は考へ込んで神經衰弱に陷るであらう。況んや、眞正直に罵倒すべきものではない。女は、善かれ惡かれ、ひやかすのが、彼女に對する禮である。

貧士　男を冷かしたら、どんなものでせう。罵倒されるのと、冷かされるのでは、彼等は何地を悅ぶでせう。

愚教師　その双方とも悅びはしまい。けれど、その事に關しては、むしろ此方に選擇の權利が有る。俺は信仰の無い奴等を罵り、奸妄の輩を冷かすのだ。そして、その双方が、何れも俺を悅ばす。

貧士　自分を悅ばせる爲めには、他人を罵倒してもいゝものでせうか。

愚教師　なんだ。貴樣の樣にもない。愚問を發したものだな。そんな問題は今の人道主義お抱への評論家のところへでも、持つて行け。自分の爲めに他人を悅ばさうとするのは。藝人の爲すところであつて、自分の爲めに自分を悅ばせやうとするのは、之れ藝術家の本領だわい。そこに歡喜があり、そこに雀躍が有る。

貧士　そんな場合、先生は哄笑しますか。微笑しますか。

愚教師　之は面白い質問だ。俺は行つては哄笑し、止まつては微笑する。哄笑は無邪思から生れ、微笑は聰慧

と愛とから生れる。けれど、何故か、現代は餘りに多く、笑ひを侮蔑してゐる樣だ。併し、笑ふことを羞ぢる輩は、愚にして曲なる卑劣漢である。それは憤怒を知らざる痴漢よりも惡い。

貧士　人を見て、まづ莞爾とする女は、必ず自分を襲ふ者を失はない、とは曾て先生のお言葉です。

愚教師　女はまた哄笑らしい眞似をする。裝ふことに巧みなる都會の女は、泣きもし、すねもし、不貞腐れもする。女は、總ての女が女優なのだ、けれど、斷つて置くが、女優は必ずしも藝術家ではない。

貧士　女優は他人を悦ばせるからですか。

愚教師　女優は、時に、内職として拙い芝居をやる。けれども、彼女が、男を悦ばせたことに於いて、自分も亦悦べば、女としては上乘である。彼女には、此時始めて微笑がある。

貧士　では、女は如何なる時に哄笑しますか。女は何時に於いて無邪思ですか。

愚教師　それは虛言を巧みに吐いた時さ。凡そ、女の吐く虛言くらゐ無邪思なものだ、故に[illegible]べい虛言を怨じるのは、愚かなる若旦那に非ずんば、ひねくれた老孃の寄宿舍監だ。

貧士　では男も笑ふべし。女も亦大に笑ふべしですね。

愚教師　いや〳〵。青年は兎角虛僞な厭世思想に中毒し易く、老人は淺薄な樂天主義に囚はれ勝ちだ。笑つても、老人の如く——笑つて入齒の飛び出す老人の如くには、笑はないでくれ。それは、餘りに醜い。

貧士　かしこまりました。あ、は、は……祝盃を上げて、先生の前途を祝しませう。

愚教師　祝してくれ。祝福してくれ。お互ひに孤獨なんだ。そしてお互ひに、何時までも此世にゐるのでもないんだ。

日出観

遅塚麗水

一

新たにあがない得た萬年筆を執つて、私は今ま日出観を書くべく机に凭つて烏絲箋を展べた、烏絲箋は詩を書くに好くして文を屬する料紙としては相應はしからぬものである、筆に狸毫か貂毛か、乃至は純白の兎毫かを、佳き墨のかぐはしきに染めて、五七言、長短篇、錯落として意のまゝに詩を載せてこそ烏絲箋は始めて雅趣が多いのである、金色の錐の先から、紺青の液が縷のやうに滲み出して横斜の針を撓めて字を作るの萬年筆は、決して風流であるとは言へない。

詩を載すべき烏絲箋に、其の詩に代ゆるの俳句を寫して、今は私の書かんとする日出觀の序言を作らうと思ふ、茲に僅ま私の吻頸の微吼に上り來る古今人の俳句を集め成して、先づ想ひを元朝の日の出に寄せる、

　ほの／＼と鶴を夢みて明けの春

縹渺として嫩い春は來た、徐かに衣裳をとゝのへて年の始の庭に降り立ち、先づ惠方に當る井の華を汲み來つて若水に身を浄める、まだ明けやらぬ初空に星は冴へて、門巷一路、松竹相對す、實にや

　春立つや星の中から松の色

と打ち誦ずる、修羅の巷の暗昔の夜は何處へ行つた、この曉の靜かさは神代に生れて來たかとばかり思はれる、若水に身を浄めてから、徐かに東の方に嚮つて初日の昇るを俟つ

　ほの／＼と鴉黒むや窓の春

常の朝に聞く鴉の啼く音も、今日ばかりは初鴉の名に愛でられる、晴れた初空、

　元日や上々吉の淺葱空

淺葱の色に冴へた東の空から、杲々として昇る初日の出、

春立つや氷柱の鉾の雫より

初日影は燦として軒端の氷柱を射る、氷柱の先から垂るゝ雫は、瑠璃を生み、珊瑚を生み、馬瑙を生み、紅玉を生み、夜光珠を生む、やがて

大空をせましと匂ふ初日影

靈光、天地に立ち滿ちて四海の春となる、掌を合せてをろがむ人の、冉々として飛ぶ恆河沙の初日の影の靈光を浴びて、誰れかは無上の歡喜を覺えないものがあらうか、彼の禪に覺る者の、色香微妙の輭酥、その形、鴨の卵の大いさのものが、自分の頂の上に載せられ、それが段々と溶けて行つて頭を潤し、兩の肩や、双の臂や、左右の乳房、胸膈の中、肺肝、腸胃と浸み透り脊筋を傳ふて流れて來て持病の五積や六聚を拂ひのけ、水の低さに赴くやうに、ちよろ〳〵と音を立てゝ股から膝、脛、やがて足の裏の土不踏のところへ來て止むといふ法悦を感得した時と同じ樣な無上の歡

喜を覺えない人はない。

二

日の出は、海洋の上から觀るのが最も好い、水、天に粘く一線のほとりに、日輪先づ半規を露はすの時、その色や渥丹、眼を瞠つて見つめても眩ろがない、やがて次第に昇る時、光彩はやうやく陸離とかゞやき初めても、まだ瞳子を射るには至らない、波瀾の盪搖と空氣の屈折とに由つて、圓かなるべき筈の日輪が、さながら閻浮檀金の大日如來の像のやうに、隋圓に見えるのも少時の間で、忽ち紫金の妙光を放つて、海を蹴つて跳ると見れば、早や一竿の高さに昇つてゐる、繪に看る日の出は非れである、濱の松、其沙の磯、そこに尉と姥とを點出し、更に一雙の海鶴を添ふ、古來今凡百の畫家の描き成すところ皆な一樣の構圖ではあるが、誠に洋々たる太平の象を現はしてゐる。

次に日の出を觀るのに好いのは高山の上から看むるのである、人間の夜はまだ明けない時、獨り天外に最初の曙光に接する、正しく一世を蝦視し百代に虎歩に

るの概がある、次に日の出を觀るに好いのは、曠野の上に看むるのである、遙林、遠阜、其處に散在する水村山郭の、綺錯して月に媚ぶるの様は、亦た晴れやかな觀である、私は、先づ曾つて觀た富士山上の日出を憶ふ。

私の最初の富士登山は、一と年の夏の眞中の頃であつた、常の單衣に小倉の袴、頂上の寒さを凌ぐ料としては、唯だ一枚の莫大小襯衣と股引とを携へたのみである、血氣の齡とは言ひながら、今から思へば無謀の至りであつた、御殿場の宿屋に同宿の人達は、夜のまだ明けないうちに、馬よ剛力よと罵りわめいて出で立つたが、私は家に居る時と變らず朝寢して、午餉の間飯、換草鞋を腰に佩び、絲楯を肩から掛けて剛力も雇はずに、唯だ獨り草いきれの裾野を辿り、やがて山に入つてからは、捨草鞋を道しべるに登り登つて、折からの三日の月を袖の陰に看め、漫天の星屑を帽子の眉廂近く望んで、莽山の路に迷ひながら、辛くも六合目の石室に辿りつき、乾魚と豆腐汁とで夜食をした、め、福袍を借りて一夜を石室の爐畔に過した。

其の晨、主人に喚起されて、朱銹のした小さい鉞力の金盥に雪水を貰ひ受け、式ばかりの盥漱をして日の出を俟つ、

「お山は晴天、日本晴の御來光が拜まれますぞ、」

私は福袍を被つて、主個の後に跟いて石室の外へ出た、下界はまだ夜である、昏い東の方は稍や紫に明け初めた、唯見ると其の紫がほんのりと薔薇色に紅くなつた、瞳を凝らして視つめてゐると、遙かに炬火のやうなものが朱の色に燃えて、遙か〱の天涯地角に搖いてゐる。石室の主個は掌を合せて六根清淨を唱へ出した、炬火のやうな、靈光がやがて見えなくなると、渾沌たる溟中に、五彩の龍文が現はれて渦を卷く、それが見る〱鮮かな色を坏して來て、はては猩々緋のやうに眞紅になつた、ふと其處にさながら双つの黄子をもつ鷄卵のやうな、銅色の丸い物が並んで浮いた、見る〱銀の色に變つて來る、紫金の色が其の周圍からちら〱射す、それが段々白く燬けた鐵の丸のやうに

なつて電氣扇が舞ふやうに非常な速さで廻轉しはじめる、忽ち眼には見えない巨きな鐵槌が其の白熱の大鐵丸を打ちひしやげたかと思ふ刹那に、大光明は颯とばかり又四方を射り、溟中にどよむ猩々緋の雲氣は、この時俄かに逆立つて頽るゝと見れば、太陽は躍如として早や地角を離れてゐた。

其の後、私は二たび富士に登つた、最近の登岳は一昨年の夏であつた、この時は須走の新道が開通して、私は剛力の長、小山田藤作といふ元龜天正あたりの勇士のやうな名の壯夫に殿を執らせて、小櫻といふ紅鹿毛の馬に騎り曉こめて山に登つて絕頂を極め、世は遙かなる聖德太子の佳躅を次いで、騎馬黑岳の先驅をなした、人間は尙ほ夜の明けやらぬを、巓には初日映えて、兜率の天を高く擧げた紅蓮とばかり、水無月の望に消ゆれば其の夜降るといふ萬年雪は瑪腦のやうに燿やいて、寶永の山あたりから裾野にかけて、紫紺の色に凝る曉の御山の姿は復なく神々しく仰がれた。

三

私を乘せた船は、伊豆の南[illegible]を西北の空に眺めながら漆よりも黑い海を行くのである、舳の方遙かな海の涯に、銹い裂とばかり低く垂れた夜の雲の肚を朱く爛らせて、冲天の火柱の立つかと見れば消えては復た元の黑い海となる、大島三原山の噴火である。

浦島の子の歸る日和ともいふやうな靜かに穩やかな暮の春の海は、この夜、この時、胡の艦の寇し來る夜の海と變つて、怒濤は空を蹴るばかり、實にも怖ろしい船路であつた。

大島を指して行く私の船は、やがて針路を轉じてこの風濤を伊豆の伊東に避けた、そして其處に一夜を過して、明の夜半に再び纜を解いた、曉の四時、幾年の想を縹渺の雲に馳せた椿さく島、櫻の島、丈なす黑髮をもつ女人の島、大國主の王子事代主命が島毎に一人づゝの妃を置いて民を治めたまひしといふ七箇の島の一つの島、其の懷かしい島影は、この海から獲ふるといふ烏帽子魚の背の色に似た、鮮藍色の海の上に、

さながら蓬萊を看めるやうに、霞の外に溢れて浮んでゐる。

東の海のはて、其處に三筋の濃い雲が、桔梗色のリボンを横に引き渡したやうに流れてゐる、唯見(とみ)ると、それが薔薇色にさえて來た、空と水との境の一線に、堆朱の櫛形に朝日が顔を出した、縹い曉の海一杯に華やかな日影は浮いた、五百重の波頭は閃紅又た閃紫して、擴がつた、其の美しい波を掠めて、何の海禽か、數知らぬ群をなして、さながら秋の日に飛ぶ赤蜻蛉のやうに、一隊又た一隊、波から起つて低く飛んでは波に入る、文鰩魚(とびのうを)の飛ぶのである、ふりさけ見れば北空には富士の高根が、朝日に映へて瑪瑙の色に燃えるばかりに、紺碧の天を撑けてそゝり立つ其のながめは誠に海内無双であると思つた、大島の海から見る富士は、世に美しと看められる富士のうちで、最も優美に最も端麗に、最も崇嚴の看めである。

母の船の懐から卸された小さな艇を、眞砂の白く防風の碧りな磯邊へと男浪が打ち寄せてくれた、濱に群れ集ふ島の女は、颯と引く波のまゝを見て、綱を私の艇へと投げるかけた、私達は手早く其の綱の端を振つた、艇は引き寄せられた、私は朝日の海から樺さく島へと上つた、私の周圍に環を作つて眺めてゐる島の女の瞳子は黒耀石のやうに光つてゐた、袖は窄く裳は短い紺の衣服、前垂につゞく幅の廣い帶を結んで、手甲脚半も同じ紺、椿の油を塗つた薫りの高い黒髪を、島田髷を横にしたやうに縮ねてふさ〳〵と結ひなして、波に千鳥の模様などを置いた紺絞りの手拭で頭を裹んでゐた、中には三つ紋、五つ紋、木綿の紋附を着たものもある、紋は花筐が多いやうだ、皆な色白の、朝な夕な八重の潮路を渡る風に吹き晒されるものとは思へない、眉は纖くて地藏眉といふのが多い、眼はすゞしく鈴を張つて、頬は豐かな下ぶくれ、中には白粉をつけたかと訝かるばかりのものもある、事代主の神の王子に宮仕へした人の末か、鎮西八郎の落胤か、それとも又た島流しになつた大宮人と島の女の仲に生れた子の後か、潮黒き海島の蜑の子とは見えない可憐しの

島の女は、男すら搖ぐるに額に汗を滲ます重いものを輕々と提げて頭上に載せすらりと立つて露を溢さぬ女郎花の花の風情に、悠揚として運んで行く。

夜の海から看めた怖ろしの三原山は、今朝は其の巓に紫いろの煙が二すじ三すじ立ち升つて、其の末はうすれ行く、山の姿はなだらかに淺碧の裾野を引いて晝は消えつゝ物を想ふ懷春の乙女のやうだ、島の女は歌うていふ、わたしや大島御神火そだち、胸に煙は絶えやせぬ、と、私は落椿の紅や白が、石の小逕を、纐纈に染めた村を通つて、牛乳をバケツに湛へて頭に載せて行く島の女を呼び留めて、唯ある家の床几に腰を卸し、其の家の媼に茶碗を借りて、一升の價僅かに十五錢の新鮮な牛乳を健たか呷りながら、老ひたる春と嫩い夏の相逢い相持して交綏する朝の海を看めた、朝日の海を抽いて、南に金字塔の形をした利島が見える、利島から遙か南に、大きな魚が背を露はしてゐるやうな新島も、霞の中にうすれて見える、近い帆は飛ぶやうな、遠い帆は坐つてゐる、皆な鰹を釣る漁舟である、美しい朝日の海に

四

日出づる方のひんがし、其東は日の字と木の字を集め成したものである、說く者曰く、太古、東海の島に大木があつた、扶桑といふ、朝曦は正に其の木の陰から升る、やがて其の象ちを採つて東の字を作つたのであると、日既升つて扶桑の梢に懸る木の上に日の字を載せて杲字である、日の高々と升る字義、日はまだ升らずに扶桑の木の陰に居る、その象を字に現はして杳の字は作られた、杳は、はるかと訓む、ほの〲と明るい義であるとか、私は恁うした訓詁を穿鑿するのを休める。

我邦の國旗は、云ふまでもなく朝日を象どつたものである、日出てゝ三竿、正に杲の字に當る、相馬侯の軍旗の記號は黑地に朱く日丸を繪いたものであつた、相馬侯の封域は我が邦の東の涯、東海に接してゐた、東溟の夜のまだ明けないうちに、早くも、太陽を見るといふ意味で、夜を黑地に日の丸を畫いたものであるとい

よ、正しく杳の字に當る、知らぬまに何時しか復た理窟に墮した、先づ屠蘇の满を引かう。

元日やこの時人壽二萬歳

▼次號說苑豫告▲

知名の兄弟を產んだ兩親の研究

六號組にて五十頁に亙る此有益にして興味饒き讀物はいよ〳〵次號の本欄にあらはるべし

(中付三の一)

文科大學講師　文學士　紀平正美著

無門關解釋

菊判四百頁
布表紙箱入
定價貳圓
送料拾貳錢

新刊

人間が考へ出したものを人間の考へで考へられぬ筈はない。余は尋言追語の解行を事とするものであつて、禪宗には全々門外漢である、然し門外漢であるが故に、敢て無門關四十八則を論理的に解釋してみたのである。禪的思考が我邦思想の一要素となつて居ることは、今更ら言ふまでもない事であるが今日の時勢は最早其釋を傳統的の專門家に任せ置くべきものでなく、十分に論理的に解釋して、由て以て思想の源泉を闡明すべきではあるまいか。而て近時比較的自由な禪宗に赴く青年が少くない。此等青年の爲めに組織的方法を示すことは、學者としての余の任務なりと信ずるのである。

――著者識――

帝大講師　紀平正美著　文學士

哲學叢書第壹編

認識論

第七版

四六判四百三十頁
裝幀總布製箱入
定價壹圓參拾錢送料八錢

哲學概論

第四版

菊判大型五百六十頁
裝幀總布製箱入
定價貳圓五拾錢送料十二錢

岩波書店

東京神田表神保町 電話本局[illegible]二〇
振替貯金口座東京第二六二四〇番

▼田山花袋氏新著▼石井柏亭氏畫及裝

最新刊

山水小記

中版最新形
上製頗美本
紙數三百五十頁
挿畫及寫眞版
約五十余個
定價金壹圓拾錢
送料金八錢

新式のスタイルと情緒に富んだ絢爛の筆とを以て描寫したる一巻の山水圖譜是新春第一の讀物

東京日々新聞に連載されて、頗ぶる好評を博したものである。著者は更にそれに稿を續いで、苦心慘憺の後漸く完成した。紙數三百五十頁、同數八十餘囘、飽まで新式のスタイルと、情緒に富んだ絢爛の筆と、足跡到らざる處なき山水の描寫と批評とを以て滿されてある。單なる紀行文ではない。又、單なる案内記でもない。著者は言つてゐる。『いや、別に意匠はないが、日本の山水を一巻の繪巻物として書いて見たつもりだ。そこを見て貰へば貰ふんだ……』實際一巻の山水圖譜である、又繙へしても繙しても興味の盡きぬ長い長い繪巻物である。

東京神田 **文陽堂** 美土代町

電話神田二〇五四番
振替東京三三〇七番

（中付三の五）

東都劇壇

立役の四花形

羽左衛門・左團次
菊五郎・吉右衛門



▽半時間の感想

小山内薫

羽左衛門と左團次と。

二人は全く質の違つた役者です。しかも、二人は一緒に同じ芝居をしても、決して互に不調和を起す

役者ではありません。新作物の場合だと、羽左衛門が調和を破りさうに見えますが、決してさうではありません。『修禪寺物語』初演の時の頼家などは左團次の夜叉王に對して隨分好い出來でした。(一體、羽左衛門といふ人は必ずしも新しい物の出來ない人ではないと思ひます。唯、いつも新作の場合に受け取る役の惡いのが氣の毒です。こなひだの『清正の娘』に出た加藤の家來などがそれの尤なるものです。)在來の舊劇だと、左團次の方が調和を破りさうですが、これ又決してさうではありません。羽左衛門の御所の五郎藏に對する鳥居新左衛門(本鄕座?)などは隨分好い出來でした。こなひだ追善でやつた明石の嶋藏の芝居なども、松嶋仙太を左團次がやつたら、嘸見ものだつたらうと思ひます。(菊五郎の仙太が下手だつたといふのではありません。私は唯、羽左衛門と左團次とが、古い芝居に於いても、新作物に於いても、同じ舞臺に出てゐて、決して互に調和を破る役者でないといふ事が言ひたかつたのです。)

質の違ふ役者が二人、同じ舞臺に出てゐて調和を破らない場合の方が、質の似た役者が二人、同じ芝居をしてゐて、調和を破らない場合より私は面白いと思ひます。その意味に於いて、私は今後羽左衛門と左團次との顔合せを度々見たいと思ひます。古い物の場合でも、新作の場合でも。

菊五郎と吉衛門と。

この二人は一緒に同じ舞臺へ出てゐて、決して互に調和を破りさうにない役者ですが、その實この二人位互に調和しない役者はないと思ひます。いつどんな芝居を見ても、私はこの二人の間に調和を見出した事がありません。『茨木』のやうな單純な物の場合でも、私は綱と童子との間に非常な不調和を見出します。二人は飽くまでも一人一人で芝居をやるべきです。決して二人で芝居をやるべきではありません。吉右衛門の相手には寧ろ勘彌が好いと思ひます。菊五郎の相手には寧ろ彦三郎か東蔵が好いと思ひます。市村座がこの二人を放してならない事は無論です。併し、これからは無理に二人の顔を合せる狂言などは選ばぬ事です。別々に自分自分の芝居をやらせるが好いのです。その方がきつと面白い芝居が見られます。

菊五郎の舞臺を見ると、實に放膽で度胸が好いやうに見えます。吉右衛門の舞臺を見ると、實に小心で氣が引ける程正直なやうに見えます。實際さうなのかも知れませんが、どうも私にはさう思はれません。菊五郎位小心翼々として舞臺をびく〱勤めてゐる人はないのです。あの柄とあの聲で、『助六』や『勸進帳』をやるのを大膽のやうに言ふ人がありますが、彼には舞踊といふ武器があります。舞踊に就いては彼は誰にも負けない深い自信を持つてゐます。ですから、過半を舞踊的な『助六』や『勸進帳』の辨慶をやるのに、決して大膽は入らないのです。その點に於いては、吉右衛門の方がずつと大膽だと思ひます。例へば、忠兵衛に失敗しながら(私は失敗だと思ひます)、平氣で八郎兵衛などを引き受けるのがそれです。デン〱物などでも、自分のまだ一度も見た事もなし、した事もない役を平氣で(平氣でもありますまいが、兎に角)引き受けるのが凄いと思ひます。

不思議なのは、新作物に對して、菊五郎が興味のある事です。そして、吉右衛門がひどく臆病な事です。その癖、平氣でやる菊五郎よりも、びくびく者でやる吉右衛門の方が、新作物には成功するやうです。例へば「[illegible]寅碑」の場合などがそれでした。「阿部尼」で勘彌のやつた信なども吉右衛門がやつたら、菊五郎の錦樞守以上に好かつたらうと思ひます。不思議なのは、古い物に對して、菊五郎が吉右衛門よりずつと臆病な事です。帝劇で團十郎追善へ木村重成で出る事を斷つたのも、例の臆病からではなかつたでせうか。

菊五郎の臆病には勿論非常に好い意味があります。それは役を大切に考へるといふ事です。併し、一面には又「自分」を大事にし過ぎるといふ弊もあります。私は菊五郎が役に對して餘りに小心な爲に、技藝の範圍を狹くするやうな事がなければ好いと思つてゐます。

私はこの點に於いて、大膽な役なら、何でも平氣でずんずん引き受ける左團次を羨いと思ひます。彼は「自分」から「役」を生み出さうとする役者でなくて、「役」の内に「自分」を探さうとする役者です。かういふ役者が理想的であるかどうかは知りません。併し、若い役者は是非かうありたいと思ひます。

最後に、私は私の古い友達である左團次がこの「四花形」の内に入れられるやうになつた事を――たとへそれが左團次の餘り希望しない世間的の名譽であつても――心から喜びます。涙ぐましいやうな心持にさへなります。羽左と菊と吉とは、もう餘程前から三つの花形でした。左團次がこれらの花形の中へ割入るまでには、隨分長い、まことに[illegible]へば、遠い險しい道を歩いて來たものです。(十二月十六日夜)

▽吉の熱、菊の巧、左の力

中村吉藏

長らく病氣であつたりして、[illegible]々歌舞伎劇の俳優の最近の印象を得てゐませんから所謂四人の立役の四花形の批評めいた事を書くのも如何かと思はれますが、自分の寄見の範圍丈の事を云つて見るのなら差支ないでせう。

吉右衛門後援の吉見會の機關雜誌「揚幕」といふのを此間、[illegible]寄贈を受けてゐますがその中に、吉右衛門の談話には「永年の心安い間でも、中々打とけない……若しい場合には、自分から話かけたり、或事を問ひ[illegible]したりして、對手が返答をして居る最中に、横を向いて終つたり、話題を轉じて終つたり、或は座を立つ事さへある……だから眞に役を[illegible]人達は成る丈役に近づかないやうにしてゐる……」といふ意味が、此を讀[illegible]ヒイキから寄作を與へるつもりの文字が載つてゐました、自分は不斷吉右衛門の天賦の藝術家肌なのに心を惹かれて來ました、今の若手の歌舞伎役俳優の中には、人としては詩人や文學者や乃至他の藝術家に屢々見るテンペラメントともう同しレヴエルに來てゐる者があるのか

と思ふと、いかにも面白い現象だと感じました、無論吉右衛門のヒイキ連に取つては、困つた事でもあり、本意ない事でもありませう、乍然、吉右衛門の「孤獨」と「寂寞」の心の世界から彼の藝術が産れて來るのだといふ事によく理解を持つ以上は、吉右衛門の此の天眞の藝術家肌をも尊重せなければならぬ筈です、愛嬌商賣に、それは禁物だといふ俗論も出やうが、演劇が依然「愛嬌」商賣である限り、眞の藝術は日本の劇場から遂に求める事は出來ないでせう。

吉右衛門は所謂花形で、まだ名人上手の域に入る程の年齢にも達してゐません、彼が眞に價値附けられるには、今後の十年を待たなければならぬと思ひますが、彼の持前の沈欝な氣分の底からひら〲と閃めき出る情熱、所謂心熱的といふやうな形容詞は今までの處强いて誇張なく彼に許される特有の藝術的財産でせう、ロマンチックな、時代物の立役「盛綱」だとか「清正」だとか或は「石切梶原」だとかの類は、それ〲この財産が利用されて例の定評ある當り役になつてゐるやうだが自分はまだこれを小い完成だと見ます、決して大藝術品だとは云へない、即ち名人上手と許さるゝには大分間隔がある、通がりの眞似ではないが事實、團十郎の「地震加藤」、團藏の「佐倉宗吾」を、吉右衛門のそれと比較したら、色や味ひの差別以上、矢つ張、師匠と弟子、沙彌と長老との、スケールの大小も、力量の輕重もまだ〲同日の談でないのは止むを得ない事だと思ひます、ムヤミに今のまゝの吉右衛門を難有がるのは、過景（メースペクテーター）を缺いだ批評といふよりも寧ろヒイキの引倒しです、唯、彼の未來をこそ尊重すべきでありませう、彼の將來の成長をこそ祈るべきでありませう。

時代物方面に見る彼の特長が、世話物に應用されて、小い完成といふよりか、大きな未成品だといふ感銘を與へられたものは、ずつと以前に見た「梅忠」です、一體、在來の時代物は、臺本が情熱本位で、無論性格の描寫がある譯でなく、類型も類型、至つて大まかに出來てゐるから、同じ古典でも沙翁物などとは到底比較が取れません、それを吉右衛門が如何に突込んで心理的に演じこなしても、見た即坐は兎に角、後に殘る感銘は常永的のものではないと思ひますが、近松の世話物となると、さすがに段が違つて來ます、この方面に大きな未成品といふ感銘を與へ得た處に、彼の藝術に根がある事を感じさせます、少くとも時代物に限らず、世話物方面でも、ロマンチックな性格には、成效し得る天分を裕に持つてゐると思はせます。

新らしい脚本でも、彼の活動し得る天地は決して狹小ではないでせう、例へば坪内博士の「名殘の星月夜」が、あのまゝで普通興行に向くか否かは別問題としても、若し實朝に扮し得る俳優を求めたら、彼が唯一人でせう、今の處彼以外にはありますまい、只管彼の健康の回復を禱ひます、吉右衛門とくらべ馬のやうに囃し立てられてゐる菊五郎は、一部は門閥の背景にも助けられてゐやうが、彼のロマンチックに對する此の寫實的、彼の時代物に對する此の世話物役者と云つた風の、コントラストは慥かに認められます、そこに鮮かな對照があると云つても善いでせう。

今の菊五郎も、親父の菊五郎に較べて、彼此云ふのはまだ早いのは勿

論です、育ちお育ち丈にはまだ〳〵ボテのゝうた氣が失せぬ少々おつちよこちよいで、氣紛れで、佐活らしく、それ丈藝評にも見へる彼の默阿彌物の「髪結新三」や「鋳掛松」やに扮して、ナカ〳〵達用に演じこなしてゐるとは思はせるが、まだ心から歎服させるまでに距離のあるのは、無理からぬ事でせう、彼の寫實は、所謂凝り性の、小細工に堕して、枝葉の末端に走り過ぎ、肝腎の大切な魂を忘れるといふ批難もちよい〳〵耳にしますが、そこも矢つ張、親譲りで、親父がそれを消化し切つて我が血肉となし得たのを、彼にはまだ消化し切れない、充分血肉に成り了せないのだ、つまり今が修業の途中だと見てやつた方が、彼の年齢程度の俳優を遇する所以ではないかと思ひます。

今一つ、默阿彌物と、彼との時代の相違といふ點にも着眼せなくてはなりますまい、五代目菊五郎は、默阿彌物の世界の空氣を自分で呼吸して來てゐます、徳川幕府の末期の江戸の人情風俗が、彼の實生活の一部を形作つてゐた譯です、處が今の菊九郎は、自動車を驅つて、ガスリンの臭氣を發散させて生活してゐるチヤキ〳〵の現代人です、彼の江戸生活の描寫が、複寫になるのは尤です、時代物のロマンチツクな世界を生命とする俳優と、生世話物の寫實の世界に活きやうとする俳優との間にこのハンデキヤツプをも認めてやらなければ嘘です。

一體默阿彌の世話物は常にその時代に即する描寫を心掛けたものらしく、明治期に入つてからザン切ものにも屢々筆を着けてゐます、今日の言葉で云へば、現代社會劇が彼の目ざした處でせう、默阿彌は、それには失敗しましたが、今の菊五郎が自己の[illegible]一つくさまにこゝにあるかも知れませぬ、一種[illegible]には、作[illegible]ロマンチツクな[illegible]、彼の寫實的な柄を裏切つたゝめにも依りませう、時代[illegible]な人といふ譯ではないが、併しその方面では役所が小く限られてゐませう。

若し吉右衛門を叙情詩的、菊五郎を現實的と云ふ符牒で片附けるとすると、左團次は所謂戯曲的とでも云ひませうか、或は吉を熱、菊を巧、左團次を力と云つても、或意味では妥當でせう。

左團次は自由劇場以來、新劇方面の勇者として、青年間に歡迎者や喝采者を不尠持つて來ましたが、自分は彼の飜譯劇には事實感服しません、その勇氣には同感を持ちますが、その技藝からは善い印象を得てゐません、又所謂カタ物が彼に不向なのも定評の通りで、唯綺堂氏の新作物を演ずる彼を見ると、全で別人のやうに活躍して來ます、作の欠點なんか忘れて、つい感動を強ゐさせる不思儀な力を發揮して來ます、彼が在來の劇に不向な事を自覺したからでもあらうが、兎に角、自己の新境地を拓いたといふ點では、吉や菊やは未だ彼の敵ではない有様です、一つには綺堂氏といふ作者を得たのが彼の幸運ですが、唯この頃は作も藝も少々單調が目に附き出して來たやうです、左團次はこの單調を破つて、今一つ別の新らしい世界へ脱け出されるか否かゞ、彼の前途の運命の分岐點でありませう。

最後に羽左衛門も問題の一人になつてゐますが、彼は立役としても中[illegible]等と同列に論ずべき俳優で、花形としては薹が立ち過ぎてゐます、

さればと云つて、まだ名人上手の域に入つてゐない譯です、もう年配から云へば、ソロ〳〵そうなつてもいゝ筈ですが、この頃は却つて幸四郎のなが、上手と云はれ出して、羽左衛門はヅボラで通りさうになつて來たのは遺憾です、柄も藝もある人だから、此際發憤して、名人上手の實を博せん事を希望して置ます。

▽比較論は出來ぬ

岡本綺堂

限りのある紙數でこの四人の俳優の細評は出來ない。無論どの人にも一長一短はあるので、比較して其優劣を判ずるなどは容易でない。第一にその藝風がまる〴〵違ふ、隨つて觀る人の側でもその好き〴〵の藝風に因つて上手とか下手とか云ふことになるのであるから、その比較はいよいよむづかしいことになる。私はこゝで四人の優劣を論じない。

左團次といふ俳優に對しては、私は彼が脚本を尊重することを第一に言ひたい。俳優が脚本を尊重すると云ふのは當然のことであるが、實際に於て日本の劇界ではそれが容易に行はれてゐない。たとひそれが行はれてゐるとしても、それは或作家の作物に對する特殊の場合にのみ實現されることであつて、興行者も俳優も一般の作物に對しては餘り敬意を拂つてゐない。甚しいのになると、脚本そのまゝに盲從しては自分の不名譽であるかのやうに考へてゐるほどの俳優も無いでもない。その中で私の知つてゐる範圍では、左團次たゞ一人、脚本といふものを尊重することを知つてゐる。彼は何人の作物を上演する場合でも、必ず原作通りに忠實に勤めるのを自らの務と心得てゐる。これが彼の唯一の美點であると私は思ふ。譯の無いやうなことであるが、これが今日の他の俳優にはなか〳〵眞似の出來ないことである。

その點に就て正反對なのは羽左衛門であるらしい。勿論、彼も或人の或作物に對しては眞面目に敬意を拂つてゐるらしいが、大體に於ては自らの器用に任せて、好加減にお茶を濁して行けば好いと云ふやうな傾向が見える。現に彼は樂屋の或人にむかつて、長い臺詞などを眞面目に覺えるのは損だとか云つたさうである。損か得か、これで大抵想像が付くであらう。彼はたしかに器用な俳優である。その器用が却つて彼に禍して未來の發達を妨げなければ好いがと危まれる。彼とても何日までも白塗りの若い役ばかり勤めてもゐられまい。老役には不適當な體格を有つてゐる彼は、今から餘ほど研究しておかねばなるまい。

菊五郎は生意氣だとかいふ評判がこの頃時々に聞える。生意氣といふのは何ういふ意味か知らないが、役によると舞臺で少し巫山戯過ぎはしまいかと思はれる場合が無いでもない。さういふ風に自らの扮役を輕んずることが、やがて生意氣の評判を生み出したのではあるまいか。併し彼は年もまだ若い、しかも羽左衛門同様に器用な腕を有つてゐる。料見次第で立派な俳優になり得る資格を具へてゐるのである。一概に生意氣

の二字の中に[illegible]去るべきではない。若し適當の指導者を得て、眞面目に舞臺を踏んでゆけば、たしかに成功の望はある。彼一人の罪ではないが、日本の芝居道では親の勸めた役を其子にも勸めさせて、親讓りとか云つて誇稱する風がある。遺傳といふ議論から考へれば、それにも一應の理屈はあるが、現代の菊五郎の如き、父とは全く違つた體格の所有者に對しても同じくこれを強ゐるのは根本の間違ひである。眞に彼のために圖る者は、所謂五代目張りとかいふ陳套な誇稱を抛つて、專ら彼に適合する狂言を擇んで、彼を新方面へ導く工夫をしなければならない。今が大事の時代である。

吉右衛門は菊五郎に對抗して人氣を背負つてゐる一人である。市村座に出勤してゐる都合上、若い時から團十郎式の役ばかり引受けさせられた結果、早くから重々しい沈んだ藝風の俳優になつてしまつた。隨つて舞臺の上の光彩に乏しい。惡く云へば陰氣な俳優になつて了つたのは、彼のために餘り幸福ではなかつた。これには彼の性格や境遇や色々の事情も含まれてゐるのであらうが、もう斯うなつたら仕方がない、彼は飽までも沈痛な役のみを受取つて、專ら其方面に發展するが好からう。さうして、深刻な一派の藝風を作り出すのも面白いと思ふ。私はよく知らないが、彼は兎かく不健康のやうに聞いてゐる。氣の毒なことである。

斯う書いて來て、私は思ふ。近來歌舞伎劇保存といふ聲が大分聞え出したが、果してこの四人の中に所謂歌舞伎劇なるものゝ眞の保存者があるであらうか。この點に就ては、私はどの人にも餘り多くの期待を有つてゐない。四人に四人ながら[illegible]、新しい演劇を[illegible]導くべき人物であらう。その他のことに就ては、他の諸君から[illegible]色々の批評も出ることであらうと察してゐるから、私はこれだけで筆を控へて置く。

兎に角に、他の新しい優人が突然に出現して來ない限りは、以上の四人に澤村宗之助が加はつて、次期の劇壇に雄飛するのは疑ひもない事實であらう。

▽羽の清純と左の明朗をこのむ

楠山正雄

羽左衛門がいつまでも「花形」で年をとつて行く間に、菊五郎は「青年俳優」の未熟と若氣のまゝに、ふやけて行かうとする。吉右衛門は、痩世帶ながら、ともかくもとくに一家を成してゐる。左團次は長い、放浪の旅ぐらしから歸つて、今や一家の支度をとゝのへるにいそがしい。

「いつも春のやうな役者」と、口癖のやうに私のいつてゐた羽左衛門の春氣も、この頃だんだん薄くなつた。今は末の上の白菊、盆栽の黄水仙、ほのかに、なつかしいかをりをどこやらに細く、たゝへてはゐるが、見た目のながめは、いかにもさびしく、寒さうである。たゞそれだけに、七八年前の羽左衛門のとりしめもなく、わけもなく陽氣な[illegible]

一つて舞臺の上に春のやうな情味を作り出してゐたのとはちがつた、根強く鋭い、濃い陰影が、近頃の羽左衞門の芝居に別なおもしろい味ひを加へてゐる。人は彼のために、これまでに一つとしてその身についた特別の技藝がないとか、そのために書き下された當り役がないとか、いふやうなことで羽左衞門の前途をあやぶむものもあるが、そんならはつつらな、形式的のことよりも、羽左衞門にはもつと深く、淡いながら軀(からだ)にしみついた匂がある、韻(ひゞき)がある、これだけは年と共にいよ〳〵深くしみ込んで行く、いはゞ羽左衞門のからだにはなれない匂なり、韻なりであるから、彼の肉體の亡びないかぎり、私達は羽左衞門をわすれることはできないであらう。羽左衞門は匂の役者である。專ら官能的な、いはゆる「色氣」とちがつた、心持の上のおもむきであり、風韻である。私は羽左衞門のこのやさしい、清純な、爽利な、一種の匂をいつまでも愛したいとおもふ。

羽左衞門に對して、一番近い聯想をもつものは吉右衞門である。その纖細な植物の白い心(しん)を抽き出したやうな感觸のある、單純な魔氣一つで押して行く藝風は、羽左衞門と共に吉右衞門の最も多く人に愛せられる所以である。たゞ私は羽左衞門の少くともより多く多血質に、明朗に、清純に見えるのに對して、吉右衞門のあまりなる神經質を嫌ふ、濁つた、滯つた、陰鬱な、それに何よりも其物の顏を探りながら芝居をしてゐるやうな、見物の情に媚びるやうな、小心な、臆病らしい、緻根臭味のつきまとふことを嫌ふのである。少年時代の吉右衞門は、決してあんなにまで陰々しい、重苦しい、いつも人の哀れみを求めてゐるやうな役者ではなかつた、どちらかといへば、先代の左團次に似た、單純な、爽利な、明るい氣持の役者であつたと思つてゐる。吉右衞門自身の病ひがちな身體の上の欠陷と、それに放縱らしい身持の災してゐることも多いであらうが、吉右衞門の讚美者達が自分の好む範疇の中に、無理に吉右衞門をおしこめ、彼の技藝の大膽な發達を妨げないまでも、委縮させたことをにくむ。更にその愚かな雷同者達の婦人の感傷に類した同情をにくむ。吉右衞門の後援者を以て任じてゐる人達は、今の最も暗黑な技藝上の危機に於て、吉右衞門の心持を、もつと自由に、もつと明るく、もつと融通自在な藝境に遊ばせるやうにしむけてやることが必要であらう。今のままでは、吉右衞門の手足を縛し、吉右衞門の心境を腐朽凝滯せしめるものは、誰よりも彼の讚美者と後援者とであることを考へねばならぬ。吉右衞門のために新たな天地を拓いてやる方法としては、今の市村座の無知な婦子供のたはいのない賞賛の群からはなれ、今のいはゆる菊五郎吉右衞門の固定した座組をたまには破壞して、歌舞伎座なり、帝國劇場なりで他流試合をやらせるのもおもしろいではないか。吉右衞門が公園の小劇場に出るといふことが根もない噂にしても、一道のくらい雲の流れてゐることは分かる。こゝにも革命がなければならない。私はあまりに冒險心を失つた市村座の當事者と、役者と角力を一つにしてゐるやうな無邪氣なしかし愚かな吉右衞門の後援者達のために、特に、本題外ながらこれをいふ。

まで菊五郎であるが、これまで誰よりもこの人に一番多くの期待をつないだゞけに、今のまゝでは、私は誰よりも一番失望してゐる。これは恐らく菊五郎自身の坊ちやん氣質と我儘な性質と、市村座主その他の彼のための先輩が盲目的に彼に傾倒した、そのお互いの心持の油斷が最近見るやうな、未熟のまゝに、客氣のまゝに、ふやけきつた菊五郎を作り上げてしまつたものと思はれる。

私の考ちがひであつたかもしれないが、菊五郎の聰明を信じ、技藝の上にいい氣質をみとめてゐた私に、彼の先代が明治の世界にしたやうに大正の世界にあくまでも舊い傳統の上に立つて始終清鮮な新意を出して行つて、歌舞伎劇の最後の紹述者としての仕事を立派にやつて行くであらうと考へてゐた。活歴派の末流にあきたらず「新派」と「新劇」に飽きた人達の注目を一人にあつめるであらうと思つた、新史劇に、舞踊に、型物に、新世話劇に、いろ／＼な試をして、たへず人の耳目を新にし、多才爛熳、いつも世間をして好奇の眼を瞠らしめるであらうと考へてゐた。しかしこの期待に反して菊五郎がこの五六年に何をしてゐたか、毎月の市村座の興行記錄を見れば直ぐに分かることである。狂言座とかの仕事は、彼にとつてお餘興の忘年劇かお座敷芝居の一種にすぎない。

特別な位置と人氣以外、技藝としては、舞踊——それも專門家の間にはその純粹と品格とを疑はれてゐる——舞踊を別として、器用と聰明の外に人の心に深いくひ込む力も匂も乏しい菊五郎は、すこし油斷をすれば直ぐにたゞの素人にかへる處を誰よりも餘分にもつてゐる。たへず注[illegible]官と努力とをす[illegible]だけに、[illegible]模にのぞんでゐる。ほんたうに[illegible]を愛する人達に、[illegible]に要のために愛えてやらなければならない。

最後に左團次であるが、理屈なしに、好ききらひでいへば、私は左團次が好きである。或は今の私達と同年輩の歌舞伎役者の中ではこの人が一番好きだといへるかもしれない。それに世間にも妙に人氣が集つてゐるやうである。綺堂式の世話劇をやる左團次も厭ではないが、默阿彌物もこの人と源之助のやるのが今では誰のよりもおもしろい。『牧の方』の平賀朝雅などで、羽左衛門の畠山六郎との對決を見ると、なまじ歌舞伎の味のついてゐないだけに、そのさく／＼した、明朗な味が快かつた。だから相變らず左團次はまづい役者であると思ふ。私などの場合では何處がいいのか分からない。たゞ今の私などの求めてゐる眞率な、明朗な、情緒の陰影のあまりつきすぎないざつくりした氣持を左團次の技藝に求めてゐるのではないかと思ふ。

しかし私も前には左團次があまり好きではなかつた。自由劇場の左團次も、その全體の仕事をこそ愛したが、あの單調な、そのくせ癖の多いやり方は不快だつた。しかし顧みて左團次といふ人の割合に澤山仕事をして來たといふことが思はれる。

思へば左團次の劇場側に於ける放浪生活も可なり久しいものである。もう何處かに落着くところができてもいいであらう。それに人柄に歌舞伎役者にみない、紳士らしい愛嬌と品格のあるのが、何よりも今の[illegible]

固陋い歌舞伎役者の群の中から一段ちがつた高位置を占めるに十分な資格である。或は左團次に歌舞伎役者の素養のないのを理由に、その前途を疑ふ人もあるが、その人達はまじめに歌舞伎劇の形式保存の可能を信じてゐるお目出たい人の仲間である。

いはゆる日本古劇の保存といふことは、團十郎が江戸歌舞伎の荒事の精神を、明治の新史劇の上に生かして來たやうに、結果はやはり過去の形式の破壊またはその應用のやうなものに終る外はない。今は左團次が團十郎の爲ようとしたことを、別な仕方でやつてゐる。その聽えのちがふのは時代のちがひに外ならない。左團次は藝に溺れ。藝に耽る質の人でなく、いつも「仕事」を忘れない人であるだけに、その仕事がどこに落付くか、今では一番私達の興味をひく。

▽東都劇壇の四花形を評す

芳陵生

○

自分の趣味の好惡から云へば、私は四人の内で吉右衛門に最も多くの執着を持つて居る。彼の藝の洗錬されて居るのが好い。何の役でも緊張した氣分で努力するのが氣に入つた。別けても役の性根を吞込んで、如何にも其人にも成り切らうとして力めて居るのが好い。又此點に於て相當に成功して居るやうだ。菊五郎に惜しいのは時々役を投げてかゝる事である。吉右衛門に對してワキ役を勤むる時に殊に其弊を見る。此弊は吉右衛門には無い。幸四郎も舞臺では隨分緊張した顏を見せるが、自分の番が濟むと、まるで重荷を下した形で、やがて自分の順番が復た廻つて來るとびつくり狼狽へた形でやり出すのは如何にも見苦しい。吉右衛門には、此弊が無い。唯餘り緊張し過ぎて、見てゐる方が手に汗を握るやうな、餘裕の無いのが彼の未だ羽左衛門に及ばざる所であらう。けれども其役の表はす人物に成り切つてゐると云ふ點では、恐らく羽左衛門も彼に一籌を輸するかも知れない。

芝居は要するに藝術である。殊に素人たる我々は、全く娯樂の爲めに之を看る。全然其人に成り切つたからと云つて寫眞を見るやうな寫實味では滿足が出來ない。されぱと云つて、芝居道の狹い約束、即ち型、特に其の型にも適かない小い型、型にも適かない小い技巧を守つて、魂の脱けた人形が動いてゐるやうなのでも困る。私共の趣味から云へば、舞臺は何處までも私共の現實の生活に關係のない、現實の生活とは全く異つた場所であつて欲しい。けれども其内に活動する人間は、何處までも深く我々の魂の内に突込んで來るものでなければたらない。此點から見て、私は仁左衛門の舞臺には殆ど凡ての場合に於て何等の興味を感じない。況して人間の眞似をする人形の、そのまた人形の眞似をする、よく「日高川」などでやる振事には全く興味を感じない。之と反對の意味に於て、私は吉右衛門の舞臺を喜ぶものである。

役の性根の表はし方、即ち[illegible]によつて[illegible]

がある。此點に最も新らしい技倆を持つて居ると云はるゝ其の劇文に、私には怒つて居るやうに見せやうとして怒つて居ると云ふやうな感じがする。菊五郎は却々好い味をも見せるが、又時々獨合點に陷る所もあるやうだ。吉右衛門は怒るべき時には本當に怒り、泣くべき所では本當に心から泣いて居るやうに見える、此點に於て彼は一番インテンシテイが深い。羽左衛門も此點に於ては吉右衛門位の深さを示すが、然しそは彼の技巧の力であり。矢張り其の芝居道の約束の下に、技巧を弄してあれ丈けの效果を收むるのが、役の身上であらう。此點に於て彼は腕では一枚吉右衛門の上に居る。けれども吉右衛門の頭と努力とを加へたならば、羽左衛門の舞臺は、もう一段エライものになるに相違ない。此點に於て流石に歌右衛門は一番エライ。

吉右衛門は何の役でも苟くもせぬ丈け、又何の役でも相當にやる。從つて彼の舞臺は何時でも見たい氣がする。中にも一番目物又は硬派の中幕物などば、殊に我々の興味を惹く所である。去年演つた「大藏卿」、又去年あたりやつた「石切梶原」などは、色彩から云つても、形から云つても、殊に其調子の好い所は、今尚ほ私の目に殘つて居る。

吉右衛門に就いて、世間の問題となつて居る所が二つある。彼の役の範圍が狹くはないかといふことと、又彼の藝が行詰まつては居ないかと云ふ點である。此點に就いて私の見る所は、或意味に於てはさうとも云へるが、又或る意味に於てはさうでないとも云へる。一體彼は役者の子として役者の家に生れ、子供の時から役者としての修養を積んだといふ事の外に、役者としては甚だ天分に乏しい人であることがこゝに持つて、「熊谷」もやれば、「大石」もやれる所以のものは、唯一つの努力鍛錬の力である。天分より見て彼には此上の將來は無い。けれども努力に由つて開拓せらるべき天地は無限である。役の範圍と云ひ、彼に「野崎村」のお光をやれと云ふのは無理だけれども、今までに認められない方面に倚相當に成功する餘地はあらう。左團次の家の藝たる「丸橋忠彌」を彼は左團次以上に演じこなし得ないだらうか。西洋物をやつても相當にやりこなす技能を持つて居る事は、先年貞奴と一緒にやつた「軍神」の舞臺に於て、之を證明した。彼は天分の役者ではない、努力の役者である事を、我々は忘れてはならない。故に彼の舞臺は何時觀ても行詰つて居ろやうであるが、何時觀ても相當の成功を收めつゝ又多少の進歩を示して居る。

唯彼をして將來の大を爲さしむる上に、私共の甚だ遺憾とするのは、適當の脚本の無い事である。頭で以て役をこなす人には新らしい脚本を與へる事が必要だ。思ふ存分其人に成り切つて演つて見たいと思ふやうな役をさせたいのである。從來の脚本に表はれて來るやうに千遍一律な性格では、少し頭のあるものは、心から同情同感になる事が出來ない。されぱと云つて一躍して西洋物に手を着ける事、左團次のやうな事になる事も出來ないのであらう。私一人としては、吉右衛門を左團次の地位に置いて見たいやうな氣もする。と云つて、翻譯物や新作物のやうな淺薄な脚本によつて役の大を爲さしめやうと云ふのではない。

○

吉右衛門の引合に、左團次に時々觸れたが、彼に就ての私の感じは唯未成品と云ふ感のみである。果して偉大なる未成品なりや否やは、今日未だ見當が着かない。偉大さうには見へるが、また相當の所と云ふのが今日のところ正しい批判であらう。何をやつても非常に傑出をしてゐないが、兎に角水平線は摑んで居る。決して將來の無いとは思はないが、今の所では、形から云つても、調子から云つても、總じて彼の藝術は、唯一つの單調な方向を辿つて、私共をして彼の舞臺を見る度毎に、またか〳〵の感を促さしむる。藝術家として成功するには、彼の舞臺はも少し華かに複雜なものとならなければならない。彼唯の舞臺の、其單調な方向を辿つたなりに、相當の廣さと深さとを有して、一種壯大な氣分を漂して居る事は、看過すべからざる特徴である。之に一種の複雜なる味が加はつたなら、玆に初めて彼の藝は本當にエライものに大成することであらう。其爲めには、彼の舞臺の上の相手が惡い。松蔦や壽美藏など許りを相手にして居るのは、彼の爲めに取らない。

世間では飜譯物や新作物をやりこなした點を、彼の特技の一つに數へて居る。此點に於て彼は從來の舊俳優の全く手を下さなかつた一新天地を開拓したものである。尤も從來多少此方面に手を下したものは無いではない。けれども此新しい試みを屈せず撓まず彼處まで大成した功勞は左團次の獨り占むる所である。そして彼は此方面で又相當に成功して居る。然し乍ら今日彼は之を以て彼の專賣の特技と安心するならば誤りてゐる。彼は交友と經驗から、從來の脚本にない、又從來の役者の味ひ得ない新らしい心理を相當に吞込んで居る。而してそれの演出法に多年心を碎いて居る。此點に就て彼は確かに一日の長はある。けれども彼の吞込みは何れ丈け徹底してゐるものであるか、彼の演出法は果して間然する所無きやと云へば大に議論がある。高綱の舞臺で彼が雄辯を東から西へ烏鷺つき廻るのは、西洋流の演出法で、變つたと云へば變つて居るが、我々の眼には寧ろ滑稽に見へる。忌憚なく云はしむれば、彼が表はんさとする性格と彼の演出法とは未だ十分に調和して居ない。故に左團次位の所は、市村座邊の連中でも決してやれない事はあるまい。唯いろ〳〵の事情から他の連中はやりもしないし、今やつても急に左團次を摑へづる事も出來ないから、一つは遠慮と一つは恐怖からやりもせぬ、又傍がやらせもせぬ。從つて新作物は彼の獨壇場となつてゐるけれども、若しやらせれば勘彌の如きは、差當り彼の勁敵である。私は斯く云つて彼を貶すのではない。新作を彼の獨壇場とする世間の批評に不滿なのと、も一つは彼にも一段の工風を促す目的を以て斯く云ふものである。

序に云ふが、彼をして名を爲さしめた所謂新作も、考へて見れば愚劣なものである。部分部分には好い所もある。鳥邊山に表はれた主人公の性格だとて、從來の脚本には無かつた新らしい味があるが、現代の人間があんなものに同情同感になれる筈がない。皿屋敷にしても、高綱にしても同じ事だ。若し左團次が眞に新しい脚本に成功して、芝居道に一新天地を拓かんとならば、もつと深い、もつと高い脚本を選ばなければな

らない。兎に角彼は現代に於て最も新しい味を持つて居る役者である丈け、彼の將來には開拓さるべき廣大な天地が横はつて居る。彼の才能は恐らく之を開拓するに不足はあるまい。けれども私の懸念に堪へないのは、開拓の方法を誤まりはしないか、又所謂物識りが開拓の方法を誤まらせはしないかと云ふ事である。若し夫れ所謂彼の家の藝なるものに至つては、高島屋に遠慮して他の連中が手を着けない丈けの話で、やれば彼以上にやれるものが、幾許もあると云ふ事を心から離してはならぬ。然し意氣と果斷とを表はす役に就ては、彼に獨特の味のある事は許さなければならない。

○

私の菊五郎に執着する點は、彼の踊り、所謂所作事である。三津五郎と一緒の時は殊に好いが、獨りでやるものでも非常に面白いと思ふ。舊いものも無論惡くはないが、彼によつて試みられた新らしいのが好い。黒人筋は腕に任せてやりすぎると難ずるものもあるが、やり過ぎても何でも其濶達な所が好い。所作は一種の藝術には相違ないけれども、之は俳優としての藝の全部ではない。西洋の歌劇役者のやうにそれ丈けで特別の時間をなすならば、彼は所作役者としても優に當代の第一人者たる事が出來る。けれどもそれのみが役者の本務の全部でないとせらるゝ我國では、所作以外の藝に就いて、尙彼の舞臺を批判しなければならない。

斯うなると、私は一番彼の所作に執着するのではあるが、彼の舞臺も決して惡いとは思はない。けれども所作以外の彼の舞臺を見る時に、私

には未だ曾て此役には彼でなければならない、六代目に至ると思ふ[illegible]い。殊に彼の最近最も成功した默阿彌物などには、何時も彼よりは羽[illegible]門の方がもつとよくやるだらうと思はない事はない。且つ彼が是等の役に成功したのも親の五代目が之れに成功したと云ふ事から來る一般[illegible]力と、其他周圍のいろ〳〵の便宜から來るものであつて、之を彼獨り[illegible]力に歸するのは如何であらうか。唯此間に一つ彼に取るべきは舞臺の上に若か若かしい熱が漂ふてゐる事である。あれでもつと調子が好かつたらばと思はるゝ事がある。調子の好いので立つてゐる羽左衞門にも[illegible]郎丈けの熱はない。

此れ丈け熱のある役者でありながら、時々役を投げてかゝるのは彼の爲めに甚だ惜しむべきであらう。一番目のワキ役などをやらせると、まるで氣の拔けたビールのやうで味も素氣もない。まるで別人の觀がある。つまり人間が横着な所から來るのであらう。梅幸や宗四郎のやうに、女形など許りを相手にして居る爲め、段々緩みを生じたのとは違ふか[illegible]彼の舞臺に此點丈けで失望はしない。けれども彼の若さを以てあ[illegible]横着な態度を取るのは、彼の爲めに取らざるのみならず、ウッカリ[illegible]と、後から來る勘彌などに追越されないとも限らない。

彼は何でもやつて見やうと云ふ江戸つ兒の氣分に充ちて居る。[illegible]やれば、助六もやる。成功しないのは當然であるが、然し之を相當にやりこなした腕に至つては恐るべきものがある。何んでもやつて見やうと云ふ意氣に於ては眞の彼は[illegible]の若者に似てゐる。[illegible]も好い、[illegible]

もある。聲の惡いのが一つの難であるが、兎に角彼には未だ〲希望ある將來に富む。唯彼の爲めに聊か憂ふべきは、彼の動もすれば人に誇る、所謂工風である。工風も好いが、親讓りの所謂細い工風は兎角鼻につく。斯う云ふ細かい工風を缺く左團次の如きも困るが、然し又左團次のやうにスケールの大きい所から入つて行くといふ修業も必要であらう。彼の誤り性が仁左衞門や歌六に墮落しないのは、せめてもの幸であるが、然し之を以て彼自らが誇るものならば、之れ實に大に誤つてゐる。

○

羽左衞門に就ては花形と見るべく少し古る過ぎる。花形には相違ないが、他の三人から比べるとずつと先輩でもあるし、又他の三人に共通な新し味も少い。けれども彼は古い時代の役者が新らしい時代に移り變る丁度岐れ目に立つ所の名優として之を觀る事が出來る。

一體に今日の役者の中で或意味に於て彼程役者らしい役者はない。役者として最も天分に富んだものであらう。彼に相當の衣裳を着せて舞臺に立たして置けば、それ丈けで役者に見える。それ丈けの武器は左團次にも菊五郎にも又吉右衞門にもない。紫の着物でも着せて立たして置くとまるで錦繪のやうだ。故に時々彼の舞臺は物云はぬ飾り物のやうな感を與へられるが、其の飾り物が時々エライ勢を以て躍り出すから面白い。鍛錬もあれば、工風もある。藝の洗練から云へば四人の中で、やはり一番の先輩である。然し乍ら彼の天地は今日もはや見極めが濟いた。彼は將來更に劇壇の天地を改革すべき人として見られるよりは、寧ろ過去の畠に育つた、美くしい花として賞鑑せらるべきものであらう。新天地を開拓すべき役者としては、彼は兎も角も年が寄り過ぎた。年が寄つたと云ふに不服ならば、舊い劇界に餘り長く居り過ぎた。舊い劇道の約束が餘りに彼を支配し過ぎて居る。それでも彼がそれなりに舞臺に新味を發揮してゐる所は、矢張り彼の頭の好い事を示してゐる。故に彼は從來の芝居を改良し大成して行く任務は持つて居つても、新しい天地を開拓すべき人ではない。又新じい試みをすると云ふ勇氣も恐らくはあるまい。彼は舞臺度胸があると云はれて居る。けれども飛び離れた、變つたものを食べて見やうと云ふ勇氣ありや否やは疑はざるを得ない。然し左團次の手を着けてる位の新作は彼に於て優に之をやりこなし得ない事はない。彼の藝は主として柄と意氣とを以てゆくものであるから、鳥邊山や皿屋敷位のものは、却つて左團次以上に之をこなし得るかも知れない。

單獨和議の開始によりて露國は何物を獲んとする

(單獨講和は果して獨逸の爲めに有利なりや)

法學博士　吉　野　作　造

(一)

十一月初旬のクーデターは、ケーレンスキイを殪してレーニンを擧げた。露國は斯くして遂に所謂過激派の勝利に歸した。而して過激派の政府は果して豫期の如く休戰講和の提議をなして、十二月初旬以來獨逸と交渉を開始しつゝある事は、既に讀者の知る所であらう。此事實を我々は如何に觀るべきであるか。

世上の通說は概ね次ぎの解釋に一致して居る。曰く革命後露國は中心點を失ひ、國內の秩序亂れて更に歸する所なく、而かも兵士に鬪志なく、國民も亦非常に戰爭に厭きて居る。玆にかねく獨逸から金を受け取り操縱する儘に動いて居つたレーニン一派は乘ずべき機會を見出し、極端なる平和論によつて巧みに勞働者並びに下級の兵士を購着した。彼等は土地の分配を以て地方農民の人望を釣り、戰爭の卽座の中止を以て萎靡疲弊せる兵卒の歡心を繫ぎ、斯くしてまんまと天下を取つた。從つて彼等の今後爲す所は、獨逸の利益の爲めに英佛諸國を袖にして講和の途を無分別に盲進する事に外ならない。一般國民はまた、假令獨逸と和するの者が無いまでも、たゞ一に戰爭を嫌惡するの餘り、先き々友邦の事などを慮るに暇あらずして、譯もなく和議の開始に贊同の意を表したと。斯くして今日の通說は、露國の行動を以て啻に甚しき背信の所業と爲すのみならず、又憎むべき敵對の行爲であると言つて居る。而

して此單獨講和の結果、獨逸は露西亞より豐富なる物資の供給を受けて大に其力を回復すべく、又獨逸國境の大兵は之を西方に轉移して大に英佛を苦しむべく、更に其一部は露國内部を通過して之を東亞に送り、支那日本にも相當の打擊を與へんと企つるであらうと云ふて居る。併しながら、予輩は全然此觀察に贊成する事は出來ない。

（二）

然らば問ふ。何故に通說の觀るところに贊同する能はずと云ふか。第一に予は、今日露國の政界にあれ丈けの行動を恣にして居るレーニン一派を、獨逸から其思ふが儘に操縦されて居るものとは信ぜられないからである。成る程、彼はケーレンスキイを殪す爲めの運動資金を獨逸から得たかも知れない。彼が先度入國するに就いても、獨逸から多大の便宜を得た事は事實らしい。又彼が獨逸に多くの友人を有し、而して生來英佛嫌ひである事も隱れなき事實である。併しながら、あれ程の人物が多少の金錢的利益に對する交換條件として國を賣るやうな行動に出でやうとは、常識の上から何うしても考へられない。世の中には、金を貰つたといふ様な私恩に更に酬ひないものも少くはない。況んや公人として立つ者が、國を賣るを條件として外國の金を得たといふ事は、何うしても考へられないのみならず、又事實斯くの如き人物であるならば、今日國民の間にあれ丈けの地位を占め得る謂れはない。故に予はレーニンが彼自身の立場から、社會主義者としてのケーレンスキイの微溫的立場を露國の爲めに危險なりと爲し、飽くまで彼の一派を倒す爲めに、獨逸の金を使つたと云ふ事は必ずしも否認はしないが、それが爲に彼が獨逸の利益の爲めに多年の主義主張を放擲したとは到底考へられないのである。

次に又予は露西亞の國民が戰爭に疲れた結果、講和さへすれば何うでもよしと、投げ出した態度で、レーニン一派に國家を委せたと觀ることも出來ない。無智蒙昧の國民の多數が、假りにさうであつたとしても今日露西亞を動かして居るものは、實は是等多數の蒙昧階級に非ずして、其上に立ち之を指導して居るところの所謂インテリゲンシャの階級であらう。而して是等の者の内、多年組織訓練せられたる勢力として結束して居るものは、マルクス一流の思潮を忠實に奉ずる過激なる社會主義者である。國家の中堅たるべきインテリゲンシャの中には、もつと穩健な思想を有つて居

る者もあるが、是等は不幸にして十分に組織せらたる力となつて居ない。故に革命後斬然頭角を露はして露西亞の天下を風靡して居るものは、右の過激なる社會主義者の一派であつて、所謂勞兵會は這の勢力を代表するものであらう。勞働者や下級兵卒の團體だからと云つて、日本の政友會や憲政會よりもモット淺薄低劣なものと思ふならば、之れ大なる誤である。少くとも彼等を指導し其中堅となつて居る連中は、相當の教育を受け相當の見識に富む者と觀ねばならぬ。從つて彼等は容易に姦雄に瞞着せられるやうな者ではない。最近の政變に於ても、予はレーニンがケーレンスキイの人望の傾けるに乘じ、巧みに勞兵會を操縱して遂に彼を殪すに成功したと觀るよりも、國民が＝若しくは勞兵會が＝其理想を實行せしむる適任者として擧げたケーレンスキーが、漸く主戰派と妥協せんとするの態度を取るに至つたので、遂に彼を斥けて比較的彼等の理想の實行者として適任なるレーニンを擧げたものと觀とん欲するものである。

　要するに、今日の露西亞は、何等歸嚮すべき中心思想がなく亂雜に盲動して居るのではない。秩序の立たないのは非常の際に於ける非常な出來事の後としては已むを得ない。而かも或はケーレンスキーを迎へ、又はレーニンを迎へ、轉々として歸する所を知らざるが如く見ゆる間に、國民の當面の問題＝戰爭に對する思想の、革命勃發以來始終一貫して一毫の動搖をも見ないのは、寧ろ我々の驚嘆して措かざる所である。彼等の戰爭に關する思想其のもの正しきや否やは、自ら別問題であるが、唯其確信に根據して些の妥協的精神を示さざる毅然たる態度に至つては、私かに我々をして彼等の將來の恐るべきを思はざるを得ざらしむる。是れ予が曾て露國の前途を樂觀するの說（去年十月本誌所載）を揭げたる所以であつて、此考は今日尙之を改むるの必要を見ない。徒らに平和を思ふの餘り、獨逸の思ふが儘の條件を容れて、獨逸に有利なる講和を締結すべしとは、餘りに露國民を蔑んだ觀察である。

（三）

　然らば、露西亞は今日單獨講和によつて何を獲んとしつゝあるのであるか。予輩の觀るところによれば、それは革命勃發以來終始一貫して變らないと思ふ。卽ち一般的平和である。一般的平和の到來を目當として戰爭を歐洲の天地から全く取除く事である。之れ實に社會主義者の戰爭に對する豫ねての見地にして、此見地

を其儘今日に實現せんとするのが、即ち彼等の終始一貫して變らざる希望である。一體社會主義の立場から云へば、戰爭は資本家の慾の爲めになす所のものであつて、勞働者に取つては全然無意義なものである。全然無意味な戰爭を、利害關係の全然相反する資本家の利慾の爲めに爲すといふ事は、之れ程馬鹿げた事はない。勞働者に取つて唯一の敵は資本家の階級である。偶々國籍を異にするの故を以て、利害關係を同じうする勞働者が互に戰場に見えるのは、謂はゞ一種の内輪喧嘩の如きものである。斯んな無意義な戰爭を廢めて、眼前の勁敵たる資本家階級の撲滅を計のが何よりの急務ではないか。而して今日の戰爭の如きは、勞働者階級本來の無慾の立場に歸りさへすれば、立所に之を終結する事が出來る。平和の恢復は掌を飜へすよりも易いといふのが彼等の見地である。昨年三月革命の成功後間もなく彼等が戰爭目的の宣言を臨時政府に迫つたのも此立場からであつた。非併合・無賠償の原則を立てゝ各交戰國に迫つたのも此爲であつた。臨時政府をして彼等の說を容れ、同じく國内に非併合・無賠償の主義を宣明せしめたのも、又更に之を聯合各與國の政府にも傳達せん事を迫つたのも皆此爲めに外ならない。臨時政府の外相が此通牒を與國に傳達するに方つて曖昧の態度を執るや國民が非常に憤激して、遂に五月初旬の露都大騷動を見たのも亦此爲めである。臨時政府が假令非併合・無賠償の主義を取るにしろ萬一の場合獨逸の挑戰に應ずる丈けの準備は之をなさゞるべからずと主張するに反對し、一切の戰爭の準備を爲さざる事が却つて誠意を示す所以なりとして、所謂治に居て亂を忘れざるの古諺の逆を行き、遂に陸相グチコフをして辭職せしむるに至つたのも亦此爲めであつた。而して彼等の此態度は、遂に去年の夏臨時政府に迫るに、公然と密約改訂の要求を聯合與國政府に發せんことを以てするに至つた。是等の事實はみな露西亞國民が革命成功以來終始一貫して何物を獲んとしつゝあつたかを明白に語るものではないか。我々より觀れば、彼等の希望する所は畢竟空論に過ぎない。然し乍ら、空論を固執して一歩も讓歩せざる所に彼等の特色はある。我々は露國民を觀察する時に、彼等がトルストイを生んだ國民なる事を忘れてはならない。而して彼等が如何に其空論を固執するに熱心であるかは、聯合與國が英のヘンダーソン、佛のトオマ、白のヴアンデルヴエルト等の偉人を送つて頻りに勸說に努めたけれども遂に成

功せざりしの事實、却つて露國の政府がストックホルムに社會黨の大會を開くとか、或は露都に聯合與國の列國會議を開くとかの提議に依つて、戰爭目的に關する自家の所見を與國に强ゐんとするの態度を取つた事實等に能く現れて居る。然り而して一般平和の到來の爲めに熱心に英佛側に對して取つた彼等の這の態度は亦同時に今日獨逸に對して取る所の態度でなければならない。然らば我々は今日露國が單獨講和の開始によつて護んとするものゝ何であるかは、略ば之を想像する事が出來ると思ふのである。

彼等が其理想の實現の爲めに革命以來取つた所の頑强なる態度は、自ら吾人をして今後彼等が獨逸に對して如何なる態度を取らんとするかを想像せしむるものである。彼等は其主義を固執する極、國難の際にも拘はらず、ミリユコフ、グチコフ等の人材を惜氣も無く捨てゝ五月中旬內閣の改造を決行した。一介の靑年辯護士ケーレンスキイに國政を托したのもまた其爲めである。而してケーレンスキイが實際の局に當れる經驗の結果にや、段々英佛側に接近して主戰的色彩を增すや國民は彼の態度に慊らずして一時彼を非常な窮境に陷れた。九月再び彼を迎へて中央政府の首腦たらしめしも、彼が國內諸黨派の連絡を超越して一個の獨裁政府を作らんとするに決意するや、國民は猛然として彼を斥け、遂に彼等の理想の實現のために彼よりも比較的便宜なりとせらるるレーニンを迎ふるに至つた。斯く觀察する時に吾々は、政界の表面に現るゝ幾多の浮沈に拘らず、根本に於て今日の露西亞を指導しつゝあるのは、ミリユコフ、グチコフにあらず、ケーレンスキイ、チヘーゼにあらず、又レーニン、ツロツキイにあらずして、實に極端なる社會主義の思想そのものであると認めなければならない。ケーレンスキイ、レーニンの徒は、畢竟此思想の傀儡となつた役者に過ぎなかつた。故にレーニンにしても、若し徒らに獨逸の利益を圖つて一步でも國民の此思想に背かんか、彼の運命はまたケーレンスキイの陷つた運命でなければならぬ。

(四)

露西亞が遂に獨逸と單獨の和議を開始するに至つた事は、聯合國に取つて確に大なる打擊である。露西亞が空論に動かされて、友邦を袖にせるは我々の極めて遺憾とする處であるけれども、然し乍ら、之によつて露西亞の不甲斐なきを侮り、其の賴み難きを罵るのは亦大なる誤りであると思ふ。

露西亞國内の秩序の今や大に紊れてをるのは、革命後の事とて之は致し方がない。此點を以て彼等を責めるのは甚だ酷に過ぎる。寧ろ我々は一定の理想に對する彼等の確信の强固なるに驚嘆べすき理由を見る。主義に對する確信の强さ、革命當時の佛蘭西も亦今日の露西亞の如きではなかつた。革命當時の佛蘭西も、亦固より一定の理想に動いたものに外ならない。唯時代に百年の相違ある丈け、彼等の理想は聊か茫漠として居つた嫌があつた。且つ國民個々の獨立の見識も亦未た十分に明かでなかつたから、間もなくダントンやロベスピール等の英雄に國運の指導を托するに至り、遂にはナポレオンをして其野心を遂げしむるまでに至つた。然し乍ら如何に國民一般の智識の程度が低しとは云へ、今日の露國民は已に新しき時代の兒である。如何なる英雄と雖も、最早私意を以て彼等を欺く事は出來ない。革命の佛蘭西は、英雄に乘ずるの餘地を與へしが故に早く治りが着いた。露西亞は英雄に乘ずるの餘地を與へぬ丈け容易に治りが着かない。早く治りの着くものは、其解決が根本的なるを得ず、從つて動搖の餘波を長く後世に殘すの嫌あるを常とするが、治りの容易に着かないものは、それ丈けまた結局に於て根本的の解決を見るかも知れぬ。露西亞の時局が今日容易に終結を見ないのは、寧ろ時代の反映であつて、之によつて露國民を罵倒するのは正當でない。

若し夫れ露國の行動を以て與國に對する背信と觀るの見解に至つては、其の誤たるや固より多言を要しない。何となれば、彼等の英佛を捨てたのは、英佛と共に戰爭を繼續すると云ふ事よりも、彼等の觀て以て遙に尊い、遙に高尙なる理想の實現の爲めであるからである。蓋し彼等より觀れば、戰爭は全く無意義である。假令英佛は露西亞と終局の理想を同じうすとも、英佛が戰爭と云ふ手段によつて最後の理想境に達せんとするのが、彼等の承認し得ざる所である。且又彼等の見解に從へば、戰爭は其爲めに決して適當な手段でもない。此無意義にして且つ目的にも合せざる戰爭行爲を共にするは、彼等の忍ぶ能はざる所。彼等の同盟を離れたのは、謂はゞ泥棒の組合を脱退して正業に復つたやうなもので、彼等は恐らく舊友の背信呼はりを聞いて、寧ろ憫笑を禁ぜざるものがあらう。斯かる見解の正當にあらざるは固より云ふ迄もないけれども、兎に角斯く信ずるものに對して責むるに背信を以つてするは、少くとも適當なる問責の言葉ではない。況んや背信を名

として膺懲の師を起すべしと云ふが如き威嚇に對しては、露國は恐らく何等の痛痒をも感じないであらう。

それでも露西亜は遉がに、斯る態度を取るの結果英佛に與ふるの痛苦に對しては、全く思ひ遣りが無かつたのではない。何となれば、彼等は彼等と英佛との間に思想上已に大なる溝渠ある事を知りながら、久しく之を堅忍して最後の手段に出づるを躊躇し、以て英佛の反省を期待して居つたからである。彼が或は戰爭目的の宣言を迫り、密約の改訂を要求し又は聯合國會議社會黨萬國大會の開催を主張せしが如きは、皆出來る丈け英佛の反省を求めんとするの意を表するものである。レーニンですら、一度は英佛其他の聯合與國に向ひ、一應は一般休戰の措置に出づべきの發議を爲した。その聽かれざるに及んで始めて彼は單獨講和を決行するに至つたのである。且つ當初獨逸との間に出來る丈け長期の休戰を約せしめたのも、其間各國の我に隨從し來るものあらん事を希望し、期待したからである。此事は、彼の政府が休戰の開始と共に各國の勞働者に向ひ、起つて政府を鞭撻し我と行動を共にせしむべきを勸めた檄文に徴しても分る。故に彼等の立場から云へば、愈々單獨講和の態度に出づるまでには、與國に向つて相當の手續は盡くして居るのである。

凡そ國家は、其加入せる國際條約より相當の手續を盡して脱退するの權利がある。唯露國が今日の場合、友邦の困難を省みずして脱退を決行せるは、一面批難の觀なきにあらざるも、併し高尚なる理想の實現には換へられないといふに聊かの無理もない。我々の立場より觀てこそ、十分批評の餘地はあれ、彼等の立場よりいへば實は已むを得ざる數なのである。從つて彼等は心中私かに英佛側のやがて來つて彼と同一の態度を取るを希望し、又期待して居つたであらう。而して露國が結局斯の如き態度に出づべきは、實にレーニン一派が天下を取ると否とを問はず、初めより明白な事であつた。只レーニンの出るまで彼等は忍びに忍んで居つたのである。豫ねて之を忍び得ずとするの態度を取つて運動しつゝあつたレーニンを起したのは、謂はゞ國民の堪忍袋の緒が切れた結果であると云つても差支はない。

若し夫れ、困難の際に武器を捨てゝ戰線を去る者を容認し、而かも味方を捨てゝ敵と和するに至つたのは甚だ不都合であるとするの批難に至つては、之れ人一流の國家思想の見地よりする[illegible]つて

亞國民は寧ろ吾人の此種の見地に向つて侮蔑と憐憫の情に堪へざるものがあらう。我々は固より彼等の斯かる態度を承認はしない。けれども少くとも彼等の立場にも相當の根據ある事を諒として、徒らに彼等の背信を罵るの正當ならざる事丈けは之を明にして置く必要がある。故に今日露西亞に加ふるに背信の罪を以てするが如きは、偏狹なる國家主義者の說に非んば他國に亡命せる露國貴族などの泣き言に外ならない。遉がに英米諸國の識者は斯の如き偏見に囚へられては居ないやうである。英國は出來る丈け露國の反省を求めんとして容易に微溫い言葉を發しないやうだが、米國の如きは逸早く大統領ウイルソンの口を通して、露國に對しては寬大な態度を取り、深く同盟脫退の責任を問はざる旨を宣言せしめて居る。此宣言は慥に露國民に對する知己の言なりと言はざるを得ない。

（五）

露國民の態度已に斯の如しとすれば、和議の交涉に於て彼等の獨逸に對してなす所の條件も亦明である。而して彼等はもと獨逸との間丈けの平和恢復に着眼するものではないから、全體の平和を恢復するといふ規模の上に和議を進むべきは、初めより明白である。當きに彼等は一般平和の恢復を來すの目的を以て、に迫る所ありし際には、更に獨逸の意嚮如何を眼中に置かなかつた。敵の意嚮が分らないから我々の態度を定め難いと云ふのは、彼等の斷じて承認せざる所であつた。而して此同一の態度を今や彼等は獨逸に對しても示すに相違ない。果せるかな、彼等は先きに外相ツロツキイの口を通して、和議交涉の基礎は必ず非併合・無賠償の原則の上に立たざるべからざる事、講和談判の席上に於て發せられたる一言一句は悉く之を發表して世界の批評に曝すべき事を宣言せしめたが、今や又講和の使臣をして、休戰は東西戰線の全局に亘るべき事、休戰期間中獨逸は東境の兵を西方に移送すべからざる事を要求して居る。獨逸は、西方戰場の事は別に英佛と協議すべく、露西亞の與り知らざる問題なる事を指摘したけれども、露國代表者は之を承認しなかつたらしい。或意味に於ては、かゝる露西亞の要求は實に無鐵砲極まるものと云はねばならない。けれども我々は、今日の露西亞の態度に初めから一本調子で一貫して居る主義のあることを看過してはならない。是等の事實によつて見るに、今次の單獨講和が決して露が獨の爲めにするものに非る事は明である。

露西亞は、講和の談判に於て此[illegible]まる態度を固執して寸毫も讓步を肯んぜぬだらうか。予は[illegible]の行動を國民の戰爭に疲れたる結果なりと觀る論者は、やがて露西亞は獨逸の思ふが儘に其要求を容れるだらうと斷ずる。けれども露西亞が當初掲げた要求を一歩も讓らざるべきは、今日迄の來歷に徵して明白である。予輩は、彼等を目して戰爭の無意義を信ずる者と爲すも戰爭に疲れ來て居る者とは觀ない。從つて已むを得ずして獨逸の要請に屈服するだらうとは見られない。過去半年餘りの間、結局英佛・米の實際的見地に讓步しなかつた彼等が、今頃何を苦で獨逸に讓步するが如き態度に出でやう。故に幸に講和が成立することあるとしても、そは必ずや露西亞側の大なる讓步に依つてゞはない。況んや之に依つて露西亞が、更に大に英佛と戰ふの便宜を獨逸に許すといふやうな事はあり得やうか。

此點よりして予は最近日本の一部の人の間に唱へらるゝ西比利亞出兵論を批評せざるを得ない。尤も西比利亞出兵論を主張するの根據は、露西亞の背信を膺懲するが爲めにと云ふもあれば、哈爾賓方面に於ける日本臣民の生命財產の保護の爲めにと云ふ論もある。前[illegible]の無意義なるは[illegible]に先きに[illegible]。哈爾賓方面に於ける日本臣民[illegible]に、[illegible]しい出兵に依て保護せねばならぬ[illegible]ものではない、又、秩序の維持は姑く最近段々派遣されてゐる支那兵に一任して可なるべき事、此際日本の出兵は徒に侵略的野心を疑はれ、將來に於ける日露兩國民の親交を害する種となるべき事等を指摘するに止めて置く。而して此二つの根據の外、更に最も有力なる根據として擧げらるるものは、獨逸兵力の東漸である。中にも獨逸が西比利亞を通して潜航艇を浦鹽に送り、以つて日本の通商を脅かすべしとの說に至つては、如何にも尤もらしく唱へられる。然し乍ら、是等獨逸武力の東漸は、技術的見地から可能なりや否やに多少の疑があるのみならず、假令可能なりとしても、そは決して事實となりて現るゝことはない。何となれば一般平和の實現の爲めに起つた露西亞が、其國土を獨逸の野心遂行の爲めに利用せしむる筈はないからである。獨逸は必要とあれば武力の壓迫を以て無理に兵力を東亞に送ることは出來やう。が、將來の國交を慮るとき、輕々しく露國民の意に反するが如き態度には出でまいし、又獨逸に夫れ程の必要もない。近時西電は頻りに日本兵の浦鹽上

陸の風說を傳へて居るが、予は斷じてその一片の流言に過ぎざることを信じて疑はない。若し日本政府にして此際こんな馬鹿な事をしたとすれば、我々は何時か必ず此失策の酬を受くる覺悟をせねばならぬ。

露西亞の提出する講和條件に對して、獨逸は果して如何なる態度を執るであらうか。其條件の容易に承認し得ざる程度種類のものたるべきは云ふを俟たない。けれども之を承認せずとすれば、少くとも獨逸は露西亞より、折角出來掛けた平和に應じなかつたと云ふ道德的責任を負はさるゝ。承認する事も出來ず、承認せざる事も亦將來の爲めに不利益だとすれば、單獨講和の開始は結局に於て獨逸の利益になるかどうかは疑はしい。果して然らば、露國を英・佛より離間するに成功せる獨逸が、其當然の結果として單獨講和の要求に應ぜざるべからざるに至つたのは、却つて藪蛇の嫌ひなきを得るか。要するに、此局面を獨逸が如何に展開するかは今後の發展に之を徵せざるべからざるが、兎に角、獨逸が露西亞の要求に全然屈服するか、又は少くとも大に讓歩する所なきに非ざる限り、單獨講和の成立の非常に困難なるべきことは明白である。

（六）

若し單獨講和が不成立に終つたならばどうなる。

に依つて著しき影響を受くるものは恐らく露西亞であらう。過激派が獨逸の態度に失敗したからとて遽かに其空想的見地を捨てる事もなからうが、たゞ其政策の最大眼目とする平和の到來に失敗した結果一時大に窮境に陷るは疑はない。其爲めに彼等は責任の地位より退かねばならぬ事とならぬだらうか。果して然らば、穩和社會派や主戰派は或は玆に乘ずるの機會を見出すかも知れない。多數の國民も亦、漸く過激派の空想的見解より覺醒して、英・佛・米と共同して平和を獨逸に強請する事が、最善唯一の方法だと云ふ事に考が變つて來るかも知れない。唯、穩和社會黨と所謂主戰派と何れが結局に於て優勝の地位を占むるかは、今日の所明ではないけれども、過激派の失敗が必ずや露國民の空想的迷夢を覺醒すべき實物教訓たること丈けは疑ない。十二月央頃の西電が、コルニロフ等の主戰派の失敗を報ずる所に據つて觀れば、レーニン派に繼いで露國の天下を支配するものは、或は再びケーレンスキイ一派の穩和社會黨ではあるまいか。唯、ケーレンスキイ其人が復活し來るや否やは問題である。

要するに革命後の露國民の活動は。米國――參戰以

來非常なる熱心を以て戰備を修むるに汲々たり、而かも常に正義の要求を異向に振り翳して、動もすれば勢に乘じて過當の條件を提出せんとする英佛の鼻先を折るに遲疑せざる——の主張と共に、其一本調子の非妥協的精神を以て今や全世界を風靡しつゝある。何と云つても露國と米國との今日の態度は、今度の戰亂の生んだ最大の偉觀と云はざるを得ない。

所謂共同宣言と日米問題

法學博士　吉野作造

(一)

日米共同宣言の政治上の意義は、前號に於て既に之を詳細に說明した。之に依つて日本の東洋に於ける地位が一段と確保されし事、又我國が東方の經營に自由に活動するに對し、多年厄介に感じて居つた米國側の誤解が溶けて、爲めに兩國親善の關係が漸を以て恢復せらるべき事等は、既に讀者の諒解を得たことゝ信ずる。然し乍ら前號にも述べた通り、親善干係の本當の恢復は今後の努力にあることにて、一片の宣言にて直ちに之が完成するものと思ふは誤りである。されど、この共同宣言の成立は、之に依つて日米間の懸案たりし凡ての問題を皆解決せしものと認むべからざる事も亦、特にこゝに讀者に告ぐるの必要を感ずるのである。

從來日米疎隔の原因となつて居た懸案は、大別すれば三つある。一つは日本より米國に向ふ移民の問題である。一つは既に米國に在住する日本人に對して米國側の與ふる差別的待遇の問題である。最後のも一つは、東洋殊に支那に於ける日本の行動に對する米國側の不滿の問題である。而して今度の日米共同宣言は、此の中僅かに第三の問題を解決したものに過ぎない。

我が日本は人口の過剩に苦しんで居る國である。從つて賃金の高き對岸の米大陸に移住せんと欲するは自然の勢でなければならぬ。況んや數十年來多數の同胞の夫の地に移住せるものあり、知らず識らず內地に於て志を得ざる者の遊志を唆るあるに於てをや。けれども米國は最近無制限に外國の勞働移民を歡迎せざらんとして居る。而して東洋移民に對しては、特種の理由があつて、之を欲せざるの念が特に强い。而して來住を歡ばざる移民に對して之が拒絕制限をなすは、もと

米國當然の權利にして、我より飽く迄之に抗議するの理由はない。唯絕對に來住を拒むは、亦之れ國際道義の許さざる所なるが故に、米國に於ても絕對に拒絕の態度に出でんとはしない。我國に於ても多少の移民は之を許されん事を彼に求めて居る。玆に於て問題は、どれ丈けの移民を許すべきかの程度を定める事に歸着する。此點に就て、彼は出來る丈けその少からん事を希望し、我は出來る丈けその多からん事を希望するのはまた已むを得ない。兩國識者の間には、未解決の儘に此種の懸案を放任するを憂ふべしとなし、いろ〳〵研究の結果、種々の提說を發表して居るものもある。要するに此等は、將來兩國當局の間に明白に決定せられねばならぬ問題であらう。今日所謂紳士協約に依つて我國は進んで自ら移民の數を制限して居るが、之は我國に於ても亦彼の國に於ても、倶に滿足なる解決と認められて居るのではない。

若し夫れ在米同胞の差別的待遇の問題に至つては、之を近くしては在米同胞の死活に關する大問題であり之を遠くしては日本帝國の面目に拘はる重大問題である。何となれば差別的待遇を爲すの極、遂に最近では在米同胞の生活の基礎たる土地の問題に就いて、日本人の利權は根本的に覆へされんとして居るからである之れ丈けは、如何樣にしても、日本の面目の爲めに、又在米同胞の生活を安堵ならしむる爲めに、速に何とか解決せねばならぬ問題である。けれども米國側に於てはまたそれ相應の理由があるので、其解決は一朝一夕には出來難くも見える。然し乍ら之を其儘に放任するの結果は、益々兩國人民の感情を疎隔せしめ、兩國の親善を傷くる事頗る大なるものがある。所謂日米問題として、從來最も憂へられて居たものは此點であつた。

故に假令第三の支那問題が立派に解決されても、此第一第二の問題が未解決の儘で殘る以上は、矢張り日米兩國の間には、依然として一沫の陰翳がたゞよふものと云はなければならぬ。然らば第三の問題に成功したる我々は、之より更に第一第二の問題に向つて解決に努力するの必要があるではないか。

（二）

何故に日米兩國が先づ第三の問題の解決を急いで、第一第二を殘したかは、我々の直接に知る所ではない。人或は今度の日米交渉は、戰爭に直接關係のある問題の解決の爲めであつたと云ふも、所謂第三の問題は

戰爭に直接關係ある問題でもないし、又戰爭に直接關係あるものとして最も重大なる鐵や船舶の問題は、現に解決されて居ないのを觀れば、論者の説は必ずしも正當ではない。予輩の觀る所では、第一第二の問題の解決には復雜なる技術的調査を要する事もあり、一擧手一投足の勞では解決は六かしい。故に先づ取り敢えず比較的解決の簡單なものから着手したのであらう。而して日米兩國間の親善關係を恢復するの急務は、戰後に於て大に活躍すべき我東洋經營の必要から迫まられた事は疑を容れない。何となれば、今度の戰爭は米國をしてまた東洋に於ける一雄國たらしめたから、之と豫め諒解の途を付けて置く事は、我國將來の活動の上に必要缺く可らざるを以てである。且又日本當面の問題としても、第一第二の懸案はそれ程重大な問題ではない。差當りの所最も重大なるは支那問題である。故に先づ專ら力を之に集中したものであらう。

第一第二の問題は、それ自身日本全體の利益の着眼點からすれば、實は小なる一地方的問題と云つて差支ない。然し乍ら、此問題は他の一面から觀れば、日本人の將來の發展に關する問題であると共に、又日本人の面目に關する重大な問題である。日本人が將來世界の各方面に發展せんとする以上、中國利權に於ける閉鎖的態度に讓歩するは、卽ち他の各方面に於ける發展の主張を自ら拋棄することになる。而かも彼の國の閉鎖政策の裏面には、東洋殊に日本人の生活の理想形式に對する不理解乃至反感を伴ふ以上、之れが十分なる諒解を彼等に求め、彼等が漫然として東洋人の思想習慣を輕視するの蒙を啓くのは、亦面目としても我々の力めねばならぬ所である。故に是等の問題は、直接の利害關係が薄いからと云つて、我々の輕々に附する事を許さざるものである。唯之れは前にも述べた通り、米國側にも亦種々の言ひ分のある事だから、彼我双方に於て精密なる研究調査を經た上、之を基礎として懇切に解決の途を發見すべき事柄である。濫りに感情に奔つて、不滿疑惑の叫びを交換するのは、極めて愼むべき事に屬する。政府は此點に關して、果して如何なる考を有つて居るであらうか。又此問題の解決の爲めに今日迄果して如何なる研究調査を爲して居るであらうか。

（三）

日米共同宣言が第一第二の問題の解決に直接關係ものでない事は、繰返して云ふの必要はないし

之に由つて、米人をして日本人の發展の理想を正當に諒解せしむるに成功せば、之れ亦或意味に於て第一第二の問題の解決を扶くる一方便とならない事もない。何故なれば、第一第二の問題は元來極めて複雜なる原因より來るものであるけれども、日本人の海外發展の理想に對する疑惑が、慥に其重要なる一因を爲すが故である。蓋し此疑惑は自ら排日思想を米人の腦中に描かしめ、之が背景をなして更に種々雜多の困難なる問題を生ぜしめた。而して日本人の發展の理想を侵略的なりとするの疑は、實は日本内部に於ける一部の矯激なる議論にも淵源して居るが、主としては支那朝鮮に於ける日本の行動が全然侵略的なりとする各種の報道に基くものが多い。故に日米間に横はつて居た所謂支那問題は、從來第一第二の問題を困難ならしめるにも與つて力ありとせられて居つた。然るに今や日米共同宣言の成立に依つて、米人が從來其の最も快しとせざりし日本の行動をば、却て之を諒とするに至つた。之を端緒として、我々が若し我が國民的發展の理想に關する彼等の疑惑を完全に一掃するに成功せば、自ら米國に於ける排日思想の背景の翳（かげ）を段々薄からしめ、從つて第一第二の懸案の解決に、大に便宜を與ふべきは疑を容れない。尤も第一第二の問題は、單に之れ丈で解決の着くものではない。唯共同宣言の目的を將來完全に成就するに成功すると否とが、其解決の上に極めて重要な關係を有つて居る事丈けは、呉れ〴〵も之を注意することを必要とする。之れ予輩が今次の成功に醉つて滿足する事なく、之を端緒として更に他の懸案の解決に力め、以て親善關係の完全なる恢復を到來せしめん事を希望する所以である。

紛亂せる支那政局の前途

法學博士　吉野作造

（一）

段祺瑞の失脚以來、北京の政局は更に發展しない。今日迄多少形勢の變化せる所ありとすれば、それは南方に反段勢力が幾分擴張したと云ふ事である。今や湖南は確實に南方派の手に歸し、四川も亦北方派のものではない。之と雲貴兩廣とを合して、所謂西南六省に於ける陸榮廷一派の根據は、今日餘程固まつてゐる。而して李純、陳光遠、王占元等の所謂長江沿岸の諸將

軍の一個が依然として北方派に對する一敵國たる事は變らない。最近湖北に於ける黎天才、石星川の獨立は過般來暗中飛躍を試みつゝあつた黎元洪一派の仕事であつて、或意味に於ては王占元の頸に匕首を擬するの概なきにあらざるも、之れ亦南方派の別働隊に屬し、北方派を牽制するものたる事は疑を容れない。斯くして中部以南に於ける北方派の勢力と云へば、安徽浙江福建を數へるに止まる。廣東軍の壓迫を受けつゝある福建の運命が今日風前の燈火である事は、新聞の報道する所である。若し夫れ浙江安徽に於ける民黨勢力の横溢に至つては、固より人の知る所、決して段派の安全なる根據と認め得る所ではない。斯く觀れば所謂北方派の勢力は、段祺瑞全盛の頃に比し、著しく削減された事は、爭はれない事實である。

然し乍ら眼を轉じて北支那方面の形勢を一瞥すると、段の勢力はまた容易に此方面に抜くべからざるものがある。河南山東直隷より滿洲に懸けては、大體彼の勢力の據る處である。山西と雖もまた之を段派と見るのが安全の計算であらう。故に李純一派の力を利用して段を政界より蹴落すに成功したる直がの馮國璋も、北支那に於ける彼の潜勢力を覆す事が出來なくて、今日大に開設付いて居る。民衆[illegible]決せ議の號呼する程恐るべきものなる[illegible]之を諱くも、馮國璋が少からず之を遠慮して居る事だけは確かである。北京政局の收拾の捗々しからざる所以は、[illegible]畢竟之が爲めに外ならない。

（二）

北京政局の發展の捗々しからざるは、一つには又馮國璋の態度の優柔不斷なるにも由る。蓋し彼にして英斷を缺かん乎、勁敵段派を屈伏せしむる事は出來ない。段派は頭目の段祺瑞自身が何を考へて居るにしろ、少くとも末派の者は、一旦勢力圏外に追ひ遣られては、再び浮び出づる見込が無いから、飽く迄勢力の復活を圖つて已まないだらう。けれども彼等の反抗を押切つて、段派に最後のとゞめを刺す事は、馮の今日の地位勢力を以てして、それ程困難の事ではなからうと思はれる。而かも優柔不斷なる馮の八方美人主義は、遂に彼をして段派を一掃するの好機會を逸せしめて居る。

尤も馮が思ひ切つて段派を一掃しないのは、或は自已の立場を安全ならしむる爲めに殊更に斯く爲すのかも知れない。見様によつては、馮は今日或目的の爲め、に段派を利用して居るらしくもある。之れ實に馮

となりを語るものであつて、又同時に支那政局の特色を表はすものでもある。其意如何と云ふに、一體曩きに段派を陷れたのは、直接には南方督軍の李純の力であるけれども、實は馮派の陰謀に出づる事は隱れもない事實である。而して馮が李をして此陰謀の役者たらしむるまでには、唐紹儀、岑春煊、孫洪伊等を通して陸榮廷の一派とも一脉相通ずるものがあつたらしい。故に段を仆せるは畢竟是等諸勢力の共同の働に外ならない。故に段を仆せる後の時局の始末は、少くとも馮派と南方派との妥協に由らなければならない。而して斯かる場合には何時でも見るが如く、馮は馮丈けの考で進まうとし、南方派は南方派丈けの考で進まうとして、茲に意見の衝突を見るに至る。且つ老猾なる馮は、厄介なる南方派の勢力を北京に導く事を欲せざりしなるべく、南方派も亦十分に馮を信頼せざるが故に、出來る丈け自分に都合好き結末を著けやうとしただらう。斯くして馮の希望と南方派の要求との間の隔りは益々遠くなる。若し我々をして勝手な忠言をなさしむるならば此際馮が時局の收拾に巧みに成功せんと欲する以上、彼は須く胸襟を披らいて南方派と懇切に相談を遂ぐべきであつた。然れども斯くの如きは舊式なる支那政治家の爲し得る所ではない。殊に馮國璋に於て然りとする。加之、彼は全然南方と妥協しては段派の反抗あるべきを恐れて、彼は遂に自分の都合の好い、而して段派からも南方派からも餘り反對されないやうに、最も安全だが而かも實は結局不可能なる方法を取らんとした。此目的の爲めに彼は段派の天津會議を利用したのではあるまいかと思はるゝ。即ち彼が腹心の曹錕を遣つて天津會議に或る威勢の好い發言を爲さしめて居るのは、之れ一つには歡を段派に通ずるの目的を遂ぐると、又一つには、北方派の反抗を種にして南方派の妥協條件を和らげしめんとする爲めのものである。曩きに馮の命を承けて李純と行動を共にした曹錕が、如何に直隷督軍の任に在るとは云へ、天津に下つて俄かに、武力討伐を主張して居るのは甚だ可笑しいではないか。斯かる奇怪の現象を呈せる所以のものは、之れ恐らく馮の苦肉の計に出づるものでなければならない。

果して然らば、馮の計略は甚だ巧緻を極めて而かも大局を過るものである。何となれば之に由つて折角落ちかけた段派も再び勢力を盛返し、南方派と相對して却て馮を進退維谷まるの窮地に陷るゝの虞れあるからである。既に彼は板挾みとなつて長らく内閣を組織せ

しむるに苦んで居た。而して辛うじて出來上つた王士珍内閣は、南方を入れざる謂はゞ馮派段派の聯立内閣であつた。斯くては南方も快からず思ふべく、又李純の一派も馮に好意を示さゞるに至るかも知れない。蓋し段派を閣内に殘すは、即ち李純の功に酬ゆるにやがて國務總理の地位を以てすべきの默約を、益々實行し難からしむるからである。斯くして馮が南方諸勢力の信望を失はゞ、彼の運命や即ち知るべきのみである。

(三)

斯く觀ずれば、一時全盛を極めた段が沒落して、馮の天下となつたと云つても、馮の天下が又何時まで續くか分らない。馮に代つて今後天下を取る人の何人たるかは、今之を豫想するに苦しむも、彼も亦中央地方の各勢力の間に介在して長く其地位を維持し得ざるべきは、略ぼ之を豫想する事が出來る。斯くして支那の中心勢力が恰も走馬燈の如く轉々極まる處なきの狀勢は、今後暫く續く事であらう。然らば支那政局の前途は啻に紛亂あるのみにて、何等歸嚮する處なきやと云ふに、必ずしもさうでない。何を以つて斯く論ずるやと云ふに、予輩は變轉極まりなき政局の外皮の裡に、微に一道の主義が儼として其光を放ちつ丶あるを見るからである。そは何かと云ふに、約法尊重、國會尊重の主義ち之である。

約法及び國會を尊重するの主義に、最近支那に於ける程蹂躙せられた處はない。然し乍ら之を蹂躙して一時の奇功を收めたものが、唯此點を理由としてやがて沒落の悲運に遭逢した例も、亦最近の支那に於て尠も明白に示されて居る。約法及び國會は、武力を擁して天下を取つたもの丶專政的政治に妨げありとして、常に壓迫を蒙つた。けれども支那の國民は、約法を蹂躙し國會を無視したものに、結局信任を置くを欲しない。斯くして今後天下を取るものは、必ず約法國會の尊重を第一義とせざるべからずとするの思想は、漸を以て明かになりつ丶ある。支那の光明ある將來は實に茲に伏在すると云はなければならぬ。

云ふまでもなく支那最近の政變は、畢竟するに官僚軍閥の武斷主義と青年民黨の國法尊重主義との爭に外ならない。袁世凱による第一革命の失敗は、即ち前者の勝利であつて、第三革命は後者の袁の對する反抗であつた。段祺瑞の去年の夏國會に解散を命じたのは即ち前者の勝利であつて、今日彼が失脚せるは、結局彼に加へたる後者の刺戟に外ならない。兩者の爭は部分

的に觀れば、勝利は常に武斷主義者に歸して居る。從つて支那でも短見なる政論家中には、武力を尊重して、「今後天下を取るものは舊式の官僚にして、而かも新人物を使ひ得る者でなければならない。」などと云ふものが多い。けれども着眼點を少しく遠くに放たん乎。支那に於て最も確實なる勝利者は、國法尊重の主義であると云はなければならない事になつたが、國法尊重主義に隱るゝものは、所謂青年民黨である。青年民黨を以て予輩は直ちに最後の勝利者なりと云ふのではない。最後の勝利者は、常に國民の間に磅礴する國法尊重の主義そのものであつて、之に從へば官僚軍閥の徒と雖も固より相當の成功を收むるに難からざるべく、青年民黨は初めから國法尊重主義を旗幟とするの有利なる地位にあるも、勢に乘じて此主義の要求する正當なる範圍を超越すれば、亦決して天下に主たる事は出來ない。

官僚軍閥と青年民黨との爭も、其直接の動機は或は瑣細なる勢力爭であるかも知れない。而して武力を有するものが、一時確實なる勝利者たるを得るに拘らず、結局に於て彼が長く其勝利の地位を維持するを得ず、之に反して無力の青年口舌の士が、却つて有利の地位を占め得る所以のものは、畢竟國法尊重の主義を口實とするとせざるとに由るものである。單に之を口實とすると罵り去る事勿れ。假令口實であつても政變の度毎に此主義を世上に力說する事は、やがて益々國民の中に此考を深く滲み込ましむ事になる。斯くして國民は、此主義に忠實なるものに味方し、此主義に從はざるものを卻くるに至る。而して之れがやがて自ら一個の大勢力を作るに至らば、曩さに之を口實とせしものも、遂には事實全く之に從はねばならぬ形勢を呈するに至るであらう。

斯くして予輩は支那に於て今日國法尊重の主義が、漸を以て堅まりつゝあるを認むるものである。無論今後も幾多無用の政變は繰返へさるゝであらう。約法も國會も一度ならず蹂躙さるゝ事もあらう。晴雨未だ定まらずと雖も、然し乍ら國法尊重の大主義は、曙の空に山の姿が刻一刻鮮明になり増さるが如く、漸を以て支那の政局を堅め、且つ導くべきは疑を容れない。之と共に、青年民黨の士も亦漸を以て政治的經驗を積むであらう。斯くして遂に政界の實權が、國會に移るに至らば、假令國會が未だ十分民本主義の基礎に立たずとするも、今日の彼の國の政治家が、各利權を擁して割據するが如き弊風を一掃し、漸を以て統一國家の體

哉を發達せしむるの道に進む事が出來るであらう。予
輩は支那昨今の政局の紛亂を觀て、隣邦の爲めに甚だ
之を遺憾とするが、然しまた他の一方に於て、其裡に
一道の主義の光り輝きつゝあるを觀て、必ずしも前途
を悲觀せざるものである。

政治と國民生活との接近

大山郁夫

今回は主欄の論文で大分手間取つた爲め、時評欄に於て、時事問題に關する研究的意見を發表するに十分なる時間の餘裕を持たなかつたことは、自分の甚だ遺憾とする所である。仍つて已むを得ず、最近の政局に對する通り一片の印象的觀察を走り書きして、心苦しい責め塞ぎをすることにした。

□政局の行き詰り

日本は今や、世界戰亂を背景にしながら、國内に於ては、奥歯に物の挾まつた様な政局を經過しつゝある。先づ第一に寺内内閣がその存在の理由の少くとも最も主要なるものゝ一とする擧國一致主義の實現は、その主唱者たる内閣が、既に自ら率先して之を裏切つて居る。卽ち第三十九議會の秘密會に於て前内閣の對支外交上の秘密を曝き立てた瞬間より、大權干犯論の絶叫や、總選擧戰の經緯を經て、最近の豫算案の内示の時に至るまで、寺内々閣は或ひは事毎に前内閣の秕政を鳴らすことに依り、或ひは與黨と反對黨との間に極端なる差別的待遇を與ふることに依り、皮肉に國民の政治意識を亂撹し、無用に多くの人々の反感を挑發し來つた。次に國論統一の强制にも亦、非常に大なる無理がある。外交調査會の秘密裏の進行と、臨時敎育會議の超國民的標置とは、國論の分裂の種とこそなれ、その統一には餘りに緣の遠いものである。更に又、干渉主義の商標の貼附してある對支外交は、その品質がその効能書きとは必ずしも一致して居ない。少くとも世論の大半は、寺内々閣の段内閣に對する好意的干渉を確認し、何も知らぬ多數の國民は、疑惑の霧中に閉ぢ込められて居る。次に又、現内閣成立以來虎の子の様に取り扱はれて居た善政主義とか社會政策とかの主張は、いよ／＼蓋を明けて見ると、これは又、思ひ切つて不眞面目・不徹底のものであつた。最後に國民の

最も奇異に感ずることは、峻酷なる言論抑壓の暴壓政治が、現內閣の治下に於て殊に甚だしく橫行せられつゝある間に、その遺外使臣が海外の諸處に於て、自由と人道とのために軍國主義の勦滅を期するといふことを標榜する聯合軍の所謂「戰爭目的」に對する共鳴演說を反復したことである。觀じ來れば、現內閣それ自身が極端なる矛盾撞着その物であるのか、それとも現代日本の國民生活上の大なる矛盾撞着が現內閣の擧言施設の上に反映せられて居るのか。何れにせよ、そが奇現象たるに於ては一である。名だけは聞えの好い哲人政治も、その本體を調べて見ると、正に斯の如く破綻百出のものであつた。

諸政黨の現在の態度も亦、眞面目に見ては居られないものである。年來政黨內閣を主張し、閥族討滅を聲明し、一たびは憲政擁護運動をさへ捲き起した諸政黨は、當年の意氣は今はた全く沮喪し盡くして、現狀是認派は再び官僚政府の走狗となり、現狀否認派も熱烈にその氣勢を揚げることの出來ない狀態に在る。是々非々といふ尋常事を、さも大事らしく書き立つる滑稽を演ずる大政黨もあれば、時局の蔭に隱れて、昔てそが痛烈に攻擊した「憲政の賊」と平氣で握手して居る政黨もある。海外諸國に於ては、曠古の時局が政治的大變革の動機となつて居る間に、我國に於ては、同じ曠古の時局が弊政擁護の口實となつて居る。世は様々である。

閥族打破といふ叫び聲は、甚だ陳腐なものである。併し乍らそれが陳腐である理由は、その目的が何時まで經つても實現せられない儘で居るからである。永い病氣を陳腐であると言つて、それなりに打ち棄てゝ置く譯には行くまい。變化は結構である。けれどもそれは向上・進步であつて欲しく、後退・逆轉であらせたくはない。

今の時程、各政黨の間に意見上の一致があつて、行爲上の協同が缺けて居る時代は、恐らく空前であつて同時に又絕後であらせたい。政友會も憲政會も、共に閥族の權勢壟斷には反對である。共に海軍擴張の必要を認めて居る。共に財界不振の原因を現政府の責任に歸して居る。共に選擧權擴張を唱道して居る。共に產業發展の助長を發言して居る。共に教育刷新を期して居る。共に日支親善を望んで居る。共に農村振興を叫んで居る。曰く、何。曰く、何。數へ來れば、この兩政黨の國政の根本問題に關する意見は、殆んど符節を

合した樣である。而かも彼等を隔つるものは、只一片の黨派心であり、只一塊の感傷主義である。斯くて根本的意見に於て合致して居る兩黨の領袖は、三黨首會議から外交調査會へかけての行き掛りより生じたる枝葉問題を中心として、賣り言葉に買ひ言葉の罵詈の交換に沒頭して居る。

目下紛擾に支配せられて居る新政會のことは姑らく言はず、國民黨とても國政の根本問題に對する意見は右の兩黨と大同小異である。故に彼等にしてその何等の絶對價値のない黨派心と、その何れは時の波に洗ひ去らるべき運命を有する感傷主義とを捨ててさへ掛れば、聯立內閣でも畫策して局面を展開し、以て比較的鞏固なる基礎の上に、少くとも戰時の經營に當り得べく、講和會議を中心としたる前後の期間に於てその滿腹の經綸を行ひ得べきに、彼等の價値顚倒的政治意識は、見す〳〵惜しき機會を彼等の手より奪ひ去らんとして居る。

まさか講和會議に對する處置の大任を回避せんがために、彼等が斯の如く不離不卽の曖昧なる態度を反復して居る譯ではあるまい。露國擾亂以來の獨墺の活躍振りが、來るべき講和會議當時の政府者の負擔を無限に重からしむる可能性を示して居ることは事實であるが、此政治家的識見手腕の一大試金石を回避して、其時の政府の瓦解の跡をうま〳〵と引け受けやうと目論見る樣な狡るい政治家は、此日本には一人も生息して居ない筈である。

要するに現時の我國の政局は行詰つて居る。而して此行詰りの狀態の因つて來つた所以は、一般國民が從來に於て、餘りに無條件に、國政の運轉をば、傳統的統治階級と、政黨關係の職業的政治家に一任したからである。

國民の注意は、今や漸く此一點に向けられんとして居る。否、向けらるべく餘儀なくせられて居る。それは何故であるか。曰く、そは當然意識せらるべくして而かも久しく意識せられざりし政治と國民生活との密接なる連結關係が、漸く此頃になつて始めて一般國民の腦裏に映寫せられんとする徵候を示して居る故である。此點を實證せんためには、可なり精細なる論述を要するのであるが、自分は今は時間の餘裕を有しないから、之を急行列車的に略說して、その詳論を後日に期せんとして居るのである。

□商工業者の政治的全盛期

業者の羽振りの最も好い時代である。然り、社會的にも、政治的にも。

見よ、憲政會も政友會も、如何に實業者のパラダイスたる阪神地方の人士を相手とする關西大會に於て、其全力を傾倒したかを。現內閣がその責任の一部を負擔せねばならぬ支那關稅引上と同地方の紡績業者との關係や、物價調節令や、船舶管理令や、米國金鐵禁輸なども、同地方に於ては、緊切なる興味を提供すべき性質の問題であつた。憲政會が多く之に觸れて、政友會が注意深く之を避けたのは、可なり面白い現象であつた。

獨り政黨のみならず、政府も大に同地方のことを氣に掛けたと見え、二三の閣僚が態々、若しくは他の用に假託して、そこに出向いこともあつた樣に記憶して居る。殊に勝田藏相の大阪經濟會に於ける演說の如きは、此意味に於て大に我等の注意を惹いたものであつた。

物價調節令や、船舶管理令や、米國金鐵禁輸に關する政府者の辯解や說明などは、此鼻息の荒い商工業者に對してなされたものだけに、例の官僚臭に似げなく周匠丁寧を極めたものであつて、現內閣の虎の子の社會政策などは、その後段々收縮して仕舞つて、遂に次年度の財政案の上に、矛盾だらけの痕跡を止むるのみとなつた。

各政黨も選擧權擴張問題などは、口に熱して手に冷かであるが、商工業者の利害關係の問題となると、一齊に躍起となつて口も手も共に激動させて居る。第四十議會の問題の焦點は、今の內から見當が附く樣に思へる。印紙の決濟問題、戰時利得稅問題、海運業問題など、數へ立てれば此方面にも、可なり多くの事件がある。

租稅の負擔や公債の引受等で、益す國家生活に對する地位の自覺を持ち始めたる資本家・金融業者の政治意識が、戰時に於て殊に高度に增進するのは當然であるが、之に對立する强大なる勢力が出づるに非ざれば、我國の政治は益す産業化し、益す銅臭化して、遂には商工業者中心の惡自由主義に墮する危險がある。然らば之に對立する强大なる勢力とは何であるかと言はば、それは一般國民の政治的自覺でなければならぬ。

我國に於ける一般國民の政治的自覺は、尙ほ望ましき程度よりは遙に低級であることは事實である。けれ

どもそれは、早晩は當然到來すべき運命を有するものである。而してそれは一般國民が、自己の生活が政治に對して切つても切れぬ相互的關係を有するものであることを意識することより始まるべきものである。

□一般國民の政治的自覺の曙光

幸にも時勢は一般國民をして、その生活の政治に對する緊密なる關係を、從前よりも一層明瞭に意識せしめずに置かぬ様になつた。而かも此事の最大原因は、生活の不安といふ大不祥事であらうとは、運命の惡戯も亦甚しいと謂はねばならぬ。

戰爭は比較的少數の成金を産んだと同時に、大多數の困憊者を産んだ。戰爭の影響として發生した物價の躍進的昂騰は、或る種の産業家と、其下に使役せられて居る勞働者とに巨大なる恩惠を投與したが、それは多數の消費者を犧牲に供した上の事であつた。是等の犧牲者が俸給を以て衣食する所謂智識階級の間に於て最も多きを占めて居ることは、經世家の細心の注意を以て觀察すべき事柄である。佛蘭西に於ける社會主義者の多數が、頭が充ちて腹の空しい官吏や教師の國定試驗の落伍者の間より出でて居るといふことは、屢ば書物でも讀み、人よりも聞かされた所である。素より此假説の當否は茲で問はうとしてゐるのでないけれども、兎も角、我國に於ても此種の充頭空腹の人々が、最近非常なる速度を以て増加しつゝあることだけは、蔽ふべからざる事實である。

曾て各年度の豫算案をヘブライ語の經典以上に實生活より遠ざけて居た人々が、昨今では煙草の値上げや、通行税の廢止や、郵電料金の増率をば、自己の當面の生活上の緊急問題として考へる様になり、砂糖官營の風説に聞き耳を立て、戰時利得税の提案を負擔の公平を中心とする社會的公正の立場より是非する様になつたことは、日々我等の眼前に活現する一大的確事實ではないか。

政治と生活——充頭空腹の人々は、此問題よりして一歩々々政治的自覺に入門せんとしつゝある。由來興味は最良の教師である。殊に彼等は既に或る程度に於て頭腦の素養を有して居るものである以上は、其進境も意外に敏速であるに相違ない。而して彼等が一たび政治的自覺の堂に達すれば、彼等の感化は次第々々にその周圍に傳播しないでは已まぬであらう。

斯の如き言説を、只一片架空の想像談と思ふ者は、最早その事だけで將來の政治家たる資格のないことを設

白して居る者であらねばならぬ。帝國憲法の課程を正式に修めた者でなければ、政治を語ることが出來ぬと思ふのは、最早舊型の政治的思考様式に過ぎぬものであることを切實に體得すべき時期が、今こそ現前に到來したのである。（六―一二―一七）



醫學博士 永井潜著

生命論

菊判天金函入
挿畫五十餘枚
定價四圓
送料拾貳錢

生命に關する思潮の推移を尋ね自然科學の見地より之に向つて最新明確の解釋を下せる者本書を措いて他にありや。曰く醫質科學と生命、曰く原素の循環と空中窒素の利用、曰く營養の眞相と食物の人造以下數十章相集つて一卷の絢爛なる錦繡を織り出して居る。

ギユンター著 黑田啓次譯

世界自然科學史

菊判布製天金
函入五百頁餘
價貳圓五拾錢
郵稅料拾貳錢

ギユンター氏の原著を譯したるものにして其譯出に力を盡すこと數年に及び幾たびか筆を加へて漸く成れるところ其の努力と自信とは世の一夜翻譯と大に其選を異にするものあり蓋し邦文唯一の自然科學史にして學界を益すること少なからず。（東京朝日評）

醫學博士 永井潜序 兒玉昌著

滅び行く宇宙及人類

四六判四百五
十頁布製函入
價壹圓四拾錢
送料八錢

萬物は日夜流れて愁人の爲に暫くも止まらず流れに浮ぶ泡沫は且消え且結びて將た何れに歸せんとはする本書は科學者の立場より廣大無邊の宇宙と興亡流轉の人類とを極めて敬虔なる態度にて觀察し宇宙人生の歸趣を明にせる者也。

高島平三郎著

心理學より觀たる日蓮上人

菊判布製函入
四百頁餘美本
價壹圓六拾錢
送料拾貳錢

或人著者に向つて第二の樗牛たれと勸告するや余は第一の蜻洲にして足ると答へたるもの實に著者の抱負なり著者の日蓮を論ずるや先心理學上より之を解剖し次で四方八面より其人格其信仰其特色其事業其感化を研究す敢て江湖に進む。

（中付四の三）

發行所 東京市麴町區平河町五丁目 振替口座東京二〇一九四番 洛陽堂 電話番町四二五八

白石實三氏新著

（數年の努力に成れる熱烈眞摯の研究●紀行文革新の第一聲）

新刊發賣

一種獨特の藝術品

武藏野巡禮

四六判最上製美本
金壹冊紙數四百頁

正價金壹圓卅五錢
郵稅金八錢

萩・薄・蟲聲・廣野の月光、四季を通じての武藏野は繪の如く詩の如し。武藏野を知り、武藏野を愛し武藏野を慈しむに於て著者は現代の第一人者である。本書は著者が巡禮探勝實に數年委さに武藏野の自然を見、人を見兼て其處に生起する土地河川都市田園等の各社會問題を考案せる熱烈眞摯の研究書なり。今や清新豐麗一種獨特の新藝術品を完成し在來紀行文の舊型を打破して別に史實に一新生面を拓けるもの新藝術愛好者は勿論武藏野及郊外愛慕者は必ず本書を播いて此の美玉の如き新抒情詩を愛誦せられよ。

目次一斑

武藏野巡禮：原始的生活：府中及國分寺：古武士の足迹：野火止塚：行路樹：堀兼の井：武藏野の記錄：武藏野の古驛：愛と美と命：薄の武藏野：淀橋ガスタンク：奧澤の佛像：落葉林の美：田無町：癩病院：木下川藥師：東武藏野の瞥見：新荒川：葛西族の跡：夕顏觀音：曠野の望樓：野をめぐる山々：狹山の丘の旅：高麗王の碑：西武藏野：鎌倉街道：多摩川の渡頭：武藏野の花と新綠：舊神田上水：小金井の花：雨中の井頭池：深大寺の百日紅：目黑五百羅漢：法華寺の廢趾：荒川の舟橋：江戶川の水驛：武藏野の夜をゆく：川越街道：高原の異國人街：栗橋の水樓：關東平野の横斷：加波山の麓：埼玉の野の町：越邊寺の舍營：國分寺の舍營：北武藏の町に：某上等兵の死：那珂川の獨立樹：其他

（中付四の四）

忽ち再版

東京帝國大學講師 紀平正美先生著

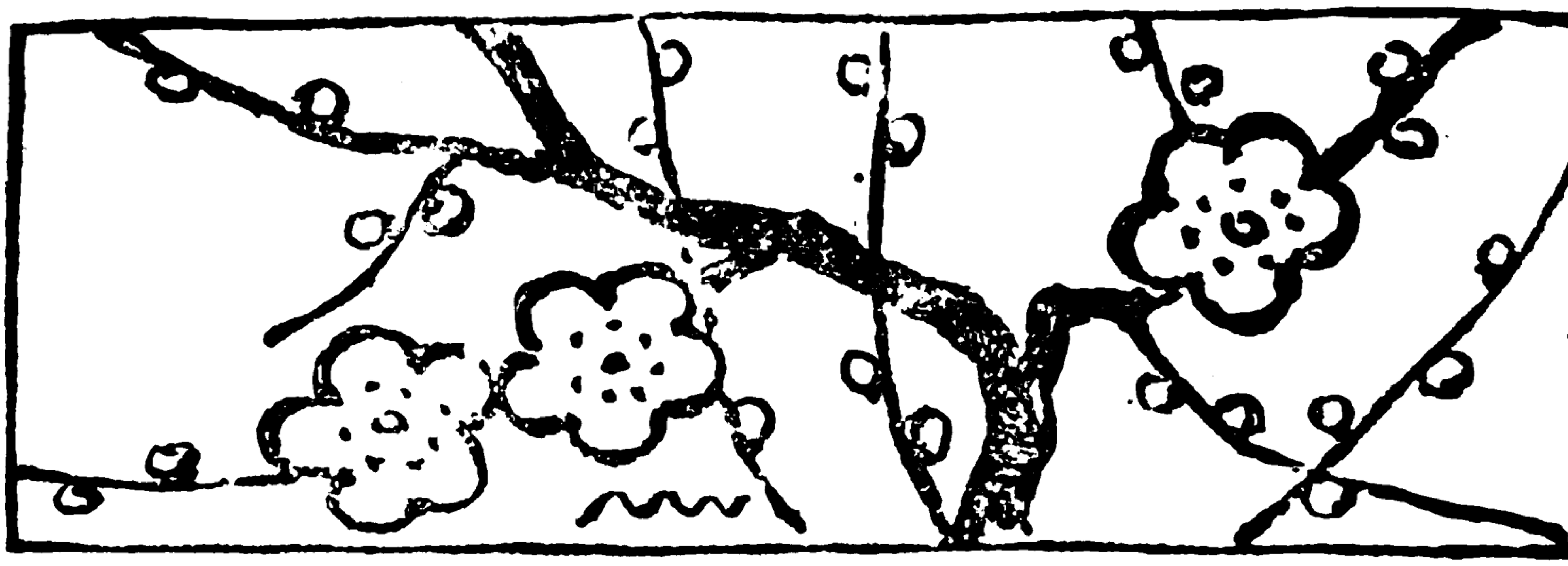
改訂 人格の力

四六判最上製全壹冊
正價壹圓 郵稅八錢

本書は今より十一年前に一度江湖に愛讀を得たるものであるが其後久しく絕版せられてゐた然るに昨年末に其姉妹篇たる『自我論』を出版したに就て再び讀者からの要求が出たので同書の出版者からして再び世に出ることになつたのであるから其儘での再刷は到底許すことが出來ない、それで全部書き改めて自分の責任を新にしたのである。もと四拾錢の定價のものが壹圓になつた內容にそれだけの差があるか否かは讀者の判定に待つべきであるが自分からは時代の推移と諦められん事を願ふのである。―（著者識）―

東京市神田區表神保町七番地 ■大同館發行■ 振替貯金口座東京八七貳番

中央公論第三十三年新年號創作



霊魂の赤ん坊

野上彌生子

人間製作（序劇）

人物

創造の神。

記錄官。

人間製作官。

アリストファネス。

場所

天上界。

時

西曆千九百二十二三年頃。

創造の神が中央の玉座に坐つてゐる。その右側に記錄官がテーブルを前にして控へてゐる。

創造の神。今日はまだ通信は來ないか。

記錄官。地球の通信が先程參りました。

創造の神。何か變つた出來事でもあつたかね。

記錄官。南亞米利加に大洪水がありました。飛行船で救護隊を送つてをります。印度の飢饉はます〱ひどくなる樣子です。波斯王の後宮では、第一の美をうたはれてゐた寵姬が、毒を仰いで死にました。同じ町の仕立屋の八つになる息子は、梯子からおつこちていゝ、びつこになりました。軒の燕の雛を取らうとしたのです。支那の南京の町端れの小道では、みゝずが一匹馬の足に踏み潰されました。

創造の神。歐羅巴の戰況はどうだ。

記錄官。相變らず勝つたり負けたりして居ります。今日は大分激戰で、西部戰場だけでも、既に二三萬からの死傷者を出してをります。

創造の神。どちらもよく飽きないね。殺したり、燒いたり、壞わしたり、踏みにじつたり、嚙みついたり、吠えついたり、叫んだり、泣いたり、十年近くも血身泥になつて騷いでゐるのだ。おかしな奴等だな。が、まあ勝手にさせておくより外に仕方はない。生中干涉めいた事をすると、却つて面倒になるばかりだ。でなくてさへ人間は、地球上の出來事と云ふと、昔から何に限らず俺の意志、俺の責任にしたがるのだから。

記錄官。左樣ですとも。今度は最後まで打つちやつておいて、好きなだけ勝手な眞似をさせて見るのも藥でせう。人間の病氣には、この程度の大手術が必要だつたのです。全く、人間ほど卑怯で、臆病で、內心びく〱してゐる癖に、己惚れの强い、自分勝手な、慾張りな、大物食ひは御座いませんから。委しいことは私の記錄をちよいと御覽になると直ぐお分りになります。あなたの王國に存在してゐるあらゆる天體のう

ちで人間の歴史位醜悪な記録に充ちてゐるものは一つもありません。その癖、人間に關する仕事が一番多いのです。私は忌々しくなつて時々考へます。あの雲の下に見えてゐる、小つぽけなぶよ〳〵の球が一つなくなつて呉れたなら、俺の仕事がどんなに樂になるだらうと。

創造の神。あの土くれの球を一つ潰すのは造作もない事だが、そしたら、併し、君のペンが餘り暇になり過ぎて、今度は欠伸で苦しむかも知れないよ。

記録官。それも退屈でせうな。

（人間製作官が這入つて來る。）

人間製作官。私は大失策をやりました。

創造の神。どうした。

人間製作官。今度新たに試みた人間製作法が成功しないのです。私は責任上、辭職しなければなりません。

創造の神。そんな氣の早い事を云はなくもよからうに一體どんな事をしたのだ。[illegible]の様式を用ひたのではなかつたかね。

人間製作官。もつと古い方法でやつて見ました。プロメテウス式は、男性でも女性でも一人一人を丹念に作り上げるのですが、今度のやうな急な場合には、それではおつつきません。何しろ、地球の今度の戰場だけでも四千萬近くの人間が死の舞踏をやつてをります。實際、この十年近くの年月の間に、其處だけで死んだ人間の數が、平時の人間の死亡率を根柢から覆したやうな次第ですから、御承知の通り、此際急速な補充を要するのです。

創造の神。さうだとも。必要な事はたゞそれだけだ。死んだゞけ充たせばいゝのだ。

人間製作官。――それで、私はプロメテウス式に依らないで、先づ最初に男性と女性の球なりの肉塊を作りあげました。それに二對づゝの生活機官を備へつけて、四本の手、四本の足を取りつけました。これ

二つに引き裂きさへすれば、同時に二人づゝの人間が出來上ります。この方が時間からも原料からも經濟です。

創造の神。――球形製作法と云つて、大昔はみんなさうやつたものだ。プロメテウスのは、パンドーラ一人を完全に、申分なく作つて見ようと云ふ、まあ、あの男の道樂細工だつたのかも知れない。

人間製作官。ところで今日の地球上の情勢は、一人の美しいパンドーラよりは、十人の女工が必要であります――ねえ君、君もさうは思ふだらう。〔記錄官を顧る。〕

記錄官。全くだ。彼等は手近にさへあれば、エルシウムの野をさへ、開墾して馬鈴薯にでもしかねないのだ。

創造の神。それで、君のやつたやうにして何處が旨く行かないのだ。

人間製作官。他はすべて完全に出來上りました。たゞ、最後に二つに裂かうとする段になつて、どうしてもまつ二つに、正確に分割されないのが出來たのです。

創造の神。それは困つたね。靈魂はもう目覺めてゐるのだらう。

人間製作官。目覺めてゐます。血液も活潑に流れ、脈打つてゐます。彼等は造られたばかりの新鮮な生命と生活力に充ちてゐるのです。

創造の神。そのまゝにしておいては、大變だ。その製作法を採用した以上、その原始の球形から、何故彼等を二人二對の身體に引き放さなければならなかつたかの理由は、君も當然知つてゐる筈だ。彼等はその異常な强力を賴んで、造つてやつた俺に謀叛したのだ。俺に取つて代らうとしたのだ。あの四本の手、四本の足をおつ立てゝ、大きな蜘蛛のやうに、又は不思議な自動車のやうに、縱横に驅け廻り、躍り狂ひ、この玉座を目がけて襲ひかゝつた時の物凄い光景は、今でも目に殘つてゐる。それ故、俺は思ひきつて、彼等を眞つ二

つに引き裂いて半分の人間にした。從つて力も半分に減じたわけだ。もう懼れる事はなくなつた。その上、彼等は削られた一半を探し求めやうとして、一生あくせくと地べたを這ひずり廻つてゐるために、俺に反抗しやうの、天を敵に取つて一と戰爭して見ようのと云ふ勇氣も、力も、亦時間もなくなつてしまつたのだ。併し、今の君の報告に依ると、そのまゝ打つちやつてはおかれないらしい。

人間製作官。　私もそれを心配してゐます。あの聲が聞えますか。それ、あゝ云ふ勢です。

狂暴な騷ぎと共に、怖ろしい叫び聲が聞える。

聲。　開放して下さい。開放して下さい。自由な、廣い天地へ開放して下さい。此處は狹くつて、まつ暗で、窮屈です。

創造の神。　何處であんな事を云つてゐるのだ。

人間製作官。　「暗黒の間」へ閉ぢこめておいたのです。あんまり暴れ廻つて仕方がなかつたものですから。

聲。　この扉を開けて下さい。いつまでこんなところへ押しこめて置くのです。あゝ、苦しい。息がつまりさうだ。早く地球へやつて下さい。もう色んな仕事の計畫が出來てゐるのです。本統に、どんな珍らしい事、不思議な事、驚くべき事を、私達がその地球の上で發明するか。とても想像はつかないでせう。屹度、びつくりして目をお廻しなさるでせう。あなた方が、地球に對して持つてゐる現在の概念を、今にすつかり改めてしまはなければならないやうな、大變化が生ずるのです。私達、人間の智識に依つて、學問に依つて、火と水と土と金と木との利用に依つて。

人間製作官。　今からもうあんな生意氣な事を云つてゐるのです。あれをあのまゝ地球へ放した日には、この先きどんな事をしでかすか知れたものではありません。

創造の神。　どうしても旨く裂けないらしいのかな。

人間製作官。　裂けるには裂けるのですが、正

眞つ二つに行かないのです。手が一本で足が三本ついて來たり、足の方が二本づゝに旨く裂けたと思ふと、手が三本になつたり、胴が薄かつたり、厚かつたり、顎がぐにや〳〵になつたり、顏だけが、頭蓋骨を離れて假面のやうに剝がれたり、實に始末に惡いのです。今度こそは全く手こずつてしまひました。〔記錄官に話かけて。〕ねえ、君も一と工夫して見てくれ。どうしたらいゝだらう。

記錄官。　僕は讀んだり、書き留めたりするのなら、どんな六つかしい事でも困らないつもりだが、そんな獨創力の要る考へ事だけはどうも不得手でね。〔窓の外を見て〕丁度、よい男が來た。

創造の神。　誰だ。

記錄官。　希臘の喜劇詩人が廊下をぶら〳〵此方へやつて參ります。

人間製作官。　アリストファネス？　どれ。〔窓から覗く。〕さうだ、さうだ。あのお爺さんには何か屹度旨い工夫があるに相違ない。此處へ連れて參りませう。

人間製作官去る。

記錄官。〔窓から覗いてゐる。〕駈けて行つた。先生、今日は大分面喰つたと見えます。

創造の神。　時々はいゝだらう。彼もこの頃は少し己惚れてゐるのだから。彼は俺の一事務官だと云ふ事を忘れてゐるのだ。俺の力を自分の力のやうに思つてゐるのだ。併し妙だな。彼がアリストファネスの力を藉りやうとするのは。

記錄官。　何故です。

創造の神。　俺の人間製作の秘密を悟つて、それを地球の上に洩らしたのは、あの爺ぢやないか。

記錄官。　成る程さうでした。あれは地球の曆で耶蘇紀元前三百八十四年の出來事でした。アテナイのクリートンの家の饗宴で喋つたのだつたと記憶してゐます。

アリストファネス、人間製作官に伴はれて這入つて來る。

アリストファネス。　神樣、委しい事は今歩きながらこの男に聞きました。

創造の神。　さうか。何か旨い工夫を考へついたかね。

アリストファネス。　何んにも六つかしい工夫は要りはしません。少しの決斷力さへあれば直ぐと出來る事を、この男は、臆病で、愚圖でやれないのです。

人間製作官。　誰が君の云ふやうな、そんな亂暴な滅茶苦茶な事が、おいそれとやれるものか。

アリストファネス。　亂暴どころぢやない。至極穩當な、平凡な話だよ。

人間製作官。　少くとも、喜劇詩人だけにはね。君達は何に限らず當り前では滿足しないのだから。すべての事を、滑稽な、奇妙な、突飛な、吹き出すやうなものにして、而して高見から笑つてゐようと云ふ了見なのだ。僕がしくじつて、魔誤ついてゐるのだつて、君にはたゞおかしい笑話が一つ殖えた丈けの事なのだらう。それでこんなとてつもない奴を造り出して、この上僕の仕事をまぜつ返さうとするのだ。お爺さん忌々しい爺だ。餘んまり馬鹿笑ひをしすぎて、又しやつくりでも初めない用心をするがいゝ。

創造の神。　おい。おい。君は俺の前で喧嘩をするためにアリストファネスを呼びに行つたのか。

人間製造官。　呼んで來なくてもよかつたのです。

創造の神。　そんな勝手な奴があるものか。お爺さん。堪忍してやつて呉れ。此奴は臆病な代りに一克者なのだから。

アリストファネス。　どういたしまして。こんな男ならこそ、あなたが御調法なさるのです。いえ、何千年、何萬年、何十萬年の間、寸分違はぬ同じ型、同じ智慧、同じ理性、同じ感情を持つた人間を造ると云ふ事は、全くの根氣仕事ですからね。私なんぞにやらせましたら、三日でもう欠伸が出ます。十日目には肩が凝ります。十五日も經つと、退屈まぎらしに何か

の細工をやつて見度くなります。一と月目には辭職するか、でなくば全く違つた型の生物を拵へあげてしまつたでせう。

創造の神。　だからその用心に、俺は獨創力と云ふものは、さう誰にもやたらに與へてはないのだ。君達詩人だけに限つて與へてやつたのだと云つてもいゝ位だ。――ところで、一つ君のその力を見せ玉へ。

アリストファネス。　二つに裂けなければ三つに裂けばよろしい。三つに裂けなければ、四つ裂きにすればよろしいのです。

人間製作官。　斯んな滅茶苦茶な事が平氣で云へるのですから、詩人の獨創力なんてものは調法なものです。

創造の神。［人間製作官には注意しないで。］それで、彼等が不自由しなければいゝがね。

アリストファネス。　少し位の不自由は直きに馴れるでせう。それに、彼等の生の力は、手が一本しかないとか、足が三本あるとか云ふ風變りな姿態のために、却つて特殊、多樣な生活を產み出して、結局面白い結果を醸すかも知れません。原始の拵本以來、今日までの人間が、悉く二本の手、二本の足の所有者であつた事は、私に批評させれば、あまり單調すぎたと思ひます。

人間製作官。　君に僕の神聖な仕事を、何處までも自分の喜劇の材料にする積りな[illegible]だね。併しまあ、手や足の處置はそれでいゝとして、[illegible]な『性』の問題はどうしようと云ふのだ。君のやうな說を實行しようものなら、完全な男性、完全な女性は地球から消滅してしまう。存在するものはたゞ不健全、不平均なAndrogynosか、でなければ沒性の人間のみだ。男でも女でもない、得體の知れない化物のみだ。

アリストファネス。　心配し玉ふな。怪物なら怪物で、それ相應の結びつきをするだらう。而して屹度子供は產むよ。子供さへ產まれゝば、君の方では文句は

ないだらう。

創造の神。　其處まで話が進めば、殘つてゐる事はたゞ頸から上だけの相談だ。頭はどうする。

アリストファネス。　三分の一の頭、四分の一の頭で結構だと思ひます。

創造の神。片目や、耳なしや、鼻つかけや、奇妙な奴が出來るだらうな。

アリストファネス。よろしいおやありませんか。二つの目、二つの耳をあてがつて貰いたつて、それを正當に使用して、本統に見るべきものを見、本統に聞くべきものを聞き得る人間は、僅かしかないのですから。腦髓だつてもその通りです。その頭蓋骨の中に充たされた丈けの分量を、十分に有効に、正しく生かしえたものが、大昔から何人あつたでせう。みんな腐らすか、滅ぼすか、でなければ空つぽにしてしまつて、何んとも知れない血の滓（かす）だの、筋肉の屑（くず）だの、骨片（ほねきれ）だのをその代りに詰め込んで、それで一つぱし自分自身のえらい頭のつもりで、死ぬまで大事に頸の上にのつけてゐる人間が大部分ではありませんでしたか。あなたは、これまでは少し氣が實過ぎました。人間を除りに贅澤に、便利に狎らし過ぎました。

創造の神。　よろしい、分つた。〔人間製作官を顧て〕お い。爺さんの云ふ通りにやつて見て御覽。

人間製作官。　私は何んだか心配でなりません。

創造の神。　いゝからまあやつて御覽。何も經驗だ。

人間製作官去る。　舞臺の後方に當つて、苦痛と喜びの交り合つたような、異樣な叫び聲が聞え出す。それと共に盛んな合唱が起る。

記録官。　誕生の歌が始まりました。

合唱——

生まるゝ人の子に幸あれ。
新しき地球の住民に幸あれ。
見よ。汝等の領土なる天體は、

彼方の空、八重立つ雲の間に懸つて、
寶玉の如く、輝けり。
柔らかき土あり。
清き水あり。
火あり、風あり。
その他無數の胚種と物質に富み、眠れて、新しき主
人の來るを待てり。
行け。行きて汝等の最善を爲せ。
智惠の能ふ限り、あらゆる物質と、時と、空間を利
用せよ。
汝等の生活、汝等の文化は、
過去の如何なる時代にもあらざりし程、樂しく、多
樣にして、
特殊なる美と光輝と、眩ゆき榮光を以つて飾らるべ
し。
さらば。
生まるゝ人の子に幸あれ。

新しき地球の住民に幸あれ。

記錄官。今度の誕生の歌は、餘りに物質的に過ぎ
て、不出來のやうですね。

創造の神。誰が作つたのだ。

記錄官。人間製作官とよく連れ立つて歩いてゐま
せう。あの肥つた、顏の赤い享樂詩人ださうです。私
の考では、地球の事などを面白さうに吹聽して聞かせ
るのはこの次で、それよりも天上界の事をもつと深
く、もつと強く、生まるゝ人間の精神に刻みつけてや
るのが、必要だと思ひます。でないから、彼等は一歩
地球に足を下ろすともう自分たちは何處から來たか、
と云ふ事などは直ぐに忘れてしまふのです。

創造の神。忘れはしない。忘れたやうに見えても
時が來れば思ひ出すのだ。あの土地にいつまで居られ
るものでない、と云ふ事に氣がついた時にはな。みん
ないやでも俺を思ひ出さずにはゐられない。疑ひ、懼

れ、惑ひ、嘆き、悲しみ、初めて眞面目な、愛ひに充ちた顏で俺を探し求める。その時でなければどんな歌を聞かしたつて、迚も、身にしみて聞くものぢやない。

奥の方で、ワルツのやうな、又行軍曲（マーチ）のやうな男ましい足拍子が起る。記錄官とアリストファネスが覗く。

アリストファネス。　誕生の舞踏が始まると見える。

記錄官。　彼方の雲の中の、彼等の圓形劇場をさして、行列を作つて行く。どれもこれも何んと云ふ奇妙な姿だらう。人間製作官が心配らしい顏つきをして見送つてゐる。

アリストファネス。　さあ君、向ふの見物席へ行つて、よく見てやらうぢやないか。乾度、風變りな面白い踊りをやるよ。

記錄官。　行つて見るかな。……あなたは如何です。

創造の神。　俺は今一寸と忙しい。あの子供達が踊り草臥れて眠る時の寢床を、頓て用意して置かなければならないからな。其處らで陰府（よみ）の神に出逢ふかも知れない。出逢つたら宜しく傳へて置いてくれたまへ。

記錄官。　承知いたしました。

アリストファネス。　あなたのお仕事はいつも手際よく、きちんと極つておいでヽすね。

記錄官とアリストファネス去る。

創造の神。　――詩人と云ふ奴は可愛いものだが、さし向ひになるとうす氣味の惡い時がある。俺の事が一番よく分るだけ、何んだか皮肉を云はれさうな氣がする。――考へて見ると全く、何千億萬の人間を、俺はこの極りきつた手順でこれまで地球に送り出した。而して結局、それが何になつたらう。――併し俺は失望しない。今にきつといゝ結果が來る事を信ずる。俺が彼等に與へたものが、俺の意志通り運用され、俺が喜ぶ事を共に彼等が喜ぶ日の來る事を信ずる。その信仰が俺の力だ。さうだ、力だ。同時に愛だ。子供等もきつといつかこれが分つて吳れるに相違ない。その時が俺の仕事の成功した時だ。――【幕】

靈魂の赤ん坊

——一幕二場——

人物

河田信也。工學士、技師。

妻　光子。

土岐良子。男爵夫人、光子の姉。

木下延子。海軍少佐未亡人。

加瀨眞雄。醫學士、信也の友人。

河田家の小間使。

場所

日本東京の郊外に在る河田家の室內。

時

秋の中頃。

第一場

現代の日本の中流階級の家に於て、一と間か二間よく附屬してゐる平凡な洋風の一室。舞臺の右側と左側に一つづゝ窓が開いてゐる。右側の窓の下には、大形な書き物机。椅子。洋書の詰まつた書棚。辭書の廻轉架などがある。後の壁には、ヘーグ平和宮の懸賞第二等當選建築設計圖とパンテオンの古びた寫眞の額が二つ懸つてゐる。左側の窓の下にはレースのきれをかけた小さい卓を圍んで、三脚の椅子がある。その後の壁に添うて皮張りの長椅子がある。壁には風景畫の油繪が一枚懸つてゐる。長椅子の上には派手な刺繡の小布團が置いてある。長椅子と卓の間には唐木の花臺があつて、數本のダリアを投げ込んだ圓い瓶が載せてある。これ等の家具裝飾に依つて、この部屋の右側は主人の書齋として役立ち、左側は一寸とした客間代りに使はれてゐる事が分る。入口は正面の書棚と長椅子との間についてゐる。その他にも一つ、奥に通ずる戸が右側についてゐる。時は午後。光子が正面の入口から這入つて來る。二十七八位、細面の美貌。大きな丸髷に結つて、外出の服裝をしてゐる。一二の雜誌と共に、一封の手紙を持つて來て、それを机の端に置く、それから書棚の上の置時計を見る。

光子。——まだ一時を打つたばかりだつた。（右側の入口へ近づいて奥へ聲をかける）あなた、停車場へお迎ひに

ゐらして下すつて。え、私？　もういつでも出かけられますわ。慥か三時十五分でしたのね。姉さんの汽車は。これからヱ支度をなすつたらゆつくりですわ。車なら十分もかゝりはしませんもの。――あ、それから、お手紙が參つてゐますよ。

河田。〔内から聞く〕誰から。

光子。木下さんの奧さん。〔もう一度手紙を注意深く見る〕東京へ出てゐらしたのね。小石川のお伯母樣のお宅からのやうですわ。

河田が這入つて來る。手紙の封を切つて讀む。

河田。うむ。

光子。あちらはもう片づけていゝの。

光子が奧へ行くと、河田はその後を一寸と見送つて、又手紙を繰り返して見る。そして當惑らしい、不機嫌な顏をする。光子は製圖の器具などを取りまとめて、這入つて來る。

光子。何の御用事なの。

河田。――子供の事について相談し度い事があつて、逗子から出て來たのださうだ。

光子。――お子さんへ、いへ[illegible]今日はになつたとか仰しやつた、あのお子さんの話ね。

河田。だらうね。それで、今日うちへ訪ねて來るんださうだ。

光子。今日？　何時頃でせう。

河田。遲くも二時までには行くから家にゐて呉れと云つて來たのだ。

光子。おや今にゐらつしやいますわ。姉さんの方もそのまゝには出來ないし。――生憎なのね。

河田。どうしたものかな。

光子。ようござんすわ。停車場へは私一人で參ります。病院の方の手筈はすつかりよろしいのでせう。

河田。その方は大丈夫さ。昨日加瀨に逢つて手抜かりなく打ち合はせてあるのだ。加瀨も行つて呉れる。他に病院から看護人が二人迎出ひに來る筈だ。それに加瀨と姉さんとは、もとはあんな親しい間柄であつたのだし――姉さんはたゞ汽車の裡だけ無事に病人を運

れて來さへすれば、停車場にはすべての準備が待ち受けてゐる譯だ。

光子。　さうね。それに人も隨いて來るのですし、停車場からは直ぐと病院へ行つてしまふだけだし、私一人で結構ですよ。

河田。　併し、僕としてはそれではすまないやうだな。今度の姉さんはたゞ遊びに來るのぢやない。あんな不幸な病氣になつた兄さんに付き添つて、片時も氣のゆるせない、旅行をして來なさるのだから、出迎へ位しなくちや餘り冷淡に見えるね。

光子。　あの姉さんがそんな事を氣にするものですか。それに、兎に角こちらは内輪同士ですけれども、木下さんの奥さんはさうは行きませんわ。幾らあなたの亡くなつた親友の奥さんで、立ち入つたお世話をしてあげてゐらつしやる人にしたところで、矢張り他人ですもの。ゐらつしやる事が分つてゐる以上、留守にしては失禮ですわ。

河田。　ぢやどうだ。僕が停車場の方は受け持つからお前が家に居て逢つてやつて呉れ。

光子。　私に延子さんと二人つきりで逢へと仰しやるの。

河田。　いけないのか。

光子。　えゝ。

河田。　何故だらう。

光子。　――何故と聞かれると、私にも何故だか本統は分かりませんの。たゞお互ひに逢はない方がいゝやうな氣がするだけですわ。

河田。　――あの女は學問もあるし、思想上の事や、婦人問題などにも、新しい理解を持つてゐる。決して世間の未亡人型ぢやない。懇意にしさへすれば、お前とはいゝ友達になれると思ふがなア。

光子。　――さうね、どこから見たつて軍人の未亡人つて柄ではないのね。何處か違つたところのある人ですわ、あの人は。男のやうに自由で大膽で、それで

娘見たいにお優しいのですもの。── でも、あの人のいゝところがこれ程分つてゐながら、私にはどうしても仲よしになれさうもありませんわ。

河田。 蟲が好かないとでも云ふのだらう。

光子。 もちつと特殊な感情ですわ。──さあ、何んと云つたらよろしいのでせう。女同士の精神的嗅覺とでも云ふものがあつて、二人の間を邪魔するのね。男の方には分らないでせう。こんな心持は。

河田。 さう。そんな會話になると、お前たち女は皆んな詩人だからね。──併し一體どんな込み入つた感情が、お前とあの人との間にあると云ふのだらう。

光子。 あなたでも誰でもよろしいの。誰か其處に一緒にゐる人があればそれで紛れます。でなくつて、二人つきりだと妙に怖ろしい、息の詰まるやうな氣持になつて來るのです。何か始まりさうな氣持になるのですわ。而して、お互ひに何か知ら嗅ぎつけよう、覗かう。隠してゐるものを見つけ出さう。何を着て、何を食べて、何時に起きて、何時に寝て、又寝る時にはどちらを向いて眠るかまでも探り出さうとする、奇妙な鬪仕合が始まるのですわ。──女同士のお附合なんて、まあ、大概そんなものなのでせうけれどもね。

河田。 お前達の間柄がそんな風だとは僕は今日まで氣がつかなかつた。ぢや、僕が木下の死後あの家の事を引き受けて世話してゐる事を、お前は乾度よくは思つてゐないに相違ないね。併しその間に何かの誤解があつては困る。知つてゐる通り、木下と僕とは思想も、傾向も違つてはゐたが、子供の時からの親友だつた。僕が大學を出た時には、あの男はもう海軍中尉で威張つてゐた。結婚もしてゐた。ところで、しよつちゆう船の上で暮らしてゐたので、家族に關する面倒な相談事はみんな僕へ持ち込んで來た。そのうちに、あの歐洲の大戰爭だ。あの男は少佐で觀戰武官として英國の軍艦に乗つてゐる時に、敵の水雷にやられて、九百人の英國人の中の唯一の日本軍人として戰死した。

従つてこれまでの行きがゝり上、家の後始末やら、殘された家族——未亡人の生活上の相談相手やら、僕が立ち入つた世話をして來てゐるのは事實だ。併しそれは結婚する前からお前の知つてゐた事だ。ね。さうだらう。たゞそれだけだ。お前の知つてゐる以外の關係はその間に何んにも存在してはゐないと云ふ事を信じてくれなくちや困る。

光子。 ——なりたけ、さう云ふ風に信じようとしてゐますの。

河田。 ——厭な女だな。今日に限つて、何んだつて、そんな變なことを云ひ出したのだ。

小間使が這入つて來る。

小間使。 木下樣の奧樣がゐらつしやいました。

光子。 さう。此方へお通し申してお吳れ。それからね。爺やを車屋へやつてね、上野まで車を直ぐと云つてお吳れ。あゝ、一臺でよろしい。私だけだから。

小間使去る。光子好意ある微笑で良人に近づく。

光子。 あなた、心配なさらなくともよござんすわ。よしんば私の胸の中に、何か思つてゐる事があるにしたところで、この場であの人に無作法な言葉を使つたりする事のないだけは受け合ひますから。

河田。 ふん。僞善者だからな。

光子。 いゝえ、私のヂグニティのためにですわ。

延子が這入つて來て夫婦に挨拶する。光子よりは二つ三つ年上。すぐれて脊が高い。彫刻的な立派な顏をしてゐる。服裝は目立たないけれども高雅で、手に黑い皮のバッグを持つてゐる。

光子。 よくお出かけになりましたのね。さあ、どうぞ、こちらへ。

二人は左側の卓を挾んでさし向ふ。

河田。 僕は一寸失禮します。

河田は右側の机に向ふ。

光子。 今度はお坊ちやまはお連れになりませんでしたの。

延子。 いゝえ、連れて參りました。今日は伯母と

動物園へ行くんだつて騒いでをりますの。

光子。でも、まあよくお懐きになりましたわ。お母様はたしかあなたのお從姉さんでゐらつしやいましたつけね。

延子。從姉の二男で御座います。連れ合ひが九州の方へ勤めてをりまして、丁度私が長い逗留に參つてをりました時に生れた子供でしてね。赤ん坊の時から手がけた事のあるせいか、他人の子のやうな氣持が致さないので御座いますよ。

光子。矢張り、御縁が深かつたので御座いますわね。お幾つにおなりでしたか知ら。

延子。もうあなた、六つになりますの。早生れですから、來年の四月から學校で御座いますの。

光子。もう、そんなにねえ。

延子。それにつきまして、田舍の方の學校は、萬事につけて行き屆きませんし、第一、一緒に遊ぶやうな子供からしてないと云ふ有樣ですから、思ひきつて、こちらの小學校へ上げた方がよくはないかと思ひましてね。そんな事もいろ／＼御相談いたし度いと存じまして。

光子。お子さんをお持ちになりますと、今からもう何かと御心配がたえませんのね。それがまたお樂しみでも御座いませうが。――その點へ行くと、私などは呑氣で御座いますわ。

延子。あなたは、お子さんが欲しいとはお思ひになりませんか。

光子。――さうで御座いますね。欲しくないとは思ひませんけれども、他人の子供を貰ふて育てやうの、養子をしようの、と云ふ氣にはまだなれませんの。――人情が薄いので御座いますわね。

延子。否え。子供を貰ふの、養子をするのと云ふ事は、まあ云つて見れば、年取つてからの淋しい、便りない境遇を、その子供から慰められようとか、生活上の不安を免れやうとか、大抵、利害の打算から來た

事で御座いますからね。

光子。　あら、私はそんな風に申上げたのでは御座いませんでした。

延子。　私はなんだか、そう云つてあなたから笑はれさうな氣がいたしましたの。

光子。　それほど私、人が惡くも御座いませんのよ。

二人は輕く、皮肉らしく笑ふ。小間使が這入つて來る。

小間使。　お車が參りました。

光子。　今直ぐ行くから、待たしてお置き。

小間使去る。

延子。　お出先きで御座いましたのね。

光子。　停車場まで一寸失禮さして頂きます。この三時過ぎの汽車で、姉が仙臺から出て參りますものですから。

延子。　まあ、お姉さまが。

光子。　たしか、あなたとは女學校の時分同じ組(クラス)であつたかと思ひますが。

延子。　一級上でゐらつしやいましたの。でも、よく存じてをりますわ。お美しくて、おやさしくて、それで、いつも優等でゐらしたのですもの。下の級(クラス)のものはみんなお姉さまを崇拜してゐましたのですよ。

光子。　姉は、小さい時から私とは違つてをりました。誰にでもいゝ人だと申されました。でも、運には勝てないと見えまして、氣の毒ですわ。

延子。　失禮で御座いますが——何かお不仕合せにでもお逢ひになつたので御座いますか。

光子。　一口に申せば、まあ不幸な結婚を致したので御座いますね。生れた子供はみんな後から〳〵と亡くなりますし、おしまひには、とうと連れ合ひが怖ろしい病氣になりましたの。

延子。　まあ、お氣の毒で御座いますね、御病氣が一番いけませんわ。

光子。　それもあなた、急に氣違ひになつたなんて、——本統に、大きな聲では申されもしないやうな、い

やな事で御座いますわ。

延子。　まあ、何んと云ふお不仕合せな事で御座いませう。

光子。　それに、近頃はひどく暴れ出しましてね、家にも置けなくなつたものですから、丁度宅の友達で加瀨さんと仰しやる方が、その方の專門でゐらつしやいますので、今日連れて參つて、その方のお世話で病院に預ける事になりました。

延子。　そんな事とはちつとも存じませんで、私は大變お邪魔をいたしましたわ。――では、又その內出直しまして……〔立ちかける。〕

光子。〔留めて。〕　否え。どうか、そのまゝに。ちつとも御心配は御座いませんの。宅は參りませんのですし、姉も直ぐとこちらへ引き取りますのですから、今日は御ゆつくりなすつて、姉にも逢つてやつて下さいまし。〔河田を顧みて〕　ねえ、あなた。

河田。　あゝ。それがいゝだらう。それからね、これを加瀨にやつてくれ。〔書いて[illegible]て行つて受け取る。〕後からでも僕が行つて見るつもりだが、その前に加瀨が來て吳れるかも知れないから、そしたら家で待つてゐる。これは晚飯に呼んだのだ。支度はいゝだらう。

光子。　よござんすとも。〔延子を顧る〕　あなたもどうぞお殘り下さいましな。久しぶりで皆さんで晚御飯を頂きませう。

延子。　有り難う御座いますが、私は又いづれその內に。

光子。　あら、そんな事を仰しやらなくもよろしいぢや御座いませんか。ね。どうぞ。私はおや遲くなるといけませんから、一寸失禮いたしますわ。〔河田に向つて〕行つて參りますよ。

河田。　姉さんによろしく申上げて吳れ。

延子。　御免遊ばせ。

光子去る。延子は暫くその後を見送つてゐる。

延子。　光子さんは、みんな知つてゐらつしやいますのね。

河田。　僕等の事を？

延子。　え丶、私達二人の間の事を。

河田。　そんな事はない筈だ。——假りにさうだとすれば、あなたの今日のやり方は稍冒險だつた。——

（この會話の間に、延子は机の傍のスツールに坐る。）

延子。　何んだつて訪ねてなんぞ來たと仰しやるのね。

河田。　さう惡く取つちやいけない。併し、用事があれば僕から出掛けてもよかつたのだし。——

延子。　——二三年前ほどの御親切がおありになればね。——いつだつたか、二度も出した手紙の御返事だつて、私はまだ頂かなかつたのですよ。

河田。　あれは失敬した。——丁度面倒な調べ物だの、急ぎの設計だのがあつて、その方へ打ちはまつてゐたものだから。全くあの頃は眠る時間もなかつた位ゐだつた。——

延子。　全く、××省技師と云ふやうな肩書や、社會上の位置や、それにつれてお忙しくなつたあなたのお身體は、戀人と云ふやうな役廻りには、だん／＼不釣合になつてゐらしたのね。

河田。　久しぶりに逢つて、そんな厭味は云ひつこなしにしよう。——とにかく、尻つぽを押へられさへしなけりや、何も周章てる必要はないのだから、お互ひに用心しなくちや損だ。

延子。　泥棒見たいにね？　歩くにも前後を見廻して、人目にふれないやうに、氣づかれないやうに、こそ／＼と歩けと仰しやるのね。——本統に、何年と云ふ間、私はそんな卑怯な生き方をして來たのでせう。——

河田。　——卑怯な生き方？　妙な事を云ひ出しましたね。

延子。　——あなたは二人の通つて來た路を、正しい路だと今でもお信じになられて。

河田。――信じなくちやいけない。それを信じないのは、二人の過去を否定する事だから。

延子。――私には、信じられなくなりました。――それにしても、良人でない良人、妻でない妻、法律と因習を超越した自由な愛と云ふやうな言葉が、何んと云ふ魅力に充ちた響だつたでせう。世間並の結婚の無意味な事や、法律も社會道德も、決して自分達の味方でないと云ふ事を、少しでも感じる機會のあつた女達に取つては。殊に私の場合にそれを信じる事は、渴ききつたものが、冷たい水を見つけたやうなものでしたわ。――でも、みんな間違つた事だつた。あなたの方のお仕事で云へば、たゞ美しい線や形ばかりの構圖で、この現實の土の上には、とても建てられない夢の塔を建てようとしたに過ぎなかつたのでしたわ。

河田。――さう、今の社會道德的力學の上からは、困難な建築に相違ない。――併しその夢の塔が、少くとも僕等の世界には完全に建てられたのだ。今日まで八年の間、築かれたまゝの美しさを保つて來たのです。との結婚が持ち上つた場合ですら、その塔の安定には何等の動搖もなかつた。

延子。――光子さんをお貰ひになる事に反對しなかつたのは、あなたの社會上の地位をしつかり固めてあげ度いためばかりでしたの。光子さんのお父樣はあなたの上官でゐらした。あの省内の事は、あのお父樣の思はく一つでどうともなつたのですからね。

河田。――併し、それが普通の女に出來る事でせうか。――あなたの寬大と愛は、その塔を一層魅力のある驚異にした。僕は今後どんなすばらしい建築に成功するとしても、その塔以上の誇りはないと信じてゐます。

延子。――あなたは私を嬉しがらせるお積りなのね。そんな昔話をなすつて。――生憎くと、そんなお世辭はもう効能がなくなりましたの。――すべての間違ひのもとは其處から來てゐます。あの時、利得づく

であんなさもしい妥協をして來たのがわるかつたのですわ。

河田。　延子さん。あなたは何を云ふためにわざわざ今日やつて來たのです。そんな泣き言を並べて、自分自身を卑しくするためですか。――ふん。あなたのやうでもない。

延子。　――私の用事？　さう、私はそれだけを云へば用事が足りるのでしたわね。――御免なさい。でも、まあ、どんな用事だとお思ひになつて。

河田。　――分るものか。

延子。　――お怒りになつたのね。――私は私の子供を取り戻しに上つたのですわ。

河田。　――？

延子。　――嘘から嘘の中に育つて來た子供を、私の本統の子供にし度いのです。

河田。　――だから、先刻、子供の話ばかりしてゐたのだ。

延子。　あれは光子さんの方からお聞きになつたのですわ。あの方は、若しかしたら、あの子供が私の從姉の子供でないことを、疾つくに氣がついてゐらつしやるのかも知れない。

河田。　そんな筈はない。――そんな筈があるものか。

延子。　――否え、私は知つて頂き度いのですわ。從姉の子供と云ふのは皆んな嘘で、あれは、あなたと私の中の子供であり、あの子供の父親はあなたで、母親は私だと云ふ事を、はつきりと光子さんに知つて頂きに參つたのです。

河田。　――まるで向ふ見ずだ……一體また何があなたにこんな突飛な事を思ひ立たせたのだらう。

延子。　――あと六ヶ月すると、あの子供は小學校へ上るのを、あなたは思ひ出して見た事もおあんなさらないのね。

河田。　――それで。

延子。——光子さんも世間へはどんな顔もついてゐられますわ。戸籍面だけはどうする事が出來ませう。あの子供は田舍の乳母やの娘の私生兒として、學校へ上らなければならないでは御座いませんか。あの無邪氣な、可愛い額に、一生消えぬ運命の烙印（やきいん）が押されるのですわ。——田舍娘の私生兒！　それは餘んまり殘酷な名前です。——ことに、小學校へ上ると云へば、子供たちの可愛い、社會的生活の第一歩ですもの。その時からそんな烙印に虐げられて行くあの子供を、あなたは可哀想にはお思ひになりませんの。

河田。　可哀想だの、可哀想でないのと、そんな事は論ずるまでもない事だ。——で、つまりあなたはどうしようと云ふのです。

延子。——どうするつて、それはたゞ、あれは俺の子供だ、あの子供の父親は俺だ、とあなたが世間と光子さんに向つて仰しやつて下さればいゝのです。

河田。——法律的にあの子供を認知しろと云ふのですね。すると、あの子供の母親にはあなたがなるのだと思ひます。——僕が父親になる時には、あなたは母親にはなり得ない。あなたが母親である場合は、僕は決して父親にはなれない譯だ。——法律的に云へばですよ。

延子。——私達は結婚してゐないのですからね。——あなたは私の良人でなく、又私はあなたの妻でもないのでしたからね。——ほんの赤の他人に過ぎないと云ふ事を、今日まで思つても見なかつた。——（泣く。）

河田。——あなたの今日の論法は、徹頭徹尾、淺薄な道學者の口吻だ。——今更そんな事を云ひ出す位なら、どうしてあなたは僕と結婚しなかつたのだ。あの子供の生れた六年前に、思ひきつて。

延子。——

河田。　あの時なら、僕はまだ獨身だつたし、あなたの良人は亡くなつてゐた。——法律の上では、二人の結婚を妨げるものは何もなかつた筈だ。

延子。――法律があの時何になつたでせう。それ以上のもつと、もつと力强いものが、あの時の私を縛りつけてゐたのは、あなたゞつて分つてゐらした筈です。

河田。――未亡人と云ふ位置ですね。それは。

延子。――私の場合は特別ですわ。名譽ある戰死將校の妻と云ふために。――あらゆる要求、あらゆる期待、壓迫、强制。これまでの日本の婦人道德が標準とした非人間的なきびしい束縛が、その新しい名前と共に洪水のやうに私を押し包みました。――私は大きな聲をして笑つてもいけないのです。公園にも、芝居にも、音樂會にも、この世の快樂のあるところへは、何處へも近づいてはならないのです。お墓へでも詣る時の外は、町中さへうつかり通つてはならないのです。云つて見れば、家族も親類も、お友達も社會も、よつてたかつて、私に注文を出すのですね、――いつも青白い顏をして、泣いてゐてほしいと云ふのですわ。普通の未亡人顏位ではすみませんの。何んにしろ、亡くなつた人が、えらい戰死者なのですから。――私はいつまでもその忠節と名譽を尊敬して、私がその人の妻であつた事に、奴隷的の感謝と滿足を示さなければならないのです。――それで私の知つてゐたその人は、まあどんな人だつたでせう。海と陸とで一年の大部分は、私と別々に暮す人ですわ。たま〳〵家に歸つた時には、朝から晩まで正體のない醉ひ拂ひですわ。同じやうな仲間がより集まつて、私の家は下等なバァーになつてしまひます。さうしてあの人の目には、最寄りの寄港地の娼婦と自分の妻との間に區別がないのです。

河田。――軍人の妻と云ふ型に鑄込まれるには、あなたは餘り多くのものを持つてゐたのだ。併し新たな未亡人としてのあなたは、周圍と社會が要求する以上に、申分なく振舞つた。あなたを見るほどのものは、常に喪にゐるやうな、つゝましい隱遁生活に同情しないではゐられなかつた。――あれはどうしたので

す。單なるお芝居としては餘り自然すぎましたね。

延子。——お芝居？　そんな手數のかゝつた眞似をした事は一度だつてありませんわ。私はたゞ自分の好き勝手な事をしてゐたゞけでした。我儘一杯に振舞つたのですわ。すると周圍の人達が、それをめい／＼自分の幻影に當てはめて、いゝ人にして吳れますの。勝手な事をすればする程、私はだん／＼と申分のない、立派な未亡人になつて行きましたの。お分かりになつて？　〔皮肉らしく微笑する。〕

河田。——芝居以上の魔術だ！

延子。——でも、種もなんにもありはしませんわ。良人の死を聞いた時の私は、出獄の命令を受け取つた囚人見たいなものでした。鎖はきれた。お前達はやつと自由になつた、と手にも足にも叫んで聞かせ度い氣がしてゐながら、一方では疲れきつてゐましたの。心の髓まで何んと云ふ事もなしに疲れきつて、遠くまで行く勇氣もなければ、仲間と笑話をする威勢もなく、たつた一人、そこいらの捨石に腰かけて、手足のない跡を撫ぜ廻してゐるやうな、そんな心持が、私を陰鬱に孤獨にしましたの。誰に逢ひ度くもなければ、口を聞き度くもない。たゞ、おつとして、今までの可哀想な自分のために、泣いてやり度かつたのでした。それで千駄木のもとの屋敷に、さうやつてたつた一人で世捨人見たいな暮しをしてゐましたの。すると、皆さんが感心して吳れましたわ。殊勝な心掛けだと云つて。天王寺の墓地は、私のもとから好きな散步所でせう。近くはありますしね。運動がてら時々出掛けますと、それが又お墓詣りになつて大層評判がよろしう御座います。何んでもが斯んな工合ですわ。頭痛持ちですから、束髮も心なしで、簡單にぐる／＼卷にしておきますと、周圍の人達には、如何にもそれが未亡人らしい頭の結ひぶりに見えますのですね。着物にしても、ほら、私はいつも斯んな黑つぽい、無地もの見たいなものばかり着てゐますでせう。何故だかお分りになつ

て？　私のこの青白い顔色と、並外れの大きな眼と、また、こんな棹見たいな手足を釣合よく見せやうとするには、どうしても黒つぽい、地味なものでなければいけませんの。私のこの好みは、よその奥様方のきらくした、立派なお召物よりかも、何倍か念入りなお洒落だと云ふ事が、誰にも分かりませんの。姿見の前で滿足して、默つてすましてゐさへすれば、私の着物は、そのまゝ亡くなつた人に對する貞節の象徴になつて行つたのですものね。——奇妙でせう。

河田。——あなたと云ふ女は、怖ろしい人だ！

延子。——

河田。どんな事をしようが、あなたがしさへすれば、それは悉くいゝ事になつた。美しい事になつた。少くとも、さう思はないではゐられないやうに、すべての人を魅し誑してしまつた。——あなたの身體からは女性の威力ある神秘が發散してゐたのだ。——（かき抱からとする。）

延子。——いけません。いけません！

河田。——？

延子。——光子さんか、私か。はつきりお選びになるまでは。——

河田。さう云ふ事は、光子を離別して、改めてあなたと結婚しろと云ふのですね。

延子。——二人があの子供の父母と呼ばれるためには、それが一番正しい手順ですわ。

河田。——そこまで突き詰めた話になつて來れば、問題はもつと根本的に考へて見る必要がある。——あの子供が何故私生兒ではいけないのです。

延子。——よくもそんな事が——

河田。——まあ、落ち着いて——私生兒は可哀想だと云ふのは、感情問題に過ぎない。人間として立派なものになりさへすれば、私生兒だらうが、何だらうが差し支へはない筈だ。——少くとも今の日本では、法律にしろ、宗教にしろ、また社會道德にしろ、私生

見に對して、外國で見るやうな苛酷な埒を設けてゐるものはないのですからね。公民として社會に立つ上に、何等の故障もある筈はない。昂然と歩いて行けるのです。また精神的に考へて見るならば、一層自由ぢやありませんか。創造主の大きな目の前には、一人の子供は誰でも同じ一人の子供です。その父母の結婚指輪の有無なんて事が、どれほど問題になるだらう。

延子。――五六年前の私でしたら、そんな議論にも感心したでせうね。――今の私には、それは男性の殘酷な理論だとしか思へませんわ。卑しい快樂のみを知つて、創造主の神秘な働きを、自分の身内に感じる機會の永久にない、父親の逃げ口上だと思ひますわ。――本統に子供を愛する母親には、理論はありません。そんなむごい事を平氣で云ふ人をでも、お前のお父樣ですよ、と云つて聞かせたい。――云つて聞かせなければならないのです。

河田。――分つた。分つた。あなたの心持ちは分つてゐますとも。要するに要點は一つだ。あの子供が僕の子供になればいゝわけだ。

延子。――私の子供にもならなければいけません。

河田。――兎に角、光子には子供はない。それは醫者も云つてゐることだから、結局僕の相續人になるものはあの子供より外にはない。適當な時期に、責任を以つて處置すると云ふ事を改めて約束しやう。ね。それでいゝぢやありませんか。何も今急にどうこう云つて騷ぎたてなくもすむ事だと思ふ。

延子。――病院の最後の床にだつて、親子の名乘り位は出來ると思つてゐらつしやるのでせう。――あなたは、たゞ世間がお怖いのね。光子さんがお怖いのでせう。いゝえ、光子さんの後にある社會の勢力がお怖いのでせう。

河田。――社會に生きてゐる以上、僕は勿論、社會的に輕蔑されたり、葬られたりし度くはない。

延子。――その癖、子供や私の葬られてゐる事は、何んとも思つては下さらない。――

河田。――とにかく、僕を信じて下さい。そして暫く辛抱して下さい。適當な時期まで。ね。僕は決してあなたを失望させはしない。

延子。――では、それまで。――あなたの仰しやる適當な時期まで、私はどうやつて待つてゐたらいゝのでせう。あなたが光子さんや、世間を胡魔化して行く通りに、私にも旨く胡魔化してゐろと仰しやるのね。――

河田。――何んにも胡魔化すことはありはしない。たゞ今まで通りにやつて行きさへすればいゝのです。

延子。――あなたにはお分りにならないのですわ。――私の今の心持が。何んにも分つてゐない。――私には今までのやうな生活はもう一日も我慢出來なくなつてしまつたのです。

河田。――六年間、あれ程上手に空つとぼけてゐられた人がね。――今日のあなたは余程どうかしてゐる。

延子。――そんな皮肉を仰しやるところを見てゐると、あなたと云ふ人が、初めて分つて來るやうですわ。

河田。――延子さん。――何處まで僕を侮辱すればいゝのだ！

延子。――侮辱されてるのは私の方ですわ。今日までの事を考へて見ると、みんなあなたの都合のいゝやうに、都合のいゝやうにと計り歩かせられて來ました。ありもしない夢の塔の話に魅せられて。――そして今はどうでせう。私といふ女は、父なし子を抱いてうろついてゐる、其處いらのみだらな女と何んにも違はないものになつてしまつた。――（泣く。）

河田。――延子さん。

延子。――いゝえ、もう諦らめます。この事につ

いては、あなたとは決して御相談いたしません。

河田。――

延子。――

河田。〔近づいて、優しく。〕思ひ直して呉れるのですね。

延子。――〔皮肉に。〕さう都合よくは參りませんわ。

河田。――まさか――あなたは？

延子。――私がどうするか御心配になりますの。

河田。――

延子。私は光子さんにお目にかゝりますわ。――何もかも直接に光子さんにお話しますわ。

河田。――畜生！

河田は摑みかゝるやうな様子をして睨みつける。延子は遠く離れて卓（テーブル）を楯に取る。

延子。あなたはもう微塵も私に愛なんぞは持つてゐらつしやらない。――

河田。――誰にあなた見たいな女が愛されるものか。それでまだ男の愛が得られると思つてゐるなら、圖々しい話だ！

延子。――それで、安心して二人は喧嘩が出來ますわ。

河田。するなら勝手になさい。併し僕はお相手は御免だ。

この言葉の間に光子が這入つて來る。

光子。――大きな聲で、まあ何を云つてゐらつしやるの。〔延子に向つて〕やつと歸つて參りました。

延子は默禮したまゝ、窓の方を向いて、卓の前に座る。

光子。〔河田に近づいて〕どうなすつたのよ。

河田。〔狼狽しながら。〕うん。何んでもないのだ。――一寸意見の相違があつたのでね。――小學校教育と云ふ事に關して。――兄さんはどうだつた。姉さんはゐらつしやらないのかい。

光子。――汽車に揺られたりしたせいでせうね。兄さんの工合が少し御惡う御座んすの。――いづれ

子を見た上で參りますつて。

河田。――さうか。では延子さん。今の問題は、その內またゆつくり御相談する事にしませう。急ぐ事ではなし、云はゞ、來年の四月までに極めればいゝ話なのですからね。今明日中に僕から小石川のお宅の方へ伺つてもよろしいし――

延子。〔河田へは答へないで〕光子さん。二三十分私とお逢ひ下さいませんでせうか。

光子。――何か私に御用事でも――

延子。――是非お話いたし度い事が御座いますの。――あなたに取つても、亦私に取つても、この上ない大事なことにつきまして。

河田。――光子。木下の奧さんは、息子さんの就學問題に關して、今日は非常に興奮してゐられるのだ。――つまり東京へ出さうか、矢張り田舍がいゝかと云ふ點で――ね。だからお前もその積りで、そんな話はこの次ぎにして頂いた方がいゝ。

光子。――?

河田。――それに、姉さんも今に病院から見えるとすると、萬事に不都合ぢやないか。

延子。――光子さん。あなたの旦那様は、お出來になるなら、私を今目の前で啞にでもし度い位に思つてゐらつしやるのですわ。

光子。――よろしう御座います。私はあなたのお話を伺ひますわ。

河田。〔光子へ近づいて、優しく、訴ふるやうな調子で〕どうしたのだ。お前は。延子さんと二人つきりで逢ふ事をあれほど慴れてゐた癖に。――

光子。――慴れてゐたその時が、とうとう來たのでせうね。――

河田。――

光子。さう。さう。あなたは加瀬さんが待つてゐらつしやいますの。直ぐ來て下されば病院にゐますからつて。

河田。——ふん。どちらが癲癇病院だか分つたもんぢやない。

　河田去る。

光子。——何をあんなに向つ腹を立てたものでせう。おかしな人ですこと。——さあ。どうぞ、こちらへおかけ下さいませんか。

　二人は長椅子に並んで座る。延子は窓に近く、光子は入口に近く。

延子。——斯うやつて座つてゐますと、私達はずつと仲よくして參つたお友達見たいですわね。何もかも打ち明け合つた——おや、どうしてお笑ひになりますの。

光子。若し、そんな風に見えますなら、隨分、皮肉な矛盾だと思ひましたの。ふだんの私達に比べまして。——ねえ。さうはお思ひになりませんこと。

延子。——全く。これまでの私達は、蠍のやうな、よそ〳〵しい御つき合ひしかいたさなかつたので御座いましたね。——でも、何故そんな風になつて參つたのでせう。二人はどうしてお友達になれなかつたのでせう。——お考へになつて見た事がおありになつて。

光子。——あなたの今日のお話を伺ひさへすれば、それは自然と分る事だと思ひますわ。多分。

延子。——なら、申しませうか。——私達二人は競爭者で御座いましたから。

光子。——競爭者！

延子。——競爭者は決して心から打ち解けたお友達になれないもので御座いますわ。——殊に男の愛を目當にいたしました場合には。

光子。——男の愛の競爭者で御座いますね。

延子。——えゝ、一人の男の愛を、二人で爭はなければならなかつたのでした。

光子。——それで、あなたと私と、私と良人と、また良人とあなたの間にあつて、長い間、私を迷はしてゐた不思議な謎が、やつと解けたと云ふものですわ。——本統にそれだけはあなたにお禮を申さなけれ

ばなりません。同時に私ははつきり申上げます。――私が河田の妻である間は、その競爭には何處までも私が勝利者です。この上餘計な手出しはして頂き度くない――と。これで、あなたと私とのお話合ひは、簡單にすむわけで御座いますね。

延子。――否え、決して。勝つも負けるも、あなたはまだ何んにも御存じないのです。――私の申上げる事を、おしまひまでお聞きにならなければいけません。

光子。――良人が他の女との間に持つてゐた秘密を、女房の私が、殊に當の相手のあなたから、これ以上聞かされるのは、餘り醉興すぎはしないでせうか知ら。

延子。――あなたは意地を張つてゐらつしやるのですわ。――聞き度くつて〳〵堪らなくつてお出でのですわ。――聞き度くつて〳〵堪らなくつてお出での癖に。私にはようく分つてをります。一から十まで、どんなに細かく話さしたところで、あなたの耳はたんのうなさらない。聞いてお苦しいだけ、妬ましいだけ、腹立たしいだけ、尙とお聞きになり度い筈ですわ。

光子。――さう仰しやると、あなたの前に跪づいても聞かして頂かなければならないやうですことね。――が、私はさうはいたしませんよ。それほど聞きたければ、あなたのお相手からだつて、聞かれるお話ですものね。

延子。――あの人が、あなたに本統の事をお話するとお思ひになりまして？　私のするやうに、何もかも打ち割つた話を。――

光子。――

延子。――さうする事は、あの人に取つてまあどんな事でせう。假面を脫ぐ事ですもの。裸かになる事ですもの。立派な目鼻立や、紳士らしい態度の下に、旨く隱されて來たあの人の噓と胡魔化しが、みんな明るみへ曝される事ですわ。――あのずるい、世間ばかり怖がつてゐるエゴイストに、どうしてそんな、正直な眞似が出來ませう。もし、それが出來ると思つてゐら

つしやるなら、あなたは、あの人を何んにも知つてゐらつしやらないのです。

光子。 ——知る、知らないは私の問題で、あなたには何の關係もおあんなさらない。——とにかく、私でしたら、自分の愛してゐる男を、人の前で、ことにその男の女房の前で、そんな風には申しませんね。——

延子。 ——愛してゐる男？

光子。 ——

延子。 〔皮肉に笑つて〕 愛してゐた男、とそれは過去完了で申上げなければ嘘で御座いますわ。

光子。 ——延子さん。

延子。 ——火は消えてしまひました。三十分前のあの人の一言で、六年間の夢の燃えさしは完全に灰になつたので御座いますよ。

光子。 ——六年間と云ふと——

延子。 ——私はあなたより三年早くあの人の妻だつた譯ですから。——

光子。 私の結婚には、[illegible]のはなかつたのだ。

延子。 ——それがあなた計りの悲しみでせうか。——すべての女、戀をする人間の最後の嘆きはみんなそれですわ。——夢を見た、見せられた、たゞ、それだけ。——神聖らしい幻影をかけた情熱に魅せられ、うつとりしてゐる間に舞臺は變ります。——大事なものはその後に參ります。本統に神聖なものが參ります。人類の第一義的の義務と奉仕が現はれて來ますのですわ。——子供と父母の關係が。

光子。 ——子供！ 子供？

延子。 その子供に依つて、人間は、人間同士の神聖な關係を初めて知るので御座いますわ。その時には、男も女も、男以上、女以上のものになります。次の時代の嚴肅な責任者として、天から撰ばれたもので御座いますわ。——でも、あなた方のやうな子供を持たない女達は、どんなに美しからうが、聰明であらう

が、又當然であらうが、この誇りだけには與かる權利がないので御座いますね。

光子。　――では、あなたには、お子さんがおありになると仰しやるので御座いますか。――御自身の血と肉を分けたお子さんが。

延子。　――一人だけは。――

光子。　――お從姉のところからお貰ひになつたと云ふあの息子さんは――矢張し――

延子。　私の貰子で御座います。――あの人があなたと結婚した時には、三つになる子供があつたので御座います。

光子。　――知らなかつた。――それ程怖ろしい秘密を私は今日まで知らなかつた。

延子。　光子さん。

光子。　――否え。それほどの間柄でありながら、あなた方は何故結婚なさらなかつたので御座います。あなたの愛の生活を完全になさる爲めには、それより外の手段はおあんなさらなかつた筈では御座いませんか。――それに、何んにも知らないで、その渦の中に引き込まれて行つた私を見ながら、あなたは默つてゐらしつた。今の今まで默つてゐらしつた。自分の生活の大事な事を、少しでも知つてゐる女の、堪へられる事でせうか、それが。私にはあなたが解りません。子供まで生んだ男を、何の必要がおありなら、他の女へ讓つたので御座います。

延子。　――何の必要があつたでせう。みんなあの人の必要だつた。――ねえ、すべての結婚が戀のためでせうか。金のために、位置のために、方便のために、どんなものゝためにでも、殊に男は結婚の出來るものだとはお思ひになりませんか。

光子。　河田が私と結婚したのは、たゞそれだけの理由だと仰しやるので御座いますね。

延子。　――あの人の云つたのが本當だとすれば。

光子。　で、あなたはそれを非難もなさらず、責め

もせず、同意なすつたと仰しやいますの。卑しい事だとも、恥づべき事だとも、自他の二つの魂の上に怖ろしい罪を犯す事だとも、思つては見なかつたと仰しやるので御座いますね。——私から見ると、それは、場合次第であなたも同じやうな結婚をなさり兼ねないと云ふ事を證據立てることになりますわ。

延子。——あなたの答は痛い。打つべきところをお打ちになりました。どんなに痛くとも、私はその最後の責め言葉から逃れる事は出來ないので御座います。——あなたの仰しやる方便結婚を、丁度、今私は望んでゐます。それをいたさなければならないので御座います。——あの可愛さうな小さいもののために。

光子。——？

延子。——光子さん。あの人を私に下さい。あの子供に父親を持たせて下さい。——

光子。——

延子。——子供には父親が要ります。母親がなければならないと同じやうに。

光子。——その必要のために、おや、あなたは改めて結婚しようとなさるので御座いますね。——妻のある男と。その妻は私を押しのけてまで。まあ、私の事は申さないとしても、たつた今愛しも愛されもしてゐないと仰しやつたその人と。

延子。——あの人が、あの子供の父親である事は、現在の二人の愛の有無とは、別の問題で御座いますわ。

光子。——でも、妻を愛しない良人と、良人をも愛せぬ妻とが、どうしていゝ父母になり得ませう。——あなたの所謂可哀さうな小さいもののために。——それは愛のない男女の一組が、決して本統の夫婦になれないのと同じ冒險では御座いませんか。

延子。——あなたは戀愛も、結婚も、兩親の人間的な責任も、みんな一束にして、高い夢の塔の上に縛りあげようとしてゐらつしやるのですわ。六年前、私達が二人の戀愛をしたやうに——でも、御覧なさいま

し。本統の意味の戀人、本統の意味の夫婦と云ふものが何處にありますでせう。みんな妥協と方便と策略ですわ。一歩讓つて戀のない戀人はないとしたところで、愛のない夫婦は至るところに御座いますわ。進んで父と母の關係になれば愛の有無などを論じ合つてゐる隙は御座いません。たゞ一つ必要な事は、子供は育てなければならないと云ふ事ですわ。——搖籃と茶の間と寢室では、十分な母親の乳と愛撫で、また學校と社會では父親の富と、力とで——

光子。あなたの現實主義も餘んまり極端すぎますことね。

延子。否々、私は、寧ろ、現實主義を方便にした理想主義を信じます。——あの人と私の場合で申せば、あの人はもう私の戀人には適しません。良人としても乾度冷淡な、我儘者で御座ませう。でも、子供の父としては十分間に合ひますわ。——ねえ、あの人は紳士で御座いませう。

光子。——社會的の條件だけでは。

延子。——勿論、それだけのお話ですわ。お金もあります。

光子。——子供の教育費位はね。

延子。——自分には實行しなくつても、どんな事が善い事かと云ふ事は知つてゐます。——

光子。つまり子供にいゝ教育が與へられると仰しやるのですね。

延子。——それに、自惚れの強い、負け嫌ひな人ですから、自分のヴァニティのためから云つても、子供のためには、一生懸命な事をいたしますわ。

光子。さう云ふ風に數へ立てゝ見れば、表面の條件だけは揃ふわけでせうね。

延子。——それでよろしいので御座います。——それだけ揃つてゐれば、父親として、人間として、子供に對する本能的の熱情が、いやでもその裏に波打つて行きますから。

光子。――さあ、さう旨く事が運びさへすればゝ、あなたの計畫通りと云ふもので御座いますね。――が、私はまだあなたの御申出でに對しては何んとも御返事はしなかつた積りで御座いますよ。あの人を讓るとも、讓らないとも――

延子。あなたは讓らなければなりませんわ。愛のない夫婦は、本統の意味の夫婦でないと仰しやつた思想に對しても。――これまでの秘密を隱して、あなたを偽り、欺いた男を、あなたは決してこれまで通り愛して行く事は出來ない筈で御座います。

光子。では、その思想を捨てゝ、あなたのお弟子になつたとしたらどうでせう。――愛はなくつても、方便のために矢張り、あの人と一緒にゐるとしたならば。――

延子。あなたにはお出來になりません。

光子。――さうお思ひになりますの？ なら、あなたは私を買ひ被つてゐらつしやいます。――あなたがお子さんのためになさる事を、私も、自分の結婚問題からしようと申すのです。違ふ事は、私の方がもつと利己的で露骨で、随分だと云ふ事だけですわ。――ねえ、假りに私が今自分の思想のために離婚したとして、その次に來るものは何でせう。父母の亡くなつてからの實家は、私に取つてもう暖い巣では御座いません。獨立！ 自活！ これは魅力のある言葉で御座いますことね。たしかに。でも、何に依つて獨立し、何に依つて自活して行けるでせう。私は自分の財産といふものを持つてをりません。――日本の一般の奥さん方と同じやうに。そこで自然、何か職業を持たなければなりません。私は、教育としては普通の女以上のものを受けた筈で御座いますわ。知識的の事から趣味の末に至るまで。――繪畫も教はりましたわ。音樂は、ピヤノもお琴も彈けますわ。お花だつて、お茶だつて、裁縫、刺繡、造花のやうなものだつて大抵の事は心得てをりますわ。――でも、それはたゞ女

一通りのおたしなみとして、教はつたに過ぎないので御座います。こんな場合に、誇りと滿足を持つて、私の職業だと云はれるやうなものは何一つない。本統に何も持つてはをりません。無理に撰べば下女か女工位なもので御座いますわ。それには、でももつとしつかりした手足が必要です。――斯んな人間がどうして獨立されるでせう。どうして一人で生活して行けませう。

延子。――或る女權論者が申しましたさうです。――ノラはあれからどうしただらう。惡くすると、賣春婦になつてしまつたかも知れないつてね。

光子。――なる位なら、限られた一人の男の賣春婦になつた方がよろしいのですわ。ねえ、あの人は誰が見ても男らしい、きりつとした顏をしてゐるではありませんか。

延子。――あんなのが却つて女蕩しです。

光子。――女を悦ばす方法を知つてゐるのですわ。――その上、お金もあれば位置もあります。――

延子。――あんな人でなければ、世間的に出世は出來ないので御座いませうね。

光子。――つまり世間でないのですわ。何處へ出しても、何をさしても。――それに愛嬌があつて、美しくつて――

延子。それがあの人の事なので御座いますよ。うつかり釣り込まれて嬉しがつてゐると、あの人は、よその方を向いてにや／＼冷笑してゐるのです。

光子。――それに氣のついた時には、こちらでも又よその方を向いて笑つてゐればよろしいではありませんか。世間へ洩れるほどの醜さへ立てなければ、それで、仲のいゝ、立派な、模範的夫婦として通つて參れますわ。

延子。男妾と賣春婦が。

光子。――その上、あなたとの秘密で、私はあの人を意地める事も、脅かす事も出來ますわ。怖れさす事も出來ます。世間が怖ければ、つまり私が怖いわけ

で御座いますから。――これからはあの人を好き自由に扱つて行けるのですわ。あの人は今までよりかもつと〱私を大切にしますでせう。可愛がるでせう。機嫌を取るでせう。私は何處までも鷹揚にすましてそれを利用して行けばよろしいのですわ。

延子。　あなたもそれですつかり假面をお取りなすつた。

光子。　――あなたの例に倣つただけで御座いますよ。――でも、不思議ですことね。斯うやつて、あの人の顏の事や、氣質や、才能やを一つ〱引き出してお話をしてゐますと、私にはあの人の正體が初めて本統に分つて行くやうな氣がいたしますわ。そして、女蕩しだの、ずるいの、冷酷だのとあなたが惡口を仰しやれば仰しやるほど、何んだかだん〱可愛くなつて參りますわ。本統を申すと、あの人を今のやうな心持で思つた事は今日まで一度もなかつたのかも知れない――私はあなたのおかげで新しくあの人と戀をするのかも知れませんわ。もつとあの人に自由をさしていましな。――詐僞だとも、かたりだとも、人殺しだとも、火放けだとも――そしたらもつと〱可愛く、離れられない氣になりさうですわ。

延子。　――あなたは誇張してゐらつしやいます。御自身の情熱を。私へ見せつけのために、わざと大きな事を仰しやるのですわ。どちらにしろ、世界意志の上からは、あなた方、子供のない女達は、悉く魂の遊び人に過ぎないので御座いますからね。――神聖なその精神と少しも交渉のないと同じやうに、あの人とあなたとの間には、何一つ運命的なきづなはない筈で御座います。あなたはきれいに身を引いて、本統に權利のあるものに、その位置をお渡しになるのが、順當で御座います。

光子。　身勝手もそこまで參りますと、御愛嬌ですわね。――とにかく、私はどこまでもあの人の妻です。決してあの人から離れはいたしません。

延子。　あなたにはそんな資格はおあんなさらない。――

光子。　――愛より有力な資格が他に御座いませうか。今はもう方便でもなければ、看板でもなく、私にはあの人が必要です。愛のために、本統の愛のためばかりに。――

延子。　――本統の愛と云ふものが、親と子供の間以外にあられやうとは、今の私には信じられません。――あなただつて、口で仰しやる通りに、純粋に、また今までのやうに無邪氣にあの人を愛して行く事は、到底出來ないので御座いますわ。あの人の過去は、怖ろしい幽靈になつてあなたにつき纏ふでせう。あの人を愛すれば愛するほど、あなたはあの人を憎まないではゐられなくなります。疑ひ、嫉み、怒らないではゐられなくなります。それは愛の天國よりは、寧ろ地獄に近いものだとはお思ひになりませんか。

光子。　――地獄！　あゝ、地獄！

小間使が這入つて來る。

小間使。　病院から仙臺の奥様がお見えになりました。

光子。　――お一人かい。

小間使。　否え、旦那様と御一緒でゐらつしやいます。加瀬様もお見えになりました。

光子。　――ではね、私は一寸失禮いたしますと申上げて、あちらのお座敷へお通し申してお置き、今直ぐに參ります。

小間使去る。

延子。　――先程のお約束だと、私はお姉さまにお目にかゝつて行つてよい筈で御座いましたのね。

光子。　――姉にお逢ひ下さいと申上げた先刻とは、二人の間柄がすつかり變つてしまつたので御座いますよ。

延子。　――では、夕刻、また改めてお伺ひいたしませう。――晩御飯の御招待までお取り消しにはなら

ないでせうから。

延子は中央の入口から出て行く。

光子。 ——何んて圖々しい女だらう。あんな女が、またと二人あるものぢやない。——でも、あの女の云つた事は本統だ。あの人と私の間には怖ろしい地獄が出來た。——私はあの人が可愛い。今までにない程戀しい氣がする。それと一緒に憎まないではゐられない。あの人は結婚の日から私を裏ぎつてゐたのだ。嘘ばかりついて來たのだ。私をだましてあの女とかげで笑つてゐたのだ。——憎んでも、憎んでも、憎んでも足りない。——それでゐて何故私は可愛いのだらう。何故斯う引きつけられて行くのだらう。あんな嘘つゝきに。——見かけ倒しの碌でなした。——いつそ、あの女とのわけを知らない前であつたなら、事と次第では、私は未練なくあの人と別れられたかも知れなかつた。欺されて、蹈みにじられて、いゝ恥をかゝされた今となつて、却つてそれがむづかしい事になつた。——

長椅子にうつ伏して泣く。河田這入つて來る。

河田。 ——光子。おい。〔光子を抱かうとする。〕

光子。〔飛びのいて。〕打ちますよ。傍へ寄ると打ちますよ。

河田。 ——打ちたければ幾らでも打つがいゝ。打つなり、嚙むなり、髮の毛をむしるなり、どうなりとするがいゝさ。それでお前の氣がすむなら。——併し、隣りの部屋には姉さんや加瀨がゐるのだから、今はいけない。そんなところをあの人達に見られるのは、お互ひに損だ。

光子。 ——あなたと云ふ人は本統に、これほどの場合にだつて、損得を考へないではゐられないのね——。〔ぐつたりして長椅子の端に腰を下ろす。〕

河田。 ——僕は何に限らず損をし度くはない

光子。 ——すべてが其處から割り出されて行くのね。あなたの人生の勘定の仕方は。——私との結婚まで、同し胸算用だつたと云ふ事を、おかげで私は今、

初めて知りましたわ。

河田。——あの女はまださう信じてゐるのかい。ふん。案外正直なんだね。——

光子。——えゝ、正直ですとも。少くともあなたほど不正直ではなさゝうですわ。

河田。——ひどく肩を持つぢやないか。——とにかくまあ考へて見て異れ。ぢや、あの時僕がどう云へばよかつたのだらう。あの女に向つて——文學書生の夢見たやうなこんな關係にはもう飽きた。且つ僕の世界は單に講堂と圖書館と下宿屋の二階のみではなくなつた。舞臺は變らなければならない。僕は甘い戀人である代りに、しつかりした良人として、自分と並んで社會に立ち得る妻が必要な時になつた。聰明で美しくつて、門地と教養を兼備した若い女が必要だ。——おい。お前と初めて逢つたのはH教授の家の茶話會の晩だつたね。その時、僕は青い顔をして口もろくに聞けなかつたと後でお前がよく冷やかしたぢやないか。ねえ、そんな風な事まで洗ひざらひぶちまけて、それでお前との結婚を宣言すればよかつたとでも云ふのかい。

光子。——さうしなければならなかつたのですわ。それが本統の道だつたのですわ。——私を愛してゐたと仰しやるのが、もし、嘘でなかつたなら。

河田。——それは今から云ふ話さ。そんな事を知つてあの女がおとなしく手を切ると思ふかい。燒き餅だ、喧嘩だ、直ぐと世間の笑ひ話だ。お前はそれにびつくりして後を見せてしまふ。たつた一人取り殘されていゝ馬鹿を見るのは誰だつたらう。

光子。——

河田。そんな下手な大詰を出さないためには、僕は何處までも受身の態度を示さなければならなかつた。媒酌者としてのH教授に對するこれまでの情誼上、厭々その結婚を承諾するのでなければならなかつた。僕はふさいだ悲しさうな顔をして、その煩惱を訴

へる。すると女が却つて積極的になつて來る。反對に僕を慰める。――興奮して顫へてゐる涙の裏に、何んとなしに甘い微笑を浮べようと云ふ、つまり高貴な犠牲者の役廻りだ。多くの女達と同樣に、あの女にもその一役に興味があつた。僕はたゞそれを利用したに過ぎなかつた。

光子。――思へば思ふほど怖ろしい惡者ね、あなたと云ふ人は。――そんなたちの惡い魂膽を臆面もなく話して聞かされて見ると、何だかあの女までが可哀想になつて來さうですわ。あんな圖々しい、恥知らずな事を、平氣に私の前に云ひ張つた女までが。――

河田。――一體どんな事をしやべつて行つたのだい。

光子。――まだとぼけてゐらつしやるのね。その事なら誰よりかもあなたが一番よく御存じの筈ぢやありませんか。――本統に、停車場から歸つて來ると、それを云はせまいとして、一生懸命胡魔化さうとしたのが、どんなにかおかしかつたでせう。息子さんは息子さんの就學問題に就いて、ひどく興奮してお出でだ――ふん、何處の奥さんなら、誰の息子さんなら、あんな白々しい嘘がつけたのだらう。人を馬鹿になさるにも程がある。――

河田。――おい、聲が高いよ。のぼせ上つて隣りの部屋を忘れるな。

光子。――あゝ、惡黨！惡黨！惡黨！〔咽び泣きながら長椅子に伏す。〕

河田。――僕はこれまで幸ひに自分を善人だなんて標榜した事はないから、今惡黨になつたところで、大した墮落ではない筈だ。併し僕の程度で惡黨呼ばりをされるのなら、大概の人間はみんな入墨み仲間だ。無垢な身體は一人もありはしない。假りにこれを動機として、僕が一念發起する。而して入墨みを洗ひ落さうとする心持になつたとする。その時はどうすればいゝのだらう。あの女は――斯うなれば明白に云はうね――

―子供の教育のため、社會的生存のために、僕が彼の父親であり、あの女が母親であると云ふ事を、法律的に認知させようとするのだ。――お前にもこれより外に云ふ事はなかつた筈だ。

光子。――そのために、あなたに私を離婚さして、あの人が改めて結婚しなければならないと申すのです。そのくせ、あなたにはもう微塵も戀愛なんかないと云つてをりますわ。

河田。――戀愛? そんなものは、あの女にはたゞあの子供を生むための手段であつたに過ぎないのさ。そんなのが男に取つては一番厄介なのだ。まるで母性の化物なのだからね。――併し僕が本統の善人にならうとするには、何を措いても、先づその化物を尊重しなければならない。あの女との關係を何處までも神聖視しなければならない。同時に、お前との結婚は僕の犯罪であり、冒瀆である。僕はお前と社會の前に、すべてを告白し、懺悔するのだ。――隣りの部屋から姉さんと加瀬を連れて來さへすれば、それは今直ぐにでも出來る事だ。あの二人はつまり社會なのだから。僕は純然たる罪人としてその前に立つのだ。そして神の所罰と社會の制裁とを從順に受けるのだ。――一寸と英雄的な場面だね。その時にはもうお前は僕を惡黨呼ばはりをしないだらう。泣きながら、同情の目を上げて殉教者のやうに僕を崇め出すに違ひない。社會も符を上げながら、矢張し感動しないではゐられないに極つてゐる。僕の正義と勇氣と敬虔な生活の態度に對して。僕は惡黨から一躍して宗教的英雄に早變りが出來るのだ。――併し僕は厭だ。そんな事でお前と別れて、一生あの婆さんに縛りつけられるよりかも、矢張り惡黨でゐたいね。――おい、お前はどうだ。僕をあの女に取られて平氣でゐられるのかい。

光子。――それが出來る位なら……あゝ、私も同じ惡黨仲間なのね。――あなたからいゝ人間になられるのが、私には怖くなつた。――ねえ、本統に私を愛

してゐるの。

河田。――まだそんなことを疑ぐるのかい。まるで赤ん坊だね。

（長椅子に並んで腰かけ、頭を抱いて接吻する。）

河田。――さあ、もう機嫌をお直し。僕が旨い工合にやつて見せるから、何んにも心配する事はありはしない。

光子。だつて、あの女は今夜の御飯に來るのですよ。

河田。そいつは少し……何故斷らなかつたのだ。

光子。私は何んにも困りはしないわ。姉さんや加瀬さんの前で、あなたがどんな風に白ばくれてゐるか、私はそれが見てやり度い。

河田。急に燒餅やきになつたぢやないか。併し、惡い氣持はしないね。今までのお前には何か知ら一つのものが缺けてゐた。時によると僕はお孃さんのお守りをさせられてゐるやうな氣がした。――その調子が出れば大丈夫だ。それで其村の若者の[illegible]と云ふものだ。

光子。さうしてだん／＼墮落して行くのだわ、女は。男の墮落して行くあとについて――おゝ厭だ。何もかも汚く、醜く、まつ暗で、臭い。それでゐて私はこの泥沼から這ひ出る事が出來ないのだわ。――ねえ、私をいつまでも／＼見捨てないで下さい。私を愛して下さい。あの女の何倍も何倍も愛して下さい。そして勝たして下さい。あの女に。あの女の子供に。――

河田――あの女の子供に――

光子。――あの女に勝つためには子供にも勝たなければならない――あの女の子供に――あなたの子供に勝たなければならないのですわ。今夜私の目の前であの女にきつぱりさう云つて下さい。私は何處までもあなたの妻だ。――從つて、私の生きてゐる間は、どんな方法ででも、あの子供にあなたをお父さんと呼ばせる事は出來ないつて。

河田。　そんな事を云ふのは何んでもない事だが、併し、今夜云ひ出すのは考へものだ。効果はなくてたゞ騒ぎを大きくするばかりだとおもふね。

光子。　――否え、今夜でなければいけませんわ。どうしても今夜仰しやつて下さいよ。それですべての解決がつくのですから。私の勝利がきまるのですから。――それが出來ないと仰しやれば、あなたは矢張しあの女に未練がおありなのですわ。――あの女の生んだ子が、私よりかもお可愛いのですわ。

河田。　――直ぐさう云ふ風に云ひ度いのかね、馬鹿々々しい。悧巧なやうでもお前は女だ。

光子。　――女！　女！　その女が悉く私のやうな涙を流し、私のやうな闘爭をして來たのね。何千年、何萬年の昔から。――お互ひの心臓を喰ひ合つたり、長い黒髪をずた〳〵に引き千切つたり、手足をもいだり、瓜を剝いだり、同じ性同士で戰つたのですわ。――何のためでせう？　みんなあなた方男と云ふ、放蕩者のためだつた。――〔泣く。〕

河田。　――さあ、もうよせ、姉さんに聞かれるよ。

光子ます〳〵高く泣き入る。

河田。　――お前の希望通り、あの事は今夜何もかも片附けてしまはう。ね、それならいゝだらう。おい。光子。何をさう泣く事があるのだ。え？

光子。　――この涙の味はあなたには分かりませんわ。私は女性のために泣くのです。――昔から今日までの、今日から未來の、すべての女のために泣くのです。

第二場

舞臺は前と同じ。同じ日の夜。卓に近い壁から下つてゐる電燈に灯がついてゐる。河田の友達の加瀬が何か考へに耽つてゐる風で、長椅子にもたれてゐる。黑い地味な背廣。沈鬱な表情がある。河田とは四つ五つしか違はないのであるが、より以上に老けて見

ゑる。

良子が這入つて來る。すべて鼠系の落着いた色の服裝。顏はまだ若々しい光澤を失つてゐない。前をつめた手輕な束髮に結つてゐる。

良子。こちらでゐらつしやいましたの。

加瀨。——一寸とお暇乞ひをしてからと思つてゐるのですが。——お座敷のお客さんはまだお話が長引きさうですかね。

良子。どうで御座いませう。何んだか大分込み入つたお話が始まりさうで。——

加瀨。——あの御婦人は、あなたとは大分御懇意のやうですが。——

良子。——學校が同じで御座いましたものですから。——あなたはお初めてゞゐらしたやうで御座いましたね。

加瀨。左樣です。有名な木村少佐の未亡人でゐらつしやるのださうですね。さう云へば、名前だけは河田から聞いた事があつたやうですが、逢つたのは今晩が初めてです。

良子。私はまた、あなたはようく御存知でゐらつしやるかと存じました。

加瀨。——否え。——何故でせう。

良子。河田とはあれほどお親しい仲のあなたですもの。あの人の事も、あの人と河田との關係も、また、あの人がどうして今夜あんな風で、私達の晩御飯の席へ這入つて來たかと云ふ事も、誰よりかもあなたが一番よく知つてゐらつしやりさうに思へますわ。——

加瀨。——さう、あれはたしかにたゞのお客樣ではなかつた。——

良子。あの人が這入つて來るのを見ると、私の隣りにゐました妹は、急に武裝し初めましたわ。如何にも女主人ぶつた態度で、叮嚀な言葉を使つたり、それで何處か不自然に、狡猾らしく笑つたり、はしやいだりいたしましたでせう。あれが女の武裝で御座いますわ。

加瀨。 あの婦人も負けてはゐなかつたぢやありませんか。僕は寧ろあの婦人の方が上手に出てゐたと思ひました。

良子。 ――とにかく二人は一生懸命な戰をしてゐたので御座いますね。――一番叮嚀な敬語を使ひ合つた時が、一番怖ろしい罵り合ひをしたのですわ。親しさうに、愛嬌よく笑ひ合つた時が、刃物をふりあげんばかりに憎み合つた時で御座いますわ。――あなたのお友達が當惑しながら、それでも巧みに二人の矛先きを外らして行つた、あのはら〳〵するやうな手際は、あなただつてお氣がついたで御座いませう。――否え、あなた方の間に少しでも本統の友情がおありでしたら、あれ程の事のおきる譯を、ふだんから何んにも御存じなかつたとは信じられませんわ。

加瀨。 ――左樣、いゝ事も惡い事も打ちまけて話し合つて、何もかもお互ひに知り拔いてゐるのが、本統に仲のいゝ友達だとされてゐますからね。一般には。――併し僕等の間は大分風變りなのです。僕はあの男の事は大概の事は知りませんよ。だから、あんな婦人の關係に就いても勿論無智識です。さう。あの男について何を知つてゐると云へるでせう――いつ逢つても愛想のいゝ、愉快な顏をしてゐて、話が面白い。食ひ物はどんなものが好きで、飮み物なら輕い白葡萄がやつと一杯かそこいら。煙草はマニラか埃及。娛樂と云へば下手な玉を四五十突く。――これ位に過ぎませんね。僕に關してだつて恐らく同程度でせう。それ以上お互ひに知らせもしなければ知らうともしない。それで僕等は面白くやつて行けるのです。友達となると直ぐ探偵見たいにお互に毛細管の數まで調べあげやうとする。あゝ云ふ態度は少くとも僕には苦しいのです。その點で河田との接觸が一番のんきでよろしい。――まあ斯んな工合で、世間並みに云へば僕等は全く友達甲斐のない友達なのです。

良子。 ――よく分かりました。あなたの態度は

何處までも徹底してゐらつしやいますわ。友情に就いても、戀愛と同じやうに。

加瀨。――良子さん！

良子。――否え。私は大變結構な事だと思ひますの。本統を申しますと、私はあなたが十年前私達の間に用ひたその態度を、若しか後悔なすつてゐらつしやりはしないかと思つてゐました。ですから、今のお言葉を伺つて安心いたしましたのです。――それで、私達は此處で斯うやつて仲よくお茶でも頂きながら昔話をいたしたところで、何んにもさし障りはない譯で御座いますね。

良子當鈴を鳴らす。小間使が這入つて來る。

良子。――紅茶でも入れて來てお呉れ。急ぎはしないからお熱くして。――それからね。奥様が私の事をお聞きになつたら、こちらで加瀨さんとお茶を頂いてゐますと申上げて下さい。――お客様のお車は待つてゐるの。

小間使。――否え。お歸しになりました。

小間使去る。

加瀨。――良子さん。奥のお客様の事ならもう心配なさらない事にしておきなさい。縦らあなたが氣を揉んだところで、手は屆かない。あの人達は丁度河を渡つてゐるのです。僕等が十年前に渡つたと同じやうな河を。違ふと云へば、先には男二人に女一人であつたのが、今度は女二人に男一人になつたに過ぎない。――

良子。――なら此處に斯うやつて靜かに座つてゐられる私達は、無事に岸についてゐるので御座いますわね。さうして、奥の事をかれこれと氣にするのは、その岸から丁度今河のまん中で苦しんでゐる人達を見渡してゐるのではないでせうか。とすれば、私には默つて見てはゐられませんわ。淵か瀨か。怖ろしい渦のあるところは何處か。大きな聲でそれを知らしてあげ度い。ないですむか。

――それが岸に辿りついた經驗者の責任ではないでせうか。――兎に角私達は溺れないで生きて來たのですから。

加瀨。――あなたは僕等が誰も溺れなかつたと思ひますから。

良子。では、誰が溺れたので御座いませう。まさかあなた御自身がお溺れになつたと仰しやるのではないでせうから。

加瀨。――僕は安全でした。――少くともその當時には。

良子。なら、土岐か私が溺れたわけで御座いますのね。――でも、土岐は彼の望み通り私と結婚いたしたのですから、安全と云ふ點から申せば三人のうちでは一番危なげのなかつた人間の筈ですわ。

加瀨。――土岐の安全は自然の安全でした。併し僕の安全の下には渦がありました。渦がありました。僕は自分を安全にするために、相手をその渦の中に落して顧なみかつたやうに思はれるのです。――あなたは先刻、僕の過去の態度に後悔がありはしないかと思つたと云ひましたね。後悔と云ふよりは寧ろ罪に近い感じです。今日、放心狀態になつた土岐を介抱して、列車から降りたあなたを見た時に、僕は自身の罪を二倍に感じたのです。――良子さん、僕はあなたを取り返しのつかぬ淵に溺らしました。僕は知つてました。あなたが誰よりも僕を愛して吳れてゐたのを知つてゐました。それでゐて僕はわざと知らぬ顏をしてゐたのです。

良子。――古い昔話が初まりましたのね。さう云へば、從兄と私との婚約が、家と家の間に正式に極められた晩でしたわ。あなたは顏の筋一つ動かさぬ平氣な調子で、お目出度う、何をお祝ひしませう、と仰しやいましたのね。おぼえてゐらしつて？

加瀨。――僕へゐらつしやい。あなたの行くところは僕より外にはないと云ふ代りに、そんな出鱈目を云つたのです。一言さう云ひさへすれば、そのまゝ家

を捨てゝも、僕へ結び込んで來るあなただと分つてゐながら、僕はとぼけてゐたのです。——そんなら、僕はあなたを愛さなかつたのでせうか。

良子。　私はあなたに愛されてゐなかつたとは思ひませんわ。

加瀨。　——愛するものゝみが愛を見つけます。——隱れてゐたものがどんな強い力であつたか、僕自身にすら分らなかつた時に、あなたには十分感じられたのです。併し、あの當時の僕はせつぱ詰つてゐました。人間社會のあらゆる生活が、荒涼として見えた。目に入るすべてのものが厭はしく、醜くかつた。この心持ちは、あなたに對する暖い愛にさへ、一脈の冷氣を傳へた。何故僕はあんな人間になつてゐたと思ひます。

良子。　——それがはつきり分つてさへゐたら、私はあれほど苦しみはしなかつた筈ですわ。——でも自分勝手な理由はつけてゐましたの。あなたがお家の御都合で生活上急にこ[illegible]、義理あるお母樣との折合の惡い事や、默[illegible]ん方の狹いたくらみや、家の人達が色んなお噂をするのを聞いて、あなたがいつも氣むづかしいお顏をしてゐらつしやる原因を、それに結びつけてゐましたわ。——でも、どんな無愛想な、厭な顏を見せられても、私を嫌つてゐるためだなんて事は一度も思つて見た事もなかつたですから、私もずゐぶんと自信家でしたのね。

加瀨。　——それで、僕がどんな苦い考へに閉じ込められてる時でも、あなたは平氣で、しやあ〳〵僕の中へ這入り込んで來た。場合によると僕にはそれが憎らしかつた。餘計につん〳〵してやりたかつた。——

良子。　——本統に、笑ひこけてゐる最中にだつて、急に怖いほど冷酷におなりなすつたわ。

加瀨。　併し、あの時分の僕を極端な厭世家にしたのは、そんな内輪のごた〳〵や、親類合ひの[illegible]なん

ぞではなかつたのです。もつともつと根本的な厭惡、人類的な失望でした。僕が醫者として、科學者としての。

良子。——

加瀨。 僕は人間そのものに失望したのです。人體の研究者として、その對象物からすべての幻影を滅されたのです。僕の前に現はれて來る人間は一人として完全な健康者はない。みんな病氣を持つてゐる。腐れかけた内臟、汚れた血液。膿の吹いてゐる筋肉。調節の狂つた神經——あらゆる毒素と黴菌と汚物の袋。且つまたその本來の組織からして極めて脆い、危ない細工です。極度の巧緻を盡した物體である丈けに、それだけ怖ろしい。一點の微細な狂ひをも直ぐと引いて全體の大破綻となつて來る。たつた一つの小さい血管が破れても、場所に依つては忽ちに死だ。——それを誰も考てない。鏡に覗いてもその顏の皮膚一枚下に隱れてゐる危險をば思つて見ようとしない。そして目前の淺薄な事象に笑つたり、怒つたり、泣いたり、又欺き合つたり、奪ひ合つたり、殺し合つたりしてゐる。——まるで正氣のない化物の集團だ。僕がもつとえらい人間であつたら昔のすぐれた宗教家や僧侶のやうに、彼等のために涙を流して、その覺醒と救濟のために一身を捧げる氣にもなつたかしれないのです。そんな人達は僕が實驗室や解剖室で感じた事を、祈禱室や祭壇で感じるのです。而して僕と同じ驚きに駭いて人の子に說くのです。併しさうするには僕には愛が足りなかつた。僕には愛よりか嫌惡と憎みが先き立つた。この感情は患者に對してばかりではなく、同じ病院に働いてゐる助手仲間の上にも擴がつた。醫者の不養生で、彼等は不攝生と不道德から來た多くの病氣を持つてゐる。蛆が汚いものを感じないやうに、彼等は大抵の病氣にはもう痲痺狀態に在る。而して金持ちの美しい娘を見つける事ばかりに苦心してゐる。佛教の言葉に、臭骸相抱くと云ふ句がありますね。僕は所謂幸福

な結婚をして母親になつてゐる彼等を見ると、此度この言葉を思ひ出した。胸がむかついて來る。彼等と同じ眞似はし度くないと云ふ潔癖と反抗心に燃えた。同時に目を自分自身の内に轉ずれば、一層堪らなかつた。生命！　脆弱な細胞の集合體の中に隱されてゐる神秘な力が、科學者としての僕の冷靜を脅かし初めた。僕は血球一箇、纖維一本の消長にも一種の驚異と嘆美、不安と疑惑なしには研究されなくなつてゐたのです。僕はあの時科學から寧ろ哲學に轉ずるのが至當であつたのかも知れない。——兎に角、この惱みは當時の僕に取つてはメヂユサの首であつた。すべての甘い夢、潤粲、美しい幻想がその音の一瞥の前には悉く石になつたのです——ねえ、僕があなたの愛を素直に受け取れなかつた心持ちが分つて吳れるでせう。

良子。　——ようく。それにしてもあなたと云ふ人は、本統にお強い方だつたのね。

加瀨。　——ところが少しもお強くない。さうやつて自分では進み度くない方へあなたを、[illegible]てゐるのを見ると平氣ではゐられなかつたのです。烈しい嫉妬に苦しめられた。僕は單に父が懇意にしてゐたと云ふに過ぎないあなたの家へ、土岐は近い血緣として出入する。自由にあなたの部屋へ這入る。打ちとけた親しい呼び名であなたを呼ぶ。それがどんなに妬ましく、口惜しかつたでせう。——ふん、何んと云ふ矛盾だ。

良子。　——そんな時のあなたは直ぐと分かりましたわ。恐い程默り込んで、何か話しかけたつて返事もなさらない。——熱病患者のやうな目をして私を睨めてゐなすつた。——

加瀨。　——その癖、あなたが早く結婚して仕舞つて吳れゝばいゝやうな氣もしてゐたのです。さうしたならば、僕の混亂した感情も落着きを見出して、いつそ樂になるだらうと思つたのです。

良子。　ですから結婚してあげたぢやありません

か。――それで、お樂になれまして？

加瀨。――兎に角、今日まで生きてゐますよ。併し、あなたの結婚生活が餘り幸福ではなささうだと云ふ噂を耳にする度に、僕はまた豫期しない苦痛を感じ出した。すべてが僕の責任であるかの如く思はれた。士岐がひどひ放蕩を初めてあなたを苦しめてゐると云ふ事を聞いた時には、僕は憤つた。自分自身を傷けられると同樣に腹が立つた。――あなたの事はあなたが考へる以上に何んでも僕の耳に這入つたのです。

良子。――加瀨さんと二人して、姉さんの昔話をする、と妹からよく聞いて來ましたわ。

加瀨。――士岐の病氣の事を聞いたのも光子さんからです。その時僕は決心した。あなたをこんな運命的な不幸に陥れた責任者は僕だ、それ故あなたをその不幸から救ひ出す責任もまた僕にある筈だ、と。併しそれも絶望です。士岐はもう決してもとの身體にはなりませんよ。

良子。それは私もう初めから覺悟いたしてゐますわ。でも、あなたが心配して下さるほど、自分ではこの運命を不幸とは思つてゐませんの。いゝえ。却つて幸福になつたのです。ねえ。私、申し上げたでせう。三人は誰も溺れなかつたと。――

加瀨。あなたはこんな目に遭つてまで溺れたとは――否、僕の不徹底な自我主義のために、底のない淵に突き落されたのだとは思はないのですか。

良子。――何んにもあなたのせゐではありませんわ。假りに私がどんな淵に落ち込んでゐたにしろ――私が士岐を撰んだ以上、その結婚の責任者は私より外にある筈は御座いませんもの。でも、私は溺れないですみました。私は立派に這ひ上つたのです。あなたの所謂淵から。運命の渦から。

加瀨。――？

良子。これだけは、でも誤解なさらないで下さいましよ。私が士岐と結婚したのは、何處までも私の自

由な意志で御座いましたの。世間によくあるやうに親達から強ひられたの、家と家との義理に迫まつてのと云ふ譯では決してありませんでしたわ。あなたがついて來いと仰しやれば、世界の果までもついて行きかねない位強い戀をしてゐながら、それでゐて、士岐もいやではありませんでしたの。ねえ、あなたが不徹底な自我主義者だつたと仰しやるなら、私と云ふ女もこれ位浮氣者に出來てゐたので御座いますよ。でも、結婚がすむと何んだかがつかりしてしまひましたの。そして何故と云ふ譯もなしに、私達の生活は一日一日と不安な、熱のないものになつて行きました。私はどんなにあわてたでせう。どんなに熱心にあの人を愛さうとしたでせう。丁度ピヤノのお稽古をはじめた小娘が、六ケしい曲を練習するために、一生懸命鍵盤にかじりついて、あせつてゐると同じ風に。――併しあせればあせるほど、器械的な、色も味もない音ばかりが出ますの。精神的な諧調なんてものは微塵もない。その上強ひて續ければただに興趣を阻喪するばかりだと云ふ事に――お互ひの魂を傷け合ふばかりだと云ふ事に、私はやつと氣がつきましたの。お笑ひになつて下さいまし。本統に、此處まで行つてやつと〳〵それだけの事が分つたので御座いますわ。それからの私の路はみじめでした。二度目の子供の亡くなつた時には、士岐はもう四五日も家には歸つて來ないと云ふ有樣ですもの。私はたつた一人冷たい赤ん坊の屍骸を胸に抱きしめて、せめてこの小さい生命でもつなぎとめられたら、私の生きて行く意義もあるだらうと思ふと、堪りませんでした。――

加瀬。　みんな僕の罪だ。許して下さい。

良子。　――否え、あなたに何んの罪が御座いませう。あるものは私の愚さばかりですわ。――その内に士岐のあの病氣で御座いますわ。

加瀬。　――ふん。悉く放蕩の報ひだ。他の原因に依る發狂なら、治らなくもないのだが、あの梅毒に起

されては致命傷ですからね。――併し已むを得ない。受くべき結果を受けたに過ぎないのだから。――

良子。――あなたは、まだあの人を憎んでゐらつしやいますのね。

加瀬。――憎むと云ふと言葉が強すぎるかも知れないが、兎に角不快は去らない。あなたをひどい目に合はせたと云ふ感情問題は別にしても、僕の研究的見地からそんな人間は輕蔑します。

良子。――さう仰しやられても仕方はありませんのね。現在女房の私でさへ、初めはそれ以上の心持ちは持てなかつたのですから。ねえ、誰かの書いたものにありましたでせう。憎み合ひ、傷つけ合ひ、呪ひ合つてゐながら、それで別れる事も出來ない、きづなにつながれてゐた夫婦の間に、いよ／＼最後の運命が來ると奥さんが、倒れてゐる旦那樣の髮の毛を引きむしつたり、頰を打つたり、足蹴にしたり、呪ひと復讐の言葉と共に怖ろしいいぢめ方をすると云ふ場面が、―一丁度それと同んなじ心持ちでしたわ。私が初めて、氣違ひになつた土岐を見た時の心持ちは、その西洋の女の人見たいに露骨な眞似をしなかつただけ、私の方が人が惡かつたのかも知れない。髮の毛を引きむしる代りに、私は親切らしくかきつけてやりましたわ。頰を打つ代りに、なぜてやりましたわ。足蹴にする代りに、さすつたり、揉んだりしてやりましたわ。呪ひと復讐の言葉を浴びせる代りに、母親のやうに優しく、なだめたり、すかしたりしましたわ。――一重裏の魂の底では、むら／＼するほど憤りながら、憎みながら、罵りながら、輕蔑しながら――いゝ氣味だ、いゝ氣味だ、いゝ氣味だ、と叫び立てゝやり度い程に思ひながら。それで當の相手はどうでせう。何んにも分らないのですわ。何んにも感づかれないのですわ。過去もなければ未來もなく、生きてゐると云ふ現在の意識をさへも失つて、その怖ろしい女房の假面の前に、無邪氣に横はつてゐるのですわ。それを見てゐますと私はた

ん／＼不思議な氣がして來出しましたのねえ、その人はもう昨日までの放蕩者ではありませんわ。嫉妬深い暴君でもありませんわ。男爵と云ふ階級と尾上何某とかに似てゐると云はれる容貌を、唯一の誇りにしてた輕薄な、みえ坊でもありませんわ。私を失望させ、苦しませ、悲しませたあの人は、あの人の過去と共にみんな消えてしまつたのでせう。あとに殘つたあの人は、今までのあの人とはすつかり別な、新しい人間ですわ。食べる事と眠る事より外は何んにも知らない大きな赤ん坊ですわ。何をするにも私の命令と指圖の下に、小羊のやうに從つてゐる無能力者ですわ。本統に、私だけには悲しくなる程おとなしいのですもの。どんなにあばれてゐる時だつて、私が一言云へば靜まります。食べる事でも飲む事でも着る事でも、私の手からでなければ承知しませんの。あらゆるものを失ひ盡した記憶の中で、たつた一つ殘つてゐるのも、又私の名前だけですわ。良子！ 良子！ 子供が母親を呼び求めるやうに、[illegible]にてもあ[illegible]この一つの名を呼んでゐます。この十年間呼び馴れた名前であり、聞き馴れた聲でありながら、それでゐてその聲が、私の耳には不思議な、珍らしいものに響きます。今まで一度もあの人から出た事のなかつた、信實な、純粹なものが、初めて現はれたやうな氣が致しましたの。その瞬間から私は救はれたのです。男と女の憎みと闘ひから脱け出て、もつと大きな、もつと廣い、もつと透明なもの丶中に這入る事が出來たのです。私はもう人前でなしに、みえでなしに、心からあの人を大切にします。あの人の爪の先から、髮の毛の末まで、可哀想で氣の毒でたまらない。手がかゝればかゝるだけ、亂暴をすればするだけ、いぢらしくなる計りですの。云つて見れば、私の眞つ暗な世界の中に、新しい、一つの火がついたのですわ。それは、男と女の心臓を火皿にして、その血を油にして燃えるやうな火とは別ですし、友情とも違ひます。又兄弟同士の狎れた、彈力のない

情合とも比べる事は出來ません。唯子供を抱いた母親の胸に計りあるものに似て、もつと謙遜な、それで、飽くまで女性らしさを失はない執着です。この火の滅びない間は、私は屹度幸福ですわ。――否え、いつまで消さないで、その火をいよ／＼強く、大きく、燃え擴がらして行く事が、私のたつた一つの生き方だと思ひますの。――ねえ、私は矢張り溺れなかつたでせう。

加瀨。　そこまで行つたかな。あなたも、とうとそこまで行つた。――

良子。　――でなければ、あの人をあなたの病院に入れてはおきませんわ。今のやうに平氣に、悦んであなたのお世話になつてはゐませんわ。また、あの人が淋しい寢床の中で無心に眠つてゐるこの時刻に、斯うやつてあなたと二人つきりでこんなお話を致す事も差し控へますわ。でも、私の今の心持ちには、そんな遠慮は無用なことですの。悉く要らない心使ひですわ。さう云ふ世界からは、私はもうずつと／＼遠く歩いて來たのですから。

加瀨。　――併し僕は斷はつて置きますよ。あなたは僕をその路連れにする積りではありますまいね。若しさうだとすると、あなたは選擇を誤つてゐます。

良子。　――何故で御座いませう。私は一番正しい、一番思慮のある、もしまた少しの自分勝手をお許し下さるなら、私に取つて一番都合のいゝ選び方をいたした積りですのに。

加瀨。　あなたは、あなたの足が一歩一歩地上から離れると共に、僕自身の足も土から動いてゐたかのやうに思つてゐなさる。あなたが練獄に居る間、僕は相變らずエゴイスティッシュな空想を、シガーの煙と一緒に身に纏はらせながら、横着に地べたに寢そべてゐた事を勘定に入れてない。間違つてゐます。すべて。僕は依然たる昔の僕です。何等精神的向上もなければ、精進もない凡夫です。僕の本音を云へば、今のあなたは僕を安心させると同時に失望させます。僕はもつと

苦しんでゐるあなたを嘲笑してゐた。悲しみと苦痛に打ち挫かれて、昔の友達の力を乞ひ求むるあなたを見たかつたのです。その不運な手を取つて、猶はり、慰め、過去の優しい追慕と思ひ出に耽ける事に依つて、自分の我儘な、悪魔的の慾望を充たさうとしたのです。どうです。僕は斯う云ふ手数のかゝつた享樂を夢見てゐたやくざ者です。ところで美事に罰が當つた。今のあなたの前には、僕はもう一箇の道化者に過ぎなくなつてしまつたのです。どうぞ、もうこれ以上恥をかゝさないで下さい。

良子。　否え、私達は矢張りお友達でなければなりません。あなたはわざと色變りのズボンや、尖り帽を身につけようとなすつてゐらつしやる。そして御自分で御自分を嘲つて、皮肉な一人笑ひをしようとなすつてゐらつしやる。私にはちやんと分つてゐますわ。またそれが分つてる以上、默つて見てはゐませんわ。さあ、そんな道化者の假裝なんぞはさつさと脱ぎ捨てゝおしまひなさいまし。そして矢張り昔の眞實のあなたになつて下さらなければいけません。でも、斯んなえらさうな事を云ふ私よりも、悲しみに打ち挫かれて、あなたの方に縋る私を見たかつたと仰しやるお心持は、有難いとは思つてゐますわ。

加瀨。　——良子さん。

良子。〔加瀨が手を取らうとするのを、巧みに放しながら〕——たんとお禮を申しませうね。

〔小間使が紅茶道具を持つて這入つて來る。〕

小間使。　——遲なはりまして相すみません。

良子。　——よろしい。私が注ぎますから。〔小間使の手から吸子を受け取つて注ぐ。〕

小間使。　——恐れ入ります。それから、奥様が、一寸とあちらのお座敷までゐらして頂き度いと仰しやいました。

良子。　——お客様のお座敷へ？

小間使。　——はい。

良子。――今直ぐ參りますと申上げてお呉れ。

小間使は退く。

良子。〔隣室の話聲に耳傾けながら〕私達は矢張り、河岸から眺めて計りはゐられなくなつた樣ですわね。

加瀨。――併し、僕はもう河岸から眺めてゐる人間ではなくなつた。河の中で苦しんでゐる人を助けに行くなんて役廻りも慥かに不當だ。――斯うやつてあなたと話してゐるうちに、僕自身が又一つの新しい河へ一歩を踏み込んだやうな氣がするのです。――

良子。でも、その河と、私達が渡つて來た前の河との間には、相違なく十年の月日が流れてゐる事をお忘れになつてはいけません。――その河の逆に流れる事があらうとも、私達は――少くとも私は、十年前の私になる事は出來ませんものね。――どれ。ぢや一寸失禮して見て參りませう。

良子が去る。

加瀨。――あの女は心から微笑して自分の運命を受け取つてゐるやうだ。あの殘酷な、運命に、從順に、眞面目に隨いて行つてゐる。而して負けてゐない。勝つてゐる。運命の奴隷でなしに女主人になつてゐる。あの女は嘘はつかない女だ。誇張もない女だ。口で云ふ通り乾度今の境地に滿足してゐるに相違ない。併し俺にはあゝやつて落ち着いて笑つてゐられるのが、悶え、苦しんでゐるよりも、却つて悲慘に見える。諦め以上のものを握り得た事が分つてゐながら、彼女のために泣き度いやうな氣がする。何故だらう。彼女の前に云つたやうに單なる俺のエゴイスムスからだらうか。否え、それればかりではない。慥かに他のあるものが動いてゐる。俺の心の底には、俺のエゴイスムスを壓する、不思議な強い力が目覺めて來たのだ。俺ははつきりその力を感ずる。俺は今こそ躊躇なしに彼女の手を乞ふ事が出來る。交りけなしの魂を彼女のヘルツの中に置く事が出來る。俺は進んで斯う云へるのだ。――運命の籤をもう一度撰び直しなさい――と。否や、

これは皆んな俺の己惚れだつた。彼女はきつとこれと同じ籤を引くだらう。彼女の運命を支配するものは、もはや決して俺ではない。もつと高い世界の光である事を俺に思ひ知らせるだらう。——堪らない事だ。恥かしい事だ。俺は運命に對して餘り傲り過ぎた。機會を輕蔑し過ぎた。或る瞬間の一歩が、永久に取り返しのつかぬ一歩である事を考へなかつた。それが十年後の今、怖ろしい石となつて俺の額を打つたのだ。河は深かつた。溺れたのは誰でもない。一番安全でゐた積りの俺自身であつた。

河田が奥の入口から這入つて來る。第一場の彼とは別人の如く、やつれて、元氣がない。二人は舞臺のまん中に立つて、顔を見合せる。

加瀨。君も苦しい河を渡つたね。

河田。喜劇的に見えるだらう。君には。

加瀨。——僕の顔をよく見玉へ。今までこんな顔つきをしてゐた事が一度だつてあつたかい。僕の鼻は昨日までの感情を失つた。口許ももう[illegible]だ。そんなものは皆んな僕の顔面からたゝき落されてしまつたのだ。——委しい話はゆつくりするがね。

河田。姉との古いローマンなら僕も聞いた事がある。

加瀨。その古いローマンと云ふ奴は、閉ひのむづかしいジャム見たいなものだ。樂しんで藏つて置いた壺の蓋を取つて見ると、大抵、味が變つてゐる。砂糖の甘い夢の代りに、酸つぱい人生のみが殘つてゐる。

河田。——あの女のやり方は、ジャムの酸つぱくなつたのに肝癪を起して、壺までたゝき割らうとしてゐるやうなものだ。

加瀨。兎に角、妙な機會で僕等は初めて直面(ひためん)で向ひ合つた譯だ。さうは思はないか。

河田。——君とだから、まあ我慢は出來る。

加瀨。君らしい事を云つたね。ところで此處まで來ると、僕等の從來の附き合ひ方も自然變更しなくち

やなるまい。さあ、遠慮は要らない、僕に出來さうな事は何んでも云ひ玉へ。

河田。すまないが、あの女をこの家から連れ出して呉れないか。あの女は自殺するかも知れない。——それとも僕を殺ろす積りでやつて來たのかな——兎に角ピストルを持つてゐるのだ。——あの黒いバッグに這入つてゐるのだ。

加瀨。つまり、この家でやられては困ると云ふのだね。

河田。まあ、さうだ。外へ出ると氣も變るだらう。

加瀨。家(うち)は何處だ。

河田。小石川第六天××番地の伯母の家に居るのだ。

加瀨。よし、車を云つてやり玉へ。

（河田がベルを鳴らす。小間使が這入つて來る。）

河田。小石川まで車を二臺。間違ひなく二臺だよ。大急ぎだと云ふのだ。

（小間使は去る。）

加瀨。——良子さんは何をしてゐる。

河田。——姉は二人を妥協させる積りだらう。併し、それは六ケしい。あの女は姉にも、光子にも、亦僕自身にすらもどうする事も出來ない、强い力を握つてゐるのだ。

加瀨。——子供があるのだな。

河田。問題はたゞそれだけだ。その一つの事だ。あの女は法律的にその子供の母親たる事を要求する。光子は僕の庶子である事をさへ認めさせまいとする。——これでどう妥協が出來るものか。

加瀨。——それで主人公の小さい先生は、君達のおごたごたなんぞにはお構ひなしに、チョコレートの夢でも見ながら寢てゐやうと云ふのだ、今頃は。何んと云ふ皮肉(イロニイ)だ。

河田。——何處までも皮肉(イロニイ)だ。僕は今日まであの小さい坊主を自分の子供だなんて、しみじみ考へた事

は一度もなかつた。今朝あの女から厄介な話を持ち込まれた時には、いつそあんなものさへなかつたらと忌々しい氣持がした。ところでどうだらう。話がこんがらかつて、面倒になつて來るに從つて、あの小つぽけな小僧と、僕自身との絶ちがたい運命が、はつきり感じられて來る。あいつは僕に不意打ちを食はした。僕を小つぴどい目に合せた。あいつは僕のわなだつた。つまづきだつた。それでゐて僕はあいつが憎めなくなつたのだ。反對にだん／＼可愛くなつてさへ來た。實際あの女なんぞには毛頭未練はないが、あいつは失ひ度くない。あれはどうしても僕の子供だ。

加瀨。　あの奧さんも同じやうな事を考へてゐるのだ。要するに。

河田。　それは公言してゐる。

加瀨。　——大きな意志だ。自我以上の自我の發現だ。ねえ、さうは感じないか。

河田。　——僕もそれに氣がついた。その時、僕の立場が二重に恐ろしくなつた。今まではたゞあの女さへ一人をはね飛ばせばいゝと思つてゐた。それは又實際譯のない事だ。僕の惡の分子を少し露骨に出しさへすれば直ぐにも出來る。ところで今は場面が變つた。僕はあの女の押しつけに來たものが欲しくなつたのだ。兩手に見せびらかしてゐるものに引きつけられる。腕づくでも奪ひ度い氣がし出した。——それで取るわけには行かない。欲しくない顏をしてゐなければならない。目もくれてはならない。假りにこの弱味を見せやうものなら、あの女は忽ち僕の虛につけ込んで來るに極つてゐる。さうすれば今度は光子の謀反だ。どちらに行つてもスキラとカリブディスだ。どうすればこの難所がきりぬけられるだらう。僕は自分の航路に何の自信もなくなつてしまつた。

加瀨。　——エゴイスムスの難破人がこゝにも一人ゐた。

光子が這入つて來る。

光子。――お車が參りました。

河田。〔奥の方を目くばせして〕どんな模樣なのだ。

光子。あの人はひどく泣いてゐるやうですわ。私はわざと座を放したのですけれども。――私の前にはあんな威張つた、高慢な口を利いてゐた人が、みえもなく泣きくづれてゐます。――

河田。――姉さんが旨くやつてくれるといゝがな。

光子。――姉さんは初めあの人の云ふ事をぢつと聞いてゐました。あなたのお心持ちはよく分かります。私も子供を一人持つてゐますからと仰しやいました。そして病院の兄さんの事を話して、姉さんの、黑い、いゝ魂の赤ん坊だと申しました。

加瀨。――俺は、ぢや、あの人の何なのだらう？

光子。――泣いてゐる聲が聞えますよ。ほら。――何を泣く事があるのでせう。あの人に。あんな横着な、いゝゆすり見たいな眞似をしに來た人に。泣くなんて柄にないわ。

加瀨。車の來てゐる事を云つた方がよくはないか。

河田。さうだな。こんな工合だと穩便に引き取るかも知れない。

光子。――こちらへゐらつしやいますよ。姉さんと御一緒に。

〔延子と良子が奥の入口から這入つて來る。〕

加瀨。――小石川の方へお歸りださうですね。道順ですから御一緒にお伴いたしませう。

河田。――延子さん、加瀨君が送つて下さるさうです。車が參つてゐます。

延子。――では、御暇乞ひを致します前に、〔良子を顧みて〕此處で申上げてもよろしう御座いませうか。

良子。――加瀨さんへの御遠慮なら御無用ですわ。――でも、友情のこんな舞臺裏まで覗かせられるのは、却つて御迷惑でせうか知ら。

加瀨。——否や、今日は僕等は、好きな煙草の名前以上のものをお互ひに知り合つたのです。ねえ 河田。僕は此處にゐる事にするよ。

河田。——いゝとも。——併し何を云ひ出す積りなのだらう。

延子。——では、光子さんもどうかお聞き下さいまし。私は、今日申上げました事を、一と先づみんな取り消しに致さうと存じます。

みんな驚く。良子のみは落着いて、優しい、慰はるやうな態度で延子に注意してゐる。

延子。——私にこの決心を致させたものは、良子さんの一言で御座いました。——良子さんは私の事情を、ようくお分かり下すつて、そして少しも非難なさらないで、いろ／＼優しく慰めて下さいました。私にはこれは意外な事で御座いました。私は私の歩いて來た道を、ようく存じてをります。今では批評家の目を以てさへも見る事が出來ます それと一緒に、其足跡を明からさまに人の前に示したならば、必度、非難され、責められ、嘲られ、輕蔑されないではすまないのを知つてをります。私の道は間道で御座いましたから。私としては通らなければならない道ではありましたが、人倫の大道では御座いませんでしたから。今私を打ち、苦しめ、辱かしめるものはこの覺醒で御座います。私の惱みはこの間道から正しい大道に出ようとする惱みで御座います。でも、誰が其處まで私の中へ這入つて考へて下さいませう。人々はたゞ初めからその大道によらなかつた私の愚かさを咎め、今日の破滅と苦悶を嘲る計りで御座います。良子さんだけはさうでは御座いませんでした。良子さんは私を咎める前に、私と共に苦しんで下さいました。私の傷ついた生命を、一緒に悲んで下さいました。私のために涙を流して下さいました。久しい間、私はどんなにか斯ふ云ふ涙に飢えてゐた事で御座いませう。私は本統にうれしう御座いました。その時、良子さんが仰しやいました。——

最後に、たゞこれだけの事をも一度考へて御覧なさいませ。あなたが要求なさる事は、皆んなお子さんのため――子供に父親を求めるためだと仰しやる主張と意志に、又意志を裏付ける感情に、一分の隙もないでせうか。混り合つたものはないでせうか。何かゞ隠れてをりはしないか。犯してはゐないか。祭壇の前に立つても誓へる言葉であるか。――怖ろしいのは、思ふ事と、言ふ事と、行ふ事の間に、假装した悪魔の潜む事だと仰しやいました。この一言を聞いた時、私はびつくら致しました。そんな筈はない。どうしてそんな筈があられよう。良子さんも餘んまりな事を聞かせて與れたと思ひました。矢張り、私を分つては下さらないのだと失望致しました。お恨みにも思ひました。――その下から、何んと云ふ矛盾でせう。私の心の底には、かすかに震え、戦くものが生じました。明るみを憚れる、黒い、醜い何者かゞ、共處にうごめいてゐさうな氣が致します。私は氣遣はしくなつて參りました。その中を覗いて見るのが空怖ろしくなりました。

私は結婚しなければならないと申しました。子供のために、子供に父親を持たせてやり度い爲めばかりに。そして、その父親と私との關係は子供を中に置いてのみ意義のある關係で、それを他にしては何んのかゝはりもない、他人と他人である、と申しました。その人と私との中のことは、一切過去の夢として否認致したので御座います。火はみんな灰になつてしまつたと斷言いたしました。私の心の底に、假りにもこの口を裏切るものが潜んでゐましたなら、私はかたりにならなければなりません。女詐僞師にならなければなりません。何んと云ふ怖ろしいことで御座いませう。私はかたりではない、女詐僞師ではないとはつきり叫ばうと致します。と、何者かゞ私の咽喉を壓しつけます。お前は矢張りかたりだと云ふ聲が聲えます。子供の名の下に我慾を挾んでゐるかたりだ。父親と一緒に戀人をも取り返さうとしてゐるかたりだ。えらさうな主張の

裏に、偏見と、たくらみと、嫉妬と、憎みを秘してゐるかたりだ、と云ふ聲が聞えます。その聲が怖ろしう御座います。――怖ろしう御座います。――

光子。　――やつと泥を吐いたのだわ。

良子。　――光子さん――

光子。　――私にはちやんと分つてゐたのです。――

延子。　――私は決心いたしました。この聲に打ち勝つ自信の出來るまで、私は子供と離れなければならない――と。

河田。　――この女のやり方はなんでも斯うだ――子供はどうする積りです。

延子。　――子供は良子さんが御預かり下さいます。

光子。　――姉さん、何んだつてそんな事を引き受けなすつたの。私は存じませんよ。あとで何んとか仰しやつたつて。そんな子供のこと、私とはこれつぽつちも關係のない事だと思つてゐらして下さいよ。

良子。　――そこに氣[illegible]ませうからね。――[illegible]私は、私の[illegible]もう一人ふやしただけの事ですよ。

加瀨。　――俺は何んだらう！。俺は何んだらう？

光子。　――もの好きね、姉さんも。――兄さん――人のお世話でもう澤山な筈ぢやありませんか。

良子。　――どうして、私はもつと〳〵慾張りにならなければなりませんよ。私の袋はまだ〳〵貧しい――。

延子。　――良子さん、私はあなたを信じてをります。あなたの愛を信じて子供と離れるので御座います。それが、どれほど勇氣の要る事かはお分かり下さいますでせう。それはもう、云ひやうもない程、辛い事で御座います。あの子供の傍にゐない生活と云ふものは、とても想像いたされないので御座います。でもどれほど苦しくとも、私は斷行いたさなければなりません。あの子供のためにも、亦私のためにも。今まで

通りに一緒にゐましたのでは、子供のための願ひと、私の慾とがどうしても混り合ひます。自分と子供と、二つの影が邪魔し合つて、いつまでも私は自分の眞實の姿を見る事が出來なくなります。――いゝえ、私はどうあつてもそれを攫まなければなりません。本統に何が欲しかつたのか、父親か、昔の戀か、はつきり攫んだものを持つて、その上でもう一度皆樣の前に現はれなければならないので御座います。

良子。　お子樣は、その時までたしかにお預かり申してゐますから、御安心なすつてゐらつしやいまし。

延子。　有り難う御座います。――その時こそ私はもうかたりではないので御座います。子供の名で來ようが――また私自身の名で來ようが――

光子。　どちらにしろ、ひとの持つてゐるものを奪はうとなさるのですもの。かたりでないなら、それは物取りと云ふものですわ。

延子。　――いゝえ。無理な取り方は致しません。また、しつつこいおねだりも致さない積ですわ。たゞ私の持つてゐるものをあの人が欲しくなつた時、あの人の持つてゐるものと、取つ換へようとするだけの事で御座います。――あの人は、屹度欲しくなるに相違ない。――何に換へても屹度欲しくなるに相違ない。――

河田。　――たまらない。――君、どうかして連れ出して呉れ。早く。

河田は光子に合圖して二人で去る。延子はこれをぢつと、見送つてゐる。

加瀨。　――では、ぼつ／＼出掛けうぢやありませんか。僕は、一と足先へ失禮して玄關でお待ちする事にします。――奥さん、直ぐとゐらつしやい。

加瀨が去る、正面の入口（玄關）の方へ。

良子。　――それがよろしう御座いますわ。ねえ、延子さん。お送りいたしませう。

良子の言葉も耳に這入らぬ樣子で、延子は矢張ぢつと立つてゐる。

良子。どうなさいましたの。御氣分でもお悪いのでは御座いませんか。

延子。——良子さん。私の一生は、もうこれでおしまひになつてしまふので御座います。——

良子。何を仰しやいますの。可愛いお子さんの事をお忘れになつてはいけません。ね、たゞ、何もお子さんのために、御辛抱なさいまし。

延子。——子供は結局、父親の手に渡りますわ。——あの人はきつと欲しくなります。どんな損な取引きも、そのためには惜まない日が必ず參りますでせう。でも、あの人の欲しいのは、子供だけで御座います。私にはようく分かりますわ。父親の名と、子供との取り引きさへすんでしまへば、何がその後に殘りませう。あの人と私の間には、與るものも、貰ふものも、もう何一つ殘つてはゐないので御座います。——それで生きて行けると思つてゐました。今朝まで私はそれを信じてゐました。——否え、それがすべてのまちがひのもとで御座います。——子供と私のあひだには、たゞ一つのものでなければなりませんでした。——離れてはならなかつた。一つの望み、一つの幸福に、しつかり結びつかなければならなかつたので御座いました。——それが出來さへしたら——あゝ、それが出來さへしたら——〔泣く〕

良子。——お可哀さうに——

延子。——私は矢張り自分の幸福が捨てられないので御座います。その黄金の鍵を握つてゐなさる光子さんが羨ましいので御座います。——妬ましいので御座います。良子さん、私をお憎み下さいまし。私は美しい名の隠れ簑に隠れて、あなたのお姉さんの幸福をねらつた者で御座います。——私の姿はもうはつきり現はれました。なんと云ふ醜さでせう。何んと云ふみじめさでせう。——

良子。——あなたは、御自身を餘り惡いものになさり過ぎますわ。

延子。　――いゝえ、この上、私を甘やかして下さいますな。鞭打つて下さいまし、責めて下さいまし。世間のみんなと同じやうに、指をさして笑つて下さいまし。――でないと、この惡もの丶私は、あなたの愛に隱れて、又どんな事をたくらむかも知れません。――自分でも知らずに、氣がつかずに。――それが怖ろしい――私は生きて行くのが怖ろしくなりました。―

良子。　――さう一圖に思ひ詰めてはいけません。私には、妹も氣の毒なら、あなたも御可哀さうですし、どちらを、どちらと云ふ事は御座いません。まして、あなたを憎むなんて事がどうして出來ませう。私には、あなたの一圖な、立派な心持ちが、ようく分つてゐるので御座ます。――そのあなたと一人の妹とが、斯んな痛ましい運命の兩端に立つて、爭つて、苦しんでゐるのを見るのは、云ひようもない辛いことですが、まあ、それはそれとして、何より大事なのはお子さんですからね。私は斯う思ひますの。そのお子さんをあなたも全くあなた一人のものになさり過ぎないやうに、光子も亦、あなたの子供だ、自分の子供でないなんて區別を立てないで、――私の流義ですと、さう、何んと申したらいゝでせう――偶然な、且つ神秘な機會で、天から預かつた靈魂の赤ん坊と云ふ風に、考へる事が出來たらと思ひますの。――自分の子供であつて、自分の子供でなく、また他人の子供であつて、他人の子供でもないので御座いますね。持主はたゞ一人しかゐらつしやらない――人間はたゞその方から、大事な生命の保管を托されてゐるのではないでせうか。――ですから、私意を挾んではならない、我執を加へてはならない。地上の愛のうち、一番純粋な、一番高貴な愛で、愛し、育てゝ行かなければならないので御座ますわ――

延子。　――それより他ではなかつた。私の行かうとしたところも――たゞ路が違つてゐたのです。

良子。　――この世の中のたゞ一つの大事な仕事―

ね、あなたと光子とが小さい感情を捨て合つて、たゞそれ一つに心を協せる事が出來さへしたら、と私はそれが最後のたのみに致してをりますの。――私は祈つてをりますわ。――お子さんのために、あなたのために、また光子のために――

加瀨。 〔玄關即ち正面の入口の方から〕良子さん――奧さんにさう申して下さい――余りお遲くならないうちに出掛けませう。

良子。 ――〔正面の入口の方へ向つて〕今直ぐと參ります。――では、お別れにいたしませうね。明日にもまた、私からお伺ひ申しますわ。

延子。 ――明日？――明日は……

良子。 ――お留守で御座いますか。

延子。 ――え、否え。――あ、私、手さげをあちらのお座敷へおいて參りましたが……

良子。 ――取つて參りますわ。

延子。 ――私でなければ分りませんで御座いませう。

良子。 ――さうですか。では、お歸りになつて直ぐとゐらつしやいまし、私は加瀨さんへさう申して參りますから。――お坊ちやまがお待ちになつてゐらつしやいませうね。

〔良子は正面の入口へ去る。延子は奧の入口の方へ行かうとする。〕

延子。 ――あゝ、坊や、坊や、私の可愛い坊や。お母樣を待たないでお呉れ。――こんなお母樣を當てにしないでお呉れ。――お母樣は、お前のためばかりには生きて行かれない事が分つたのです。――と云つて、お母樣のために生きる道は盡きてしまつた。暗い、まつ暗な世の中になつた。――でも、お前は生きてお呉れ。何處までもまつ直ぐな、いゝ人間になつて生きてお呉れ。――屹度生きてお呉れ。――その力は自然とお前に備はつてゐる筈だから。母樣はそれを信じます。お前をこの世の中に送つた時の、神樣の賜物を信じます。さう、母樣から離れて、お前は今日からそ

神様のお子になるのです。母様はそれを信じます。……
でも、何んと云ふ悲しい別れ方をする事だらう。——
——坊や、可愛い私の坊や。（泣き伏す。）

正面の入口に近く良子の呼ぶ聲がする。

良子。　——延子さん、延子さん。

延子はその聲に驚いて急いで奥の入口へ去る。良子と加瀬が正面の入口に現はれる。途端に奥の方でピストルの音がする。

加瀬。　しまつた。

良子。　——お可哀想に。——お可哀想に。……

二人は奥へ驅け込む。河田と光子が續く。舞臺は二三分間空虚。河田がまつ青な顔をして出て來る。無言のまゝ部屋の中を行つたり來たりする。光子が奥の入口からぢつとそれを見てゐる。

光子。　何を思つてゐるのだらう。あの人は。——
今、あの胸の中に思つてゐる事が知り度い。——

——（幕）——



おかめ笹

永井荷風

一

富士見町○丁目○番地といふ番地ばかりを目あてに山の手邊へはあまり來た事のないものが初めて鵜崎巨石の住居を尋ねると、近處一帶の樣子からこゝも同じく待合ではないのかと暗い晩なぞはわけて途迷ひするさうである。然しそれは鵜崎の住居が意氣に艶めいて見える譯でも何でもない。矢竹が二三本ひよろひよろと生へてた小さな門のある普通の二階家で、晝見れば滅多に拭いた事もないらしい格子戸の内には、泥のついた古下駄が亂暴にぬぎ捨てゝある隨分ときたならしい古びた借家であるが、電車通から鳥渡曲つたこの横町は鵜崎の家をのぞいて殆ど門並藝者家と小待合ばかりになつてしまつたが爲めである。しかも此の商賣に向くやうにと新しく建直された家は僅に二三軒で、後は大抵今まで普通の人の住んでゐた古家をば其まゝ門口の電燈の名前を書替へた位の事、中にはこれが客商賣の家かと呆れるばかり二階の障子の破れたのを張らぬ

家さへある位なので、つまり鵜崎のちよむさく住荒した二階家もその汚れ目がさして目立たぬと云ふ譯である。意氣だとか華奢だとかいふ事からではなくて、好加減ちよむさいと云ふ處から待合茶屋に見違へられると云ふのも甚不思議な次第である。

主人は年の頃四十前後、五分刈のせいかまだ白髮は目につかぬが狹い額にはもう大分深い皺がきざまれてゐる。小柄ではあるが一體にがつしりとした身體付。色の黑い眼の大きい頰のこけた顏は眉毛と口髯の目立つて濃い處から何處となくせいこましく、締があり過ぎて却て怖いやうに見られる位。洗洒しの絣の一重物によれ〳〵になつた兵兒帶をだらしもなく後で結び、毛脛のみか褌までも見えさうな大胡座。土鍋を側に、枠へ張つた繪絹へ頻に礬水を引いてゐたが、横手の窓から次第々々にさし込む西日に顏を照され、鵜崎は顏をしかめながらぬッくと立上つた。けれども別に窓の簾を下さうともせず、二階の座敷の眞中に立ちすくんだまゝ大きな眼を一層大きくして窓の外をのぞいた。

窓のすぐ下は椎の若木を目かくしに植込んだ待合の小庭である。この春招魂社の祭時分までは保險會社か何かへ勤める人が住んでゐたが引越すが早いか明月といふ今の待合になつたのである。欄干をつけた二階の眞向は道路を隔てゝ地面が一帶にずつと高くなつてゐる舊華族何某家の裏手で、頑丈な石垣を築き上げた上にも又頑丈な土塀越し、檜と吉野櫻を植込んだ中に餘程年數のたつたらしい榎か何かの大木が一本往來の眞中まで蔽ひ冠さつてゐる。石垣の盡きる處、地面のがつたり低くなつた處からは芋屋車屋煙草屋荒物屋なぞがゴタ〳〵と續いて山の手の裏町のさびれた光景をなしてゐる。

屋敷の榎にはいつか蟬の聲もなくなつて、九月も早や半を過ぎたが二三日前からいやにまた蒸暑く、ち

りくする西日を受け、往來にひつそりとして其の邊の藝者家から出入りする女、駒下駄の音も聞えない。隣の待合では山出しの下女が襷を端折つて頻に二階の縁側を拭いてゐるのが垣越しにすけて見えるばかりであつた。鵜崎は西日のとゞかぬ床の間の前に胡坐をかき、續けざまに手を鳴しながら、巨石筆とした掛物の山水を今更らしく打眺めた。

生際の薄い手束の髪ぼう／＼と振亂した細君らしい痩せた身長の高い女が、汚れきつた白かなきんの前掛で手をふき／＼襷掛けのまゝ上つて來た。おでこで、出齒の馬面、見るから艶氣なくすがれてゐる上に塵ほども身なりをつくろはぬので年の程は亭主よりもぐつとふけて見える位である。

「お慶。」と鵜崎は仔細らしい調子で、「駒形の緑陰堂まで出掛けるから、夕飯は早目にしてくれ。」

「もう何時で御在ませう。」

「もう四時過ぎだらう。」と鵜崎は唯髯をひねりながら眉をひそめて壁の西日を見てゐる。

「あいにく今日はまだ何にも買つて御在ませんけれど。」と妻のお慶は疲れたやうにぺたりと縁側に座る。

「晝に食つた新芋が殘つてゐるだらう。鮭ももうないのか。」

「腐りやしないかと思ひましていたゞいてしまひました。」

「新芋はお前まだ高いもんだぜ。御料理屋で使ふ位だよ。無暗にお前の惣菜にされちやたまらん。」

「玉子と摘菜が御在ますから御したしにでも……。」

鵜崎はもう面倒くさいと云ふ風で、「何でもいゝ。早いものがいゝ。」

「はい。」と細君は立かけて始めて氣がついたやうに、「大變日がさし込みますね。」

「簾を下して置け。今の中湯へいつて來やうかな。」と鵜崎は欠を噛みしめて、「庄太郎も連れて行かう。家にゐるか。」

「今日はどうしたんですか、まだ學校から歸つて參りません。」と簾を下す。

「さうか、ぢや爲次をつれて行かう。」

「あなた。爲次も此頃は言ふ事をきかなくなつて仕樣がなくなりましたよ。私が用をしてゐる中に内所で學校の包みを臺所へ投込んで遊びに行つてしまふんですよ。この裏の藝者家の子供とお友達になつてからほんとうに皆な仕樣がなくなりました。昨日なんぞも、あなた、夕方の御飯だつていふのに二人ともまだ歸つて來ないんでせう。今の中に嚴しく小言を云つて下さらないとほんとに困ります。」

鵜崎は急に汚い出齒をむき出して饒舌り出したお慶の顏を不思議さうに眺めて居たが、「それぢやいよ〳〵何處かへ引越すかな。」

するとお慶は急に元氣づいた樣子になり臺所のことも打忘れたやうに膝を進めて、「御屋敷の御近處に空いた家があるといゝんですがね。さうすれば何かにつけてあなたも御便利でせうし、私だつて先見たやうにちよい〳〵御手傳ひにも伺へますしね……。」

「あの邊は大きな屋敷はかりだよ。吾々の借るやうな家はなさゝうだ。」

「何方でも能御在ます。こゝぢや御用があつて家へいらつしやる方にも全く御氣の毒です。佐倉の弟御さんなんぞも此のお正月お出での時、軍服を着ちや氣まりがわるくつて此の通は通れなくなつたつて、

さう御に有つてゐらしつたぢやありませんか。その時分から見ると[illegible]んですもの。すぐお隣まで待合になつ了つたんですから。」

「これぢや全くやりきれないな。喜んで遊びに來られるのは屋敷の若旦那ばかりさね。はゝゝゝは。」

「あなたは冗談ばつかり云つて笑つてお居でなさるけれど、あの方の事ですもの、何かひよつと間違いでも出來やうものなら、お屋敷の方へも申譯がありません。」

其の時突然隣の待合から、「只今お二階は、掃除をして居りますから。」と客を案内する甲高な女の聲。

「藝者だ藝者だ、二三人呼べ。」ともう何處かで呑んで來たらしいお客の怒鳴り聲。

「なか／＼繁昌する。驚くべきものだ。」と鵜崎は笑ひながら髯をひねつたが、お慶は何とつかず溜息をついて下へおりて行つた。つゞいて鵜崎も座を立ち机の抽斗から湯錢を取出し、欠伸をしたついでに又鳥渡窓の外なる待合の方を尻目に見返しながら聽てのそり／＼梯子段を降りかけた。

鵜崎は早晩どこへか轉居しなければならぬと思ひながら、何しろ十年近くも住み古してしまつたので、つい其日／＼の事に追はれてそのまゝになつてゐるのであつた。鵜崎はもと中六番町に居第を構へてゐた帝室技藝員内山海石といふ畫伯の玄關に長年食客をしてゐたのであるが、好加減年も取つて來るので、先生の媒介でこれも同家に多年仲働をしてゐたお慶を娶り始めてこゝに家を持つたのである。その頃この通には電車通の方へよつた處に古くから居付きの待合らしい家が二三軒あつたけれど滅多に三味線の音も聞かず通る人の目にもつかなかつたので、鵜崎は中六番町なる海石先生の屋敷からあまり遠くない處をと、この邊一帶の横町を足にまかせて貸家をさがし歩く中、現在目の前なる某邸の石垣と茂

た樹が目につき日當りはよくないかも知れぬが至極靜さうな裏通り、仕事をするにもよからうし、それに小さいながら門があつて家賃が八圓とは格安だと大喜びで取極めたのであつた。翌年長男の庄太郎が生れ二年たつて又次男の爲次が生れたが、其の頃までこの裏通は日が暮れると氣味の惡い程寂として冬の夜などどうかすると向のお屋敷の樹に梟が鳴きますとお慶がよく怖がつた位であつた。

鶴崎巨石と云ふ名が前後にたつた一度文部省公展覽會の陳列目錄に載せられたのも此の頃の事である。鶴崎は前後に引つゞいて六七回毎年出品したのであるがいつもきまつて落選してしまふので、審査員中に内山海石先生と云ふ後楯がありながら此の調子ではいよ〳〵以て心細く、次第に意氣も沮喪するし、生計も追々小供の大きくなるにつれて苦しくなつて來る處から、展覽會の仕事は萬一當選した處で買手がなければつまり時間と繪具代を損するばかりだと遂に功名の念を斷つた。もと〳〵鶴崎は極めて薄給な官吏の家に生れ、自分が好んで畫工になつた譯ではない。彼の父は巨石を頭に男の兒三人、娘一人にそれ〴〵高等の敎育を授けて行く資力がないと知つて、男は皆官費で學問させた揚句運さへよければ總理大臣にでも警視總監にでも何にでもなれる軍人、女は師範學校に入れる事にした。で現に二番目の弟は今大尉となり佐倉の聯隊に勤務し末は海軍少尉候補生になつてゐるが、長男の鶴崎は不幸にして軍人は身體檢査で刎ねられ、商船學校へ廻つて見たが矢張同じこと。高等師範學校の學術試驗に不合格であつた。折から世話する人のあるまゝ一時唯何といふ事なく内山海石先生の屋敷へ食客に住込んで、年と共にいつか畫の道を習ひ覺え此を職業とするやうになつた次第である。かゝる身の來歷々顧み其の畫才に乏しきを嘆じて鶴崎が漸く失意の淵に沈みかけて來た頃、富士見町の花柳界は日一日と發展

して鵜崎の家の近處を犯し始めたのである。するともと〳〵人[illegible]半纏引かけて細帯のまゝ洗湯への往來に人の家の門際[illegible]はず通りすがりに大きな聲して聞くに堪へない猥な話をして行くものもあるので、お慶は最初馴れぬ中は此方から氣まりをわるがつて[illegible]にも湯にも行きかねた位であつた。

この間に家賃が一圓づゝ二度上つて十圓になつた。家主は藝者家なれば拾貳參圓にしても結構借手があると見て折あらば猶追々値上げもしかねまじき勢。それと共に鵜崎がいづれは晩かれ早かれ引越さねばならぬと思定めたのは、中六番町なる海石先生の屋敷がいよ〳〵市區改正で玄關前四間通買上げといふ事になり先生はそれを幸に代々木澁谷と諸處郊外の宅地を詮議の末遂に芝の白金と決定して普請に一年半ばかりを費した後、この夏新緑の頃既に盛大な新宅開の披露をされた。鵜崎は師家の玄關を出てからも相變らず食客の時分と同じやうに其家の執事をして居るのである。

二

上汐に打上げられたやうな古下駄を引ずり古手拭片手に鵜崎は今しもお湯へ行かうとする我家の門前、
「おい、君、鵜崎君。」と呼びかけられて振返り、
「や、坊ちやん……。」と笑ひながら輕く頭をさげた。
「湯か。」
「いえ、かまひません。」
「さうか、今日はすこし眞面目な用だ。」

「はァさうですか。」と鵜崎は矢張にや〳〵笑ひながら坊ちやんの顔を見た。

坊ちやんと云はれたのはパナマ帽に白セルの背廣白い半靴太い洋杖（ステツキ）を腕に引掛けた見上るほど丈の高い恰幅（かつぷく）のいゝ三十がらみの男である。腹の出張つた身體（からだ）のみならず顔まで圓々と肥つて酒氣（さけ）を帶びてゐるかと思へる程血色よく、頰の肉の出張つた爲めに象のやうな小さい目はいよ〳〵細く見え、小鼻の開いた大きな鼻ばかりが一段目立つて顔中にはびこつてゐる。鵜崎の先生なる内山海石の息子幹といふので、スパ〳〵ふかす葉卷の匂高くあたりに漂はせながら、然しさう云へば何處やら少し舌たる調子に態度のみは悠然として「いやに笑ふな。まァ湯へ行くなら行つて來たまへ。上つて待つてゐてもいゝ。」

「湯は後にいたしませう。實はこれから一寸淺草まで用たしに行きますが、まだかまひせん。」

「淺草へ行くのか。それぢや君、その邊まで一所に行かうよ。途中でゆつくり話をしやう。細君の前ぢや少しいかん事があるんだ。」

「はゝア、さうですか。」

「おい、君、眞面目（まじめ）な話だつたら。いかんなア、さう笑つてちやア、僕の結婚（マリツヂ）についての一件だ……。僕は電車のところで待つてゐる。早く來たまへ。いゝか。」

それなり大きな坊ちやんは大股にすた〳〵行つてしまつた。鵜崎は相變らず仕樣のない坊（ぼつ）ちやんだと云はぬばかりの顔付、そのまゝ我が家の格子戸に立戻つて、

「おい、お慶。もう飯はいらんぞ。」

「あら、どうなすつたんです。」

「屋敷の坊ちやんにつかまつたこ」と内へ上ると共に帯をときながら「一寸お座敷だらうだから[illegible]を伺ふ事にした。往來に待つておゐでだから早く着物を出してくれ。」

お慶は呆れたやうに良人の顔を見たが、其の身に取つても矢張旧主家の若旦那の事とてまさかに困つた坊ちやんだとも言ひかねたらしく默つて、箪笥の抽斗から、もう七ツ下りの紹の羽織に洗洒の薩摩絣、紬の兵兒帯を取出す。

「矢張袴をはいて行かう。いつものセルでいゝ。」と鵜崎は仕度もそこ〳〵急いで電車通に出ると、翰は以前馬場であつた靖國神社前の櫻の下からステツキを振り〳〵出て來て、

「非常に早かつたな。坂上まで歩かう。淺草はどこへ行くんだ。」

「駒形まで參ります。」

「さうか。おや、君、まだ少し早いが何處かその邊で飯を食はう。僕はすこし方角ちがひだ。白山の方面へ行くんだ。」

「坊ちやん、今日の御相談と云ふのは、その方面の事ぢや無いですか。どうです。當りませんか。」

「まづ御推察の通かね。はゝゝゝは。一度は紹介して置くとよかつたんだが、君は僕がさそふといつも巧に逃げてしまふもんだからな。」

「はゝゝは。今度はどう云ふ女です。藝者ですか。」

「まアその邊のところだな。」

「藝者ならまア始末がいゝでせう。事件は餘程面倒らしい模樣ですか。」と鵜崎はまだろく〳〵話も聞か

ぬ先からもうどうやら談判らしい調子に、さすがの坊ちんも少し面喰つた氣味で、

「いや君、今度のはまだ別に手を切らうと云ふ話ぢやない。すこし問題が複雑してゐるんだ。」

九段坂を降りて二人は神保町邊の牛肉屋に上つた。鶴崎は翰が内々での急用と云へばもう女の事にきまつてゐるので、今日も其様子から直にそれと推察してしまつたのである。翰は今年三十一。法科大學をば大抵きまつて一年おき位に落第しつゝ漸くこの夏卒業はしたものゝ無論就職の口もなく今にぶらぶら遊んでゐるのである。大酒呑のぼろッ買で、これまで通學中も再三女で手を焼く度毎いつも鶴崎に頼んで尻拭をして貰つてゐるのである。

最初は大學に進んだ翌年の春に屋敷のそばなる三番町通の唯ある西洋料理屋の娘を孕ませ始末に困つて事の次第を鶴崎に打明けた。それを手始めに次は牛肉屋の女中つゞいてヤトナと呼ぶ賣春婦に引掛つた。女中の方は翰が女の着物と指環とを融通したとかしないとか云ふ事から損害賠償の談判、ヤトナの方は夫婦の約束をして彼方此方と女を引張り廻した揚句馴の道をきめられては女の身が立たないからと三百代言を差向けられ、翰は初めの權幕に似ず忽ち青くなつて鶴崎へ泣きついたのである。これは話が大分面倒になつた例であるが、單に待合や小料理屋の勘定の事でごた〳〵した末鶴崎が頼まれて出掛けた事件を擧げたら數へ切れぬ位であらう。翰は運動家の間には今以て其の名を知られてゐる位、中學から高等學校を經て大學生になつた後までも野球と短艇の選手、柔道は弘道館の二段である。それ等の爲か、學術の成績はいつも不出來なばかりか品行も追々收らぬやうになつて來たのである。學生を墮落させるのは柔弱淫卑な文學ばかりともかぎらぬらしい。翰は教課書も小説も、何に限らず讀書は大嫌ひ。

高等學校の寄宿舍にゐた頃なぞは殆ど手のつけられぬ程亂暴で鵜崎なぞも其頃には時々[illegible]にされた事があつた。酒量は運動できたへ上げた體格相應すばらしいもので、醉へば今だに飽きらはず詩吟とフレーくをやる。一度女の味を覺えてからは醉ふと忽ち手あたり次第相手の美醜を選ばないので、自然藝者なんぞよりも牛肉屋の女中ビヤホールの女ボーイなぞつまらぬものに引掛つて果は手切金を取られるやうな事になるのであつた。

「鵜崎君、今度のはなしは切れるの切れないのと云ふ問題ぢやないんだ。今度僕が正式に結婚するだらう。その事は白山のやつにも打明けて話をした‥‥。」と翰は銚子が來ると共に早速話をしはじめる。鵜崎は始終仔細らしい顏をして、

「それについて何か苦情らしい事を言ふのですか。」

「いや今度の奴は感心に何とも言はん。尤も別に苦情をいふ譯もないんだが、向うさういふ風におとなしく出てゐるからは僕の方でも結婚するからと云つて急に手を切る必要もない‥‥。」

「成程。」

「そこで‥‥そこで君に一ッ頼みたい事があるんだ。それは女の方の事ぢやない。僕の家に對してだ。家へ對して白山でも何處でもいゝから僕に惡い女がついてゐる。その女がついてゐると折角きまつた結婚について萬が一苦情でも云出すと面倒だからと云ふ事にしてだね。親爺から一ッ君の盡力で手切金を取つて貰ひたいんだ。」

「はゝア女の方が何ともいはんのにですか‥‥。」

「言つても言はんでも…それとは君、別問題だよ。僕が直接に何か云つたつて信用がないからね、それで君に頼むんだ。何とでもいゝやうに理由をつけて、ねえ君、一ツやつて見てくれんか。實際僕ァ金がなくつて困つとるんだ。家の親爺と來たら實際お話にならんのだからなァ。僕ァ今だに君、たつた二拾圓しか毎月小使を貰つて居らんのだぜ。」

「それぢやつまり白山の女を利用してあなたが手切金を使はうと仰有る譯ですな。」

「そんな事はまァどうでもいゝから、ね、君、兎に角盡力してくれ。無論君に御禮はする、折半してもいゝ。」

「坊ちやんあなたもなか〳〵隅へは置けなくなりましたな。はゝゝゝは。」

「え、君、いゝだらう。助けると思つて一ツやつて見てくれ。煙草屋だの唐物屋だの方々に借金もあるし、實際窮迫してゐるんだ。」

「どうも困りましたな。拵へ事をして老先生に心配を願ふのは…どうも少しやりにくいですな。」

「その代り君、これが最後だよ。この後は僕もさう世話を焼かさないつもりだ。結婚すれば何ぼ何でもさう馬鹿な眞似もして居られんからな。」

「全くです。老先生も追々お年を取られますし、さう〳〵御心配をかけては全くお氣の毒ですからな…。」

「だから僕も今度の結婚を機會として大に改良するつもりなんだよ。それについて少しまとまつた金がほしいんだ。鳥渡〳〵した借金を奇麗にしてしまはないと、それが引掛になつて、いつまでも切がつか

んからな。」

翰は頻に申譯らしく述立てながら絶えず杯を干しては鵜崎にさす。鵜崎はこの一二年家ではきまつて一合位晩酌をする位酒は好きであるが、然し酒量は到底翰には及べくもないので、牛鍋を間にして對酌してゐると知らず〱飲み過す傾きになる。翰は始終それとなく鵜崎の樣子を窺ひながら、

「急な用事でなければ、どうだ君、今夜は一ツ僕につき合ひたまへ。こゝぢや何だか落付いて話も出來んし……久しく君とも呑まんからな。」

「いや、私はもうこれで十分です。この上呑んだ日には動けなくなつてしまひます。坊ちやん相變らず强酒ですな。一升は平氣でせう。」

「いや何ぼ何でもさうは呑めんよ。鵜崎君、僕は酒も斷然やめて見やうかと思つてゐるんだ。この頃のやうにかう肥つて來ちや苦しくつてたまらんからな。なまじつか節する位なら斷じて禁酒する方が心持がいゝ。僕は何でもさう云ふ流義だ。やるなら大にやる。その代りやめるとなつたら斷然やめる。その方が男らしくッていゝ。ねえ、鵜崎君、大にさうだらう。道樂だつて、止めるとなれば僕はばつたり奇麗にやめて見せるぜ。」

「はゝア、その方はちつと信用か出來ませんな。」

「いや、止めべき時が來れば今夜からでも止めて見せる。女だつてさう何時までも面白いもんぢやない。僕は實際もうよさうと思つとるんだ。結婚を機會にして新生涯に入りたいよ。白山の女もだから折を見て體よく止さうと思つとる。それやこれやの事があるから是非一度一緒に來て貰つて置きたいん

だ。またといふのも面倒だから、ねえ、君、今夜これから、用があるなら島渡でいゝ。まだ早いぜ。決して迷惑なんざ掛けやせんよ。」

　翰は頼むやうな、駄々を捏るやうな、叉命ずるやうな不思議な調子で頻に同行を强いる間も始終盃の取遣りを休ませないのであつた。

三

　翰は呑み出すと一升位は平氣な大酒家であるが不斷家にゐる時なぞは一週間でも二週間でも呑まずにゐられる。これとは違つて鵜崎は毎日少しでいゝからちび／＼味ひたいと云ふ方。三四合が丁度いゝ處、五合以上呑過すと呂律が廻らなくなる。翰はその邊の事をよく知つてゐるので、醉はして白川へつれて行かうと思つたのである。ところが、それと知つてか鵜崎は今夜に限つてなか／＼醉ひさうにも見えない。銚子の數は八九本に上つた後、兎に角勘定をすまして外へ出たが、鵜崎の足元は矢張しつかりしてゐる。

　翰はこゝに於て止むを得ず最後の手段を取らうと決心した。それは我まづ先に亂醉して、連立つ鵜崎に流石自分を捨てゝは行きかねるやうにする事である。翰は電車通へ出ると急に大きな聲で詩を吟じ出したのみか、通りすがりの女にからかひ、彼方へひよろ／＼此方へひよろ／＼よろけながら、ビヤホールと見れば戸外から、「おい、ウイスキーだ。」と怒鳴つて、

「鵜崎君、今夜きり僕は禁酒するぜ。今夜きりだから許したまへ。ねえ、君、いゝだらう。今夜は思殘りのないやうに呑めるだけ呑まう。」

鵜崎は忽ち閉口してこの先どうなるか分らないよりはまだしも自由へ逃込んだ方が無事だと覺悟したらしく、折から巣鴨行の電車が來るのを幸ひ有無を云はず翰を引張つて、それに乘込んだ。

小石川指ヶ谷町の停留場で電車を降りる。紙屑問屋などが目につく何となくごみ〳〵した通りである。右へ曲つて突當りのはづれは本郷西片町邊の崖地がひかへた裏通り、板屋根のぼろ〳〵に腐つた平家(ひらや)立の長屋が並み立ちつゞいた間々に、ちらばらと新しい安普請の二階家、松なんぞ申譯らしく植込んだ家があつて、白山の色町は其處此處(そこここ)に松月、のんき、おかめ、遊樂、祝ひ、いさみなんぞと云ふ灯(あかり)をかゞやかし、金切聲振絞る活惚に折から景氣を添へてゐる家もあつた。

鵜崎は自分の家の近處の事から思合はして、何處へ行つても藝者家のひろまる勢力に今更らしく一驚する様子、あたりをきよろ〳〵見廻しながら、

「翰さん、お馴染はどこです。こゝまで來ればもう逃げはしません。案内して頂きませうかな。」

「其所つき當てから右へ曲るんだ。今夜は用をかゝして實にすまんよ。然し今夜きり明日から聖人君子になるんだからな。まア許してくれ、なア鵜崎、そのつもりで今夜はゆつくり大に吞直さう。」と翰は、崖下の薄暗い裏通り、片側は廣い溝(どぶ)を扣へた屋敷つゞき片側はごみ〳〵した小家の間に待合や藝者家の立交(たちまぢ)つた其の中の一軒、いやに瘤だらけな門の柱に美登利(みどり)と蟲喰ひの板を掛けた家へと鵜崎を連れて格子戸をがらり、靴をぬいで上りかけたが一向案内に出て來る様子もないので、

「何をしてゐやがるんだらう。不景氣だな。鵜崎君、かまはず二階へ上れ。」と翰はそのまゝ案内知つた梯子段の方へと襖を明ける物音に、始めてそれと心付いたか、周章てながら出て來た女中、出合頭に鵜

を拔かさぬばかりの頓狂聲。
「あら。」と云つて、「まアほんとに、びつくりしちまつたわ。」
「お客が來たのにびつくりする奴があるかい。」
「だつて、旦那、この頃はやかましいんですもの。」
「はゝゝは。點檢だと思つたのか、馬鹿。おかみはどうした。居ないのか。」と翰は二十貫近くあらうと思れる重みに安普請の梯子段をみし〳〵云はせながら、「鵜崎君、頗る不思議なところだらう。」
鵜崎は翰の樣子と二階の座敷とを唯ぢろ〳〵見廻す。二階は柱の細い木口のいかにも惡い安普請で長押をつけた六疊に三疊、建てゝまだいか程にもなるまいと思はれるのに、根岸塗の壁にはところ〴〵干割が出來、違棚の板は見じめに反り返つてゐる。其の上に瀨戸物の達摩が飾られ床の間には緣日物の盆栽と並んで鑛物見本のやうな何やら分らぬ石ころをば布團をつけた臺の上に載せ、掛物は夜店の品かと思はれる山岡鐵舟の讀みにくい書である。
「坊ちやん。」と鵜崎は何やら仔細らしく髯を拈つた。
「坊ちやんは勘辨してくれ、あんまりお里がわかり過る。」
「いや、失禮々々。つい口癖になつてゐるんで、それぢや翰さんにしませう。」
梯子段に足音がして煙草盆と茶を持つて來たのは四十前後のでつぷりした主婦、色の黑い角張つた顏、肩のいかつた身體つき、眉一文字に、どこやら眼付に劍がある。
「入らつしやいまし。」と云ふ聲も上州なまり、どつしり重さうに坐つたが別にお辭儀もせずおろりと二

人の樣子を見て見ぬやうに、茶をのみながら「大分いゝ御機嫌ですね。」

翰は茶碗をつかむやうにがぶりと茶を一呑して、「おい早く酒だ。」

「もう好加減上つてゐらしつたんでせう。此方ほんとうに猩々見たやうだよ。」

「いゝから早く持つて來いよ。今日は借りやせん。今夜は非常に持つとるぞ。」と翰はポケットを上から一寸叩いて其儘上衣を脫いだ。

「藝者衆は君ちやんに……あなた御馴染は。」

鵜崎は矢張揚々持つて、「君ちやんが來ればそれでいゝさ。拙者は翰君の君ちやんを拜見に來たんだ。」

「鵜崎君、誰か知つてる藝者があるだらう。いつでも君は、僕にはいやに隱してるが、こつそりとなか／＼惡事をやる男だからな。うつかり出來んよ。」

「いや、それならば結構ですが、全く用命者同樣ですな。お話になりません。」

「陽氣にさわぐ人がいゝわね。あなた、お羽織をお取んなさい。唯今お浴衣を持つて來ます。」と女將は降りて行つた。

「鵜崎君、君は全く謹直なのか。君の近處はどうだ。怪しいもんだぜ。」

「近處もあゝ隣同志ぢやあんまり近過ぎで、燈臺もと暗しですな。大した美人もゐないやうですな。」

お梵どんのやうな山出しの女中が銚子に盃洗、燒方のわるい鯛せんべい、ぷんと干物のやうな匂のするのをチャブ臺の上に並べる。翰は先刻牛肉屋で呑んだ時のやうに再び鵜崎へ休みなく盃をさしながら、父海石翁から金を貰つてくれるやうにと執ねく賴むのであつた。翰は中學生の時分から西洋料理を

喰散し高價な舶來煙草や西洋小間物を買散す癖があつた。奢侈といふよりは唯無分別に金を浪費するのである。幾歳になつても赤坊のやうに、あれが欲しいなと思ふとそれを手にしなければ何しても氣がすまない。手にすれば忽ち惜氣もなく打捨つてしまふと云ふ風で、學校からも家庭からも厳しく監督された結果は却ていろ〱惡い智慧を働すやうになつたのである。諭は兩親の慈愛をば寧ろ其の弱味のやうに解釋してゐるので、自分が萬一新聞に名の出るやうな不始末でもしでかすやうな場合があつたとしたら、兩親ばかりが親類一同は一家の名譽の爲めに手をつかねて傍觀する氣遣ひはないとすつかり高をくゝつてゐる。で、來月の下旬いよ〱結婚式を擧げるについてはこれを機會に何とか小使錢がほしいものだとその手段についでは、これまで二三度女の事でぼろを出してゐるから此の際もこれを應用するがよからう。それには從來の關係上鶴崎が是非とも必要ないで、もし二ツ返事にうむと言はなかつたら、一晩それとなく藝者でも買はして幾分の弱味をこしらへさせるより外はあるまい。それには先何でもいゝから呑み潰してしまふのだと諭は手順をきめてゐるのである。

銚子の一二本は忽ち空になつた時、君勇といふ諭のお馴染に、小花といふ銀杏返と三太といふお酌のやうな若い妓が前後して現はれた。君勇は諭が此度大學を卒業する半年程前から買はれてゐるので端折つたお召の上に藤紫の縮緬の羽織、細い金鎖を紐にした流行遲れもこの土地では左程目立たぬものと見える。年は二十前後、すこし癖のある髪をハイカラにした平顏、鼻も低く目も少さいが、七難をかくす色の白さと口元に愛嬌のある八が男の眼をひく處らしい。身體は少さいが厚手の肉付、肩いかつて頸太く座つた腿のあたりは單衣の縫目もいたみはせぬかと思はれる程なので、どこやら藝者といふより

はカッフエーの女ボオイと云ふ事である。

小花といふのは少しふけて二十五六に見えるが實はもう三十に近いのかも知れぬ。色の黒さをかくす厚化粧に、白粉の染りのわるい地肌が一段目に立つ細面、銀杏返に結つて身丈もすらりとしてゐるので、よく云へば仇ッぽい方であるが、いかにも貧相な額と薄い唇薄い髮、一體に品のない顔立から、これは何處となく牛肉屋の姐さんらしい氣がする。

三太といふチビは顔から身體から手足までまるで十二三の小娘のやう。然し眼の縁の黒ずんで雀斑多く頬痩て小鼻の兩側から口尻へかけて筋の見えるのが、燈光の具合で一體の顔立を甚くすさんで見させる。多年柄の小さいのを得手にお酌で身體をつかつた結果と思はれるが、それにしても年はまだ二十にはなるまい。女將は仇つぽい年増の方がもしお氣に召さなかつたら、可愛らしいこの方を、つい二三日前一本になつたばかりよぐらいの事で、何方でもよりどりと云ふつもりであらう。

翰は洋服を浴衣に拔替へ大胡座かいて肱を張り日本酒にビイルのぐひ吞み。藝者が覺束ない調子ながらどうやらかうやらお座付からつづいて都々一三下りハアコリヤ〳〵と氣味のわるい聲を出すと此方は負けぬ氣らしく大きな聲で雲か山か呉か越かなんぞと怒鳴り散して君勇をば殆ど抱きかゝえぬばかり傍へ引つけて、折々一座の藝者さへ呆れるやうなまねを一向平氣な傍若無人の態度。やがて一本迎ひが來て藝者はみんなお直しといふ時分、君勇は急に嘔きさうな心持になつたと云つて翰の膝へ突伏してしまつた。さういへば時々上つて來ては相手をしてゐた上州訛りの女將もいつか目の縁を赤くした程なので、最初の中は馬鹿に景氣よく手並を見せてゐた銀杏返の小花もとう〳〵私ももう駄目よ頭がふら〳〵して

堪らないと、翰がこわい眼を据えて無理に强る盃をば、次第〳〵に受かねるやうになる。その度々あなたやアと助を鵜崎の方へ頼んだ。それのみならず小花はどうやら鵜崎をばまだ何ともきまらない先から獨り勝手に自分のお客にしてゐるらしい樣子、最初から何かにつけていやにデレ〳〵してゐたが醉ふにつれていよ〳〵人目かまはずしなだれ掛らうとする。鵜崎は又始終折を見計ひそつと逃げ歸らうと思つてゐたので、今しも君勇がいよ〳〵心持が惡くなつて來て堪らないとハンケチで口を押へチビの三太と翰とに扶けられて、あたふたと下へ降りて行つた騷ぎに、これ幸ひ早速この隙をと座を立たうとして始めて身體の自由にならないのに心が付いた。何しろ神田の牛肉屋で呑始めた時から、下地は好きな酒、今夜ばかり醉ふまい〳〵といくら氣をしめても、間拔けた强酒を相手の長町場、いつか泥醉してしまつたのでふら〳〵しながらもやつとの事で立上ると、今度は銀杏返の小花がこれも今はべろ〳〵に醉つた揚句は元より耻知らぬ家業の年増盛、このまゝでは歸すまいと夢中になつて鵜崎へしがみ付く。鵜崎は逃げやうとして暫時爭つてゐる中いよ〳〵目が廻つて來て其場に打倒れると、もう起上る力どころか、何が何やらまるで譯がわからなくなつてしまつた。

四

淺草駒形通の綠陰堂と云ふ團扇問屋は鵜崎がまだ內山海石の玄關にゐた時分から扇子團扇などの板下繪また折々は肉筆の揮毫など、鵜崎に取つては絕えず相應の仕事に有りつかせてくれる大事な老舖である。若干かの謝禮を受取つて獨りぶら〳〵電車通を須賀橋まで步いて來て鵜崎は角の蕎麥屋で一酌した。忽ちいゝ心持になつた。實は昨日の晩出掛けやうとした處を突然翰の爲めに白山へ行き思ひがけぬ

實醉に今日は一日仕事も出來ず頭ばかりいやに重たい二日醉、それもこの一合の迎酒でいい具合にすつかりと醉ひを戻して胸もすがすがしく頭も餘程輕くなつた。藝者を上げて無暗矢鱈に呑んだとて何が面白いのだ。家の坊ちやんにも實に困つたもの。一晩に五圓拾圓溝の中に捨てるやうな馬鹿なまねをせずとも世の中に愉快はいくらもあらう……鵜崎は頻にげえいげえいと噯をしながら掛二つに銚子一本勘定はいくらになるかと胸算用した後、あたりに相客のないのを幸、綠蔭堂から受取つた包金をそつと開き五圓札を一枚々々その折目のついたのや緣のまくれたのを丁寧に引伸し、二三度方法をかへて數へた後よく角を揃へて皺にならぬやうに自分の紙入に收めた。

鵜崎は同じ畫筆一本ながら海石翁の如く華族のやうな邸宅を起すものさへある世の中に天分のない身の是非なさは唯根氣のつゞくかぎり稼いだものを一厘一錢人の氣がつかない處へ氣をつけて蓄めるより仕樣がないと考へ出したので、その多寡によらず金を受取つた時と割の安い品物を目付け出した時ほど幸福滿足を覺ゆる事はないのである。紙入は今俄にふくらんだ、蕎麥屋の勘定は元より安く、しかも案外にいゝ酒であつた。鵜崎は外へ出て初秋の夜風に面を吹かれると忽我知らず、

「此地別燕丹壯士髮衝冠古人今何在蕭々易水寒。」と小聲に吟じた。流行歌も義太夫も唱歌も何も知らない鵜崎は湯にあつたまつたり酒に醉つたり好心持でならない時にはいつも此の詩を吟じる。別に理由も仔細もあるわけではない。最初中學校に通ふ折遠足の道すがら友達と一緒に吟じ覺えたのを、後に海石の處へ來てから同じ門生等と新年會や送別會なぞで無理やりに隱藝を強いられた時仕方なしに思出すまゝ此れを吟じた。いつかそれが癖になつて何か唄はうといふ時には自然と蕭々易水寒が出て來るまでの

事である。

茅町の電車通は折から夜店の賑ひ、二三日つゞいての蒸暑さにわけて人出しげく、燈火に照らされた街の柳の川近い風になびくさま何となくまだ夏らしい。鯛佐といふ曲物屋の前を通りかゝつて、鵜崎は綺麗にいろ／＼な漬物の並べてあるのにふと歩みを止め、おのれが晩酌の肴になるやうなものと女房小供への土産らしいものとを買つて片手にぶら下げた。そして猶もぶら／＼と夜風に吹かれる心地好さ、夜店の間を足の向くまゝ向柳原の通をば和泉橋通の方へと厚木歯の日和下駄を曳摺つて行つた。

向からすさまじい音を立てゝ馳け來る自働車に、酔歩蹣跚としながらも鵜崎はそれを避けやうと片側へ歩み寄つた折、ふと路傍に水盤金燈籠手水鉢などを滑き据えた間口の廣い道具屋の店先、隣近處の店よりも一際明い電燈が正面に飾つた二揃の甲冑と何やら古めかしい土佐風の六枚屏風を煌々と照し出してゐるのに、何心なく立止つてづらりと一巡見廻しやがて壁にかけてある五六幅の書畫に目をとめた。

一番手近は極彩色又兵衛風の遊女共の衣はいかにも贋らしい鈴木其一の若草それから次は何やら古碑の石摺に隣して、彩色表裝もぐつと新しい箱に鶏の絹本。鵜崎はこの絹本には何やら見覺えのあるやうな氣がしたので店の土間へ一歩踏み込んだのも道理、たしかに自分の描いたものだと心付いて酔眼を擦りながら首を延して見ると此れは不思議、自分の作ではなかつた。巨石と云ふ署名はなくて其の師匠なる海石の名が書かれてある。妙な事もあるものだと更に々眼をこすり瞳子を据えてよく／＼見ると落款はいつも先生の用馴れた岳陽書樓といふのが押してあるが海石といふ署名は疑ひなく先生の筆蹟ではない。海石翁は鵜崎が師事して以來十幾年作署名に行書を用ひられたことはない。圓山派の正系に屬する

故敗先生は喋溟のやうに必ず落款に偽書でかゝれる。されば云ふまでもなく贋物にちがひないが、それにつけてもこの書はたしかに自分のかいたものだと信ずるだけ鵜崎はどうやら狐にでもつままれたやうな心持がして、急におのれが身のまはり懐中の紙入、手にさげた御佐の曲物の有無をたしかめた後、

「おい、鳥渡その鶏の掛物を見せてくれんか。」と店先へ腰をおろした。甲冑のかげに居眠りをしてゐたらしい十七八の小僧、

「へい、どれで御在ます。」

「箭に鶏……それだ〳〵鳥渡見せてくれ。」

「かしこまりました。」と小僧は指された掛物を取下して鵜崎の前へ持つて來る。

鵜崎は例の如く髯をひねつて「なか〳〵よく描いてあるな。これは矢張昔の人か。」

「いえ、さうぢや御在ません。文展の審査員で帝室技藝員です。この先生のものはなか〳〵道具屋の店なんぞに出る品ぢやないんです。」

「さうか。いくらだ。」

「左様でございますな……。」と小僧は軸の處へ張紙した符牒を見て、「六十二圓、桐のいゝ箱がついて居ります。」

「さうか。」と絶えず髯をひねりながら鵜崎は更に眼を据えて見れば見る程今はまがふ方なく自分の筆である事が判つて來る。それは鶏の足の爪をかく時どうした事か礬水が薄くて繪具がにぢみ出した處から困つて後から草をかき入れて胡魔化した、その跡が今だに氣をつけて見ればよくわかる。鵜崎は一昨年

の森市ヶ谷見付外に新しく店を出した雲林堂といふ書畫屋の主人から依頼されて謝禮も二十五圓と云ふ事まで明に思出した。

「あの若草に蝶々の飛んでゐるのはいくらだ。」

「あれですか、あれはお安うございます、三十圓です。」

道端にうろついてゐた犬がいつか鵜崎の側に置いた鮒佐の曲物の匂を嗅付けてそつと横合から鼻面を突出したのに鵜崎はびつくりして、

「畜生ッ。」と大喝一聲厚木齒で滿板を踏鳴らしながら立上ると共に其儘ぷいと店を立去つてしまつたので、小僧は猶更びつくり藍引ぢやあるまいかときよろ／＼店中を見廻しはじめた。

鵜崎はこれまで内山海石の筆だと云ふ贋物には度々出遇つてゐる。專門の道具屋からも又書畫好の素人からも其の鑑定を依頼されるさへ度々である。然し自分のかいたものをば其のまゝ署名と落款を巧みに取替へたものに出遇つたのは全く今夜が始めてゞある。誠に怪しからぬ事をする奴があるものだ。誰がやつたのだらう。まさか最初の依頼者なる市ヶ谷の雲林堂ではあるまい。雲林堂の亭主は道具屋とは云へない位殆ど素人も同樣なアマイ奴だしそれも今以て内山家にも又自分の家へも始終出入をしてゐるので大方それからそれと人手に渡つて行つた先で遂にあんな事になつたものであらうと、鵜崎は歩きながらいろ／＼考へるにつけて不圖又こんな事を思出した。それは自分の揮毫したもので知らぬ中に海石翁の作になつてゐるものがまだあの外に澤山あるかも知れないと云ふ事である。今夜發見した筍に雛の一幅があるからはその他にもまだ有ると見て差支はない。此後さういふ僞物が諸處方々に現れるやうに

なつてその爲めに萬々一海石翁から自分が故意にやつた業のやうに疑はれてもしかたがない、それこそ實に迷惑千萬、これは打捨つては置かれない……すぐにあの道具屋の店先へ立戻らうか、それともこれから芝白金の屋敷まで馳付けやうかと考へた時、丁度和泉橋手前の電車通へ出た。その邊の店はそろ〳〵表の戸を閉めかけてゐるのもある。折から十時の時計の音と上野の鐘に鶴崎は始めて心付きそのまゝ橋を渡つて九段行の電車に乗つたが、すると間もなく酔つた身體を揺られる心地よさ、まだ單衣の時節なのに片手をふところにしつかりと紙入を押へ、片手には鮒佐の曲物を膝の上に握つて何の心配も屈托もない人のやうにぐう〳〵鼾をかきながら寝てしまつた。

五

鶴崎は染返しの絽の羽織セルの袴に例の厚木齒の日和下駄を鳴しながら翌日芝白金なる内山海石の新邸へ出掛けた。鶴崎は富士見町に一家を構へてからも十年一日の如く別にこれと云ふ用事がなくても大抵三日目位には必ず出掛ける事にしてゐる。その時刻は午前ならば十一時頃午後ならば四時過いづれにしても一度御飯を頂戴すると云ふやうな時刻である。三日目か四日目に鹽鮭の切身一ツの倹約も十年廿年と塵積れば大したものである。鶴崎は内山家へ行くと食客の時分と同じやうに海石先生の繪具をとき筆を洗ひ繪絹に礬水を引く外に葬式の代理や銀行其他の使歩きもする。晩酌から碁のお相手もし夜がふければ勝手に泊つて行く。内山家では一時鶴崎が家を持つた後代りの學僕を置いた事があつたが一人は後に新しい美術家にならうとした位の男故非常に生意氣で始末がわるく其の次のは放蕩者で女中を一度に二人も孕ませる騒ぎに、矢張氣の知れた鶴崎が一番安心だといつとはなく通勤の執事になつてしま

つた譯である。鵜崎の方でも元よりかくあらん事を望んでゐたのである。その譯は海石翁の身に接近してゐれば間接直接にいろ〳〵な利益があるからで、例へば米炭屋の類から繪具屋に至るまで内山家に出入の同じ商人から商ひをさせてゐれば其の勘定は此方から拂つてやるまでいつまでも大きな顔で待たせて置けるし、殊に經師屋書畫屋なんぞからは默つてゐても相應な付屆が貰へる。それは時と場合によつては鵜崎が苦心の作から得る謝禮よりも遙に以上の現金が包まれてゐる事すらある。その外些細な利得を擧げたら先生御夫婦始め若旦那の古着古物、摺りにくゝなるまで減つてしまつた墨のかけ、金粉銀粉の如き高價な繪具の使ひ殘りなぞ一々には數へきれぬ程であらう。

鵜崎はその雅號のみ徒に巨石にして更に名をなす見込みがない、と云つて畫をかくより外に生計の道がないと考へれば自然に守錢奴らしい性質になつて來るのを、自分ながらも折々氣がつく事があるので、それを蔽ひかくしたい爲めにわざと飄逸磊落頓狂な風を粧はうと力めてゐる。それにつけて鵜崎は兄弟友人よりも世間よりも先づ何より先に海石翁がいかに自分を解釋してゐるかと云ふ事について、始終非常な注意を拂つてゐるのである。

鵜崎は多年其の家に寄食してゐたゞけに誰よりも詳く海石翁の人物を知つてゐる譯である。鵜崎は海石翁をば今こそ白金に華族のやうな邸宅を構へてゐるが、金錢利益の事にかけては流石の鵜崎も歴舌を捲く位、現に白金の新宅工事についても最初地割をした大工が中頃到底やりきれないと云つて手を引いた程である。この先生に對して鵜崎はなまじッかな態度を取るよりは唯々哀つぽく持かけるより外はない。正直なばかりで才もなく働きもない臆病な氣の小い意氣地なしと飽くまで思はせ、あまり生活に窮

追したら首でも縊りはしないかと氣遣はれる程に萬事元氣なく情ない姿一手で押通さうとしてゐるので
あつた。

日吉坂上で電車を下りすこし歩いて横町へ曲ると新らしい板塀つゞき、自動車の二臺ぐらゐは樂に通れるかと思はれるやうな大きな冠木門の太い柱には道行くものゝ誰にも讀めるやうに筆太く内山海石と札を打ち門内一面玉川砂利を敷いた敷臺付の玄關、西京瓦でてら／＼と輝いた破風造の二階建。鵜崎は横手の内玄關へ廻つてまだ眞新しい硝子戸格子を明けると、仲働のお仲と云ふ二十一二の房州女が草箒で土間のタヽキを掃いてゐたので、鵜崎は眞面に其の塵を喰つて、

「や、これア堪らん、お仲さん戸を明けといて掃くもんだ。砂塵がまひ／＼してゐる。よく覺えて置きなさい。又お小言だぜ。」

「さうだかね。」と房州は一向氣にも留めぬ樣子である。

「仕樣がないな。先生はまだお出ましぢやないか。」と内へ上る。

「お客樣でせうよ。今方お秀さんがお茶を入れて居なすつたつけ。」

「さうか誰樣か知ら。」とその儘鵜崎はいつも奥樣のお居でになる六疊の茶の間の方へと行きかけると丁度客間から下つて來るお秀といふ十六七の但し甚だ容色のよくない小間使。

「旦那樣も奥樣も皆樣お庭よ。」

「お客樣ぢやないのか。」

「寫眞屋さんでせう。」と言つて「それともお客樣か知ら。」

「何を言つてゐるんだい。お前さん自分でお取次をしたんだらう。」

「圓滿俱樂部とか何とか云つたやうだわ。洋服を着てゐるけれど、變な田舍平見たやうな聲をする人よ。」

「訪問記者か。」と鵜崎はいかにも卑しむやうに言捨てゝ、腰高な拔骨障子をたてた表玄關の廊下三間ほどゑりかはつきになつてゐる處を過ぎ客間の緣側のはづれに膝をついて窃と顏を出すと內山海石を中央に其の妻錬子年は五十五六、長女の俊子とて一度ある醫學士に片づいて出戻りになつた年は三十三四、其の次は後にも先にも男一人の肥滿した翰、末娘の照子とて學習院女子部に通つてゐる年は十九か二十、一家合せて五人づらりと緣側に腰を掛け圓滿俱樂部記者が庭上に据ゑた寫眞機の仕度ができるのを待つてゐる處であつた。

「鵜崎さん……。」と長女の俊子が先に認めて父に知らせた。

「あゝ鵜崎か。」と海石は此方を見返つたがそれは恰も大名が近侍の者を見返るやうな風で、錆びて皺枯れて居るから妙に頭の腦天から出るやうに思はれる甲高な聲。「どうぢやお前もこゝへ來てうつせ。」

「はッ。」と恭しく頭を下げたが鵜崎はそのまゝ遠慮してゐると、今度は翰が怒鳴るやうな聲ながら何處か少し舌たるい調子で、

「おい君、來たまへ。早く來ないと駄目だぜ。」

「ぢや私はお庭へ下りませう。」と鵜崎は急いで勝手から草履を持つて來て庭へ下り何處までも自分の役は太郎冠者にきめてゐるらしく少し腰をかゞめながら進み出て、「どの邊にしませうかな。」

「君、こんなに前へ出ると君ばつかり一人大きく寫るぜ。」

「さうですか。」と翰は注意によつて後へすさり、海石先生が庭下駄をふまへた靴脱石の間に割込むと今度は寫眞記者が、

「そこではお顏が陰になつて眞黑になりますが……。」

「地體白い方でないですから構ひません。」

學習院女子部の生徒なる照子が轉がるやうに笑出したので撮影はその笑が止まるまで暫時中止の形になつた。やがて記者はシヤツタアの手を放すと共に、「どうも難有うございました。」と禮を述べて寫眞器を革包に收める。翰を始め夫人令孃いづれも思ひ〳〵に縁側を去る。訪問記者は靴足袋へ引掛けた庭下駄を引摺り〳〵縁側に立戻つて、更に海石へ辭儀をしながら、

「いろ〳〵御迷惑な事ばかり願ひまして誠に相濟みませんが何か書についてのお話でゞも伺へますれば非常に結構でございますが……。」

「私の談話を雜誌へ御出しにならうといふんですか。」

「さうで御在ます書のお話で無くとも何でもよろしう御在ます。」

「さうですか。まア此方へお上んなさい。」と海石はいかにも態とらしい鷹揚な態度で輕く咳拂ひ、十疊の客間から縁側庭上を見廻しながら、「いつの間にか皆行つてしまうた。鵜崎君御苦勞ぢやが鳥渡そこの呼鈴を押して下さらんか。」

鵜崎巨石に呼鈴を押させて小間使を呼び新に又茶を入れさせ然る後靜に煙草を一服して、

「雜誌は、毎號、なか〳〵、何ですな、面白う拜見して居ります。」と甲高な聲ではあるが一言一言脳天から押出すやうにぢれつたくなる程ゆつくりした物の云方。生來のせいか或はわざと粧つてゐるのか、いづれにしても帝室技藝員たる内山海石畫伯の貫目をこれ見よと云ふやうにしか思はれない。然しその實海石畫伯の容貌風采は若し新築の邸宅と絹布の衣服に代るに門人鵜崎巨石と同等のものを以てしたら巨石の方が遙に立優つて品よく見えるだらうと思はれる位。實業界に散見する富豪や重役などの顏にはよく有り勝ちな、形を成さぬ一種の妙な顏である。髮は半白でありながら皮膚は氣味のわるい程いやに赤くてら〳〵照つて小供の顏をその儘に大きくふくらましたやうな顏立。それに準じて身體付も四肢と胴との釣合のいかにも惡いのが袴羽織の上からでも目に立つ程なので、一體身長が高いのか低いのか肥つてゐるか瘦せてゐるのか鳥渡見ては何れとも定められない。唯無暗と顏の大いのと胴のいやに長いのが目につくばかりである。

現代書畫人名辭書と云ふものに次のやうな傳が出てゐる。

内山海石、名ハ久助四條派畫家、正六位、帝室技藝員、公設展覽會審査員、東都畫院評議員、安政元年○月越中國○○郡ノ一農家ニ生ル家貧ナリ幼時金澤ニ出デ某旅亭ニ傭ハル偶家人誤テ主人新調スル處ノ襖ヲ傷ケ周章爲ス所ヲ知ラズ久助傍ニ筆墨ヲ携來ツテ盤沫一畫ヲナス主人歸來ツテ此ヲ見驚イテ問ク何人カヨク此ノ畫ヲ成スヤト其久助ナルヲ知リ此ノ小童若シ師ニ就イテ學ブ處アラシメバ後世必ズ名ヲナスベシト翌年京師ノ畫家玉木紫石金澤ニ來遊シテ某旅亭ニ宿スルニ遇フ主人明請フテ久助ヲ其門ニ入ラシム久助紫石ニ從ヒ京師ニ在ル數年アリ業忽成ル師許スニ海石ノ名ヲ以テス王政維新ノ後玉木紫石朝命ヲ拜シテ其家ヲ東京ニ移スヤ海石亦隨來ル幾何ナラズシテ内國博覽會ノ始テ東台ニ開ル丶アリ海石嵐山春曉ノ圖ヲ出シテ金牌ヲ受ク此ヨリシテ其名遍ク天下ニ鳴ル海石人トナリ篤實謹嚴山水花鳥筆ノ行ク處一トシテ佳ナラザル無シ然𪜈殊ニ鯉魚[illegible]ヲ描クニ長ズ時人歴凝スルニ當代ノ應擧ヲ以テス所以ナ

訪問記者は何か適宜な話題を提出しやうと削らさない頤髯をざら／＼探りながら深栄の客間をぢろ／＼見廻してゐたがやがて床の間にかけてある玉木紫石の飛瀑と波濤の双幅をば、

「大層涼しさうな掛物で矢張先生がおかきになつたんで。」と云出した。眼鏡はかけてゐるが近眼の記者は落款を讀み得なかつたばかりでなく十五六年前に死んだ紫石のことなぞは少しも知らない。さすがの海石翁もすこし面喰つた氣味で、

「いや、これはあなた、私ではない、私が先生ぢや。」

「はゝア先生の先生、それでは今の人ではございませんな。」

「左樣、とうに故人になられました。お墓は谷中の天王寺。今でも五重の塔がありますな、あの五重の塔の下を眞直に行くとぢきに分ります‥‥。」と海石は長たらしく其の師玉木紫石の事を話し出した。いつぞや若手の畫工達が出してゐる或美術雜誌で海石の畫を攻擊したついでに海石は其の師に對して忘恩の徒であると云ふやうな事を書いた。満更捏造した事ばかりでもなかつたので海石はひどくそれを氣にし出して其後それとなく先師の紀念展覽會を開いたりした事があつた。以來海石は折あれば先師のことをくど／＼と語出すのである。記者は家庭雜誌には甚不向きな話だとない／＼閉口したが中途でよしにしてくれとも言はれないので手帳に要點を書取つてゐる。圓満倶樂部と云ふのは一時ニコ／＼なんぞと稱する家庭雜誌の流行を見て遲蒔ながら近頃發行しはじめた月刊雜誌である。訪問記者はその編輯者

から海石畫伯の新邸には令嬢が二人あつて姉の方は再三お歌所の御題に當選した才媛とやら、又妹は學習院女子部で評判なハイカラな美人だといふ噂だし、それに主人は畫工屋敷はつい此間普請が出來上つたばかりだといふから談話の材料はいくらでも有る筈だよ命令されて來たので、海石翁の談話は大抵にして切り上げ、令嬢の談話を聞きたいと内心苛やきもきしてゐるとは少しも察しない老人、丁度鵜崎巨石が座敷にゐるのを幸ひ、「玉木先生の鷲の畫は、實に見事なものぢやが……あれア確か岩崎家の御所藏になつて居つたかな。」と記憶のはつきりせぬ處になるとそれを鵜崎に問ふと、鵜崎は又仔細らしく聲をひねつて、「玉木先生の御作はそれを拜見しましても全く凄いやうな筆力でございますな。一度よく見て置きますと何年たつても眼を瞑りさへすればあり〳〵と思出せます。」とそれ相應に海石の喜びさうな話をするので、畫談はいつまでたつても盡る筈がない。海石は中氣病みのやうなゆつくり〳〵した調子で折々小供に字でも數るやうに、

「えゝですか、巖と云ふ字ではない同じイワでも淡と云ふ字です。馴れん新聞屋さんは時々人の話を間違へイ大層迷惑します。どうぞ間違へんやうに。」などと注意する。

さすがの訪問記者も遂に斷念したと見えて敷島の接待煙草三四本吸散した後やがて手帳をポケットに收めた。鵜崎は大家の執事然として記者を玄關へ送出した後客間へ戻ると、海石は新しい普請の出來榮を調べる心と見えて座敷の隅々の壁、敷居、鴨居、床板、建具など彼方此方と見歩いてゐたが突然頓狂な黄い聲を出して、

「誰ぢや〳〵新しい疊へいつの間にか燒こがしをしたぞ。」

「や、これは〳〵」と鵜崎も吃驚仰天したやうに座敷の真中に突立つて、「只今の訪問記者に出逢ひません、仕様のない奴ですな。どうも。」

小間使のお秀が　片付に來て、自分の疎相でなかつた嬉しさ半分、「寫眞屋さんが御座敷の疊へ焼ッこがしをこしらへたんですつて。」と大きな聲で觸廻つた處から、第一に奥様、第二に出戻の俊子、第三にハイカラの照子、一家内再び座敷へ集つて焼こがしのまはりにぐるりと立並んだ。焼こがした煙管の火玉ではないので、ごく小さうはあるが、煙草盆の火が卷煙草の先へついて灰と共に落ちたものなので、一ッならず二ッ三ッも飛び〳〵にまだ匂のする青疊の上に深く焼け込んで拭ふ可らざる汚點を刻みつけたのである。

「困りましたね、どういたしませう。」と奥様が云ふ。

「お父さん今の中疊屋を呼んで裏返さしたらどうでせう。」と出戻の俊子。

「事によると裏まで焼通つてゐるかも知れん。」と海石は今は唯恨しさうに疊を眺めるばかり。

「あぶなう御在ますねえ。火事にでもなつたら大變です。」

「これから訪問記者なんぞにはお會ひにならないが宜しう御在ます。私が御玄關に居ましたら突返してしまふんですが……。」

「何だ、どうしたんだ。」と二十貫近い重みでみし〳〵緣側を踏みながら出て來たのは翰である。何だつまらない事を大騒ぎしてゐると云はぬばかりの顔付、妹の照子を見て、

「照子、テニスでもしやうか。」

「もう直お午よ。」と照子は頻にチユイングガムを嚙みながら、「それに私今日はお午から教會に行くんですもの。」

「今日は日曜日か。」

「呑氣ねえ兄さんは。」

翰は緣側から一人庭下駄を穿いて下に降り急に思出したやうな風で、

「鵜崎君、後で鳥渡顏をかしてくれたまへ。」

其儘口笛を吹きながら庭の植込を裏の畑の方へと行つてしまつたが、其の時小間使のお秀が何やら白木の臺に金銀の水引奉書紅白の眞綿なんぞを持つて來たので一家中は燃の燒こがしを捨置いて此の方へ氣を奪はれた。此の程翰の緣談が取極つたについて嫁の家へ送るべき結納をば四五日前三越へ注文して置いたのが今屆いた譯である。

「よく品物を改めんといかんぜ。」と滋石はいかにも嬉しさうな顏付。照子は大きな聲で、

「兄さん〳〵。」と翰を呼んだ。

六

翰は出戻の姉俊子とは同じ家にゐてもよく〳〵據處ない場合でなければ口もきかない位であるが妹の照子にはよく冗談をいつてからかふのである。照子は翰のみならず俊子からも無論兩親からも家中誰からも可愛がられてゐる。何しろ年は十八九色が白いのと髮がいゝのと眼がぱつちりしてゐるのとで、顏は少ししやくれて口がちと大き過ぎるが、それ等の缺點よりもいかにも若々しく快活な全體の顏立が何よ

り先に目立つので學校中でも美人の方に數へられてゐる。これに反して俊子は[illegible]こで眼が小さく髪にも癖があるし殊に目立つほど血色もよくないので、三十過した[illegible]から見てさへその淋しい様子の何となく陰鬱に根性の悪るさうな處、どうしても出戻でなければ親戚の厄介者と云ふやうに見られる。

俊子は二十の時或醫學士の夫人になつたが結婚の翌年夫は朝鮮へ私立病院を建るつもりで出發した途中汽車の衝突であえなくも世を去つた。まだ子供の出來る暇さへない程なので、双方の兩親がとくと相談の上俊子は實家へ還る事になつたのである。海石はもう一度どこか好い處へ再婚させやうと云ふ考であつたが容貌のよくないのと出戻だと云ふ二ッの爲めにどうしても縁遠くいつの間にか年を取つてしまつた。俊子は今日では母の代に萬事一家の事を一人で取りしきつてゐる。と云ふのは母親は海石が玉木先生に從つて東京へ來てからまだ下宿住居をしてゐた頃ふと出來合つた下宿屋の下女なので、其後夫の身分が段々よくなるにつれて本々教育も働きもない女の事とて外は世間の交際内は多くの門人等に對しても折々どうしてよいやら分らぬ事が出來てくる處から、何かにつけて俊子に相談する中いつか俊子が一人で取りしきるやうになつてしまつたのである。俊子はせめて出戻の淋しい生涯をこの家事日常のいそがしさに紛したいと思つたので、猶その上の餘暇をば短歌と習字に捧げた結果は御歌所御題の應募に入選する事再三、一家中で唯翰一人を除くの外これを無上の名譽とした中にもわけて人の好い無教育の母親は自分の生んだ娘をば姉か何ぞのやうに心から敬ひ畏れるやうになつた。

この日午飯がすむとすぐに俊子は母親に墨をすらせ小野鵞堂風の書體で奉書にすら〳〵と日課を書き

結納の品物に水引を掛けた。暦を見ると大安日と云ふを幸ひ、善はいそぐがよいと主人の命令に鵜崎は早速海石翁の着古した紋付や絽の袴の借り着、丁度遊んでゐる車屋の吉公を急がせ慶事の使者に立つた。行先は青山千駄ヶ谷。長い間知事をしてすつかり金を溜め込んだ大須賀顯正と云ふ老官吏の邸宅、その三女蝶子といふのが翰の花嫁になるのである。

路が遠いので鵜崎は今日しも始めて秋の日の著しく短くなつたのに心付いた。歸つて來ると間もなく日が暮れたせいか鵜崎は何だかまだいろ／＼用があつて仕様がないやうな心持がしてゐる。翰には例の白川で飲まされた折の話がまだ其のまゝにしてある。自分には又昨夜下谷で發見した雛の僞物の事がある。燈火がついて鵜崎は先生が晩酌の話相手に呼ばれたのを幸まづ昨夜の事から先に話出すと、海石は一向怪訝な顏もせず、「さうか乃公の名がかいてあつて六拾圓か、はゝゝゝは。」とさもをかしさうに、大きな聲で笑出されて、鵜崎は二の句がつげなくなつてしまつた處へ小間使が麹町の幸水堂さんが御機嫌伺ひにと取次いで來た。

「食事中だから待たして置け。」

多年出入して様子を知つてゐるものと見え幸水堂の主人は海石翁が食事のすむ時分を見計つて案内もなく這入つて來た。

「大分また儲つたらしいな、此の間の賣立はどうぢやつた。」と海石は胡坐をかいたまゝで、豪然たるよりは寧ろ家人に對すると同じやうな態度、幸水堂もさして海石を尊敬するやうな風もせず其の邊を見廻しながら、

「わるくはありませんが、二三年前のやうな譯にや行きませんね。」と懐から金具に細工の澤山ついた素破らしい煙草入を拔出す。年は六十越してゐるかも知れない。結城紬の單衣に鐵無地の絽の羽織つゞれ織の角帶に金鎖、小指にも金の指環をはめ、亂杭の如き歯にも上下無暗と金を入れてゐるのが物言ふ度々、禿頭の押潰したやうな下賤な痘面に、一種不思議な光彩を添へる。

「中六番町の御地所の事ですな。○○病院で買ひたいと云ふ話があるさうで。」と幸水堂は矢張そつ方を向いて用件を話出す、これがその癖と見える。この爺以前はケチな古道具屋で玉木紫石の家へ出入してゐたが紫石の歿後其の門人内山海石が年々名を賣出したと同じやうに幸水堂も又年々店を仕上げて今では三都合せて骨董商の中でも幅のきく方になつた。成功した畫家と成功した道具屋と、この二人の間については何しろ幾十年と云ふ長い間の關係なので十年間玄關にゐた鵜崎にさへ折々推察のできぬ事がある。出入する他の道具屋の話によると海石翁が當代の畫家中ではまづ第一の金滿家になつたのは、幸水堂が骨を折つて株の賣買をしてやつたからだ。それだから海石先生は他へ行つては知らぬ事幸水堂と差向ひになればいくら畫が上手でも頭は上らない。畫筆一本ぢや何ぼ何でもさう急に身代の出來やうが筈がない。又畫家仲間の或人の話によれば幸水堂が今日のやうな大きな店になつたのは玉木紫石と内山海石とが長年朝野の貴顯紳士へ紹介してやつたお陰で、あんな運のいゝ道具屋はない。いづれにしても海石と幸水堂とは兩々放れられぬ關係のある事は明かである。

されば鵜崎は幸水堂に對しては海石先生同樣に飽くまで叮嚀にそして又飽くまで哀つぽく貧乏臭く見せかけて居る。實際金錢上の事については、殊に富士見町へ家を持つて以來鵜崎は海石先生よりも此の

幸水堂のお陰を蒙つた事が多い。いざ困つてどうにもならないと云ふやうな時には幸水堂の親爺に泣付きさへすれば何か知ら仕事をさして呉れる。何にも仕事が無いとなれば快く金を貸してくれる。流石に身代を仕上げる商賣人だけにどこか太腹な處があると、さう云ふ時には鵜崎は見せかけばかりでなく心から感心するのである。

鵜崎は地所の話が出たのでそれとなく坐をはづして奥様や倅子のゐる茶の間で暫く世間話のお相手した後頃合を計つて再び立戻つて見ると幸水堂は丁度歸りがけ、時計は早や九時を打つてゐる。

「鵜崎さんあなたはまだお歸りぢやないかい。電車が一ッ道だから。」

「さうですな、お伴しませうか。先生別に御用にございませんか。」

鵜崎は電車に乘つてから昨夜見た雛の畫のことを話し出した。すると幸水堂は金歯を出して氣味のわるい笑顏、

「先生は何と言ひなすつた。」

「唯笑つて居られました。」

「さうでせう、よくある事でさア。然し打捨つて置いてもよくない。今度逢つたら雲林堂を思ふさまいぢめて遣んなさるがいゝ。」

「ぢやア、あれア矢張雲林堂のやつた仕事ですな。」

「まアさ、誰がやつた仕事にしろ、さう〳〵店先へ夜店の品物同様にぶら下げたりしちや物が安くなつていけない。」

「驚きましたな。私ア雲林堂は素人も同様な目のきかない奴だと思つてゐたんだが、どうも油斷がならん。」

「道具屋に人のいゝ人間はゐない。私等始めみんな碌な事ァして來ないのさ。考へるといやな商賣でさ。」

鵜崎は幸水堂の言ふことが、いつもの癖とは知りながら、奥齒に物のはさまつたやうな風に思はれてならなくなつた。もつと明に審に聞きたいと鵜崎はきつと幸水堂の顏を見ると、爺は禿頭を窓の硝子に鼻の穴を天井に向けて好心持さうに眼を閉ぢてゐる。狸寐入か何か分らぬが、「幸水堂さん。」と呼んで見ても更に返事をしない。詮方なく鵜崎は唯ぼんやり電車の中の乘客やら馳せ過る町のさまにその眼を移した。

七

翰は五六年ほど引續いて運動世界といふ雜誌と東洋新聞と云ふ新聞の遊戲欄とに野球と庭球蹴鞠などの勝負がある度その批評をかいてゐる。その報酬合せて凡そ二十圓ばかりが家から貰ふ小遣の外に翰の收入の全部である。今に思はしい就職口がないので近頃運動世界社と相談して、米國市俄古邊の赤本屋で出版する赤本を飜譯して萬國遊戲體育全書と云ふ案內書のやうなものの編纂をしはじめた。然し翰は學生の時分にも滅多に机に向つて書物を見た事のない男である。講義の筆記も翰は試驗前になつてから急に人のものをかりて、中學から大學を出るまで十幾年カンニング一點張の一八勝負で危い綱を渡り終せてしまつたので、原書の讀めない處も尠からぬ始末、骨ばかり折る處から一日やつては三日も四日も

放捨つて置く。然しこのまゝにして置いてはいつまでも原稿料が取れないと其の一念でいや〳〵ながらも今日は珍しく朝から午後まで机に向つて頻に辭書を開閉してゐた。肥つた身體の重みでいつも一時間とは座つてゐられない程なので今はもういかほど胡座をかき直しても横に足を投出して見ても到底我慢ができない。膝頭は砕けさうに痛み肩は板のやうに凝つてしまつた。

「あ、たまらん。」とペンを投捨てるや否や六疊の居間の中央に直立し信號兵のやうに力一杯兩手を無暗に振動した。翰は居間の壁も天井をも打抜いてしまひたいやうな氣がするのである。そのあまりに强健過る身體とそれに伴ふ肉欲とを狹い家の中に閉込めておくのは獅子を檻に入れたも同樣。彼はよし就職の口があつたにしても銀行員などになつて終日椅子に腰をかけてはゐられまい。土木の技師か何かになつて土塊と人夫を相手に一日外の風に吹かれてるべき人である。

障子を明放した窓からさつと雨のやうな音する風が吹入つて兩手を振動してゐる翰の身體と横顏を吹いた。殘暑全く去つた後秋漸く高く馬正に肥ゆべきを知らせる風である。飜譯の原稿二三枚机の下に吹散されたのをもそのまゝに翰はふいと外へ出た。然しどへも行く當はない。蟇口には五六十錢やつとなので、白山の待合美登里へもまさかにこれでは行かれないと承知しながら、翰はやはり其の方面へと路は遠いながら磁石に引付けられるやうに日昔坂をばてく〳〵降りて行つた。親がゝりの翰はいつも遊蕩費が足りない處から藝者でも女中でも女ボオイでも相手の女の何たるを問はず直に夫婦約束をして二度に一度はたゞ逢ふ算段をする。女の方ではいゝ家の若旦那と見て始めから良くない量見で掛るものもあれば案外正直に翰のいふ事を眞に受けだまされたと氣がついて怒るものもある。いづれにしても其結果は

多少の手切金を取られる事になるので、兩親も弱り切つて大學を出たらば一日も早く[illegible]よりさきの妻を持たしてしまはう。さうしたら惡い女に引掛るまい。女の事さへ無ければ何處へ出さうが間違のない立派な人物、品行さへ直れば其の他に缺點は一つもないものゝやうに思ふのもつまり親の慾目である。ところが翰は元より家庭の觀念も何もないので結婚については唯若い娘が自分のものになると云ふ好奇心と、此れからは無理な算段をして遊びに行かずとも事が濟むと云ふ便利を豫想するばかり。されば其れが爲めに懷中都合のわるい時なぞは俄に結婚の當日が待遠しく思はれ出して却て時ならぬ不意の誘惑に苦しむのであつた。

麻布の古川橋と芝の芝園橋とで電車を巣鴨行に乘換へて小石川指ヶ谷町まで、駄々ッ廣い東京市の南端から北端までの遠道も、翰は唯或目的の爲に驀進して行つた。いつもの貧し氣な汚い横町へと曲つて君勇の抱へられてゐる分松花といふ藝者家の門口をば翰は幾度となく行きつ戻りつした。これは君勇が格子戸なり櫺子窓なり又は二階の欄干なり何處からか顏を出したらそつと外へ呼出し内所で蕎麥屋か汁粉屋でも連込むことを望んだからである。然し翰の計畫通り君勇はなか〳〵窓からも門口からも姿を現さない。不圖向ひの露地から用たしに行くらしく日傘を手にした藝者が一人、見れば此の間鵜崎を引張つて來た時呼んだ小花といふ銀杏返の年増である。避ける暇なく顏を見られたので翰は却てこれを幸ひと、

「おい小花、君勇は家にゐるだらうか。」

「きいたげませうか。」と氣輕く小花は分松花家の窓へ立寄る。そのひまに翰は四五間立離れて佇む

と、小花は直様立戻つて來て、
「自分用で家へ行つたんですつて。もうぢき歸るでせうよ。美登里さんへいらしつて待つてゐらしやいよ。」
「お前も用足しか。」
「え丶一寸富士見町まで。」
「富士見町――僕も富士見町には用があるんだ。藝者屋ぢやないよ。」
「鵜崎さんでせう。」
「おや、どうして知つてゐるんだ。」と翰はびつくりして象のやうな細い目をせい〳〵大きく見開いた。
白山へはこの間が、始めての筈の鵜崎がもうその土地の藝者に家まで知られてゐるとは誠に意外千萬。
小花はびつくりした翰の顏の可笑しさについ我を忘れて調子づき、
「ほ丶丶ほ、ちやんと知つてるわよ。だつて私の母さんが富士見町にゐるんですもの。待合してゐるのよ。」
「さうか。待合か。」
「愉快ッて云ふのよ。御存じでせう。昨日も鳥渡私用があつて家へ行つたら、ひよいとお目にかゝッちやつたの。」
「何、鵜崎が愉快に……一人か……誰か一所か。」
翰の驚き方があまりに甚しいのに小花は始て氣がつき、「唯鳥渡外でお見掛けしたのよ。明月さんのお

隣の家へおはいりなさる處を見たのよ。あすこがお宅なんでせう。」と急に胡麻化さうとしたが[illegible]に、

「鵜崎一人だつたのか、誰か一所か。」

「何だか御商賣の六ケ敷い御相談らしかつたわ。別に藝者衆も來ないらしかつたわ。私は用があつたからすぐ歸つちまつたんですもの……。」と小花は辻褄の合はない事をいひながら歩き〳〵早や電車通へ出たので、翰は流石に晝間の人目を憚つてか忽ち連ではないやうに二三歩立離れると、丁度折好く來かゝる電車を幸ひ小花はそのまゝ逃るがやうに乘込んだ。

翰は暫く茫然と電車を見送つてゐる中何か急に思付いた事でもあるらしく再び横町へ戻つていきなり待合美登里の門口。

「おい一寸用があるんだ。紙と筆をかしてくれ。」と帳場に座込んで、「この手紙を富士町〇丁目だ、車屋に鵜崎さんと云ふ人の處へ屆けさせてくれ。」

翰は返事を待つもりで薄暗い帳場にごろ〳〵してゐたが、これまでの勘定が大分たまつてゐるので主婦は酒も出さず碌に話の相手もしない處から、翰はぷり〳〵怒つて其の儘又もや外へ出た。世間を見ず我儘一杯に育つた翰は何にかぎらず我が思ふやうにならないと無暗にあれ出して周圍の人の迷惑をかまはない厄介な男である。唯今車屋を使に出したすぐ後から翰はいきなり鵜崎の家へとやつて來た。

鵜崎は女房のお慶が買物に行つた留守、翰の手紙を自身に受取つたので、其の儘そつと羽織を引掛けやうとすると、丁度門の處で殆ど血眼のやうに呼吸使ひさへ荒くしてゐる翰と出合頭。

「どうなすつたんです。今手紙を拝見しました。」

「君、昨夜はお樂しだつたね。」翰の聲音にはあり〳〵羨望と憤慨の情が現はれた。

「え、何が……。」

「惡事千里だぜ。鵜崎君、愉快へ連れてつてくれたまへ。僕は白山でとう〳〵侮辱された。」

「な、なんです……。」と鵜崎は非常にあわて出した。

「僕ァもう何處へ行つても鄭花だ。君の行く愉快を紹介したまへ。」

「え、愉快……、」

「知らばつくれるつもりか、おい君、小花が待つてゐるよ。」

「あゝ小花と御一緒でしたか。さうですか。やつとわかりました。兎に角お伴しませう。」

鵜崎は今日翰が白山で小花を呼び昨夜の事を聞知つて怒り出したのだなと合點した。昨日鵜崎は少し用談があつて市ヶ谷堀端の雲林堂と云ふ書畫屋へ出掛たが、すると亭主は是非にと三番町の待合愉快と云ふへ鵜崎を誘つた。後で聞けば愉快と云ふのはその姿がやつてゐる待合ださうで、店先ではしにくい用談の客があると亭主はぢきに愉快の二階へ案内するとの事、鵜崎は昨日偶然その待合で小花に出逢つた一伍一什をば歩きながらこま〴〵と陳述に及んだ。翰は兎に角女にありつく道が出來たので藝者家の間々をば歩いて行く一歩々々次第に機嫌を直して來る。

大通へ出てから斜に向の横町へ曲つて露地へ入ると汚い下宿屋と小さな質屋との間に立つてゐる古びた二階家。然し柳を植えた小門と船板塀とに表付だけをどうやら斯うやら待合らしく見せたのが即ち「愉快」である。内へはいると先刻の小花が女中よりも先に馳出ていきなり後から翰にかぢり付いて、

「内山さん、よく連れて來て下すつたわね。あたいの人ッたらそれァ薄情なのよ。」と鵜崎の背中をぽんと叩く樣子に、翰はすつかり御機嫌が直つてしまつたが、鵜崎はいかにも迷惑さうに苦笑しながらぢろりと小花を睨みながら一同二階へ上つた。

小花は早速門山へ電話をかけ翰の相方君勇を呼んだがまだ歸つて來ないと云ふので、臨時にこの土地の妓でよさゝうなのをと、帳場から選んで掛けると、まだ十七八のぼつちやりとした高島田。粉のふいたやうな白粉のつけ方、繻のよごれた半襟に紋のぼやけた一重の裾模樣。酒も呑まずに話もせず、借りて來た猫のやうな樣子。遊び付けぬものにもすぐに出てまだ間もない丸抱の妓と思はれる。座敷は小花が一人ではしやぐばかり。「鳥度ぼうふらが涌いてよ。」と云つても鵜崎は始終ひかへ目に再三杯を促されてからやつと一口する位ないを、今日は翰もそのまゝにして別に强ひやうともせず、女中はやがて「あなた。どうぞ彼方へ。」と云ふのを寧ろ遲しと待つてゐたらしく座を立つた。女中は直に立戻つて、廊下から遠慮なく、

「龍丸さん突當の三疊よ。」と命令するやうな調子である。

チャブ臺を前にぼんやり坐つてゐた龍丸は返事もせぬかはりに別に驚いた樣子もなく、始終だまつたまゝですつと立上り風邪でも引いてゐたのか色氣なく無遠慮に水洟をすゝりながら行つてしまつた。

鵜崎は小花と二人きりになるや否や、「おい、小花、困るぢやないか。昨夜の事なんぞ人に饒舌つちやア、實に迷惑するよ。」

「すみません。別に私の方からお饒舌した譯ぢやないんですよ。あちらがいろんな事を言つて鎌をかけ

るんですもの。」と小花は全く心配さうに俯視いた顔をあげて申譯なさうにそつと鵜崎の顔を見る。

「おそくなりまして相濟みません。小花さんどうぞお連れ申して下さい。」と女中が知らせた。

「鵜崎さん、勘忍して頂戴よ。ね、ね。」と小花は先に立つて、「さアあなた。彼方へ行きませう。」

鵜崎は始終默つて苦味りきつて居たが、隣の小座敷へひけてかは又た一倍、小花は眞實迷惑をかけて濟まない事をしたと云ふ其のお詫の心か、出來るかぎりもてなし、鵜崎はそら〳〵しいやうな氣もすれば、又何ぼ金で自由になる女とは云ながら勘定すれば祝儀わづか貳圓でこんなにまで勸められるものかと不思議にも思はれて、今日始めて遊んで見たやうな珍しい意外な心持になり出した。これまでとても一人全く遊んだ事がない譯ではないが、然しいつも人のおごりか交際で唯その時かぎりの酔興、鵜崎は一人の女に二度逢ふやうな折はなかつたのである。ところが小花とは妙な廻合せで、最初は白山で翰との付合に呼んだ後、二度目は昨日雲林堂におごられて其の夢まだはつきりと覺めやらぬ中に又今日圖らずも遂に三度目の馴染を重ねる事になつた。鵜崎は藝者といふものは二度三度と段々馴染になれば必ず金や着物や時計や指環なんぞねだり散した揚句の果はまとめて手切金でも取りにかゝるものと斷定してゐるので、賣女一般に對する嫌惡と蔑視と恐怖とは容易に胸の底から消えないながら、兎に角ち酒をちびりちびりやつてはうと〳〵とする心持、此れだけは正しく歡樂境溫柔郷に相違ないとつく〴〵感じない譯には行かなくなつて來た。

小花が氣をきかして持つて來た銚子一本、振つて見ればまだ音のする中、鵜崎は身も心もいゝ具合に懶く快く疲れて、それなりぐつすり寢込んでから、ふとまた眼をさますと、半分雨戸を引いたらしい窓

の障子に薄い夕日がさして豆腐屋の笛と遠い射的場の銃聲とが[illegible]に[illegible]夜が其[illegible]に[illegible]する
つもりと覺しく欄間の間に高くつけた五燭の電燈にぽつと灯がついた。然し障子を引いた座敷の中にこ
の燈と窓の薄日とで却て一層暗くなつたやうな、妙に氣の靜まるやうな心持になつた。

隣には誰か居はせぬかと耳をすましたが其の氣色もない。翰はどこか別の座敷に行つたものと見えて
二階中は夜半のやうにしんとしてゐる。鵜崎は枕元の水注子を取らうと片手を延したが屆かないので退
儀さうに半、身を起して再び見るともなくあたりを見廻した……。

その晩翰もとも〳〵歸らうと云ふ時雲林堂の亭主がやつて來て、始めて内山先生の御子息に御挨拶し
た御禮のしるしと料理を取寄せ更に藝者を呼び、やがて一同自働車で白山の美登里へ上り翰のお馴染君
勇を呼んで一騷といふ事になつた。鵜崎が家へ歸つた時には一時過ぎであつた。

八

一日置いて其の次の日の午前鵜崎は再び待合愉快の格子戸を明けた。鵜崎はその夜の勘定だけは無理
算段をしても綺麗に支拂つて置かうものと、不測の災難に用意してある銀行の預金まで引出して五拾圓
ほどを懷中にして來たのである。遊んだ勘定の事からかの箱と雛の僞筆についての大切な交渉がこのま
ゝ有邪無邪になつてしまつては却て大なる損害だと思つたからである。鵜崎は内山家からの歸途何とな
く底意ありげな幸水堂の話振りに次の日早速市ヶ谷の濠端半僧坊の門前から少し先へ行つた處に書畫刀
劍骨董賣買雲林堂とペンキ塗の看板を出した店先へと談判に出掛けた。すると雲林堂の亭主は唯々びつ
くりした顔付。それアどうも怪しからぬ事だ。よろしう御在ます。手前の方から仲間内へ聞合せまして

しつかり詮義をさせませう。どうぞ其れまで暫く御猶豫を願ひます。何しろとんだ御迷惑、おかけして申譯が御在ません。みんな手前の不調法とひたあやまりに謝罪つてゐる中丁度晝飯時になつたを幸雲林堂は鵜崎を己れの妾宅同様な待合愉快へ案内したのであるが、思ひもかけない小花がゐた爲めに僞筆の詮義ばなしはそれなりになつて、今だに何とも返事がない。

格子戸の明く音に丁度其處等を掃除してゐた田舎出の女中、端折つた寢衣の裾を下しもせず、もう馴れ／＼しい調子で、

「いらつしやいまし、さアどうぞ。」とすぐに二階へと案内するので、鵜崎は座蒲團に座るより早く、

「今日は鳥渡おかみさんに用がある。」と髯をひねつたが女中は飽くまで馴々しく、

「小花さんのとこへ電話をかけませうね。」

「おい、馬鹿な事をいふな。今日はそんな事しちや居られん。おかみさんに大急ぎだからとさう云つてくれ。」

「はい。」と女中はすこし呆氣に取られたやうな顔付、そのまゝ下へと降りて行つたが暫くしても誰も上つて來る様子もない。隣近所では頻にはたきの音がする。こゝの二階もまだ掃除がしまはなかつたものと見えて障子襖が明放したまゝになつて居る處から、鵜崎は不圖何氣なく四邊を見廻した時、隣の三疊には今朝か昨夜か知らぬが兎に角客と藝者の歸つた後をそのまゝ片付けずにある亂雜なさまが目についた。……

「どうもすみません、お待たせ申しまして。」と言ひながら上つて來る主婦の聲に鵜崎はびつくりしてそ

つと元の座に返る。

「先夜はどうも。あらお烟草盆も上花が差上げないで。まア仕様がないわねえ。」とおかみは周章てゝ手を鳴した。

年はもう三十二三、眉の薄い生際のよくない細面、もとより白くはない顏の色寢起のせいか血色なく眼の縁の青黑さ際立つて今は色香も全く失せかけてゐるが、然し寢亂れた丸髷の鬢に黃揚の櫛ぐいとさし込み、もう二三日で移替になる此頃の朝寒には、締りのない衿前一際薄寒く見える浴衣の着こなし、幅狹い半帶のゆるみ具合、染返しの小紋の半纏引掛けた肩の樣子。待合の主婦と云ふよりは誰が見ても矢張もとの身の藝者である。

つい此の間まで妹の小花と同じく神樂坂の或藝者家から吉奴と云つて出てゐたのである。十六の年から其の時まで數へれば二十年にも近い泥水稼業、元より此の間には一二度身受もされたし、ひどい病氣にもかゝつたし、彼方此方と借金の付替も度重つたが、何しろ長い年月に身の借金も知らず〳〵輕くなり出した處から、今度こそは一生の身の納方をと考へ出した折から、富士見町の待合と藝者家組合に揉着があつて二派に分れ互に氣勢を張らうと競爭し出した結果は、新に店を出すものには至つて都合のいゝ事になつたので、吉奴はこれ幸と兼てより馴染の客雲林堂に賴込んで愉快と云ふこの待合を出して貰ひ、それまでは諸處下女奉公に步いてゐた老母を引取つた。

鵜崎は初めて雲林堂にさそはれて來た折既に主婦の身の上のあらましと、偶然來合せてゐた白山の小花が實の妹である事をも話して聞かれてゐたのであるが、さして氣に留める程の事でもないので、唯不

思議な事だと笑つたのみ。主婦の様子や顏立などには本より氣を留めて見もしなかつた。ところが今ふいと何心なく差向ひになつて見ると、唯何と云ふ譯もなく成程姉妹だけあつて様子や物言いまで何處かよく似た處があると始めて物珍しいやうに氣がつくと、まだ藝者風の失せやらぬ姉の寢起の姿から鵜崎はどうしたものか、ふと妹小花が一昨日の姿をあり〳〵と思ひ浮べた。その心持は今方隣の小座敷を覗いたのと同じやうなもので、暫くは全く茫然と姉の顏のみ打眺めてゐたが、白髮の母親が出花と煙草盆とを持運んで來たのに氣がつき、

「おかみさん、一昨日の勘定をしに來たんだが、どの位になつたね。」

「あれは、頂かないやうにッて、昨日も旦那からさう云はれてますの。よろしいんですよ。」

「それァいかん。此處と白山と兩方厄介をかけちや、あんまりひどい……。」云ひながらも鵜崎は主婦の様子から目を移す事が出來ないのである。主婦は洗洒しの浴衣の胸兎角に引きはだかるのを引合せながら、

「美登里さんの方は昨日此方から電話をかけて旦那がお拂ひになりましたわ。」

「どの位だ。隨分呑んだやうだからな。」

「どの位かゝつたんですか、私帳付を見ないから知りません。いくら拂つたつていゝわ。旦那のお金ですもの。打捨つて置きなさいましよ。」

「それぢや、せめて此處の勘定だけでもしやうぢやないか。翰君と僕と……。」と云ひながら鵜崎は紙入を取出した。

一日旦那から叱られますから、ほんとにあなた御勘定の事はこの次ぎにしませうよ。ねエ、母さん、ちよいとオー。」とおかみは突然大きな聲をして首を長く梯子段の方へ向けて母親を呼んだ。その爲めには自然に半身を後へ反し片手を後についたので、其の拍子に胸がぐつと引開いた姿が鶴崎には云ふばかりなく艶麗に見え、又しても一昨日の小花がさまを思起されるのであつた。

母親はのこ／＼上つて來る。五十前後の身體はまだ丈夫さうであるが眼のしよぼ／＼した如何にも意氣地のない氣のきかなさうな婆さん。

「母さん、御勘定はみんな昨日旦那がなさつたわねえ。」

「それぢや、これア勘定と云ふわけでなく置いて行かう。いろ／＼世話になつたから。」と鶴崎は紙入に手を入れたが拾圓札が二枚なので惜しいと思ひながら其の一札をぺろりと引出して二ツに折りながらおかみの前へ差付けた。

「すみませんねへ。」といたゞいて見て、「あらこんなに頂戴しちや……。」

「まアいゝさ。」

「それぢや半分私がいたゞいて半分花ちやんにねえ、母さん、鳥渡電話をかけておやりよ。」

「昨日來なかつたから、今日はもう來さうなもんだ。」と母親は獨言のやうに下へ降りかける。おかみは一層親し氣な調子で、

「毎日お午時分にやきつと遊びに來るんですよ。小石川にやいゝ髮結さんがないんですつて。今だに牛込の御師匠さんとこへ行くんですよ。その歸りにやきつと寄つて行くんですから、御ゆつくりなさいま

し。」

「いや今日はもうさうしちや居られん。」と云つたが鵜崎は別に座を立たうともしなかつた。母親が大きな聲で「それぢや直ぐお出でよ。すぐだよ。お待たせ申して置くからね。」と云ふのがよく聞える。

「御銚子をつけませうか。」とおかみは電話の話聲を聞きながら鵜崎の方を見た。

「又一日潰れてしまふから今日はまアよして置かう。」

「それぢや花ちやんが來てからにしませう。その中もうぢきお午ですから、ねえ鵜崎さん、今日はみんなで一緒に何かおいしいものを食やうぢやありませんか。みんな御行儀がいゝから大變ですよ。ほゝゝほ。」

格子戸の明く音がした。その明けやうでおかみはすぐに、

「母さん旦那だよ。」

母親が下りて行くより早く直に上つて來る雲林堂、梯子段の中途から、「鵜崎先生、丁度いゝ處でした。只今お宅へ伺ふつもりで鳥渡寄つた處です。一昨夜に脱線して失禮致しました。」

セルに縦縞の羽織、年の頃は三十四五かと見える。髮を分けて眼鏡をかけた様子から物云ひまで何處か書生らしい處があるのもその筈、雲林堂はかの老怪なる幸水堂の如く生拔きの骨董屋ではない。もとは石版屋の板下職工で種々雜多の事に手を出した揚句縁日や夜店で唐物化粧品の競賣までやつたが、する中に本郷邊の古本屋の後家を引かけ入聟となり女の臍繰金を引出して米相場で儲けたのを資本に山仕事で書畫屋を始めた。然し古人の書畫は鑑定も六ヶ敷いし、よい客筋もない處から主に今の人の新書畫を

罵ぐ事にしたのが却て大當り、遂に古本屋を止めて今では全くいゝ[illegible]に、[illegible]林堂は萬事書生風にお客へも仲間内へも私ア素人だからとばかりで大ざつぱな遣方、それが案外に[illegible]の種となつたのである。

「先生、實にひどい目に合ひました。向柳原のあれア銅古堂と云ふ道具屋です。昨日實は談判に出かけたんですが、あゝ云ふ手合に會つちや、物事がしみつたれで、遣方が汚いから面倒臭くつていけませんよ。然し何の彼のと三拾兩取つて來ました。」と云つて雲林堂はいかにも先方から取つて來たものらしく狀袋に入れたまゝの參拾圓を鵜崎の前へ出して「先生まアどうぞ此れで御勘辨なすつて下さい。」

「いや、これアとんだお骨折だつた。然し僕は金が欲しいから兎や角言ふのぢやない。唯内山先生に對して何だか誠に心持が惡いからなア。」

「さうですとも。ですから私もその事はうんと叩いてやつたのです。これから私もすこし氣をつけて商ひをしませう、又此の次こんな事があつちや全く信用にかゝはりますからね。時に先生、この頃に一ツ畫會をやつて頂けますまいか。參圓から五圓位の處ならこの邊の待合だけでも隨分はいり手があります。富士見町から神樂坂四谷と數へた日にやア五六百軒ぢやきゝますまい。半分とした處で三百軒ですからな。初めつから待合向の畫ばかり書いて頂いて當籤のものにや、ねえ先生、内々で一件もいゝぢや有りませんか。なアお增。」とおかみを見返り、「さうなればお前は牛込小花は小石川方面を内輪から遊說するんだ。」

夜店で羅をやつた男だけにべら〳〵口から出まかせ饒舌り出したら切がない。

午砲が鳴つた時白山から小花が馳付けて來た。鵜崎は一同と一緒に鳥鍋をつゝいた後今日はこのまゝ歸らうと思ひながら晝間赤い顔をして歸るのも變だからと灯のつくのを待てばいつかその夜も又十二時近くなつてしまふ。小花はいつその事お泊んなさいといふのを鵜崎は振拂ふやうにして家へ歸つた。

家へは歸つてぐつすりその夜は寢てしまつたが翌朝九時過になつてやつて眼をさます其の床の中から、鵜崎は早くも小花の事を思出してゐた。戀しいと思ふのではない。唯何となく肌淋しいやうな妙な心持がするのであつた。朝湯へ行つてどうやら少しその重い心持が直つたかと思ふと今度は咽喉が渇いてほんの一口でもいゝから酒がほしくてならなくなつた。いくら茶を濃くして呑んで見ても酒を欲する念はやまないのである。鵜崎は今日まで朝からこんなに酒が呑みたいと思つた事は一度もない。晩酌に一合づゝやり出したのもつい二三年此方の事で、それさへ若し止さうと思へばいつでも止せない事はないと自分では思つてゐた。ところが僅かこの四五日愉快へ出入した爲に忽ちこんな悪い癖がついたとなつては、これはどうしても愼まなければならぬと鵜崎は我慢に我慢して何か仕事に氣をまぎらさうと思つたが生憎と仕掛けた仕事がない。絹だけは一週間程前に枠へ張つて礬水も引いて筆をつけるばかりになつてゐるが、これは期日を定めず出來上れば糀町の幸水堂へ持つて行き揮毫料は前年から引續いた借金のなし崩しにすべき約束の仕事なので猶更今日は新に下圖を構へる氣が出て來ない。鵜崎は幸水堂への借金がまだ何の彼のと小百圓殘つてゐる事から毎月家のくらしが今は小供も追々大きくなつて來るので初めて家を持つた時よりは殆二倍以上どうしても五六拾圓なくては遣つて行かれぬ事やら、又一度愉快へ行つて遊ぶ費用大抵六七圓に見積れば一日置に遊んだ日には一箇月二百圓餘になる事などをあれ

これと跨もなく考へ廻したこ　そして幾度となく鵜崎は銀行貯金の通帳と紙入の中をさがしては考へた。紙入の中には昨日雲林堂が包んで出した參拾圓と銀行から引出した殘金と合せて六十五圓ほどある。

こんな事で午前は思ひの外に早く過ぎ、女房のお慶が下から午飯を知らせる聲。鵜崎は鰹の干物と眞黒に澁の出た蓮根の煮付を載せた膳に向ふと、又しても云ふに云はれぬ手持無沙汰な氣がして、晩の一合を午飯に繰廻して貰ひたいものだと思つた。然しお酒は晩にきまつたものとのみ心得てゐる女房、六に氣をきかしたつもりで今日は冷飯と一所に茶をわかして持つて來る始末。いつもながら手づくねの束髮振亂した出齒の馬面が今日は殊更見る影なく穢汚く思はれ、障子襖から畳縁側まで二人の腕白小僧に散々荒された家内中も亦いつにも增して一倍荒されてゐるやうに見えた。かうなつて來ると、今まではさして氣にも留めなかつた我が家の左隣には明月といふ待合。右隣は分松千代蔦と大脇長つたらしい名前の藝者家を始め二階の窓と緣側から見える近所一帶、若し屋根へでも上つたら三番町の愉快までが望み得られるかと思はれる有樣、とても此の汚しい家の中にぢつとしては居られない……。

茶漬一杯何の味もなく搔込んだ後鵜崎は兎に角紙入の六拾五圓を手元に置いてはよくないと考へて電車通の銀行まで預けに行つたが、門を出ればすぐと目につく藝者の往來。鵜崎は一時忘れて居た轉居の事をふと思出した。家へ戻るや否や大きな聲で女房を呼び、

「これから家をさがして來る。何でも彼でもさがして來る。引越は明日にするぞ。明日だぞ。」

九

白金の高臺を降りやがて魚籃坂下から聖坂下の方へとつゞく込入つた臺町の裏通。まがりくねつた先

はどこへ出るのやら見當のつかぬばかりか、どの通も同じやうに寺のみ並んだ門前をば、鵜崎は足にまかせて歩く中、いつか町の名さへも北寺町とした唯ある寺の門内。墓地を埋めた跡らしい處に新しい貸家を見付け、いよ〳〵富士見町を引拂つた。

土地が變れば自から氣も變る。今まで晝夜の別なく聞えた唄三味線はお經と土鑼と木魚に變り、午過錢湯への往來に見るともなく目にした藝者の姿は、慶應義塾から歸つて來る學生の制服となつた。鵜崎は引越した其の日から、誘惑のない平穩な生涯の再來にやつと安堵の胸を撫下した。

鵜崎は東京に生れた男であるが芝も麻布を越した奧深いこの邊は一向不案内なので、近處の樣子も何となく物珍らしく、内山家への行き歸りにはさすが畫工だけに魚籃寺功運寺聖瑞寺なんぞ近邊の寺々を見歩いたりするので、譯もなく日が早く經つて行く。する中に内山家ではいよ〳〵總領輸の結婚が間近くなつて來るので何かと用事が多くなる。鵜崎はまづ日比谷大神宮への掛合から當日披露の宴會をする料理屋をば主人の命令で築地の精養軒日比谷の大正閣高輪の萬清新橋の花月烏森の湖月其他六七軒を聞き廻つた。物に拔目のない海石は入札を募集するやうな具合に一番安くて一番體裁のいゝ處をと詮義がなか〳〵嚴密なのである。

鵜崎はそんな用事で日數と共に三番町の待合愉快の事をば忘れるともなく忘れてしまつた。兎に角に愉快のことが心から消失つてしまひさへすればそれで鵜崎は安心して用事も出來れば仕事も手につくのである。待合ばいりに藝者買茶屋酒なんぞいふ事は自分のやうな身分のもの丶すべき事ではない。それをば敢てすればすぐにも一家一身の破滅を來すもの丶やうな氣がして、面白いと知れば知る程唯々恐

しいのである。それも小花と云ふ藝者と直接關係にならないまでは、寄合書がいかほど懇意になるほど親しくならうとも自分の身とはつまり何の關係のない事なので、湯屋の番卒を境に藝者の香奴抜くさま、夏の夜半わが家の窓から待合の奥座敷を窺いて見るのも却て時々は又となない目の保養にさへなつた位であつたが、一度足を踏入れて其の味を知つたとなると我ながらわが身が危險でならなくなつた譯である。

道樂息子の翰も新婚の日の迫るにつけて流石に身を愼しむ心になつたのか此頃は殊勝にもずつと家にばかりゐる。彼岸は既に過ぎて袷の時節となつた。海石翁は翰の結婚が濟むのを待つて上野展覽會への出品に着手するとの事で既に繪絹をば鵜崎に張らせ二階の八疊六疊二間の襖を取はづして今にも揮毫の出來るやうに仕度をさせた。下の客間には東西兩都の畫家を始め親戚知人からのさま〲な祝物が九尺の床の間に山をなし、倭子照子に母親の女三人は當日の衣類や披露の仕度萬端に夢中で日を送つてゐる。幾十通の招待狀を認めるのに鵜崎は一夜を十二時過るまで内玄關の二疊に机を据へてゐた。いよいよ目出度い日も明日と云ふ前の夜になると鵜崎の妻お慶を始め日頃出入をするものもめい〲手傳ひに來る。鵜崎は間違のないやうにと重ねて日比谷の大神宮から披露の會場と決定した精養軒へ出掛け歸つて來ると出入の車屋を呼付けて當日の事をこま〲と注意するなぞ其の夜もまた十二時過ぎとなつた。

當日は午後から夜にかけて一家殘らず出拂つてしまふので留守番の鵜崎は又主人の代理として出入の商人や其他勝手口から祝ひに來るものどもへ禮を述べて酒を出す役目。灯(あかり)のつくすこし前經師屋の親方が正宗の一合壜に折詰を貰つて歸つた處へ續いて誰かと思へばそれは郵便配達夫であつた。書狀を受取

つた鵜崎は内山翰様とした其筆つきで、差出人の裏書を見るまでもなく、これは變だとわが事のやうに女中達の手前そつと袂へかくしてしまつた。白山の藝者からの手紙にちがひないと感付くにつけて今夜この際坊ちやんに渡してよいものか惡いものかと鵜崎は思案する間もなく、灯のつくのを遲しと臺處の板の間へ車座に集つた大工植木屋鳶の者など六七人忽ち一杯機嫌で清元浪花節なんぞやり出す賑かさ。やがて九時になるのを合圖に鵜崎はこの人數一同を立たせて弓張提灯片手に玄關前の砂利場へ並んで花聟花嫁を出迎ひさせた。

花嫁は二十三になると聞いてゐたが鵜崎はその夜出入の者や奉公人を引卒して一人々々お目通りをさせる時、下座敷の床の間の前に大兵肥滿の翰と居並んだ姿、勿論ぢつと俯向いてゐる上に角かくしをつけてゐるので容貌の善惡はわからぬが、極く小柄なところからまだ十七八かとも見える位で、何となく餘處目にはいた〳〵しい氣がする程であつた。あくる日には前夜實家から付添つて來た女中がお伴をして二人は三晩ほど鎌倉へ新婚旅行に立つ。一家中は海石翁を始め一同安心すると共に俄にがつかり疲れてしまつたらしく鵜崎も其の夜は夕飯の御馳走にあづかるが早いか家へ歸ると前日の怪しい手紙の事もそれなり忘れたまゝすぐに寢床へはいつた。

「これア閑靜でいゝお住居だ。」と大きな聲で翌日の朝から寢起のまゝの鵜崎を驚したものがある。市ケ谷の雲林堂の亭主である。鵜崎は湯漬を一杯かき込んで二階へ上つて來ると雲林堂はいつものそは〳〵と落ちつかぬ風で、勝手に二階の窓を明けながら寺の境内を見下し、

「どうしたつて畫でもかく人のお住居だ。ねえ先生、茶畠の向に竹藪があつて坊主が掃除をしてゐる處

なんざ、どうしても浮世放れがしてますな。[illegible]あのおこつちよ拙しましたよ。黒田[illegible]る處ですな。」

鶴崎はだまつて揚枝で齒をほじつてゐた。鶴崎は雲林堂の顏を見ると自然三番町の待合のことが思出されやしまいかと我と我が心を氣遣ふので實は轉居の知らせさへしなかつたのである。行儀の惡い雲林堂は窓から外へ咳唾をば平氣で昔高く吐き飛し、「お仕事にや全くもつて來いだが、先のお宅とはあんまり變り過ぎてお淋しいでせう。」

「なにさ、淋しいなんてそんな事があるものか。」と鶴崎は覺えず聲を高めたが一向にそれとも氣のつかぬ雲林堂は底氣味のわるい笑顏を見せて、

「私もあれつきり、何の彼のと彼方此方駈ずり廻つてゐたんで、この一週間ばかりはおちおち酒も飲めない始末ですよ。さう云へば先生も内山さんの御婚禮で大分おいそがしかつたんでせう。新聞で寫眞を拜見しました。實はわざと御遠慮してまだお祝にも上らないんで….。」

「屋敷の若旦那もすつかり堅くおなりで結構さ。これからは二度と惡いところへ出入をなさらんやうに影ながら僕も注意するつもりだ。」と鶴崎は頻に髯をひねつて一生懸命に嚴格な風を示さうとするが雲林堂は始終平氣な調子で、

「女だけの御道樂なら大した事アない。お花の方だと鳥渡厄介でせうがね。女の見なら遊び方一ツですよ。二百なり三百なり三月半年遊ぶだけのものを一度に拂つたつもりで拂れば旦那々々と大きな顏で女一人は好自由、此方のいらない時は勝手に稼して置きやア儲らないまでも損の仕ッこは有りやしません。

今の世の中ァ拔目なく立廻りさへすれァ打たうが買はうが樂しい事をしたゞけが徳ですよ。昔話だつてさうでさ。樂しんだ揚句に値貴が出來るやうなもんでさ。時に鵜崎先生、その一件で今からお願ひ申して置きたい事があるんで……。」

「何です。」

「内山さんの今度御親戚におなんなすつた大須賀さんのお屋敷ですな。その中に手前も先生のお顔で是非お出入になりたいんですよ。大須賀さんのお屋敷にやすばらしいものがあるさうですな。」

「兎に角有名な骨董家で被居る(ゐらつしや)からな。然し僕はまだ何にも拜見はせん。」

「それに先生、大須賀さんは足利家の御家令でせう。もし御寶物の賣立でもあるやうな時には何がさて置いて大須賀さんのお屋敷へお出入してゐないのは嘘ですからな。然し手前なんざどうもまだ駈出しの道具屋ですから幸水堂さんのやうに大きな商ひをしやうなぞとは夢にも思やしません。私や損(そん)したつていゝんですよ。唯仲間への名聲になるんですから。慾得放れて、ねえ先生、その中に何かおはなしが出ましたら市ヶ谷のお堀端に雲林堂と云ふケチな道具屋があるつていふ事を唯何となしに先様のお耳へお入れなすつて下さい。是非一つお願ひ申して置きます。」

　雲林堂は既に大須賀の手で寶物賣立の日取までも決定してゞもゐるものゝやうに頻と鵜崎へ頼み込んだ後、御引越のお祝ひにと菓子折を置いて何かいそがしさうにそはそはして立歸つた。鵜崎は格子戸まで送出して二階へ戻ると、始めて當日の夕方そつと受取つた怪しい女の手紙のことを思出して机の抽斗(ひきだし)を明けたが更に見當らない。用箪笥か繪具箱の抽斗かと急に思ひ惑つて搜(さが)したが何處(どこ)にもない。折から

二階へ上つて來た女房のお慶、
「肴屋が參りました。何か取つて置きませうか。」
「何があるんだ。」
「生鮭に鱸に比目魚ですつて。」
「鱸がいゝかな。」
「はい。」と立ち掛けるのを鵜崎は大きな聲で、「おい〳〵お慶切身は一きれいくらだかしつかり價段を聞かなくつちやいけないぜ。」
鵜崎はお慶が下へ降りてから始めてあの手紙は當日紋付の袂の中へ入れたまゝにして置いた事を思返した。急に手を鳴して、
「お慶々々。疊むとき紋付の袂に手紙がありやしなかつた。坊ちやんのとこに來た郵便だ。」
「簞笥の抽斗へ入れて置きました。つい申上げるのを忘れました。」
「何だ。早くさう言つてくれゝばいゝに。落したかと思つていゝ心配をしたぜ。」
「どうもすみません。」
「以前の坊ちやんとはすこし御身分が違ふからな。お里から來てゐる女中さんにでも拾はれて見ろ甚だよろしくない。」
「きやしやなお弱さうな方ですわね。」
「若奧樣のことか。」

「えゝ。御病身なんですつてね。」

「お前どうしてそんな事を知つてるんだ。誰かそんな事を言ふものがあるのか。」

「こゝのお寺の和尚さまが何も彼も御存じなんですよ。昨日裏の畠で何の氣なしにお屋敷のおはなしをすると、さうかい、それでもまアよくお嫁入が出來るやうにお成んなすつた。こんなお目出度い結構なことはないッて仰有るから、どう云ふわけですつてお聞き申すと、和尚さんの御親類の娘さんとかが以前大須賀樣のお屋敷にお小間使に上つてゐたんですつて。それでいろんな事を知つておゐでなさるんですとさ。」

「ふうむ。さうか。不思議な事もあるものだな。御病身だと云つてどこがお惡いのだ。別にわれ〳〵が見ちやどこもお惡いやうな樣子もないぢやないか。緣起でもない事を云ふ坊主だな。」

「何ですか、私も委しいお話は聞きませんが、大變不思議がつてお居でなさいましたよ。」

勝手の方に又もや何か御用さんでも來たらしい物音にお慶はそれなり降りて行つた。鵜崎はそれを幸ひ怪しい手紙を手に取つてまづ切手の消印を打眺めた後封をきつた。

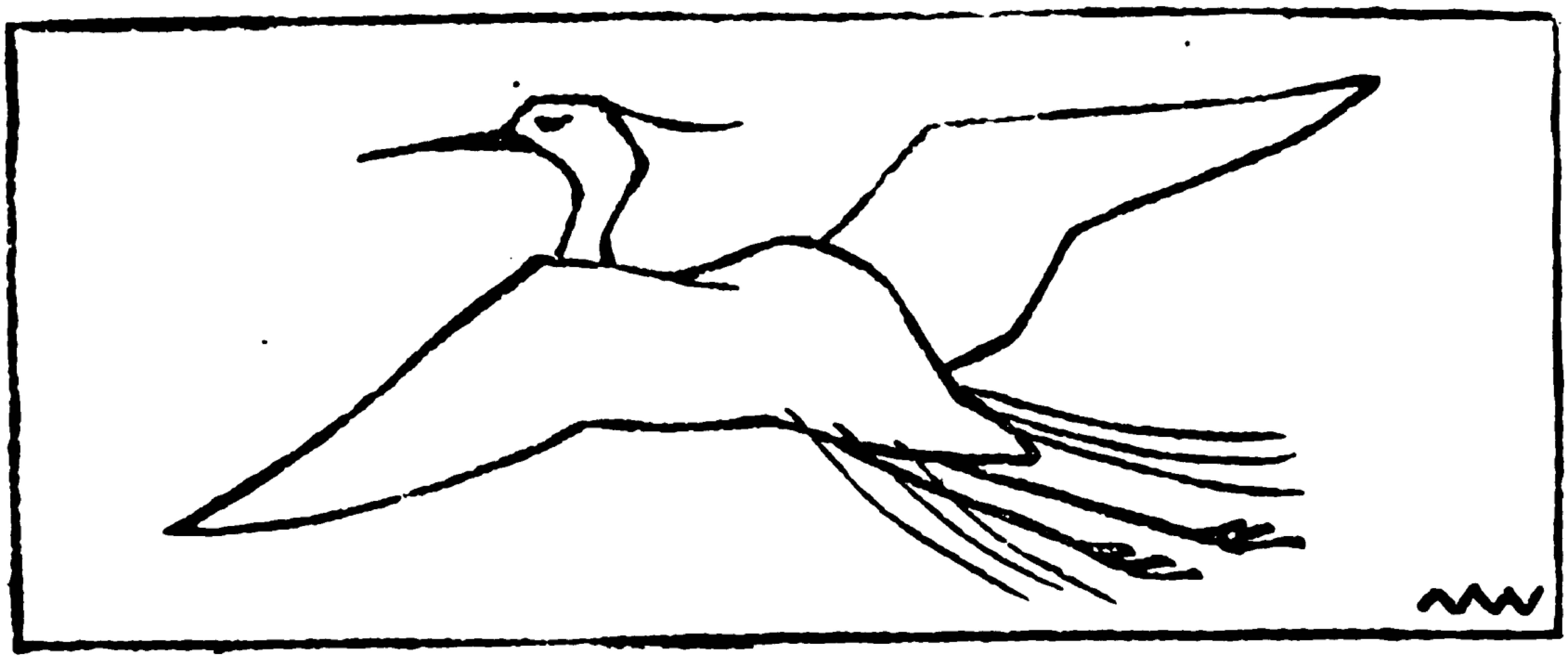
一筆申上候その後はちつともおいでがありませんところを見るともう私には御用がなくなつて私見たやうな賤しい藝者はいやにお成なされ候事とかなしくつてかなしくつて仕樣がありませんあなた樣にはきれいな奧樣をおもらひなさいましたさうで新聞でおやすくない寫眞を拜見いたしても私は藝者ゆへなんともいふ事はできず實にくやしうございますしかし私は別に何ともしはしませぬからどうぞいまゝでのやうに來て下さいこの手紙とゞき次第おいで下さいおいでがないと電話をかけますそれがお

こまりならどうぞ一度でもいゝからおこしの程おねがひ申上げます小花さん[illegible]がないといふ事で小花さんもうらんでおります小花さんは十月から姉さんのゐる富士見町へおはいりました私もこゝは思はしくありませんから神樂坂か富士見町へ行きたいと思つてます お目にかゝつてその御相談もしたうございますから是非々々おこしの程ねがひ申上候　君より

鵜崎はこれまで藝者の手紙など一度も讀んだ事がないので假名ばかりの惡筆に一通ならぬ苦心をしてやつとの事讀み終つた。そして小花が富士見町へ變つたと知るや、鵜崎は早くこゝへ引越して來てよかつたとも思へば、また引越さなかつたらどうしたらうとも思ふ。又さつき雲林堂の亭主は何故その事を默つてゐたのだらう。まだ知らないのか知ら、いや知らない筈はないと我にもあらずそんな事を考へ出してあゝ馬鹿々々しいと腹立し氣に君勇の手紙を机の下に投げ込んで立上つた。もうぢき午と見えて本堂の方で木魚の音がし出す。鵜崎は大方今朝あたりから海石先生が支度の出品に取掛つて居られはしまいかと思付いて其の儀自金の方へと出掛けた。

本年秋分の頃中央公論主幹滝田樗陰氏屡々陋居を訪はれ明年新春發行の誌上に掲載すべき長篇の小説を求めらる余時に恰も滑稽小説おかめ笹の腹案大略成れるあり即本年極月に至らずして脱稿せん事を約す余自来[illegible]文明の編輯一切の事を放棄して是を籾山庭後に托し專心約に違はざらん事を勉めしが雜事の如くならず期日に及びて僅にその前編を草し得たるのみ遂に已む得ずして未完の前稿を掲載するに至りし讀者諸君と主幹樗陰子とに對して謝せんとするも辭なきを如何せん故に今編の腹案を略記して聊か陳謝の意を表さんと欲すおかめ笹は其主人公とする凡庸拙劣の畫工鵜崎巨石が意想外なる事件の爲に意想外なる利益を得安心して畫會

に耽る事を得るに至る一段を以て結了す意想外の事件とは即この滑稽小說の骨子にして曲折波瀾あり讀者を倦ましめざらんとする作者の用意亦專こゝに存す然れども其の眞意の在る處は成功せる畫家海石其子翰其姻戚老官吏某狡猾なる骨董商等個々當代人の心理を描寫し又我國古美術鑑賞家半面の消息を傳へて作者平常の欝氣を散ぜんとするにあり古名畫の紛失と其の贋物の出沒は聊探偵小說の氣味あるべし凡庸拙劣の畫工は此の事件を中心として活動する怜悧なる成功者の間に驅馳使役せらるゝ中偶然意外の果報を得一夜其の故郷ともいふべき富士見町に歸來つて小待合に安藝者と快飲する一段讀者をして覺えず破顏一笑せしむる事を得ば作者の得意おそらくは主人公が藝者買の喜悅に優るべし然れどもそこまではまだなか〱書けない尻切とんぼ云はぬは云ふにまさるといふ事あれば書かぬは却て書くにまされるや又知るべからず。（巳年歲晩荷風記）



嵐の前

中澤臨川

一

西暦一八八×年のことである。ニーチェは友達のピーター、ガストと一緒に暫くベネチアに逗留してゐたが、七月に這入つてから、暑さを避けるために、自分獨りで牧場と森との麓地を攀ぢて、以太利アルプスの中腹に當るエンガデンへ移つた。そこは淋しい谷合の小村で、瑞西の國中を大きな公園のやうに思つてゐる英國人でさへ、めつたに姿を見せたことがなかつた。

彼の手には一卷の書物があつた。それは彼自身の著書で、ついその月初めに漸く出版になつた『日の曙』であつた。それを出すまでにどれだけ彼はガストや本屋に迷惑をかけ、またどれだけ自分の心を焦立たせたかわからない。それだけ彼は自分の著書に自信を有してゐた。「新しい本、偉きな本、非常な本……」、かう彼は公言した。その原稿は、覺束ない手記から、友人のガストによつて丹念に淨書された。なぜなら病後の彼は極度の近眼を一層弱らせた上に、手のふる

えが劇しかつたからである。それが本屋に渡される時に彼はかう言つてやつた、「急いでくれ、急いでくれ、急いでくれ！……遲くとも四月中に仕上げるといふ證書を印刷屋からとれないものだらうか、兎に角出來るだけの手を盡してくれ、この書の內容はそれだけ重大だ……」と。が、本屋の都合で其出版は七月まで延びた。焦れきつた彼の手に漸く新刊書の渡つたのは、彼がエンガデンに立つ四五日前であつた。

それだけでも彼の心は沈着いた。實際この書は、彼が三四年來の長い苦しい病氣と劇しい心の懊惱とに別れるに際しての唯一の記念であつた。どれだけか長い病苦のあとで彼は平靜な心で死を待つたか――――むしろそれを飢え望んだか。

「おれは暇といふものゝ與へられなんだ人間としては、自分の爲すべき事だけは爲し了せた。おれは多くの人達に善い油の一滴をふりまいた。」

幼少から間斷なく病弱と戰つて來た自分の一生を振りかへつてみたときに、何時も彼はかう言つて慰めた。それにしてもまだおれには爲すべき事がある。おれは何うしても自分の內にある或る力强い物に表現を與へねばならぬ。おれは既う「人生の眞中」だといふ三十五歲を越した。ダンテが彼の「ビジョン」を得たといふのもちやうどこの歲だ……かういふ意氣込を以て、彼は病のひま〳〵に筆を採つた。或時は友人のガストに口述して筆記して貰つた。或時はゼノアに留つて、朝早く床を離れるなり、僅かばかりのパンと菓物とそして手帳とを持つて海岸の岩影にたゝずんだ。そして暮れ行く海を眺め盡すまで仕事に耽つた。其處で彼は自分を思想界のコロンバスに譬へてみたりした。

このやうにして出來上つたのが「日の曙」である。その時にも[illegible]、[illegible]大學の教授をやめて、妹のリスベスに伴れられ、最後にバーゼルの地を見捨てた[illegible]、絶望の人であつた。

「おれの葬式は友人だけで出してくれ。決して僧侶を傭つたり、誠意のない弔辭を讀ましたりするな。どうか眞正の異教徒としておれを葬つてくれ」、かう言つて彼は遺言をした。

然し幸にも彼は助かつた。『日の曙』は遺著とならずに濟んだ。却てそれは半生の病苦と懊惱とに別れて新らしい生涯に入るめでたい記念となつた。彼は今盛裝して世に出た愛著を手にして、エンガデンへ向ふのであつた。

なつかしいエンガデン！それは彼にとつては救生を意味する地であつた。ちやうど二年前に、彼が全き絶望の心を抱いて、死を覺悟しながら、重い傷を負つた獸の深林に逃れるやうに、遣瀬ない孤獨を覓めに來たのはこの地であつた。然るに不思議にもその地の空氣は彼を活かした。暫く滯在してゐるうちに彼の病氣は一皮々々と剝ぐやうに薄らいでいつた。殊にそこで味つた甘い孤獨は何よりも彼にとつて忘られないものであつた。

ニーチェがエンガデンの村へ入つたのはちやうど日暮であつた。彼は急に安心したやうにがつかりして路傍の小さな岩の上に疲れきつた腰を下した。水分にうえてゐる山腹の涼しい乾いた風が吸ひとるやうにして彼の五體から汗を切つた。彼は一しきり寒氣を覺えた。草いきれのするベネチアの郊外とは格

段の相違であるのが感ぜられた。そこから半哩ばかり上に當つた小高い丘の裾に森を扣へて立つ五六軒の農家が見えた。彼はそれ等の木造の家屋に住む惇樸な以太利語を使ふ百姓達の顔を思ひ浮べた。彼がこの前初めて來た時には之等の農家のうちでも割合に小奇麗な一軒で間借をしてゐた。彼は再び住はうとするその部屋の有様などを心に描いてみた。

三つ四つの丘が行儀よく同じ高さの波をうつて並んでゐた。最初に眼に留まつた農家のある丘の並び合つた第二の丘の裾には眩ゆく夕陽をうけて立つ白堊の二つの建物があつた。それはこの村の寺院と學校であつた。年老つた無口の僧侶、人の好い校長——「孤獨」の經驗者がよく味ふとのあるたまらなく人懷こい日には、彼はいつもこの人達を尋ねて、自分でも不思議なほど快豁に話したものだ。彼等は好意と感謝とを以て彼が去つた後にも「あのめづらしい、よく學問の出來る、謙遜で親切な獨逸の大學教授」を憶えてゐた。ニーチェの心は再びその人達に遇ふ喜びで躍つた。

溫かい光が疲れた手足に浸み入るやうにして彼の周圍にあつた。そして靜かに眼の下に擴がる青い牧場を照らしてゐた。それが殊に彼の弱つてゐる視力に心持よく映じた。彼はゼノアの青海原の黄昏の景色を思ひ出した。波のうねりに似た數知れない丘々のあひ〻には尊嚴な威容をした松の森と樅の古木の林とがあつた。林と林、丘と丘との間隙から所々に綠色の乳をたゞえた小さな湖水が見えた。いろ〳〵の形をした岩があちこちに散在してゐた。見渡すかぎりの野は眞夏の飽滿をみせて、草と花とが我勝の色彩に誇り榮えるのであつた。

譬へやうのない哀傷がニーチェの心を占めた。彼は病後の人に必ずある心の脆さを以て、言ふに言は

れない淋しさを感じた。彼の心は秋の日のやうに澄んで落着いた。[illegible]ゝつたゐた。それが彼をして山國の秋の早いのを思はしめた。

凡ては平和の中に暮れて行つた。彼は無意識に懐中時計を出してみた。それはちやうど七時の處を指してゐた。

彼の前を一隊の牧牛が過ぎた。徐かな足取りで、或る物はソクラテスのやうに、或る物はマルカス、オーレリアスのやうに、或る物はヅアラッストラのやうに、どれもこれも深い瞑想に耽つてゐるらしく默りこくつて通つた。それが或時は離れ、或時は密集してリズミカルな前進を續けた。たつた一つ遠く離れて松の森を背景に立つてゐる牡牛が夕陽をうけて浮彫のやうに映つた。一隊は白い沫を立てゝ流れてゐる小川の方へ近いた。偉大と沈勇との權化のやうな王牛が無言で指揮をしてゐるやうに見えた。その後から日にやけたベルガモ系の男と男裝した十二三の少女が隨いて行つた。少女は面白さうに水瀬をじやぶ〳〵させて通つた。

右手に當つて、大きな森の帶と削つたやうな岩との上に廣い雪の野があつた。その野を越して薄い靄を着けながらアルプスの連山が白氷に輝いてゐた。凡ては靜粛で、偉大で、燦爛であつた。純白な光の世界よりほかはなかつた。彼は深いなじみのある希臘の古英雄を聯想した。

その夜は夢のない眠が彼を襲つた。翌朝眼をさました時はもう日が高く昇つてゐた。

それから數日間といふものは、彼は新生活に對する準備で忙がしかつた。姉のリスベスや友達にあてゝ

安着の報知を出した。たゞた今別れて來たばかりのガストに當てゝは、「私はこの數年來君から味つた友情ほど尊いものを知らない、私は一日に七たびも君の顔を見たい」といふやうな感傷的の手紙を書いた。それでゐて彼は若しやガストが尋ねて來はしまいかといふことを惧れた。彼は何事を措いてもこのエンガデンで味はなければならない全き孤獨を汚されまいとした。で、慌てゝまた妹に手紙を書いて、ガストを來させないやうにそつと賴んでやつた。メーセンブッグ女史に當てゝは殊に長い手紙が書かれた。彼はこの老女史の親切と感化とを思ふたびに、眼に涙を浮べずにはゐられないんだ。その手紙を書きながら彼はまたワグナアの事を思ひ浮べた。彼の心には密かに感謝と後悔の波が立つた。感激に醉つたベーロイスでの幾日かゞ浮び出た。コシマ、ワグナア夫人が止度くなつかしいものに忍ばれた。

彼の到着を聞いて周圍には珍らしい客人が集つた。小半里の丘を越して第一に寺僧が尋ねて來た。校長は夕方から夜晩くまで彼の話を傾聽して飽かなんだ。「よい獨逸の叔父さん」を見る事が村の小供達の好奇心を牽いた。不思議に彼はその人達をうるさがらなんだ。

日の經つにつれて彼の心は沈着いた。彼は自分の生活を整へるために一つの座右銘を書いて壁へはつた。何人にも迷惑のかゝらない獨立を守ることゝ、自我の尊嚴を保護するに必要なだけの隱れた傲慢を維持すること、輕い眠をとること　安易で平和な服裝をすること、酒を用ゐぬこと、華奢な貴族的の友達をもたぬこと、婦人と交際はぬこと、新聞を讀まぬこと、名聲と社交とを欲せぬこと、簡易な食物を採ること、それも或るべく自分の手で調理することなどがその中に並べて書いてあつた。

彼は自分の生活費を一日一フランときめた。そして全く農夫の生活に倣はうと決心した。ゼノアの下宿

て貰ひ求めた酒精壜が久し振で持ち出された。彼は覺束ない手つきでポケットを探つたりした。幼い時の事が思ひ出された。彼は或時母に向てかう尋ねた。「お母さん、百姓たちはどんな暮しをしてゐるの、僕もあの人達のやうにやつて見たいものだ」。すると彼の母は笑ひながら答へた。「あの人達は芋と脂肉を食つて、惡い咖啡とアルコールばかり飲んでゐるのさ」。その時之を聞いて小供心におびえたことを思ひ出して彼は微笑した。

彼はよく帽子を被らずに外へ出た。また眼の惡い彼はいつも暗闇の部屋で寝た。彼のこの習慣は昔て惇樸なゼノア人から憐みを買つたことがある。「可愛相にあの獨逸の大學教授は貧乏で蠟燭が買へないと見える。」かういつて同宿の者からそれを笑られたことがあつた。そんな事をも彼は思ひ出して笑はずにはゐられなんだ。

次第に周圍に馴れるにつれて彼の心は言ひやうもなく沈着いた。甘い孤獨の底へずんずんと落ちて行つた。一種のあきらめと遊惰な安心さへがそれに伴つた。彼の頭には白髪が雜つた。彼は急に老人じみて來た。中年の者を犯す心の變化、殊に病後の身にまつはる快よい肉の疲れ――それを彼はどうすることも出來なんだ。

或時は彼は夕暮の散歩から宿へ歸ることを忘れる日さへあつた。とある岩影に佇んで夕陽を見送る彼の顏は失神した者のやうであつた。「歸れ」と彼の意志が嬾く命令するが、彼の疲れた身體は立たうとは爲ない。すると心の底からは、「歸つたつてどうするものだ、一體何處へ歸るといふのだ、迷ふなら迷ふさ」といふ遣瀬ない絕望の聲がする。こんな時は彼は夜露を浴びたまゝ夜遅く床へ入るのが常であつた。

彼の日課は、朝、床を離れるなり一片のパンと小さな手帳とを持つて外へ出ることであつた。然しその手帳には久しい間一行の句も誌されなんだ。パンへも手が附かずに持ち歸られることがあつた。彼はそこここにおなじみの場所を見つけた。とある森の一隅、大きな岩影、湖水に浴つた平な丘地。さういふ處で永い一日を傘で日を除けながらぢつと身動きだにせない彼の姿を村の人達はよく見かけた。彼等は好意をもつてそつと彼の視線をよけた。

淡い哀愁に雜つて、記憶の香華が彼の前に開かれた。幼ない頃からの思出がよい香ひにつゝまれて消えては浮び、浮んでは消えた。疲れてゐる彼の心には、それが殆んど何等の反抗も懺悔も伴はずに他人事のやうに通つて行つた。

敬虔な父の面影は彼を幼少の身に復らして、再び純な基督教徒にさせた。「美しい野蠻人」といふ渾名をとつた母が彼の眼の前に立つた。あのなつかしいレッケンの田舍町で、正直に父祖の業を繼いで牧師になつてゐたら、自分の生涯は何れだけ幸福であつたらうとも思つてみた。ふと、憂欝で傲慢な然し綺麗に身づくろひをした潔癖な少年の彼——「少伯爵ニェッキー」——の影がユモラスに映つて消えた。幼ない頃得意にした即興樂が耳元で囁かれた。

青春の危さ、最初に襲はれた懷疑の恐ろしさ、自立の信念を得るまでの苦しさ、ショーペンハウエルの鬼、ワグナァの魔、希望に充ちた教授生活の得意、果ては病氣、絶望、その中から得た運命の味ひ——AMOR FATI....

[illegible]

との一時期が、まだ生々しい傷のやうに彼の心に殘つてゐた。幾度か彼は絶望し、また幾度か強い反抗心を以て死と戰つたことであらう。肉の苦痛の壓迫が劇しければ劇しいほど、それに打ち挫かれまいとして、その下に曲げられた彼の精神は異常な緊張力を出した。永い病苦に馴れるまゝにかうした反逆狀態が却て彼の樂みともなつた。彼は今まで知らなんだ冷たい新しい光で世の中を見渡した。その光には一種言ふに言はれない魔があつた。「この新しい光は自殺のあらゆる誘惑を打消し、生命の繼續を好ましいものに思はせるほど力強い」と彼は書いた。彼は侮辱の眼を以て、世の健康な人々が誇り氣に描いてゐる温かく樂しい夢想世界をあざ笑つた。かうした冷笑の樂みが彼には必要であつたのだ。

……その頃のことを思ひ出すたびに彼は慄毛を振つた。今日となつてみれば、當時の自分がいかにも不自然で、空恐ろしいものに見えた。彼は自分で自分の前身を憎みもし憐みもした。温かい回復の曙光を迎へて、その中に溶け込むやうな氣をつく〲と味つてゐる今の彼は、肉體も精神も快よく懶く疲れてゐた。で、つい一年ほど前までの苦みや努力や反抗や冷笑やを考へると、それがいかにも一種不快な狂暴のやうに思はれてならなんだ。人間も自然も再び彼の心に希望を齎した。健康が彼の身邊に善意の魔術師のやうに戯れた。彼の眼にはすぐ涙が滲んだ。

遣瀨ない苦みを抱いて、何れだけ彼は轉々して歩いたことであらう。彼はこの三四年來の自分の跡蹟を思ひ出して見た。ナプレス、ロゼンロオイ、エンガデン、ナウンブルグ、ガルダ湖畔、ベニス、マリエンバツト、再びナウンブルグ、マジオル湖、ゼノア、ベネチア……。凡ては跡方のない夢のやう

であつた、ペーロイスの歡樂とともに。

その中でもゼノアに於ける幾月かを彼は忘れることが出來なんだ。彼の生命は全くそこで救はれたと云つてもいゝほどだつた。南國に滿ち溢れた光の海の中へ初めて置かれた時の彼の驚きは「喜び」といふ言葉ではとても言ひ盡せない物であつた。殊にそれが病後の身の上に不思議な力を振つた。北の國に育つて、骨の髓までも「北」の感化を享けて來た彼にとつては、南の光の知覺は宛然生れつきの盲人が忽焉として視力をえたほどの奇蹟であつた。彼は永らく食に飢えてゐた者のやうに、擇ばず飽かず之を吸つた。光ー、日の光、溫かい光、柔かい光、濃い光、眩しい光――その光が純い裸のまゝで、空に散り、地に降り、紺青の海の上に照り、街の赤い壁に映え、寺の塔の頂きに燃え、アンゼラスの響き渡る夕暮の海岸の岩の上に浸みついた。そこでは色の管絃樂の中で、橄欖、椿、杏、レモンなどの樹が累々、熟した果實が枝といふ枝をしはらせてゐた。回復期に向つてゐたニーチェの身體には殊にその光の溫かさが快よく感じられた。朝な夕な眼から、口から、鼻から、ありとある皮膚の穴から吸ひ込まれる光によつて、彼の五體は見る〳〵蘇つて行つた。彼は萬の生命の流のやうに空に散り敷く光の血を自分の肉の中にも感じた。彼は自分が今迄生き苦んで來た寒い灰色の禁欲主義や努力主義を嫌つた。そして以太利人に特有の透明な智慧を借りて柔和な運命論者になり、休息といふ事の呼吸を解するやうになつた。同時に世の中の快樂に對しても寬大な心を持ち始めた。

さうした回想に耽つてゐる彼の眼の前には何時も陽に輝くアペナインの山々と深く寬たり息をしてゐ

[illegible]彼を慰めた。「淨い甘い親切な魂よ、不幸なお前よ、何よりも先づお前は[illegible]」と。

女史を思ひ出すたびに彼の心には多大の感謝が湧いた。彼の眼には涙が浮んだ。何れだけ此女史の深い情によつて彼の病中が慰められたことであらう。世にも稀れなほど貴い經驗のかず〱を重ねて來た老女史から彼はさま〲の感化を受けた。彼女が世界のあちこちで逢つたといふいろ〱の偉人の話が殊に彼を喜ばせた。バクーニン、ヘルツエン、トルストイ、リスツ、イブセン、マジニイ、ガルバルヂイ――さうした人達の噂が常に彼女の話題に上つた。ナプレスの借別莊で一緒に日を過ごした時などは彼女は幼な兒に寢物語をする母親の樣な心持で、若い病哲學者を勞はり庇ひながら、靜かな夜を語り通す事もあつた。その時にはよくマジニーの話がでた。ニーチェは嘗てアルプス越への馬車の中で此の以太利再興の英雄と同乘したことがあるので、彼の噂は一しほ興味を牽いた。「妥協するな、斷乎として全の中に、善の中に、美の中に生活せよ」といふゲーテの言葉がこの偉人の處世訓であつたといふ話なども面白かつた。不遇の晩年に彼は懇しいリグリアの地を往生の場所と決めて、自分の名も國籍も隱しながらそこへ落附いた。英國人とばかり思はれてゐた彼の口からふと流暢な以太利語が洩れたので、醫者が怪んで尋ねると、臨終の床の上から彼はかう答へた。「見たまへ、私ぐらゐ以太利を愛した人間はない」。この話しは殊に病ニーチェの感憤を買つた。「私の一番尊敬する人間はマジニイだ」――から彼は女史に言つて、感激的な少年らしい眼付をした。

かうした追憶が彼には一番親しかつた。彼はエンガデンの丘にうつる夕日の前で眼を細くした。彼は弱い臆病な生粋のニーチェに歸つた。メーセンブツグ女史にはどうしても彼が一個の大學教授として考へられなんだやうに、彼の女史になつく態度は慈母にあまへる子供のやうであつた。

生來女といふものに極端な輕蔑を拂つてゐたニーチェの胸の中にも隱れたローマンスはあつた。で、彼は時々それを女史にだけ打明けた。「あなたを信用してお話するのだが、私も早く一人の善良な女がほしい」かう手紙に書いたこともあつた。「自分の理想は他國の女を妻に迎へることだ」と、こんなことも言つた。肉の回復と病後の淋しさとエンガデンでの孤獨とは一しほ彼に異性のなつかしさを思はしめた。彼は自分ひとりで顏を赤めることもあつた。

エンガデンでの幾日かは知らぬ間に經つた。彼は今の平和に思ひ比べては自分の過去を笑つた。そして充分の滿足を以て幸福に見舞はれつゝある未來の樂しい事業を心に描いてみた。自分の生涯で試錬の危期はもう過ぎ去つた、自分は「我」を征服することができた、幸福が自分の避くべからざる運命であらねばならぬ、といふやうに彼は自分で媚びた。沈靜な彼の心は波一つ立たなんだ。

彼の描く生活の國の中には温かい自然があつた。彼は南國の天地で昔の以太利の百姓のやうに暮したいと思つた。思索生活と耕農生活との微妙な調和を彼は配案して見た。「初年には十本ばかりの菓樹を植ゑよう。それから薔薇、リラック、カーネーション、草苺の藪、グースベリイ。翌年は十畝の野菜畠」な

彼の胸に急に湧くのだ。[illegible]な羞恥心よりも、それ以上突込んで考へることは[illegible]れが妹のリスペスに對する非常な罪惡であるやうに思はれた、彼の身の上を案じて未だに獨身でゐる妹に。

或る日メーセンブッグ女史から一本の長い手紙が届いた。それには彼の安着と健康とを祝する意味が最先に書いてあつて、彼の身の上に關する様々な女らしい注意が附け加へられた。それから「突然のやうではあるが」といふ書出しで、然し決して事は突然ではなく、彼女の性質として自分の信じ愛する心の友の不幸を見過してゐられないといふことから、「早く一人の善良な女がほしい」と言つた彼の言葉が何うしても彼女には忘れられないことやら、彼女が日頃から注意して彼の爲めによい配偶者を世話しようとしてゐたことやらが述べてあつて、最後に適當と思はれる一人の女が漸く見附つたと言ひ足してあつた。

女史の手紙によると、その女といふのは露西亞人で、まだ二十歳前の小娘だが、非常に怜悧で、智識も相當に發達してゐるといふことだ。名はルイ、サロメと言ふ。フイラデルフイヤからキエフからブガレストから、世界の方々の田舍町から、よくかうした娘達が都會の空氣を慕つて、巴里や羅馬を目懸けてやつてくる。女史にはさうした人達に知人が多かつたが、然しこのサロメのやうに優れた女は稀であつた。彼女の容貌は整つてゐるといふほどではないものの、却つてそこに言ふに言はれない愛嬌があるさうだ。母親が彼女の上衣とショールを持つて隨いて歩いてゐるのだといふ。

女史はその娘が非常に氣に入つた。で、或時ニーチェの著書を彼女に讀ましてみたところが、よくそれを理解するらしかつた。女史は不幸な然かし「非凡」な斯の哲學者の身上話を彼女にして聞かした。ワグナアと彼との交友から離別に到るまでのいきさつなどをも話した。その中でも彼の孤獨な生活が彼女の同情を牽いたらしかつた。彼女はぜひ一度彼に逢つてみたい希望を洩した。

「なるべく早く都合して羅馬へ來てくれ、彼女に逢はせるから」かう言つて手紙が結んであつた。

その手紙を見てゐるニーチェの手は震えた。彼は二三度繰返して讀んだ。それは陽の光の濃い谷合の午後であつた。彼はふと立つて戸外へ出た。彼の足は知らず／＼村の學校の方へ向いた。

案内を知つてゐる彼は、誰にも挨拶せずに小さな樂堂へ這入つていつた。そこには古い一臺のピアノが据ゑてあつた。彼はその前に腰を下して、無意識に指先を鍵に觸れた。ショパンの樂がゆる／＼と流れ出した。(その頃の彼はビートーベンやワグナアを恐ろしいものに思つてゐた。やさしいショパンが一彼の氣に入つた)。涙がおのづと彼の頰を傳はつて流れた。小半時もかうして彼はピアノの前に座つてゐ番た。誰も彼を妨げる者はなかつた。彼は泣けるだけ泣いた。

夕日を浴びて出て行く彼の後姿を親切な校長の眼が見送つてゐたが、彼はそれに氣付かなんだ。

その晩の彼の夢にはさま／＼のローマンスが現はれた。なつかしい母の顏付、悲しさうなリスベスの眼なども離つた…………

九月に這入つてから、アルプスの山腹は急に寒さを増して時雨さへ催した。[illegible]

自然が死んだやうに固定して横はつた。

沈靜のどん底に落ちてゐたニーチェの心にも漸く厭きが來た。こゝへおちついてから二月といふものは平和が彼であつた、彼は永久にそれを専領したと思つてゐた。彼には幸福な誇りがあつた。然し日のたつにつれて、何とはなく單調な生活に對する反感が時折彼を苦め出した。平和を謳歌する瞬間に、彼の心の奥底にはそれに物足りない何物かゞ潜んでゐた。或時は彼の身の內、身のまはりの沈默が彼を驚起させた。病後の疲勞の回復につれて、全く征服されたと想はれてゐた彼の「我」が徐かに再び頭を擡げ出すのであつた。その「我」は一種魔的(デモニアク)な、獸的な、偉きな力であつた。

秋に這入つてからの夜毎の嵐が彼の心をかき亂した。夜ひと夜大きな松の森に吹きつける風が、悲壯な戰の曲を彼の枕元に寄せた。荒涼とした朝景色の中に立つ彼の顏は蒼かつた。その唇は堅くしまつてゐた。

「平和が何だ、それを俺はどうしようといふのだ」。

「俺の求めるのは幸福ではない、生命(ライフ)だ、戰だ」。

……………かういふ聲が次第に强く彼の心の表面へのし出した。或晩の如きは彼は殆んど狂氣したやうであつた。自分も知らないまに、彼の手帳にはさま〴〵な恐ろしい言葉が書きつけられた。

然し彼の平和を求める心は意外に强かつた。それに壓されて「我」の現はれは斷片的な、無目的なものとして生滅した。

彼は急に思ひ立つてエンガデンを引拂ふことにした。で、健康を口實にして、溫かい羅馬へ移つた。

二

メーセンブッグ女史は抱へ込むやうにして彼を迎へた。彼の親しい同窓の友で哲學者ポール、リイが矢張女史の處に來合せてゐた。

ニーチェは彼等の口から一通りサロメの素性や性格やらを話して聞かされた。露西亞の或る將軍の娘であること、あの邦の「インテリゲンチャ」の男女に時々見かけることのある珍らしい沈着と決斷と聰明と類ひのない知識慾とが純な二十歳の小娘の身體中に充ち滿ちてゐることなどを、二人は口を極めて說いた。「うい〳〵しい女傑！」かうした感嘆の言葉までが終ひに女史の唇から洩れた。

それから四五日して、ニーチェは女史の宿で彼女に引合はされた。その席には女史とリイと、サロメ母子のほかに二三の客があつた。彼等は華やかに話し合つた。四五年來孤獨の生活に馴れて來たニーチェにとつては、かうした社交の空氣は一つの眩惑であつた。女史の沈着き拂つたとりなしが却て彼を臆病がらした。

サロメはおもにリイに對き合つて話した。ベーロイスに於けるワグナアの華々しい活動振などが話題に上つた。それをニーチェは傍から默つて聞いてゐた。興の高まるまゝにサロメの蒼白い顏に血潮がさした。思想の交換——對話——の樂み、それを自由に行ひうる人達が彼にはつく〴〵羨ましかつた。彼の

[illegible]
に沁々と彼の言葉に聞き入つた。彼女は自分では稀に口を挿んだ。然しその熱心で沈着な態度からは決して、彼女の理解力を疑ふ餘地はなかつた。

彼の前には質素な服裝(みなり)をした、小がらな、聰明な娘があつた。小さな身體(からだ)につゝまれた淨い魂、露西亞の女王……彼のセンチメンタリズムが彼にこんなことを想はせた。彼女は直ちに彼を牽き附けた。

ニーチェの心は小躍りした。彼の顏はほてつた。歸路(かへり)に彼はリイの腕をつかみながら、いかにも快活さうに話し懸けた。

「たしかに立派な女だよ、君が貰つてはどうだ」。

「否(いや)俺は厭世主義だ、人類を繁殖させる事は俺の主義でない、それよりか君が貰ひたまへ、君には最も好い伴合(つれあひ)だ」。

「俺が結婚する？」から彼は言つて暫く考へ込んだ。「すると俺は嘘つきになる」。

彼の心には急に或る哀愁が襲つた。自分は一生結婚しないといふことを、これ迄彼は妹のリスベスや友達にたび／＼誓つた事を思ひ出した。リイの心にも直ちにそれが浮んだ。リイは彼を憐んだ。ニーチェはリイを嫉んだ。二人は默つて夜の街を歩いた。

苦勞性なメーセンブツグ女史にはニーチェの胸の中がよく讀めた。彼女は成るべく目立たないやうにして彼とサロメとの會見の機をつくつた。彼はその頃から見違へるやうに服裝(みなり)を氣にし、髭にも手を入れ

れた。女史にはそれがいかにも自然で可愛く思はれて、おのづと微笑まれた。

彼の心では歡樂と哀愁とが手を握つた。どちらも甘い乳を吸はした。羅馬の晩秋は懶いほど靜かだつた。古い丘の都は蒼深い大空の海の底に埋れて眠つた。夕陽が公會堂の壁に赤く映えて、鐘が鳴つた。タイバー河の泥水の流が重々しく轉がつた。廣漠としたカンパニアの野に音のない風が吹いて、一面に黄ろい光が散つた。聖ヨハネの御寺のまわりにある數あまたの像の上には蜥蜴が靜に腹をふくらせて日向ぼつこをしてゐた。午後からよくそこへ出懸けて草深い中に埋れながらうづくまつてゐるニーチェの形はちやうど一つの石像のやうであつた。

彼の胸はあらゆる物に對する感謝で充ちてゐた。彼は夜の床の上に横はりながら心ゆくほどすゝり泣きした。それは孤獨の十年を閉し盡した堰の開かれたのであつた。涙が洪水のやうに自由に溢れた。彼は低い顫えた聲で祈つた。たつた一度サメロと交はした握手の跡が何時までも何時までも彼の掌の中でほてつてゐた。

サロメ親子は程なく羅馬を去つた。女史のきも入りでリイとニーチェが彼等に從つた。冷淡な母親、愉快さうなリイの顏がいつも旅中のニーチェの心をいら立たせた。彼等は瑞西へ這入つて、暫くルセルネに足を留めた。

それはニーチェにとつては思出の多い地であつた。或る日の夕暮、彼はサロメを伴つて湖畔へ出た。

二人は門前に腰を下して長い間語り盡した。

それはワグナアが暫く世を避けて、この邊家に住まつてゐる頃、彼が若い純な敬仰の心を以て師を音づれた折の物語であつた。彼はバーゼル大學に就職後間もなく、二三の友達と湖畔に遠足を試みたが、歸路は獨り別れて、こゝに師を訪ねた。ちやうど今立つてゐる此の門は樹の繁みの中に堅く閉されてゐた。内からは微かに樂器の響が洩れた。案内を乞ふと暫くしてから從僕が出て來て丁寧に來意を問うた。

「お主人の申されるには、ヘル、ニーチェと言ふお方は、曾てライプチヒで一夕御會ひした御仁の事であらうかと」。

「左樣」と答へると、彼は直ちに奥まつた一室へ通された。そして終日そこで師とコシマ夫人の手厚い待遇を受けた。

そんな話に次いで、當時のワグナアの天才が何れだけ高貴な孤獨の絶頂に立つてゐたかといふこと、異常な智慧と經驗とを積み重ねて來た彼が六十のその歳まで些しの衰へも見せずに愈よ深い熱望に燃えてゐたかといふこと……などを彼は熱心に話して聞かした。サロメの眼は可愛らしく光つた。

「私は何うしてもワグナア夫妻を忘れることができない」、やゝ暫くしてから彼はかう言ひ足した。然かし今は何もかも夢だ、私達は一度友達だつた、それから他人になつた、それは在るべくして在つた事だ。何も隱すにも悔むにも當らない、私達は各自の港を持つ二つの船だ、私達の船はもう再び逢へないだらう、逢ひけ逢つてもお互に知らずに了ふだらう、それほど海と太陽は私達を變へたのだ」。

かう言つてニーチェは顏を反らした。彼は急に默つて了つた。彼の眼には涙があつた。それをサロメは氣付いてゐた。彼女は心から彼を憐んだ。暴力と驕慢との哲學者のやうに想はれてゐたこの人の胸の底にかうした溫い情の乳のあるのが、何よりも彼女には嬉しかつた。

二人は立ち上つた、そして小暗い夕暮の道を歩き出した。東の空に月が昇つて樹の間を明るくした。ニーチェが最初にワグナアを訪ねた時も、ちやうど同じやうに月の明かい晩だつた。師に送り出されてこの湖のほとりを矢張かうして歩いたものだ……………

二人はまた道傍の石の上に竝んで腰を下した。月明りが微かにお互の顏を見せた。二人は默つて手を握り合つた。

涙が止度なく彼の頰を傳はつた。彼は小兒のやうな心になつて泣けるだけ泣いた。そして幼少からの自分の身上話を彼女に明かした。殆んど囁くやうな小聲で、考深い長い沈默を置いては、ぽつり〳〵と語りつゞけた。「私の冒險は何れもこれも苦しい徒勞だつた……私は貧乏だ、私は幸福といふものに見離なされた運星の下で生れた……」かう彼は言ひ足して、そつとサメロの顏色を見た。

彼女の顏に急に影が差した。彼は言ひ過ぎたと思つた。

「然しあなたのやうな尊い孤獨の生活は世の寶でせう」彼女は慰めるやうに言つた。

「では貴女は私には家庭を造る資格がないとお思ひですか」彼は不平らしかつた。

「妾の可愛い淨い哲學者！」彼女は獨語のやうに囁いた。暫く沈默が續いた。

「貴女[illegible]

侶で御座いませう?―

「否や、いつかは結婚をなさるおつもりでせう」

彼女は悲しかつた「どうぞそんな事は訊かないで置いて下さい」かう言つて彼の顏を正面に見つめながら、堅く彼の手を握りしめた。

ニーナの心にはふと友達のリイに對する嫉妬の念が差した。

「貴女は私をどう思つてゐて下さいます?」

「妾はあなたを尊重します、そしてお氣の毒だと思ひます」

「では貴女は……」

彼は言ひ足した「私の……私のものになつて下さい」

…………………………

「否え」かう言つて彼女ははつきりと答へた。「どうぞ妾をあなたの一生のお友達として下さい、どうぞ妾を苛めて下さいますな、あなたは妾が今迄遇つた人のうちで一番尊とい、一番親切なお方です……」

「友達!」彼は悲しい眼附をしてため息をついた。

彼の心のいらだつほど彼女の心は沈着いた。「妾はあなたを尊敬します、あなたの御本の中においてあるとほり、女といふものほど弱いみじめな者はありません、幸福な結婚!それは無智な人達の専有する世界でございませう、肉の結婚で一番苦まなければならないのは第一あなたです……どうぞあなたと私の間だけは深い友情で一生を貫かして戴きたう御座います」

「貴女は私を嫌つてるのだ」
「いえ、妾はあなたを戀します」
「では……」
「いゝえ……」
「あなたはリイ君を……」
「そんなことはありません」
………………
彼の手が思はず彼女の首に觸れようとしたときに、彼女は小鳥のやうに輕捷に逃げた。

ニーチェは暫くバーゼルに居を移した。そこで彼は昔馴染のオバーベック夫婦を訪ねて事情を打明けた。そしてサロメへの交渉を賴んだ。すぐに拒絕の返事が來た。「どうぞ心の友として永くあなたを尊敬さして戴きたい」といふ意味の事が慇懃に書いてあつて、最後に彼にデディケートした短い詩があつた。ベーロイスではワグナアの名聲が絕頂に達してゐた。近く公演される筈の「パーシファル」が殊に人氣を呼んだ。メーセンブツグ女史からも、サロメからも、妹のリスベスからも誘ひの手紙がニーチェの所へとゞいた。彼は自分の思想の敵のまはりに賑々しく集まる之等の人達を後にして、獨り淋しく故國獨逸へ去るのであつた。

エンガデンの[illegible]
に身を濡つた。彼の額は蒼かつた。

「好戰的本能の者は、事の無い時には彼自身にその矛を向ける」と彼の言つてゐるとほり、平和とか幸福とかいふやさしい名で人に媚びようとする幻影の中に永く住むことはニーチェの堪へうるところでなかつた。休息は彼にとつては禁斷の果であつた。サロメに對する夢も晩かれ早かれ醒めねばならなんだのだ。

CRUX MEA LUX! 一生の運試しの時が來た。

エンガデンの谷合に一夜騷然として秋を呼び起した嵐が彼の平和の夢をかき亂した日から、得體の知れない一つの魔が彼の心に巢を喰ひ初めた。彼の魂の空を時々、默示の影が通ほると、その地平線には待ち設けもしないさまざまの形の思想が上つた――夏の雲のやうに。雲は頽れてはまた盛り上つた。するうちに、かうした不思議な不安と期待との中から、そろそろと一つの構結した形體が意識にのぼり初めた。それは「永遠輪廻」の思想であつた。彼は即座にそれを數行の短文に現はして、その下にかう書き足した――「一八八×年九月初旬、海拔六千五百尺、人界を遠かること遙かなるシルスマリアに於て」と。

この思想は何れだけ彼を驚かしたかわからない。彼は臆病な殺人犯が自分の手にかけた相手の亡靈におびやかされた時のやうに、一切その事に關しては秘密を守らうと決心した。そしてそこそこにエンガデンを逃げ出した。……サロメとの交際が暫く彼の心をまぎらした。

然るに凡ての幻影の取り拂はれる時が來た。意地惡く心の奥に潜んでゐた魔が二度頭を擡げ出してこと

ことと門の扉を叩くのであつた。

「拙くも幸福顔な人間よ、汝地球上の新參者よ、聞け、この世界は既に一度ならず二度ならず、數限りなく繰返された。お前達は永遠に廻る輪廻の車の端に附いた塵の塵だ。……人間よ、お前達の一生は砂時計の砂のやうに、もどりもどつて、百年千年同じ事を繰返すだけのことだ。お前達は釘付けられてゐる毛一本でもお前達には自由といふものがない。それのみか、お前達の醜い一瞬々々は覿面に來世で酬いられるのだ。お前達のさまざまな悲み喜び、友と敵、あらゆる望みと過ち、あらゆる嘆息、あらゆる草の一葉、あらゆる日の光、あらゆる事物の同じ排列が、意地惡くお前達を待つてゐるのだ。

　何も新しい物は起らぬぞ。大小一切のお前達の生活が同じ順序と結果でお前達に歸るんだぞ――同じやうにこの蜘蛛も、この毛蟲も、この鬼の自分も。輪廻の砂時間は廻るぞ……で、お前達人間は塵だぞ……それでもお前はこの俺に降服しないか。お前は齒を喰ひしばつてこの事を告げる鬼を呪はぬか」。

　えたいの知れない魔はたゞみかけて執念深く彼の耳元に囁いた――

「まだお前は降服しないのか。それともお前はぢつと耐へて、俺の詞を神の詞として受取ることのできる法悦の瞬間まで待てるか。俺の詞を聞いたが最後、お前はその爲めに再生するか、永久に消滅するかの一つだ。お前は死にたくはないか。自殺の方が何れだけお前に樂だとは思はぬか。永遠輪廻の重い責任を負はされてもお前は安んじて生きてゆかれるか。それともお前にはこの優越にして永遠なる聖斷のほ

ゐた」

ニーチェの心は興奮の絶頂に達した。ある時は彼は失望の底に沈み、また或時は歓喜に狂つた。その強度な感情は彼をして慄へさせまた笑はせた。彼は不可解の理由から自分の室を閉めきつて佗しい時を過ごしたことも幾度かあつた。彼の眼は血走つてゐた。彼は處かまはず泣いた。然しその涙は遣瀬ない涙でもなく、甘い涙でもなかつた。それは不思議にも強い歓びの涙だつた。終ひには彼は獨りで踊つたり、あらぬ事を口走つたりした。

「遂々來た！」といふ自覺が彼に湧いた。顧みれば半生の烈しい痛ましい苦痛、長い〳〵努力——何一つ無駄ではなかつた。これが自分の定められた港なのだ。よくも遂々こゝまで漕ぎ附けたはいと思つたときに、彼の泣くのは無理でなかつた。聖なる恐怖と歓喜の幾日かゞ續いた。苦しくとも彼はこの眼前の眞理を受け入れねばならなんだ。さうでなければ自滅のほかに道がなかつた。よし、行ける處まで行かう、自分はその眞理を受け入れるばかりでなく、それを敵に廻して立派な戰を戰はう、本然の人生が無意義ならば自分はそれに一つの意義を與へよう、自ら生きがひのある人生を造らう、かう彼は決心した。

「汝は汝の敵を求めねばならぬ、汝は汝の戰を戰はねばならぬ、汝は汝の思想に向つて戰はねばならぬ」。

大きな戰の野がニーチェの前に開けた。……彼の眼は鉛のやうに悲しい深い相を帶びた。影の濃い皺が知らぬ間に彼の顏に刻まれた。輕侮をかくした彼の唇は一文字に結ばれた。彼の手は靜かに力強く握られた。彼は悲壯な「驗者」としての新しい道に進んだ。（完）

信不信

正宗白鳥

朝日は障子一杯に差してゐた。おふくは以前の自分の頭とは見違へるほど髮の毛が薄くなつたのを苦にしながら、恐る〳〵櫛の齒を入れてゐたが、ふと、

「奧さん、小包が來ましたよ」

と、階下の主婦に聲を掛けられたので、意外な思ひをして階子段を驅け下りて受取つた。包紙の文字には、暫く見なかつた兄の筆癖が氣持よく現はれてゐた。油臭い剪刀で紐を切つて開けると、彼女の好物の國産の干柿が旨さうな砂糖を吹出してゐたので、おふくはこの頃の貧しい自炊生活では得られなかつた食慾を感じた。前觸れの端書も吳れないし、包みの中にも故鄕の消息の一片も入つてゐなかつたが、それでも、自分に對する兄の柔しい情愛が一つ〳〵の干柿に籠つてゐるやうで、涙ぐまれるほどに悅しかつた。

で、喜びを分ちたい夫の歸りを待遠しがつてソハ〳〵してゐたが、今日は碁會所へても寄つてゐるのか、容易に歸つて來なかつた。髮を結直してから、下

腰よりも身を入れてお喋をして、消えかゝつてゐる火鉢の火を吹起して話をしてゐると、お喋より忘れてゐた下腹の疼みがまたチク〳〵感ぜられだした。「ちよつと力を出して動くともうかうなのだから」と、悲しくなるとゝもに、執念深い病氣が憎々しく思はれた。

と、そこへ、夫の佐吉は濡手拭に包んだ石鹸箱を持つて、靜かに階子段を上つて來たが、その顏は丹念に磨かれたゝめに、木地の蒼黑い色にもいくらか艶が出て、憫さうな鈍い目にもいくらか生々した光が差してゐた。おふくは、無性な夫を說賺かして、自分が髮を結つてゐる間に湯屋へ行つて來させた甲斐があつたと思ひながら、

「碁を打つてゐたのぢやないんですか。それにしちや早過ぎるけれど」と訊くと、

「なに何處へも行きやしない、今まで湯に入つてゐたのだ」

「貴下には呆れつちまふ。そんなに永く入つててよく眩暈がしないわね。私なら少し氣を許して入つてゐると、動氣がして卒倒しさうになりますよ」

「おれは今日は浴槽の緣に腰を掛けて、天井際の明り窓から湯氣の出るのを見てゐた。あの湯屋の高い窓から靑空を見てると東京にゐるやうな氣がしないね」

佐吉がさう云ひながら障子を開けて、手摺へ手拭を掛けて、八幡の境内の色づいた銀杏の葉を見上げてゐると、おふくは、小包のことゝ腹の疼むことゝを取交ぜて話した。まつたく見棄てられてゐると覺悟してゐたのに、兄の胸にまだ妹思ひの溫みの殘つてゐるのを、自分達の將來の一つの手賴りとして吹聽したが、先つき獨りで喜んでゐた時ほどに調子づいてゐなかつた。小包の御蔭によつて一時吹拂はれた

不祥な雲が、何時の間にか元のやうに心の隅々までも漲つたのであつた。

「ぢや早速頂くからお茶を入れてお呉れよ」佐吉は火鉢の前に胡座を搔いて干柿の包みを引寄せながら、「加減が惡ければこれから沼田さんへ行つて、も一度診て貰つて來るとい丶。今日は溫かいから戶外を歩くのはい丶氣持だよ」

「沼田さんのやうなへぼ醫者にかゝつてゐちや駄目ですよ。あの人の呉れる藥なんかいくら飲んだつて些とも利き目が見えないんですもの。まるでお錢を棄てるやうなものだわ」

「だつて此間はよく利くと云つてゐたぢやないか」

から夫に突込まれると、おふくは焦れ氣味で「それは一時の氣休めですさ。……有名な病院に入院でもして、今の間によく癒しとかないと、取返しのつかないことになるかも知れないけれど、そんな出來もしない贅澤な考へを起したつてはじまらない」と、叩きつけるやうに云つた。

病氣を癒さうなんて、ほんとに贅澤な考へだと、佐吉は心で妻の言葉に相槌を打ちながら、口では何も云はないで、たゞ干柿からしみ出る甘い汁氣に舌を盪かされてゐた。おふくも默つて包みの方へ手を出した。

「階下へも少し裾分けしようか」と、夫が自分で持つて行かうとするのを、おふくは眉を蹙めて止めて、

「馬鹿にされてるのに此方から御機嫌なんか取らなくつてもいゝのよ。よく／＼の思ひでわざ／＼寄越して呉れた物を、私は一つだつて粗末にしたかないの―

「[illegible]がそんなに有難けれは他人にやるにや及ばないさ、[illegible]うと、敵が呉れたものだらうと、干柿は矢張干柿だからなあ」

言葉には毒氣を含んでゐたが、佐吉は微笑を洩らしながら云つた。

「旨さうに食べてゐながら惡口を利くつてことはないわ。貴下からよく禮を云つておやんなさい。貴下から折れて出れば兄さんだつて親身に相談に乘つて呉れますよ」

「どうだかね。……よし好意を寄せて呉れるにしたところで、おれはお前の兄貴なんかの合力は望まないよ。あの人も事によつたらおれ達を助けて呉れるつもりなのかも知れないが、それにしちや、もう時期が遲いね。せめてもう一月早かつたら、今日の小包に甘えてお前の兄貴に抱きつかうとしたかも知れないが、もう駄目だ。先方で色目をつかつて來ても、おれの方で御免を蒙るよ」

「一月前と今と貴下の氣持がそんなに違つて來たのは變ぢやありませんか。此處へ越して來てから半歲あまりも、毎日同じやうに張合ひのない生活をしてるんぢやありませんか。春から夏になつて夏が過ぎて秋が來て、もうそろ〳〵綿の入つた物の入る時節が目の前に見えてゐるのに、私達の身の上は相變らずなんだから」

「相變らずなら結構な譯ぢやないか。お前は半歲の間本當に相變らずだつたらしいね。變つたといへば、暑い中に瘦せてこの頃いくらか肉がついたことくらゐだ」

「賣喰ひをして肥つたつてはじまらないさ」おふくは夫が今の不自由な境涯を身に沁みて感じてゐないらしいのに、何時ものやうな厭氣が差したが、思つてゐることをつけ〳〵口に出して、夫を甲斐性無しに

するのが憚かられてゐたので、云ふことが歯痒い當てこすりになり勝ちであつた。「貴下は半歳の間夢のやうに暮して惜しかつたと思はないんですかね」

「夢のやうだといふことは調寶な言葉だ。いゝ方にも惡い方にも取られるから」

佐吉は欠伸まじりに云つた。長湯の利き目が出て頻りに眠氣差して來たので、自分で押入れから搔卷を引出して、日當りのいゝ所で、快げに假寝の枕に就いた。用もないのに夜は何時までも起きてゐて、晝間は午前であれ午後であれ、時間に構はずに、勝手氣儘なごろ寝をするのが、この頃の彼れの常例になつてゐるので、おふくは見馴れてゐるため、今更呆れもしないで、默つて夫の寝様を唯一の氣晴しの材料として見やつてゐた。……越して來た當座こそ、階下の主婦や子供などを話相手にして退屈凌ぎをしたこともあつたが、侮られてゐると氣がつきだしてからは、滅多に階子段を下りて行かなかつた。持病の惱みの烈しい時に止むを得ず醫者の家へ出掛けるか、日用の買物に近所へ出掛けるかする外には、殆んど一歩も戸外へ踏出したことはないので、日本一の大都會の中に住みながら、この六疊の居間のみが彼女の天地になつてゐた。夫の聲のみが自分に親しみのある人間の聲になつてゐた。時節々々の見物や散歩を夫に誘はれても、驚くほど華美に裝つてゐる都の人々にまじるのが氣が引けるし、身體を動かすのが持病に障るのを恐れてゐるので、大抵は後退みしてゐた。たまに隨いて行つても、心の保養になるどころか、何時も泣きたいやうな氣持になつて歸つた。

「おれが口を酸つぱくしてこれほど云つても聞入れないで、是が非でもあの男と一緒になりたいといふのなら、おれはこの上何も云はない。勝手にするがいゝ。しかし、この後はもうおれを親と思ふな。

だけ親爺がお前に預けてゐる[illegible]だけは現金にして[illegible]な事情が出來ても、おれに掛り合ひをつけんやうにして呉れ。おれは決して取合はない」と、兄が別れ際に殘かに云つたことが、今日の小包によつてしみ〴〵と思出された。

が、兄の言葉を思出して、兄に背いた自分の所業を今更後悔してゐるのではなかつた。分配された父の遺産を夫に浪費されたり、夫の病毒を何時の間にか身に受けたりしたことも後悔の種にはなつてゐなかつた。よくも惡くもこの男の外には、自分のやうな女を可愛がつて起臥を共にしてくれる男があらうとは思はれないのだから、兄に背いてこの男に心をも身をもまかせたことを、自分の無分別として昔を咀ふ氣にはなれなかつた。時折言爭ひをしても、病苦の惱みで物狂はしくなつても、ふと夫に愛想をつかされて、別れ話を持出されはしないかと氣づくと、頭から突如に冷水を浴びせかけられたやうに身慄ひされて、いきり立つた心も直ぐに萎けるのであつた。室借り暮しで大切な品物は持つてゐるのではないから、若しも夫が懷手して出て行つたきり歸つて來ないやうなことがありはしないかと、案ぜられる日々があつたので、夫がこの頃のやうに家でごろ〳〵してばかりゐて、ぼんやりした物くさな癖をつけてゐるのは、結句氣苦勞がなくつてよかつた。

佐吉が目を醒ましたのは、餘程立つてからだつたが、おふくは以前の通り火鉢に肱を掛けたまゝ微塵動ぎもしないでゐた。

「まだお腹が疼むのかい。……もう午砲が打つたらう」と、佐吉は女の冴えない顔と、障子の日差しと

を見詰めながら云つて、掻巻を抛りだして火鉢の側へ躙り寄つた。そして、煙管を手に採つたが、眠氣ざましの煙草は何時もながら旨かつた。

「もう午飯の仕度をしなければならないのだけれど、動くと疼みだすのが恐ろしいからじつとしてるんです。貴下はお腹が空いたのですか」

「まだ慾しかない。それよりも身體が疼むのなら、此間のやうに烈しくならん間に早く沼田へでも行つて藥を貰つて來たらい丶ぢやないか。おれは醫者ぢやないからお前に病氣の相談を持掛けられても、い丶智慧は出て來ないよ」

「だけど、私先つきから獨りで考へてゐたの。……兄さんから思ひがけもない小包が來たりしたのは、私達の身に不意にい丶運が向いて來る前兆ぢやないかと、どうしてもさう思はれるの。病氣だつて運がよければ自然によくなるかも知れないわ。貴下はさう信じられなくつて?」

「さうさねえ」佐吉はそれを賴みにしてゐるやうな女の眼差しを見ると、一槪に否定し得られなくつて、「窮すれば通ずとかいふ言葉があるよ。惡いことでもドン詰りまで行くと、今度はい丶方へ向いて來るさうだから、成べく落膽しないでゐるんだね」

「それ御覽なさい。だから、貴下も自棄を起さないで、東京で身を立てるやうに工夫したらい丶ぢやないの」

おふくは勢ひづいて云つたが、一月前から自分達の身の上に見切りをつけて、微かな望みの糸をも斷つてゐる佐吉の血汐は、この女の與へる刺戟くらゐでは飛躍する答がなかつた。女の兄の[illegible]

隙をねらつて嬉戲したり、故郷を足蹴げにして、花時の京大阪を二人連れで見物したり、知る邊を手頼つて東京住ひを企てたりした當時のことは追憶するだに今は懶かつた。日常の仕事もなくて、毎日二人で鼻を突合はせてゐると、女の方では、幾度繰返しても飽かないやうな興を覺えるのか、ともすると、過去つた昔の夢のはしくを根氣よくほじくり出しては話の種に持出すのであつたが、今の佐吉の心の中には、そんなことは乾燥無味な事實として殘つてゐるに過ぎなかつた。……いゝ夢でも惡い夢でもない、たゞの事實に過ぎなかつた。伊勢の宿屋の料理場に大きな鏡餅が懸つてゐたことや、石山寺に參詣した歸るさ、亡兒追福のために西國巡禮に出たといふ笈摺姿の老婆と道連になつたことや、道頓堀の芝居前で泥醉者に喧嘩を吹掛けられたことなど、女がよく口にするのを、佐吉は「何が面白いのか」といふやうな顔して、口先だけの受答へをしてゐた。

「おれは戸外へ出るたんびに、こんなに多勢の人間がゐちや、おれなんかゞ碌な職に有りつけやう筈はないと思はれだしたよ。お前はおれを買被つてるんだ」

佐吉はこの女に向つて、男としての威力を見せかける張合ひがなくなつてゐた。

「何年も一緒にゐるんだから、買被りたくつても買被られやしないわ。だけど、階下の主人でさへ、勤めるところへ勤めれば、可成りの月給に有りつけるんですもの、貴下だつて道がつけば、あの主人くらゐな働きが出來ない筈はないと思つてよ」おふくは階下の主婦の侮りに報いるためにも、夫を一かどの職業にありつかせたいと願ひながら、「私、今月からいゝ運が來さうな氣がするから、大決心をしてどんな寂しい思ひでも辛い思ひでも我慢しますよ。貴下さへ自棄を起さないで、故郷の兄さんの機嫌を取

直したり、東京で世過ぎの出來るやうに一心になつて呉れさへすれば」と、暫く打遣らかしといた世帶染みた話を洩らしかけた。

が、佐吉はこの女のために指一本動かすのも大儀であつた。階下の亭主が碌でもない女房や子供のために、暑さ寒さの厭ひなく朝早くから辨當を持つて勤めに出掛けて、日曜一日だけの朝寢と物見遊山とを無上の樂みにしてゐるのが、彼れには不可解のことになつてゐるので、近所合壁押なべての習ひにそれがなつてゐやうとも、自分だけは心が進まないのに、そんな眞似をするには及ばないと所存の臍を固めてゐるのであつた。そして、自分を引立てゝ呉れる者のないかはりに、どちら向いても見知らない人ばかりなのだから、どんなに身を落したつて、どんなに世間の人の目に卑しいと思はれることをしたつて、誰れに氣兼ねをしなくつてもいゝのだと、明日の日を恐れてはゐないために、女のはじめる世帶話には乘出して來なかつた。

「お前はおれのためにはどんな苦勞をも我慢すると云ふのかい。これまでさんざ苦勞をさせてをきながら、この上苦勞をさせるのは氣の毒なやうな氣がするよ。……今更働けと云つたつて、共稼ぎをしやうと云つたつて、おれにその意志がないのだから駄目だが、そのかはりに、働いてお前にこれまでの苦勞の埋合せをするかはりに、おれの魂をお前にやるよ。……他にいゝ言葉が見つからんから、仕方なしに魂なんていふ變な言葉を使つて見るんだが、お前の役に立つことならばおれにどんな惡名をつけてもいゝよ。おれを人非人にして兄貴にお詫びをして、田舍で氣樂な世を送る分別をしたつていゝぢやないか。兄貴がお前に對して人情のあることは分つてるんだから。……おれはお前に別れたつて、他に女をこしらへりやしないさ。」

夫がさも好意をもつてゐるやうな風でから云ふのを、おふくは呆氣に取られて聞いてゐたが、別れといふ言葉が夫の口から出るとゝもに、暗い谷底へ突落されたやうに頭がくら／＼した

「貴下は永いこと、それを言出さうとして待つてゐたんでせう。わざと何もしないで居喰ひをして、食べるものにも事を缺くやうになつたら、私の方から愛想を盡かして出て行くだらうと思つて、貴下はそれを樂みにして待つてゐたのだわ。……私覺悟してるからいゝ」

おふくは目の色變へて座を立つたが、夫が慌てゝ止めるまでもなく、神經の激動から起つた下腹の痙攣に惱まされて、へと／＼と腰を落して、火鉢の縁へ片手を掛けて、苦しい音を吐いた。

「貴下用簞笥から藥を持つて來て下さい。まだ一服袋の中に殘つてる筈だから」

「沼田さんのだね。よし來た」

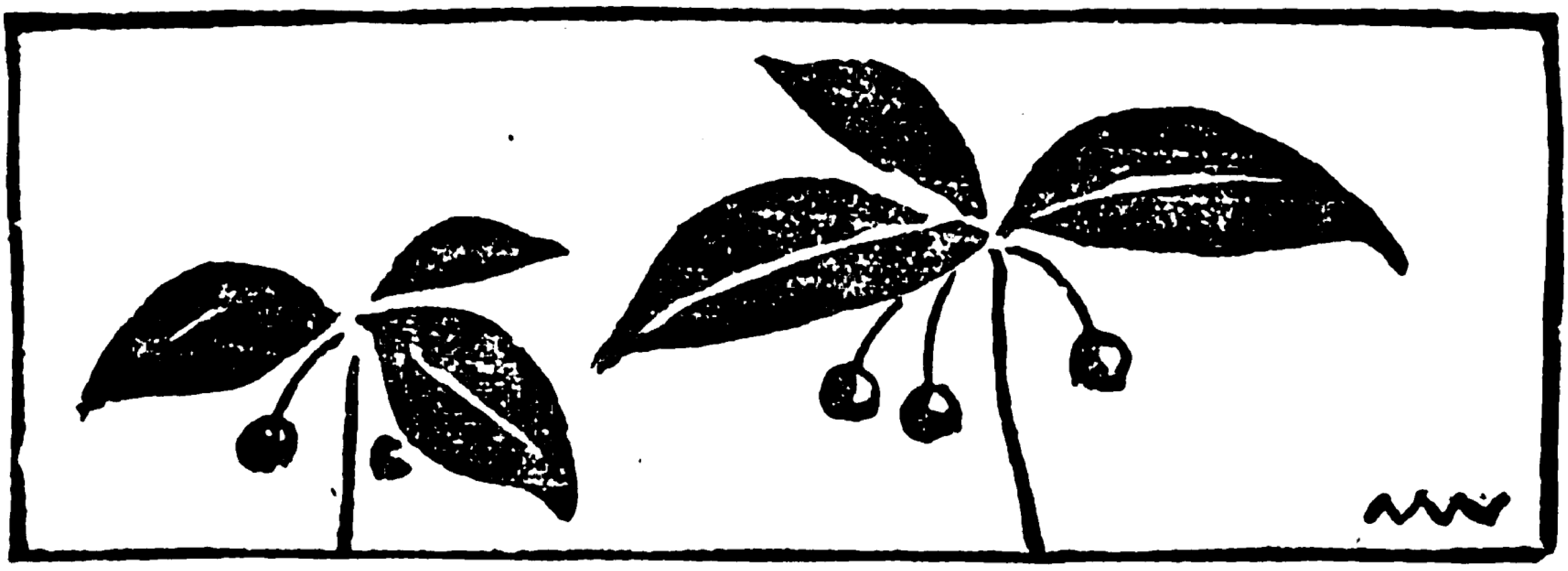
佐吉は自分の無用な一言のために起りかゝつた一騒ぎが、持病の發作のために喰留められたのを、むしろいゝことゝしながら、用簞笥の抽匣から粉藥を搜出した。そして女の口へうつして、微溫湯で流し込ませて、何時ものやうに背中をさすつてやりながら、暫くして、

「藥はまだ利かないかね」と訊くと、

「いくらか疼みがゆるくなつたの」と、おふくは涙に潤んだ目を細く開いて夫を見上げたが。先つきの物狂はしい意氣込は忘れたやうに、「貴下も私の疼みの取れるやうに××のお地藏樣を拜んで下さいな」と術なさゝうな聲を出して頼んだ。……赤い腹掛や白い腹掛をかけてゐるこの濡れ佛に、彼女は子供の自分から親しんでゐて、二度三度願をかけたこともあつたのであつた。

「よし／＼。……」と、佐吉は生眞面な顔して、柔和な相好をしてゐる××の石佛を思ひ浮べながら、

「おれの壽命を半分に縮めてもお前に幸福が授かるやうにと拜んでやらうか」
「貴下は直ぐに戯談にするからいけない。……私ね、この頃のやうに疼かつたり悲しかつたりして、心細くつてならない時には、貴下と二人で、石山で道連れになつた老婆のやうに巡禮に出て、名高いお寺を拜んで廻つたらよかあないかと思はれるんです。貴下に無理に働けと勸めないかはりに、せめて罪滅しに廻國をする氣になつて下さらなくつて？」
「あの老婆はたくさんな路用を肌身につけて旅をしてゐるんだからいゝが、當節は一文無しぢや何處だつて泊めてくれりやしないぜ」
「ぢや、野宿したつていゝぢやないの。今の世だつて一心に信心してゐれば、その日〳〵の餌食に事を缺きやしないと思はれるけれどね」
「さうだと調寶だが、おれの信心の力ぐらゐぢや、握飯一つ降つて來さうぢやないよ……」佐吉はこんなことを言合つてゐる間に、女の持病の稍々落着くのを目に留めながら、今の境涯まで來たのに、女はこの上神か佛の側までも自分を連れて行かうとするのかと、奇怪に感じた。
「今日は面倒だから午餐は拔きにするか。今から斷食の稽古をしとくといゝや」と云ふと、
「私、もうすつかりよくなつたの」おふくはお地藏樣のお蔭やら夫のお蔭やら、沼田さんの藥の力やらで、疼みの輕くなつたのを喜んで、調子づいて、「お祝ひに親子丼でも取つてくるわ」と、まだ少し步きづらいのは我慢して、昨日賣拂つた夏帶の代金の殘りを持つて、階子段を下りて行つた。
佐吉は溫かな日に浴しながら最後の日——どんな形をして來るか分らないが、自分の身に近く迫つてゐさうな——の一日延びたのをうと〳〵と思ひやつてゐた。（完）



野島先生の夢

（千家元麿兄に、君の詩はあまりに僕を喜ばしたからこの一篇を君に捧げさしてもらう）

武者小路實篤

（野島先生の書齋。簡單な西洋間。先生何か書いてゐる。書き損ひ許りしてゐる。正面に入り口があつて、その左手に黒板がある。右手に本棚がある。黒板には十一月二十日迄、脚本一つ、同三十日迄、小說一つ、十二月五日迄、日記十枚、同十日迄、脚本一つ。あとはお斷りとかいてある。一人の男登場）

男。先生！

先生。（筆をおきふりかへり）なんです。

男。一つ私の方の新年號に小說をかいて下さいませんか。

先生。駄目ですよ。あれを御覽なさい。今日はもう十五日なのに、まだ何にも

かけないのですからね。やり切れませんよ。

男。　そんなことをおつしやらないで、どうぞお願ひしたいのです。私の方の豫定が御座いまして、是非先生にかいて戴かないと困るのです。

先生。　それは君の方もお困りかも知れませんがね。僕の方はなほ困りますよ。一たいどうもこの頃は雜誌が多すぎますね。君達の云ふことを一々聞いてゐた日にはどんな天才だつてくたばつてしまいますね。天才を殺すものは雜誌記者ですね。實は今、私はそのことで腹を立てゝゐたのですよ。

男。　困りましたな。どうも。私を助けると思つて是非書いて下さい。

先生。　駄目ですよ。

男。　なんなら二三枚のものでも結構です。

先生。　それも駄目ですよ。

男。　折角こゝまで來たのですから。

先生。　それは君の勝手ぢやありませんか。

男。　どうも困りましたな。

先生。　僕の方だつて實は引き受けすぎて困つてゐるのですよ。この上引き受けた日には生命(いのち)がありませんからね。毎月二つも三つも書かされたら事實、作者が參つてしまいますよ。今の日本にいゝ奴の出ないのも、その罪の半分は雜誌記者の罪ですね。勿論、引き受ける方もよくありませんがね。つい日本人にはなんでもいさぎよく引き受けたがる質(たち)があるやうですからね。引き受けたあとではいつも、引き受けなければよかつたと思はないことはありませんよ。このまゝぢや、お互に考へものですね。あなた達の方だつて、いゝものをかいてもらはなければ損でせう。讀者だつて一夜づくりの作ばかり讀まされちや可哀さうですよ。それから同じ人間があつちこつちに顔を出すのも面白くありませんね。一つ雜誌仲間で相談して、一人の人には一月に一つ以上たのまないことにしたらどうです。さもなければ作者を一手

で買ひしめるのですな。今の作者は少し金を餘計出せば雜誌記者の云ふことはよく聞きますからね。さうしたら日本の文壇の爲にきつといゝでせう。少し位餘計出したつて雜誌の爲にも反つていゝでせう。今のやうぢや、お互に面白くありませんな。

男。　御尤です。それなら今の御意見を御感想として私の雜誌に出してもよろしゆう御座いますか。

先生。　それは困りますね。今のは雜談です。別に面白い考でもありませんからね。しかし私も作家の一人として、作家の未來を尊敬するやうに注意してもらいたいものですね。何か原稿が出來た時、それをある人の手にゆだねる。その人がいろ／＼の人の原稿を一手にあつめて、それをあなた方の集つてゐる處で朗讀する。そしてそれをその場でせり賣りする。そして手數料をその内から五分なり七分なりとる。さう云ふ商人があつたらお互に便利ですね。書く方も何にも無理せずにかけますからね。そしてあなた方も自分の雜誌に丁度向くのを買ふことが出來ますからね。今のやうに出來、不出來にかゝわらず、一枚いくらときまつてゐるよりその方が正當でせう。

男。　それは結構な御考ですね。

先生。　しかしそんな商賣人があつたら、私なんか最先に不愉快を感じるかも知れませんがね。今のまゝでは作家が可哀さうですよ。あなた方の方ではいらなくなればすてればいゝでせうがね。

男。　それではどうしてもかいて戴けないのですか。

先生。　えゝ。とてもかけませんからね。折角ですが。

男。　それなら失禮します。さよなら。

先生。　さよなら。

（男、退場）

先生。　この上かゝされてはたまるものか。いくらお人よしだつて、もう何と云つて來たつて約束はしないぞ。

（青年、登場）

青年。　先生。
先生。　あゝ君か、どうした。
青年。　先生、矢張り駄目でした。
先生。　それは困つたね。斷られたのか。
青年。　えゝ、何處も斷られたのです。それで實は昨日から何にも食べないのです。もう思ひ切つて國に歸らうと思つてゐるのです。
先生。　かへつてそれはその方がいゝかも知れない。
青年。　それで誠に申し兼ねますが、汽車賃をかして戴きたいのです。
先生。　いくらいるのかね。
青年。　五圓あれば歸れます。
先生。　さうか。今、妻が居ないので金のあり場がわからない。まあいゝ、この本でも持つて行つて賣り玉へ、五圓位にはなるだらう。實は僕も二十圓許り友達に借金してゐるのだから、餘分には上げられない。

青年。　いや、結構です。それなら戴いてゆきます
先生。　あゝ持つてゆき玉へ。
青年。　ありがたう。さよなら。お身體お大事に。
先生。　君も身體を大事にしたまへ。
（青年、退場）
先生。　まあこれで一先あいつもかたがついたか。
（青年二、登場）
青年二。　先生。
先生。　君か。何か用か。
青年二。　一寸御願ひがあつて上つたのです。
先生。　なんだ。
青年二。　一寸二十圓許り貸して戴けないでせうか。
先生。　困るね。
青年二。　私ももう上れたわけではないのですが。何しろ妻が病氣しましたので。
先生。　それは君の困るのはよくわかるよ。しかし僕の方だつて困るのだ。先日君にかしたのも實は人に

かりたので、まだ返せないのだからね。

青年二。それはわかつて居ます。しかし私も先生にお願ひするより仕方がありませんので、さもないと宿を逐ひ出されさうなのです。それに子供も、病氣なのですが醫者に見せるわけにもゆかないのです。こんなことを先生に申し上げるのはわるいことは知つてゐますが。

先生。困つたね。しかし君の困るのも無理はないからかうしやう。僕のこの本をいつもの古本屋に入れて金を借りてあげやう。今、手紙をかくから待つてゐたまへ。

青年二。どうもすみませんね。

先生。病氣ぢや仕方がない。僕もどん／＼原稿がかけるとい丶のだが、この頃どうも思ふやうにかけないので金がうまく入らないのだ。二十圓や、三十圓の金はどうかなるが、君一人ではないのだから、僕も實は困るのだ。それならこの名刺を持つてゆき玉へ。

青年二。ありがたう。

先生。さよなら。君の奥さんによろしく。大事にしたまへ。

青年二。ありがたう御座います。さよなら。

先生。さよなら。

（青年二、退場）

先生。困つたなどうも。

（青年三、登場）

青年三。先生。

先生。君か。身體はどうだ。

青年三。どうも思はしくありません。

先生。困つたね。

青年三。それで昨日家を逐ひ出されたのです。

先生。それで昨晩はどうした。

青年三。上野の公園で野宿してしまいました。金がないのですから。それで昨日の朝から飯を食は

のです。それで先生の處へ上れる義理はないのですが、上つたのです。

先生。困つたね。それは。それなら仕方がない。其處に休んで居たまへ。今うちには誰もゐないのだ。飯をとつてくるからね。

（先生退場。まもなくおはちやお膳をもつてくる）

先生。さあたべたまへ。今茶をわかしてくるから。

青年三。すみませんね。

先生。なにいゝさ。（退場）

（まもなく郵便と茶をもつてくる）

先生。（手紙をだまつて見てゐる）君こんなことを云つて來た奴がある。この頃、僕が金にキタナクなつたと云ふのだ。金をほしがつていろ／＼くだらない創作をするやうになつたと云ふのだ。馬鹿な奴だ。俺は金はほしいが、金のために心にもない創作はしやしない。俺の金のほしいのは、したいことがしたいからだ。俺が乞食坊主にならない限りは金をほしがるのはあたりまへだ。ね君。君とふたりで乞食でもなれば、俺は金はいらなくなるが。こゝにかうやつて住んでゐる以上はそして妻子を持つてゐる以上は金がいる。しかしこんなハガキをよこす奴はどうせ親のすねを嚙つてゐる奴にちがいない。こんなことを云ふ位いなら自分から乞食になつて、俺のやうに乞食になれと云ふがいゝのだ。しかし俺は乞食になつて早く死ぬよりは、悪口云はれたつて一日でも生きてゐたい。馬鹿々々しい。

青年三。先生、私は之からどうしたらいゝでせう。

先生。困つたね。當分僕の處に居たまいと云ひたいが、僕の處には女子供がゐるからね。それなら君は何處か海岸へゆきたまへ。毎月少しの金ならどうかするよ。友達にもたのんで見やう。

青年三。本當に御氣の毒ですね。

先生。なに、大丈夫だよ。しかしさしづめ金がゐるだらうね。まあ何とかしやう。

青年三。何かかいてゐらつしやるのですか。

先生。いや書き損ひ許りしてゐるよ。しかしもう〆切日がぢきだからね。ともかく早くかいてしまはないと氣になるよ。見たまへ、あの通り豫約があるのだからね。それでもあと五つ許りは斷つたのだよ。やり切れはしないよ。そしていゝものをかゝなければならないのだからね。

青年三。隨分大變ですね。

先生。何しろ早くかいてしまつて、自分の頭を自由にしてやりたいよ。今の作家は可哀さうだよ。

青年三。何にをおかきになるのです。

先生。まだきまらないよ。さつき「今日蓮」と云ふものをかいて見たが、面白くゆかないのでやめてしまつたよ。

青年三。「今日蓮」と云ふのは珍らしいものですな。

先生。「今日蓮」が演說した處をかいたのだがね。かう云ふ風に演說するのだ。(滑稽な身振をしながら)・

「日本の亡びるのを恐れるものは俺の云ふことを聞け、日本の未來を恐れるものは俺の云ふことを聞け、今のまゝでゆけば日本の未來は恐ろしいぞ。決して安心してはゐられないぞ。金もうけもわるくはない。しかし金のない旅人は泥棒を恐れなくつていゝが、金のある旅人は泥棒を恐れなければならぬ。武器をもつた旅人は反つて泥棒に殺されることもある。富國强兵、それだけに日本の未來をたくさうと思ふものは、國を亡ぼすものだぞ。又黃色人種だと云ふ自覺をつよくしてひがみが强くなりすぎると反つて國を亡ぼすぞ。我等はむしろ人種にとつて害のない益にたつ民族であることを示さねばならない。黃色人種は決して恐るべき人種ではない。人間の生命を尊敬しない人種ぢやない。平和の民だ。そして文明の民だ。人類にとつてなくて叶はない民だ。おゝ人類にとつて人類にとつて有益無害の國民だ。文明な國民だ。眞面目に眞劍に人類の文明の爲に働いてゐ

人間だ。働かうとしてゐる人間だ。この人間の地球の一部分に存在してゐることは人類にとつてよろこびだ。同時に各國にとつてよろこびだ。このことを世界に事實によつて知らさなければ日本は亡びるぞ。平和の戰ひ。殊に精神的の戰ひにかて。世界の平和を少しも亂さない精神的の仕事でかて。黃色人種の存在が白色人種にとつても人類にとつても實に實に必要な、大切なものだと云ふことを示さねばならぬぞ。このことを眞に知つてゐるものはこの俺たけだ。俺の云ふことを聞け、俺の云ふことを聞け。」「今日運」はこんなことを云ふのだが、誰も石もぶつけなければ、聞く奴もないのだ。だからつまり芝居にはならないのでやめてしまつたよ。しかし僕は迷信的にも日本の未來を心配するよ。今の日本はまだ人類的に必要な仕事を一つもしてゐない。そして人類の意志に戻ることを計りしたがつてゐる。君はさうは思はないか。

青年三。（飯を食ふに急がしくつて碌に聞いてゐなかつたが）。思ひますよ。それでその脚本はどうしたのです。

先生。やぶいて捨てたよ。

青年三。惜しいぢやありませんか。

先生。本當に惜しいと思つてくれるか。

青年三。（空々しく）惜しいと思ひます。

先生。ともかく。日本でさう云ふ仕事を自覺してしやうと思つてゐるのはこの僕だけだ。

青年三。先生はそれなら今日運ですか。

先生。「稽滑日運」と云ふ處かな。あはゝゝ。僕の身體も中々大事だよ。

青年三。それでつまり私を置くわけにはゆかないと云ふのですね。

先生。まあ、正直に云へばさうだ。妻子があるからと云ふのは少し不正直かも知れないな。一體いくらあつたらくらせるかね。

青年三。　十圓はどうしてもかゝります。

先生。　それはさうだらう。この頃ぢや十圓ぢやむづかしいだらう。おまけに病氣ぢや。しかしさう云つてそれなら十圓以上出してくれと云はれると困るのだ。何しろ僕の周圍は僕より貧乏人が多いから困るよ。僕は之でも月に五十圓は親からよこすのだからな。しかし毎月その内から三十五圓位はきまつて出さなければならないのだ。其處へ又十圓出すことにするとあいつがいやな顔するからな。しかし生命(いのち)といやな顔とは交換が出來ないから、無理に承知させるよ。一體あいつは俺を信用しないで、俺のうちにいくら金があるか、知らしてくれないのだ。どうせさうないにきまつてゐるから、聞けば反つてこつちの損になるから、さはらぬ神に祟りなしで、僕も知らん顔してゐるのだ。あいつはさうしなければ僕達がひぼしになると思つてゐるのだ。たまにはひぼしになるのも面白いと思つてゐるのだが。

青年三。　先生。中々面白いものぢやありませんよ。

先生。　さうだらうな。さうならあいつの慾の淺くないのは僕にとつてはわるくないのだ。

（女中、登場）

女中。　唯今歸りました。

先生。　さうか、御苦勞さん。

（女中、退場）

青年三。　お女中さんは何か買ひものに行つたのですか。

先生。　いや宿に一寸行つたのだ。

青年三。　それに御苦勞さんは少し可笑しいぢやありませんか。

先生。　さう云やあ、可笑しいね。口ぐせになつてゐるのだね。

青年三。　先生の處のおくらしは隨分かゝるでせう。

先生。　隨分かゝるね。まあ百圓はかゝるね。あいつが中々贅澤好きだからね。しかし聞いて見ると他よ

方が贅澤者らしいよ。食ひ物なんか。尤も薩摩芋でも食はしておけば別に不平も云はないのだがね。

青年三。先生は酒も煙草も上らず。電車にも滅多におのりにならないでせう。

先生。この頃はわりに乗るよ。徒歩主義をやめたよ。若い時とちがうからな。

青年三。先生はおいくつです。

先生。まだ三十三だね。しかしこの頃は皆に先生々々と云はれるので、齢とつた氣になるよ。

青年三。よくそれでくらしてゆけますね。

先生。まあ、出駄維目だね。そのかはり、毎月何かかくことになるね。しかしそれでもおいつかないので、よく親の處に無心にゆくね。もう本當から云へば三四百圓以上借金してゐるだらう。この頃は出かける度に豫防線をはられるよ。しかし妙なもので金に困らないと中々親のそばにはよりつかないね。妻もよく實家に出かけるよ。しかし金の話はよさう。氣にしだしたら切りがない。それより日本の未來のことを氣にしてゐる方が氣持がいゝよ。何しろうんといゝものをかくのだね。そしてうまくいつたら君にも少しは餘計に送れるがね。本當に醫者にも見てもらへず、藥は勿論、滋養分もたべられないのだから同情するよ。どうかしたいとは思ふけど。

（女中、登場）

女中。廢兵が來ました。何か買つてくれと云つて來ました。

先生。さうか。蟇口はと。（開けて見）矢張り三錢切り入つてゐないな。あいつはいつも財産をのこらずもつて出あるく奴だからな。と云つてもう二三圓もあぶないのだがね。お前の處に十錢ないかね。

女中。ございます。

先生。それならそれをやつておいてくれ。

女中。はい。（退場）

先生。うちで一番金持は女中だよ。時々借りるのだ。

もう五六十圓はたまつたらう。あいつがいつも二十圓か、三十圓ためると、僕が出さしてしまうので、たまつたこともない。ためる氣もなくなつたらしい。しかしどうにかなつてゐるのだから困つてはしないのだ。今困つてゐるのは約束の仕事が出來ないことだ。かうなつちや破れかぶれだ。しかし其處でいゝものがかけるといゝのだが、よくしたもので中々かけない。尤も暇があればあるで遊んでしまうのだから。どつちがいゝかわからないよ。(黒板の方々を時々見て)しかしあれぢや困るね。もつと他にたのめばいゝと思ふのだよ。無名な人でいゝ人がありさうなものだがね。しかし雜誌記者に云はせば無理もないのだ。賣らなければならないからね。尤も僕のを出したつて賣れるわけもないのだが。僕なんか流行らないのに流行つ兒だと思はれたのだね。まあそれで得してゐるのかも知れないから、不服も云はないが。本を出す度に損させるやうな氣がして、氣がひけるよ。しかし本屋の損は自業自得だから氣にもしないがね。その内には皆に愛想つかされて暇になるだらう。早く愛想をつかしてくれたら、大きなことをしてやるのだがね。

青年三。私の原稿を世話して戴くわけにはゆきませんかね。

先生。世話したいことは世話したいが。そんなことを云ちやわるいが、まだ僕の方がましだね。もう少しいゝものをかいてくれると世話し甲斐があるがね。

青年三。私だつて世間で歡迎してくれゝば勇氣も出ます。さうすればいゝものもかけると思ひますがね。かいてゐてもどうせ發表は出來ないのだ。金にもならないのだ。藥代はおろか、煙草も買へないのだと思ふと勇氣が出ませんね。其處を無理して勇氣を出すと、無理な勇氣が出たものになるのですから、困りますよ。

先生。まあ、氣ながにやるのだね。

青年三。　しかし先生。氣ながにやりたくもどうも生命の問題ですからね。

先生。　なに、君の病氣はなほらないことはないよ。

青年三。　もう少し金があればなほるとも思ひますが。

先生。　困つたね。どうも。ともかく困る人が多すぎる。尤も文士や畫家がものにならない間、他のことをしないでは金に困るのはあたりまいだ。しかし僕はどうも自分が不合理に金に困らないで來たのだから、あんまり偉いことは云へない。だから僕は斷りたい時も斷れないのだ。

青年三。　先生。毎月金を出して戴くのが、お困りなら僕だつて男です。どうにかします。まさか、野たれ死にもしますまい。

先生。　なに。君に毎月十圓位はまだ送れるよ。君でもうおしまいだ。あとは何と言つて來ても月々きめて出すのはやめるが、君までならよろこんで出せるよ。

青年三。　本當ですか。

先生。　本當だよ。僕は君達の役に立つのは嬉しいのだよ。尤もあまり大勢來られちや困る。

青年三。　奥さんは大丈夫ですか。

先生。　あいつは珍らしく、反對しないよ。君は疲れたらう。僕も仕事しなければならないから一寸失敬するよ。見てゝくれ玉へ。

青年三。　どうか。

（先生、原稿をかき出す）

青年三。　先生。先生の頭ははげ出しましたね。

先生。　あゝ、はげて來たよ。

青年三。　僕の友達に、矢張りはげて來た人がありますがね。

先生。　あゝ。

青年三。　それが滑稽なのです。何んでも頭を夜通し外氣にふれさすといゝと云ふことを考へて、壁に穴

をあけて其處に頭を突込んでねてゐますよ。

先生。それは本當か。

青年三。本當ですよ。こないだ犬に小便をひつかけられたさうですよ。あはゝゝゝ。

先生。あはゝゝ。それは本當かい。

青年三。どうですか。それはおまけかも知れませんが。先生もなさつちやどうです。

先生。その人の實驗した樣子でやつてもいゝがね。しかしそれぢや碌にねられないだらう。しかし暫く默つてゐてくれ玉へ。今大事な處だから。

青年三。畏まりました。(何か本をさがす。原稿のかたまりを見つける。手にとつて見)隨分原稿をよこす人がありますね。

先生。あるよ。

青年三。之ではたまりませんね。(よむ。少しゝてふき出す)こいつは滑稽ですね。女を見て、「喰ひたい。食ひたい。食つたらさぞ甘からう」はおどろきますね。

先生。おどろくだらう。

青年三。まるで人食い人種の小說ですね。こんな小說を外國人が見たらおどろきますね。あはゝゝゝ。私の知つてゐる女に、牛肉が馬鹿に好きで、牛の歩いてゐるのを見ると食慾を起す人がありますがね。女を見て食慾をおこすのはおどろきますな。はゝゝ。

先生。君は元氣だね。

青年三。えゝ、久しぶりに思ふ存分食つたら元氣が出ましたよ。病氣なんかどつかに行つてしまいましたよ。何しろ腹一ぱい飯食ふなんて云ふことはこの一月まるでありませんでしたからね。

先生。そんなことはないだらう。一週間程前に君が來た時も、隨分食つたよ。

青年三。いえ、あの時も實は、奧さんが配膳して下さつたので、もう一杯食べたいと思つた處でやめた

のですよ。あはゝゝゝ。

先生。　あはゝゝゝ。

青年三。　それはさうとして少しはいゝのがゐますか。

先生。　ゐないね。しかし可笑しなもので二三年もよこしてゐる内に、どうかするとめき〳〵とよくなる奴もゐるね。しかしそんなのは例外だね。僕はもうよむ氣もしないので、ばら〳〵とやつて見るだけだよ。妻は大概よむがね。妻がほめるものだけは一寸よむことにしてゐるのだ。さもなけりや、やり切れないからね。それに妻の意見はこの頃僕の意見と殆んと同一になつたからね。信用してもいゝのだ。

青年三。　さう云へばこないだ或人にあつたら、先生夫婦の話が出て、あんな仲のいゝ夫婦はないさうだね、本當かいと云ひましたから、本當とも、本當ともと大いに力を入れて贊成しておきました。

先生。　それはどうも御苦勞さんだつたね。

青年三。　まあ、さう云つたつて嘘ぢやありませんからね。先生夫婦はそりがあつてゐますからね。足りない處をおぎないあつてゐますからね。二人で一人前ですからね。

先生。　失禮なことを云ふな。

青年三。　どうです。かけましたか。

先生。　かけるものかね。さうしやべられちや。

青年三。　どうです。思ひ切つちや。私も之から海岸にゆくとなると暫くお目にかゝれませんからね。先生、近頃浮氣はなさいませんか。

先生。　失禮なことを云ふね。かう急がしくつては、女一人を持てあますね。

青年三。　あはゝゝゝ。あてになりませんな。

先生。　君はどうだ。まだあの女の名前は見つけないか。

青年三。　まだ發見しません。しかしあの女は天女ですな。あんな女がゐる世界から死んでゆかなければ

ならないのは考へものです。實は田舍にゆきたくつてもそれでゆけないのです。

先生。 困つた奴だね。矢張り食ひたい方かね。食つたらさぞ甘からうかね。

青年三。 どうして先生。そんなものぢやありません。あの女が女優になれば大したものですね。さう云へばこないだ電車で先生のものをよんでゐましたぜ。

先生。 嘘だらう。

青年三。 いや本當です。餘程、先生のものをお好きなのですかと聞かうかと思ひましたが、大勢人がゐるので聞けませんでしたよ。しかし熱心によんでゐたことはたしかです。先生にお祝ひしやうと思つて今迄忘れてゐました。どうです、あんまりいやな氣はなさらないでせう。

先生。 しかしどうも君の話はあてにならないからね。

青年三。 いや。之は本當です。神にかけて本當です。尤も僕は無神論者ですが。

先生。 君は無神論者かい。

青年三。 まあ無神論者です。死ぬともうその人間はおしまいだと云ふのが僕の說ですからね。こないだなんか餘程自殺してやらうと思ひましたよ。あんまり淋しくつて。一人でゐると隨分淋しい時がありますからね。そしてどうせ自殺するならあの女に一つ聲でもかけて一言位云つてあの女の聲を聞いてから死なうと思ひましたがね。實はまだその女の聲を聞いたことがないのですからね。しかしその勇氣はどうしても出ませんでした。どうもあの女に話しかけるよりは死ぬ方が樂です。人間と云ふものは意氣地のないものだとつくづく思ひましたね。しかし死ぬまでには一遍話しゝて見せます。

先生。 困つた奴だね。

青年三。 先生だつてあまり困らないんぢやないでせう。五六年前でせう私も上野のある處をあるいてゐ

たら男と女が飛び出して來ましたよ。けしからん奴もあるものだと思つて月の光りですかして見ましたら、それはどうも先生と奧さんに似てゐましたよ。

先生。　馬鹿云ふな。

靑年三。　どうです。さうでせう。

先生。　馬鹿云ふな。僕のかいたあれは嘘だよ。本當は上野ぢやなかつたのだよ。

靑年三。　どうですかね。しかしとゝかくあの女は女優になつたら大したものですね。先生が勸めたらきつとなりますよ。なつたら日本中大さわぎですね。御輿に入れて日本中かつぎたいものですね。さうすれば死んでもかまいませんがね。人間と云ふものはどつせ簡單なものですからね。こないだジャン、ダークの活動寫眞の廣告を見て思ひましたね。日本にも外國人がせめこんで、あの女が大將になつて出かければ、私も生命をなげすてゝお伴するがなーと思ひましたよ。

先生。　どうも困つた奴だね。君は。

靑年三。　しかし先生。ある日本の小說家が自分のことを正直にかいた作に、自分の戀人が人妻になつてから訪れて來たので夢中になつて、別れる時、夢中でその女の手を握つて、つまり握手したのですね。そしてその時鐵砲でうたれて死んだら。どんなによかつたらう。極樂往生疑ひなしだと云ふ意味のことがかいてあつたのがありますね。

先生。　あるね。

靑年三。　あれは先生のお作ぢやないのですか。

先生。　あゝ俺の作だよ。

靑年三。　（笑ひながら）それなら五十步百步ぢやありませんか。さう云ふ氣持のわからない人間は憐れむべき人間ですね。

先生。　うん、憐れむべき人間だ。

靑年三。　ともかく先生は女優のいゝのが出るといゝとおつしやつたでせう。あの女はきつとすゝめたら

なりますよ。さう云ふことに趣味がありさうですからね。それに先生が。

先生。しかし君は聲をきいたことはないのだらう。

青年三。聲がわるいわけはありませんよ。

先生。どうして。

青年三。あの顏で聲のわるいわけはありません。

先生。聲のわるくない顏つて見たことはないな。

青年三。先生。僕は本氣なのですよ。生きてゐる内に一度あの女の舞臺が見たいものですね。萬々が一、聲がわるかつたら活動寫眞の役者にするのですな。あゝ云ふ女を活動寫眞にすると日本國の名譽になりますからね。是非一つ先生にお骨折を願ひたいものですね。先生だつていゝ女優が出て、先生の云ふこと許り聞く女優がゐたらいゝでせう。奥さんの方は僕が引受けて、やきもちをお燒きにならないやうに骨折りますよ。あゝ云ふ女優が出ると、若い男は皆脚本をかきたがりますね。僕も死んでも一つあの女にやつてもらへるやうな脚本をかきますよ。日本の文藝の爲に大きな仕事が出來ますよ。

先生。それはいゝ女優が出ることは僕ものぞむがね。

青年三。先生もさう云ふ空想を描くことがおありになるでせう。

先生。ないことはない。しかしそれより大事なことはいゝ仕事をすることだよ。僕は日本の未來の爲にこの二三年の内には大きな仕事をしないわけにはゆかないのだ。さう云ふ仕事をすることを頼まれてゐるのだ。

青年三。先生、誰にたのまれてゐるのです。

先生。先づ人類にたのまれてゐる。

青年三。大きく出ますね。

先生。それから黄色人種にたのまれてゐる。それから。

青年三。日本にたのまれてゐるでせう。

先生。　まあさうだ。それから俺にたのまれてゐる。それから世界の青年にたのまれてゐる。

青年三。　それから全世界の美人にたのまれてゐるのでせう。

先生。　それから妻子にもたのまれてゐる。それから僕の金持になることをのぞんでゐる人からたのまれてゐる。日本に劇場や美術館や病院をほしがつてゐるものにたのまれてゐる。それから今後生れる人に、それから世界をひつくりかへしたい人に。

青年三。　それで出來さうですかね。

先生。　處が中々出來ないので困つてゐるよ。出來ないと云ふのは腹が立つ。二三年で出來なければ一生でやつて見せる。だが中々大變だよ。呪ふべきはこの天才につまらぬ仕事をたのむ雜誌記者だや。俺は片ばしから斷つてやるぞ。

青年三。　それは誰れの聲色です。ともかく大變ですな。

先生。　大變だよ。かうしちやゐられない。しかしは一方至つて呑氣ものだから、まだ神經衰弱になつたことも、不眠性になつたこともない。眠り薬にはお目にかゝつたことがない。いつでも餘裕しやくしやくだ、力を出し切つたことはないな。

青年三。　偉いですな。

先生。　偉いだらう。だから僕は僕を讃美するものに餓えてゐる。同等あつかいされるのは僕にとつては至極迷惑だ。しかしそれなら大きい仕事をやればいゝのだが、それが中々出來ないのだから公然と威張るわけにもゆかない。今に見ろ、今に見ろと云ふのだな。（何か思ひだし）こないだ。骸骨がペンを持つて机に向いながら今に見ろと云つてゐる、まづい畫をよこした奴があるがね。當らずと雖も遠からずだな。僕は死ぬ迄には日本人は馬鹿に出來ない人間だと云ふことは示してやるよ。

青年三。　先生は相變らず、自分のこと許り考へて居

ますね。少しあの女のことを考へて下さい。日本の未來を一人で背負ふのは無理ですよ。一つ日本の女の爲に氣焔をはからぢやありませんか。

先生。どうも女を知らない一人者にあつちや叶はない。なんでも彼女、彼女だからな。

靑年三。先生を彼女イズムの日本に於ける先覺者として私達は尊敬してゐるのですから、是非一つ肩をぬいで下さい。（間）さうそ、それから又一つお願ひがあるのですがね。是非きいて戴きたいので。

先生。なんだ。

靑年三。是非きくとおつしやつて下さらないと僕の信用にかゝはりますからね。

先生。聽けたら聽くよ。

靑年三。聽けなかつたら聽けないよですか。それは困りましたね。

先生。僕はたのまれることは一體嫌ひなのだ。たのまれることに碌なことはないから。

靑年三。しかし滿更、おいやなことでもないのですよ。實は僕の友達が今度芝居をやることになつて、その旗あげに先生のものをやりたい。それについては皆で先生に一度お目にかゝりたいと云ふのです。あつてやつて戴けませんか。

先生。そんなことか。そんなことならよろこんできくよ。しかし旗あげに僕のものをやるのは利口ぢやないね。

靑年三。しかし是非、先生のものがやりたいと云ふのです。

先生。それは感心な心がけだ。

靑年三。それなら之からよんで來てもよろしいか。皆この近くに集つて稽古してゐるのです。

先生。いゝとも。君の云つてゐるあの女もその仲間に入れたらどうだ。

靑年三。駄目ですよ。その仲間は下手なのですから。どうかそれならつれて來ますから、あの話は決して

して下さつては困ります。
先生。　云はない。皆下手なのか。
青年三。　しかし熱心は熱心なのです。それでは一寸よんで來ます。皆さぞよろこぶでせう。（退場）
先生。　よく饒舌る奴だな。何處まで本當で、何處から嘘なのかまるでわかりはしない。しかし勝手にしろだ。俺は俺の仕事さへしてゆけばいゝのだ。（テーブルに向ふ）
（小僧、そつと登場、黒板の字を消し、片手に持つてゐる紙切れと見くらべ、時々うしろを見ながらかく。「野島先生の頭ははげる、同時にひからびる。この頃のかくものゝ力のなきことよ。憐れむべし／＼。今にバケの皮がはげて皆に愛想をつかされる。その末路や憐れむべし」。かいてからカリカチュアを矢張り紙を見ながらかき、舌を出してそつと逃げる。野島先生は氣がつかない。やゝたつて女中登場）

女中。　おハガキが參りました。
先生。　さうか。（受けとる）
（女中、退場）
先生。　私はお前が好きだつたが、この頃嫌いになつた。世間にもて出したら墮落した。この頃お前のかくものはなんだ。もうお前にはだまされない。恥お知らず。くたばりやがれ。はげの、出來損の、くたばり損ひの、へぼ文士の、おたんちんばろおろがす。創作なんかやめて、死ぢまへ。
（先生、苦く笑ふ。その時、黒板に氣がつく）
先生。（立ち上り見にゆく）なんだ。野島先生の頭ははげる同時にひからびる。この頃かくものゝ力のなきことよ。憐れむべし憐れむべし。今に化の皮がはげて皆に愛想をつかされる。その末路や憐れむべし。いやな奴だな。（ぼんやり立つて見てゐる）誰が書いたのかな。まさかあいつではあるまい。おーい。
女中。　はい。

先生。誰かこの室に入つたものはないか。
女中。(一寸顔を出す) 存じません。
先生。そんならいゝ。
(女中、退場)
先生。そんなに頭がはげて來たかな。(鏡に頭をうつして見るが、中々見へない)
(十四五の少女、登場)
少女。叔父さん。
先生。おゝ芳子か。
少女。なにしてゐらつしやるの。
先生。俺の頭は隨分はげてるかね。
少女。えゝ、隨分うすくなりましたよ。それがどうしたの。
先生。こんなハガキをよこした奴があるのだ。
少女。どれ。(讀み) 隨分いやなことを云つてくるのね。おたんちん。ばろおろがすてなに。
先生。何かね。しかしどうせほめた言葉ぢやないだらう。
少女。破いてよ。
先生。あゝ破いてもいゝよ。
少女。こんなこと何んでもないわ。叔母さんは、御不在(るす)?
先生。もうぢき歸(かへ)つてくるだろう。そのハガキを書いた奴は大概わかつてゐるから何んでもないがね。あの黒板が氣味がわるいのだ。誰か呪つてゐるやうな氣がするのだ。
少女。どれ。(聲出してよみ笑ひ) こんなものなんでもないわ。ですがこの畫は叔父さんにそつくりよ。さう云へば板べいにもこれと同じ畫がかいてあつてよ。
先生。塀にもかいてあるかい。
少女。えゝ。ですが消して來ましたわ。之も消していゝでせう。(消す) 妾が呪ひにたいするおまぢないをかいて上げませうね。(黒板にかきながら)。妾の：

ずる大王よ。妾は跪く、大王よ。あなたの未來は祝されてゐます、大王よ。あなたの身體は呪ひの矢には不じ身です、大王よ。王樣、萬歲、萬｜歲。
先生。芳子、お前は可愛いゝ子だ。お前は大變奇麗になつたな。あゝお前だね。
少女。何が。
先生。お前はこないだ電車で叔父さんのものをよんでゐたらう。
少女。えゝよんで居ましたよ。
先生。(寫眞を見せ)その時、お前のわきにこんな人が居やしなかつたかい。
少女。ゐましたわ。妾の顏をぢろ〳〵見てゐましたわ。
先生。お前が女優になるといゝと云つてゐたよ。
少女。いやな方ね。妾、大嫌いよ。あの人。
先生。なに？
少女。だつて、妾のあとをつけたり、妾をへんな顏をして見たりするのですもの。なんだか顏に墨でもくついてゐるのかと思ひましたわ。妾の顏を見て今にも話しかけさうにしたり笑ひたさうな顏するのよ。
先生。同情しておやり、病身なのだからね。それに食ふにも困つてゐるのだから。
少女。だけど氣味のわるい人よ。
先生。お前のことを世界中で一番美しい女だと云つてゐたよ。
少女。いやなお世辭云ふ人ね。妾、さう云ふ人大きらい。
先生。あんまり嫌つてやるのは可哀さうだよ。
少女。だつて嫌いなものは仕方がないわ。
先生。お前を御輿に入れてかついだら、死んでもいゝと云つてゐたよ。お前が大將になつたら、お伴してよろこんで死ぬと云つてゐたよ。お前と話しが出來たら死んでもいゝと云つてゐたよ。
少女。もうよして頂戴、そんな話。それより妾、芝

居を見たいと思つてゐるのですよ。叔母さんにつれてつて貰かうと思つて來たのよ。

先生。よろこんでゆくだらう。

少女。叔父さん。妾に一つ芝居をかいて頂戴な。

先生。どうするのだ。

少女。學校でやるの。妾、かう云ふことがしたいのですよ。

先生。どう云ふことが。

少女。妾、戰爭大嫌いと云ひたいのですよ。

先生。そんなことわけないぢやないか。いきなり、妾、戰爭大嫌いと云つて引こめばいゝぢやないか。

少女。 妾のお父さまは戰爭で死にました。ですから妾は戰爭が嫌いですと云つて泣きたいのよ。皆よつて戰の話をして面白がつてゐるのを妾が辛棒して聞いてゐますのよ。一人でだまつて。その内にとう〳〵たまらなくなつて妾、泣き聲出して立ち上つて怒鳴つてやるの。妾戰爭、大嫌ひ。戰爭で父がなくなりました。

(始め、泣き眞似してゐる内に、本當に泣いてしまう)

先生。さあ。泣くのはおよし、芳子。(自分も泣き出す)

少女。妾、もう泣きませんわ。妾は戰爭の好きな人の處には死んでもおよめにゆかないのよ。お母さんもそれは御承知なの。

(どや〳〵と大聲出しながら青年三を先登に女二人男二人入つてくる。青年三、何か云はうと思つて、少女を見、電氣にうたれたやうにたちどまる)

少女。どうぞお入り下さい。(丁寧にお辭儀する)

先生。どうか、入つてくれ玉へ。遠慮なく。芳子、椅子が足りないから椅子を持つて來てくれ。

少女。はい。

青年三。ぼ、ぼ、僕が持つて來ます。

先生。それなら二人で一つづゝとつて來たらいゝだ

らう

少女。　それなら御一緒にとりに行きませう。

青年三。　あ、あ、ありがたう。

（皆、笑ひたさうな顔をする。二人退場。まもなく椅子を一つづゝ持つてくる）

先生。　どうか腰かけてくれたまへ。

青年四。　ありがたう。

（皆、腰かける、沈默）

先生。　（青年三に）君はいやに默つちやつたね。芳子、お茶をもつてこないか。そして水菓子をとりにやつてくれ。

少女。　はい。

先生。　あいつは僕の姉の子です。父は戰爭でなくなつたのです。今度芝居をやるといふので何かかいてくれと云ひに來たのです。

青年三。　先生。そ、そ、それは本當ですか。

先生。　君はいやにどもるね。喉でもどうかしたのぢやないか。

（皆、笑ふ）

先生。　なーに芝居すると云つたつて學校でやるだけなのだよ。どうせ碌なことは出來ないよ。

青年三。　そ、そ、そんなことはありません。

先生。　いや、そ、そ、そんなことはあるのだよ。

（皆、笑ふ）

青年三。　先生、どうか質(たち)のわるいことはなさらないで下さい。

先生。　ともかくその芝居の注文が面白いのだ。皆が戰爭の讃美をしてゐると、あいつがそれを默つて聞いてゐる。とう〳〵たまらなくなつて妾は戰爭が大嫌ひ、妾の父は戰爭でなくなりましたと、云つて泣きたいのださうだよ。そして今、泣き眞似してゐるうちに本當に泣いてしまつたので、よわつてしまつたよ。

青年三。　おも、おも、おもしろい話ですね。

先生。（わざと）そ、そ、さうだね。

（皆、笑ふ）

青年三。先生はどうも質がわるい。（話をかへ）皆、是非先生にお目にかゝつていろ〳〵御話がうけたまわりたいさうです。皆もいやに固くなつたね。之が田原君で、之が川中君で、この方が妙子さんで、この人がすみ子さんてす。

青年四。どうぞよろしく願ひます。

先生。僕の方こそ。

青年三。是非先生のものがやりたいと云ふのです。僕はよした方がいゝだらうと云つたのですがね。どうも先生のものは舞臺上の約束にかなつてゐないし、出たらめだし、人氣もないし、面白がる人もあるまいと云ふのですが、皆、それでも先生のものをやりたいと云ふのです、皆偏人で出來ないことがやつて見たいのださうです。どうせ皆に出來ることをやれば皆に叶はないにきまつてゐるですから皆は出來ないことをやつて見やうと云ふのです。だから先生のものをやるのには調度。

（少女、登場。皆にお茶をつぐ）

青年三。ちよ、ちよ、調度いゝのですね。

先生。なにがいゝのだ。

青年三。いや、な、な、なんでもありません。

（少女にお茶を出されて丁寧に御辭儀する。先生馬鹿笑ひをする）

先生。あはゝゝ。話のつゞきを是非聞きたいね。芳子、今面白い話があつたのだ。

青年三。う、う、嘘ですよ先生。（茶をこぼす）

先生。あはゝゝゝ。君は餘程どうかしてゐるね。

（青年びつくりしてとび上り、半けちを出すがない。自分の着物でふこうとする）

少女。よろしいのよ。（半切を出してふく）

青年三。お、お、恐れ入ります。

少女。面白いお話てなんですの。是非お伺ひしたい

ものですね。

青年三　な、な、なんでもないのですよ。(セキをする)。先生、もう、もう許して下さい。

先生。　はいはい。それで君達は本氣に僕の脚本がやつて見たいのですか。

青年四。　およろしかつたらどうぞ。

先生。　それは勿論よろしいが、やつたあとで後悔しても、それは君達の責任ですよ。

青年四。　勿論、それは私達が責任をもちます。そんなことはあるわけはありませんが。

(青年三、時々汗を着物でふく。少女退場)

先生。　僕は自分のものに自信はもつてゐます。しかし世間的にはまだまるで自信はありません。又實際云ふと、自分ではある自信がありますが、それが他人によつて演じられる時に、何處まで生かしてもらへるかを知らないのです。それは君達によつて知らしてもらうより仕方がないのです。僕は自然に、そして反つて無器用にやつてもらいたいのですよ。

(少女、登場)

青年四。　え、出來るだけ先生の御注文通りにいたします。

先生。　處がそれは困るのだ。僕は君達の勝手にやつてもらいたいのだ。君達の自由にやつてもらいたいのだ。君達自身が面白がつてやつてもらいたいのだ。始めは、無理かも知れないけど、見物なんか忘れてやつてもらいたい。見物は石ころか、でくの坊位に思つてもらいたいのだ。そして夢中でやつてもらいたい。勝手にやつてもらいたい。見えなんかかまわずに、出來るだけ勝手に、しかし表現と云ふことは忘れてほしくはない。そして調子は少し誇張していゝ、しかしそれも自然でなければいけない。俗にやられるのは閉口だけれど、君達のもつて生れたやうにやつてもらいたいのです。

(青年三、又汗をふこうとする)

少女。 それでおやめなさい、大へん綺麗なのですから。

青年三。 ど、ど、どうもありがたう。い、い、いりません。よ、よ、よろしい。

少女。 どうか御遠慮なく、本當にキタなくはないのですよ。

青年三。 お、お、おそれ入ます。

先生。 つまりあれです。あの半切を受けとる處の表現、あゝいけば傑作です。

（皆、笑ふ）

少女。 そんなにお笑になるものぢやないわ。叔父さんは本當にいやな方ね。

先生。 おこるなよ。僕は惡氣で云つたのぢやない。かたくなんでも自己流にやつてほしいのですよ。かたくならないやうに。しかしそれは反つて樂なことではないでせう。しかしそうして出來上つたら大したものです。僕のものなんか、中でも自己流にやつてほしく思ひますよ。見物が一人のこらず居なくなつても、恥かしがらないでやるだけ存分にやつてほしいのですよ。一つ出來るだけ我儘をやつて、笑はれて見るのですね。そしてトガキにどんなことがかいてあつたつてかまいませんからね。君達のやりいゝやうに、一番あたりまいにやつて下さい。

青年四。 しかしそれが一番むづかしいのです。

先生。 君達は日本の新らしい芝居の元祖にならなければならないのだから、その位のむづかしさには勝つ氣がなければ駄目ですよ。ね皆、さうだらう。

青年三。 え、え、さうです。

先生。 日本人は窮苦で。臆病で、お弟子根性がつよくつていけない。自分で自分を支配するのはいゝけど、他人の云ふことを聞くのはいゝが、それでもの人がもつて生れた大事なものを失なつては駄目ですからね。僕は日本の芝居には殊に亂暴者がほしいのですよ。型なんか、やぶつてやぶつてやぶり拔くのでね。

青年四。 えゝ、出來るだけは笑はれてもかまい

んからやります。

先生。 さうさ、笑はれなければ駄目だ。

青年三。 せ、先生、そ、そんなとをおつしやるのは、火に油をかける様なものです。皆、こんなに神妙にしてゐますがね。そ、其は先生の前ですからですよ。

若き女一。 まるであなたが女王の前に居らつしやる時のやうなものですわね。

青年三。 先生。このお、お、女なんかに逢ちや叶ひませんよ。(皆、笑ふ)

若き女一。 しかしそれは先生の悪感化かも知れませんね。罪は矢張り先生にあるのかも知れませんね。

(皆、笑ふ)

青年四。 それなら遠慮ぬきにして對話でもやつて見て戴かうか。あまり御邪魔してもわるいから。

青年三。 そ、そ、それはいけない。

若き女一。 あなたはさつき是非々々やつてくれとおつしやつたぢやありませんか。

青年三。 あなたは僕の心を知つてゐるくせにそれは残酷です。僕は先生お一人だと思つたのです。

先生。 是非やつて見せて下さい。

青年三。 先生は實際たちがわるい。

青年四。 それならやりませう。

青年三。 それはいけない。それはいけない。斷じていけない。お願ひだからいけない。それしたら僕はこゝにゐない。

少女。 是非それは拜見したいわ。

青年四。 どうだね、君。

青年三。 それならやり玉へ。僕も男だ。死を恐れない男だ。やつてくれ玉へ。是非やつてくれ玉へ。僕は成佛する。

先生。 あまり程度のひどいものなら僕はやることを禁ずる。

青年四。 (笑ひながら)。なーに、至つて無難な者です。

先生。 それなら一つやつてもらうかね。しかしこゝ

はせまいでせう。

若き女一。こゝで結構なのです。しかし妻が女王さまになつてよろしいのですか。

青年三。なつて下さい。辛棒します。

青年四。僕が君になつていゝのかね。

青年三。僕は本當に怒るよ。

青年四。わるかつたよ。許してくれ玉へ。それなら始めますから惡い處があつたらさう云つて下さい。正直に云ふと作も役者も同じやうになつてゐないのですから。

（少し空地をつくる。先生の妻、登場皆に挨拶しながら）

妻。唯今。皆さん、よくいらつしやいました。

先生。調度いゝ處に歸つて來た。之から對話がある處だ。山田君のかいた。

妻。あなたがかいたの。

青年三。えゝ、さうです。

妻。まあ、おえらいのね。

青年三。なに、くだらないのです。

妻。芳子さん、よくいらつしやいましたね。

少女。叔母さん暫らく。こないだから來たい、來たいと思つてゐたのですよ。

先生。今度、是非お前に芝居につれてつてくれと云ふのだ。

妻。是非一緒にゆきませうね。

少女。叔父さんのお芝居いつあるの。

青年三。まだ、き、きまつてゐません。

妻。あなた、どうかなさつたの顏が眞赤よ。

（先生、笑ふ）

青年三。どうもないのです。

妻。お身體どうです。

青年三。相變らずです。

妻。それはいけませんね。（夫に）あなたの芝居をやるのですつて。

先生。あゝ、この方逹がやりたいと云ふのだ。

妻。さうを。

青年四。　そんなら始めます。
先生。ええ、どうぞ。
青年四。　私は病人なのです。そしてこゝに煎餅蒲團にくるまつてねてゐるのです。素人の下宿の三疊敷の室で。(ねる)あゝ苦しい、あゝ苦しい。水がのみたい。水がのみたい。どなたか水を下さいな。水を、皆不在なのか知らん。あゝ苦しい。水、水、水を下さい。喉がひきつる樣です。(起き上らうとしてたほれる)。あゝ自分はこの儘にくたばるのか。水ものめずに。助けて下さい、助けて下さい。神樣、助けて下さい。
若き女二。(障子を一寸あける眞似して)なんですの、うるさい。
青年四。　どうか水をください。水を。
若き女二。　もう默つてゐて下さい。店のさわりになりますからね。
青年四。　水を下さい。水を下さい。お願ひですから。
若き女二。　だまつていらつしやい、默つてゐないと追ひ出しますよ。金をはらはないで。人をなんだと思つてゐるのです。妾はあなたの下女ぢやありませんよ。水なんかあげられませんよ。(障子を力を入れてしめる眞似する)
青年四。　あゝ。僕は僕は呪はれてゐる。水ものめずに死ぬのだ。死んでも誰も泣いてはくれない。うるさがられる許りだ。よし僕はもう追ひ出されてもいゝこんな家にはゐてやらない。今度娘が來たら、こいつをぶつけてやる。あゝ僕はもう生きてゐるのも、死ぬのもいやだ。來やがつたな。又あの娘が。來たらぶつけてやるぞ。
(若き女一、障子をあける眞似をする。青年四、かけたこつぷふり上げながら、若き女一と顔を見あはせる。びつくりして手をおろす)
若き女一。　御病氣はいかゞです。叔父が伺つて來いと申しました。
青年四。　あ、あ、ありがたう御座います。た、た、大變よろしいと、先生にどうか申し上げて下さい。
青年三。　き、き、君、せ、せ、先生なんて僕はかき

はしなかつたぢやないか。

若き女二。いゝえ。ちやんとかいてありますよ。

青年三。なぜあなたはかいてないと云つてはくれないのです。侮辱だ、侮辱だ。先生、怒らないで下さい。どうか怒らないで下さい。

先生。ちつとも怒つてやしないよ。芳子だつて怒つてはしないよ。

妻。あゝ、あれが芳子さんなの。

青年三。嘘です、嘘です、奥さん、嘘です。

先生。さあやりたまい。つゞきを。

若き女一。何かわたしに出來ることがあつたらしてこいと叔父が申しました。

（青年三、耳を手でおゝい。下を向く）

青年四。來ていたゞいただけでどんなに嬉しいでせう。ありがたく思つてゐます。

若き女一。もう水がありませんのね、水を持つて來ませうか。

青年四。いゝえ、よろしい。恐れ入ります。

若き女一。水ぐらい持つてくる位はしておきますわ、持つて來て上げませう。コップに持つて來るよ。

青年三。もうよしてくれ、お願ひだ。よしてくれ。

妻。一たいどうしたの。

芳子。やつて頂戴、しまいまでやつて頂戴。

青年四。女王さま、女王さま。死んでもよろしい。死んでもよろしい。…

妻。大へんなのね。

（若き女一。水を持つてくる）

若き女一。こゝにおきますよ。

青年四。あ、あ、ありがたう。

若き女一。それでは又上ります。

青年四。あ、ありがたう。どうぞよろしく。

若き女一。さよなら。

青年四。さよなら。又來ていたゞけますか。

若き女一。その内、いつか上ります。（去る）

青年四。（水を少しのむ）。神様、神様、私は生れたことを感謝します。（間）、あゝ、今のは夢か。

靑年五。（障子をあけて入つてくる）どうだい身體は

靑年四。 相變らずだよ。

靑年五。 だつて君は嬉しさうな顔してゐるよ。

靑年四。 あゝ、今、實にいゝ夢を見たのだ。

靑年五。 どんな夢だ。

靑年四。 女王さまが、自分でこゝにいらつした夢さ。そして御自分で水さへくんで持つて來て下さつたのさ。僕はもうありがたくつて、ありがたくつて涙が出た。

少女。 もうよして頂戴。もうよして頂戴。妾はだまされませんわ。あなた達は皆ぐるになつて妾を馬鹿にしてゐらつしやるのです。

靑年三。 そんな、そんなとはありません。ぼ、ぼ、僕はお孃樣がこゝに居らつしやるとは、思はなかつたのです。許して下さい。許して下さい。ぼ、僕がわるかつたのです先生、許して下さい。許して下さい僕は。もうながは生はしません、許して下さい。許して下さい。すみません。すみません。僕は一生のお願ひを先生にだけお知らせしたいと思つたのです。せ、せ先生お一人だけに。そして一生に一度でよろしいから心からの喜びと感謝を味はつて死にたいと思つたのです。一人でねてゐるとあまり淋しいので、望んではならないとを望んだのです。許して下さい。許して下さい

少女。 望んではならないことゝは思ひませんわ。ですが、こんな芝居してまで。

靑年三。 ゆ、許して下さい。許して下さい。

先生。 許しておあげ。そして一度だけ病氣見舞にゆくことを承知しておあげ。

少女。 お叔母さまは一緒に來て下さいますか。

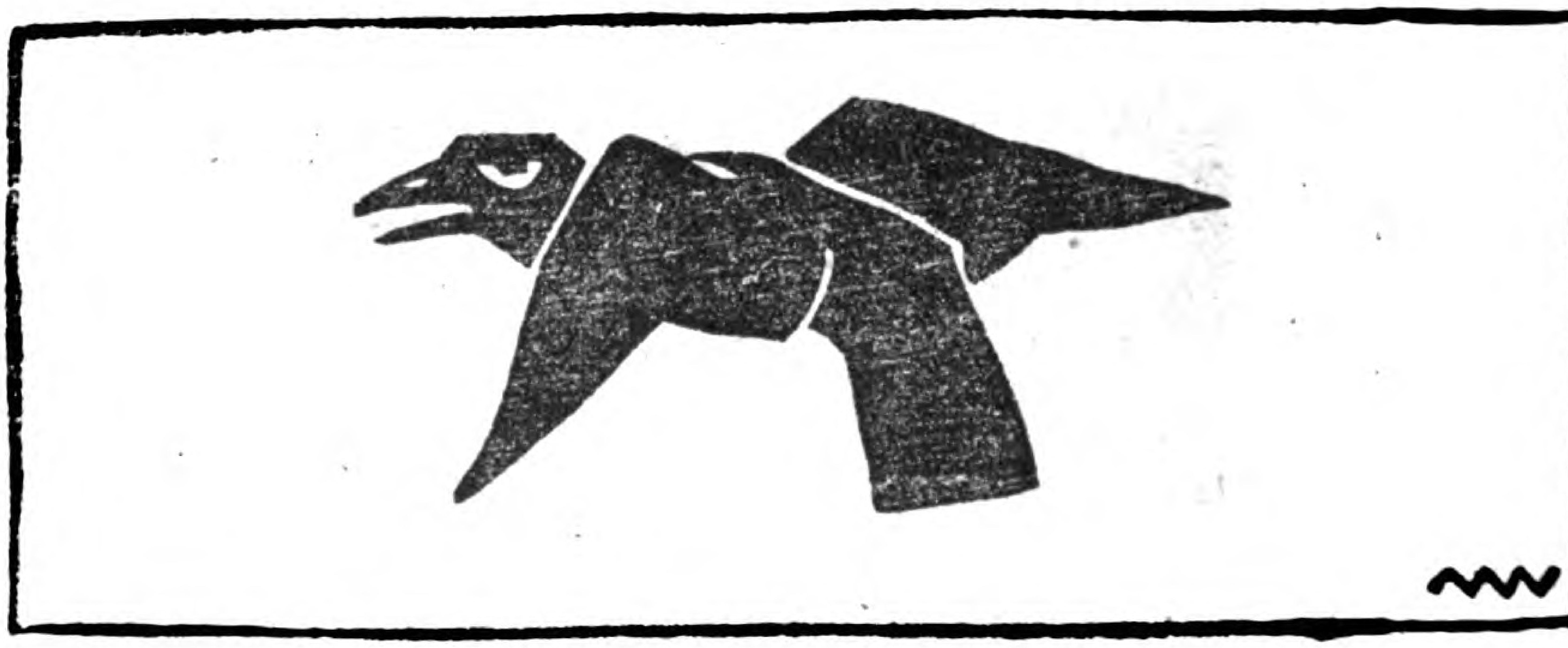
妻。 えゝ。一緒にゆきませう。

少女。 それなら、一度か、二度あがります。

靑年三。 それは本當ですか。本當ですか。先生、ぼ、僕は死んでもよろしい。死んでもよろしい。（跪いて泣き出す）

靑年三の友達皆。 萬歳。萬歳。女王萬歳。

（芳子、妻によりそう） 幕 （一七、一一、七—一〇）



英一蝶

小山内薫

(一)

朝湖は欠伸をした。

畫債は山のやうに溜まつてゐる。併し、まだ一つも手がつけてない。こなひだ紀文に貰つた祝儀で、繪の具と繪筆は申譯ばかりに買ひ込んで置いたが、まだ繪具一つ解いてもなければ、繪筆一本おろしてもない。この一月遊びに呆けて内を外にしてゐる間に持ち込まれた繪絹や畫箋紙も、卷いた儘違ひ棚に投り上げてある。

一體、淺妻船などといふ下らない繪を何百枚書いたら、世間の人は滿足するのだらう。全體、あの繪は若い時友達に貰つた也足軒の短册から思ひついたものだ。「船中妓女」といふ題で、「このねぬる朝妻船のあさからぬちぎりを誰にまたかはすらん」と書てあつたあの短册だ。いつか故郷の江州へ久しぶりで歸つ

た時に、坂田郡の朝妻を訪ねて、ふとあの短册の歌を思ひ出した。それから、隆達の小唄を眞似て「あだしあだ浪、よせてはかへる浪……」と通勝卿の歌を飴のやうに引き延ばして、女郎の心を歌つて見た。それから、それに因んで、水と柳と小舟と、小舟の中にくぐつめの烏帽子と鼓との取り散らしてある樣を走り書に繪にして見た。繪の爲の歌ではない。歌の爲の繪なのだ。全體、繪などはない方が好いのだ。

江戸へ歸つて、そのいたづら書を紀文の馬鹿に見せると、分かりもしない癖に、ひどく感心したやうな顔をして、「是非この小唄を君の咽喉で歌つて聞かせて貰ひたい」と言ふのだ。繪の方ぢやあ自信はないが、歌の方ぢやあ自信があるから、早速盲女の花都に節附をさせて、吉原の和泉屋で歌つて聞かせて遣つた。すると、俺の美音に感動して、祝儀を三十兩呉れた。忽ち、小唄が廓内にはやり出す。序に繪が評判になる。分かりもしない癖に、洒脱だとか余韻があるとか言つて、あつちからもこつちからも繪絹を持ち込んで來る。丁度、遊びの金に困つてゐた時だつたから、それを好い事にして、俺は大分あの繪を書いた。馬鹿の相手には馬鹿になるのが一番だと思つたからだ。俺は勿體らしい顔つきをして、さもさも名畫でも書くやうな態度で、何十枚となくあのごまかし繪を書いた。

幾ら書いても、あとから又持つて來る。幾ら書いても、又新しい註文が來る。俺は好い加減金が出來ると、もうあとを書くのが馬鹿らしくなつた。その内に、烏帽子と鼓だけでは物足りないからなどといふ奴が出て來て、水干姿に烏帽子をした白拍子が舟の中にゐる所を書けなどといふ註文をする。一度そんなのを書いてやると、この方が余程好いなどと言つて、又それの新しい註文が來る。もうこの頃では、

猫も杓子も白拍子を書かなければ承知をしないやうになつた。馬鹿らしいにも程がある。淺妻船ばかりぢやない。女達磨だつてさうだ。俺は半太夫といふ女郎が「達磨は九年、吾々は苦界十年だから、達磨より悟りを開いてゐる筈だ」と言つて笑つたといふ話を聞いて、それをその儘繪に書いて見たのだ。それを世間の馬鹿は俺自身の趣向か何ぞのやうに思つて、感心してゐるのだ。「九年何苦界十年はなごろも」と詠んだ祇空の句の方が、俺の繪などより何層倍秀逸だか分からないのだが、そんな事は世間の奴等には分からないのだ。祇空のところへ短冊の註文に行く者はない。ところが、俺のところへは毎日のやうに女達磨の註文が來る……

あの棚の上に山のやうになつてゐる絹や紙が、みなんな淺妻船か女達磨になるのかと思ふと、俺はもう繪師といふ看板が外したくなる。本當に繪の分かる奴は一人もゐないのだ。本當の繪を書いて見れと言つて來る奴は一人もゐないのだ。世間で評判にさへなれば、それが好い繪だと思つてゐるのだ。そして、おんなじ下らない繪を、あつちでもこつちでも家の寶か何ぞのやうに思つてゐるのだ。馬鹿らしいにも程がある。

いや。俺の繪ばかりぢやない。今の世の中は何も彼もが馬鹿らしいのだ。總てが下らないのだ。何から何まで詰らないのだ。

第一、上に立つ奴のする事を見るが好い。亮賢だとか隆光だとかいふ取るにも足らぬ賣僧の爲に、護國寺だとか護持院だとかいふ宏大なものを建てゝやつた上に、千五百石だとか二千石だとかいふ寺領まで附けてやつてゐる。それがどういふ譯だと言ふと、將軍のお袋が卑しい身分にゐた時に、今に高貴な

人になると豫言したからだと言ふ。馬鹿らしいにも程がある。何の事はない。世辭で言つた出鱈目が當つたのだ。それで、京都の田舍の生臭坊主が、いきなり天下の高僧になつたのだ。將軍に子種がないからと言ふので、こないだ中から頻に子孫繁榮の祈禱を修めてゐるやうだが、一向驗の見えないのも當り前の事だ。あいつ等は眞言の密法をさへ、まだすつかりは知つてゐないといふではないか。

生類おん憫みのお觸とかいふ奴も、あの賣僧どもが將軍に勸めて拵へ上げたものだと言ふ。凡そ天地始まつて以來、世界にこれ程馬鹿げた法律の出た事はあるまい。雀一羽吹矢で射殺せば、それで人間の首が一つ飛ぶのだ。噛みついて來る狂犬を斬り防げば、それで人間が一人島流しに會ふのだ。人間よりは雀の方が大事なのだ。人間よりは狂犬の方が大切なのだ。それで、生類おん憫みなのだ。人間は生類ぢやないのだ。馬鹿らしいにも程がある。

やたらに方々に寺が出來る。材木屋や請負師が大儲けをする。お蔭で吾々末社の潤ふのは有難いが、その又成金どもの金の使ひ方の下らなさはどうだ。人が百兩使へば、俺は二百兩使ふ。人が千兩捨てれば、俺は二千兩捨てる。唯それだけの事だ。奇もない。味もない。趣もない。唯、世間の評判になれば、それで好いのだ。見えだ。外聞だ。深く自ら樂しむなどといふ事はまるで知らないのだ。

紀文の馬鹿は江戸中の初鰹を惣仕舞にして、その内のたつた一本を大巴屋で喰べた。その癖、あいつに初鰹の細かい味は分からないのだ。大松屋の月見の晩に、七十兩も掛かつた突拍子もない大きな饅頭をたつた一つ贈つて、茶屋の階子の手すりを毀させたあいつの友逹も馬鹿の骨頂だが、その又禮に、あいつが何百疋といふ豆盤の中に一々客と女郎の比翼紋を金で蒔かして贈つたのも下らない。淺草川に船

遊びをするといふ噂を立てて、見物の舟をうんと集めたところへ、自分は舟さへ出さずに、[illegible]ふ盃を流したのは、先づあいつにしては上出來な風流だつたが、あの盃の流れの悪さ、中々これはいかんが[illegible]唐草の下手さ加減はどうだ。總てが請負任せだからだ。自分に鑑識といふものがないからだ。

でも、初鰹の惣仕舞や、京鹽のねぢ書や、凉みの盃は、まだ好い部類だ。なぜと言へば、これらは何れも黒幕の指金があつて爲た事だからだ。紀文自身に何か一人で遣らせて見るが好い。あいつは金を蒔くより外何一つ藝のない男だ。節分に和泉屋で小粒を蒔いたのも、あいつらしい平凡な遊びだ。奈良茂の雪見の邪魔をしようとして、三百兩の蒔金で廓の雪を汚したのも、あいつのしさうな智恵のない悪戯だ。金のある奴が金を蒔く。それは誰にでも出來る事だ。誰にでも出來る事をして、世間の馬鹿に評判されて、それで得意になつてゐる紀文の馬鹿さ加減は數が知れない。

一體、紀文ぐらゐ不器用な男はない。照降町の其角に發句を習つてゐるが、あいいじけた詠みやうはどうだ。勢がない。氣魄がない。同じ螺舍の弟子でも、俺の方が遙にうまい。繪も習ひたいと言ふから、俺が數へてゐるが、迚も物にはなりさうもない。あいつの巧者なのは、唯金儲けだけだ。そして、あいつの取柄は、唯金があるといふ事だけだ。あいつはその金の使ひやうをさへ知らない愚物だ。

それが、奈良茂と來ては紀文にも劣る馬鹿だ。高尾を笑はしたと言つては野太鼓に十兩遣る。茶屋で眠つたと言つては、二朱判吉兵衞に三十兩取られる。吉原五丁から山谷田町までの諸妻を買ひ占めて、その内二つだけを友達のゐる茶屋へ持つて行つて、得意の鼻をうごめかしたのもあの馬鹿だ。第一、あの黒江町の目算御殿の不風流極まる普請のしやうはどうだ。あいつは金さへ掛かれば、何でも好い普請

だと思つてゐるのだ。高いものなら、何でもいゝものだと思つてゐるのだ。愚の骨頂だ。馬鹿の素天邊だ。

「あゝ。厭だ、厭だ。何も彼も厭だ。」

朝湖は思はず口に出してかう言ひながら、疊の上に腹ん匍ひになつた儘、片手を延ばして鼻先の障子を一枚明けた。猫の額のやうな庭が、露地から洩れてくるささやかな夕日で斑に黄いろく光つてゐる。狹い庭に不調和な大きな石燈籠が窮屈さうに立つてゐる。その下に猿が手を延ばして餌を求めてゐるやうな形をした古い石が無造作に轉がしてある。

朝湖は、寢ころんだ儘、ふとその石燈籠に目を遣ると、我と我を嘲けるやうに、鼻で笑つた。そして、

「人の事が言へるかい。」

と投げるやうに言ふかと思ふと、いきなり障子をぱたりと締めて、今度はごろりと仰向けに寢た。天井の節穴が一つ目小僧の目のやうに見える。そして、その目が笑つてゐるやうに見える。

あゝ、厭だ。厭だ。馬鹿の太皷を叩いてゐる内に、いつの間にか俺自身も馬鹿になつて了つたのだ。雨園の石屋に珍らしい石燈籠が出た。それを大名が二人で爭つてゐるといふ噂を聞いたので、俺は有り金を殘らず懷にして行つて、横合から二人のよりずつと高い値を入れて、まんまとそいつを俺の物にした。それから、急いでそれを庭に運ばせて、火を入れて、其燈を見ながら、値段の高い初茄子を生漬にして食つた。それがあの圖體ばかり大きな、總身に智惠の廻りかねたやうな石燈籠だ。俺もあんまり利口ぢやない。

いつか有馬家へ舞樂の六尺屛風を納めて、一度に二百金を貰つた。俺は内へ歸るまでに、この金が無事でゐるかどうかを疑つた。その暗示に引つかかつたのだらう。今川橋の道具屋で、俺は奇妙な石を百

掴出して買つて了つた。内へ歸ると、金が半分になつてゐて、食へもしない石が片手にぶら下がつてゐた。それがあの石燈籠の下に轉がつてゐるやくざな石ころだ。猿に似てゐるといふ奴がある。犬に似てゐるといふ奴がある。狐に似てゐると言ふ奴のないのが、せめてもの見つけものだ。紀文や奈良茂の惡口が言へた義理かい。考へて見りやあ、俺だつて同じ事なのだ。さう思ふと腹が立つ。業が煮える……

「ああ。厭だ。厭だ。何も彼も厭だ。」

朝湖はもう一度口に出してかう言ふと、手足を突つ張つて大欠伸をした。

日が陰つて、狹い部屋の中が暗くなつて來た。併し、朝湖は起きようともしない。

（二）

「師匠在庵か。」

かう叫りながら、人のづかづか上つて來る足音に、朝湖は眞つ暗闇で目を覺ました。

「誰だ。誰だ。」

「俺だ。俺だ。なぜ明かりをつけねえ。」

「遊扇か。待て。待て。」

朝湖は手探りで燭臺に火をつけた。吉原の揚屋で見るのと全く同じ形をした燭臺である。

痩せた色の黒い客と肥つた色の白い主人とが、蠟燭の新しい火の中で顔を見合はせた。兩方とも丸坊

主である。小さい頭と大きな頭とが、同じやうに燭臺の火で青く光つた。
「やつぱり遊扇か。何と思つて來た。」
「なんぞ面白い事はねえか。」
「それはこつちから聞く事だ。詰まらねえ。下らねえ。馬鹿らしい。俺はさう思つて、飯も食はずに寢てゐた。」
「何がそんなに詰まらねえ。錢でも欲しいか。」
「錢は天下の馬鹿が唸る程持つてゐる。乃公が太鼓一つ叩けば、百や二百は忽ち掌中だ。そんな事ぢやあねえ。」
「散茶女郎にでも嫌はれたか。」
「燭臺を見て呉れ。そんなのぢやあござりやせんだ。」
「成程。こりやあ左京が部屋にあつた奴だの。背中にでもしよつて來たか。」
「おぬしぢあねえ。俺の口車だ。水引をかけて届けて寄越したわさ。」
「その色坊主が、なんで詰まらねえ。また紀文に繪の惡口でも言はれたか。」
「置いて呉れ。あんな盲を相手にする俺だと思ふのか。俺は菱川のやうな板下繪師ぢやねえから、町人に用はねえ。」
「でも、お互にその町人様で食つてるのぢやあねえか。繪は賣らねえでも、追従口を叩いてよ。」
「もうその繪も厭になつた。太鼓持も厭になつた。一體、世の中が詰まらねえ。時勢が下らねえ。上か

ら下かで馬鹿の寄合だ。とんちきのお祭だ。」

「ぢやあ、俺もそのとんちきの一人か。」

「おぬしやあ惡黨だ。おぬしのやうな惡黨ばかりなら、まだこの世の中も少しやあ話せるのだ。」

朝湖が冗談のやうにかう言つたのには、眞面白な意味があつた。

遊扇はもと民部と言つて、鎌倉佛師の二十二代目であつた。民部は親の血を享けて、佛の彫刻が巧かつた。併し、若い時から身が修まらなかつたので、家の財政は親の代からの篤實な弟子で伊兵衛といふのに嚴重な監督をされた。民部は心任せに金を使ふ事が出來なかつた。そこで、何か職以外の事で金儲けがしたいと思つた。丁度、その時分日光に將軍家御普請があつたので、民部は名を替へてその一口を請け負つた。ところが、御普請役人の内に常々贔負になる武家がゐて、その事を知ると、自分にも半口割り込ませろと言つた。民部は已むを得ずその人の言ふ事を聞いて、二人で御用を勤める事にした。ところが、その武家は長年小普請方を驅け廻つた經驗があるので、よろづに巧者であつた。民部は何も知らないので、兎角ないがしろにされた。二言目には「佛師などの知る所ではない」と言はれる。相談もなしに、どん〳〵事が運ばれる。たまに民部が意見を述べても、「その事ならもう濟まして了つた」などと言はれる。民部は腸が煮え返るやうであつた。

やがて、普請が終つて、上から勘定も下がつた。二人はその振分の相談に淺草並木町の或茶屋へ寄り合つた。下請負の大工や左官も顏を揃へた。盃の一つ二つ廻る内に、民部は無理な事を言ひ出した。武家がそれを嘲けると、いきなり刀を拔いて相手を斬らうとした。併し、大勢の人が中に這入つたので、

その場は無事に濟んだ。仲直りの盃が濟むと、掛かり合ひになるのを恐れて、一人立ち二人立ち、やがてみんなゐなくなつて了つた。

民部と武家は二人切りになると、二階に寢ころんで、四方山の話をした。民部はさも打ち解けたやうな樣子で、冗談口を利きながら、隙を見て、いきなり脇差を拔くと、相手の肝先を五寸程突つ込んだ。それから相手の脇差を拔いて、自分の肩先へ自分で一太刀切りつけて、血のついた脇差の柄を武家の手に握らせた。武家は苦し紛れにその柄を握り締めながら死んで了つた。

檢使が來た。民部は相手がいきなり切りつけたので、こちらも夢中で相手を突いた。あとの事は知らないと答へた。茶屋の亭主がさつきの喧嘩の事を言ひ出すと、それはもう仲直りが濟んでゐたのだ。二階の事は下に知れないと言つた。

民部は所預けになつたが、解死人にはならなかつた。江戸徘徊無用で事が濟んだ。それで、屋敷は弟子の伊兵衛に渡して、自分は松平伊勢守の長屋に隱れた。民部が遊扇と名を變へて、本所の隱れ家から今の石町へ越して來たのは、それから三年後であつた。もう佛師民部ではない。大名出入のひり茶頭遊扇である。

朝湖はこの舊惡をよく知つてゐた。勿論、民部一人の罪ではない。相手方も狡い奴には違ひない。併し、相手を殺して、相手の刀で自分の體に傷をつけて、その刀を相手に握らせるなどといふ殘酷な智惠は、余程な惡い奴でなければ思ひつく事ではない。朝湖はそこが氣に入つたのである。平凡な退屈な遲鈍な人間ばかりゐる世の中に、そんな亂暴者の一人でもゐるのが意を得たのである。

「氣味の悪い事を言ひこなしだ。俺はそんな悪黨ぢやあねえ。これでも元は[illegible]た。」
遊扇は黒い顔を少し赤くしながらから言つた。いつも酒を二三杯飲んだ時に見せるやうな顔色である。
「佛も彫るが、惡鬼も彫るだらう。何も赤くなる事はねえ。さういふ俺だつて、惡黨ぢやあ引けは取らねえ。お互に天下の毒蟲と言はれてゐる仲間だ。一旦毒蟲と言はれた以上は、飽くまでも毒蟲で通さうぢやあねえか。」
朝湖はさう言ひながら、蠟燭の火の搖ぐばかりに大笑した。

（三）

夜が更けた。二人はもう大分醉つてゐる。角の酒屋へ朝湖と遊扇が交り〳〵にもう三度宛も通つたのである。
朝湖の彈き飽きた三味線が轉がつてゐる。遊扇の書き飽きた淫な繪が、部屋中一ぱいに散らかつてゐる。
「紀文の奈良茂のと師匠は言ふが、それよりも馬鹿な面は近頃の大名だ。素町人の豪遊を羨んで、自分達もその仲間入がしたくて堪らねえのだ。だが、お上がやかましいので、碌な事あ出來ねえ。深編笠のびく〳〵もんで、散茶女郎がやつとの相手だ。」
遊扇は自分の書いた繪の中に寢轉びながら、罵る相手が目の前にでもゐるやうに、目を怒らして言ふ。
「でも、この頃は大名の中にも馬鹿な金を使ふ奴が出て來たと言ふぢやあねえか。俺の得意はみんな其

面目で話にならねえ。おぬしの出入にやあ隨分そんなのがあるだらう。」

朝湖は三味線を枕にしながら、天井に向つて酒臭い息を吹いた。さつきの一つ目小僧がまだ笑つてゐる。

「あるとも。あるとも。そんなのは名は大名でも元は田舍の土百姓だ。將軍家に妾が一人出來る。そいつの伯父だ弟だ甥だ從弟だといふ奴が、急に成り上がるんだ。刀の差しやう一つ知らねえ奴が、急に御登城だ何だつて、うろたへ廻る圖と言つたらねえ。まるで猿芝居だ。」

「猿芝居は好い。沐猴にして冠すだからな。」

「違えねえ。だが、馬鹿な金を使ふのは、さういふ奴等だ。今まで金を持つた事がねえから、金の使ひやうを知らねえ。金といふものは、何でも紀文や奈良茂が使ふやうに使へば好いと思つてゐるんだ。」

「面白え。面白え。ちとさういふのを玉にして遊ばうぢやあねえか。」

「實はもうちよい〳〵遣つてゐるんだ。師匠もその內仲間へ入れやう。」

「無論の事た。半兵衞も一口位は載せてやるが好い。」

「半兵衞か。あいつも飛んだ善人さの。こなひだも泥町の編笠茶屋で、筋の惡い古馴染に待伏を食つて、貰ひを殘らず取られをつた。」

遊扇に善人と言はれた半兵衞も、二人に負けぬ放蕩者であつた。本銀町の村田といふ相當な商家に生れながら、家業は見も返らずに、朝湖や遊扇の仲間入をして、人の金を當てに飲み歩いてゐるのである。唯彼が二人と違ふのは男の好い事であつた。併し、その外に能はなかつた。俳諧の師其角の角と楢の師

朝湖の朝とを取つて、角朝と號して得意がつてゐたのでも、彼の愚かさが想像される。

「時に師匠。かういふのはどうだ。」

半兵衞の噂で、暫く口を緘ぢてゐた遊扇が、突然何か思ひ出したやうに言つた。

「何だ。」

「百人男といふ惡ずりを拵へるんだ。百人一首をもぢつて、江戸中の馬鹿者を片つぱしから屠り倒すんだ。役人でも構はねえ。大名でも構はねえ。金持でも構はねえ。歌舞伎役者でも構はねえ。みんな槍玉に上げてやるんだ。」

朝湖は思はず起き上がつた。血走つた大きな目が燭臺の火にぎら／＼と光つた。晝間からの退屈が一度に拭ひ去られるやうな氣がしたのである。

「面白え、面白え。そいつあ妙案だ。俺はもう今朝から何かそんな事がしたくて堪らなかつたんだ。あんまり世間が下らねえ。あんまり馬鹿が多過ぎる。俺はもう何をするのも厭になつてゐたんだ。そいつあ好い息抜きだ。早速取り掛からうぢやあねえか。繪は俺が書く。おぬし字を書け。幸ひ繪の具も墨も買つたのが澤山ある。」

「早速と言つても、こゝぢやあいけねえ。第一、今夜は醉つてゐる。こんな事は醉つてゐちやあ駄目だ。しらふでゆつくり相談をしながら書かう。百人書くにやあ十日は掛かる。」

「それもさうだな。だが、ここでいかねえとすると、何處で書くつもりだ。」

「あとで難儀を見ちや詰まらねえ。俺の裏に和翁といふ醫者がある。女房もなし、はやらねえから[illegible]

ねえ。家(うち)もこゝよりは廣くて綺麗だ。あすこで書かう。」
「だが、そんな事に貸して呉れようかの」
「飛んだ浮つかり者だ。喜んで貸すだらう。師匠の名を聞いたら、土下座でもしかねねえ奴だ。」
「そいつあ好い。」
朝湖はやつと自分のする事が一つ出來たと思つた。それから、夜の明けるまで遊扇と、誰はかう書かう、彼はかう書かうといふやうな相談をした。

（四）

夜具も着ずに、午過ぎまで寢込んだ二人は、目を覺ますと、繪の具や墨や繪筆や畫帳を一包みにして、顔も洗はずに和翁の住居を訪ねた。
和翁は當時世に名高い繪師の來臨を悉く名譽に思つた。遊扇が大略來意を告げると、勿論直ぐに承知した。そして、
「愚老も何かお手傳ひが致したい。」
と言つた。和翁は大の手跡自慢だつた。
「先生は書がお上手だ。では、書の方は先生にお願ひする事に致さう。」
人の惡い遊扇がかう追從を言ふと、和翁は直ぐとそれを眞に受けた。
和翁は毛氈を敷いたり、繪の具皿を列べたり、墨を摺つたり、紙を廣げたり、一ｲ　〳〵しく働

いた。

朝湖は畫作に掛かると、いつも無口になる。遊扇が側から趣向を立てると、ぢつと默つてそれを聞きながら、目を怒らして白い畫帳を睨みつけてゐる。

やがて、朝湖の初筆が蜘蛛の落ちたやうに白紙をぽとりと黑く染めた。蜘蛛は恐ろしいやうに早く巣をかけ始めた。忽ち、朝湖の嘲ける人物が一人、畫帳の半面に躍動した。それは、近頃山村座の或野郎に現を拔かしてゐる或お留守居役の姿であつた。

「わが衣手は露に濡れつつ。」

遊扇が猥雜な意味を含めながら、かう詠むと、和翁はなんにも知らずに、それを繪姿の上に認めた。自慢程あつて、佐文山風の見事な筆跡である。

和翁が自分の書に惚れ〴〵と見とれながら。畫帳を朝湖の前へ直すと朝湖は直ぐに溢れるやうな嘲罵を第二の人物に書き現はした。それは坊主から袖の下を取ると噂をされてゐる寺社奉行某の姿であつた。

朝湖は興に乘じて、この日一日に十二人の役人や大名を槍玉に上げた。

明くる日も朝早くから遊扇と二人で來て、名高い儈や學者を嘲弄の繪や歌にした。その明くる日も、その又明くる日も書いた。八日ばかりすると、やつと百人の姿が揃つた。朝湖は最後の筆を置くと、始めて愉快さうに笑つた。

當局の目に觸れれば、直ぐにも筆者の斬罪に處せらるべき、この辛辣を極めた時代の惡罵帳は、先づ遊扇によつて一册が寫され、やがて和翁によつて他の一册が寫された。

朝湖と遊扇は、この「百人男」を會ふ人毎に示しては、誰の作だらう、中々面白く見立てゝあるなどと白ばくれた。和翁も得意になつて、病家先などを持ち廻つた。やがて、誰も寫す、彼も寫すで、段々江戸中にそれが廣まつた。

百人の中に老中阿部豐後守の姿もあつた。併し、その見立はちよいと考へると、老中を褒めてゐるやうに見えた。阿部の出入に或愚な醫者があつた。それがお世辭の積りで「百人男」を豐後守に見せた。老中は何の挨拶もせずに、その一本を留め置いた。それから、お城へ携へて行つて、町奉行の手に渡した。御府内にかやうな怪しからぬ物を書いた奴がある。きつと吟味あるべしといふ命令である。

奉行は直ぐと與力に探索を命じた。諧の筆跡から直ぐと足がついて、和翁が先づ訊問された。

『如何にも、それは愚老が認めました。』

和翁は「百人男」が當局の怒りを買ふ程辛辣な諷刺を含んでゐようとは夢にも思つてゐなかつたので、寧ろ得意になつて、かう答へた。

和翁は直ぐと繩をかけられて、奉行所へ引かれた。意外な嚴しい吟味に驚いた和翁は、

『實は、それは朝湖と申す繪師と遊扇と申す佛師が作つたものでございます。愚老は唯手傳ひを致したのみでございます。』

と申し立てた。

そこで朝湖と遊扇とが直ぐに召捕となつた。二人は平氣で繩にかゝつて、平氣で白洲へ出た。

和翁との對決になると、遊扇は白々しい顏をして言つた。

「毛頭覺えのない事でございます。大名方をお出入と致しますわたくし共が、何でさやうな恐ろしい作を致しませう。僞りと思し召すなら、手前宅を御詮義願ひます。」

朝湖も同じやうに、白ばくれた。

「畫債山をなすわたくし、何でさやうな戯筆を致す暇がございませう。お疑ひもあらば、手前宅も御詮義を願ひます。」

そこで、同心達が二人の住居へ家宅捜索に出かけた。勿論、和翁の家もこの運命を逃がれる事は出來なかつた。

やがて、三人の家から掻き集められた反古類が殘らず奉行の前に列べられた。ところが、「百人男」の草稿らしいものは、朝湖の家にも遊扇の住居にもなかつた。それらしいものは悉く和翁の家からのみ出た。それに、文字といふ文字の悉く和翁の手跡であるのが、何よりの證據となつた。朝湖は悉く畫風を變へて書いてゐたので、繪は何の證據にもならなかつた。

そこで、和翁一人が有罪と極まつた。和翁は白洲を立ちながら、怒りの涙をぼろぼろ零した。

「畜類め。惡魔め。俺をだまして、俺の家を使つて置きながら、惡事を俺一人に塗りつける大惡人め。」

和翁は二人を睨みつけながら、かう大聲に罵つたが、もう運命は極まつてゐた。和翁はあべこべに叱られて、手首の食ひ入る程繩を引かれた。

朝湖と遊扇は顏色一つ動かさずに白洲を出た。白洲を出て、顏を見合はすと、こみ上げるやうに、二人で笑つた。

「和翁のあの顔はどうだ。」
「大笑ひだ。馬鹿めが。」
二人はさう言つて、また割れるやうに笑つた。
和翁は牢屋に三日入れられて、それから千住で打首になつた。
その晩、遊扇が呉服町の新道に朝湖を訪ねると、朝湖はもう退屈さうに寢そべつてゐる。
「和翁が斬られたさうだ。」
と言つても、
「さうか。」
と言つたぎり詰まらなさうな顔をしてゐる。
「どうした。ひどくぼんやりしてるぢやないか。」
「詰まらねえ。下らねえ。また世の中が厭になつて來た。」
さう言つて、朝湖は寢そべつた儘、大欠伸をした。

（五）

春が過ぎ、夏が過ぎた。朝湖は相變らず繪を書かない。自分の感興からでない繪を書いて、板下書き同然な生活をする位なら、太鼓持をしてゐる方が餘程好い。太鼓持は初めから嘘で出來たものだ。嘘と知つて賣り、嘘と知つて買はれるのだ。自己を僞るのではない。「眞らしく」見せるのではない。眞の姿を

さへ嘘らしく見せるのだ。しかも、相手は天下の馬鹿の集りだ。大名にしろ、町人にしろ、我ながら暴ゝひもかけない大金を慣にして、その金の使ひやうを知らないで、まごついてゐる成上りだ。そんなのを見て、もぢ〳〵と羨んだり、じめ〳〵と怨んだり、眞面目な顔をして反抗を稱へたりする必要はない。相手は馬鹿だ。馬鹿な顔をして行けば、直ぐと手下に抱へて呉れる。一旦抱へられたら、うんと馬鹿な金を使はして、相手の財産をぶつ潰して了ふのだ。その間には、こつちの懐も暖まる。人の金で飮んだり食つたり遊んだり、したい三昧の事をするのだ。馬鹿の金を利口が使つて遣るのだ。あいつらに俺の繪の分かる時などは、永久に來ない。そんな事を苦勞をするのは愚の骨頂だ。それよりは太鼓を叩けば相手は直ぐに馬鹿踊りを始めるのだ。朝湖はさう思つて、毎晩のやうに、大名や富豪の供をして、吉原へ這入り込む。併し、遊んでゐる間は面白いが、家へ歸つて見ると、やつぱり詰らない。書きたい繪は澤山ある。併し、自分の書かうとするやうな繪は、誰も買ひ手がない。買手のないのは好いが、見て呉れ手さへない。無理に見ろと言へば、見るだらうが、見たところで些も分かるまい。それが詰まらないから、筆を取る氣にもなれない。頭の中で繪を書いたり消したりしながら、酒臭い息を吹いて、生欠伸ばかりしてゐる。

「師匠、面白い事があるぞ。」

遊扇がいつもの通りひよつこり黒い顔を現はして、いきなりかう言つた。

「妹を言つてるぜ。大方また田舎大名の穴つ這入りでも見つけて來たのだらう。詰まらねえ。」

朝湖は相變らず天井の一つ目小僧と睨めくらをしてゐて、起き上がらうともしない。

「そんなんぢやあねえ。ほうけ殿が月見をしようと言ふのだ。」

「ほうけ殿か。また揚屋に葡萄棚でも釣らうと言ふのだらう。下らねえ。」

二人がほうけ殿と嘲けつて言つたのは、井伊伯耆守といふ若大名の事である。近頃、十三萬兩といふ家督を相續して、俄分限になつた嬉し紛れに、遊扇や朝湖や半兵衛を取卷にして、吉原通ひに夜に日を繼いでゐる愚かな殿樣である。

「さうぢやあねえ。俺の差金もあるが、ほうけ殿にしては出來の部だ。屋敷で月見の宴を張らうといふのだ。」

遊扇がかう言ふと、朝湖は少し熱心になつた。

「ほう。屋敷でか。それは珍らしい。そして、何ぞ催しでもあるか。」

「おぬしに月見の歌を作らせて、その開きをしようと言ふのだ。三味線は市川と本澤とが附ける。平家の進藤も御招伴をする筈だ。」

「あの高慢な琵琶法師か。あの位蟲の好かぬ奴はねえ。いつも俺の顏を見ると、その方達の作る歌は迚も卑しくて俺の糸には乘らぬと言はぬばかりの嘯きやうだ。その癖、吉原へ供もすれば、人の金で格子女郎の帶も解くんだ。俺はあいつを「百人男」に洩らしたのが、今に殘念でならねえ。」

「俺もあの勿體ぶつた坊主は大嫌ひだ。今度の月見で、あの坊主を退治ようといふのが俺の趣意だ。實はその相談に遣つて來たのだ。面白いと言つたのはその事だ。」

「成程。そんなら、ちつとは面白い。だが、どうして退治るのだ。あいつ中々一筋繩ではいかねえ厚皮

入道だぞ。」
「俺に趣向がある。」
「はて、どういふ趣向だ。」
「月見の歌を頼まれたのが幸ひだ。歌ひ出しを平家にして、あの坊主に口を切らせるのだ。それから、途中で三味線へ移してはどうだ。あいつ、きつと厭がるに違えねえ。平家と小唄を一緒にされては堪らぬとか何とか、きつと一理窟こねるに相違ねえ。それを無理に語らせるのだ。」
「ほうけ殿の威光を借りてか。」
「ほうけ殿ぢやあ間に合はねえ。金だ。金で面をはるんだ。あの坊主慾張りだから、驚く程な金をやれば、きつと見識も何も捨てゝ了ふに違えねえ。」
「その金は何處から出るんだ。」
「勿論、井伊家のお納戸からだ。いくら俺達が使はしても、まだ九萬や十萬はある筈だ。進藤の坊主をびつくりさせる位の金は、爪の垢にも足るめえわさ。」
「成程。流石は遊扇の献立だ。面白い。やつて見よう。」
「作つて呉れるか。」
「應とも。」
「それは有難い。」
　月見の端唄は二日立たぬ内に出來た。

「あるひはしらら吹上和歌の浦住吉浪花高砂の尾の上の月のあけぼのを詠めて歸る人もあり――」
朝湖は平家の本文通りを先づ殿に枕に据えた。それから、
「われはそれには引き代へて昔がたりと名に立ちし色の村田の中將の――」
と碎けた。「色の村田の中將」とは半兵衞を冷かしたのである。朝湖は想の彈む儘に、廓の月の夜景色を、右からも左からも表からも裏からも叙した。「ひつて引き〳〵行く程に、このもかのもの仲の町」といふ所は、ついこなひだ遊扇が編笠茶屋の娘に見とれて、小石に足の爪を剝がした事を思ひ出しながら書いた。「晝のおましにいぎたなく醉ひ伏す男月知らず」といふ所は、いつも酒氣の絶えた事のない其角を思ひ浮べながら書いた。「薄に出だす銀月も」といふ所は、いつもの頭で綸を書きながら書いた。「月は照るやら曇るやら身あがり暗き女郎の仇目にかゝる夜這星」といふあたりから、調子は愈々乘つて來た。「のほほん〳〵のんほのういよ〳〵埒がない夜が明けた」と筆を結んだ時は、ほんとに自分にも夜が明けたやうな氣がした。それは、朝湖が小唄の戲作を終る時、いつも覺えるすが〳〵しさである。
遊扇は誂へ通りの歌が出來たのを、何よりも先づ喜んで、直ぐと草稿を市川檢校のところへ廻した。

（五）

愈々けふが月見である。
白木作りの清楚な書院に、いつもは行儀の惡い伯耆守が、床を後にして端然と座を構へてゐる。床には專册らしい三幅對が支那の月夜を粗朴に描いてゐる。幅の前には時代のついた鎧櫃が唯一つ置いてあ

るだけである。外に裝飾は何もない。

庭に向いた六尺の緣には、新しい莚が外へ垂れるやうに敷いてあつて、青竹の筒に薄、白木の三寶に團子、土器の瓶子に酒が供へてある。

何處にも時勢に媚びた浮薄な華美がない。雜駁な色彩がない。朝湖はそれを愉快に感じた。流石は由緖のある家だ。主人は微かでも、家にはこの品位があるのだと思つた。

「廓の酒にもちと飽いた。物日に五丁町を出し拔くも興があらう。それが女交ぜずのけふの月見ぢや。揚屋同樣氣儘に致せ。金子は如何程でも取らさう程に、面白可笑しう騷いで呉れ。鷄の啼くまで飮み明かさうぞ。」

これが第一のお聲がかりであつた。遊扇は恐れげもなく太守の前へ躙り出た。

「流石は殿樣、御趣向恐れ入りました。今頃は山本屋のかの君が嘸殿を恨んでをりませう。折角の名月が曇らねば宜しうございます。」

遊扇は自分でこの案を立てながら、さもそれが殿の思ひつきででもあるやうに、褒め立てた。朝湖はそれを腹の中で笑ひながら、默つて床の間の鎧櫃を見てゐた。胴の膨らみに若竹を張つたやうな力がある。時代のついた色は鐵を溶いて塗つたやうである。

「朝湖、鎧櫃が氣に入つたか。流石にそちは目が高いな。」

伯耆守は得意の鼻をうごめかした。

「失禮ながら、御傳來でございませうな。」

「傳來ではない。先達二百兩で予が道具屋から求めたのぢや。」

朝湖は寧ろ傳來だと言つて貰ひたかつた。主人が自分で買つたとあれば、いづれ道具屋に欺されたのであらう。時代も繪の具か何かでつけたのであらう。胴も大方剝ぎだらけだらうと思つた。

「併し、中には何が這入つてゐると思ふ。當てた者には褒美を取らせるぞ。」

殿がかう言ふと、直ぐ遊扇が口を出した。

「御先祖初陣の緋縅でもござりませうか。」

「いや、いや、さやうな物ではない。」

すると、今度は半兵衛が言つた。

「では、兜でござりませう。」

「智恵のない答ばかりぢや。朝湖は何と思ふ。」

朝湖は態と笑つて、答へなかつた。

「分からぬか。枕繪が一ばい這入つてゐるのぢや。」

さう言つて、殿はさも得意げに聲を上げて笑つた。朝湖は座に堪へぬばかり興を醒ました。

丁度そこへ、市川檢校と本澤檢校とが、丸い頭巾を揃へて來た。やがて傲慢な進藤檢校も丈の高い冠り物を冠つて、衣姿(ころもすがた)の物々しく這入つて來た。

「遊扇、檢校達も揃つたから、直ぐと仕度をさせるが好い。進藤、今宵は朝湖が作つた月見の歌の開きをするのぢや。そちもそれにゐて聞くが好い。」

伯耆守は何も知らずに、かう言つた。

遊扇は腹の中で笑ひながら、市川と本澤を仕度の間へ案内した。二人は直ぐと三味線の音締を合せた。連彈をするのである。

「こなひだも言ふ通り、語り出しは進藤に琵琶でやらせるから、その積りでな。」

遊扇がかう言ふと、市川が頭を振つた。

「あの法師中々語りは致しますまい。」

「いや、是非とも彈かせて見せる。」

「いや、どのやうになされても、迚も合點は致しますまい。本澤は平家の心得がございます。これに口を語らせませう。」

「さう言はずとまあ待て。俺にしやうがあるのだから。」

遊扇はさう言ひ捨てて、座敷へ引つ返すと、進藤を小蔭へ呼んだ。

「どうでござりませう。歌の語り出しが平家の本行通りになつてゐるのでございますが、その所だけあなたに語つて頂くわけには參らないでございませうか。」

遊扇は態と腰を低くして言つた。

「滅相もない。平家は吾々の本藝。下々の三味線小唄と一緒にされては堪りませぬ。」

檢校は豫想通りの答をした。

「そこをどうぞ今夜の座興に。」

「座輿に平家は語りませぬ。」

進藤は肩を上げてから言ひ放つと、傲然と座敷の方へ歸つて行つて了つた。

「畜生め。」

遊扇は覺えずから呟いた。勿論、遊扇はこの法師の金でなければ動かないのを知つてゐた。併し、初めから金を出すのも業腹だ。一度は素手で當つて見て遣れと思つたのである。

遊扇がもう一度仕度の間へ引つ返すと、市川が一人で寂しさうに座つてゐる。

「本澤はどうしたの。」

「女房が産を致したさうで、只今急に歸りました。御前宜しく賴むと申しましてな。」

「それ見た事か。愈々進藤に語らせにやあならねえ。」

「併し、迚も語りは致しますまい。不出來でもわたくしが平家風に語りませう。」

「まあ待て。俺にしやうがあるのだから。」

遊扇は前と同じやうな事を言つて出て行つた。併し、今度は直ぐと座敷へは行かずに、先づ納戸へ行つて、用人から百兩の金を受け取つて、それから又廣間の隣の櫟廊下まで來た。

「檢校、もう一度お顏が拜借したうございます。」

進藤は澁々立つて、出て來たが、遊扇の顏を見ると、直ぐに言つた。

「先程の義なら、どうぞお諦めが願ひたい。」

遊扇は手早く百兩包を法師の袂へぽとりと入れた。

「いや。仰せ御尤もでございます。併し、口のところだけお語り下すつて、三味線にお渡しになると同時に、席をお立ちになつたら、平家の語りかけと言ふだけで、別にお名は汚れますまいが。」

遊扇のかう言ふ内に、法師は袂の重さを十分に引いた。そして、

「どうもあなたの口には迚も敵ひませぬ。」

と言ひつつ、迷惑ながら承知だといふ目の色を見せた。

遊扇は舌を出しながら、又仕度の間へ戻ると、直ぐと市川を促し立てた。市川は三味線を取つて立ちながら、訊いた。

「口はどうなりました。」

「進藤が語る。」

「きつと語りますか。」

「きつと語る。」

市川はそれでも疑ひながら座敷へ通ると、進藤はもう琵琶を横に構へてゐた。

「進藤は何をするな。」

かう伯耆守が訊くと、

「歌の口を語りまする。」

と、かう法師が答へた。

「ほほう。それは一段と面白からう。」

朝湖と遊扇は目を見合はせて、互ににやりとした。同席の家臣は悉く鳴りを靜めた。

「あるひはしらら吹上――」

と、進藤が勿體らしく語り始めた。暗い、鈍い、勞れた足を引き摺るやうな聲である。

「尾の上の月のあけぼのを詠めて歸る人もあり――」

といふ所まで單調な曲が續くと、法師がまだ撥を置かぬ内に、

「われはそれには引き代へて――」

と、市川檢校が三味線であとを受けた。髮一筋をも入れぬ間の巧さである。曲も唄も、急に花やかに輕くなつた。空でも月が丁度雲を出た。

「片枝枯れたる皂莢も、やれ〱戀に瘦せたか、そちや異な姿。稻荷の岡に音はあれども、君を思へばのう手編笠――」

歌は節面白く進んだ。明かるい月が澄み渡る空を滑るやうに。

「遣手の宿の念佛講、二丁目あたりに菅搔絶えて――」

ここまで來るとふと唄が歇んで、三味線の手が込んで來た。合の手である。店菅搔の巧みな變調である。

撥は愈々冴えて來る。月も愈々冴えて來る。朝湖も遊扇も、もう進藤に對する憎惡などは忘れ果てて、聞き惚れた。

可なりに長い曲が終ると、伯耆守は膝を叩いて、二人を褒めた。

「市川出來た。朝湖よく作つた。」

さう言ひながら、座右の手文庫から、自分の手で市川へ百兩、朝湖へ百兩褒美を與れた。さつき遊扇が進藤の袂へ入れた百兩を併せて、三百兩の歌聞きである。

月い落ちる頃、井伊邸を辭した朝湖は、もういつもの不興な顔をしてゐた。

「だが、思ひ通り進藤に口を語らせたのは、胸が透いたな。」

遊扇がかう言ふと、朝湖は尙苦い顏をした。

「併し、口を切つただけの琵琶法師と、歌をすつかり作つた俺とが、同じ百兩だと思ふと腹が立つ。いつそこれから三人で吉原へ延して、朝からぶん流しの、百兩一度に使ひ捨てはどうだ。」

「流石は先生、氣前が好いな。」

半兵衞が後から、黄いろい聲を上げた。

「置かつせえ。太鼓持の太鼓を叩く奴があるものか。」

三人はその儘、吉原へ朝駕籠を急がせて、それから四日大門を出なかつた。

遊扇はそれから後も朝湖と相談して、かやうな愚かしい事を幾度となく企んでは、伯耆守に途方もない金を使はせた。

八萬兩ばかりの金が瞬く内に井伊家から消えた。愚鈍な家老はやつとそれに氣が附いて、急に遊扇朝湖などの出入を差し留めた。

「やれ、やれ、とう／＼出入留めか。だが、俺達で八萬兩使はしたと思へば、腹も立たねえわ。」

家老から來た愛想盡かしを見ると、遊扇は多少興奮したやうな調子で、かう言つた。

併し、朝湖は相變らず寢そべた儘、詰まらなさゝうに天井を見てゐた。

「八萬兩が何だ。下らねえ。」

さう言つて、欠伸をした。

（六）

遊扇は暫く大名出入が出來なくて、脾肉の肥りを嘆じてゐたが、當てもなしに惡所をうろついてゐる内に、やがて又大きなのを一度に二人網にかけた。

一人を六角越前守と言ひ、一人を本庄安藝守と言つた。いづれも將軍のお腹三の丸桂昌院の甥で、伯母の吹擧で京都から下つて來た、成り上がりの俄大名である。

遊扇は早速朝湖や半兵衛を誘ひ合せて、この二人を取り卷いた。例に依つて、一晩に百兩二百兩の金を捨てさせるのである。その切り盛りは大抵遊扇がした。

ところが、六角の若殿の方は、朝湖が取り持つた菱屋の小幡といふ女郎が直ぐと氣に入つて、揚詰といふのぼせ方になつたが、どういふ譯か安藝守の方は、どんな女を見せても一向氣に入る樣子がなかつた。遊扇は樣々に心を碎いて、少しでも大名に向きさうな所のある女郎は悉く見せたが、それでもやつぱり駄目だつた。

「一體、お殿樣はどういふのがお好みなのでございます。」

遊扇は困じ果てゝ、或時揚屋で、かう打ちつけに訊いて見た。すると、安藝守が笑ひながら答へた。

「さればの。これまで十二三人會うた女に、一人も傾城らしい者はをらなんだ。みんな予を大名と思うて、恐れる心があつて面白うない。予が會うて見たいと思ふのは、世に謂ふ傾城ぢや。人を人とも思はぬ女郎ぢや。」

遊扇は目金違ひをしてゐたのである。大抵、今までの俄大名は茶の一つも立てるおとなしやかな女郎をさへ當てがへば、それで直ぐ滿足した。ところが、安藝守は多少張りのある女を要求してゐるのである。遊扇は、こいつ中々隅へは置けぬわいと思つた。

遊扇は暫く考へてゐたが、やがて小膝をぽんと打つた。

「茗荷屋に大藏といふ女郎がございます。氣立に張りがあつて、器量も美しうございます。あれなら、きつとお殿樣のお氣に召しませうが、困る事には大きな疵つきで、當事廢り者でございます。」

安藝守は座を乘り出した。

「ほゝう。それは面白さうな女ぢや。したが、疵つきとはどう致したのぢや。」

「戸津輿兵衛と申す男に指を切つて遣つたのでございます。」

「ほゝう。さやうな心中立の致しやうもあるものと見ゆるな。それは愈々面白い。一つ胖しう話して呉れぬか。」

「畏りました。」

遊扇は怯むかと思つた安藝守が存外乘氣になつて來たのを、奇貨措くべしとなした。若し、この女で

安藝守を捕まへる事が出來なければ、やがて自分達三人も首になるに相違ない。それでは、折角の玉を逃がして了ふと言ふものだ。どうかして、この大藏でこの馬鹿を墮して了はなければならない。それには、女を無暗と褒めちぎるより、寧ろ幾らか惡く言ふ方が好いと思つた。

遊扇は頭の中で浮世草帋のやうに筋を立てながら、輕口面白く話し出した。

(七)

戸津與兵衞はもと傳馬町の大きな紙問屋の息子であつた。親から分けて貰つた身代を遊山に使ひなくして、惡所をうろ〳〵してゐる内に、いつか太鼓持のやうなものになり下がつて了つた。

或時、與兵衞は客の供で、揚屋の桐屋へ行つた。そこで茗荷屋の大藏に始めて會つた。浮氣な與兵衞は大藏を一目見ると、直ぐいたづらをして見る氣になつた。

客が歸ると、與兵衞は態とあとへ殘つた。大藏に當つて見ると、女は直ぐと血道を上げて來た。元より大分の金銀を使ひ捨てた身の果である。與兵衞には少しの卑しいところもなかつた。それに、天性の美男だつた。二人は忽ち忍び會ふ仲になつた。

與兵衞の長年會ふ女郎に越前屋の三笠といふのがあつた。與兵衞が大藏と出來た時、三笠はもう長らくの大病で寢てゐた。醫者も見放した。抱主も諦めてゐた。

或時、大藏が與兵衞に向つて言つた。あなたには三笠殿といふ色があるさうだ。若し、その色と切れて呉れたら、あたしはあなたともつと深い仲にならう。二世の語らひでも何でもしよう。すると、與兵

衞がかく言つた。「三笠と切れるのは何でもない。だが、お前がそれ程この俺を思つて呉れるのなら、その證據を見たいものだ。すると、大藏はいきなり剃刀を出して、右の手の小指をぽつりと落した。そして、それを紙に包んで呉れた。與兵衞は嬉し泣きに泣いた。

大藏の指切りは直ぐと遣り手に見つけられた。「誰に切つておやり遊ばした。」遣り手がかう訊いても、大藏は返事をしない。遣り手が主人へ言ひつけた。主人が怒つて、誰に切つたと責めても、大藏はやつぱり返事をしない。主人は女を土藏へ入れて、物を喰べさせまいとした。

すると、遣り手が口を出した。疵のある者を物も喰べさせずに押し込めて置いたら、命の程も覺束ない。中々その位な事で、有り體に物を言ふやうな大藏殿ではない。それよりは、先づ指の疵の養生をさせて、これまで通り勤めに出す方が好い。その內、會ふ客の內で、相手も知れて來よう。主人は、成程それも尤だといふので、又前通り女を揚屋へ勤めに出す事にした。

勿論、與兵衞は卑しい太鼓持の身分なので、晴れて大藏に會ふ事は出來なかつた。或晩、忍んで格子先に立ち寄ると、大藏がそつと出て來て言ふには、ここではどうも話も出來ない。今、二階から或物を落すから、それをどうにかして、大盡になつて會ひに來て呉れ。さう言ふかと思ふと、直ぐ二階へ驅け上がつて、縮緬の腰帶を二つ繋ぎ合はせて、何か包んだ物をずる〱とおろした。與兵衞は受け取りながら、馬鹿に重い物だなと思つた。

急いで、宿へ歸つて、包みをほどいて見ると、どうして調達したのか、金が七十兩這入つてゐた。與兵衞は女の親切を押し戴いて、直ぐに小袖から、まくり羽織、帶、脇差まで拵へて、二日程過ぎると、

揚屋へ出て來た。さて、俺も親類共の詫び事で親の勘當がゆりて、又元の身の上になつた。から與兵衞が言ふと、その風俗の立派なのに驚いた揚屋の上下は、忽ちそれを信じて、這ひつくばつた。「まあ、まあ、それは淨瑠璃本にあるやうな事。」一人一人が同じやうにこんな事を言ふ。

與兵衞は直ぐに茗荷屋の大藏を呼べと命じた。大藏は知らせを聞くと、喜んで飛んで來た。それで、指を切つた樣子も忽ちみんなに知れた。併し遣り手は寧ろ大藏を褒めた。流石大藏殿は目が高い。必ずこのやうな事になると見通してゐたのであらう。指を切つたのも尤もだ。まるで手の裏を返す挨拶である。與兵衞は嘘はつき次第だと、思ふさま我儘を言つて遊んだ。

さうしてゐる内に、一時は危なかつた三笠の病氣が、不思議と段々よくなつて來た。三笠は前のやうに來て呉れと、男のところへ頻に手紙を出すが、一向返事といふものがない。その内に、禿が與兵衞の大盡風をして揚屋へ這入るところを見つけて來た。それから、氣をつけて見合ひ聞き合する内に、茗荷屋の大藏に會ふといふ事が分かつた。

三笠は身を震はして口惜しがつた。それから、朋輩女郎を大勢語らつて、みんなで與兵衞の歸り道を大門口で待ち受けた。茶屋の男が、その事を與兵衞のところへ知らせると、今度は氣の強い大藏が承知しなかつた。なんの散茶女郎が。何程の事を爲出かさうと、態と白晝、與兵衞を誘つて、仲の町へ出た。三笠は直ぐと出て來て、男を捕まへた。默つて手を引いて行かうとすると、大藏が割り込んだ。俺の客だ。手もつけてはならないと言ふ。なあに、俺の方が古い。お前などの知らぬ事だと言ふ。與兵衞は右へ引つ張られたり、左へ引つ張られたりした。三笠の連れて來た朋輩女郎も手を出した。大藏の方へも

女郎や禿が大勢味方に來た。與兵衛は二つの女軍に奪ひ合はれて、羽織も小袖も散々に引き裂かれた。髮はむしられる。顏は引つ掻かれる。色男散々の體たらくであつた。

併し、爭ひは三笠方の勝となつた。與兵衛は大勢の女軍に取り卷かれて、三笠のところへ連れて來られた。三笠は二人になると直ぐかう言つた。あれ程深く言ひ交はしながら、今更あんな者に乘り代へるとは、どういふ御量見だ。親方の手前、朋輩女郎の思はく、迚も生きてはゐられないから、自害して死ぬつもりだ。自分が死んだら、お前も生きてはゐられまい。覺悟を極めてかう言はれると、與兵衛は困惑した。日頃の氣質、死に兼ねぬ女である。與兵衛は疊へ頭を擂りつけて、詫まつた。

これまでの致しやうは、如何にも俺が惡かつた。それは幾重にも詫びをする。この上はもう大藏に二度と會ふまい。どうかそれで許して貰ひたい。男がかう言ふと、女はやつと少し顏を和らげた。若しさうなら、深い馴染でもあるから、堪忍もしよう。併し、その詞に僞りがないなら、今ここで大藏に手切れの文を書け。文何は自分が好むから。さう言つて、女は更に思ふ存分な愛想盡かしを書かせた。

二三日過ぎた或晩おそく、與兵衛は離に大藏を訪ねた。三笠に少しも心はないのだが、死ぬと言ふに困つて、當座逃がれにこなひだのやうな文を書いた。お前の親切で貸して呉れた金は、まだここに使ひ殘りが三十兩ある。あとはどのやうにしても返すから、これは一先づ納めて置いて呉れ。その內、三笠とは手を切つて、きつとそなたを妻に持たう。男は聲をひそめてかう言つた。

大藏はなんにも言はなかつた。畜生同前の人と知らないで、指まで切つた自分は馬鹿だつた。あたしはあなたのお蔭で廢り者になつた。畜生の金は入らないから、持つて歸るが好い。と、金を投げ返すな

り奥へ立つて行つて了つた。

與兵衛は爲方なしに、金を拾ひ集めて、宿へ持つて歸つた。その後は三笠とばかり忍んで會つてゐた。やがて、三笠の年期が明けたので、使はずにあつた例の三十兩で、少しばかりの義理をして、三笠を女房に持つた。

大藏は太鼓持の與兵衛に指まで切つたといふ噂に祟られて、今では一人も客がない。廢り者同様である。

遊扇が身振り聲色面白く話した長い物語の筋は大凡かうだあつた。

（八）

安藝守は脇息を叩いて喜んだ。

「それこそ誠の傾城ぢや。眞の女郎ぢや。早う呼びに遣はせ。直ぐに會ひたい。」

遊扇は態と困つたやうな顔をした。

「でも、あまり落ち切つた女郎でございますから。」

「落ち切つたら、引き上げて、會うたら好いではないか。」

遊扇はもうここまで乘らせれば大丈夫だと思つたので、

「それ程までに御熱心なら、呼びに遣はしませう。」

と言つて、態と澁々大藏のところへ使を出した。

大藏は間もなく來た。大門口の騒ぎ以來、始めての揚屋入りであるが、少しも怯うてのする様子などはない。元より、大名などを恐れる女郎ではないから、むづと安藝守に引つ添うて坐つた。疵のついた小指をも、強いて隱さうとする様子がない。

「いよう、雪女郎の御來臨、御來臨。化かされまいぞ。化かされまいぞ。」

遊扇は忽ちいつもの太鼓持になつて、目をこすつたり、眉毛に唾をつけたりした。丁度八朔の晩で、女は白無垢を着てゐたのである。

安藝守は先づ女の人を人とも思はぬ驕慢な態度が氣に入つた。指の疵などを少しも氣にかけるやうな様子のないのも意を得た。やがて、盃事が濟んだ。床入りも濟んだ。安藝守は今までにない思ひをした。

「大藏は今年中揚詰ぢや。必ず外の客に會はせてはならぬぞ。」

悉く上氣した若大名は、揚屋を出る時、愚かしうから叫つた。

明くる日、安藝守は遊扇に命じて、小袖五つ重ね、夜着蒲團二通り、禿二人の衣裳から遣り手の着る物をまで、大藏の許へ送つた。勿論、遊扇もたんまり酬はれた。

「どうだ。師匠。乃公の腕前。とう／＼本庄を墮して了つたぞ。」

遊扇は直ぐと吳服町へ報告に來た。

「ほほう。そいつは妙だ。あいつは馬鹿殿に似合はぬ氣むづかし屋だが、よくおぬしの辯舌で落ちたな。して、相手は誰だ。」

朝湖は珍らしく、小さな紙に何か密畫らしいものを書いてゐる。

「指切りの大藏さ。「戸津は石町のはん恥知らず」よ。」

「そいつあ飛んでもねえ者を押つ附つけたな。今に尻が割れねば好いが。」

「ところが、餓鬼の守。大氣に入りで、直ぐさま今年中揚詰の談判だ。」

「さうさ。あいつは成り上がりだから、いつそあゝいふあばずれたのが氣に入るのかも知れねえよ。」

「大きにさうだ。時に御褒美がたんまりあつた。何處ぞで一杯やりの、本庄をおびき出しはどうだ。」

「好からう。」

朝湖は未練氣もなく、筆を投げ捨てた。

「珍らしいの。誂へ物か。」

表へ出ながら、遊扇が訊いた。

「宗珉が小柄の下繪だ。」

「あいつは相變らず眞面目か。」

「眞面目にも何にも。あんな可笑しな奴はねえ。飛んだ潔癖で、日に幾度着物を着換へる分からねえ。こなひだも家へ來たから、態とあの汚な細工な雁金餅を出して遣つた。俺が手を出すとの。しやう事なしに一つ摘んだ。その厭な顏と言つたらなかつた。」

朝湖は珍らしく多辯であつた。

(九)

安藝守の父を因幡守宗資と言つた。三の丸桂昌院の弟である。近頃、嫡子資俊の殊の外不行跡なのを知つて、心を痛めてゐるが、事を荒立てて、累を三の丸に及ぼしてはならないと思つてゐる。これは何でも、姉と相談して、姉から直接言つて貰ふに限る。因幡守はさう考へて、或日お城でその事を桂昌院に話した。

桂昌院は驚いたやうな顔もしなかつた。資俊不行跡の事は疾うから聞いて知つてをる。六角越前が卑しい女を妻に致してをる事も知つてをる。併し、それは資俊が惡いのでもない。六角が惡いのでもない。繪師朝湖佛師遊扇村田半兵衛などと申す輩（やから）が、資俊や六角を魔界へ誘（おび）き入れたのだ。二人ばかりではない。彼等の毒手にかかつて身を滅ぼした五七千石の旗本はまだ外に澤山にある。自分は右三人の毒蟲をいつか重刑に處してやりたいと思つてゐるが、まだ好い機會が來ない。その內きつと始末をつけてやるから、先づそれまでは資俊のしたい通りにさせて置くが好い。桂昌院はかう言つた。男のやうに鋭い理性と判斷とを持つた將軍の母も、自分の甥には甘かつたのである。

因幡守は桂昌院が思ひの外事情に通じてゐるのを驚きながらも、自分の息子のさう惡くは思はれてゐないやうなのをまだしもと喜んで、早々お城を退出した。

朝湖も遊扇も半兵衛も、自分達が桂昌院の怨みを受けてゐようとは夢にも思ひ知らなかつた。憎まれるにしても、愛されるにしても、餘りの身分違ひである。三人は六角や本庄が三の丸內緣の大名であることを知つてゐた以外に、自分達と三の丸との間にどんな關係をも思ひ浮べなかつた。

或朝、遊扇が本庄邸へ伺候すると、次の間で年寄二人らしい話し聲がした。

「どなたでございます。」

遊扇が聲を潜めて訊くと、

「なあに、親父のところへ大目付の小田切土佐が話しに來てゐるのだ。心配はない。」

安藝守がかう言つた。遊扇はその日の遊びの相談やら何やら、言ひたい事が澤山胸につかへてゐたが、隣の客の歸るまでは遠慮をしなければならぬと思つて、苦しさうに押し默つてゐた。

すると、隣の部屋から、はつきりとかういふ對話が洩れ聞こえて來た。

「恥を申さねば分かりませぬ。實は嫡男斉俊、遊所通ひに現を拔かしをり、如何やうに異見を申しても、止みませぬ。餘程、氣に入つた女子がをると見えまする。いつそそれを受け出して當てがうたら、放蕩も止まうかと存ぜられますが、如何でござりませうな。」

「お役柄の手前、拙者善惡は申し上げられませぬ。併し　御心勞はお察し申します。」

安藝守はこれを聞くと、いきなり遊扇の耳を引つ張つた。

「あれを聞いたか。父上の思召は、氣に入つたら受け出し、その後ふつつり行きさへせねば好いのぢや。この上は、その方遠慮なく働け。首尾ようしたら、伯母御に頼うで、長崎糸割符仲間へ入れて遣るぞ。」

遊扇は直ぐと起つて、千兩箱一つ納戸から受け取ると、宿へも歸らずに、吉原へ駕籠を飛ばせた。

大藏の身請は九百兩で話がついた。勿論、それ程の値打がある女ではない。遊扇は茶屋の言ふ儘に、法外な金を出したのである。殘りの百兩は悉く祝儀に蒔き散らした。

それから、今戸まで女を駕籠で連れて來て、そこで小屋形船へ乘り換へさせた。遊扇は船へ一緒に乘

るとほつと安心した。

「やれ、やれ、忙しい事だつた。併し、もうかうなればこつちの者だ。ところで、大奥のおいらん。この骨折は忘れつこなしだぞ。何を言つても、相手は三の丸御内縁だ。いつ何時俺が身に難儀が掛からぬものでもない。その時はきつと申し開きを頼むぞ。」

遊扇はほんとにさう思つたのではないが、自分の努力に箔をつけようとして、態とこんな事を言つた。

「たしなまんせ。分かつてゐるわな。おれはお前を親とも思うてゐる。」

女がかう答へると、遊扇は態と首を縮めた。

「いや、もう、こんな恐ろしい事をした事がない。どうだ。この體の震へやうは。」

女は笑つた。

「それ程恐ろしくば、せぬが好いに。」

「いや。これは詫まりだ。」

やがて、船が江戸橋へ着くと、遊扇は又駕籠を雇つて、女を石町の貸座敷へ案内した。自分の住居の直ぐ側である。

そこで、使を出すと、安藝守が直ぐと飛んで來た。

「渡邊の綱が鬼の腕を切り落すやうな働きで大藏殿を調へて參りました。褒めてやつて下さいませ。」

遊扇がかう言ふと、

「過分。過分。流石は遊扇、爲事が早いな。」

と、安藝守は大恐悅である。

「でも、ついさつきはあのやうに恐ろしがつてゐなさんしたに。」

大藏がかう言ふと、遊扇は直ぐ尻馬に乘つた。

「全く命がけでございました。この上の御褒美には、どうか手前に難儀の掛からぬやう、お願ひ申し上げまする。」

遊扇は態と身を縮めて、さも恐ろしげな樣子をしたが、

「氣の狹い奴ぢや。身が金で身が受け出すに、誰が何と言はう。父上も御同意は分かつてゐる。氣遣ひせずと先づ酒でも飮め。」

安藝守にかう言はれると、直ぐに安心したやうな顏をした。いづれにしても遊扇は、これしきの事を何とも思つてゐるのではないのである。

やがて酒宴が始まつた。安藝守は下屋敷から腰元を三四人呼び寄せて、大藏に引き合はせた。大藏は惡びれもせずに、みんなの盃を丁寧に受けた。

やがて、朝湖が作つた「待乳しづんで」を唄ひ出す者がある。遊扇が立つて舞ふ。安藝守が扇拍子を取る。座は段々と浮かれて來た。

突然名主から遊扇のところへ使が來た。直ぐに來て呉れと言ふ口上である。遊扇は何の氣なしに直ぐと名主を訪ねた。

「御用があるから、明日晝時に北條安房樣御番所へ、お前を連れて罷り出ろと言ふ事だ。何かお調べを

受ける覺えでもあるか。」

名主にかう言はれると、遊扇ははつと思つた。さつきから冗談で言つてゐた事が讖をなしたのではあるまいかと思つたのである。併し、けふの事が知れるには余りに早過ぎる。何か吉原の事で、參考人にでも呼ばれるのだらう。さう思つて、

「何も覺えはございませぬ。」

と答へた。

「では、それまで他出無用だぞ。」

名主はかう言つて、遊扇を大屋に引き渡した。

遊扇は平氣で名主の家を出たが、何となく胸が騷いでならない。その内に、これは唯事ではないといふやうな氣がして來た。

遊扇が貸座敷へ歸つて、その事を報告すると、安藝守も驚いた樣子だつたが、

「併し、けふの事が分かつたのではあるまい。まあ、安心してゐるが好い。」

さう言つて、遊扇を慰めた。

「でも、それだけは餘り賴りなうございます。何とかお役人にお聲が掛けて頂きたいと存じますが。」

「それは宜しい。併し、北條とは懇意でないから、同役の能勢出雲守をあしたの藏屋敷へ呼んで、頼んで見よう。そちも來て、樣子を聞くが好い。」

「それは有難うございます。何分宜しくお願ひ申します。」

遊扇は少し萎れて言つた。

座が白けたので、安藝守は一先づ屋敷へ引き上げる事にした。大藏は腰元をつけて、一時貸座敷に預けて置く事にした。あすにもなつたら、直ぐに下屋敷へ引き取らうと言ふのである。

遊扇は安藝守を送り出すと、急いで名主のところへ驅けつけた。

「本庄の殿樣が町奉行へ話をして遣るから、あすの朝屋敷まで來いと仰しやいますが、如何致したものでございませう。」

遊扇がかう言ふと、名主は本庄の名を恐れて、

「では、朝の内内證で行つて來るが好い。早く歸つて來いよ。」

と、言つた。

(十)

遊扇は夜の明けるのを待ち兼ねて、小川町の本庄邸へ馳せつけた。四つ時前に能勢出雲守が遣つて來た。

「外でもないが、拙者へ出入を致す佛師遊扇と申す者。今日御同役へお呼出しになつてをるが、何咎も覺えのない者故、房州へ宜しく頼んでは呉れまいか。」

安藝守がかう言ふと、出雲守が答へた。

「總て御用向、同役懸かりの事に就いては、頼むと申す事は勿論、いろふ事さへ出來ませぬ。併し、何

の否もない者なら、口合一通りで濟みませう。總じて安房守は耳聽きをさせて、詮義を致すのが常でござる。その積りで參られたら、何の事もござるまい。」

出雲守が歸ると、

「今聞く通りぢや。何の事もあるまい。」

と、安藝守が言つた。併し、遊扇は賴りなかつた。

「あなたは何とも思つて入らつしやらないやうですが、わたしはきのふから物も咽喉へは通りません。」

かう言つて怨んだ。すると、

「さて〳〵小心な奴ぢや。遊扇でもない。」

安藝守はかう言つて、笑ひながら奥へ這入つて了つた。

遊扇は遁れぬやうに急いで歸ると、直ぐ北條安房守の役所へ顏を出した。すると、朝湖が來てゐる。半兵衛も來てゐる。三人は思はず顏を見合はした。併し、何事で呼び出されたのだか、それは誰にも想像がつかなかつた。

やがて、三人は一緒に呼び出されて、一緒に白洲へ畏つた。すると、安房守がかう言つた。

「先月中から馬が物言うたといふ事を落語といふものに作つて流布した者があるが、今以て犯人が知れぬ。その方達三人は常々口を叩いて、人の機嫌取る事を渡世同樣に致す由ぢやが、馬が物言うたといふ話も、そち達が廣めたに相違あるまい。有り體に申せ。」

誠に意外な訊問である。馬に物を言はせて、生類御憐みを罵倒させた落語の、近頃世に行はれてゐる

事は三人も知つてゐた。併し、自分達が何でそのやうな事に與らう。三人は餘り馬鹿々々しいと思つた。
「左樣の義、毛頭覺えござりませぬ。」
三人が聲を揃へて、かう答へると、
「然らば、けふは歸つて好い。」
と言はれた。何の沙汰もなしに放還されるのである。
奉行所を外へ出ると、朝湖が欠伸をしながら言つた。
「蛇が出さうで、蚊も出なかつたの。」
三人は聲を合せて笑つた。それから、吉原へ氣鬱ざましの酒を飮みに出かけた。
二日立つと又呼出しが來た。三人は「また馬か」と、笑ひながら白洲へ出た。すると安房守がかう言つた。
「馬が物を言うたといふ話は、何としてもそち達の作に相違ない。吟味中入牢申しつくるから、左樣心得ろ。」
三人は驚いた。無法な裁判もあればあるものだと思つた。併し、奉行はもう何を言つても取り上げなかつた。
安房守は三の丸の內意で、この三人を捕へたのである。併し、桂昌院內緣の大名を隳落させたといふだけの科で、三人を罰する事は出來なかつた。第一、それは社會への聞こえも面白くない。それに、誘惑した者もした者だが、された者もされた者だ。罪はどつちにもある。三の丸樣は遠島に致せと仰せら

れたが、それはちと酷に過ぎる。何かこの際罪科を作つて、江戸拂ひ位で許させて遣りたいものだと常識もあり同情もある安房守は、さう考へて馬の物言ふ話などといふ思ひもかけぬものを持つて來たのである。

併し、この親切は朝湖にも分からなかつた。遊扇にも分からなかつた。勿論、半兵衛にも分からなかつた。彼等は自分達の悪行のどうせ一度は天罰に會はねばならぬのを覺悟しながらも、罪科も定められずに暗い所へ投り込まれてゐるのが、不平で不平で堪らなかつた。三人は二月も牢にゐたが、一度の召喚にも會はなかつたのである。

朝湖が先づ、病氣に付、養生として出牢致したいといふ願を出した。やがて、遊扇も同じ願を出した。半兵衛も出した。六角、本庄は勿論、ふだん三人を贔負にする大名達も側から力を添へた。

三人は願の通り牢を出る事が出來た。勿論、一人も病氣なのではない。食物が悪いので少し痩せたのと、剃刀を當てないので髯が延びたのだけが、前と違つてゐるだけである。三人は少しも愼む心がなかつた。今まで通り、平氣で盛り場へ出入もしたし、酒食や遊興も思ふ儘にした。

そこで、隠し目付からは毎日のやうにやかましい報告が來る。三の丸からは愈々厳命がある。流石の安房守も終に最後の手段を取らなければならなくなつた。

或日、遊扇が山村座へ芝居見物に行つた。同じ日に朝湖と半兵衛は吉原へ遊びに出かけた。その歸り道に、三人とも召捕りになつた。繩つきで奉行所へ引かれると、直ぐと刑の宣告があつた。格別の御慈悲を以て、出牢養生仰せつけられたるに、愼しもせで遊所へ立ち入り、上を輕んじたる段、不屆至極に

付、三人ながら遠島に處すといふのである。前の馬の話には不平だつた三人も、今度のこの宣告には異議の申し立てようがなかつた。

宣告を受けると、遊扇と半兵衛は青くなつた。併し、朝湖一人はびくともしなかつた。どうせこんな世の中である。何處に住まうと、退屈なのは同じ事だ。島だと言つても、人は住んでゐるのだらう。そんなら俺でも生きてゐられるに違いない。朝湖はこんな事を思つてゐた。

十二月二日の寒い朝だつた。三人は大勢の知人にそれとなく見送られて、靈岸島を船で出た。見送りの中には、團十郎もゐた。七三郎もゐた。紀文もゐた。奈良茂もゐた。其角もゐた。横谷宗珉もゐた。宗珉は人目をも恥ぢずに涙をぼろ／＼と零した。

船が伊豆へ着くと、遊扇と半兵衛は八丈島へ卸された。朝湖はたつた一人三宅島へ置かれた。

(十一)

島へ來てからの朝湖は「退屈」その者だつた。毎日寢そべつてばかりゐる。欠伸ばつかりしてゐる。彼は自然に興味を持たなかつた。山にも濱にも遊びに出た事がない。長年の懶惰な生活は、彼に漁（すなど）る勇氣をも培（つちか）ふ力をも與へなかつた。

毎晩夢に見るのは、江戸の芝居である。吉原である。彼は時勢を唾棄しながら、人を戀しがつた。寂しいのを嫌つた。

彼は時々繪も書いたり文章を作つたりした。「三日詩を言はざれば、口荊棘を含み」などとも書いた。

併し、いつも出來上がつて了ふと、

「詰まらねえ。下らねえ。」

と言つては、引き裂いて了つた。

紀文などから送つて呉れる穀物や酒で商ひを一度して見たが、それも長くは續かなかつた。浪費といふ事の外何も知らぬ彼に算盤は取れなかつた。

彼は欠伸の外何もせずに、十二年島にゐた。それでも、彼の體は少しも衰へなかつた。彼が自然に冷淡であつても、自然は彼に暖かだつた。

或春の朝、彼が草花に蝶の留まつてゐるのを眺めて見ると――それは、彼にとつて、全く不思議な出來事だつた――赦免の船が江戸から來た。五代將軍が薨じて、六代將軍が宣下をしたのである。

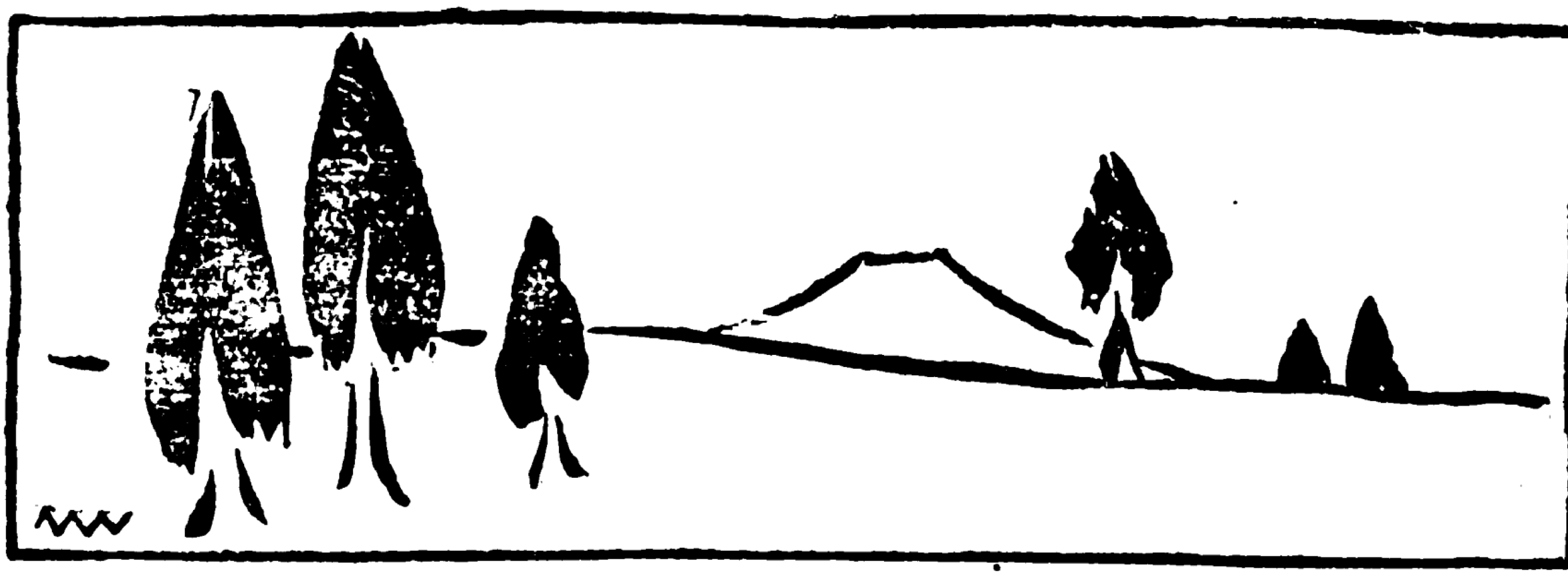
江戸へ歸る船の中で彼は考へた。歸つたら名を變へなければなるまい。彼は母方の姓の花房といふのを思ひ出した。それからけさ見た蝶を思ひ出した。英――一蝶。これで好い。又この名で一暴れ暴れようか。

併し、愈々江戸の土を踏むと、もう又江戸が厭になり出した。それに、團十郎ももう死んでゐた。其角も死んでゐた。七三郎も死んでゐた。

「「憎まれてながらふる人冬の蠅」か。」

彼は記憶にある其角の句を誦しながら、大きな欠伸をした。

（終）



動かぬ時計

有島武郎

マリー、アントワネットの寢室にあつて、華麗なマンテル、ピースを飾つた時には、その置時計はたしかに動いてゐたに違いない。花のようなその皇后と、温厚なルヰ第十六世とが濃やかな春をこめる睦言の間に、その時計の精巧な螺條(ぜんまい)はゆる／＼とほぐれ、秒から分を刻み、分から時を刻んで、黄金の鈴(りん)を靜かな夜の沈默の中に穩かに鳴り響かしたものだらう。恐ろしいギロチィンの斧の刄が、王家の誇りをさすがに最後まで捨てなかつた皇后の頸に、情け容赦なく加へられた頃から、その時計は動かなくなつたと傳へられる。その後ルヰ、ナポレオンが偉大なる伯父大帝の遺業を受けて、佛蘭西帝制の再興を企てた時、チュイレリー宮殿の一室を飾るために、その置時計をヴェルサイユから移したが、どうした事か、どれ程熟練な時計師でも、それを元通り動くようにする事が出來なかつたので、そのまゝ暫く宮中にとゞめ置かれてから、用のないものと一緒に街頭に送り出されて、塵を被つたまゝ、ある骨董屋の店の隅に曝され

る悲しい運命に陷つてしまつた。骨董屋を訪れる客足は絶えなかつたが、誰れも動かぬ時計に木札をかけるような物數奇はしなかつた。外の商品の新陳代謝する間に、その時計ばかりは、根が生へたものゝように、賣れ殘つて幾年かたつた。

所が國家學者のRが巴里に留學中、ふとその置時計を見付け出して、由來の面白さに捨値で日本に持つて歸つたのだつた。その時以來その時計は、廣やかな薄暗い書齋の一隅に、大理石の臺に据え付けられて、塵も置かせず大切に保存されるやうになつた。

それはどつしりしたマホガニー製の置時計だつた。脚を踏み延ばしたビザンチン型の獅子が、横向きに丸彫りにされて立つてゐるその下に、精巧な唐草模樣が浮彫りにあしらつてあつて、その花や葉の蔭からは、首の附根に羽根の生へたシエルビムの顏が五つ覗き出してゐた。唐草模樣は眼まぐるしく種々な弧線を描いて、圓い指針盤をしつかりと圍んでゐた。土臺は三段の長方形な角塊(ブロック)から成つて、重々しい時計全體を少しのあぶなげもなく支へてゐた。

金線を取つた雪白の指針盤は、嚴肅ながら何所までも優美な時計全體の塊體(マツス)の中央に、プルトーに抱きすくめられたプロサーピナのように、抱きすくめられてゐた。ダマスクの匕首を思はせる精鋼の指針は凝然として動かなかつた。然し短針よりも一寸おくれて十二時の少し手前を指してゐる長針を見てゐると、澄み亘つた十二の音が時計の腹に仕掛けてある黄金の鈴から、今にも凜々と鳴り出しさうに思はれた。

稍陰鬱な程重々しい書齋の中は森閑としてゐて、解け出した雪の滴りが屋根を離れて時折り下の[illegible]

りを打つ、その音だけがしめ切つた窓ガラスを透して幽かに聞えて來た。

國家學者なるR教授は窓の側に引寄せた讀書椅子に悠然と身を凭せて、右手に鉛筆を爪さぐりながら、彼れの後繼者たるべき若手のB博士が、彼れの名の下に公けにした國家學史上の論文に對して、C博士が發表した反駁文を讀み耽つてゐた。一年一年度の強くなる老眼鏡越しに、C博士の極めて秩序立つた、急所をえぐるやうな論旨が、首肯させずには置かないぞといふように、ぐん／＼と彼れの腦裡へ逼つて來た。C博士の攻撃點の大部分は、明敏な頭腦は持つてゐるが、まだ何所か彼れの學說を咀嚼し切らないB博士の失敗した論旨の中に見出されてゐた。然しそれだけならいゝのだがと思ふような所もあつた。R教授の學說の根底に逼つて來て、穴でも堀り出したような文意が二三ヶ所眼についた。C博士も近頃歐洲の遊學を終へて歸つて來た、若い有望な學者の一人だつた。R教授の講義にも熱心に出席した一人だつた。C博士が歸朝しない中に、R教授は自分の關係してゐる大學に招聘しようとして、幾度も手紙をやつたのだけれども、C博士は曖昧な返事をしてゐて、日本に歸るや否やすぐある政治上の協會を起し、少數な篤學者を糾合して、政治の學說や實際問題やを熱心に研究し始めた。一般社界はその小さな協會の存在にすら氣付かぬらしかつたが、學者間にはそれが一つの有力な彈正臺として考られる程勢力を持ち始めた。

R教授が當時歐洲の學界を席卷する程な勢力を振つたスタイン教授の學說を取り入れて歸朝した時には、日本の學界は丸で曠野のような處女地だつた。研究機關も教育機關も官學の外には求めようがなかつた。明晰な精細な頭腦がR教授に幸したのは勿論だつたけれども、學術上の既成觀念が一つも日本に

存在してゐなかつた事も、並々ならぬ力となつて彼れの爲めに働いた。R教授の主張は唯一の國家學的名説として、スポンヂによつて水が吸ひ込まれるやうに、日本の學界に受け入れられた。彼れの名は忽ちの中に群小を乘り越して國内から海外まで響き亘つた。

R教授は然しそんな事で慢心してしまうような下らない人間ではなかつた。政治學や法律學に多少の自信を有つ人々が、風雲に乘じて行政立法の要路に立ち、見る間に華々しい社界の表面に浮び出で、新聞の種や噂さの的となつた間に、彼れは何所までも學者として、書齋と研究室との外には姿を現はさなかつた。彼れの篤學は後進の人たちを驚かした。講堂の扉を開いてそこいらを掃除し終るか終らないに、小使の眼に映るものは誰れよりも先づR教授だつた。痩せぎすな脊丈けの高い教授は紫メレンスの包みを小脇に抱へて、耻しげもなく古洋服を一着して、輕く小使の挨拶を受けながら研究室に這入つていつた。這入るや否や彼れは、等身に積み重ねた書物の間に埋まり込んで、講義の外には、一歩も室を出なかつた。暮色が催して來ると、彼れは又研究室から自分の書齋へと傍目もふらず道を急いだ。

その癖彼れは唯の一學究では決してなかつた。彼れに接した人は誰れでも彼れに於て相當に高い圓滿な常識の所有者と、批難の隙を見せない日用道徳の奉誓者を見出したであらう。畏敬と名譽とはひとりでに彼れの周圍に集つた。

そればかりではなかつた。R教授の學説は何時の間にか實際政治施設の根本方針を定める基礎として重んぜられるに至つた。日本の政界に新しい記録を作らうといふ程の政治家は、殆んど一人殘らず彼れの學説の中に自分の政治哲學を酌み取つた。要路の人々はともすると彼れを招いたり、彼れの玄關先き

に馬車を寄せたりした。その爲めばかりにも彼れは住宅を相當に廣く造つておかなければならなかつた。而して彼れの養成した學生たちは、毎年々々官邊の樞要な位置に採用されて、どん／＼榮達の道を開いた。彼れが大學に開講してから四十二年の間に、雲のやうに多い分身によつてその晩年は賑やかにされてゐた。

彼れは讀書椅子に凭つたまゝ、讀みかけてゐる論文を膝の上に置いて、ストーブの火で春のやうに暖められた室内から、雪解けの庭の方にやゝ疲勞した眼をやつた。平凡ながら相當の雅味を持たせて造つた平らな廣い庭園のこゝかしこにむら消えた雪の中を、二人の令孃と一人の中學生とが、何か笑ひ興じながら歩きまはつてゐた。見慣れてゐても見る度毎に美しく眺められるのはその令孃たちだつた。その中の年嵩の方はある若い刑法學者にやる約束が出來てゐたし、十九になる乙孃には降るやうに澤山な候補者が申出られてゐた。二人の生先きには長閑かな春ばかりが開けてゐるやうに見えた。末子の中學生は然し彼れの貧しい收穫だつた。やうやく十七に手の届くばかりなその子は不良少年團の利者といふ評判を新聞にまで唄はれてゐた。姉たちに似て女にしても見たい美貌の中に、變態心理學者にいはせれば先天的犯罪性とでも名けさうな慳貪い鋭い眼がはめこまれてゐた。庭下駄に粘りついた雪をあつかいあぐねて、姉孃がよろけかゝるのを少年は支へてやつてゐたが、すばしこくその袖に手を入れて手紙らしいものを引出した。驚いて取り返へさうとしながら、足許の不確さにやゝともすると中心を失ひかける姉の鼻の先きに、かの少年は白い西洋の封筒を、是れ見よがしにつきつけてはひらめかした。R教授はそれを見ると苦いものを胸の隅に感じて、眼鏡をとゝのへながら眼を讀みかけの論文の方に移した。そ

こにも然し彼れを不快にするものはあつた。

R教授は頁を繰り戻して鉛筆で印をつけて置いたある一節をもう一度讀みなほし始めた。そこは、その當時の內閣が議會の協贊を經ないで專行したある外交上の處置に對して、やかましい世評が勃發したのを、R教授が學理の上から婉曲に內閣を辯護した、その內容を容赦なく批判した一節だつた。そこではB博士は彼れの學說を決して謬つて解釋してゐないばかりか、あまりに明快な表現が却て累をなしてゐた。C博士は極めて徹底した見地から內閣の處置は明らかに立憲制度の故意的蹂躙だと立證して、少しも破綻のない論理を辿つた末に、

「かくの如く內閣は立憲國民が當然保有すべき名譽と權利とを毀損せり。而してR教授の學說の根抵をなす思想は、この不名譽なる內閣の行爲を辯護し盡して更らに餘裕あるを見ず。立憲治下にありてかくの如き學說が如何なる價値を有するかは、識者を待たずして明らかに知るを得べき者なり」

と結論してゐる。R教授の白い眉は互に近づいて來て、深い縱皺を鼻の上にたゝんだ。彼れの脂が釘せられない中に、彼れの生命の精髓といつていゝ學說が、砂の上の塔のように、脆くも傾きかけるのを見るのはつらかつた。のみならず、彼れはつらいといふ心持ちのもう一つ後ろに更らにつらいものを持つてゐるのだ。それが彼れの良心の痛い棘となつて、かういふ場合に遭ふ毎に彼れの生活を空廓なものに見せようとした。それは微細な心の働きから引起された恐るべき結果の一つだつた。彼れが若冠に擢んでられて歐洲に留學してゐた時、研究した政治學說の中で、原則として考へる以上どうしても最も眞理に近い立論として首肯しなければならぬ一つの學說があつた。彼れは學徒の興味からして熱心に閲讀した

れを研究した。研究すればする程その結論と内容とには人間内部の深い要求と合理性とがたゝみ込まれてゐるのを痛感した。彼れはそれを十分理解するだけの聰明さを持つてゐた。彼れの心は非常にそれに牽きつけられた。同時に彼れの聰明さはその學說が、本國の有する長い傳統と、その當時の政治的勢力の意向とには全然背馳するものでない事を知つた。その學說の傳播は本國の歷史そのもの丶根本的な改造を待つて甫めて行はるべき者である事を知つた。そこに學者としての恐るべき試練が來た。而して遂に彼れの心に何千年かに亘つて習性となるまで深く植へ込まれた傳統的精神が最後の勝利を占めた。彼れは思つた。學說は畢竟歷史の所產でなければならぬ。歷史を超越しては一つの考察だに可能であり得ない。歷史を挨撫して人間本來の要求を充足する思想があるなどと考へるのは衒學者の空想に過ぎない。空想は甘い。然し實質のない甘さは要するに詩人の食物だ。而して彼れは本國の要求すると思はしい學說を大成する爲めに、彼れの人としての興味を拋つて、スタイン教授の門下に參した。彼れは今過去を振返つて見てもその間の消息には殆んど何等學術的良心の譴責を感ずべきものを見出さないと思つた。然し彼れは果して如上の動機ばかりから彼れの學說なるものを選んではゐなかつたか。彼れにはそんな事は無いのかも知れない。が、一般にはよくある事だ。自分の社界的地位の安全の爲めに、眼前の社界的批判の前に巨人の如く立つ事が出來たい爲めに、自分の主張が手短かに眼のあたりに追隨者と嘆美者とを見出したい爲めに、簡單にいへば何等かの形に於ける現世の榮譽榮華の爲めに、人生觀なり學說なりを決めるのはよくある事だ。少くとも極めてあり得る事だ。R教授の心の中にも實をいふとかういふ反省は時々起つて來た。彼れは極めて冷靜に物の眞相を考察し得ると自信してゐただけに、この

問題に對しても決して容捨はしない積りだつた。然しどう考へても自分がそれ程までにさもしい人間だとは思へなかつた。彼れは學者である以上學問の尊嚴を第一に考へてゐねばならぬ筈だつた。筈だつた。そこに微細な心の働きがあつた。歴史的の要求か、一身上の要求か。それは一方の要求を滿せばひとりでに他の要求も滿たされるといふ都合のいゝ、而して都合の惡い場合であるだけに、彼れの冷靜な錐のような判斷力も、二つの要求の間に截然たる區別をつけかねた。それに何んの不思議があらう、彼れは心理學者ではないのだから。彼れはその點をそのまゝそつとして置く事にした。「筈だ」といふ言葉でその解決は十分だと思つた。

然し老境といふものはせつかちなものだつた。死の來る前に決めておく事はちやんと決めておかないちや取り返しがつかんといふ風に、段々寢不足になつて行くR教授の頭をこづき廻した。然し彼れはそんなにうろたへはしなかつた。彼れは自分の學説を恥ぢもせず悔ゐもせず、一度でも變説しようなどゝは思はなかつた。それは自分の學説によつて彼れの作り上げた堅固な位置が、ぐわら〳〵と眼の前でくづれるのを見るのがつらくて、變説を思ひ絶つたのでは斷然ないと彼れは信ずるだけの理由を持つてゐた。何故なら國家と、彼れの學説と、彼れとは異體同心だからである。彼れは固より自分の學説の弱點の那邊にあるかは自分で一番よく知つてゐた。奇麗さつぱりと弱點のない學説に乘りかへる事の望ましくない事でないのは固より知つてゐた。同時に、變説によつて、彼れの一生をかけて築き上げて來た生活——それは手つ取り早くいふと生命といひかへてもいゝ位のものだつた——が、それを築き直すだけの氣力を持つた青年期といふもの〻永久に還つて來ない今、崩れてしまふのを恐れるよりも、彼れは

極力擁護しなければならない、彼れの良心の全部が彼れに與へる絶對命令として擁護しなければならない現在の國家の安全を危くし、發達を阻止するのをどうしよう。彼れはいづれの方面から考へても彼れの學說を立て通さなければならないと思つた。元來非常に善良な、陰日向のない彼れの心の中にもC博士を憎み呪ふような氣分がきざゝないではゐられなくなつた。學說の爲めには若くて氣の毒だけれどもC博士を起ち上がれないだけに懲さなければならないと思つた。

R教授はC博士の論文を膝の上に置いて、左手を延ばして壁際の呼鈴を押さうとした。その瞬間に彼れは思はずあいつと聲を立てゝ顏をしかめながら、右手で左の肱を押へてしまつた。この數日來左手に移つた移動性神經痛の爲めに、左の肱を動かすと痛疼を感ずるのをはたと忘れてゐたのだ。博士は已むを得ずそつと立ち立上つて右手で呼鈴を押した。長く座つてゐると彼れの體は歩行にも不自由を感じた。何んといつても下り阪になつたと彼れは思つた。もとならば何んでもなく蹈り越へてしまつた下らない身體の故障を、彼れは妙に氣にせずにゐられなくなつてゐた。何、死ぬ時が來れば死ぬまでだと思つてゐた彼れは、自分ながらをかしい程養生に注意しだして、無病とか長壽とかいふ手段ならば、何事によらず試みるようになつた。

彼れは窓からもう一度庭先きを覗いて見た。中學生の末子だけがたつた一人、雲の間から陽の光の射し出した庭の片隅の陶榻に腰をかけて、下らない書物らしいものを讀み耽つてゐた。今日も制服を着てゐる癖に學校は缺席したらしい。さう思ふと彼れはむら氣で我が儘な身分の妻の事を苦々しく考へた。甘へるまゝに有耶無耶に休ませたに違いない。何事も筋目をたてゝ置きたい彼れの心にはぎり〳〵と痞

が立つた。

ノックをして戸が開くと教授夫人が這入つて來た。眞黒に髪を染めて、袖口からは赤い襦袢の袖が覗いてゐた。

「まあ陰氣だこと。お呼びになりまして」

といつて夫人はそこいらの窓のカアテンを開けようとした。R教授は苦々しい顔をしながら落付いた言葉でいつた。

「そのまゝにしておいておくれ。書齋は私の思ふようにするのだから。Bに電話をかけて貰へまいか、すぐ來るようにさういつて。それから醫者さんの來てくれないのは如何したんだらう」

夫人はかしこまりましたといひながら、すぐ立つて行きもしないで、跡でもいゝような用事をならべ立てた。その中には然し彼れが注意して聞かねばならぬような事もあつた。同僚の或る法學博士の病氣が大分惡いといふ事だの、自分の故郷にある墓場の墓守を頼んで、月々仕送りをしてその生活を助けてゐる遠縁の老女から、息子の就職口を催促して來た事だの、乙娘の縁談だの、その日の晩に催される日獨協會の晩餐會に着て行く服裝の事だの、内務大臣が午後に訪問に來るといふ事だの。彼れは書齋の中に市中の埃が飛び込んだようにうるさく思つた。

埃といふ聯想からR博士はふとマリー、アントワネットの置時計の方を見た。書齋の中はきちんと掃除が行きとゞいてゐて、時計も美しく光つてゐた。一年程前からR教授はその時計に對して奇怪な妄想を抱くようになつた。それはその時計の針がいつか昔の通りに動き出すに違いないといふ想像だつた。

實際時計は今にも動き出して、凜々と鳴る金の鈴に、昔の榮華を語り出しさうに思はれた。始終それを見詰め慣れた彼れにはます〳〵さう思はれた。時といふものを刻み出すべき時計が、漠然として止つてゐるのを見るのは恐ろしくも神秘的なものだつた。彼れは時々その時計から突然死といふものをいつたり考へさせられて思はずぎよつとする事があつた。眼の前で名譽も、學説も、家庭も、家庭の中の幸不幸も、わく〳〵した氣持ちの旋風に吹きまくられて消え失せてしまひ、一歩々々死に近づく彼れの姿だけが慘めにも想像された。それは彼れの全身を氷らせるやうな物凄さだつた。それは老境に進んで來世の安心のない自意識の强い人ばかりが、誰れにも語り得ないで味はなければならない物凄さだつた。

そんな忌はしい經驗がR教授に時計の動くのをます〳〵願はせるやうになつた。何かいゝ事が起る前徵としてその時計は訖度動き出すに相違ないと思ふやうになつた。

「早く電話を賴みますよ」

何もかも忘れたやうにぢつと時計を見詰めてゐたR教授はふと夫人の方に振りかへつてから云つた。夫人は始めて座を立つて書齋を出て行つた。

「それから太郎はどうしたといふんです。休むなら休むでいゝが部屋にいつて眞面目な書物でも讀むやうにいひつけなさい」

と彼れは出て行く夫人を追いかけていつた。夫人はもう腹を立てたらしく一言の返事もしなかつた。

太郎と名を付けたのも、もつと男の子を設けたい爲めだつた。R教授の裕かな生活では二三人の男の子は少くともあつて欲しかつた。所が一人よりない男の子は、彼れが死んで後の成行きを彼れに苦慮させるために生れたやうなものだつた。

夫人が太郎を家の中に呼びこむ様子はなかつた。彼れはもう一度座を立つて自分で太郎にいつて聞かせようかと思つた。然し座を立つのが第一面倒だつた。窓を明けたら寒さうだつた。太郎の叫び返すような眼を見なければならないと思ふと、姑息な諦めが年老いた父らしく彼れの心に起つた。

彼れは又C博士の論文を取上げて讀み始めた。而してC博士の文の中にせめては論理上の缺點でも見付けてやらうとした。彼れの質問に對して若いB博士がどれ程の技倆を示すだらうといふ事も一種の心配と興味とを以て考へられた。

彼れは然し結局C博士の反駁に同感せずにはゐられなくなつて來た。彼れは自分の思考力が何んとなく衰へて行つてゐるのを感じた。何時とも知れず段々失はれた氣力が二度と彼れには歸らない事を彼れは知つた。彼れは打ちくだかれたように眼を閉ぢて心を落付けようとした。

解けた雪が水溜をうつ音は依然として間遠に窓の外で聞えてゐた。それ程あたりは靜かだつた。

突然午砲が霽れの空に響き亘つて、賑やかな汽笛の音が遠くの工場から合唱のように傳はつて來た。隣近所でもボン〳〵時計の十二時をうつ音が勇ましく聞えた。

R教授はもう一度振り向いてマリー、アントワネツトの置時計を見た。金線を取つた雪白の指針盤は重々しいながら、何所までも優美な時計全體の塊體(マツス)の中央に、プルトーに抱きすくめられたプロサーピナのように、抱きすくめられてゐた。ダマスクの匕首を思はせる精鋼の指針は凝然とし動かなかつた。短針よりも一寸おくれて十二時の少し手前を指してゐる長針を見てゐると、澄み亘つた十二の音が、時計の腹に仕掛けてある黄金の鈴から、今にも凛々と鳴り出しさうに思はれた。

然しダマスクの匕首を思はせる精鋼の指針は凝然として動かなかつた。（一九一七、一二、一二）

地は饒なり

中條百合子

（一）

或日　ユーラスはいつもの通り樂しさうな足取りで、森から森へ、山から川へと、薄綠色の外袍を輕くなびかせながら、さまよつて居ました。銀色のサンダルを履き、愛嬌のある美くしい卷毛に、月桂樹の葉飾りをつけた彼が、如何にも長閑な樣子で現はれると、行く先々のニムフ達は、どんな事があつても見逃すことはありません。おだやかな心持のユーラスは四人の兄弟中の誰よりも、皆に大切にされ、いとほしがられて居たのです。

陽氣な、疲れることなどをまるで知らないニムフの踊りの輪から、漸々ぬけた彼は、涼しさを求めて、ズーッと橄欖の茂り合つた丘を下り、野を越へて、一つの谿間に入りました。其處は眞個に涼しくて、靜かでした。岩や石の間には、夢のやうな苔や蘭の花が咲き滿ちて、糸の

やうに流れて行く水からは、すが〳〵しい香りが漂ひ、ゆら〳〵と揺れる水草の根元を、針のやうに光る小魚が、嬉しさうに踊つて行きます。

海にある通りの珊瑚が、碧い水底に立派な宮殿を作り、其の真中に、真珠のやうな澤山の泡に守られた、小さな〳〵人魚が、紫色の髪をさや〳〵と座つて居ます。

何と云ふ綺麗なのでせう。ユーラスは、すつかり喫驚して仕舞ひました。今まで、此那様子を見た事のなかつた彼は、まるで幻を見るやうな心持で、フラ〳〵と水上の方へと歩いて行きました。

行けば行くほど廣くなる谿は、いつの間にか、白楊や樫や、糸杉などがまるで、満潮時の大海のやうに繁つて、其の高浪の飛沫のやうに真白な巴旦杏の花が咲きこぼれて居る盆地になりました。

そして、其等の樹々の奥に、チユピタアでもきつと御存じないに違ひない程、美くしい者を見つけた時、ユーラスは、もう息もつけないやうな心持になりました。

天鵞絨のやうに生えた青草の上に、蛋白石の臺を置いて、腰をかけた、一人の乙女を圍んで、薔薇や鬱金香の花が楽しさうにもたれ合ひ、小ざかしげな鹿や、鳩や金絲雀が、静かに待つて居ます。

そして、臺の左右には、まるで掌に乗れさうな體のお爺さんが二人、真赤な地に金糸で刺繍をした着物を着、手には水蓮の花を持つて立つて居ます。あたりには、龍涎香を千萬箱も開けたや

うな薫香に満ち、瑪瑙や猫眼石に敷きつめられた川原には、白銀の華が生え茂つて、岩に踊つた水が、五色のしぶきをあげるとき、其等の華は、まあ何と云ふ響を立てることでせう。胡蝶の翅を飾る、あの美くしい粉ばかりを綴つたやうに、日の光り工合でどんな色にでも見える衣を被つて、渦巻く髪に眞赤なてんとう虫を止らせて居る乙女は、やがてユーラスの見た事もないライアをとりあげました。

そして、七匹の青蜘蛛が張り渡して居る絃を掻き鳴らし始めると、二人のお爺さんは、水蓮の花を静かに左や右に搖り、一杯に咲きこぼれて居る花々の蕋からは、一人づゝの類もなく可愛らしい花の精が舞ひながら現はれて來ました。

目に見えない毬毛(わたげ)を金色に輝やかせながら、喉を張つて歌ふ乙女の歌について、森中の木々の葉と草どもが、小波のやうに繰返しをつけて行く。花は舞ふ。草木は歌ふ。勢づいた流水の水は、旋律につれて躍り上り跳ね上つて、絶間ない霧で、天と地との間を七色に包む。

ありとあらゆるものが、魔法のやうな美くしい裡に、乙女の聲は體の顫へる力と魅力をもつて澄み上つて行つたのです。

ユーラスは、半分夢中のやうになりました。そして、いきなり其の踊りの眞中を見がけて踏み出すと、今まで、なごやかに低唱して居た樫の木精が、一どきに

ギワーック、ギワーックカットンロー、カットンローローワラーラー……と歌ひ出し、彼方の霧の底から、微かな

ハッハッハッ！　ホッホッホッ！　と云ふ聲が高まつて來ると一緒に、森中の木と云ふ木の葉が、波のやうに白い葉裏を翻しながら、彼に向つて泡立つて來ました。

ギワーックギワーックカットンローカットンロー……

ハッハッハッ　ホッホッホッ

ユーラスは、自分が神様だつたのをすつかり忘れて仕舞つて大いそぎで逃げ出しました。そして、又次の日にいくら谿間に違ひない處をさがして居ても、あの綺麗な川さへ見つけることが出來ませんでした……。

殆どあらゆる種類の傳説と童話とが酵母となつて、彼女の生活の何處の隅々にまでも、渾然と漲り渡つて居た、果もない夢幻的空想は、今よう〱其の氣まぐれな精力と、奇怪な光彩とを失ひ、小さい寶杖を持ち寶冠を戴いた王様や女王様、箒に乗つて月に飛ぶ鼻まがりの魔法使ひ等は、皆足音も立てずに何處かの國へ行つて仕舞つた。

そして、面白いお噺の此上なく上手な話し手としての名譽と、矜恃とを失つた彼女は、混沌とした頭に、何かの不調和を漠然と感じる十二の子供として、夢と現實の複雑な錯綜の裡に遺されたのである。

一面紫色にかすみ渡る黎明の薄光が、いつか見えない端し〱から明るんで、地は地の色を草は草自身の色をとり戻すやうに、彼女の周圍のあらゆる事物は、完く「いつの間にか」彼等自身の色と形とを

持つて、ありのまゝ彼女の前に現はれるやうになつて來た。

今までは、遙か〱高い處に光つて居るほどに思はれ大人の世界は、自分等が見まいとしても見ずには居られないほど、ついじき其處にある。

只、仔猫がぢやれるやうに遊び合つて居た友達の中にも何か先には氣の付かなかつた種々なことが、珍らしい彼等の姿をチラ〱と見え隠れさせる。

仕合はせに可愛がられ、正しさを奬勵され、綺麗な物語りの中に育つて、躊躇とか不安とか云ふものをまるで知らなかつた彼女は、自分の前へ限りもなく擴げられる、種々雜多な色と、形と音との世界に對して、まるで勇ましい探險者のやうに、飽くことのない興味と熱中とをもつて、突き進んで行つたのである。

詳しく説明される程の豐富な内容は、勿論持つて居なかつたにしろ、さう考へること自身が、もう既に無上の歡喜であり、憧憬である「立派な大人」と云ふ豫想に鼓舞されながら、彼女は自分の周りに起つて來る、どんな些細な事物にでも注意を向けずには置かなかつた。そして、其等のことは一つ〱皆丁寧に、彼女の心の裡で、「善い事、正しい事」と云ふ言葉で總括されて居る一つの道德的標準と照らし合はされ、引きくらべられて、各自の價値をつけられる。

其の價値は、即ち彼女の思つて居る「立派な人」の一分子として取り入れられるべきものであるか拒絶されるべきものであるかと云ふことなのであつた。

ところが、段々と立つうちに、彼女は全く驚き、混亂せずには居られない種々なことに出會ひ始めた。

赤と云ふ色は、其が赤である限り、誰に見られても、何處に置かれても、赤いにきまつて居ると思つて居た者にとつて、完く同じ其の赤が、或處では、紫だと云はれ黒だと云はれ、もつと甚しい時には、赤に違ひない赤を見、見せながら、

此は、青ですね

え〻、貴方が仰云るんだから青でせう青に違ひありません、

と云ふのを知つたことは、どれ程の意外さであり、又不快であつたらう。

總ての事を信頼し、尊重しようとして期待し、心を打ち開いて居た彼女は、全く思ひもかけなかつた厭なもの、惡いとほか思へないことを、事々物々の裏に、見出さなければならなかつたのである。

そして、尚々彼女の心を亂したことには、どんなにあ〻惡いと思ふやうなことも、皆決して、むき出しの惡いま〻では遣つて來ないことであつた。

善ささうな、聲や、愛嬌のある微笑を湛へながら、其等は優しいしとやかな姿を裝ふて來る。

彼女は自分の信じて居る人々――その人達はいつも善く正しいものだと許り思つて居た人が――言葉とはまるで反對のことを平氣でして居るのを見た。

可哀さうがられるべきだと云はれつ〻、氣の毒な人が堪らないやうな辱しめを受けなければならないのを知つた。

其等の事に對して、彼女は如何程の「感じ」を持つただらう。明かに矛盾を認める心、真正なことの裏切られる苦痛。適當な言葉を知らず、整つた順序に並べることの出來る程、複雜な頭腦を持つて居な

かつた彼女は、何も彼にも只感じる丈なのである。

あゝ、其那事をするものではない、彼女は默つて居られないやうな、感じに打たれる。そして、顔があつくなり、息の彈んで來るのを感じる。けれども、彼女は貴方の何處は、如何ら惡いから御止めなさいと云ふことは出來ない。自分の心が唸りを立てるほど漲つて來る感じ、强烈な、盲目的な感じを、靜かに分解し、解剖して、感じの起された原を探つたり、批評したりすることは到底出來ないのである。

さう云ふことに出會ふごとに彼女はどうしようにも仕方のない情けなさと、腹立たしさに心を掻き捲られた。丁度、小さい子供が天氣の落付かないやうな夕方などには、よく理由の分らない焦躁と不安とに迫られて急に泣き出すことがある通りに、抑へどころのない不愉快、陰氣さに苦しめられる彼女は、泣き出さないまでも、慘めな、暗い心持にならずには居られなかつた。非常な美望を以て描いて居た大人の世界の美くしい、立派な理想は、皆くだかれて、恐ろしい厭はしい事物に滿ちた「うき世」が彼女の前に現はれたのであつた。

今まで何も知らずに打とけて、思ふまゝを話し合つて居た仲間にも、彼女は「氣をつけなければならない」ことを見出し、崇拜しようとした人々は、その價値を減じて仕舞つた。

そして、封じ込められた多くの「感じ」ばかりが次第々々に種類をまし、數をまし、互に縺れ合ひ、絡まり合つてまるで手のつけられない混亂の裡に、彼女の活氣や、無邪氣さを、いつともなく毒して行つたのである。

彼女は、非常な失望に襲はれた。

自分の周圍には一人の仲よしになるべき友達も居ず、一人の尊敬すべき人も居ないやうに思はれる。

子供らしい、理性の親切な統御を失つた一徹さで、意地に考へ込む彼女は、仕舞ひには生きて居たくなくなるほどの物足りなさと、寂莫とを感じずには居られなかつた。

太陽の照るうちは、それでも何かにまぎらされて居る彼女は、夜、特に月の大層美しいやうな晩には、其の水のやうな光りの流れる部屋に坐りながら、何と云ふ慕はしさで、つい此間まで續いて居た「あの頃」を思ひ出したことであらう。

多勢の友達を圍りに坐らせて、キラ〳〵と光るやうに綺麗な面白い話を、糸を繰り出すやうに後から後からと話して居た時の彼那にも樂しく仕合はせだつた自分。

美くしい槍や、花床や、珠飾りを見ながら、心の中にいつの間にか滑り込んで來る仙女や、木魂や、蟲達を相手に、果もない空想に耽つて居た、あの時の夢のやうな心持。

自分が物を覺えるやうになつた日から續いて居た幻の王國の領地で、或時は杉の古木となり、或時は小川となり、目に見えぬ綾の虹絲で、露にきせる寛衣を織る自由さへ持つて居た自分は、今斯うやつて、悲しく辛い思ひを獨りで我慢して坐つて居る。

自分の總ての幸福と歡びは、皆もう二度と來ない彼の時の思ひ出の中に眠つて居るのだらう。

彼女は彼の時と、今との此那にも違ふ心持の間に、何の連絡も見出せなかつた。

何故自分は此那にも、辛い思ひをしなければならないのだらう、

大人も、友達も、皆呑氣に笑ひ、喋り、追ひかけ廻して遊んで居るのに、たつた獨りぼつちの自分は、

何故此那に淋しく此那にも悲しい目に會はなければならないのだらう….。

仕合はせや、樂しさは、皆、皆もうあの女王樣や王樣と一緒に、捕へられない彼方へ過ぎてしまつた。

彼の時は、すぎてしまつた….。もう仕方がない。感傷的な心持の頂上まで來る彼女は、魂のしんから泣吃逆りながら、眞面目につきつめた心で死を思ふのである。

强情や反抗は、すつかり憂欝に形をかへ、意地も張りも忘れた彼女は、轉換したくても、する方法を知らない心の不調和を感じる可哀さうな子供として、自分の死を想つたのである。

作夜眠つたまゝ、もう永久に口をきかず、眼も見開かない自分が、冷たい〳〵臥床の中に見出されるだらう

彼女は、彼女の知つて居る限りの美くしい言葉で考へる。

兩親の驚きと、歎き。自分に不當な苦痛や罵詈を與へた者達は、最後まで正しかつた者の死屍に對して、如何んな悔恨に擊たれながら、頭を垂れるだらう、白い衣を着せられ、綺麗な花で飾つた柩に納められた自分が、最後の愛情によつて丁寧に葬られる樣子が、まざ〳〵と目前に浮み上つて來て、涙は一層激しくこぼれる。

堪らなく悲しい。

けれども、其時の悲しみ、涙は、もう生きて居るのが厭さに落す涙でもなければ、悲歎でもない。不幸な若死をした自分を悼む涙であり、死なれた周圍に同情する悲しみである。

あれほど魂の安息所のやうにも、麗はしい樂園のやうにも思はれた魅力は跡かたもなく消えて、今、

死は明かに拒絶され、追放される。

死ぬのはこわい、と云ふ恐怖が目覺めて、大いそぎで涙を拭く彼女は、激情の緩和された後の靜かな平穏さと、まだ何處にか殘つて居る苦しくない程度の憂鬱に浸つて、優雅な蒼白い光りに包まれながら、無限の韻律に顫へる萬物の神秘に、過ぎ去つた夢の影を追ふのであつた。

(二)

遠い〳〵昔の幾百年かの間、我々の祖先の人々が思つて居た通りに、あらゆる感情は、只胸によつてのみ感受され、發動されるものだと假定すれば、此の時代の彼女の全生活は、其の感情の宮殿の圈外には、一歩も踏み出さない範圍に於て進行して居たのである。

「考へること」と、「感じること」とは、全く混同して、彼女自身は、一生懸命に頭で考へたと思つて居ることも、よく調べて見れば「只さうだと胸が感じた」ことゝ云ふに過ぎなかつた。

其故、彼の人のする事は惡い、とか善いとの云ふのは、其人の行爲が最初、彼女に與へた感動の種類で定められるのである。

一度、あゝあの人は彼那下等な事をする！　と思つたら其の人はもう彼女から拒まれて仕舞ふ。

そして、其人の次の行爲がどんなに美くしくても、優しくても、一切振向かれない心持を持つて居た彼女は從つて、自分の交際する範圍を狹めて行くのは必然である。

切角、此人こそ自分の友達だと思つて居た人々とも、どうしても一致出來ない岐れ目に來ては、左樣ならを云はなければならない淋しさ。其の淋しさに心を打たれる弱い自分に反抗する心持とが、他の種

々な不調和と一緒になつて、彼女を次第に不自然な厭人的傾向に導いて行つた。

そして、人と話し、人と笑ひして居る間に、いつともなく緩められて行く種々の感情、特に空想や、漠然とした哀愁、憤懣などは、皆彼女の内へ〳〵とめり込んで來、その如何うにかならずに居られない勢が、彼女の現在の生活からは最も遠い、未知の世界である「死」の領内へ向つて、溢れ出すのであつた。

育たうとする力、延びようとする力に充滿して居る彼女の總ての生理狀態は、自然的な死と云ふ現象からは、かなりの隔りを持つて居る。

今に差し迫つた事ではないと云ふ、潜在的な餘裕、安心と、彼女の空想によつて神秘化され、何かしら魅惑的な色彩をほどこされて居る死其物の概念とが、どんな幸福な若者の心をも、一度は必ず訪れるに違ひない感傷的な憂愁の力をかりて、驚くべき劇を描き出すのである。

其の幻想の世界に於て、彼女はいつの間にかきつと二人になつて居る。

確かに呼吸が止まり冷たい、堅い骸となつて横はつて居る自分の前では、もう一人の此も自分には違ひない自分が、厭な辛い事を健氣にも最後まで忍び、雄々しい生涯を終つた自らを、感歎し、賞揚し追慕して、滂然と涙を流して居る……。

此那、不合理な事を、彼女自身は何の矛盾も感ぜずに體ごと、其の涙の中に沈潜して行くことが出來たのである。

實に屢々、此と大差ない奇怪な感情の陶醉に貫かれながら、何處にも統一のない彼女の生活は、段々彼女の年と、境遇とに比べて、有り得べからざる陰氣さの中に、深入りして行つた。

下手な、曲つたやうな字で、心が唸りを立てるほど漲つて來る當もない憤激や、自分にも解らない悲歎を書きつけながら、彼女は自分が世界中に「唯一人悩める者」のやうな心持がして居たのである。

斯樣に、いつの間にか彼女の心の何處かで育つて居た、理智と感情との權衡を失した力の爭鬪は、楚多の朦朧とした煩悶を産んで、小學時代の最後の一年間に、子供らしい無邪氣さや、活氣や、勇猛心は、皆彼女の何處からも消滅して仕舞つたやうに見えて居た。

けれども有難い事には、まだ倦怠を知らぬ活き〳〵とした生理的活動が、彼の彈力に滿ちた發育力の裡に、其等の鋭い感情の根元だけを辛うじて暖く大切に保存して居てくれた。

何か一つの轉機が、彼女の上に新らしい刺戟と感動とを齎しさへすれば、一旦は霜枯れた其等の華も、目覺ましい色をもつて咲き滿ちる可能性が、一つ〳〵の細胞の奥に伏籠つて居たのである。

そして、此の非常に要求されて居た一轉機として、彼女の女學校入學が、殆ど豫想外の効力を持つたのであつた。

どんなに陰氣になつて居ても、彼女の年の持つ單純さが、新らしく彼女を取り繞つた周圍に對して、驚くべき好奇心、探究心を誘ひ出して、こと〳〵に滿たされ、こと〳〵に適度な緊張となる新規な習慣や規則が、實に無量の鼓舞と慰安とを與へたのである。

何だか漫然とした不安や焦躁を感じて、泣きむづかつて居た子供を、一歩門の外へ連れ出してやれば、新らしい、珍らしい刺戟に今まで胸に滿ちて居た其等の感情を皆一掃されて仕舞ふ。

勿論、此よりは深く、複雑な苦痛であつたには違ひないが、其の苦痛を忘れさせるには充分な興味

が、彼女にも、今與へられたのである。

彼女は、始めてホッ！　とした。

そして、滿足の溜息をつき、何だかよく見えないやうな眼を兩手でこすりながら、物珍らしい周圍を見廻した。

美しい校舍や、森や。しやんとした友達や、面白い學課や……。

古ぼけて歪み、暗くて塵だらけだつた建物の中で、餓え渇いて、ガツ〳〵と齒をならして居たあらゆる感情、全くあらゆる感情とほか云ひようのない種々樣々な感情の渇仰が、皆一どきに滿たされ、潤されるのを感じたのであつた。

どれを如何うと說明出來ない程、生活の豐富と、活動の光榮に打たれた。

隅から隅までたんのうした彼女は、今までの周圍と比較すれば、問題にもならない程の趣味性の差異が齎らす何處とも云はれない大らかな雰圍氣の裡に、ホコッと眼を瞑り、頭を垂れて浸つて行つたのである。

不自然な重壓を漸々とりのけられた彼女の無邪氣さ、絕對的な從順さが、天にも舞ひ昇りさうな意氣とともに、躍り上り、跳ね上りながら奔流し始めたのである。

一日中で一番長い放課時間に、彼女はよく、校舍の後を抱へるやうにしてこんもりと茂り、いつも靑々として居る小高い森へ入つて行つた。

其處から少し低くなつて居る彼方を見渡すと、白い小砂利を敷いた細道を越えた向ふには、馬ごやし

の厚い叢に縁取りされた數列の花床と、手入れの行き屆いた果樹がある。

濕りけのぬけない煉瓦が、柔らかな赤茶色に光つて見える建物の傍に、花をつけた蜜柑が芳しい影をなげ、パンジー、アネモネ、ヒヤシンスと、美くしい色と色とを反映させながら咲き續いた花壇の果は、ズーッと開いて、折々こぼれるやうな笑聲につれて、まあるい蹴鞠の音を、彼方の空へ反響させる廣場が、心持の惡くないほどの薄さで周圍の空氣を濁らせながら、其の一端を見せて居る。

暖く晴れ渡つた空を劃して、くつきりと見える長い校舍の屋根、其上に懸つて微睡ろんで居るやうな雲の、柔かい煙りのやうな輪廓。

地殼から立ちのぼるあらゆる騷音や樂音、芳香と穢臭とは、皆其の雲と空との間にほんのりと立ちこめて、コロ〳〵コロ〳〵と樂しさうにころがりながら、春の太陽の圍りを運行する自分達の住家を、いつも包んで居るやうに思はれる。

二本の檞の古木の間に坐りながら、大氣とともに滿ち渡るなごやかな、ほつこりとした安らかさを、深く〳〵呼吸する彼女は、髮の毛の先々にまで命の有難さを感じずには居られなかつた。

眞個に此程の仕合はせ……。

彼女は、まるで暗闇の中で路を見失つたやうに、がつかりし、希望がなくなつて居た先頃の自分を想ひ出すと、我ながら可哀さうになつて、つい涙をこぼしながらも、あらゆる歡びと希望がより一層よい形で蘇返つて來た今の嬉しさに泣く下から微笑を押へることが出來なかつたのである。

完く、彼女は復活した。

確かに順調ではなかつた體の工合も、すつかりよくなつて、毎晩、恐ろしい夢に魘されることもなく、青かつた顏にもいゝ色に血が潮して來た。

そして、自分でも喫驚するほど力の增した彼女は、健康狀態が非常にいゝ時、誰でもが感じる通り、あのピン〳〵とひとりでに手足が動くやうな活氣に滿ちながら、踊るやうに學校に行き、行つた時と同じ元氣で歸つて來る。

疲れだの、倦怠だのと云ふものは、此時の彼女の指一本に觸れることも出來なかつたのである。

よく眠り、よく動きながら、彼女は一生懸命に勉强した。

つい此間までは、まるで解りさうもなかつた、大變難かしさうだと思つて居た本も、讀まうとさへすれば、必ず或程度までは理解される。

まるで、彼女は腦髓がいゝスポンジのやうな心持がせずには居られなかつた。澤山讀み、澤山考へて居る時の、あの頭が快く一杯になつて、額の邊が堅く張つて來る心持。心には何かが確かに遺されたと云ふ自覺。

一方で理性がそろ〳〵と、必要な訓練をほどこされて居るうちに、彼女の空想は次第〳〵に現實を基礎とした上に、又彼特有の王國を築いた。

非常に鋭敏になつた聽覺と視覺とが、嘗ては童話的興味の枯れることない源泉となつて居た自然現象の全部の裡に、現實を基礎とした種々の神秘を見出し、自分自身を三人稱で考へる癖が增して來た。

「彼女は今、太い毛絲針のやうに光る、樅の葉を見ながら、或事を考へて居る……。」

楓の葉が美くしく光るのを見ながら、今考へて居る自分を、又考へて居る自分がある。

「此那に澤山の葉を皆間違ひなく、其の枝々につけ、斯うやつて只こぼれた姿粒から、此那に生き〳〵とした、美しい立派な芽を出させるものは、何だらう、彼女は、白いなよやかな根元から、短かく立つ陽炎を眺めながら考へて居る。」

考への進歩につれて、彼女は自分の頭の中へ書いて行く。

けれども、此の第二の自分は、先のやうに眞個の自分が泣けば、一緒に聲を合はせて泣く自分の影ではない。いつも、書いて行くものである。自分が泣いて居る時でも、憤つて居る時でも、「彼女は、今理由の分らない悲しみ、悲しみだが何だか分らない一つの心持に泣いて居る……」と書いて行くものである。

此が、彼女に漠然と理想的人格の價値を感じさせ、欣慕と到達の願望を起させ、又信仰の胚種を、其の核の中で微かに膨らせて行つた。

其は何だつたのだらう。後から考へてもよく分らなかつたが、多分、微かに目醒めた理性が、より多くの空想と、感情とに包まれて、全然空想だとは云へず、全然理性だとは云へない、此の一の現れとなつたのであつたらう。

斯様にして、自由にされ、廣い世間と僅かづゝ觸れる機會の多くなるにつれて、可なり急速に彼女の個性が形作られて行つた。――と云ふより、個性をやがて作る種々雜多な片鱗が、彼方から、此方から或は自然に來、或は拾ひ集められ始めたのだと云ふ方が、適當であらう。兎に角、彼女ははつきり「我」

と云ふものについて考へるやうになつて來た。

私は如何んな人にならなければならないだらう、そして、如何んな人が、眞個に立派な人なのだらう

おかあさま知つて被居つしやるか！　先生は知つて被居つしやるか！

彼女は、斯う云ふ意味の言葉を、書いた。そして、其を机の上に擴げて、今まで決して開かなかつた筈のない、「偉い人」を考へ、探し始めたのであつた。

偉い人、彼女は度々其響を聞いたことはある。偉い人におなりなさい。立派な人にならなければいけません。

けれども、今、斯うやつて一體どう云ふのかと自分の頭に訊いて見ると、腦髓は間誤付きながら、矢張り小さい聲で、

一體どう云ふのだか……

とつぶやき返す許りである。

勿論彼女は、正行の母、橘姫などが感歎すべき婦人として、小學校に居た時から屢々話されたのは覺えて居、知つて居る。

けれども、彼女は自分と其の人々との時代を隔てゝ居る「時」をとりのけにして考へることは出來なかつた。

彼の時代、彼の時との間に幾百年の過ぎて居る今、何んでも變化し、進んで居る今と、今から先きのもつと〳〵違ふ筈の幾十年かの間に、「あの時のあの事件」が再び起つて、自分を其と同樣の境遇に置く

だらうことは、考へても見られなかつた。

其故、彼女の理論は、生涯の總ての境遇の變化にも、時代の進行にも何動かされずに、自分の一生を貫くべき、「眞個の人格の力」が見出されなければならなかつた。自分が今も持たねばならず、學校を出てからも、死ぬ時でも持つて居なければならない力が、要求されたのである。

一生の基となるもの、自分を眞個に偉くするもの、其は何だらう、

いくら考へても、答は矢張り同じ、其は何だらうである。

彼女は、又今までよりもつと恐ろしい、もつと／＼果もない疑ひにぶつかつた。追ひ拂はれて居た、不仕合な悲しみや、辛さや、恐ろしさが、又ソロ／＼と這ひ出して來た。どうしたらいゝだらう、

洋罫紙の綴ぢたのに、十月一日と日付けをして書きながら、彼女は、カアッと眩しいやうに明るかつた自分の上に、又暗い、冷たい陰がさして來るのを感じた。

　すぐよかに、いみじかれ
　　我が乙女子よ……。

聲高な獨唱につれて、無意識に口をそろへ、聲を張りあげて

　すぐよかに、いみじかれ
　　わが乙女子よ……。

と合唱を繰返して居る最中に、彼女はフト、その「すぐよか」と、「いみじさ」の意味を思つた。知つて居る積りだつたのに、何も浮んで來ない。

驚いて、心に不安と混亂とを感じながら、自分の前に、隣りに、後に、美くしい聲を張つて樂しさうに歌ひつゞけて行く仲間の顔を見廻す。其の時の、其の通りの心持が今、彼女の胸を滿たしたのである。

(三)

偉い人と云ふのは……、

何處かで聲が聞える。彼女は耳を澄ませ、大急ぎで其の方に馳けつける。そして、一生懸命に聞かうとするけれども、よく聞えよく透つたのは最初の其の一句丈で、後の大切だと思はれるところは、何だか聲が小さかつたり、言葉が混雜して居たりして、いくら氣をつけても、ちやんとした意味が飮みこめない。

此では困ると思つてしまいに、體を動かしたり、目を瞑つたりして聞きしめようとするうちに、話し手は、又、一番初めと同じ勢のいゝ、賑やかな聲で、

其故、貴方方も、皆修養して、立派な人格の所有者とならなければなりません、と云ふと、待ちかまへて居たやうな、拍手が起る。お辭儀をする。そして、お話はもうすんで仕舞つたのである。

切角氣を張り切つて、多くの期待を持つて馳け付けた彼女は、失望せずには居られなかつた。耳を傾けて見ると、もう喫驚するほど、彼方此方で人格の力、人格の修養、完成と云ふ言葉が叫ばれて居る。眞個に大きな、怒つたやうな聲や、鋭い、刺すやうな聲が、話すのではなくて叫んで居る。けれども、何故だか、彼女は自分の聞きたい言葉と聲とは一つも見出せなかつたのである。

餘り、荒々しい聲なので、言葉の裡には始終籠つて居る筈の眞個の「人格の力」は恐わかつたり、極りが惡かつたりして、皆何處かへ逃げ出して仕舞つて居るやうにも思はれる。

彼女は、もう叫ばれて居る聲に耳を貸さうとは思はれなくなつた。只讀む許り。只讀む許りが自分に眞個の事を敎へ、彼の聲、彼の言葉で親切に、せきもせず、引き延しもせずに敎へて呉れることを知つて居る彼の女は、自分の腦力の續く限り、手に觸れるほどの書籍の中から、眞個の偉い人の姿を見出さうとしたのである。

其處には、實に數多の尊い人々の生活が、强制せぬ態度と麗はしい言葉とで語られて居た。

如何程の迫害を受けても、只、神の思寵のみを感じて、想像も及ばない忍從と愛との裡に神を見、神とともに語つた聖者。

又は、悲壯な先驅者として、彼の生命を自然律のあらゆる必然の裡に投じて、天と地との一切のものを知り、そして愛し得た選まれたる人。

其等の涙をこぼさずには居られなかつたほど、崇高な力强い、全く何物にも動かされない人格の力を、燦然と今日にまで輝やかせて居る人々は、彼等の未來に、どんな約束をも欲して居なかつたことが、先づ彼女を驚かせ、感歎させた。

其は偉い人の中にでも、步けるやうにやつとなつた許りの時から、私は何になる！　と云つて其通りなつた人も有らうけれども、彼女が、自分が斯うあつたらと思ふ種類の偉い人は、皆默つて居た。

彼等は、自分の行手に何の影像も持つては居なかつた。後の時代の者達に、大聖人であると思はせよ

うとした人でも、人類の光榮になつて見せるぞと云つた人でもなかつた。

彼等は、其の熄滅することのない勇氣と、探究の努力とを、「今」と云ふあらゆる時に於て、徹底させて行つたばかりなのである。

いつも謙讓に、其の人々は美くしいものを、讃め、尊ぶことを知つて居たと同時に、讃めるにも、尊ぶにも「彼自身」を無くして出來る丈多勢群れて居る方へと、走つて行くやうな人ではなかつた。

眞個に小さな者の前で、急に膨れ上るかと思ふと、眞に偉くもない、只偉さうな外見許りの者の前へ出ては、針の先ほどに縮まつて聲も出さないやうな人達ではなかつた。

けれども、如何んな些細な事をも感じ、驚異し得る、非常に微妙な感情を持つて、一粒の涙も、見えるか見えないの微笑をも見逃すことはなかつた。

彼女は、一つ〳〵あげて居ても限りのないほど種々の、立派な「點」を知つた。ひとりでに頭が下らずには居られない尊い心の「點」を感じることが出來た。

けれども、却つて、偉い人格と云ふ、漠然と心に出來て居た型はくづれて、無邊在な光明の微分子の裡に溶け込んで仕舞ふのを感じたのである。

無邊在な光明……。

眞個に彼女は、もう偉い人と云ふものは、などゝ云ふ言葉で考へたり探したりして居ることは出來なくなつて仕舞つた。

偉大な人々の、實に數へ切れない程澤山の其等の美點と美點とが、變化窮りない自由さと、力とに於

て、結合し、融合した時に發する光明の連續が、今、自分に斯のやうな感動を與へる。彼女は、彼等が、只正直な人間と云ふものでもなく、意志の强いと云はれる丈でもないことに氣が付いたのである。

偉い人の力を捕へて、掌の中で解體し、其を又組立て、放してやるやうなことは、決して出來ない。只、感じ得るもの、いつも謙讓であり眞面目であり、受け入れる丈の力のあるものゝみが感じ得るものであるのに、心付いたのである。

斯樣に、彼女が近くへよつて、よく視ようとした偉い人々は、却つて廣さと遠さの無限の裡へ飛翔して仕舞つたけれども、全く不思議な事には、何か偉大な魂を感じ得るものが、彼女に遺されたのである。其が、感情の一部分なのか、理性の一面なのか、まるで解らなかつたけれども、兎に角、彼女は其の心持から、眞個の人間の生活にとつて、「あるべきこと」と、「あるべからざること」とが、或程度まで判斷されるやうになつた。

そして、いつともなく相當な言葉數を知つて來た彼女は、自分の此からを「どうしたらいゝだらう」と嘗て書いた心細さからは、假令極く僅かではあつたが、救はれた。

一生懸命に努力して行き、正しいことから、より正しいことと進めてさへ行けば、と云ふ希望が彼女の心の裡で段々と勢を得て來たのである。

「私は、鍵を與へられた。其を如何う使ひ、どれ程の寶物を見出すかは、私にまかせられてある。其は確かだ。」

いつもの洋罫紙へ赤の圏點を打つて彼女は又斯う書いた。

「あの美くしい層雲を見よ。地上に咲き滿ちる花と、瞬く小石と、熟れて行く穀物の豐饒を思へ。希望の精靈は、大氣とともに頌ふ眞珠の角笛を吹く……。」

けれども。さう書き終るか終らないうちに、苦痛の第一が遣つて來た。

彼女は、幸福に優しく抱擁される代りに、恐ろしく冷やかに刺々しい不調和と面接し、永い〳〵道連れとならなければならなかつたのである。

以前より、自分の正しいと信じるところに勇ましくあつた彼女は、貴女は如何う思ひますと云ふ問に對して、正直に、私は斯う思ひますと云ふことを述べた。自分の心にきいて、恥かしい理由のないことは、どし〳〵として行つた。

自分では、何でもないと思ふ其等の事は、全く意外な事に皆、行く先々で衝突する何物かを持つて居たのである。

活潑に、希望に滿ちて、スタ〳〵と歩いて行つた彼女は思ひがけないところで、墻壁に遮られた。

始めの一二度は、おや此處を行つてはいけないらしいと思つて、別に不思議を感じなかつた彼女も、それが行く先々、どの方向にもつき廻つて居るのに氣がついた時には、ハツと思はずには居られなかつた。

一體、何故此處に自分の進路は、阻止されなければならないのだらう。

彼女は畏怖と失望に混亂した心持で、其の斷れ目もなく續いて居る墻壁を觀察し始めたのである。

そして、此は、お前達を不仕合はせな目に合はせないため、よく育てゝ遣りたいために親切に作られたものであると云ふ説明を、或時は優しい愛撫とともに、或時は激しい威嚇を伴つて繰返し〳〵とかれたにも拘らず、彼女は其の言葉、その態度、其の理由の裡に、服從することの出來ない多くの自家撞着を發見した。

如何う考へても、臆病な妥協と、利害關係のある周圍への阿諛——彼女自身の言葉で云へば、あるべからざる諸の曖昧さに根を置いて居ることを感じずには居られなくなつた。と同時に、其那ものに自分を遮げられて、行くべき處へ行かないで仕舞ふことは、如何うして出來よう、あくまで進め、其處から自分の路は開ける！　と云ふ反抗が、猛然と胸の裡に湧いて來たのである。

失望に代る何か一種の激しい緊張に、彼女は振ひ立つた。

進め！　勇ましく汝の道を行け。心が鬨の聲をあげた、そして、彼女の道を遮り行く手を拒むあらゆるものに向つて戰ひが宣せられたのである。

此から、彼女にはまるで理由の分らなかつた自分と周圍との不調和、內から湧かうとする力と、外から箍をかけて置かうとする力との、恐ろしい揉み合ひの日が續いたのである。

個人的傾向と、一般的方則の衝突。誰でも感じなければならない此の不調和は、主觀のみの世界に閉ぢ籠つて、客觀的な妥當性をまるで具備しない頭の燃え上りのまゝ、美點も缺點も自分の傾向の趣くまゝに從つて居た彼女の上に於て、特に著しかつたのである。

けれども、生れた許りの赤子が、どうして彼の赤子であることを自覺しよう。其と同樣に、總ての內

在的原因を自覺し得ない彼女は、只衝突する周圍の者を見、自分の延さうとする手を否應なしに折り曲げさせるものゝみを感じたのである。

(四)

—月—日

眞面目であれと云はれる。其だのに眞個の眞面目さは壓し殺され、自信を以て進めと云はれつゝ、引き戻されのは何故か、

彼女の其頃のノートは、斯う云ふ種類の言葉に滿たされてある。

自分の一生懸命な質問は、明かに弱味を見せたくなさ、尊敬を失ひたくなさに根差して居る虛勢で、お爲ごかしの否定を與へられ、又或種の人々は、彼の口輕な、頓智のいゝ戯談で、巧にはぐらかして仕舞ふ。其で自分がすまされるゝ思ふのか、今に忘れるだらうとでも思つて、其那當座まぎれをするのだらうか、非常に、非常に不愉快な心持がする。

經驗の尊ぶべきことについて、屢々語られる。眞に經驗は尊い。けれども、其の尊ばるべき經驗は、いつも年長者の經驗のみに限られて居るのは何故か、我々の經驗を總て參考として、お前達自身の經驗をより深く、より價値あるものとせよとは、何故云はれないのか。

—月—日

餘りに、餘りに婉曲な辭令。便宜上の小手段。默契を以て交換的にする尊敬の庇護。私は皆、嫌いだ。

廣い／＼野原に行きたい。大きな聲で倒れるまで叫んで駈け廻りたい。大鷲の如く翼を我に與へよ。

けれども、此等の斷片的の文句よりは、どうかして出されずにあつた、或人への手紙が、一番よく彼女の云ひたかつた事を云つて居るやうに思はれる。青い小形の紙に、Aさん、私は今斯那話を思ひ付きました。

と云ふ書き出しで、細かい字がぎつしり七枚の紙を埋めて居る。其は多分十五年と十六年との間の冬に書かれたものらしい。

昔、昔、或處に一人の王樣があつた。

彼は生れた時からどうしたのか、耳殼が兩方ともついて居ない。立派な王冠の左右へ、醜い鼠のやうに毛もおや／＼な黑い穴ばかりが、ボカリと開いて居た。

其の樣子が非常に滑稽だつたので、子供達や、正直な若い者は、昔、王樣は立派で被居つしやるが、あの耳だけは可笑しいなあ、と云つたり、笑つたりした。

勿論王樣自身も氣が氣ではなかつた。が、どうすることも出來ないのでいつも／＼自分の不仕合はせな耳のことばかり考へて居られた。

ところが或晩、王樣がよく眠つて居るところへ來て、しきりに起すものがある。吃驚して王樣が枕へ手をかけながら起き返つて見ると、裾の方に、だんだら縞の着物を着た一寸法師が、揉手をして、御追從笑ひをしながら立つて居る。

「お前は、一體何者だ、夜中に何の用がある。」
王様は少し安心して訊ねた。
「ハイ、私の無上に尊い王様。私奴は陛下のお耳のことにつきまして上りました。」
一寸法師は、一層腰を低くしながら云つた。
「何？ 儂の耳の事で來た？ 左様なら何故眞先に左様云はん。さ、もつと近く來い、寒くはないか……」
「有難うございます、陛下。實は眞にいゝ考へが浮びましたので、一度は御耳に入れて置きたいと思つて上りました。御免下さいませ。」
一寸法師は、王様の白貂の寢衣の肩へ飛び乘つた。そして、眞黒な穴へ、何か囁くのを聞いて居るうちに、王様の顔は、段々晴々として來た。
「ホホウ、此は妙案だ、フム、實に巧い！」
「如何がでございます、陛下。」
「實に妙案だ、さぞさうなつたら五月蠅くなくて氣が樂ちやらうてハヽヽヽヽ」
「ヒヽヽヽヽ」
一寸法師は何處かへ消えて仕舞つた。
翌日、總理大臣が來ると、陛下は早速書物机の上から、羊皮紙へ立派に書いた、新らしい詔を取つて、
「早速實行せよ」
と云はれた。開いて見ると、國中の人民は一人殘らず耳殼を切り取れ。何故なれば、神の選び給ひし國

王に耳殻が與へられて居ないのは、其が無用の長物であることの動かすべからざる證である　[illegible]い

王は、我愛する國民に、無用の長物を負擔させて置くに忍びない。と書いてある。

自分の耳を切るのは厭だつたので、總理大臣も一生懸命に忠告した。けれども、王樣は神の命令であると云つて取り合はれないので、到頭仕方なく其日から國中の人民が、泣きながら、耳殻を切られた。

十日程經つて、王樣は國を巡羅されて、何處にもかしこにも、自分と同じ者許り居て、もう一言の惡口も聞かれないのに、すつかり滿足させられて、思はず王笏を振りあげながら、萬歳！と叫ばれた。

そして、王樣は、もう世の中の不幸を忘れて仕舞つた。

ところが年の暮れに、急に隣國の兵が攻め寄せて來た。王樣は早速、適當な丈の兵を送り出して、いつもの通り瞬く間に勝つて歸つて來るのを、王宮の暖いお寢間の中で待つて居られた。

けれども、どうしたのか、兵は、却つて隣國の者に追ひまくられて、散り〴〵ばら〴〵になつて仕舞つたので、又、二度目の出兵が必要になつた。ところが、此の二度目も負けて、三度四度と、兵隊の澤山が出されたが、どうしても勝てない。そして、到頭、もう這つて居る赤坊の男の子ほか國中に居なくなつて仕舞つた。

「一體此は何事ぢや？　えゝ？　お前の政治の手腕は國を滅す事ほか出來ないのか、馬鹿奴、どうしたらいゝと云ふのか！」

王樣が泣きながら怒鳴る前で、宰相は、此れも亦涙をこぼしながら、

「陛下、恐れながら、耳殻のございました時分、我々の憐れむべき國民は、一度の戰に負けたこともご

ざいませんでした。」

と云つた、お辭儀をした。

此の話を貴女は、どうお思ひになります。勿論、馬鹿々しい滑稽な事には違ひありません。けれども、耳を切られ、殺されて仕舞はなければならなかつた國民に、私は同情せずには居られません。そして、其の同情は卽ち、此と同様な位置にある自分への同情であることはすぐ御分りのことゝ思ひます。

此那話を考へ出すほど、此頃の私は、不安やら反抗やら、壓迫やらに苦しめられて居るのです。いつぞや、御一緒に買つたあの本の中に(多分智慧と運命のこと。作者。)

生命は我々に與へられて居る――其の理由は知らない――けれども、其を弱からしめん爲でもなく、又輕卒に振り捨てゝ仕舞ふ爲でもないことは、確である。

と云ふ言葉のあるのを御思ひ出せなさいますか。

眞個に何故私は命を授けられたのか、其は此那貧弱な頭で解り樣はありません。けれども、此程微妙な生のあらゆる機能、自分で平氣で居るのが、時々はこわくなるほど微妙な作用を、許されて居、今のところでは、其が次第〳〵に成長して來るのを感じて居る時に、私は如何うして自分の生きて居ることは、間違ひだと思はれませう。

先のやうに遊戯的に、死を考へることなどは、もう出來なくなつて居る私は、はつきりと生きなければならないことを感じて居ります。

どうしても、生きなければならない。そして生きるなら、出來る丈正しい、よりよくより眞面目に生

きなければならないのは當然ではありますまいか。

此の言葉に對して、否定を與へる人は一人もないことは確かです。皆がよくなれと云ひ、正しくなれと云ひます。けれども、悲しい事には、私も、恐らくは貴女も、王様には默つて耳を切られ殺されなければならなかつた國民と大差ない境遇に置かれて居るとはお思ひなさいませんか。

王様は、絶體無二、尊嚴であり偉大であり完全でありたかつたのに、不仕合はせな耳が彼を苦しめる種となつたので、惡口、批評の根絶やしをしたくて、皆の耳を自分と同じようにさせて、ホッと安心しました。

眞個に此なら、先づ大丈夫と思つて居たのでせう。

國民は、耳をとられるのは厭でも、相手は王様だから仕方がありません。心の中では不平にも思ひ、神の救ひを求めても、王様の口からの命令は、容赦もなくさつさと耳を取つて仕舞ひます。

そして、暮すに都合のいゝやうに生れた時から與へられて居た一つの寶を奪はれた上に、戰では、命までも捧げなければならなかつた彼等。命をさう云ふ風な形式で捨て、さう云ふ風な敗亡に陷らせるやうな原因は王様自身が作りながら、皆が弱いとか、意氣地がないとか叱られなければならなかつた彼等の仲間の一人になつて、一生を終ることが出來ませうか。

自分が、此の自分以外の誰でもない私が過す一生の、此の大切な此頃を、只彼等の手元にある時ばか責任を持たない人に、一時的な、皮相的な教訓と、批難することは知つて居ても、眞個に「其の人」を育てることが出來ない人々に、自分の全部をあづけて、安心して居られませうか。

私は、決して、巧くスルリ〳〵と萬事をすりぬけて、樂に「世渡り」をする人間にはなりたくありません。

卅年か四十年世の中に揉まれて居れば、大抵の者のなれる「世故にたけたお利口な方」になりたくもありません。私は只、眞個の生活がしたい。考へるべきことは、どんなに辛くとも考へ、覗なければならないものは、どんな恐ろしいものでも覗て、眞正な生活に、一歩でも一歩でも近づいて行けさへすればいゝのです。

假令、或人は聲樂家でなくても、美くしい聲を持つて居る方がよいのは、眞理です。耳がないよりある方がよいのは、明かではありますまいか。

そして、其が眞理だと解つて居るなら、例へ自分は極りの惡いほど濁つた、嗄がれ聲であつても、美くしい聲を持つて居る人を讃め、尙〻澤山さう云ふ人の出て呉れることを願ふべきではありますまいか。

私は、さう云ふことが、心に何の假面も、虛勢もなしに思へる人になりたいのです。惡いことは何處までも惡いと主張し、いゝことのためには、何が來ようがビクともしない人間になりたいのです。

けれども、さう私を修業させてくれるには、餘り違つた周圍であることを思はずには居られません。何でもなくすら〳〵と微笑んで過ぎて行くことを、一々考へ、理窟をつけ、いゝか惡いかと區別をして、自分勝手に泣いたり憤つたりして居る自分は、馬鹿だと思ふ人もありませう。

素直な人、しとやかな人、さう云ふ人々に與へられる世間的な快樂や追從は、又賞め言葉は、皆自分

から去つて仕舞ひませう。

けれども、其でもかまひません。かまはなくはなくても、心を引き止められ、悩まされては居られません。自分には自分の踏むべき道、生くべき生き方があるに違ひないのです。

さう御思ひになりませんか。

私が斯うやつて、自分の手で書き、自分の頭で考へて居る通りに、「私の一生」がなければならないのは確かです。けれども、まだ其はどうするのが私の一生なのか分りません。今、それが解るやうに、いつかハッと感じられるやうに心を準備して置かなければならないことを、どの位痛切に感じて居ることでせう。

ふざけて居る或時の自分のみを知る人、肝癪が起つて居る時の私を知つて居る人はあります。

けれども、自分を育てゝ行きたい願望に燃える時の私、其爲に絶えず苦しみ、歎きする自分を優しく見て居るものは、矢張り此の自分丈ほかないのを、此頃になつて知りました。

世の中によくある通り、或る標線からちよいとでも頭を出すものがあると、其の價値を考へる暇もなく喫驚し、間誤付いて、大急ぎで擲きつけるやうな人々を憚つて、擲きつけられるのをこはがつて、私の道を曲げ、怯んでは居られません。

或程度まで達するうちには、此の無智な、狭小な魂の所有者である自分は、澤山の苦痛と涙と、悔恨とに遭遇しなければならないのは、明かに豫知されます。

茫漠たる原野に、一粒づゝの金剛砂を求めて行くやうな努力と、收穫の著しい差異も、覺悟して居ます。

けれども、眞個にけれども、假令それがどんなにさゝやかなものであり、目立たぬものであつても、眞理は眞理なりと云ふ効益あるに非ずや

と云ふ、尊い言葉が、私を失望させは致しません。

眞理は眞理なりと云ふ効益あるに非ずや

さうです。眞個にさうです。

私は、その何物にも、彼の價値を減少させられることのない眞理を、一つでも多く見出し得るやうに、努力し、緊張して行はなければならないのではありますまいか。

私はもう、彼の人がどう云つたとか、此の人が斯那ことを云つたとか云ふ、些細なことに、一々寄路をしたり、云はないやうにして下さいとか、斯う私は思ひますと辨解しては居られません。

思ひたいように人は思つて居て、ようございます。

種々に思ふ人の言葉の中に、私の眞個の價値があるのでもなく、心をたのんで置くのでありません。私は私なのです。其故私の一生を駄目にするのも、價値をあらせるのも、皆私次第なのだと思ふことは、間違つて居ませうか。

自分が賤いと思ふものゝ前には、私はいつでも膝を折り、禮拜する謙讓さを持つて居ます。より偉大なもの、よりよいもの、美くしいものに、殆ど貪婪なやうな渇仰を持つて居ます。

けれども、不正だと思ふものゝ前には、私はどんなことがあつても頭を垂れることはありますまい。臆病になることはありますまい。

只、一度ほかない私の一生を、不正なものに穢されるのは、何と云つても堪らないことではないでせうか、私は、よくなれるかもしれないものを、悪いことの中へ投げ込んで[illegible]私はありません。私は、只よりよくありたいためにばかり生きて居ます。考へて居ます。そして苦しんで居るのです。此處まで來て、私は、何だか餘り興奮して居るのに心付きました。自分のことばかり云つて居て、何だか少し極りの悪いやうな心持も致します。けれども、云ひ度い丈を云ひ、書きたい丈を書いてあげられ、見て戴ける方は、貴女以外にない私に、どうぞ思ふまゝを云はせて下さいまし。そして、此の燃燒が無駄に消えないやうに、お祈り下さいませ。お目にかゝりたいと思つて居ります。手紙は此處で終つて居る。

斯樣な心の狀態にあつた彼女は、自分の周圍の總體的の運動とは、まるで違つた方向に、彼女の路を踏まうとして居た。

其故、その總體的の方向を變化させる力などは、勿論持たなかつた彼女は、當然來るべき孤獨の裡に、否でも應でも自らを見出さなければならなかつたのである。

（五）

人には自己の[illegible]る領地より大なる領地あることなし。

而して汝孤ならば、汝は全く自らのものたるべし。

レオナルド、ダ、ヴインチ。

其は眞理だらう。

けれども、此程貧しい頭を持ち、此程磨かれない魂の自覺に苦しめられながら、其を滿たすために、輝やかるせめために、自分は獨りであらゆる破調に堪へて行かなければならないのか……

彼女は實に悠久な悲哀に心を打たれた。

けれども、其の悲哀は自分の心から勇氣を拔き去つたり、疲れを覺えさせたりするやうな悲しみではなく、却つて、心に底力を與へ、雄々しさを添へるものであることを彼女は感じた。

そして、無限に起つて來るべき不調和と、衝突とに向つて、其が必然なものであり、止を得ないものであるなら、何處までも當つて、自分の路を開いて行かうとする決心が、しつかりと搖がない根を彼女の心に下したのであつた。

如何んな事が來ようと、自分は決して顏を背向けまいと云ふ意志は强かつた。

先達のない山路を、どうにかして、一歩でも昇らうとする努力は健かに勇ましかつた。

けれども、其の不斷の力の緊張は、やがて驚くべき苦痛を以て現はれて來たのである。

兩手を左右に擴げることを、毎日の間に幾度かして居る。けれども、其を擴げたまゝで五分保つて居なければならない苦しさは、一寸考へると雜作のない單純な運動とも思はれない量をもつて居る。

上げた時と同じにして置かうと思つても、きつと幾度かは殆ど不可抗力に近い重みを以て垂れさうに

なつて來る通りに、彼女のちつとも緩みのない心、休息を與へられるのない心は、時々息が詰りさうな陰鬱を伴つて沈んで來る。

何の音もしない、何の色もない、總ての刺戟から庇護された隱遁所を求めて、悲しく四方を見廻し、萎へ痲痺れるやうになつた頭が、今にも恐ろしい斷念を以つて垂れさうになつて來ることもある。けれども、さう云ふもう一歩と云ふ際で、彼女に又新らしい勇氣と、感激とを與へて、より雜多な刺戟の中へ振返らせるものが、彼女の感受する種々な感動を透した上の方から、いつも朝曉のやうにすがすがしい、なごやかな力に滿ちた新鮮な空氣を送つてよこすものがあつた。

其のものは何なのか、彼女には解らない。

何だかは知らないが、偉大な魂を感じ得る「心持」を與へられた彼女は、其の自分が神と呼び、守靈と呼びかけて、人と人との交渉に於ては、どうしても滿たされない絕對的服從の渴仰と、愛情とを傾け盡して敬愛して居るものをも、矢張り或る一つの「心持」を感じるのだとほか云ひやうがなかつたのである。

そして、其の「心持」は明かに地上のものではなかつた。自分の萬事を洞察し、弱らうとする生活の焰に、丁度其の時と云ふ時に適當な油を注ぎかけながら、一生の間自分を見守り、叱咜し鼓舞して下さる」ものなのである。

美くしい月光の搖拽の裡にも、光輝燦然たる太陽の裡、又は木や草や、一本の苔にまでも宿つて居る彼女の守靈は、あらゆる時と場所との規制を超脫して、泣いて行く彼女を愛撫し、激昂に震へる彼女を

かに、なだめるのである。

心が暗く、陰氣に沈むごとに、彼女は唯一の避難所であり禮拜所である美くしい木立の茂みの裡に坐つて、幾度輝やかしい守靈の鼓舞を感じた事であらう。

幹と枝々との麗はしい均齊、軟らかな輪廓と、其の密度によつてところ〳〵の變化を持つ、靜かな緑色の群葉に飾られた樹木は、光線の工合によつて、細密な樹皮の凹凸を、宛然活動する群集のやうに見せながら、影と陰との錯綜、直線と曲線との微妙な縺れ合ひに、只、彼等のみが持つ靜肅な、けれどもどんな律動をも包藏した力の調和を示して居る。

高い上の方の洞に寄生木の育つて居る、大きな大きな欅の根元に倚りかゝりながら、彼女はなだらかな起伏を以て續いて居る此の柔かい草に被はれた地の奥を想ふ。

縱横に行き違つて居る太い、細い樹々の根の綱の間には、無數の蟲螻が、或は暖く蟄し、或はそろそろと彼等の殼を脱ぎかけ、落積つた枯葉の厚い層の奥には、青白いまぼろしのやうな彼等の子孫が、音もない搖籃の裡にまどろんで居るだらう。

堀り出されない數限りない寶石や化石の底を洗つて、サラサラ、サラサラとせゝらぐ水。

絶えず燃えくるめき、うなりを立てる不思議な焔。

その熱と、その水とに潤されて、地の濃やかな肌からは濕つぽい、なごやかな薫りが立ちのぼり、老木の切株から、なよ〳〵と萠え出した優雅な蘖の葉は、微かな〳〵空氣の流動と自分の鼓動とのしほらしい合奏につれて、目にもとまらぬ舞を舞ふ。

この到らぬ隈もない音と音との調和、物と影との離れることのない睦まじい結合を眺めて、にこやかに脈打つ生命の力を感じる時。彼女は祈らずには居られない感動に打たれるのである。

靈感にさほど遠くない感情の火花が、美くしく彼女の胸の中に輝き渡る。

そして、守靈は無言のうちに、生きることの美くしさ、努力の光榮を、彼女の魂に吹き込むのである。

神よ、我に不斷の力を與へ給へ……。

明日と云ふ日が、又希望を盛り返す。

彼女は、もう決して辛いものではなくなつた獨りの裡に靜かに浸つて、與へられた自らの生命の多種多様な力の現れと、僅かづゝ育つて行く心とに、謙讓な愛に滿ちた奉仕を感じるのであつた。

斯様にして、偏我の裡に全く閉じ籠つた彼女の生活は、丁度曇つた夏の夜のやうな様子で過ぎて行つた。折々鋭い稻妻の閃光が暗い闇を劈いて一瞬の間、周圍を青白い輝きの中に包みはしても、光りの消えたと同時に、又其の暗い闇が總てを領して仕舞ふ。

其と同様に、時々は、如何程熾んな感激の焔に輝らされはしても、彼女の生活の元來は暗かつた。そして、夏の夜がさうである通りに、闇とは云つても、微かにおぼろに、物の形、姿だけは浮んで見えるほの明りに、足元をさぐり〳〵彼女は、より明るみへ、より輝きへと、歩を向けて行つて居たのである。

そして、彼女の心付かないうちに、生活の律動は、讀み物の影響と、或程度まで養はれた道徳意識の影響と、今まで續いて來た生活の反動との力を集めて或る次の一點へ徐々に彼女を動かして居た。

自分ばかり凝視して居た彼女の眼は、そろ〳〵と自分より不幸な、より慘めな、そして其等に對して、自分が無關心であつたのを恥かしく思はずには居られない一方面に轉ぜられ始めたのである。

不當な壓迫や、服從の强制に對して、絕えず不滿を感じて居た彼女が、自分よりもつと〳〵其等の堪へがたいあらゆる事に堪へて、物質的にも精神的にも劣者の位置に甘んじて居なければならない者に心付いた時、どの位の同情に打たれた事であらう。

そして、それ等の氣の毒な人々に、自分も知らず〳〵壓迫を加へ、强制を加へて、まるで知らないで居たことに如何程の悔を感じた事であつたらう。

自分は仕合は世に、不正だと思つたことには、何處までも對抗して行く力を與へられて居る。その反抗に對して機嫌を損じる者があれば、いくらあつても、自分はちつとも恐ろしくはないと思つて居られる。けれども……。彼女は沢側に興奮せずには居られなかつた。

生命も權利も、其が假令法律では保護され、飽くまで主張し得べく制定されては居ても、實際の生活に於ては、物質的、精神的により豐かな者、力强い者に、殆ど無條件で蹂躙され、屈服させられなければならない人々が、到るところに滿ちて居るではないか。

卑怯な、卑劣な弱い者酷めが、公然と行はれて居るのに、自分はどうして、平氣で其の仲間入りをして居たのだらう。

彼等も人であり、自分も人であるのに、一方が一方を虐げるのが、どうして正しいことだと云へよう。

彼女は、忘られない印象を自分の心の上に遺して行方も分らず去つた、或る一人の勞働者の姿を思ひ浮べた。可哀さうだと思ひながら、記憶から薄らいで居た、一人の少年を思ひ浮べた。

其等の皆、泣いて居た人々、自分が悲哀に打たれ、泣くことさへ憚るやうにしてひそやかに啜泣いて居た人々。

慰めてのない彼等の苦痛、輕ぜられて居た生命の歎息が、無限の哀愁のうちに、ひた／＼と迫つて來るのを、彼女は感じずには居られなかつた。

破れた、穢い／＼上衣の肩の上に垂れて、激しく痙攣して居たあの青い顏、深い溜息。

彼女は、記憶の中の其の人に向つて、

泣くのは御めなさい。しつかりしなさい。一緒にどうにかして行きませう！

と呼びかけずには居られなかつた。

そして、あの時、若し自分が大人だつたら、そおつと彼が泣く譯を聞けるだらうのにと思つた心持は、その時よりはつきりとした解答、彼の泣いた譯も、結果も分つて居るとその心持を伴つて、一層の同情を喚び起したのである。

「彼も人間である。私も人間である。私が生きるために、彼の命を輕ずるのは正しいことか。」

狆に縮緬の着物を着せて、お附きの人間をつけて置く人が、彼の門前で死に瀕する行倒れを放つて置くのは正しいことか。

さう云ふ人に媚びて、眞個の同情を胡麻化したり、知らない振りをするのは正しいことか。

優しい鼓舞と助力は待ち望まれて居る。彼等の歎息に耳をかせ。

彼女は、書きながら、心がブーンブーンと鳴り響くやうな心持がした。

「弱い者、氣の毒なものが虐げられるのが惡いのなら、さうでないやうに出來る丈遣つて見ることに、

何の躊躇がいらう、

よりよく、より正しい方へと總ては試みられなければならないのではないか、

どんな辛い目にあつても、自分は彼等の爲に盡す。眞個の正しい、人間らしいいつくしみ合ひに祝福あれ！彼女は希望に打たれて、泣き出さずに居られなかつた。そして、

「あゝやつと來た！ やつと自分の眞個の生活が見つかつた！ おてんとうさま。私の神樣。」

私は嬉しい。非常に〱嬉しい

と、躍り上るやうな字で書きつけた鉛筆を、投げ出した彼女は、切角書いた字が皆滅茶々々になつて仕舞ふほど、涙をこぼした。

惡夢のやうな煩悶や、懊惱の裡に埋沒して居た自分の眞個の生活、絕えず求め、絕えず憧れて居た生活の正路が、今、此今漸く自分に向つて彼の美くしい、立派な姿を現はしたやうに思はれたのである。

彼女は、自分の願望を成就させるに熱中した。

寛容な、謙讓な愛によつ仲よく、睦しく助け合つて行く自分達を想ひ、心が安らかに幸福な一群が、樂しく元氣よく眞個の「自分達の働き」にいそしむ樣子を描きながら、自分の許されて居る範圍に於て、眞劍に彼女は、出來る丈のことをして行つたのである。

此以外には決してないと思はれる仕事に對して、假令量は少く、範圍は狹くあらうとも、彼女の眞面目さは絶大であつた。徹頭徹尾一生懸命であつた。

そして、些細な失策や、爪づきには決してひるまない希望を持つて居たのである。

けれども、時が經つまゝに、彼女の理想がどんなに薄弱なものであり、其の方法や動機が、動搖し易い基礎の上に立つて居たかを、證明するやうな事件が、次から次へと起つて來た。

そして、彼女の物質的助力や、熱心にはした積りの助言は失敗に歸したことが明瞭に示されることにならなければならなかつたのである。

客觀的の立場から見れば、其は當然來るべきものであつた。其どころか、若し來なければ、彼女は恐ろしい不幸に陷らなければならなかつたほど、其は、意味ある、「尊い失敗」であつた。

けれども、最初のあの嬉しさに對し、希望に對し、第一に引き上げ、高められるべき筈だつた多くの「彼等の魂」を、元のまゝの場所から一寸も動かし得ずに、還さなければならなかつたことは、彼女に如何程の、苦痛を感じさせ、赤面を感じさせたことだらう。

嘗て、「あゝやつと來た！」と書いた言葉の前へ面を被ひながら、彼女は

達者で働いて御呉れ！　私の悲しい親友よ！

と云ふ、訣別の辭を與へなければならなかつたのである。

（六）

完く。悲しき親友よ！

「私はきつと今に何か捕へる。どんな小さいものでもお互に喜ぶことの出來るものを見つける。どうぞ待つてお呉れ

彼女は、否でも應でも、彼等に向つて別れの手を振らなければならなかつた。

が、何かを捕へようとして延した片手の方角には、一體何があつたらう。

失敗した計畫が、しほ／＼とうなだれて行くあとについて、此こそ自分の一生を通じてするべき仕事だと思はれた確信が、淋しい後姿を見せながら、今までより一層混沌とした、深い／＼霧の海の中へ、そろ／＼と彼の姿を沒して仕舞ふのばかりが見られる。

そして、目前には、遺された種々の問題――眞個の愛情、善惡の對立の、可不可――が、黑く押し默つて、彼女の混惑した心に、寒い陰をなげたのであつた。

私は、私の全部に於て失敗して仕舞つた。大變悲しい。恥かしい思ひに攻められる。そして、尙其上、失敗した思想以上に、一分も進んでは居ない頼りなさ、不安を感じずには居られない。けれども、神よ我に强き力を與へ給へ……。

私は決して絶望はしない。絶望しては居られない。眞面目な科學者は、彼の片目を盲にした爆發物を、尙殘りの隻眼で分析する勇氣と、熱愛と、獻身とを持つ。

彼女は確かに失望もし、情けない恥かしさに心を滿たされもした。

けれども、極度な歡喜に燃え熾つた感情が、此の失策によつて鎭められ、しめされて、底に非常な熱は保留されて居るが、觸れるものを燒きつける危險な焔は押へられた今、全く思ひがけないもの――靜

かに落付いて、悲しげな不思議な微笑を浮べながら、

　まあ、まあ、落付きなさい。え、落付きなさい。

と囁くもの――を、自分の心の中に感じたのである。其は、彼の守靈でもなかつたし、神樣でもなかつた。まして、感情が戯れに見せる空想でもなかつた。

幾重にも幾重にも厚く重り、被ひ包んで居た感情が、燃えぬけた僅かの隙間から、始めて眞個の理性が、今靜かな、動ぜぬ彼の姿を現はしたのである。

　まあ落付きない、それからとつくりと考へて見なさい。

　彼女は、上氣せて居た頭から、程よく血が冷やされるのを感じた。そして、非常にすが〳〵しい、新らしい、眼の中がひや〳〵するやうな心持になつた彼女は、もう間誤つかなかつた。彼方此方へ、馳けずり廻る周章から救はれた。

　理性の出生は遲すぎたかもしれないが、今、現はれて呉れたことは、外のどの時に於てよりも、彼女はとつて幸福な、眞個に役立たれる場合であつたのである。

　彼女は微かに、自分の性格が、根本的にある變化を與へられようとして居ることに氣が付いた。

自分としては、此の失敗と此の理性の目覺めを伴はなければ開かれなかつたと思はれる方へ、非常に非常に僅かではあつたが望みを見出した彼女は、或意味に於ての感謝をさへ感じながら、二册目の帳面の扉へ

　求めよ、然ば與へられん

と、丁寧に書きつけた。

そして、反抗や焦燥や、總て眞個の心の足並みを阻害する擬氣の燃き鎭められた平靜と謙讓との裡に、とり遺された大切な問題が、考へられ始めたのである。

「自分は、彼等を愛した。其は確かである。」

けれども、其の愛が不純であり、無智であり、近眼であつたからこそ、斯う云ふ失敗は來たされた。其も否定出來ない。

其なら、眞個の愛情、眞個の愛情に到達する段階は何か、第一頁に書かれた、其の文句と向ひ合ひながら、彼女は、默然とせずには居られなかつた。

眞個の愛……眞個の愛……

「我々の眼で見えるもので我々の愛を受ける價値の無い程に小さなものは一つもない、」

メーテルリンク

と云ふ言葉に、朱線を引き、感激した彼女は、今、其の感激は丁度、小さい子供が、頭の上の空で、美くしく騰がる花火の光りを、喝采しながら

綺麗だなあ、綺麗だなあ

と賞揚すると、餘り大差ない程度の心の狀態に於て、朱線を引かれ、感歎されたのだと思はずには居られなかつたのである。

言葉の裡には、非常に人の心を譯もなく動搖させる力を持つて居るものがある。

人類を抱擁する愛。人類の解放。

此等の言葉は、言葉の箇々の響を知り、意味を知つて居る程度の者の心には、何となく崇高な、偉大な「感じ」を伴つて來る。その「感じ」は如何んなものだか分らないが、幾度も云つて見たいやうな何ものかゞある。

その何ものかに動かされて、響き許りが、いつの間にか大切な、大切な、なかみを振り落したまゝ、恐ろしい位廣い空間で、喧かましく鳴らされる。

その響きに、自分の心も、フラ〳〵と共鳴りを感じたのではあるまいかと云ふことが、彼女にとつては非常な恥かしさである、不安なのであつた。

寛容とか、謙讓とか云ふ言葉に、ホーッと自分はなつて仕舞はなかつたか。

人を愛することを知る自分に、自分から醉つて仕舞ひはしなかつたか。

第一の詰問には、斷然と、さうではありませんと云へる彼女も、その次の前へ來ては、躊躇を感じさせられた。少くとも、さうでは、「決して」ありませんとは云へない、何物かゞ心の奥に有つたことを思ひ出さずには居られなかつたのである。

親孝行と云ふものが、只おとなしく、命令のまゝに暮して行くことではないと云ふことを知ると同じように、自分は自分の愛情――彼等への同情のうちに、理智の照り返しを與へたゞらうか。

彼女は、慘めな乞食に、一錢投げ與へる年寄りは、永い年月に向つて彼に定職を與へる者より、無智な愛情の所有者であることは知つて居ただらう、けれども、人間にとつて、最も多方面な發動の可能を

持つ愛情は、其が力強くあればあるほど、無智にも傾き易い素質を持つことを、自分から放射される愛情について考へ合はせて居なかつたことが、種々な失策を産む原因であつたことを、今漸々、眞個に今漸々、微く僅か覺ることが出來たのである。

總ての自分の持つ才能と同じに――否、總ての才能より眞先に、愛は最高の練磨を受けなければならない筈であつたことを、辛くも今知つたのであつた。

「宇宙に對する完全なる知と、神に對する完全なる愛とは同一不二である。」

と云ふ言葉を、讀む。全くさうであらう。さうであらうと云ふ心持を一層强められる――さうあるべきものだが、自分には分らない。自分のものになるものは、まだ餘り遠い彼方にある、と云ふ心持である。神の愛とは何か。人類の愛とは何か。

神の愛とは何か、人類の愛とは何か。

非常に深い河は地下を流れる。

と云ふ同じ人の格言通り、彼女の霞んだ、近眼が見るには、可哀さうな程、深い／＼奥に其の解答はあるのである。

彼女は、おぼろながら、其を自覺した。もう言葉の、魅力や完全さは、望まない。其を自分の胸に感じ、魂に知り、丁度疲れた時、一瞬の虚無に脳を休めるため知らず／＼深い欠伸をするやうに、必要であり、適當である場合には、知らず／＼、自分の中から溢れ出すものとなりさへすれば、よいのである。

人類の愛、神の愛。其は自分が、自分達總ての仲間に感じなければならない生活の根本になる理解であ

り、萬物の生死を司り、此の惑星の微妙な運行と變化とを支配して居る力への、持つべき根本の理解である。

「夢ではない。物語りの幻でもない。」

汝の、曇らざる眼を見開け！

彼女の心の前には、「奕々たる美」に、燦然と輝きながら、千年の地下の眠りから呼び覺まされたアフロヂテの像に、靜かな表情でコンパスと定規をあてゝ

「……私は切に知りたいのですから……」

と云つた人の姿が尊く浮み上つた。

眞個に、生を持つほどの者は、「知りたいのです、」と云ふ言葉丈は知つて居る。

彼女は、知らなければならない欲に燃えた。

そして、彼女の知る最上の手段で、僅かづゝ、僅かづゝ其は、滿たされつゝあるのである。

彼の、「地下を流れる河」は、勿論、その反響さへも、彼女までは傳へない。けれども、彼女が永い間、鼓舞され、愛護されて居ると思つた、「守靈」は違つた解釋を與へられなければならなくなつた。

第一に、守靈は、其の名が示して居るやうな任務を負はさるべきではなかつた。

個人的に、自分の靈の番をして居るやうな、其那狹小なものではないことが、少し分つて來たのである。

若し名をつけられるなら、其は、神と云ふ言葉の廣義な場合が適當であらう。

自分が、努力し、自分の力で其の力の裡に、滲透して行きさへすれば、何處までも拒むことなく入れ

ては呉れる。けれども、自分が死ぬべき時がくれば、其同じ力は、自分を間違ふこともなく、取りのけにもせずに死なせるだらう、自分がどんなに惨めらしい敗亡に陥つても、其同じ力は靜かに、又次の來るものを迎へるほど、其程、偉きく、廣いものであるらしいことを彼女は、感じたのである。

そして、極く〱微かだけれども、

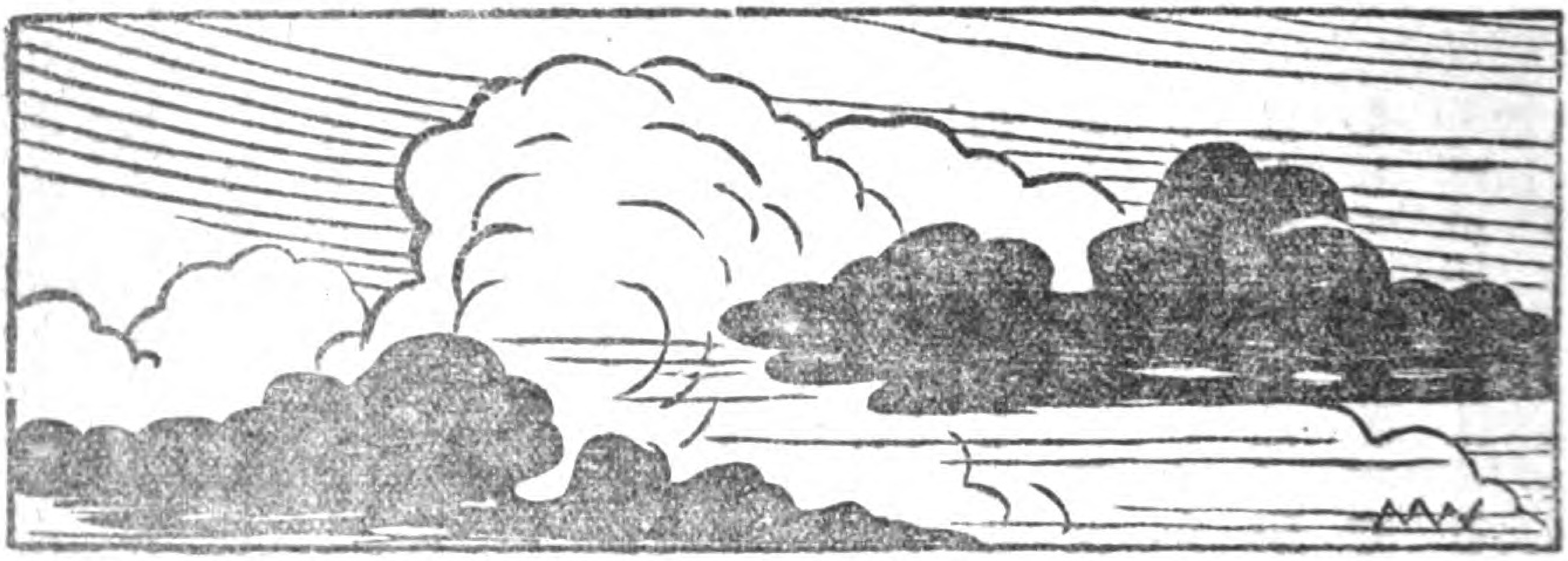
「主與へ給ひ、主奪ひ給ひぬ、主の名に祝福あれや」

と云つたジョップの心持と、

「主よ、汝の愛するもの病めり」

と云ふ文句の裡に籠つて居る心持とを感じられるやうな心持がした。

「主よ、汝の愛する者病めり……。」



穴

徳田秋聲

一

第二回目に古賀液注射の爲め、黒川がけい子を大川縁のK―病院へ入れた頃には、長いあひだに馴されて來た彼女の不安や恐怖もいくらか落着いてゐた。それはちやうど、海に溺れたものが、次第に廣い深い沖の眞中へ押流されて來てゐるのに氣がついたと同じやうな氣持で、落着いたといふよりも、寧ろ暗い絶望の影が、悶踠き疲れた手の働きを、餘儀なく一時中止させたやうなものであつた。然しまた其と同時に、どこまでも熟と病氣を押耐えて行かうとする弱々しい力と、何かに取縋りたいやうな可憐しい優しい氣持も泌出して、その病室に落着いたときには、彼女の目に涙が入染んでゐた。

建物が古いので、餘り綺麗だとはいへない其病院は、大川と、それと直角を成してゐる別の流れと相通ずる其角に建てられてあつたが、けい子の病室は、ちやうどその出張つた一角にある二階の部屋なので、色々の船の往來をしてゐる

る水を隔てゝ、對岸の人家が手に取るやうに見えると同時に、一方には漫々と湛へてゐる大川の水が、廣々とどこまでも見渡された。

十月の末で、淺黄に濁つた水のうへにも、ぎい〳〵と靜かな櫓の音を立てゝ、つい眼の下を通つて行く舟や人にも、ごしや〳〵した粗雜な對岸の人家にも、初冬らしい清澄した日光がきら〳〵輝いて、船頭などの聲が賑やかに聞えてゐたが、病院の古い燻んだ建物のなかは一體に氷室のやうな冷かさであつた。けい子はお召のコートを着て、白足袋をはいた足をきちんと重ねたまゝ、そこに座つて對岸の人家や遠い水のうへを眺めてゐたが、俥に搖られて來たので、背や額に輕い惡寒と熱發とを感じた。

けい子がそんな發熱を覺えたのは、一月頃からであつたが、その當時は良人の調合してくれた解熱劑などを服して、安靜を保つてゐるうちに直に熱は冷めた。そして熱がさめた處で、良人の手でツベルクリンの注射を試みたりしてゐたのであつたが、三月に田舍にゐた前妻の子をつれて、上京して來た黑川の母親が滯在してゐた三月ばかりの間に、氣むづかしい母親との時々の感情の觸れ合ひなどから來る興奮と、口喧しい彼女の前に、出來るだけ病氣を隱さうと力めたことや、用事の多かつたなどのために、そんな發熱もいつか不斷のことのやうに慣れてしまつて、姑が田舍へ歸ると間もなく、大學病院へ通ひはじめた頃には、病氣は可也進行してゐたらしかつた。大學ではX光線で胸部を診てもらつたりした。そして外部の診察では今まで判然しなかつた浸潤のあることなどが發見された。

けい子に言はせると、彼女の健康は八九分通りは口喧しい姑のために害はれたやうなものであつた。古い淨瑠璃のなかにでも出て來さうな意地くねの惡い黑川の母親は、若くして死訣れた良人の三人の遺

子を、それ〴〵に育てあげたほどの[illegible]した氣象のであつたし同時に、仕立[illegible]に取つては、このくらゐ我儘な氣強い姑はなかつた。直に、田舍で病院をもつてゐる長子のところに彼女は居ることになつてゐたが、そこで猛烈な衝突が初まりかけると、宥めすかされて、これも[illegible]家の跡を繼いでゐる次子の家へ汽車で遊びにやられるのであつたが、二十ばかりの子供をもつてゐる長子の嫁は、姑に内密で良人に拵へてもらつた帶を發見されて、離縁を宣告されたり、湯治の歸りが一日遅れたがために、全身に繃帶をするほど體を打たれたりした。七十幾歳になつた姑の體には、兇暴な血が未だに野獸のやうに狂つてゐた。浴せかける毒舌で足りなくて、如何かすると、彼女は器物を抛り投げたり、荷造をして家を飛出したりした。

けい子は自分の發言で、手許へ引取ることになつた黒川の子供をつれて出京した姑とは、その子供のことで直に衝突した。その頃肋膜炎を患つて暫らく、共の勤め先から退いて來てゐたけい子の弟のことでも、觸合つた。寢たり起きたりしてゐる嫁それ自身にも、大いなる不滿があつた。長いあひだ下町で暮してゐた彼女の女房振にも、辛辣な批判の目が光つた。

「これあ一體、けいの家かい御前の家かい」などと、その病人のゐるあひだ、姑は黒川に能く言ひ〳〵した。蔭で病人を劬るらしいけい子も氣に喰はなかつたが、けい子を母親から庇護はうとするやうな、黒川の優しい態度も業腹でならなかつた。誰もゐない時などに、彼女は少い病人を憐むやうに、傍へ寄つて慰めの辭をかけたりしたが、その後から嫌惡の念が發作的に突發した。

けい子はその姑のために、どのくらゐ神經を刺戟されたか知れなかつた　この母親が、忌嫌はれなが

ら、其の子供たちの家庭に容れられてゐるのが不思議であつた。少くとも其の意地惡な歪んだ心が、子供たちから理解のある何の矯正をも、正當な何の抑壓をも受けないで、目を瞑るまでは爲方がないと云つた風に、冷やかに傍觀されてゐるのが腹立しかつたが、口數などの少い、始終おど〳〵したやうな體度の割には、素質の強い意地が、暗い生活氣分の底に根を張つてゐるやうな彼女自身も、終ひには惘れて、口惜しいとも憎いとも思はなかつた。けい子は姑の心を緩和するために、頭腦を費すやうなことは何一つ爲やうとは思はなかつた。そして自分は自分だけのことを、蔭で窃と爲てゐたが、それでも表情に乏しい彼女の目が、時々涙に曇らされた。

やがて妻運の惡い、最愛の末子の家庭にも飽果てた姑が、都會生活に呪ひの辭を遺して、田舍の家へ歸つて行く時機が自然に到來した。

けい子は黒川と一緒に、彼女を停車場へ見送つたのであつたが、それと同時に張詰めてゐた氣が一時に弛んだやうな心持で、病褥に親しむ日が多かつた。

二

岸や舟の腹に、ちやぶり〳〵と當る佗しい水の音を聞きながら、けい子はその夜は枕に就いたが、體をすつかり診てもらつたのは、その翌日であつた。

けい子がこの病院で、古賀液の注射をしてもらふのは、今が初めではなかつた。九月の中頃にも一週間はかり下の病室に入れられてゐた。黒川はその頃、本郷方面で四五年張つて來た醫院を疊んで、それまで時々經濟上の保護などを受けて來た、けい子の從姉の家から、さほど遠くはない芝も日比谷寄の方

へ引越して、千葉の方の或友人の病院と、下谷の或大きな婦人科の病院とへ通つてゐたこと、彼は最近二三年の間、妻を迎へたり、お産をしてから又それを田舎へ還したり、その離婚問題が、訴訟になつたりして、可也苦しまされた。東京で纏りかけた、彼のためには幸福であつたらしく想像される有利な縁談を断つて、田舎の親たちから押着けられて貰ふことに決つた前の妻の、その過去に暗い影をもつてゐることなどが傳へ〳〵て彼や彼の友人の耳へ入ると同時に、妊娠の期日にも疑ひが抱かれたところから、出産後、彼女の肥立つのを待つて、田舎へ還してしまつた。そして其から一年程たつてから、けい子を迎へたのであつたが、それ等次ぎ〳〵に起つた問題と、外國から歸りたての放縦な生活とが遺して行つた經濟上の破綻などが結婚後の彼の家庭を、兎角不愉快に陥勝であつた。それに來たときから、けい子の顔色は餘り冴え〳〵した方ではなかつた。色の透徹るやうな蒼白さが、潤みのある紅味を帶びて、淋しい顔にいつ笑の影がさしたといふことがなかつた。黑川自身も、可也生活に疲れてゐた。酒を飲んだり、唄を謳つたりするやうな場所へ出ると、熱狂的に躁いで來る彼も、家庭にあつては産れかはつたやうな憂欝な表情をしてゐた。そしてちよい〳〵出かける回診から歸つて來ると、疲れたやうな顔をして、洋服のまゝ善く茶の室に臥そべつてゐた。興奮劑や何かを、彼は時々隠しから出して、口中へ入れてゐた。そこから絃歌の聲の聞える藝者屋町などが、重な病家であつた黑川は、抱えをおいて一軒の看板をもつてゐる或女と深い關係に陥ちてから、玄關がいくらかづゝ寂れて行つた。そして其處へ多くの望を抱いて入つて來たけい子は、次第に期待の裏切られるのを感じた。をり〳〵の差迫つた必要のためには、簞笥から取出しては良人の方へ融通してゐた、婚禮のときの[illegible]や餘所行などが、約束の期日にな

つても、容易に彼女の手へ還つて來なかつた。けい子は其時分二十三であつたが、氣分に情趣が乏しいだけ、年の割には都てに質素な堅い考へをもつてゐた。そして媒妁者から聽いた黒川の收入などから打算して、自分一箇の世帶の切盛方などを、ちやんと考案してゐたのであつたが、遣繰に巧みな黒川の家政は、徒らに彼女の氣を腐らせるに過ぎないほど紛糾してゐた。

或時などは、結婚生活にすつかり絶望したけい子は、黒川を出るつもりで、從姉に事情を訴へに行つた。大學を中途で止めて、株屋になつたといふ從姉の旦那は、それまでけい子の面倒を見て來た關係から、その時危殆に陷つてゐた夫婦のなかへ入つて、和解を試みると同時に、可也な高の金を自分の懷ろから彼に貢いだ。その晩黒川は、森本といふ其の男と一緒に、連れられて行つたお茶屋から、自働車でけい子の從姉のおしのの家へぐで／＼に醉つて歸つて、そこで一泊したのであつたが、遲くまで騷いでゐて眠らなかつた。さびた喉で歌を謳つたり、大聲で酒を呼んだりして、おしのや女中を手甲擦らせた。

けい子はそれで復た黒川の家に落着くことになつたが、この夏肺に浸潤のあることが確められてから、彼女の心は自然に田舍の方へ傾いた。そして其には黒川もほゞ同意であつたが、其にしてもそんな長い旅行を思立つには、病氣が田舍で保養のできる程度まで、落着くのを待つより外なかつた。やがて第一回の注射が初まつたのであつたが、それも豫期したほどの效果の見えなかつた今となると、東京の地から離れて行くのが抑て不安のやうでもあつた。そして黒川と別れて行くのは、全く病氣の危險がなくなつた時か、全く生きる望みの絶えてしまつた時かでなくてはならないと思つた。

「入院だ注射だといつて、まご／＼してゐるうちに、じり／＼深みへ引込まれて行くやうだつたら、私

いつそ田舍へ歸つた方がいゝやうに思ひますわ。」

今度入院の準備に取かゝつたときも、けい子はさう言つて涙ぐんでゐたが、それも十分安心して病院にゐられるやうな、良人からの慰安や保障の辭が聞いておきたかつたに過ぎなかつた。

けい子はその時入院中、手をつけられてはならないやうな着物や何かの始末をしてゐた。そして黑川が外國へ行つたときに買つたトランクや行李のやうな物の、ごて／＼押込まれてある押入を開けて、自分の簞笥に錠を卸した。その中にはけい子が病氣になつてから、黑川が工面をして、預け先から取戻して來た物も多かつた。けい子自身が、良人の或行動に不滿を抱いて、彼を窘しめるために、その月の支拂ひに當つべき必要な金で、わざと受出して來たものなどもあつた。そんな時のけい子は、心から黑川を憎まずにはゐられなかつた。そして其は同僚の送別會の夜に初まつた出來事であつた。夜おそく俥で歸つて來たときに、外國で買つた彼の時計に身代りに不斷使つてゐる金被せが、出先きで置忘られた。

「西洋料理で帶を釋くなんて、そんなことがあるでせうか。」

けい子はさう言つて、共濟病院へ出かけて行く良人に、ぶつ／＼小言を言つたが、深くも追窮しなかつた。同時に百圓ばかりの財布を彼女は自分に握つてゐた。前の細君との結婚の、づつと以前から關係してゐた女のところへ、その時計が置忘られてゐるやうに思へてならなかつた。一日彼女はいら／＼してゐたが、彼女の太くされたやうな行爲が、また黑川を怒らせた。そして劇しい爭ひの後、けい子はいら／＼しい日を二三日、おしのの家で過した。暫らく遠いてゐた熱が、また出て來た。そして其の熱がやゝ冷めかゝつたときに、彼女は黑川に送られて入院することになつたのであつたが、[illegible]

やっぱり不安であつた。

けい子が初めて咯血したのは、入院の第三日目の朝であつたが、黒川が電話を受けて遣つて來た頃には、彼女は比較的血色の好い顔をして、臥つたまゝ看護婦に髮を梳いてもらつてゐた。鉢植の赤い菊の花が、入院したとき黒川が置いて行つたまゝに、午後の薄日を受けて、手摺ぎわにあつた。

黒川は昨夜ふと、けい子の好くない噂を耳にしたので、心から慰めの辭をかけてやる氣にはなれなかつた。

「咯血したから、病氣が進んでゐるものとは決つてゐない。」彼はさう言つて、面を背向けてゐたが、けい子も後ろむきになつて、目に涙を一杯ためてゐた。豬いたつぷりした毛が、枕のうへで戰いてゐた。

「量は三十グラムくらゐですが、何だか興奮してゐますな。」

黒川が下の醫員室へ行つて訊くと、醫者はさう言つて眉を顰めてゐた。

「あの分では、當分手術も出來ますまい。」彼はさうも言つた。手術をしなければならぬ、肛門周圍炎のあることは、入つた時から氣づかれてゐた。

再び病室へ入つて行つた時には、けい子もいくらか落着いてゐた。そして咯血した前後の模樣などを、途斷れ〳〵に話した。

「田舍へ電報をうつて母を呼んで戴きたいんですが……。」けい子は大分たつてから言つた。

「誰か一人附いてゐてもらはなくちや、私寂しくて爲樣がありませんわ、母なら往つたり來たりして、家の方も見てくれますから。私かうして寢てゐても氣にかゝつて……。」

「家の方は心配しなくとも可いよ。」黒川は應へたが、事によると今の女中に暇をやらなければならないと思つた。昨夜不意に彼女はそんな希望を洩した。そして其は、けい子が子供を責めるのを見てゐるのが切ないからと云ふ理由からであつた。黒川にはそれが初耳であつた。

黒川は途中で田舍へ電報を打つて、暗い心を抱いて家へ歸つて來た。

三

その歳も暮れて、けい子は病院で春を迎へねばならなかつた。

熱のやゝ落着いたときに、黒川は院長と相談して、周圍炎の手術をするために、築地の或外科病院の副院長に來てもらつたこともあつたが、體が衰弱してゐるので、暫く見合した方が可からうと言はれて、その儘になつた。それは十二月の初めで、黒川などの見るところでは、胸の病氣は少しづゝ快い方へ嚮つてゐるらしく思へたのであつたが、しかし其から二三日たつと、又三十グラムほどの血を吐いたなぞの事實もあつて、衰弱がまた一層加はつて來た。

その時も黒川は病院から電話を受けて、駈けつけて見た。

「大分好い工合になつてゐたのですがね。」黒川の懇意にしてゐる若い副院長は、さう言つてやゝ不興氣な表情をしてゐた。

「今度の喀血なぞは、身から求めたやうなものですからな。」

「何かまた興奮でもしたのでせうか。」黒川は訊いた。

「事情は私も詳しくも聞きませんけれど、お子さんのことで、興奮されたらしいんです。何だか、有

婦の話では、あの病人が起あがつてお子さんを打つたとか…。」副院長はさう云つて顏を赧めた。

「はゝ」と、黒川も我知らず顏の赤くなるのを感じた。

「しかし然う心配するほどぢやありません。たゞ今後あゝいふことのないやうに、貴方も十分御注意なすつた方がいゝですね。」

「その癖子供を見たがるのです。それに近頃まで田舍へ預けてあつたゝめ行儀が惡くて、妻の思ひどほりにもならないものですから」と、黒川はいくらかけい子のために其場を繕つて、病室の方へ引取つたが、此間耳にした女中や何かの話を綜合してみると、最初自分から言出して引取ることになつた子供に對する彼女の心持が、どんな風になつてゐるかゞ略想像された。

　黒川は、離縁した前の妻と一緒に田舍へ歸つて行つた其の子供について、長いあいだ惱されて來た。どんな專門家でも、それを確めることが困難であるとほりに、過去に暗い影をもつてゐた前妻が、田舍で結婚式を擧げて、黒川につれられて東京へやつて來たその月に姙娠した―或は既に姙娠してゐた其子供に就いては、誰が正當の父親であるかを決定することが困難であつた。田舍の町の或荒物屋に育つた彼女が、店の若いものと親しかつたと云ふ噂が、その頃黒川の友人の耳へ傳はつてゐた。

　子供はつい近くまで、實家へ歸つて行つた其の母親の手に育てられてゐたが、この春になつて其引取方を黒川に要求して來た。其と同時に、子供が四つになる迄の養育費として、可也多額な金が、請求されて來た。そして終に法廷にまで持出された其の問題が、けい子の媒妁人である辯護士の手によつて解決された時に、けい子の發意で、子供は手元へ引取られることになつたのであつた。

黒川はその子供を自分の子として愛していゝか、人の子として取扱つていゝか分らなかつたが、自分の子であつた場合の方が多く像想されずにはゐなかつた。けい子と別れる時も、彼は多く其の場合の想像に充されてゐたが、友人の攻撃を反駁するだけの反證を缺いてゐた。その上都てに遲鈍で冷情な女の性癖に愛想を盡してゐた彼は、その結婚に失望もしてゐた。

山國の荒い風に吹かれて、頑に育つて來たその女の子は、けい子たちが想像して樂んでゐた期待をいくらか裏切つた。子供は彈切れるやうな堅い丸い顔と、むく／＼肥つた長の詰つた體をもつてゐた。そして來た日から父親に懷いたが、彼女をつれて來た黒川の母親ほどには、けい子に眤まなかつた。言葉やお行儀や食物や、總ての習慣が、長いあいだの嚴しい訓練を經た後でなければ、迚も自分の子として人中へ連出されるほどには直らないであらう、とけい子は二三日じつと其の樣子を眺めながら、獨りで然う思つた。

「お菓子をおやりになるなら、どうぞ座つてお辭儀をさせてからになすつて下さい。」けい子は傍で見てゐても齒痒いやうな母親の甘やかし方に不滿を抱いて、さう言つて極めつけた。

「それにこの子は食物が荒うございますから、時間をきめてやるやうにして下さらないと、後で困りますから。」

「それだつてお前、四つや五つの子供に、口をつめたり何かしたら、反つて萎けて不可いわの。」母親はさう言つて、やつぱり自分流儀に行つてゐた。

けい子は時とすると、甘い母親の陰から彼女に可怖い口をして見せた。夜間蒲團のなかに無調法をし

たとき、裸かにして引ぱたいたり、幾度物を吩附けても、返辭をしなかつたと言つて、お尻を抓つたりした。けい子に言はせると、今のうちに矯正しておかないと、惡い習慣が年とともに生長して、終には矯正することが困難だと云ふのであつた。それはけい子が餘程年を取つてから、人中へ出て苦しんで見て、初めて親の淺薄な愛が、どのくらゐ自分の仇になつてゐるか知れないことに思中つた。自身の經驗に基いてゐるのだと云ふのであつた。そして孰かといふと黑川はけい子の考へ方を、善い意味に解釋する方へ傾いてゐた。

しかし女中から聞された事實によると、けい子の仕方は、多分にヒステリカルな傾向を帶びてゐた。そして其には立派に幼兒虐待といはるべきほど、繼子に對する病的な憎惡と嫉妬との加はつてゐることを感じて、慄然とした。

「御近所では、皆さん然う仰やつてゞす。」女中はさう言つて、黑川に說明した。

「それに、あの須藤さまの奥さまも然う仰つてゞございます。すみ子さんをお連れして、お風呂へお入れする度に、腕や脊にぶつ〳〵腫れた迹があるから、如何しましたとお子さんに訊いても、何んとも仰やらないんですて、ですけど、どうも其が抓つた迹らしいんですつて。」

須藤と云ふのは、けい子の媒妁の辯護士であつた。須藤の妻は、時々哀れな子供を見に來たり、寂しさうにしてゐる時には自分の家へつれて行つて、子供だちと一緒に遊ばせたりしてゐた。

そして女中の口吻では、其が須藤や、おしのや、おしのの主人の耳へも傳はつてゐるらしかつた。

黑川が病室へ入つたとき、この頃看護に來てゐるけい子の母親は、直に陰鬱な彼の顏色に氣づいた

が、黒川自身はけい子の顔を見るのも可恐しいやうであつた。今まで慈み愛して來た丈に、そんな一面があらうとは、想像もできなかつた。

「此子が少し癇癪を起したものですから。」母はけい子の目の色を氣遣ひ〳〵、黒川に話した。

「今度から子供を病院へつれて來ることは止てもらはなくちやならん。」黒川は母親を窘めるやうに言つたが、こんなに苦しい思ひをして努力しても、後から〳〵崩されるのでは、遣切れないと思つた。

「お前も自分の病氣と云ふことを、もつと考へなくちや可けないぢやないか。」

「でも澄ちやんが、餘り憎らしいんですもの。」けい子はもう目に涙を入染せてゐた。「私のお膳が來たら、それが食べたいと言つて、いくら言つて聞かしても解らないですもの。あの子はどうして、あんなに意地が汚いんでせう。」

「それあ子供のことだもの。」黒川はさう言つて苦笑してゐたが、死の影の纒はつてゐるやうな彼女に、そんな頑な心の粘着いてゐるのが、氣味が惡いやうであつた。

「そんな事でやきもきするだけ、病氣が募るばかりぢやないか。澄のことなぞ、如何でもいゝから、そんな事は放擲して、もつと素直な暢氣な氣持にならなくちや駄目ぢやないか。」

けい子はまじ〳〵良人の顔を瞶めてゐた。

「だつて、あの意地つぱりな子、私見たことがない。あの子の御母さんと云ふ方が、どんな躾け方をなすつたかと思ふと、私憤れつたくなる。」

黒川は多くを言はなかつた。

「あの子を、お祖母さんのとこへ還して下さい。私達もあの子のお世話はできませんから。」けい子は顫へるやうな聲で言つた。

それにも黒川は逆はなかつた。妻の心を苛立たせば苛立たせるほど、苦みと悔ひが永久に自分の心に遺るであらうと思はれた。そして其は、副院長の口吻から想像しても、單に時日の問題に過ぎないやうに考へられた。

黒川は長く病人の傍にゐることが出來なかつた。

四

けい子の病氣が、幾んど絶望的に長引くであらうと豫想されると同時に、黒川は其の全部を投じても、入院費を支拂ふには足りないくらゐの自分の現在の報酬のほかに、別に收入の道を求めなければならなかつたが、一方暗礁に打揚げられて破壞されたまゝに、水のうへに浮いてゐるやうな自分の家庭を、如何にか恁うにか支へて來た彼は、けい子の病氣と、努力の根比べをするためには、都てのものを振落して、希望があるとも無いとも決まらないやうな一人の不運な生命のために、無駄な、或は犧牲的な働きを續けなければならなかつた。時として彼は咒はしい此頃の生活に堪へられなくなつて、手も足も出ないやうな現在の狀態から脱れやうと悶踠いたが、それと同時に喘ぎ〳〵自分に縋りついて、反抗的にでも生きて行かうとしてゐるやうな、けい子のいら〳〵しい執着の眼が、彼を逃すまいとしてゐるやうに見えた。

月が十二月に入つてから、黒川は子供を田舍の母と兄とに預けるために、四五日の旅を思ひ立つた。

そして暫くぶりで山國の温泉場へ行つて、疲れた體を休めるとができたが、然うして靜かな温泉場の空氣に浸つて、渇えてゐた山の姿や、水の流れに親しんでゐると、急に又たけい子の方へ心が惹かれて、田舍で調へることのできた幾許かの金を懷ろにして、立つ前に家を疊んで、部屋借りをすることにしてをいた家へ歸つて來た。そして一度けい子の病室を訪れて、春になつたら直ぐ見舞ふことを約束して、また勤めてゐる病院の仕事に還つた。

年越を、彼はおしのゝ家でした。元日の屠蘇も雜煮も、彼はそこで祝つた。おしのゝ家は直ぐ近所にあつた。長ひあひだ森本の妻とも妾とも決まらないで、年取つた母親と一緒に、巴町の方に一戸を構へてゐたおしのは、けい子の話によると、元と名古屋の或お茶屋の娘であつたが、森本が投機界に身を投ずる前に醫學書生として遊學してゐた時代からの馴染であつた。そしてそのお茶屋の店が遣切れなくなつてから、東京へ引取られて、彼の世話を受ける事になつた。

大晦日の晩も、元日も、森本が大阪の方へ旅行中のおしのゝ家は母親と女中とのほかに、誰もゐなかつた。近所へ間借りをするときも、いつか醉潰れて一晩世話になつてから、何かに氣のおけなくなつたおしのに見つけて貰つたのであつたが、黒川がおしの母子の信用を得るやうになつたのは、この十月頃、突如に正式に妻を迎へた森本とおしのとの間に、當然釀された紛糾のなかへ入つて、第一者として口を利いた其時以來であつた。腹の奥底の知れないやうな森本が、長いあひだ睨んだ來たおしのたちに、何の前觸もなしに結婚してしまつたことは、彼等母子に取つては全く寢耳に水であつた。そして事によると恢復がつかなかつたかも知れないほどの危機が、其時ヒステリックな躁狂を演じて、心から森本を怨

らせてしまつたおしのたちの心を脅かした。黒川は世間的にそんな扱ひに慣れてゐた。そして男の前で女に謝罪させるまでに問題を當然の歸結へ運んで行つた。動搖が過去つてからも、彼はおしのたちのために忌憚られるやうなことはなかつた。そして田舍から歸つて來てからは、彼は大抵そこで朝飯と晩飯くらゐは賄つてもらふことにしてゐた。

「今夜は大晦日だから、宅はゐないけれど、景氣に一本つけませうかね。」おしのは然う言つて、銚子を胴壺に浸けた。午旁じめや何かの取替へられた神棚に、燈明の灯がゆら〳〵と搖いてゐた。四條派風の古畫の緑靑や胡粉の所々剝落ちた六枚折の屛風の立廻された座敷の床に、おしのが飾りつけた鏡餠や、松竹梅の生花などが、間借り生活をしてゐる黒川の目に、床しく眺められた。彼はその前で、おしのゝ母親と、お節會に箸をつけ、猪口に七八つ酒を飮んで、微醉の好い氣持になりかけたが、心から醉ふ氣にはなれなかつた。

「今夜あたり病院は寂しいでせうね。」

おしのも猪口に二三杯飮んで、眠れぼつたいやうな目の緣をほんのり染めてゐた。彼女自身も餘り健康の勝れた方ではなかつた。去年の秋頃は、肺がいくらか氣遣ひだと言はれて、森本が借切にしておく鎌倉の貸し別莊で、冬中過したが、それは其きりになつて、今では寧ろ心臟の方が案じられるほど、ぶよ〳〵肥つて來た。

「おけいさんも、今歲は到頭病院で年越をするやうなことになつて了つたんですわね。」おしのは嘆息の聲を洩した。「でも貴方よく遣つて行くと思ひますわ。一月や二月ぢやないんですからね。」

「爲方がありませんよ。」黒川は溜息をついた。「今のところお蔭で還つてゐますけれど、今に惡くなるかも知れませんや。」

「それも確かに癒る見込のあるものなら可ござんすがね……。」

「癒つても、一生丈夫の體にはなれつこはありませんね。」

「それぢや詰りませんね。でもおけいさんも、此位親切にして頂けば、思殘すこともないでせうから、周圍炎の療治でもして、汽車に乘れるやうな體になつたら、一先田舍へ還しておしまひなさい。」

「私もさうしてもらひたいと思つてゐるんですけれど、其が何時のことだか……此頃それでも、胸の方は大分順調に行つてるやうです。あれで癇癪さへ起さなければ、段々快くなつて行くんですけれど、焦れるのが一番體に障るのです。」

おしのゝ話によると、けい子は田舍で女學校を一年半ばかり遣つて、それから長いあひだ親の手元でぶら〳〵してゐたが、氣位が高いのと、體が弱いのとで、縁談を取はづし〳〵してゐるうちに、獨立するつもりで東京へ出て來たのだと云ふのであつた。そして裁縫の手が利くところから、上物の仕立物などを、知つた人に頼まれて縫つてゐる間に、黒川の兄の友人の宮井の細君に知られて、そこから黒川との縁が繋がれた。

三十少し出たばかりの森木が、役所勤をしてゐる兄や、今度結婚した妹の一家族や、自分の親達や、修學中の弟や甥や、そんな多勢の厄介者を一身に引冠つて、月々きちん〳〵と其等の人達の生活費を支拂つて行くことなどが、おしのゝ口から話された。そして除夜の鐘が、しん〳〵と更けて行く夜の寒空

に響きはじめた頃、黒川はおしのゝ家を辭して、自分の部屋へ歸つた。そして冷い床へ潜りこんだ。

五

手術が出來さうな見込で、貢縁を求めて大學病院へ入院させるために、月の半ばにけい子が一旦家へ歸つて來るまでに、黒川は二度ばかり大河端の病院を見舞つたが、おしのも森本と連れ立つて、一度彼女を見舞つた。おしのは一昨年一度自分にそんな不安を感じて、其の病氣を怕れてゐたうへに、何か知ら用事の多い體でもあつたので、けい子が思ふほど病院を見舞ふことも出來なかつた。

二日に行くはづのところを、その朝黒川が起きて見ると思ひがけなく雪が三四寸も屋根に積つてゐた。それに元日の屠蘇や何かで胃をそこねて、腹痛を感じたので、一日引籠つて、三日の日に、彼は漸く水菓子や牛肉や魚肉の鑵詰などを仕込んでけい子を見舞つた。

長く家をあけることのできないけい子の母は、十二月の初めに一旦田舍へ歸つて行つた。そしてけい子は黒川の來ないのに、じれ〳〵してゐた。大晦日の晩にも、彼女は黒川の來るのを待つてゐた。世間が靜まつて來ると、流に臨んだ、だゝつ廣い病室が、堪へられないばかりに寂しくなつて、岸をなめる水の音が、物哀しげに耳元に聞えた。今夜あたり彼は家にゐる氣遣はないと思はれた。今でも偶には寒暑の見舞ぐらゐは來る、古い馴染の女を訪ねて、じんねこで年越しをしてゐるかも知れないと思はれた。金貸しの旦那をもつて、抱えを二人ばかりおいて、山の手で小體に約ましくやつてゐる其の女は、離縁と結婚との間の黒川の家で、寢泊りしたことなどは珍らしくなかつた。それをけい子は、越後產れの、その頃藥劑師の試驗を受けに來てゐた、榮養不良のやうな何時も蒼い顏の藥局生の口から聞いて知

つてゐた。片方義眼をしてゐる其の旦那が、血相をかへて女を捜しに來たこともあつたが、女の家で、黒川が思ひかけなく旦那に來られて、夜風の濕つぽい半夜を、屋根の上の物干で過したこともあつた。樣子が素人じみた其の女は、しばらく黒川に逢はないと、病氣のやうに鬱いだ。そしてどんなに睦いでゐるときでも、黒川を憶出すと、うつとりと氣が遠くなるのであつた。

自分の經驗から、けい子には女のその心持が、能く想像されるのであつた。けい子は時々それを遣切れないと思つた。健康が衰へてからは、殊にも然うであつた。しかし又たそれが、病院にある時ですら、時々彼女の甘い空想を唆つた。嫉妬と執着が、苦しい頭腦のなかだけで、彼女を虐げた。

若し其の女の處でなければ、彼の居るところはこの頃ちよい〳〵口へ出して黒川が讃めるやうになつた、おしのゝ家であらうと想像された。

「森本君もおしのさんも、眞實に好くしてくれるよ。お前は安心して病院にゐて可いよ。」

まだ自分で世帯をもつてゐる時ですら、黒川はけい子の心を安めるために、然う言つて心から感謝の辭を洩した。そしてけい子も其を悦びたいやうな氣持で、微笑を洩してゐたのであつたが、良人が段々おしのゝ方へ接近して行つてからは、そんな讃辭を善意にばかり解釋してはゐられなかつた。じつと寢てゐる彼女の頭腦のなかに、不安の影が少しづゝ其の翅を擴げて來た。

年が更まつた第一日と二日とを、けい子は殊に新しい寂しさと物足りさのうちに過した。そして三日目に漸と顏を出した良人に傍へ寄られたとき、我儘な彼女の感情が、どんな優しい辭でも釋すことのできないほど硬直してゐた。そして二言三言怨みを言つてゐるうちにいきなり其處にあつた雜誌を取つて

投げつけたりした。

「それは病院にゐるよりか、從姉さんの家の方が、どんなに陽氣でいゝか知れやしないわ。あの人が又從つてそんな事の好きな性分なんですもの。」けい子はこの二三日の黒川の日常を、それから其へと一々點綴したあとで言出した。

「お前は寢てばかりゐるから、そんなことばかり考へてゐるんだらうけれど、世間で働いてゐる者は、さうは行かないよ。」

「それが貴方に眞實の親切がないからぢやありませんか。貴方に深い愛情があれば、何が面白くて今頃餘所でお酒なんか飲んでゐられるものですか。」

「それはお前が、長いあひだ寢てゐて、是迄一緒にやつて來た生活を悉皆忘れてしまつてゐるからだよ。」

「人間は病氣をして、病院に寢てゐる時のことを考へれば、何だつて遣れないことはない筈ですわ。世間の丈夫な人は、何うしてあゝ暢氣でゐられるだらうと思ふくらゐですよ。」けい子は健康體の心理が、自分にはまるで解せないと云つた調子で、冷笑的に言つた。

「誰だつて丈夫なうちは、病人の氣にばかりなつて、生きてゐられるものぢやないよ。己だつて、これでも出來るだけのことはしてゐる意だよ。吉江なんぞぢや、おしのさんでも誰でも現に皆な感心してゐる。お前に言つたつて爲方がないけれど、實際己も遣切れないと思ふことが、幾度あるか知れやしないんだ。」

「それでそんな話を、貴方は從姉さんになさるんですか。」

「いや、別にしやしない。己は愚痴は言はない意だから。」

「その癖隨分あの人たちの世話になつてゐますわ。その恩を仇なやうなことになつたら、貴方は如何なさるの。」けい子は、充血した目を曇ませて言出した。

黒川は終に默つてしまつた。

「私どうしても癒らないものなら、何時までも恁うしてゐるよりか、いつそ一思ひに何處かで手術してもらひませうと思ひますわ。」けい子は少時してから、思窮めたやうな氣色を示して言つたが、それは黒川も強ひて拒みはしなかつた。

「とにかく、暖かい日に、私どうしても一度家へ歸つて見ますわ。」けい子は家へ歸つて見たくて堪らないと言つた風で、さうも言つてゐた。

六

鎌倉の海岸にある、或病院へ入ることになつたのは、それから二ケ月もたつてからであつたが、その前に彼女は、田舍から來た母の附添で、一週間ほど大學の外科にゐた。

手術を受けるために、一旦兩國の病院から歸て來たときほど、彼女は周圍の世界が暗欝に倦怠に見下されたことはなかつたが、しかし又それほど其中に生き動いてゐる總てのものゝ幸福が妬ましく呪はしく思はれたことはなかつた。自分の後に、何時までも然うした狀態で殘つてゐるのだと思ふと、道傍に立つてゐる電柱すらが、限りない自然の恩惠を享樂しんでゐるものゝやうに思へた。電車の線路を横ぎ

ときなどに、ふと目に映る良人の疲れた陰鬱な顔や姿までが、傷ましく見えたと同時に腹立しく思へた。總てが粗雑で、隙間だらけのうはつ面なものに見透されたが、そこに涙の入染むやうな悲哀な喜悦が燻んだ色に光つてゐた。

冷寥な薄日に輝らされてゐる、路傍樹の細いすく〱した枝の先に、軟かい春が目にみえて芽ぐんでゐた。其が目のさめるやうな若葉となる頃の、都會の生活が想像された。そして其の活々した美しい世界を、今一度でも見ることが出來るか如何かを思つて見るだけでも、心臓が慄え凋んで行くやうな可恐しさが感ぜられた。

病院にゐる前に、彼女は二日間家にゐたが、その間に、爲ておかなければならぬ用事が、どつさり自分に殘つてゐるやうな氣がした。けい子は、體の疲れをも忘れた風で、そつちの押入を開けたり、此方の棚を捜したりしてゐた。箪笥や行李のなかをも、心殘りのないやうに整理しておかなければならなかつた。

「もう好い加減にしておきなさい。そんなに働いて、熱が昇つたら如何するんだ。」黒川は機嫌を害ねないやうに諭した。

「えゝでも……みんな私の片見ですから。」けい子は應へたが、自分が若し健康であつたら、迚もこんな部屋借などの慘な生活はしてゐられまいと思つた。

「そんなことを考へるやうぢや、先づ死ぬ氣遣はありやしない。それに胸の方は餘程快くなつてゐるんだから。」黒川は淋しく笑つてゐた。

「私が若し癒つて歸つて來るものとしても、今迄やのうな暮しは御免ですね。」

おしのが見舞ひに來てから、女中が、晝飯のお菜にけい子の好きな鯵などを持つてやつて來た。そして階下の臺所で煮炊をしてくれた。けい子は自身片身配でもするやうな氣持で、半衿や紙入などを、何時になく惜しげもなく與れたりした。そして久しぶりで黒川と差向ひて、自家の御飯を食べるのとかできたが、手術の結果を想出すと、然うして長いあひだ持ちなれて來た象牙の箸を細い手に執つてゐるのも、不思議なやうな氣がした。象牙に沁みた手澤の迹を見て、泣いてくれさうなものが、口數を利かないで、もく／＼飯を食べてゐる母の外に有りさうに思へないのが、不思議に彼女の氣持を寂しくした。

大學の外科では比較的、日が早く經つた。自分から進んで催促して手術に就く日が、一日でも……出來ることなら、やはり永久に延ばされた方が安心らしく思へた。

同じ病室に、三年のあひだそして多分終ひには死骸になつて此處を出るであらう、十三ばかりの脊髓病患者に附つきりでゐる七十幾歳かのお婆さんなどがゐた。腰の曲つたその祖母は、會社の仕事に忙しい少年の父や、家事にかまけてゐる母に代つて、善く孫の世話をしてゐた。少年は怜悧すぎるほど怜悧であつた。退屈して來ると、彼は愛らしい聲で歌を唱つたが、感興は長くも續かなかつた。

けい子はその歌を聞される度に、抱締めて心ゆくばかり泣いてやりたいやうな哀情を唆られた。彼女は其のお蔭で、どのくらゐ自分の惱みが吸取られたか知れなかつた。そして此の美しい少年一人が如何して多くの子供のなかから、不幸な運命に擇ばれなければならなかつたかゞ、時々彼女の心に大いなる不思議であつた。

大河端の病院を出る時分には、何うか恁うか手術ができさうに思はれるまでに、患部が繕はれて來たのであつたが、こゝへ來てから一時遠いてゐた血痰が、頻繁になつた。咳嗽と共にまた出るやうになつた。そして午後回診のあるごとにけい子も母親も、醫師の顏色を熱心に覗いてゐたが、いつも手術に取りかゝりさうな樣子の見えないのに失望させられた。そして一週間の終りに、樣子を見に來た黑川が、醫師から手術の不可能を言明されてから、急にまた其處を出ることになつたのであつた。そして鎌倉へ行くまでの二三日を、けい子は再び良人の家で過した。

爾時に限らず、けい子を田舍へ還して、母親の傍で養生させやうといふ說は、これ迄にも一二度母や義兄の森本やおしのの間に起つてゐたのであつたが、彼女の健康の長い旅に堪へらないことは、黑川にはよく判つてゐたばかりでなく、けい子自身も、田舍へ引込むことは、總ての人から見放されるやうで心細かつた。そして其と同時に、時々問題になつてゐた鎌倉行きが、この頃の彼女の心に、強い慾望となつて根を張つてゐた。大學から寢臺車で歸つて來た晚にも、けい子は母や黑川の口から、田舍行を勸められて拒んだ。

「貴方が迚もお金が續かないからと仰やるなら、私も諦めて田舍へ歸ります。それにしても送つて頂くものは、やつぱり月々送つて頂かなければならないのですもの。」

そして黑川がおしのと相談のうへ、けい子の希望を容れることに決まつたとき、けい子は心からそれを感謝したが、おしのの家と背合せになつてゐる其の家の二階に、良人一人を殘して行くことが、彼女には苦痛であつた。

六

正月以來、おしのゝ家で、持々酒を饗應はれたり、花札を弄んだりして、家へさへ歸れば急に人懐りになつてゐた黒川は、おしのゝ家で一ト話し話して來ないと、寢床に就くことができないやうな習慣になつてゐた。

「黒川さん、今夜は寢酒は如何です。」などゝ、おしのはけい子の見舞ひに來てゐて、歸りがけに公然でさう言つて、親しげに笑合つてゐた。

「寢酒のお世話にまでなるんですか。」と言ひさうな目を欹てゝ、けい子は二人の樣子に神經を働かしてゐた。

「ぢやまあ今夜は止めておきませうね。また此間のやうにぜい〱が起つて、おけいさんが心配して熱でも出ると困るから。」おしのは明け透けに、何でも浚け出すやうな調子で言つた。

「それ御覽なさい」と言つた風な目を光らせて、けい子は良人の顏をおろりと見た。

「ぢや私の留守の間に、持病が起つたんですか。」けい子は惱しげな氣持を、强ひて押隱すやうに、淋しい笑顏をしておしのに言つた。「この人のあれが持病なんですの。」

「えゝもう」と、おしのは調子づいたやうな風で、「ぜい〱なら可いけれど、あの晩なんぞはひいー、ひいー吭で笛を吹くやうな音がするんですもの。それからモルヒネ注射だの何だのつて、大騷ぎなの。色男もあゝなつちや片なしだわね。」

「だから、お酒は飮まさないで下さい。その癖良人は意地が汚ないんですの。お酒ばかりなら可いんですけれど、看々病氣の起ることが判つてゐるから、お止しなさいといふのに、甘い物が傍にあれば、ポ

ケットから藥を出して飲み〳〵、やつぱりむしや〳〵食べると云つた風なんでございませう。」

「でもおしのさん、有難いと思はなければならないわ、寢酒ぐらゐで辛抱してゐるのだから。」おしのはお挑るやうな眞面目なやうな口調で言つた。

「如何ですかね」と、けい子は淋しい口元に苦笑を浮べてゐた。「良人は滅多に信用できませんわ。」

おしのが歸つて了ふと、部屋が遽かに陰鬱になるのが、けい子には物寂しかつた。そしてそれは今日に限つたことではなかつた。

「私鎌倉へ行く前に、こゝを引越しては如何です。」けい子は心からそれを氣遣ふやうな調子で言つた。

「何故？」黒川は酒に渴えてゐるやうな、重苦しい表情をしてゐた。

「なぜでも。」

「そんな必要はないぢやないか。第一引越せば己が不自由で爲樣がない。」

けい子はもう目の色が變つてゐた。「貴方はやつぱし、おしのさんの近くにゐたいんだわ。」

「居たいことはないけれど、折角あゝして親切にしてくれるんだもの、此方がそんなことをすると氣を惡くするばかりだ。お前だつて悦んで、お禮の一つも言つてくれなくちやならんぢやないか。それに己は、家にゐることなんか、滅多にないんだもの。」

「そんな事を言つて、貴方はおしのさんと氣が合つてゐるから、離れるのが厭なんでせう。だから私は如何しても貴方を澤江へ出入させてはならないと思ひますんです。從姉さんがあれほど世話になつてゐる義兄さんに濟まないやうなことがあると、大變ですから。どうしても引越す譯にいかないんですか。」

けい子の調子は可也興奮してゐた。

「引越して引越せないこともないが、何分入院費や何かの厄介になるんだからね。離れると何かにつけて非常に都合が惡い。」

「それは貴方が意氣地がないからだわ。」けい子はじれ／＼するやうに言つた。

「大丈夫だから、お前は安心してゐなけあ可けないよ。」黒川は少時の沈默の後熱心に言つた。「誓つて大丈夫だよ。」

「その大丈夫が當にならないんですわ。」けい子は頑強に主張した。「私どうしても、此まゝ行くわけに行きませんから、昨日家を搜しますよ。私は森本に對して、それを爲る義務があると思ひますから。」

「そんな事をすれば尙可異しいぢやないか。お前の觀察は確かに病的だよ。そんなことをくよ／＼思ふから、癒りが遲いんだ。だから、どうか其だけは止してもらひたい。」

「それなら私の安心するやうに、引越してしまつたら如何でせう。貴方こそ餘程可異しいわ。」

けい子は輕い咳をせきながら、何時までも止めなかつた。そして黒川が傷ましげな目をして、默つて聽いてゐれば、それがまた二重に彼女の神經を苦しませた。黒川はそれを宥めるのに、絕か氣骨が折れたが、一日も早く彼女から脫れる日の來ることを、心から祈らずにはゐられなかつた。

七

鎌倉へ移つた當座、けい子は比較的新しい病院生活を享樂んでゐた。

病院は七里濱のすぐ上にあつた。けい子の室は、丘の方に臨んでゐたので、廊下の垠まで出ないと、

蒼々した海を見ることは出來なかつたが、貝殼などの落散つた庭の砂地に、松が濃緑色に繁つてゐて、晴れた日には、四月のやうな暖かい日光が、麗かに輝いてゐた。幽かに松の香のする濃厚な空氣が肺臓の隅々まで滲透るやうであつた。そしてオゾンの多い空氣に浸つてゐると、生活の機能が急に健かになつて、氣分まで清澄した爽やかさに潤ふのを感ずるのであつたが、しかし彼女が望み想つてゐるほど、捗々しく患部が癒されてゐる譯ではなかつた。

二月から三月へかけては、黒川も可也忙しかつた。暮から正月のあひだ、空いてゐた病院の孰れもが、患者が一杯であつたが、三月はおしのゝ母親が急病で死んだなどの出來事があつたので、殊に用事が多かつた。都ての事に、黒川は可也働いた。けい子からは時々手紙が來た。少し健康になつたら、海岸へ出てみたいから、羽織や帶を送つてくれとか、血痰は幸ひ少なくなつたが、熱の出るのが氣にかゝるとか、自分の病氣は快くなつてゐるのやら、惡くなつてゐるのやら、少しも解らぬのが捂しいとか、鎌倉は物價が高いから、來るときに何を買つて持つて來てくれとか、院長が貴方の來ないのを不思議がつてゐるとか、善く筆まめに手紙を書いたが、黒川は東京にゐる時よりは又一層足が遠くなつてしまつた。

四月の上旬に、おしのは老母の骨を納めかたがた授戒を受けに、名古屋へ歸つて行つた。黒川はいくらか閑になつたところで。一度けい子を見舞はうと心構へてゐたが、そこへ或晩遅く、彼女の咯血の報せが、不意に電話で彼を脅かした。

彼は待設けてゐた不倖な時が、終に來たのではあるまいかといふ、不安に胸を轟かせながら、急いで

停車場へ駈けつけた。そして十一時四十分の汽車で東京を立つた。鎌倉へ着いたのは、二時頃であつたが、しと〳〵と俥の幌に降そゝぐ雨の音を、耳にしながら、病院の門を叩かせた。

薄暗い、しんとした長い廊下を通つて、妻の病室へ入つて行くと、病床を番しながら、看護婦がまだ目を覺ましてゐたが、患者は何事もなかつたやうに、安靜な眠に沈んでゐた。そして咯血も三十グラムに過ぎないと云ふのであつた。

黒川は吻としたやうな氣持で、病室の隅に疲れた體を横へた。そして波の音を聽きながら、少しうと〳〵したかと思ふと、もう夜がしら〳〵と明けて、海邊の春らしい明るさが、けい子の蒼白い寢顏の上にも這ひかゝつて來た。冥府のやうな深い靜寂の底に眠つてゐた病院が、やがてそこでも此處でも起きはじめて來た。

看護婦がけい子に楊枝を使はせたり、顏を拭かせたりする時分には、はたゝゝはたきの音などの病室にも聞えてゐた。廊下で淨手を使つてから、爽やかな海風に蘇へつたやうな氣持で、黒川は掃除のすんだ病室へ入つて來た。そして朝の飲物を取つてゐるけい子の傍へ寄つて、咯血前後の眠狀などを聞取つた。

「この頃ちつとも眠れなくて困りますの。」けい子は看護婦がゐなくなつてから黒川に話しかけた。

「如何して？」

「如何してですか、一週間ばかりおち〳〵眠つたことはありませんわ。」けい子は悄々しげな表情で、黒川の顏に目を据ゑた。

「昨夜の咯血だつて、貴方の所爲なんですよ。貴方は私に隱してゐることがあるに違ひないです。」

「莫迦なこと言つちや可けない。」黑川は笑つてゐた。

「それなら如何して、こんなに長いこと來て下さらなかつたんです。」

「それには色々事情があるよ。」

そして黑川はおしのの母の死んだことや、其前後の自分の忙しかつたことを話して聽かした。それでけい子の氣持もいくらか落着いたらしく見えたと思つたが、直に顏色が險しくなつて來た。

「貴方は忙しい〳〵と言つてゐる癖に、そんなに從姉さんのために働かなけあならないんですか。他に人がいくらも有るぢやありませんか。如何考へてみても、貴方は義兄に申譯のないことをしてゐるに決まつてゐるんです。私のとこへ、ちやんと其事を報して來た人があるんですもの。」

「笑談ぢやない。誰か好奇に、有りもしないことを言つてよこして、病人に氣を揉ます奴があるものか。」

「いゝえ、有るんです。確かにあるんです。」

「それぢや其人の名を言つてごらん。」

「名は言へませんけれど、その手紙なら貴方だつて見たでせう。私は昨夜その手紙を見ながら、血を吐いたんですもの。そして拭くものがなかつたから、其で血を拭いて、痰壺に入れておいたんですから、貴方も氣がついた筈ですわ。」

黑川は心が動いた。そしておしのゝ家へ出入する人たちで、けい子に手紙を書きさうな人を物色して見たが、それには麹町から花を敎へに來る年取つた女か、花札に集つて來る、森本の同じ仲間の藝者あ

がりの若い妻君か、京都の織物などをよく見せに來る吳服屋の番頭か、でなければ友禪か何かであるに過ぎなかつた。

「誰もゐないぢやないか、そんな惡戯をするやうな人は……。」

「つまり貴方とおしのさんと關係が深くなると、今度そのために。世話にならうと思つてゐる人が、自分の不利益になるから、言つてよこしたんです。」

「或はそんなこともあるかも知れない。それは其の人の邪推だから、介意はないぢやないか。言ふものには、何とでも言はしておけば可い。」

「でも他のことと違ふぢやありませんか。傍でそんな評判がたつて、それが森本の耳へ入つたら、如何するんです。その場合に貴方は從姉さんを立派に引受けられますか。」黑川はくすくす笑出した。

「餘りお前がさう言ふなら、おしのさん夫婦の前で、それを言つても可いか。」

「え、可ござんすとも。貴方が言へたら言つて御覧なさい。」けい子は口元に冷笑を浮べて、「從姉さんだつて、決して堅い方ぢやないんですわ。私あの人の品行をよく知つてゐるんですもの。名古屋時代からのことを言へば、それあ隨分義兄さんの顏にかゝるやうなこともあつたんですわ。」

そして黑川は、おしのゝ過去について、今迄知らなかつた事實を、けい子の口から聞かされた。その中にはおしのゝ乳房の腫物に手術を施した京都産の若い醫學士との戀物語などもあつた。そして其の話は、學士がメスを持つて、彼女の目の前に立つたとき、おしのが白い肌に加へられやうとする鋭利な刀物の光に脅かされて、「××さん、痛いつ」と叫んで、彼の腕に噛ついた刹那から端緒を開いてゐた。

「そしてその醫者は、その後如何なつたの。」黒川は意味ありげに訊いた。

「大變好いところから奧さんをもらつて、今ぢや多勢子供があると云ふ話ですわ。」

「なぜ其の男と一緒にならなかつたんだ。」

「其のために、その人は評判が悪くなりましたもの。」

「森本君は知らないのか。」

「知つてゐるでせう。だから籍を入れなかつたんぢやありませんか。あの人は貴方などと違つて、締るところは締つてゐますわ。」

そんな話がしばらく續いた。けい子の疲れた顔にも、時々晴々した微笑が浮んだ。そこへ隣の患者が、特徴のある黒川の聲を聞きつけて遣つて來た。

「どうも聞いたことのあるお聲だと思ひました」などと、痩せ細つたその患者はさう言つて傍へ寄つて來た。

それが黒川の行きつけであつた、山の手の或待合の亭主であることを、けい子は様子で直ぐ感づいた。

「私あ長うごあす。醫者も方々歩いてみましたが、どうも可けあせん。」彼はさう言つて、そこへ坐りこんで自分の病氣の經過などを話しだした。

けい子の顔が、また曇つて來た。そんな男と面白さうに話してゐる黒川の様子が、手を延して打たゝきたいほど憎らしかつた。

八

夏になると、黒川の足もそり〳〵かの海岸の病院の方へ動いて行つたが、その頃にはけい子の體もいくらか快い方へ向つてゐた。そして若し彼女の體から、痔疾を取除くことさへ出來たら、呼吸器の方は、さまで憂ふるに足らないほどに疾患の進行を妨ぐことができた。

基督の肖像の、壁に貼附けられてあるのを、その頃黒川は驚きと悦びの目を以つて眺めてゐた。病院の食堂へ人を集めて、信仰を説いてゐる救世軍の士官たちは、時々彼女の病室へも入つて來て、病床の傍で彼女のために熱心な祈を献げたり、暗鬱な彼女の心も、信仰に導いたりした。何物にか取縋らないではゐられないやうな、寂しいけい子の頭腦に、一條の明るみが、仄かに差しかけて來た。今まで想像しやうともしなかつた、不思議な喜悦が長い苦しみに苛まれて來た彼女の心に泌出して來た。

黒川が、外國にゐる時分から持つてゐた聖書が、送られて不斷彼女の枕頭にあつた。讃美歌が絶えず彼女の唇に口吟まれた。それが何れだけ重苦しいけい子の心を慰め輕くしたか知れなかつた。灰色の世界が、遽かに光りに蘇へりはじめて來た。無心に見馴れた庭の松の木一つにも、思ひかけない神の恵みが感ぜられた。

黒川が、一月苦しい思ひをして贏得た收入をもつて、入院料を拂ひに行くと、けい子は心からの感謝をさゝげた。

「私がかうして、安心して病院にゐられるのも、皆な貴方のお蔭ですわ。その貴方が、弱い體で無事に勤めてゐられるのは、神さまの御恵みなのです。私の病氣が快くなるか、惡くなるかは、お醫者さまに

も私にも判りませんけれど、獨り神さまは御存じなのです。私の體は、神さまの思召のまゝです。私は安心して出來るだけの養生をしてゐれば、それで可いのです。」けい子はさう言つて、黑川にも何うぞ祈るやうにと願つた。

黑川が受取るけい子の手紙ごとに、彼は到るところそんな意味の文句を發見した。

七月の末に、黑川は仕立卸しの夏羽織などを着て、一度彼女を訪問した。けい子はその時海邊へ出て、ぶら〳〵歩いてゐたが、歸つてくると、直にその羽織に疑惧の目を瞻つた。そして其の刹那に彼女の顏色がさつと變つた。

「好い羽織ですこと。」けい子は黑川が脫いで釘にかけたその羽織に手を觸れながら言つた。

「これ買つたんですか」

そして黑川が默つて見てゐると、けい子は、ベットの上に疲れた體をおろして、「從姉さんのお見立だけあつてよく似合つてよ。」

それは黑川が、おしのゝ母の片身配に貰つた品であつたが、それを說明するのが、黑川には煩さかつた。

おしのたちは、その頃森本の借り別莊の方へ盆過ぎから來てゐたが、おしの自身は、けい子の態度に氣を惡くして、餘り見舞つてもくれなかつた。そして其がまたけい子の心を寂しくした。

おしのは黑川の口から洩れる、此頃のけい子の、自分と黑川に對する暗い心持を腹立しく思つた。

「貴方がおけいさんに信用がないから、そんなことを言はれるんですよ。」

最初その話を、笑談まじりに黒川から聞かされたとき、おしのは然う言つて笑つてゐた。

「貴様が信用がないからだ。」

森本も傍で黒川の話を聞いて、笑つてゐたが、おしのは母の骨を納めて、田舎から歸つて來たときも、病院を訪ねることを不快に思つた。それに鎌倉へ來てから、それでも一度一人で見舞ひに行つたときも、彼女はけい子のいら〳〵した態度に反感を抱かせられて歸つて來た。

「私は介意はないやうなものですけれど、姉さんがお世話になる義兄さんに濟まないだらうと思ふから、言ふんです。」けい子は然う言つて、おしのゝ氣を一層惡くさせた。

「黒川がお世話をして頂くのは、それあ有難いんですけれど、義兄さんの顔にかゝるやうなことをして下すつては、私までが困るぢやありませんか。」けい子は眞面目になつて、おしのに突かゝつた。

そして其れきりおしのの足が、ふつり止まつてしまつた。

黒川はその時、少し遲れてゐた入院料を調へて、それを屆けに行つたのであつたが、そんな事がきち〳〵行かないと、けい子はじつと寢てもゐられないほど、氣が揉めた。そして千葉の病院の方へ手紙を出したり、東京の病院へ電話をかけたりした。彼はこれまで、ちよい〳〵おしのの手許から不足分を出してもらつたりしてゐた、そんな時の金の融通が、おしのゝ氣を惡くしてから利かなくなつてゐた。そして彼は漸とそれが調つたところで、けい子が其時の手紙の端に賴んでよこした鰻の折などを提げて夏場の汗くさい停車場へ降りたのであつた。

その日は朝から、けい子は黒川の來やうの遲いのにじれ〳〵して居た。そして時々門の外まで出て見て

ゐた。そして海岸へ出る砂丘の松原で、待合の亭主だといふ隣室の例の患者に出逢つたが、彼女の頭腦は、別に看護婦と看護婦取締の老婦人とのあひだに其頃醸されてゐた紛擾の煽りなどで、苛立たせられてゐた。閑があると、彼女の病室へ二人來、三人集まりして、病院の待遇に不滿を抱いてゐる看護婦たちが、取締の非を鳴らしたり、ストライキの下相談をしたりしてゐたなどの事實のために、けい子自身までが、意地の惡い取締から、疑惑の目を以つて注視されてゐた。けい子には、それが不愉快であつた。待合の亭主が、少し快くなると、同勢を集めて花を引いたりなどして、隣で騷いでゐるのも、熱などの出たときの彼女には、堪らないほど不快であつた。そんな騷ぎの後には、彼はきつと熱を出して、醫者や看護婦の氣を腐らせた。

そこへ黒川が、おしのでも好きさうなにやけた柄合の羽織を着て、やつて來たのであつた。二人は暫の折を其處へおいたまゝ、暗鬱な沈默に陷ちてゐた。

看護婦が、彼女の腋から體溫器を取出した。

「少し昇つてゐますね。」看護婦はさう言つて、體溫表を取りあげて、鉛筆で引張つてゐた。

「今日は少し御運動が過ぎたんでございませう。」看護婦はさう言つて、室を出て行つた。

「あなた今、おしのさんとこへ寄つて來たでせう。」

けい子は、ベットのうへに座つてゐながら、言つた。おしのゝ別莊は雪ノ下の方にあつた。

「いや寄らない。何故？」

「入院料が、きちんと期日に拂へないやうだと、私全く困つてしまひますわ。」けい子は泣出しさうな聲

を出した。「あれほど手紙を差上げたり、電話をかけたりしてゐるのに、貴方は今まで何處にいらしたんですか。」

「だから、今日持つて來たから可いぢやないか。長い間のことだもの、偶に一度や二度遲れたつて、何でもありやしない。」

「でも此の病院は、それが至つて嚴ましい方なんですから。」けい子はぶつくさ言ひながら、「昨夜あなたは何處にゐました。」

「昨夜家にゐた。今日は病院を出ると、その足で鰻を註文して、それがなか〳〵手間が取れるので、厭になつちまつた。」

　少時すると、けい子は枕に突伏して、口のうちで熱心に祈禱を獻げはじめた。黑川が眞に自分の罪を悔悛めて自分の妻のために眞の愛情をもつ良人となり得るやうに……そしておしのとの關係を絕つて、森本の恩に酬ふるやうな……。歔泣くやうな、彼女の聲がいつまでも續いた。

　黑川の歸つたのは、波の凪いた海の彼方に、夕燒雲が美しく空を彩る頃であつた。泊れといつて引止めても肯かないで歸つて行く黑川を、けい子は廊下の外まで送出すと、海の見えるその窓際に佇んで、刻々に色を變へて行く夕空を眺めてゐた。濃い五彩の雲が、次第に色を失つて、白い波の戯れ合つてゐるやうな海が、見る間に夜の色に封されて行つた。孤獨の哀しみがまた彼女の胸を一杯にしてゐた。

九

けい子が、如何しても泊つて行くやうにと執念く引止めたとき、黒川が帶を締直すために、ベッドの枕頭にちよつと置いたまゝ、彼女のために蒲團の下へ隱されてしまつた時計や蟇口を、彼は十日ほど經つてから取りに行つた。それが八月の七八日頃であつた。

「ぢや歸つても可うござんす。早く歸つておしまひなさい。おしのさんのところへ寄らないやうに、私が神さんにお祈をしてあげますから。」

けい子はさう言つて、半分は口惜しまぎれに、半分は揶揄ひ氣味で、時計や蟇口を取りあげておいて黒川を解放したのであつたが、黒川がその足で、おしのゝ別莊へ寄つたか寄らなかつたかと、その翌日、その頃別莊へ二三日遊びに來ていた黒川の甥の訪問によつて、直に確められた。

黒川の甥は、夏の初めに受けに出た高商の試驗を失敗つてからも、ずつと叔父のところに留まつてゐた。そして其時、鎌倉から江の島見物のために、おしのゝ別莊に泊つてゐた序でに、叔母をその病室に見舞つたのであつた。そして彼女に掴まつて、黒川があの晩ちよいと別莊へ寄つて、それから九時の汽車で立つたことや、森本がこの頃暫らく旅へ出てゐることなどを、彼女に告げた。

「御病氣は如何でござんすね」などゝ、のそりとした其の青年は、けい子からいきなり色々の質問を受けて、返事にまごついた果に漸と見舞の辭を言ふべき機會を見出すことができた。

彼はその時江の島からの歸途であつた。そして病院へ寄つたときには、荒い波の水沫が、痛いやうな強い風と共に、電車の窓硝子にまでかゝつて、遠い島山の影が暮色に裹まれてゐた。

けい子は薄暗い病室のなかに、うと／＼と眠りかけてゐたが、「え、有難う」と言つたきりで、黒川と

ゐしのの此頃の生活について、何かを探出さうとするやうに、低聲で色々のことを訊ねたのであつた。
「叔父さんは、きつと別荘に泊つたでせう。」けい子は二三度繰返したが、臆病らしい青年の返辭はやはり前と同じであつた。
「叔父さんから口止をされたでせうね。」けい子はさうも言つて問窮めたが、青年は不思議さうに彼女の顔を凝視めたきりであつた。
　けい子は物足りなさうに口を噤んだ。
　黒川が行つた時も、けい子は同じやうな質問を繰返した。そして彼の目色から、彼の態度から秘密を探出さうとするやうな、熱心な注視を怠らなかつた。二人の關係は、けい子に取つてはもはや冷淡な疑惑ではなくて、確かな事實として彼女の頭腦に興味の根を蔓らせてゐた。暗紫色に濁つた黒川の唇、始終何かを憧憬してゐるやうな暗鬱な大きい彼の目、倦怠と疲勞とに頽廢した彼の肉體、不斷に何かの刺戟を要求してゐるやうな懈さうな筋肉、それ等が却て彼女に不思議な壓迫を悩ましげな空想を感ぜしめた。けい子はそれを空想することによつてのみ、奇異な甘い憂欝に浸ることが出來た。
「貴方はほんとうに嘘を吐くのが巧いのね。」
　けい子は肉皮な微笑を口元に浮べた。
「どうして。」
「あなた方の遣口は實に巧い。私の見舞ひだ／＼と言つちや、義兄さんの留守に、別荘でふざけた眞似をしてゐるんですもの。」

「まだお前はそんな事を言つてゐる。己はもう呆れもしない」

「御覧なさい、段々おほびらになるから。」けい子は脾弛さうな聲を出してはゝはとヒステレックな笑方をした。

「それに從姉さんは、私に極が悪いものだから、目と鼻の間にゐて、ちつとも顏出しをしないぢやありませんか。」

「それも、お前が來ないやうにしたんだ。お前は自分と自分の世界を窄めてゐるやうなものだ。」

時計を帶に絡ませて、黒川が歸りかけたのは、それから大分たつて、彼女の祈禱が初まつてからであつた。

「私貴方に見えたら、御相談しやうと思つてゐたんですけれど、今日にも一度東京へ歸りたいと思つてゐますの、そして何時か兩國の病院へ來て頂いた築地の病院の副院長に診察していたゞいて、思斷つて手術して頂かうと思ひますわ。」

けい子は、更まつた調子で言出した。そして黒川と一緒に此處を立つことを主張した。

「いづれ手術をする時機は來るだらうけれど、もつと胸が固つてからで可いぢやないか。夏一杯あこゝに居て、これなら差閊ないといふ、此處の院長の許しを得たうへにした方がいゝ。」黒川はさう言つてけい子を宥めた。

けい子自身の靜養のためにも、長いあひだの負擔に苦しんでゐる黒川のためにも、この際彼女を田舍へ還すことが、最善の方法であらうと云ふ話が、盆前後から人々のあひだに略熟しかけてゐた。そして

血痰や發熱の憂ひの大方解かれた今が、丁度その時期であるらしく思はれたところで、けい子の弟を呼寄せるために、森本から手紙が田舍へ送られた。そして田舍からもそれに同意の旨の回答が來て、一切を森本に一任すると同時に、近いうち弟が姉を引取りに上京することになつて居た。初め其の問題の出たとき、黒川は單だ何ともつかずに、けい子を田舍へ送還すつもりで話を進めたのであつたが、双方から一切を打任かせられた森本の手を經て來た問題の形は、離婚といふことになつてゐた。其には引續き田舍でけい子が安心して靜養し得るだけの資給を、黒川から月々送るといふ條件や、黒川がその時々の融通のために持つて行つたけい子の衣類を全部返すと云ふやうな附加へもあつた。

八月に入つてから、黒川はけい子の弟の來るのを、心窃かに待つてゐたが、でも出來ることなら少しでも長く彼女を海岸の病院に止めておいてやりたかつた。そして若し彼女が素直に切望するなら、最後までも見屆けてやりたいやうな氣がしてゐた。

その日はけい子を宥めて、黒川は三時間ほど話して夕方に病院を出た。

翌日になると、思ひがけなくけい子が一人で鎌倉からやつて來てゐた。夕方に外から歸つて來た黒川は、家の前で、それをおしのゝ女中から聞いた。

「ほう、何時？。」黒川は訊ねた。

「何時ですか。今洗濯物を貴方のところへお屆けしやうと思つて、お二階へ上ると、奥さんが來ていらつしやるんでございませう。私吃驚致しました。」

黒川は急いで、二階へ上つて行つた。雨が落ちて來さうな、空氣の重苦しく澇んだ夕で、二階も下も

何處をあけても、一滴の風も戰がなかつた。けい子は久振りで歸つて來た部屋に昵みかねたやうに、手紙などの散らかつた黒川の机の前に佗しげに座つてゐた。そして彼の上つて來たのに氣がつくと、ちよつと身構へるやうな風に、用心深い目をして迎へた。

「私歸つて來ました。」けい子は言出した。

「それあ可かつた。何時。」

「一時間ばかり前に着いて、まだ從姉さんとこへも顔出しませんの。」

「病院の方は……。」

「ちよつと近くの親類を尋ねて來ると言つて、出て來ましたけれど、色々話もあるし、事によつたら痔の手術もしたいと思つて……今のところ、痔を癒しさへすれば、呼吸器の方は段々快くなるばかりですもの。」

「それぢや、折角來たものだから、築地の病院へ行つてみるとしやう。」黒川はさう言つて、ワイシャツ一枚になつて、窓ぎわへ來て座つた。おしの丶家の屋根の物干が、直ぐ目の前にあつた。庭木の梢や、座敷の縁の廂なども見透かされた。

「そこへ森本も聞きつけて、裏から見舞ひにやつて來た。後から火種や、茶道具などをもつて女中もついて來た。けい子は更まつて、森本にお辭儀をした。そして途中で伸の上へから買つた水蜜桃を、その女中に洗はせたりした。

「私今度は貴方に、色々お聽きして戴きたいとがございまして……。」けい子は、黒川を憚るやうな風

で、含涙しいやうな目を伏せて、森本に言ひかけた。

「まあ可いさ。餘りくよ〳〵すると、病氣に障るから、出來るだけ暢氣にしてゐなくちや可けない。」森本は壁際に頭を押しつけながら言つた。そして女中に食事の支度などを吩咐けた。

「疲れが癒つたら、彼方へ來て黒川君と一緒に御飯でも食べたら可いでせう。」森本はさう言つて直に二階を降りて行つた。

「いづれ後ほど」と、けい子も降口まで見送つた。

その晩手術の相談が決まつて、けい子は幾月ぶりかで自分の家に寢たが、野廣い海ばたの病院にゐつけた目から見ると、こゝは穴のやうに窮窟であつた。埃ぶかい屋根だらけの眺望も、息が塞るやうで苦しかつた。が、夏の夕の都會生活のせゝつこましさが、纖弱い彼女の神經を強く脅かした。

翌朝は俥で、築地の病院へ行つた。そして顔覺えのある副院長の診察を受けたが、結果は春頃大學で診てもらつた時と、大差はなかつた。

「大分好い方に向いたやうだが、もう少し辛抱してゐなすつたら如何ですかね。」副院長はさう言つて鎌倉へ還ることを勸めた。

病院を出ると、二人はぶら〳〵銀座邊まで歩くことにした。けい子はおしのゝ家が、本願寺の近所にあつた時分に、こゝらを能く歩いたので、何處を見ても懷しい哀しみを唆られたが、どこに病氣があるか、いつ仆れるか知れないやうな途上の人か、さも無病健全のやうな顔をして歩いてゐるのが可笑しかつた。

尾張町まで來たところで、黒川はけい子を休ませて、食事をさせるために、角のレストオランへ入つた。そして風通しのいゝ二階の窓際で、けい子の好きさうな物を二三品づゝ註文した。

「久しぶりでお美いしい西洋料理を食べた。」けい子は心から嬉しさうに言つて、痩せた手にフォークを動かしてゐたが、思つたほどには食慾がなかつた。そしてお食べ〳〵と言つて、送別の意で黒川の勸める料理を、半分も殘して其處を出た。

歸つて熱を量ると、一度四五分しか出てゐなかつた。

その晩、けい子は獨で裏から森本の家へ行つて見た。すると其處に思ひがけなく弟が來てゐるのに出逢つた。肋膜が癒つてからも、彼は病後の保養に歸つて行つた田舍の方に、取ついた商賣の方をぽつぽゝ遣つてゐた。

けい子の顏色が、さつと變つた。何等の前觸れもなしに、突如に出て來て、まだ自分の方へ遣つても來ない弟の素振に、淡い不安を感じたと同時に、今まで氣づかつた低氣壓が、身のまはりを取りまいてゐるのを、氣まづく思つた。

「いつ來ました。」けい子は訊いた。

「もう些と前に來ました」

「何か用ができて。」

「えゝ、ちよつと。」弟はおづ〳〵應へた。

「私の方で、少し弟さんに相談したいことがあつて、わざ〳〵出て貰つただがね。それで今日の診斷は

如何でしたね。」と、森本が優しく訊ねた。

　そして其の話が少時續いた。

「ちようど好いから、今夜は一つ皆なで能く相談しませう。黒川君も大分手づまつて來てゐることだし、おけいさんも現在の狀態では、何かにつけて不滿も多いだらうから、この際何とか一つ相談しませう。」

けい子には其が寢耳に水であつたが、總ての氣分が直ぐに感づけた。

「私も貴兄さんに、是非聽いていたゞかなければならないことが、澤山ございますんです。」けい子は、深い決心の色を以つて言出した。

「私が黒川の家へ歸きましてから、現在までの身のうへには、それは隨分色々のことがございましたの。私がかう云ふ病氣になつたのも、一つは黒川が爲たやうなものなんですの。」

　そしてけい子は、膝も崩さずに、時々咽喉をこそげて込上げて來る輕い咳嗽を壓へながら、吻とするやうな日の一日もなかつた、暗い不安定な家庭の生活狀態について、落着のある調子で語つた。結婚當時にもつてゐた數百圓の貯金を、生活費に使はれたことや、箪笥が、少しつゝ空になつて行つたことなどが、其場合〳〵の記憶を辿つて、詳しく話された。興奮の色が、時々痩せた透徹るやうな、彼女の頬に上つた。

「それにあの人の體に、惡い病氣がございまして、私もつい感染してしまひましたのです。それを癒すために、あの人が自分で私の體に注射を致しました。幾度も致しました。そのために四十度からの熱が出ますものですから、私が厭だといつて拒みますと、剛情だと言つて、打ちますんでございます。」けい

子はさう言つて、健康を害はれたことを、口惜しがつた。涙が外眦の細い目の睫毛を濡らした。

森本は言ふだけ言はせて、默つて熱心に聽いてゐた。

「そんな風ぢや、おけいさんも此の先き安心して養生もできまいと思ふから、如何だね、思ひ切つて田舍へ歸ることにしては。」森本は少時してから言出した。

「その病氣には情慾が一番惡い。夫婦生活が何より可けない。眞實に病氣を癒さうと思ふなら、獨身になるのが一番好いんだ。それにはちようど好い、信仰がおけいさんにあるんだから、今後は一層その方の修養を積んで、肉に打克たなけあ可けない。現在のやうに、おけいさんが病的に、あの男に執著してゐると、その苦しい思ひだけでも、折角快くなりかけた體を、後から〳〵壞して行くばかりで、何時迄たつても同じことを繰返さなけあならない。」彼はさう言つて、熱心に說き諭した。

よく考へさしてもらつたうへ、翌日返辭をすると云ふことにして、けい子がそこを立つたのは、大分經つてからであつた。

三晩ばかり泊つて、けい子は黑川と一緒に、又鎌倉へ歸つて行つた。そして其日のうちに、荷物を纏めて、永久にその病院に別を告げた。

けい子がすつかり黑川と手を切つて、しかし一軒世帶をもつて、心易く靜養し得るだけの仕送りを彼から爲てもらふ約束で、弟と一緒に田舍へ立つて行つたのは、それから間もなくであつた。

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區裏神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　京橋區西紺屋町　良明堂
同　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　宮內立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	國外
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

◎本號に限り特價金七十五錢　郵稅金五錢

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本鄉區西片町十番地**中央公論社**とし、拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるる虞なし
一振替貯金口座は**東京三十四番**なり
一郵劵代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢（及送料共）
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正六年十二月廿五日印刷納本
大正七年一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　曹谷憲治
印刷人　高木西三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話小石川一四四
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

